京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇一八－一〇

平安京左京六条二坊九町跡・烏丸綾小路遺跡

平安京左京六条二坊九町跡・烏丸綾小路遺跡

2019年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京六条二坊九町跡・
烏丸綾小路遺跡

2019年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

1区第４－２面（弥生時代）全景（東から）

１　２区弥生時代の足跡群（北から）

２　搬入弥生土器（東海地方）

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう務めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、小学校施設整備工事に伴う平安京跡・烏丸綾小路遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

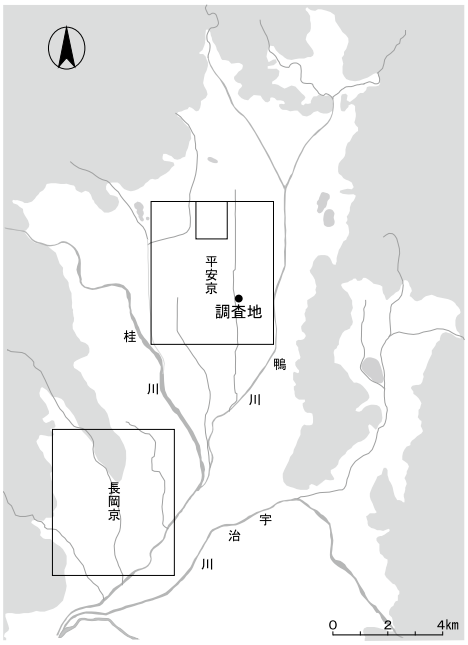
平成 31 年３月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	平安京跡・烏丸綾小路遺跡　（京都市番号　17Ｈ084）
2	調査所在地	京都市下京区醒ヶ井通松原下る篠屋町59　元京都市立醒泉小学校
3	委　託　者	京都市　代表者　京都市長　門川大作
4	調 査 期 間	2017年10月10日～2018年９月20日
5	調 査 面 積	2,970㎡
6	調査担当者	中谷正和・近藤章子・伊藤　潔・三宮昌弘・合田幸美・南　孝雄
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「壬生」・「島原」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	通し番号を付し、写真の番号も同一とした。
13	本 書 作 成	中谷正和・近藤章子・伊藤　潔・上村和直・南　孝雄
14	執 筆 分 担	中谷正和：１、２、３－（１）・（２）・（４）、４－（１）・（２）・（４）～（６）、５、付章７ 近藤章子：３－（３） 伊藤　潔：４－（２） 上村和直：４－（３）、５－（２）



（調査地点図）

付章１：パリノ・サーヴェイ株式会社

付章２：辻本裕也（株式会社古生態研究所）

付章３：小野映介（駒沢大学）

付章４・５：北野信彦（龍谷大学）

付章６：丸山真史（東海大学）

15　備　　考　　上記以外の調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

16　協　力　者　　調査及び報告書作成にあたり、下記の方々のご協力を得た。

朝井琢也、芦塚晶太、荒田敬介、伊藤淳史、井村舜也、大月 均、大西早織、小野映介、川上洋一、川部浩司、木立雅朗、北野信彦、國下多美樹、黒須亜希子、佐々木仁志、柴田将幹、菅 榮太郎、鋤柄俊夫、相馬勇介、園原悠斗、辻本裕也、土屋みづほ、寺前直人、永井宏幸、西浦 熙、濱田延充、肥後弘幸、古川 匠、丸山真史、森岡秀人、吉村慎太郎、若林邦彦

（五十音順／敬称略）

目　　次

１．調査経過 …… 1
（１）調査に至る経緯 …… 1
（２）調査の経過 …… 1
２．位置と環境 …… 4
（１）歴史的環境と立地 …… 4
（２）既往の調査 …… 4
３．遺　　構 …… 8
（１）層序 …… 8
（２）遺構の概要 …… 8
（３）１・２区の遺構 …… 10
（４）３区の遺構 …… 30
（５）４区の遺構 …… 31
４．遺　　物 …… 35
（１）遺物の概要 …… 35
（２）土器・土製品 …… 36
（３）瓦類 …… 55
（４）石器・石製品 …… 60
（５）木製品 …… 70
（６）金属製品 …… 70
５．ま と め …… 72
（１）烏丸綾小路遺跡 …… 72
（２）平安京左京六条二坊九町跡 …… 88

付章１　弥生時代流路1132堆積物の自然科学分析 …… 110
付章２　弥生時代流路1132充填堆積で確認された変形構造 …… 149
付章３　流路1132から得られた炭素14年代値とその意義 …… 153
付章４　井戸3191出土漆器の材質・技法の分析調査 …… 155
付章５　土坑2811出土赤色粘土塊の分析調査 …… 158
付章６　出土した動物遺存体 …… 163
付章７　元醒泉小学校１次調査（昭和59年度）の成果 …… 170

図　版　目　次

巻頭図版１　遺構　　１区第４－２面（弥生時代）全景（東から）

巻頭図版２　遺構・遺物　１　２区弥生時代の足跡群（北から）

２　搬入弥生土器（東海地方）

図版１　遺構　調査区配置図（１：600）

図版２　遺構　１・２区第４－２面遺構平面図（弥生時代）（１：250）

図版３　遺構　１・２区第４－２面遺構平面図（弥生時代）（１：250）

図版４　遺構　１・２区第４－１面遺構平面図（平安時代前期から中期）（１：250）

図版５　遺構　１・２区第４－１面遺構平面図（平安時代前期から中期）（１：250）

図版６　遺構　１・２区第３面遺構平面図（平安時代後期から鎌倉時代前半）（１：250）

図版７　遺構　１・２区第３面遺構平面図（平安時代後期から鎌倉時代前半）（１：250）

図版８　遺構　１・２区第２－２面遺構平面図（鎌倉時代後半から室町時代）（１：250）

図版９　遺構　１・２区第２－２面遺構平面図（鎌倉時代後半から室町時代）（１：250）

図版10　遺構　１・２区第２－１面遺構平面図（安土桃山時代）（１：250）

図版11　遺構　１・２区第２－１面遺構平面図（安土桃山時代）（１：250）

図版12　遺構　１・２区第１面遺構平面図（江戸時代）（１：250）

図版13　遺構　１・２区第１面遺構平面図（江戸時代）（１：250）

図版14　遺構　１・２区南壁断面図１（１：100）

図版15　遺構　１・２区南壁断面図２（１：100）

図版16　遺構　２区流路1132断面図１（１：50）

図版17　遺構　２区流路1132断面図２（１：50）

図版18　遺構　２区流路1132北壁断面図（１：50）

図版19　遺構　竪穴建物1055・1206・2222実測図（１：80）

図版20　遺構　竪穴建物3576・3579・3581実測図（１：80）

図版21　遺構　竪穴建物3544・3631実測図（１：80）

図版22　遺構　土坑1078・1207・3549・3586・3588実測図（１：40）

図版23　遺構　方形周溝墓3543実測図・遺物出土状況図（平面図１：100、断面図１：40、遺物１：16）

図版24　遺構　井戸820・3191実測図（１：50）

図版25　遺構　井戸3440、柱列3487実測図（１：50）

図版26　遺構　建物851実測図（１：50）

図版27　遺構　土器溜2257実測図（１：30）、溝625・3036・3061・3091・3403・3441断面図（１：40）

図版28　遺構　井戸2022・3190実測図（1 ：50）
図版29　遺構　井戸2026・2961実測図（1 ：60）
図版30　遺構　土坑514・2811実測図（1 ：50）
図版31　遺構　建物3175、石室214・2720実測図（1 ：50）
図版32　遺構　塀2206実測図（1 ：50）
図版33　遺構　柵847・3444実測図（1 ：80）
図版34　遺構　柵2929・2941実測図（1 ：80）
図版35　遺構　柵730・753実測図（1 ：80）
図版36　遺構　土坑591・638実測図（1 ：30）
図版37　遺構　土坑群Ｂ（2506・2838）、土坑群Ｃ（2567・2730・2731）断面図（1 ：60）
図版38　遺構　建物2284実測図（1 ：100）
図版39　遺構　井戸2027・2034・2035実測図（1 ：40）
図版40　遺構　石室2409、埋甕137・2171・2232実測図（1 ：40）
図版41　遺構　柵2283実測図（1 ：80）、溝2572・2858断面図（1 ：40）
図版42　遺構　３区第４・３面遺構平面図（弥生時代、鎌倉時代）（1 ：100）
図版43　遺構　３区第２・１面遺構平面図（室町時代から江戸時代前半、江戸時代後半）（1 ：100）
図版44　遺構　３区北壁断面図（1 ：50）
図版45　遺構　３区東壁断面図（1 ：50）
図版46　遺構　３区地下室1591、礎石列1650実測図（1 ：40）
図版47　遺構　３区埋甕1531、井戸1595（1 ：30）、４区実測図（江戸時代）（1 ：100）
図版48　遺物　竪穴建物1055・1206・2222・3544・3576・3579・3581・3631出土土器実測図（1 ： 4）
図版49　遺物　土坑3549、溝1245下層出土土器実測図（1 ： 4）
図版50　遺物　溝1245上層、溝1245・流路1132（新）合流地点出土土器実測図（1 ： 4）
図版51　遺物　流路1132（古）下層・湿地下層出土土器実測図（1 ： 4）
図版52　遺物　流路1132（古）上層・湿地上層、流路1132（新）Ⅳ層出土土器実測図（1 ： 4）
図版53　遺物　流路1132（新）Ⅳ層・Ⅲ層出土土器実測図（1 ： 4）
図版54　遺物　流路1132（新）Ⅱ層出土土器実測図（1 ： 4）
図版55　遺物　流路1132（新）Ⅱ層出土土器実測図（1 ： 4）
図版56　遺物　流路1132（新）Ⅱ層出土土器実測図（1 ： 4）
図版57　遺物　流路1132（新）Ⅱ層・Ⅱ層上層出土土器実測図（1 ： 4）
図版58　遺物　流路1132（新）Ⅱ層上層出土土器実測図（1 ： 4）
図版59　遺物　流路1132（新）Ⅱ層上層出土土器実測図（1 ： 4）
図版60　遺物　流路1132（新）Ⅱ層上層出土土器実測図（1 ： 4）

図版61　遺物　流路1132（新）Ⅱ層上層出土土器実測図（１：４）
図版62　遺物　流路1132（新）Ⅱ層上層・Ⅰ層出土土器実測図（１：４）
図版63　遺物　流路1132（新）Ⅰ層出土土器実測図（１：４）
図版64　遺物　流路1132（新）Ⅰ層出土土器実測図（１：４）
図版65　遺物　流路1132（新）Ⅰ層出土土器実測図（１：４）
図版66　遺物　流路1132（新）Ⅰ層、土坑1512出土土器実測図（１：４）
図版67　遺物　方形周溝墓3543出土土器実測図（１：４）
図版68　遺物　井戸3440・3191、平安時代整地層出土土器実測図（１：４）
図版69　遺物　井戸3191出土土器実測図（１：４）
図版70　遺物　井戸820・3190・2022・2961、土器溜2257出土土器実測図（１：４）
図版71　遺物　地下室1591、土坑1593・2892出土土器実測図（１：４）
図版72　遺物　土坑2892・1594・514出土土器実測図（１：４）
図版73　遺物　土坑514・2811出土土器実測図（１：４）
図版74　遺物　土坑2811・1572・1552・1539出土土器実測図（１：４）
図版75　遺物　土坑638・2506、埋甕1531、井戸1595出土土器実測図（１：４）
図版76　遺物　江戸時代前半整地層、土坑179出土土器実測図（１：４）
図版77　遺物　土坑144出土土器実測図（１：４）
図版78　遺物　瓦拓影及び実測図１（１：４）
図版79　遺物　瓦拓影及び実測図２（１：４）
図版80　遺物　瓦拓影及び実測図３（１：４）
図版81　遺物　瓦拓影及び実測図４（１：４）
図版82　遺物　瓦拓影及び実測図５（１：４）
図版83　遺物　瓦・塼拓影及び実測図６（１：４）
図版84　遺物　石器実測図１（１：３、１：２）
図版85　遺物　石器実測図２（１：４）
図版86　遺物　石器実測図３（１：４）
図版87　遺物　石器実測図４（１：４）
図版88　遺物　石器実測図５（１：４）
図版89　遺物　石器実測図６（１：２）
図版90　遺物　石製品、木製品実測図（１：４）
図版91　遺構　１　１区第４－２面（弥生時代）全景（西から）
　　２　２区第４－２面（弥生時代）全景（南西から）
図版92　遺構　１　１区溝1245（東から）
　　２　１区流路1132（古）（北から）
　　３　１区流路1132（新）堆積状況（北から）

図版93　遺構　1　２区流路1132（南西から）
2　２区流路1132土器207出土状況（南西から）
3　２区足跡群（北から）
図版94　遺構　1　１区竪穴建物1055・1206（南から）
2　２区竪穴建物2222（東から）
図版95　遺構　1　２区竪穴建物3576（東から）
2　２区竪穴建物3581（南東から）
図版96　遺構　1　２区土坑3586（北から）
2　２区土坑3554（北東から）
3　２区土坑3549土器出土状況（西から）
図版97　遺構　1　２区方形周溝墓3543（北東から）
2　２区方形周溝墓3543土器出土状況１（東から）
3　２区方形周溝墓3543土器出土状況２（東から）
図版98　遺構　1　１区第４－１面（平安時代前期から中期）全景（北西から）
2　２区第４－１面（平安時代前期から中期）全景（東から）
図版99　遺構　1　２区井戸3440（南から）
2　２区井戸3440墨書土器368出土状況（南西から）
3　２区井戸3191（北から）
4　２区井戸3191半裁状況（北から）
図版100 遺構　1　１区建物851（北から）
2　１区建物851柱穴837半裁状況（東から）
3　１区建物851柱穴752半裁状況（南から）
4　２区柱穴列3487（西から）
5　２区柱穴列3487柱穴3492半裁状況（南から）
6　２区柱穴列3487柱穴3493半裁状況（南から）
図版101 遺構　1　１区第３面（平安時代後期から鎌倉時代前半）全景（西から）
2　２区第３面（平安時代後期から鎌倉時代前半）全景（南西から）
図版102 遺構　1　１区井戸1010（北から）
2　２区井戸3190（東から）
3　２区井戸2961（南から）
図版103 遺構　1　１区土坑381（北から）
2　２区土坑2892・2895（南西から）
図版104 遺構　1　２区溝3036・3061・3091・3131（西から）
2　２区溝3403（南から）
3　２区土器溜2257（北から）

図版105 遺構　1　1区第2面（鎌倉時代後半から室町時代）西側柱穴群（北から）
　　2　2区第2面（鎌倉時代後半から室町時代）全景（南西から）
図版106 遺構　1　2区溝2250（北から）
　　2　2区塀2206（北から）
　　3　1区柵847（北から）
　　4　2区柵2929・2941（西から）
図版107 遺構　1　1区土坑514灰検出状況（西から）
　　2　2区土坑2811（北から）
　　3　1区土坑591（南から）
　　4　1区土坑638（北から）
図版108 遺構　1　2区建物3175（東から）
　　2　1区石室214（東から）
　　3　2区石室2720（南東から）
図版109 遺構　1　1区第1面（江戸時代）全景（北西から）
　　2　2区第1面（江戸時代）全景（南西から）
図版110 遺構　1　2区建物2284（南東から）
　　2　2区建物2284柱穴2100半裁状況（北から）
　　3　2区建物2284柱穴2237半裁状況（北から）
　　4　2区建物2284柱穴2103柱当り検出（東から）
　　5　2区建物2284柱穴2116柱当り検出（西から）
図版111 遺構　1　1区井戸68（北西から）
　　2　1区井戸71（北から）
　　3　1区井戸343（北から）
　　4　2区井戸2017（東から）
　　5　2区井戸2035（西から）
　　6　2区井戸2073（北から）
　　7　2区井戸2027（東から）
　　8　2区井戸2027半裁（西から）
図版112 遺構　1　2区石室2409（北から）
　　2　2区埋甕2232（北から）
　　3　1区北壁断面（南東から）
図版113 遺構　1　3区第3・4面（弥生時代から鎌倉時代）全景（北から）
　　2　3区流路1132西肩（北から）
　　3　3区地下室1591（北西から）
図版114 遺構　1　3区第2面（室町時代から江戸時代前半）全景（北から）

２　３区礎石列1650（西から）
３　３区埋甕1531半裁状況（南から）
４　３区井戸1595半裁状況（東から）
図版115 遺構　１　３区第１面（江戸時代後半）全景（東から）
２　４区第１面（江戸時代後半）全景（南から）
図版116 遺物　１　竪穴建物1055・2222・3544・3579・3581・3631出土土器
２　土坑3549出土土器
図版117 遺物　溝1245、流路1132（古）出土土器
図版118 遺物　流路1132（新）Ⅲ・Ⅳ層出土土器
図版119 遺物　流路1132（新）Ⅱ層出土土器１
図版120 遺物　流路1132（新）Ⅱ層出土土器２
図版121 遺物　流路1132（新）Ⅱ層上層出土土器１
図版122 遺物　流路1132（新）Ⅱ層上層出土土器２
図版123 遺物　流路1132（新）Ⅰ層出土土器１
図版124 遺物　１　流路1132（新）Ⅰ層出土土器２
２　土製円盤、ミニチュア土器
図版125 遺物　方形周溝墓3543出土土器
図版126 遺物　井戸3440・3191出土土器
図版127 遺物　平安時代整地層、井戸820・3190・2022、土器溜2257出土土器
図版128 遺物　井戸2961、土坑2892出土土器
図版129 遺物　土坑514・2811出土土器
図版130 遺物　土坑638、埋甕1531、土坑群Ｂ（土坑2506）、江戸時代前半整地層出土土器
図版131 遺物　土坑179・144出土土器
図版132 遺物　瓦類１
図版133 遺物　瓦類２
図版134 遺物　１　石戈・石剣
２　石鏃
図版135 遺物　１　石包丁
２　柱状片刃石斧・扁平片刃石斧
図版136 遺物　１　磨製両刃石斧
２　磨製両刃石斧・敲石
図版137 遺物　１　砥石
２　石鋸・石錐・スクレイパー・楔型石器・玉類
図版138 遺物　１　石鍋・温石・砥石・硯・亀形石製品
２　木製農工具・容器・漆器皿、銭貨

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）…… 1
図２　１区調査前全景（南東から）…… 2
図３　２区調査前全景（北西から）…… 2
図４　３区調査前全景（北から）…… 2
図５　４区調査前全景（北から）…… 2
図６　１区調査状況（南東から）…… 2
図７　１区コンクリート撤去作業状況（南西から）…… 2
図８　弥生時代足跡型取り作業状況（北東から）…… 2
図９　現地説明会（南西から）…… 2
図10　既往の主要調査地点（１：5,000）…… 5
図11　溝1245実測図及び遺物出土状況図（１：40、遺物１：10）…… 10
図12　弥生時代河道復元図（１：500）…… 11
図13　１区流路1132（古・新）オルソ画像・断面図（１：50）…… 12
図14　溝960・982、柱穴3275断面図（１：40）…… 17
図15　溝2250・2560断面図（１：40）…… 22
図16　流路1132出土土製円盤実測図（１：３）…… 40
図17　墨書土器（368）底部赤外線写真…… 48
図18　石包丁の擦切施溝分割痕（石56）…… 62
図19　砥石（石94）実測図（１：６）…… 66
図20　土器焼成後穿孔中に破損した石錐（石116）…… 67
図21　竪穴建物1055出土サヌカイト微細剥片…… 67
図22　銭貨拓影（１：２）…… 70
図23　鉄釘実測図（１：２）…… 71
図24　弥生時代前期末から中期中葉初頭の土器（１：８）…… 73
図25　地域間交流を示す土器１（１：６）…… 75
図26　地域間交流を示す土器２（１：６）…… 76
図27　遺構概要図１　弥生時代前期末から中期初頭（１：600）…… 79
図28　遺構概要図２　弥生時代中期前葉から中葉初頭（１：600）…… 80
図29　遺構概要図３　弥生時代中期中葉（１：600）…… 81
図30　遺構概要図４　弥生時代中期後葉（１：600）…… 82
図31　遺構概要図５　弥生時代後期から古墳時代前期初頭（１：600）…… 83
図32　烏丸綾小路遺跡・烏丸御池遺跡 主要調査地点１（１：10,000）…… 85

図33　烏丸綾小路遺跡 主要調査地点２（１：10,000）…… 87
図34　遺構概要図６　平安時代前期（１：600）…… 89
図35　遺構概要図７　平安時代中期（１：600）…… 90
図36　遺構概要図８　平安時代後期（１：600）…… 91
図37　遺構概要図９　鎌倉時代前半（１：600）…… 93
図38　遺構概要図10　鎌倉時代後半（１：600）…… 94
図39　遺構概要図11　室町時代前半（１：600）…… 96
図40　遺構概要図12　室町時代後半（１：600）…… 97
図41　遺構概要図13　安土桃山時代（１：600）…… 98
図42　遺構概要図14　江戸時代前半（１：600）…… 99
図43　遺構概要図15　江戸時代後半（１：600）…… 100
図44　調査地点の層序および試料採取位置 …… 111
図45　２区北壁の層序およびテフラ様層とその砂粒の写真 …… 113
図46　テフラ様層の砂粒組成 …… 115
図47　火山ガラスの屈折率 …… 115
図48　暦年較正結果 …… 118
図49　２区流路1132secにおける主要珪酸化石群集の層位分布 …… 124
図50　珪藻化石 …… 125
図51　２区流路1132secにおける主要花粉化石群集の層位分布 …… 128
図52　花粉化石 …… 129
図53　２区流路1132secにおける植物珪酸体含量の層位分布 …… 131
図54　植物珪酸体 …… 132
図55　２区流路1132secにおける種実遺体群集の層位分布（１）…… 136
図56　２区流路1132secにおける種実遺体群集の層位分布（２）…… 137
図57　種実遺体（１）…… 138
図58　種実遺体（２）…… 139
図59　種実遺体（３）…… 140
図60　塊状炭化物 …… 142
図61　流路1132充填堆積物の写真および変形構造 …… 150
図62　２区流路1132セクション（東半部）…… 154
図63　年代測定試料の採取層序 …… 154
図64　試料№１内面漆塗膜の断面観察 …… 156
図65　試料№１外面漆塗膜の断面観察 …… 156
図66　試料№１内面朱漆拡大 …… 156
図67　試料№１の蛍光Ｘ線分析結果 …… 156

図68　試料№２内面漆塗膜の断面観察 …… 156
図69　試料№２外面漆塗膜の断面観察 …… 156
図70　本試料の検出状況① …… 160
図71　本試料の検出状況② …… 160
図72　本試料の拡大写真① …… 160
図73　本試料の拡大写真② …… 160
図74　本試料の電子顕微鏡写真① …… 160
図75　本試料の電子顕微鏡写真② …… 160
図76　本試料の蛍光Ｘ線分析結果 …… 161
図77　本試料のＸ線回析分析結果 …… 161
図78　出土動物遺存体 …… 166
図79　１次調査　調査区北壁・SD１断面図（１：80） …… 171
図80　１次調査　遺構平面図１（１：150） …… 172
図81　１次調査　遺構平面図２（１：150） …… 173
図82　１次調査　SD１出土土器実測図（１：４） …… 174

表　目　次

表１　遺構概要表 …… 9
表２　江戸時代の土坑・柱穴観察表 …… 32
表３　江戸時代の井戸観察表 …… 34
表４　遺物概要表 …… 35
表５　瓦類分類別出土数量表 …… 57
表６　瓦類遺構別出土数量表 …… 58
表７　打製石鏃分類別出土数量表 …… 61
表８　石包丁分類別出土数量表 …… 61
表９　石器遺構別出土数量・重量表 …… 64
表10　石器原石・石核・剥片類遺構別出土重量表 …… 68
表11　烏丸綾小路遺跡 主要調査地点一覧 …… 86
表12　テフラ様層の砂粒組成 …… 114
表13　２区北壁テフラ様層の火山ガラスの化学組成 …… 115
表14　放射性炭素年代測定結果 …… 118
表15　２区流路1132secの珪藻分析結果 …… 123

表16　２区流路1132secの花粉分析結果 …… 127
表17　２区流路1132secの植物珪酸体含量 …… 130
表18　２区流路1132secの種実分析結果 …… 134
表19　年代測定値 …… 154
表20　動物遺存体種名表 …… 163
表21　動物遺存体集計表 …… 164

付　表　目　次

付表１　弥生時代の土器・土製品観察表 …… 176
付表２　平安時代から江戸時代の土器・土製品観察表 …… 194
付表３　瓦類観察表 …… 212
付表４　石器観察表 …… 217
付表５　石製品観察表 …… 222
付表６　木製品観察表 …… 222
付表７　金属製品（銭貨）観察表 …… 223
付表８　金属製品（鉄釘）観察表 …… 223

平安京左京六条二坊九町跡・烏丸綾小路遺跡

１．調査経過

（１）調査に至る経緯

調査地は、京都市下京区醒ヶ井通松原下る篠屋町59の元醒泉小学校敷地内に位置する。『京都市遺跡地図』によると、平安京左京六条二坊九町と烏丸綾小路遺跡にあたる（図１）。平成24年度の京都市立醒泉小学校・淳風小学校統合にあたり、醒泉小学校敷地内に新たに京都市立下京雅小学校の校舎等諸施設の整備工事を実施することとなった。同整備工事に伴い、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）から発掘調査の指導が行われたため、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託をうけて調査を実施した。

（２）調査の経過

文化財保護課の指導により、調査地である元醒泉小学校敷地内に調査区を４箇所設定した（図版１、図２～５）。設定した調査区は、小学校グラウンド（１区）、旧校舎部分（２区）、醒ヶ井通側の調査地南西部（３区）、油小路通側の調査地南東部（４区）である。調査面積は総計2,970㎡であ

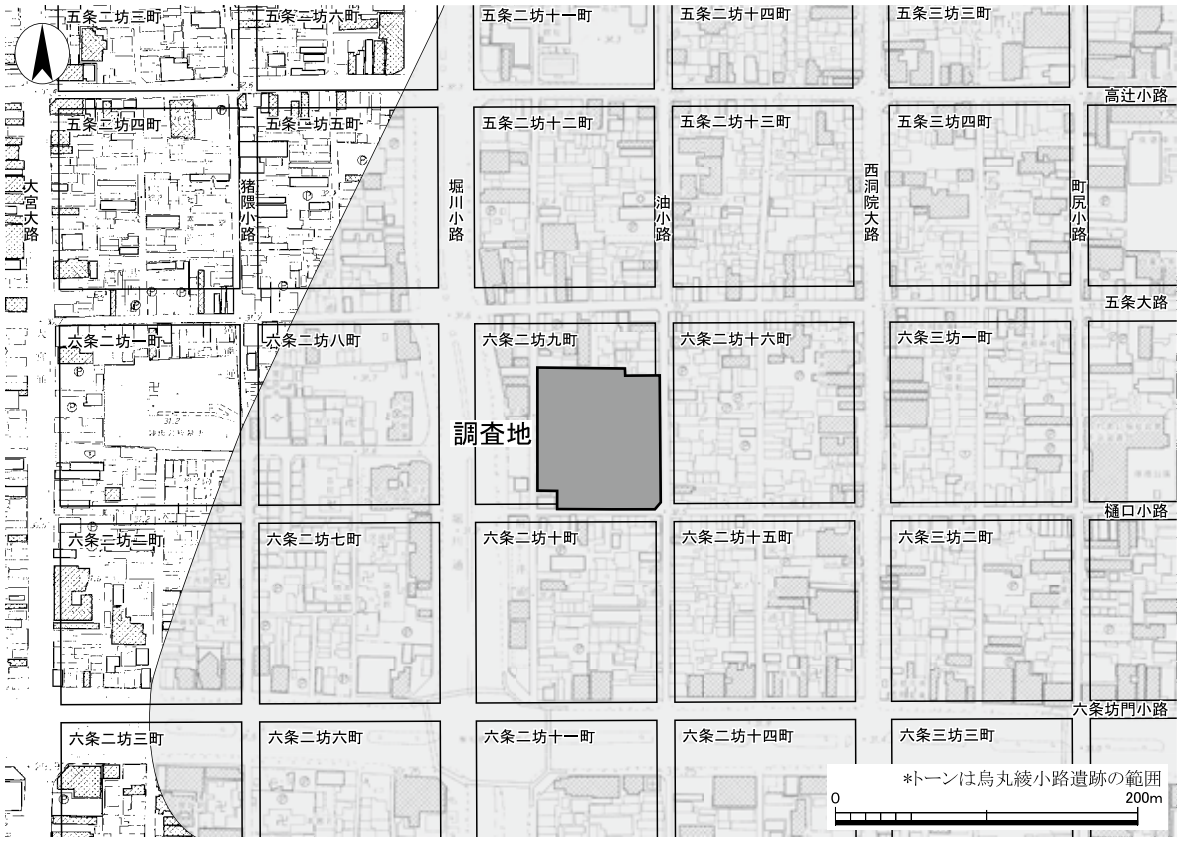


図１　調査位置図（１：5,000）

図２　１区調査前全景（南東から）

図３　２区調査前全景（北西から）

図４　３区調査前全景（北から）

図５　４区調査前全景（北から）

図６　１区調査状況（南東から）

図７　１区コンクリート撤去作業状況（南西から）

図８　弥生時代足跡型取り作業状況（北東から）

図９　現地説明会（南西から）

る。３区は当初、約100㎡を予定していたが、醒ヶ井通に設置されている仮囲いとの関係から、文化財保護課と協議の結果、西調査区の西端を約１m縮小し、調査面積は約90㎡となった。

調査は平成29年10月10日から開始した。当初、校舎の解体工事と並行しながらの作業となったため、調査は１区から着手し、解体工事が終了した平成29年12月28日以降、２～４区の作業に着手した。調査した遺構面数は４面６時期である（第１面：江戸時代、第２面：鎌倉時代後半から安土桃山時代、第３面：平安時代後期から鎌倉時代前半、第４面：平安時代前期から中期・弥生時代）。

各面の掘り下げは重機を用い、遺構は人力で掘削した。遺構の図化作業は、調査担当職員と作業員による手測りとオルソ写真測量を併用した（図６）。全景写真撮影は当研究所写真担当職員、個別遺構写真は当研究所写真担当職員及び調査担当職員が適宜行った。残土は調査地内での仮置きを基本としたが、京都市教育委員会事務局総務部教育環境整備室（以下「教育環境整備室」という）及び京都市都市計画局公共建築部公共建築建設課（以下「公共建築建設課」という）と協議のうえ、600㎥分は場外に搬出した。調査区内で確認した未解体のコンクリート構造物は、教育環境整備室及び公共建築建設課と適宜協議のうえ、要請を受けたものについては撤去作業を行った（図７）。

普及啓発活動として、調査の成果を公表するため調査期間中の平成30年７月26日に広報発表を行い、同７月28日（参加者600人）に現地説明会を開催した（図９）。また、平成30年２月10日（参加者80人）と同２月13日（参加者310人）、同７月21日（参加者約120人）には周辺住民や京都市立下京雅小学校生を対象とした遺跡見学会を実施した。また、京都市考古資料館主催のチャレンジ体験の一環として発掘体験を実施し、平成29年11月８日に京都市立周山中学校生６人、平成30年５月30日に京都市立上京中学校生３人を受け入れた。平成30年３月12日には京都市立下京雅小学校６年生37人が発掘体験学習を行った。平成30年５月14日から25日にかけては、京都精華大学人文学部フィールドプログラムの一環としての発掘体験を受け入れ、大学生４人の参加を得た。

調査では適宜、文化財保護課の検査、検証委員の木立雅朗（立命館大学）、國下多美樹（龍谷大学）両氏による指導・検証を受けた。平成30年９月20日にすべての調査を終了し、撤収した。

２．位置と環境

（１）歴史的環境と立地

調査地は、京都盆地のほぼ中央、鴨川によって形成された扇状地の南西部に位置し、烏丸綾小路遺跡及び平安京左京六条二坊九町跡にあたる。

調査地周辺の歴史的状況は、次のように概観できる[1)]。

烏丸綾小路遺跡は、北は現在の錦小路通付近から南は五条通以南までの約1.1㎞、東は堺町通から西は猪熊通付近までの約1.3㎞の範囲に拡がる遺跡である。弥生時代前期から古墳時代後期までの遺構や遺物が出土しており、京都盆地の拠点的な集落の一つと考えられている。

平安京左京六条二坊九町については、『今昔物語集』巻二七によると、平安時代前期の官人・学者である三善清行の邸宅が「五条堀川」に所在したと伝えるが、『中古京師内外地図』はそれを当該地に比定している。その後、江戸時代に至るまで当該地における居住者や土地利用の様相を示す記録は認められないが、『中右記』長治２年（1105）８月30日条では「五条堀川」、そして『玉葉』建久２年（1191）５月14日条では「五条南油小路西」で小屋の火災があったことが記されている。

江戸時代には、丹波福知山藩（正保２年刊『寛永後万治前洛中絵図』）・肥前島原藩（元禄７年刊『京独案内手引集』）・丹波園部藩（宝永２年刊『京羽二重』）の京屋敷が置かれた。明治５年（1872）正月、明治政府は諸藩邸をすべて現状のまま上邸することとする太政官布告を発布した。それを受けて屋敷地は京都府が保有するところとなり、明治６年（1873）には下京第十七区小学校（後の醒泉小学校）が当該地に移転、現在に至っている。

（２）既往の調査

調査地周辺の主要な調査については次のように概観できる（図10）。

調査地である元醒泉小学校敷地内では、これまでに試掘調査と発掘調査が１回ずつ実施されている。１は昭和57年度に実施された調査区北側の元醒泉小学校給食室増築工事に伴う試掘調査である。平安時代から室町時代の土坑、江戸時代の井戸が検出されている[2)]。

２は昭和59年度に実施された元醒泉小学校屋内体育場増改築工事に伴う発掘調査である。弥生時代の流路と、平安時代から室町時代の遺構を検出している。弥生時代の流路からは、前期末から中期前半、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の遺物が出土した。平安時代の遺構は希薄で、土坑・柱穴が少数確認された。鎌倉時代から室町時代の遺構が最も多く、溝・土坑・柱穴がある[3)]。

３では地表下0.7ｍ以下で、弥生時代の土坑と、平安時代後期・室町時代の土坑、平安時代末の包含層を確認している[4)]。

４では時期不明の落込みと、鎌倉時代の土坑、平安時代末から鎌倉時代の遺物包含層を検出した。また調査地西端（現堀川通側）では、地表下0.3ｍで氾濫堆積層を確認した[5)]。

５では古墳時代の遺物を含む流れ堆積を検出した[6)]。

6では室町時代から江戸時代前半の遺物包含層と、江戸時代の土坑を検出した[7)]。

7では高辻小路北側溝を検出している。側溝から平安時代前期の土器が出土した[8)]。

8では平安時代から室町時代の遺構を検出している。平安時代の遺構は前期・後期の溝・井戸・土坑・柱穴がある。溝は条坊や四行八門制の地割とは一致していない。鎌倉時代の遺構には高辻小路南側溝・井戸・土坑・柱穴がある。室町時代前半の遺構は確認されていない。室町時代後半の遺構は井戸・土坑・柱穴がある。高辻通・猪熊通に面した町屋と推定されている[9)]。

9では室町時代後半の遺物包含層を全域で検出している[10)]。

10では平安時代後期から鎌倉時代の六条坊門小路南側溝と、室町時代から安土桃山時代の溝を検出した。室町時代から安土桃山時代の溝は、本圀寺の濠と推定されている[11)]。

11では弥生時代の流路と、平安時代から江戸時代の遺構を検出している。弥生時代の流路からは、前期末と後期の磨滅した土器片が出土した。平安時代の遺構は後期の井戸が見つかっている。鎌倉時代から室町時代の遺構密度が高く、井戸・溝・土坑・柱穴が確認された。特に鎌倉時代から室町時代前半の遺構には、土壙墓と推測されるものが多数検出されており、墓地的な様相を呈して

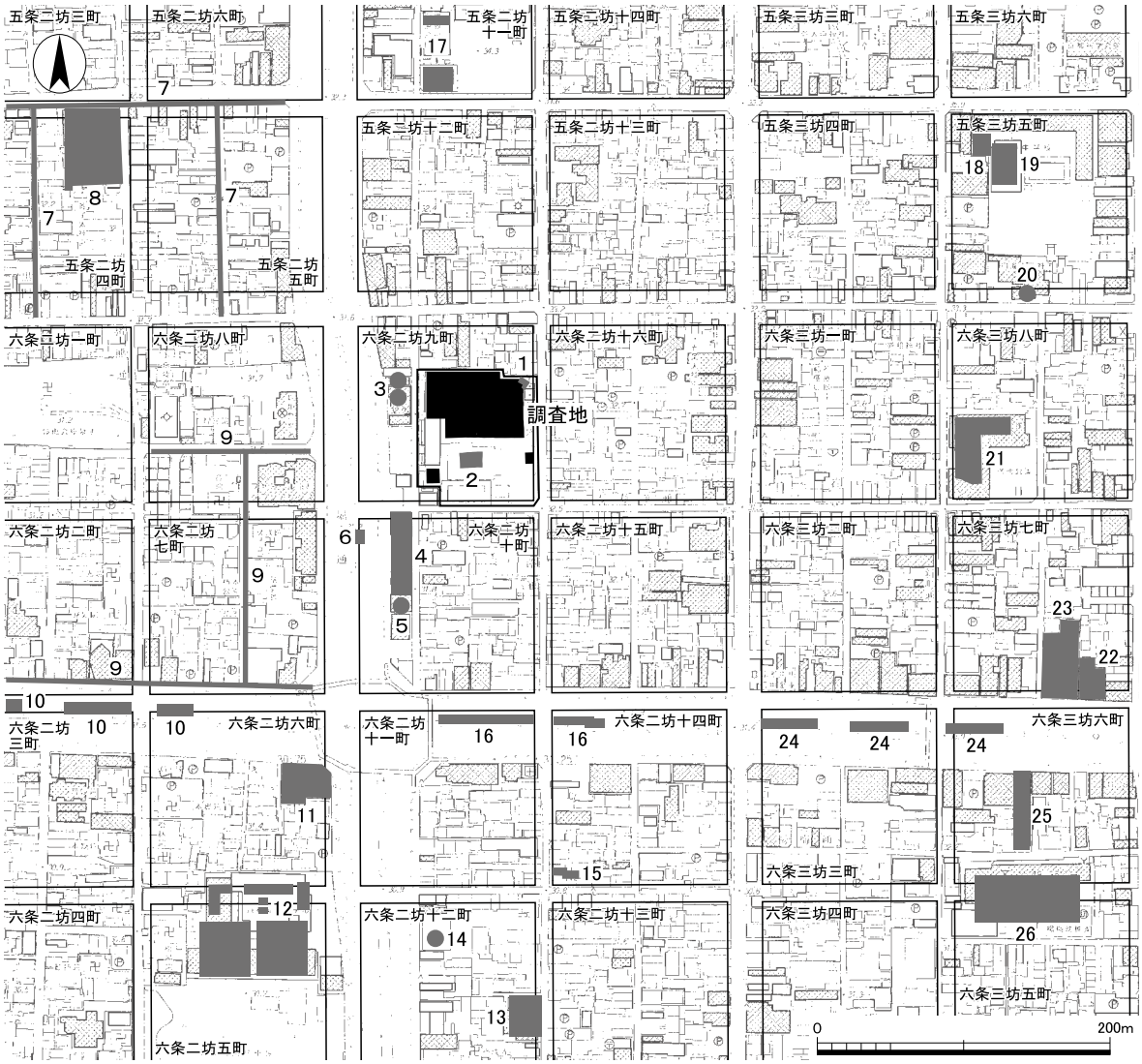


図10　既往の主要調査地点（1：5,000）

いたと推測されている。一方、室町時代後半からは土壙墓は確認できず、溝・掘立柱建物などが検出された。江戸時代の遺構は、本圀寺に関係するとみられる井戸・溝・土坑・柱穴を検出している。[12)]

12では平安時代以前の自然流路と、平安時代から江戸時代の遺構を確認している。平安時代の遺構には楊梅小路南側溝の他、中期から後期にかけての井戸・土坑・柱穴があり、宅地として利用されていたと推定されている。平安時代後期に整地がなされた後、鎌倉時代から室町時代の遺構は増加する。井戸・土坑・柱穴などがある。本圀寺創建期の施設は未確認である。室町時代後半には本圀寺に関連する溝が検出されており、埋土から大量の焼土が見つかった。焼土は天文法華の乱に関係すると考えられている。江戸時代の遺構は減少傾向にあるが、礎石建物や舟入などを確認している。[13)]

13では平安時代から江戸時代の遺構を検出している。安土桃山時代から江戸時代前期の残存状態の良い土壙墓を多数検出した。弥生土器も少量出土した。[14)]

14では弥生時代の流路と鎌倉時代の土坑を検出した。弥生時代の流路は中期後葉から後期前半の土器を伴う流路と、弥生時代から古墳時代にかけての磨滅した土器を含む流路がある。[15)]

15では平安時代中期から江戸時代の遺構を検出している。平安時代の遺構は中期の井戸があるが、全体的に希薄である。平安時代後期頃の整地後、鎌倉時代前半にかけて遺構密度が増加する。鎌倉時代前半の遺構にはウマを埋葬した遺構が検出されていることから、武家の存在が想定されている。鎌倉時代半ば頃にも焼土や炭化物混じりの整地が施され、土地を区画して居住地としての利用がなされたが、安土桃山時代まで遺構密度は減少傾向をたどっている。江戸時代に再び遺構は増加に転じるが、出土遺物は日常雑器が中心であり、町屋的な土地利用が推定された。なお、基盤層である礫層から弥生時代中期の土器片が少量出土した。礫層は堀川もしくは紙屋川由来の洪水堆積物と考えられている。[16)]

16では平安時代から江戸時代の遺構を確認している。平安時代の遺構には井戸・土坑・柱穴などがある。鎌倉時代から室町時代の遺構は井戸・溝・土坑・柱穴などがあり、土壙墓と推測される遺構も確認されている。当該期の遺構密度は非常に高い。安土桃山時代から江戸時代の遺構は井戸・土坑があり、土坑からは多量の遺物が出土した。[17)]

17では弥生時代の流路と、平安時代から江戸時代の遺構を検出している。弥生時代の流路からは後期の磨滅した土器片が出土した。平安時代中期以前の遺構は希薄であるが、平安時代後期に大規模な整地が行われて以降、室町時代まで町家の宅地として利用されたと想定されている。遺構には地下室や小規模な柱穴などが検出されている。室町時代後半以降、遺構数は減少するが、粘土採掘の為の土坑の分布は拡大している。江戸時代には井戸やトイレ遺構を検出していることから、町屋的な景観が想定されている。また調査地至近に所在した稲荷社に奉納されたキツネの土人形の廃棄土坑も検出されている。[18)]

18では弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の流路と、平安時代後期から室町時代、安土桃山時代から江戸時代の遺構を検出している。流路は古墳時代初頭には大部分が埋没するが、その後、平

安時代中期頃まで湿地状の景観を呈し、本格的に人の活動が認められるのは平安時代後期以降になると想定された。平安時代後期の遺構には井戸、鎌倉時代から室町時代の遺構には井戸・土坑・柱穴、安土桃山時代から江戸時代の遺構には井戸・土坑・柱穴が検出されている[19]。

19では弥生時代から江戸時代の遺構を確認している。弥生時代の遺構には中期後葉の溝と後期末の竪穴建物を検出した。平安時代の遺構には中期の井戸と後期末の井戸・室がある。室町時代の遺構には井戸・土坑・柱穴や土壙墓を確認した[20]。

20では流路から弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の土器が出土した[21]。

21では古墳時代から江戸時代の遺構を確認している。古墳時代の遺構は北東から南西方向に流れる自然流路と竪穴建物・土坑を検出した。平安時代の遺構は、前期の掘立柱建物や井戸、町小路の側溝・路面・築地内溝などがある。鎌倉時代から江戸時代初頭までの遺構は井戸・溝・土坑・柱穴が多数検出され、地下室や溶解炉も確認された[22]。

22では平安時代中期・後期・鎌倉時代・室町時代の六条坊門小路北側溝と、江戸時代の路面を検出した。基盤層である礫層から弥生土器片と石包丁の未成品が少量出土した[23]。

23では平安時代中期・後期・鎌倉時代・室町時代の六条坊門小路の路面と北側溝を検出した。また、平安時代中期の柱穴、平安時代後期の溝・掘立柱建物・井戸、鎌倉時代の柱穴・井戸、室町時代の柱穴・布掘柱穴列・井戸、江戸時代の井戸などを検出した。室町時代の遺物には鋳造関係の遺物が出土した。江戸時代の遺物にはヨーロッパ製陶器が出土しており、調査地周辺にあったとされる伊予宇和島藩邸と関係する可能性が指摘された[24]。

24では古墳時代から江戸時代の遺構を確認した。平安時代の遺構は新しい時期の遺構に攪乱されており、残存状況は悪い。室町時代の遺構には井戸・土坑・柱穴などがあり、遺構密度は高い。江戸時代の遺構は井戸・石室・焼け瓦処理土坑などがある。弥生土器も少量出土した[25]。

25では平安時代中期から江戸時代の遺構を検出している。平安時代の遺構は中期の井戸があるが、全体的に希薄である。平安時代後期から鎌倉時代にかけて多数の土坑が掘られたが、室町時代から安土桃山時代の遺構は僅少である。江戸時代に再び遺構は増加に転じるが、出土遺物は日常雑器が中心であり、町家的景観であったと推定された。基盤層である礫層から弥生時代後期から古墳時代後期の土器片が少量出土した[26]。

26は弥生時代の流路と、平安時代から江戸時代の遺構を確認した。弥生時代の流路からは弥生時代後期の土器が出土した。平安時代中葉頃の整地後、後期に楊梅小路南側溝が掘削されるなど、条坊に伴う遺構が形成された。室町時代の遺構には酒蔵と考えられる埋甕遺構が検出された[27]。

３．遺　　構

（１）層序

調査区全体に約0.3～0.5ｍの厚さで近・現代の盛土が行われており、部分的に旧学校施設の基礎などが地表下２ｍ以上の深さにまで及んでいる。

１・２区（図版14・15）　近・現代盛土下層には、約0.2ｍの厚さで江戸時代後半の整地層である暗褐色砂泥層（10層）がある。同層には漆喰が含まれており、現代盛土との層界には赤褐色の焼土が認められた。下層には、江戸時代前半の整地層である、漆喰を含まない暗褐色砂泥層（35層）がある。同層は調査区西側で約0.1ｍ、調査区東側で約0.2ｍを測る。この下層には、鎌倉時代後半から室町時代の整地層である黒褐色砂泥層（71層）がある。層厚は約0.2～0.3ｍを測り、調査区の東側ほど厚い。次は平安時代後期から鎌倉時代前半の整地層である暗灰黄色砂泥（106層）・黒褐色砂泥（107層）・オリーブ褐色砂泥（108層）・オリーブ色砂泥（109層）がある。層厚は約0.3～0.5ｍを測る。この下面は基盤層となるが、流路1132の上部では、平安時代の整地層である灰オリーブ色シルト層（110層）を確認した。基盤層（131層）は上層が固く締まった褐色粘土、下層が砂礫層となる。１区南壁面では、基盤層は流路1132の東岸で標高30.9ｍであるのに対し、１区西端では標高31.5ｍとなり、西に向かって標高が高くなっている。

３区（図版44・45）　地表面の標高は32.4～32.6ｍである。層序は現地表下0.8ｍまで近・現代盛土、以下、約0.2ｍの厚さで江戸時代の整地層である暗オリーブ褐色砂泥・黒褐色砂泥層（北壁８・10・11層、東壁８・９層）、室町時代の整地層である暗オリーブ褐色・黒褐色砂泥層（北壁20層、東壁20・21層）、平安時代の整地層である暗灰黄色シルト層（東壁29層）に分かれ、この下面が基盤層となる。調査区内は各時期の遺構が重複した状態であったため、各時代の整地土が残存する箇所はごく一部に限られる。そのため、基本層序は調査区南東部の層序を基本とした。

４区（図版47）　近・現代盛土下層には、黒褐色砂泥に焼土を大量に含む土坑埋土など、江戸時代後半の遺構が重複している。それら遺構は基盤層を掘り抜いており、他の時代の包含層・整地層などは確認できなかった。

（２）遺構の概要（表１）

１・２区の調査では、江戸時代前半の整地層上面を第１面（江戸時代）、鎌倉時代後半から室町時代の整地層上面を第２面（鎌倉時代後半から安土桃山時代）、平安時代後期から鎌倉時代前半の整地層上面を第３面（平安時代後期から鎌倉時代前半）、同層下面を第４面（弥生時代と平安時代前期から中期）とした。平安時代の遺構は、110層が残る箇所ではその上面と基盤層直上で検出した。弥生時代の遺構は基盤層で検出した。３区の調査では、江戸時代の整地層上面を第１面（江戸時代後半）、室町時代の整地層上面を第２面（室町時代から江戸時代前半）、平安時代の整地層上面を第３面（鎌倉時代）、基盤層直上を第４面（弥生時代）とした。

検出した遺構総数は3,102基である。報告にあたっては、調査区それぞれにおいて時期ごとに各遺構の整理を行い、弥生時代から江戸時代の順に記述した。出土遺物から時期を判断できない遺構については、遺構の形状・まとまりや埋土・検出面から時期を判断した[28)]。

弥生時代の遺構は、前期末から中期中葉の流路と水田・溝・竪穴建物・土坑、中期後葉の方形周溝墓がある。主要な遺構は１・２区で検出しており、３区では流路の西肩部を検出した。遺構のほとんどが新しい時期の遺構によって削平されており、全容を把握できるものは少ない。また、当該期の遺構が確認できない地点でも、新しい時代の遺構埋土から弥生時代の遺物が出土した。新しい時代の遺構によって削平された当該期の遺構が別に存在した可能性が高い。

平安時代の遺構は、井戸・溝・建物・柱列などがある。すべて１・２区で検出した。確認できた遺構は少ないが、当該期の遺構が確認できない地点でも、新しい時代の遺構埋土から平安時代の遺物が出土した。新しい時代の遺構によって削平された当該期の遺構があったと考えられる。

鎌倉時代の遺構は、溝・井戸・土坑・柱穴・建物などがある。１～３区で検出した。

室町時代の遺構は、溝・塀・柵・井戸・土坑・石室などがある。１～３区で検出した。

安土桃山時代の遺構は、土坑などがある。１・２区では多数の土坑が連接・重複した状態で見つかった。

江戸時代の遺構は、溝・土坑・井戸・石室・埋甕・柱列・建物などがある。当該期の遺構は全調査区で検出した。焼土と瓦を多量に含む江戸時代後半の大型土坑を全調査区で検出した。この時期の土坑・柱穴・井戸については、表２・３にまとめた。

表1　遺構概要表

時　　代	遺　　構
弥生時代	溝1245、流路1132、水田・足跡群、竪穴建物1055・1206・2222・3544・3576・3579・3581・3631、 土坑1076・1078・1092・1207・1258・1305・3549・3554・3566・3584・3586・3588・3590、 柱穴1045・1209・1253・1280、方形周溝墓3543
平安時代前期 ・中期	溝960・982、井戸820・3191・3440、柱穴3275、柱列3487、建物851
平安時代後期 ～鎌倉時代前半	溝625・689・722・723・2023・2253・3036・3061・3091・3131・3317・3403・3441、 土器溜2257、井戸585・1010・2022・2553・2894・2961・3190・3442・3592、 土坑381・1593・1594・2892・2893・2895・3113・3182・3468・3471、 柱穴767・794・1017・2969・3224、地下室1591
鎌倉時代後半 ～室町時代	溝2250・2560、塀2206、柵730・753・847・2929・2941・3444、石室214・2720、 井戸1595・2026・2562・3140、土坑261・346・509・514・608・709・1552・1572・2303・2448・2546・ 2576・2669・2745・2811・2814・2841・2951・3066・3090、柱穴332・2763、建物3175
安土桃山時代 ～江戸時代初頭	土坑群Ａ、土坑群Ｂ（土坑2506・2508・2512・2525～2527・2529・2826・2838・2840・2844・3092）、 土坑群Ｃ（土坑2498・2567・2730・2731）、土坑群Ｄ（土坑283・2549・2551）、 土坑群Ｅ（土坑315・316・319・589）、土坑群Ｆ（土坑2748）、土坑群Ｇ（土坑555・587・591・596）、 土坑285・379・638・1551・1539・2528、埋甕1531、礎石列1650
江戸時代	溝441・458・2094・2572・2858、柵2283、石室93・2409、 井戸21・68・71・341・343・593・1511・1549・1589・2002・2004・2005・2007・2013・2017・ 2027～2030・2034・2035・2073・2074・2158・2180・2182・2183・2227・2287・2372、 土坑44・49・51・52・58・60・61・67・100・106・123・133・144・154・162～165・167・168・179・261・ 530・1501・1522・1523・2012・2015・2039・2041・2056・2062・2063・2075・2080・2108・2121・2125・ 2127・2145・2173～2175・2201・2233・2241・2242・2352・2381・2383・2393・2452・2568・3680・ 3681、埋甕137・2171・2232、柱穴2135・2156・2398、建物2284

（3）１・２区の遺構

１）弥生時代（巻頭図版１・２、図版２・３・91）

溝1245（図版92、図11） 調査区中央部で検出した南西方向に流れる溝である。東側は流路1132（新）によって浸食され、西側は新しい時代の遺構によって削平されている。断面形は浅いU字形で、幅1.5ｍ、深さ0.35ｍを測る。埋土は灰黄褐色・黒褐色シルトで、弥生時代前期末から中期初頭の土器が出土した。遺物は下層出土土器の残存状況が比較的良好である。流路1132（新）との合流地点の土器は、弥生時代中期中葉頃のものが混在する可能性がある。

流路1132（古）（図版14～18・92、図12・13） 調査区中央部南側及び北東部で検出した河道である。調査区中央部南側では東肩が流路1132（新）によって浸食されているが、西肩は残存している。残存部分は幅約４ｍ、深さ1.4ｍを測る。北東部では流路上部が流路1132（新）によって浸食されている。残存部分は幅約５ｍ、深さ0.6ｍを測る。１次調査（昭和59年度）で検出されたSD１（古）と同一遺構と考えられる（図12）〔付章７－（３）参照〕。

特徴的な堆積層として灰白色シルト堆積層がある。同層は、調査区中央部南側では標高30.5ｍ付近で（図版14・15－128層）確認した。北東部では流路断面セクションＢ－Ｂ’のＹ＝－22,504地点より東側の標高30.0ｍ付近（図版16・17－55層）、２区北壁断面セクションの標高30.5ｍ付近（図

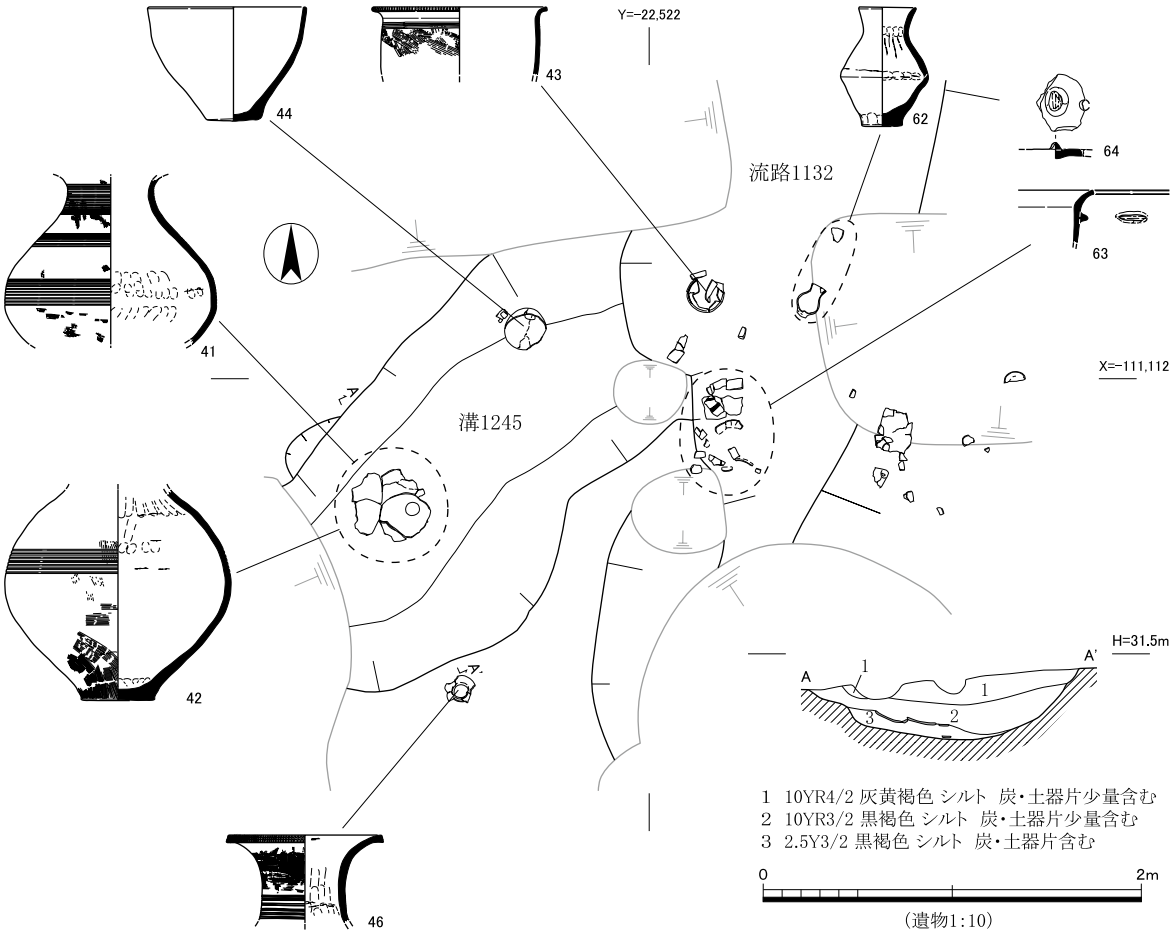


図11　溝1245実測図及び遺物出土状況図（１：40、遺物１：10）

版18－８層）で確認した。これらシルト層は、土質や堆積する標高が類似することから、一連の堆積物と推定している。この灰白色シルトが火山噴出物に由来する可能性を想定し、理化学的な分析を実施した。その結果、同層が当該期のテフラの降下堆積物ではなく、それよりも古い時期のテフラ降下堆積物が再堆積したものと推定された〔付章１－（２）参照〕。

流路の埋土は、灰白色シルト堆積層を境に、上部に暗灰黄色シルト、下部に黒褐色シルトなどが堆積している。黒褐色シルトの下層において、黄褐色粗砂やにぶい黄色砂礫を主要構成物として、一部黄灰色シルトの薄層が堆積する層を確認した（図版16・17、図13：最下層は砂礫）。同層は斜交層理・葉理が認められており、河床堆積物と推定された。また、当該期の地震動に起因する土層

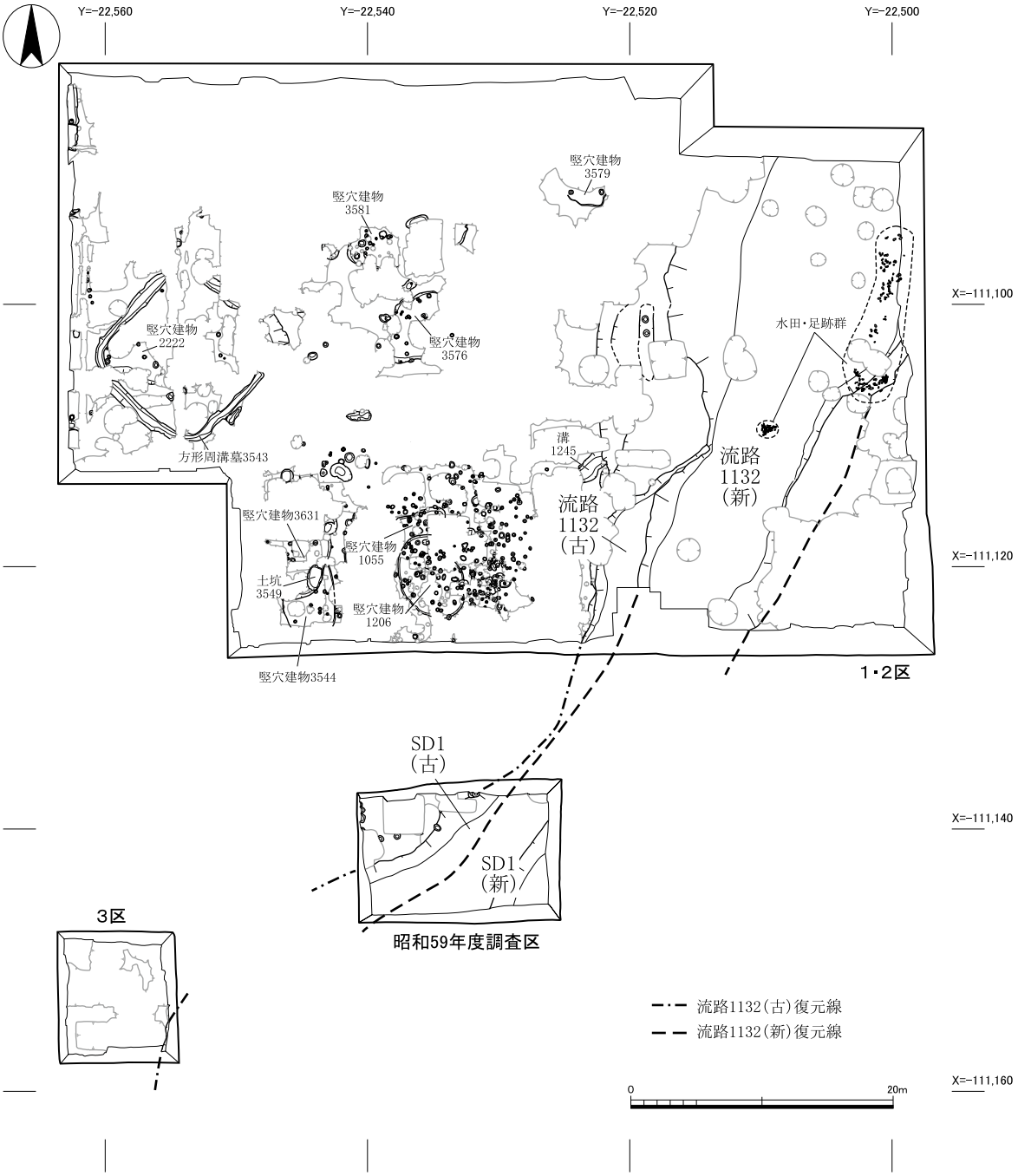


図12　弥生時代河道復元図（１：500）

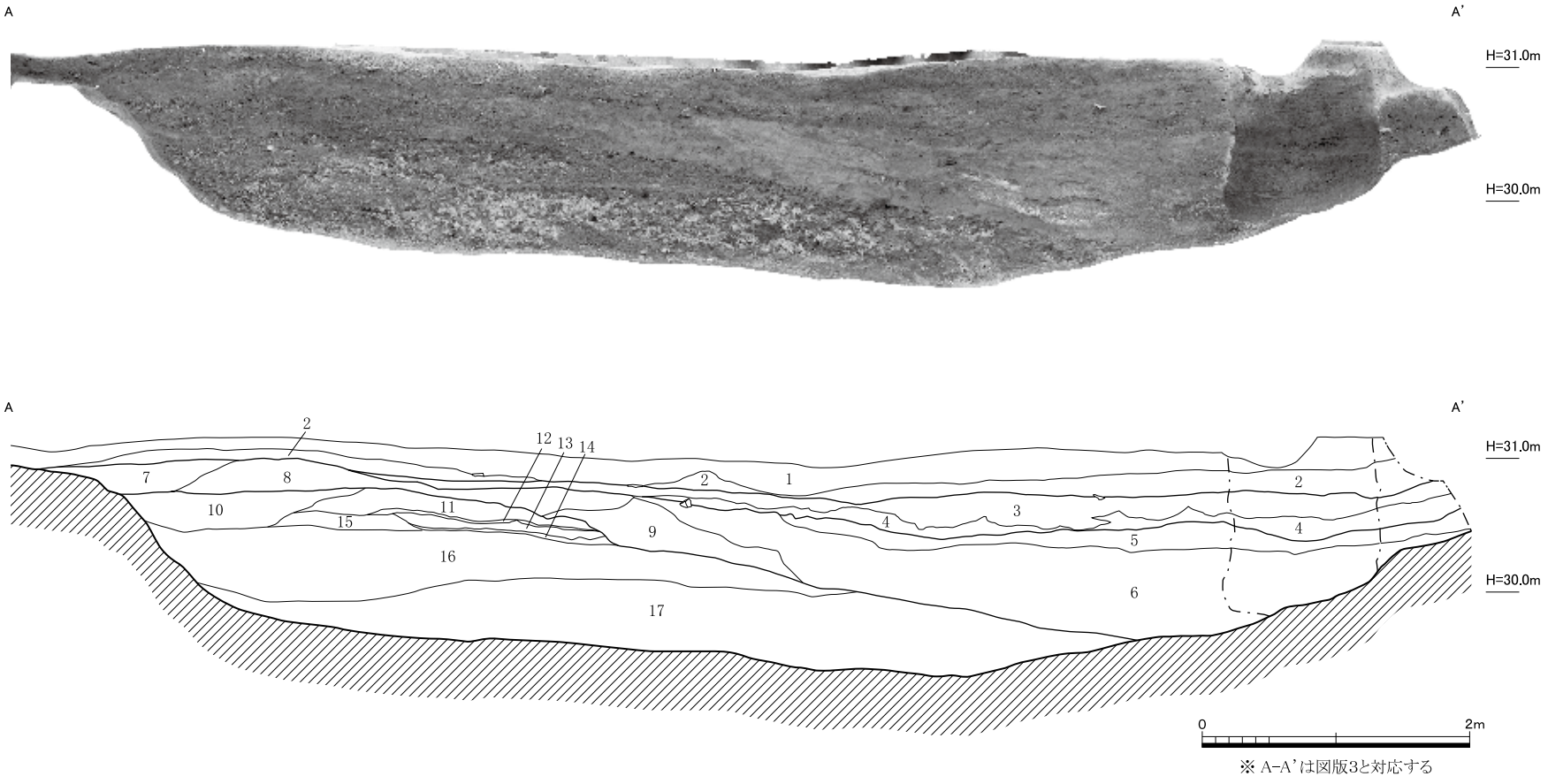


図13　1区流路1132（古・新）オルソ画像・断面図（1：50）

1　2.5Y6/4 にぶい黄色 細砂～極細砂　φ0.1cmの礫少量含む
2　2.5Y5/2 暗灰黄色 粗砂　φ1～2cmの礫多量含む　→ 流路1132(新) Ⅰ層
3　2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂～シルト 炭多量・土器片含む
4　2.5Y5/1 暗灰色 細砂～シルト 炭多量・土器片含む　→ 流路1132(新) Ⅱ層
5　2.5Y5/3 黄褐色 粗砂～シルト 土器含む
6　2.5Y4/2 暗灰黄色 粗砂～シルト
7　10YR6/4 にぶい黄橙色 極細砂～細砂
8　2.5Y5/1 黄灰色 粗砂～細砂
9　2.5Y5/3 黄褐色 粗砂～シルト 土器含む　→ 流路1132(新) Ⅳ層

10　10YR6/2 灰黄褐色 極細砂～シルト　φ～1cmの礫少量 炭少量
11　2.5Y4/6 オリーブ褐色 粗砂　φ1～2cmの礫少量
12　2.5Y5/1 黄灰色 粗砂～シルト
13　2.5Y4/2 暗灰黄色 粗砂～細砂
14　2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂～シルト
15　10YR5/6 黄褐色 粗砂
16　2.5Y5/3 黄褐色 粗砂～細砂
17　2.5Y6/3 にぶい黄色 砂礫　φ3～10cmの礫多量　→ 流路1132(古) 最下層

の変形を確認した（図版17）〔付章１－（１）参照〕。

遺物は、調査区南側の地点では灰白色シルト堆積層より上を上層、下を下層出土遺物として取り上げた。北東側の地点では、灰白色シルト堆積層より上層（図版16・17－52～54層）から出土したものを湿地上層、下層（図版16・17－56～59層、図版18－９～12層）から出土したものを湿地下層出土遺物として取り上げた。湿地上層の土質・土色が、流路1132（新）Ⅱ層と類似するため、両者の遺物が混在した可能性がある。最下層からの出土遺物は無い。上層からは弥生時代中期前葉頃、下層からは弥生時代前期末から中期初頭の土器が出土した。

流路1132（新）（図版14～18・92・93、図12・13） 調査区北東隅から中央部南端にかけて検出した流路1132（古）を削平する河道である。幅７～16ｍ、深さ1.8ｍを測る。１次調査（昭和59年度）で検出されたSD１（新）と同一遺構と考えられる（図12）〔付章７－（３）参照〕。

埋土は大きくⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層の順に堆積している。地質学的な検討から、Ⅰ層が洪水氾濫堆積物、Ⅱ層が流路の流れが緩やかになったことに起因する浮流堆積物の埋積、Ⅲ・Ⅳ層が澪筋を埋める流路堆積物と推定された〔付章１－（１）参照〕。流路内から出土した遺物は、これらの層ごとに取り上げた。さらにⅡ層出土遺物については、暗灰黄色シルトを含む上層（図版16・17－31層）と、それより下層とに分けて取り上げた。Ⅱ層上層とⅠ層の出土土器は接合するものが一定量確認できた。

Ⅰ層はにぶい黄橙色・黄色極細砂～細砂を主要構成分とする堆積層であり、一部に不明瞭な葉理が認められる。Ⅱ層は主に黒褐色・暗灰黄色シルトが堆積する層であり、炭化材の混在が顕著である。同層上面で足跡を検出した。Ⅲ層は主に黄褐色細砂～粗砂が堆積しており、一部にシルトも認められる。不明瞭な葉理を確認した。Ⅳ層は径１～２㎝の亜円礫から構成されており、一部灰色シルトの薄層がレンズ状に堆積する。遺物は土器・石器・木器が出土した。主にⅠ・Ⅱ層から出土しており、Ⅲ・Ⅳ層から出土した遺物は少ない。一部混在も認められるが、Ⅲ・Ⅳ層から弥生時代中期初頭、Ⅱ層から中期前葉、Ⅱ層上層・Ⅰ層から中期中葉（初頭）の土器が出土した。広鍬（図版90：木１）がⅡ層上層直上から出土した。

また、Ⅱ層上面からⅠ層にかけて、一部層位が変形する箇所を確認した（図版17：層位の変形箇所）。この層位の変形構造は弥生時代よりも新しい時代の地震動に起因するものと推測されている[29]〔付章１－（１）参照〕。

なお、流路内から出土した炭化物を用いて、放射性炭素年代測定を行った。試料を採取したのは流路1132（古）最下層と流路1132（新）Ⅱ層である（図版16）。流路1132（古）最下層から採集した試料の炭素年代測定値は2,434-2,353cal BP、流路1132（新）Ⅱ層から採集した試料の炭素年代測定値は2,355-2,306cal BPである〔付章３参照〕。

水田・足跡群（巻頭図版２、図版93） 調査区北東側の流路1132（新）Ⅱ層上層上面で、足跡群を検出した。確認した足跡は156個を数える。足跡内にはにぶい黄橙色・黄色極細砂～粗砂が充填されている。足跡の大きさは、長さ９㎝前後・幅５㎝前後のものから、長さ23㎝前後・幅11㎝前後のものまで確認できた。

足跡群の周辺では、土層観察に基づく地質学的検討から人間活動に由来する攪拌の存在が指摘された。また、周辺土壌中からイネなどの種実や花粉化石、植物珪酸体が周辺から多数出土しており〔付章１－（１）･（４）参照〕、この足跡は水田に伴うものと考えられる。しかし、畦畔など明確な水田遺構が認められないことから検討の余地がある。

竪穴建物1055（図版19・94） 調査区中央部南側で検出した。南側は竪穴建物1206、東側と西側は新しい時代の遺構によって削平されている。全形は不明であるが、平面不整方形を呈すると考えられる。東西3.5ｍ、南北2.1ｍ、深さ0.3ｍを測る。貼床が認められたが、壁溝は確認できなかった。埋土はにぶい黄褐色・黒褐色シルトで、基盤層の黄褐色粘土がブロック状に混じる。遺物は弥生時代前期末から中期初頭の土器・石器が出土した。

竪穴建物1206（図版19・94） 調査区中央部南側で検出した。北東側は新しい時代の遺構によって削平されている。東西4.7ｍ、南北6.6ｍの平面楕円形を呈する。深さ0.2ｍを測る。貼床が認められたが、壁溝は確認できなかった。埋土はにぶい黄褐色シルトで、基盤層の黄褐色粘土がブロック状に混じる。遺物は弥生時代中期前葉の土器・石器が出土した。

竪穴建物2222（図版19・94） 調査区西端部で検出した。四方が攪乱されており、全形は不明である。東西3.8ｍ、南北3.2ｍ、深さ0.2ｍを測る。壁溝は確認できなかった。埋土は黒褐色・オリーブ褐色シルトである。遺物は弥生時代中期前葉の土器・石器が出土した。

竪穴建物3544（図版21） 調査区南西部で検出した。北側は竪穴建物3631、南側は新しい時代の遺構によって削平されている。全形は不明であるが、東側ではゆるやかな弧状の掘形を持つことから、平面不整楕円形を呈すると考えられる。東西4.0ｍ、南北4.4ｍ、深さ0.2ｍを測る。壁溝は確認できなかった。埋土はオリーブ褐色シルトである。遺物は弥生時代中期前葉の土器・石器が出土した。

竪穴建物3576（図版20・95） 調査区中央部で検出した。東側と西側は新しい時代の遺構によって削平されている。全形は不明であるが、北側ではゆるやかな弧状の掘形を持つことから、平面不整楕円形を呈すると考えられる。東西3.4ｍ、南北5.0ｍ、深さ0.3ｍを測る。壁溝は確認できなかった。埋土はにぶい黄褐色細砂や褐色シルト～細砂である。床面の一部で焼土や炭混じりのにぶい黄褐色砂（４層）を確認した。遺物は弥生時代中期前葉の土器・石器が出土した。

竪穴建物3579（図版20） 調査区中央部北側で検出した。南部のみ遺存しており、平面方形もしくは長方形を呈する可能性がある。東西2.9ｍ、南北1.0ｍ、深さ0.2ｍを測る。壁溝は確認できなかった。埋土は褐灰色・灰黄褐色砂泥である。建物に伴う柱穴3577・3579も検出した。柱穴は径0.4ｍ、深さ0.1～0.2ｍを測り、柱間は2.3ｍである。柱穴の埋土は灰色・灰白色砂である。遺物は弥生時代中期前葉の土器・石器が出土した。

竪穴建物3581（図版20・95） 調査区中央部で検出した。北・東・南側の三方が新しい時代の遺構によって削平されており、全形は不明である。東西4.0ｍ、南北3.0ｍ、深さ0.3ｍを測る。壁溝は確認できなかった。埋土は黒褐色シルト～細砂である。遺物は弥生時代中期前葉の土器が出土した。

竪穴建物3631（図版21） 調査区南西部で検出した。北側と西側が新しい時代の遺構によって削平されている。全形は不明であるが、東側ではゆるやかな弧状の掘形を持つことから、平面楕円形を呈すると考えられる。東西3.4ｍ、南北4.4ｍ、深さ0.1ｍを測る。壁溝は確認できなかった。埋土はオリーブ褐色シルトである。遺物は弥生時代前期末から中期初頭の土器が出土した。南東部に土坑3549があるが、新旧関係は不明である。

土坑1076 調査区中央部南側で検出した。平面長方形を呈する。東西0.3ｍ、南北0.2ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は炭混じりの暗褐色シルトである。遺物は石器が出土した。

土坑1078（図版22） 調査区中央部南側で検出した。東側は新しい時代の遺構によって削平されている。平面楕円形を呈する。東西0.5ｍ以上、南北0.55ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土は炭化物・焼土混じりの暗褐色シルトとにぶい黄褐色シルトの互層である。遺物は石器が出土した。

土坑1092 調査区中央部南側で検出した。北側と南側が新しい時代の遺構によって削平されているため全形は不明であるが、東側と西側にゆるやかな弧状の掘形を持つことから、平面楕円形を呈すると考えられる。東西0.8ｍ、南北0.4ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は炭混じりの灰黄褐色シルトと褐色シルトの互層である。遺物は石器が出土した。

土坑1207（図版22） 調査区中央部南側で検出した。北側と東側が新しい時代の遺構によって削平されている。平面楕円形を呈する。東西0.2ｍ以上、南北0.5ｍ以上、深さ0.4ｍを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色シルトである。

土坑1258 調査区中央部南端で検出した。南東側は新しい時代の遺構によって削平されている。平面方形を呈する。東西0.9ｍ、南北0.9ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は基盤層由来の黄褐色シルトブロック混じり褐色シルトであり、焼土も微量含む。遺物は石器が出土した。

土坑1305 調査区中央部南端で検出した。平面隅丸方形を呈する。直径0.5ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は褐色シルトである。遺物は石器が出土した。

土坑3549（図版22・96） 調査区南西部で検出した。東西2.2ｍ、南北3.6ｍの平面不整楕円形を呈する。深さ0.8ｍを測る。埋土は暗灰黄色砂泥や黄灰色シルトである。遺物は比較的残存状態の良い弥生時代中期前葉の土器片や石器が出土した。

土坑3554（図版21・96） 調査区南西部で検出した。北・南・西側が新しい時代の遺構によって削平されている。全形は不明であるが、東側ではゆるやかな弧状の掘形を持つことから、平面不整円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。東西0.9ｍ、南北1.1ｍ、深さ0.8ｍを測る。埋土は炭混じりの灰黄褐色砂泥である。遺物は摩耗が著しい弥生土器片と石器が出土した。

土坑3566 調査区西部で検出した。平面不整楕円形を呈する。東西0.6ｍ、南北0.7ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は炭混じりの黒褐色シルトである。遺物は石器が出土した。

土坑3584 調査区中央部北側で検出した。南側が新しい時代の遺構によって削平されている。平面不整楕円形を呈する。埋土は炭混じりのにぶい黄褐色シルトと黒褐色シルトである。東西1.8ｍ、南北0.4ｍ、深さ0.3ｍを測る。遺物は石器が出土した。

土坑3586（図版22・96） 調査区西部で検出した。東西1.1ｍ、南北1.8ｍの平面不整楕円形を呈

する。深さ0.4ｍを測る。埋土は焼土ブロックが多量に混じる褐灰色・オリーブ褐色砂泥である。

土坑3588（図版22） 調査区南西部で検出した。平面不整楕円形を呈する。東西1.5ｍ、南北0.65ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は炭化物を少量含む褐灰色シルトと黄灰色・黒褐色シルト、炭化物を多量に含むオリーブ褐色シルトが堆積する。遺物は石器が出土した。

土坑3590 調査区南西部で検出した。南西側が新しい時代の遺構によって削平されている。平面隅丸方形を呈する。東西0.95ｍ、南北0.95ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥と灰黄褐色砂泥の順に堆積する。遺物は石器が出土した。

柱穴1045 調査区中央部南側で検出した。平面円形を呈する。直径0.2ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は石器が出土した。

柱穴1209 調査区中央部南側で検出した。平面楕円形を呈する。直径0.4ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は黄褐色シルトブロック混じりの黒褐色シルトである。遺物は石器が出土した。

柱穴1253 調査区中央部南端で検出した。北側が新しい時代の遺構によって削平されている。平面楕円形を呈すると考えられる。東西0.4ｍ、南北0.6ｍ以上、深さ0.2ｍを測る。埋土は褐色シルトである。遺物は石器が出土した。

柱穴1280（図版19） 調査区中央部南側で検出した。竪穴建物1206内に位置する。平面円形を呈する。直径0.4ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は褐色シルトである。遺物は碧玉の剥片が出土した。

方形周溝墓3543（図版23・97） 調査区西端で検出した。竪穴建物2222を削平している。新しい時代の遺構によって削平されており、周溝のみが残存している。一辺10.1～10.6ｍ、深さ0.6ｍを測る。埋土は黒褐色・暗褐色・灰黄褐色シルト（１～３層）、にぶい黄褐色・暗褐色・褐灰色シルト（４～６層）、褐色シルト（７層）の順に堆積している。南辺の周溝からは、残存状況の良い弥生時代中期後葉の土器が褐色シルト上面から出土した。石器も周溝内から出土したが、竪穴建物2222との切り合いがあることから、混入の可能性がある。

２）平安時代前期から中期（図版４・５・98）

溝960（図14） 調査区中央部南端で検出した南北溝である。四行八門制の土地区画では西三・四行境に並行する。幅1.3ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は暗オリーブ色シルト・暗灰黄色シルトなどである。時期が判断できる遺物は出土していない。

溝982（図14） 調査区南西部で検出した。幅1.7～2.1ｍ、深さ0.3ｍの南北溝である。埋土は炭を含む暗灰黄色・黄灰色シルトなどである。遺物は京都Ⅱ期[30]の土器が出土した。

井戸820（図版24） 調査区南東部で検出した。掘形は平面方形を呈する。南北2.2ｍ、東西2.0ｍ、深さ1.8ｍである。方形縦板組横桟どめの井戸枠は内法で一辺1.0ｍを測る。井戸底部には水溜として径0.5ｍの曲物を据えている。底面の標高は29.0ｍである。遺物は水溜の曲物内から京都Ⅳ期古段階の土器が出土した。

井戸3191（図版24・99） 調査区東部で検出した。掘形は平面方形を呈する。南北2.7ｍ、東西2.0ｍ、深さ2.4ｍである。方形縦板組横桟どめの井戸枠は内法で一辺1.0ｍを測る。井戸底部には水

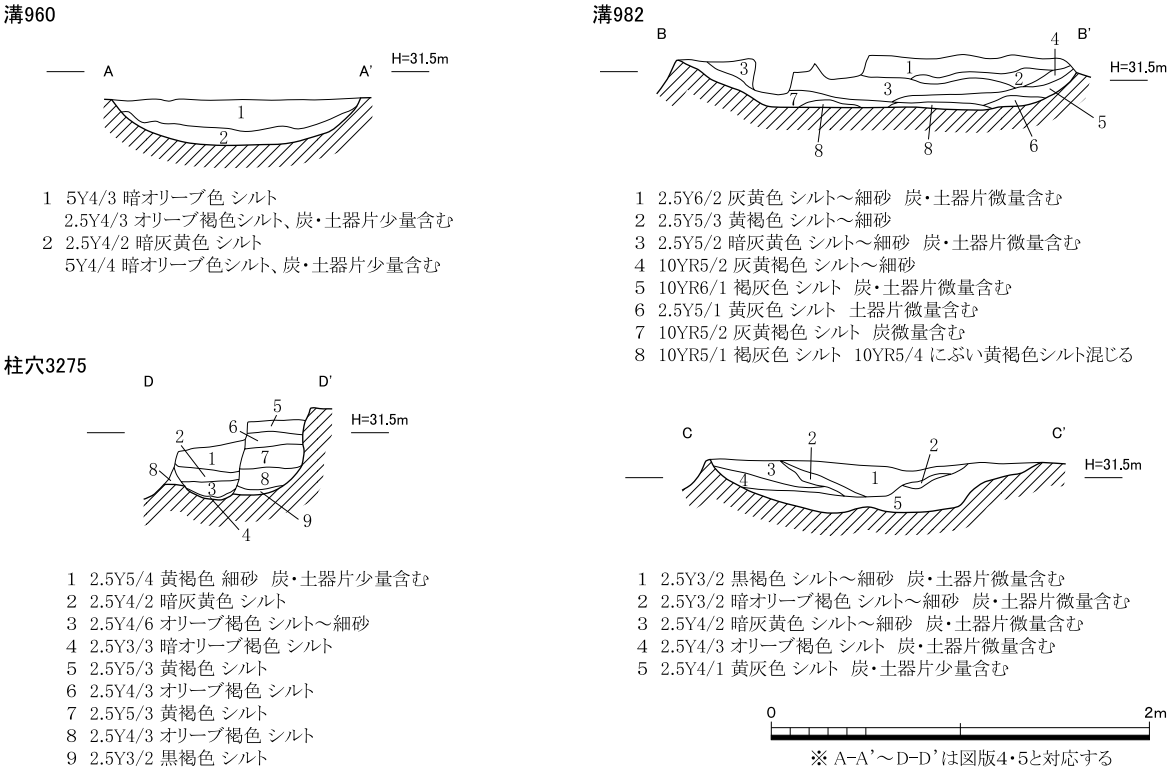


図14　溝960・982、柱穴3275断面図（１：40）

溜として径0.5ｍの曲物を据えている。底面の標高は28.9ｍである。井戸枠の裏込めは黒褐色シルトをベースとしてブロック状の褐灰色シルト・灰黄褐色シルトを含む層である。遺物は京都Ⅲ期新段階の土器や漆器皿などが出土した。

井戸3440（図版25・99）　調査区東部で検出した。掘形は平面方形を呈する。南北3.7ｍ、東西3.6ｍ、深さ1.9ｍである。井戸枠は方形で最下段の横桟が残存する。木質は腐朽していたが、壁面に残された痕跡からは横板組とみられる。井戸枠の内法は一辺1.4ｍを測る。底部に曲物などの施設は認められなかった。底面の標高は29.4ｍである。井戸枠の裏込めは灰黄褐色シルト・褐灰色シルト、最下層はにぶい黄褐色粗砂である。遺物は「政所」の墨書のある緑釉陶器など京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階の土器や木製品が出土した。

柱穴3275（図14）　調査区中央部で検出した。北側・西側・東側が削平されており、全形は不明である。東西0.2ｍ以上、南北0.4ｍ以上、深さ0.4ｍを測る。埋土は柱痕跡が黄褐色細砂、掘形埋土が黄褐色シルトとオリーブ褐色シルトの互層である。時期が判断できる遺物は出土していない。

柱列3487（図版25・100）　調査区北西部で検出した東西方向の柱列である。規模は東西約5.7ｍで２間分の柱列を確認した。主軸方位は東に対して南に約３°振れる。柱間は東西3.0ｍである。柱穴は平面方形を呈し、一辺0.6～0.7ｍを測る。埋土は柱痕跡がオリーブ褐色シルト、掘形埋土が黄褐色シルト・暗灰黄色シルトなどである。建物の一部となる可能性がある。時期が判断できる遺物は出土していない。

建物851（図版26・100）　調査区南西部で検出した。溝982の埋没後に建てられた掘立柱建物である。規模は南北約5.0ｍ、東西約2.9ｍで、南北２間分、東西１間分の柱列を確認したが、攪乱の

ため全体の規模は不明である。柱間は南北2.5ｍ、東西約3.0ｍである。柱穴は平面方形を呈し、一辺0.7～0.9ｍを測る。埋土は柱痕跡がにぶい黄褐色シルト・暗褐色砂泥・オリーブ褐色シルト、裏込め土が暗灰黄色シルト・灰黄褐色砂泥・にぶい黄褐色シルトなどである。時期が判断できる遺物は出土していないが、溝982埋没後の遺構であることから、京都Ⅲ期中段階以降と判断した。

3）平安時代後期から鎌倉時代前半（図版６・７・101）

溝625（図版27） 調査区中央部南側で検出した南北溝である。四行八門制の土地区画では西三・四行境に並行する。幅0.6ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は黒褐色シルト～細砂で、下層は暗オリーブ色シルトブロックが混じる。遺物は京都Ⅳ期からⅤ期の土器が出土した。

溝689 調査区東部南端で検出した東西溝である。四行八門制の土地区画では北五・六門境に並行する。幅0.3ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。時期が判断できる遺物は出土していない。

溝722 調査区中央部南側で検出した南北溝である。四行八門制の土地区画では西三・四行境に並行する。幅0.3ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は黒色砂泥である。遺物は京都Ⅵ期の土器が出土した。

溝723（図版14・15） 調査区中央部南側で検出した南北溝である。四行八門制の土地区画では西三・四行境に並行する。幅0.3ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は黄灰色～黒褐色シルトである。遺物は京都Ⅴ期の土器が出土した。

溝2023 調査区中央部北側で検出した南北溝である。四行八門制の土地区画では西三・四行境に並行する。幅0.4ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は褐灰色細砂である。時期が判断できる遺物は出土していない。鎌倉時代前半の井戸2022によって削平されている。

溝2253 調査区西側で検出した東西溝である。四行八門制の土地区画では北四・五門境に並行する。幅0.7～1.2ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は12世紀の瓦類が出土した。

溝3036（図版27・104） 調査区中央部で検出した東西溝である。四行八門制の土地区画では北四・五門境に並行する。幅0.5ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は上層に褐灰色・暗灰黄色シルト～細砂、下層に黄灰色シルトが堆積している。遺物は京都Ⅳ期からⅤ期の土器、９～11世紀後葉の瓦類が出土した。

溝3061（図版27・104） 調査区中央部で検出した東西溝である。四行八門制の土地区画では北四・五門境に並行する。幅1.4ｍ、深さ0.9ｍを測る。上層にオリーブ褐色、下層に暗オリーブ褐色シルト・黒褐色シルト～細砂が堆積する。遺物は京都Ⅲ期からⅥ期の土器、12世紀の瓦類が出土した。

溝3091（図版27・104） 調査区中央部で検出した東西溝である。四行八門制の土地区画では北四・五門境に並行する。北肩を溝3061によって削平されている。残存部では幅0.7ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土は上層に暗オリーブ褐色シルト～細砂、下層に黒褐色シルト～細砂が堆積している。遺物は京都Ⅴ期の土器が出土した。

溝3131（図版104） 調査区東部で検出した。四行八門制の土地区画では北四・五門境に並行する東西溝である。幅0.2ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。時期が判断できる遺物は出土していない。

溝3317 調査区東部で検出した。四行八門制の土地区画では北四・五門境に並行する東西溝である。幅0.2ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は暗灰黄色砂泥である。遺物は京都Ⅳ期からⅤ期の土器が出土した。

溝3403（図版27・104） 調査区南西部で検出した南北溝である。幅1.2ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土はオリーブ褐色シルトである。遺物は京都Ⅳ期からⅤ期の土器や砥石が出土した。

溝3441（図版27） 調査区中央部で検出した南北溝である。四行八門制の土地区画では西三・四行境に並行する。幅1.4ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土は炭や土器片を微量に含む暗オリーブ色シルト～細砂である。遺物は京都Ⅲ期からⅤ期の土器、９～11世紀の瓦類が出土した。

土器溜2257（図版27・104） 調査区南西部で検出した。長軸約2.75ｍ、幅1.8ｍ以上、深さ0.2ｍを測る。底面レベルは一定しない。埋土は灰黄褐色砂泥・にぶい黄褐色シルトの順に堆積している。上層は京都Ⅴ期古段階から中段階の土師器皿、12世紀の瓦類を多量に含む。

井戸585 調査区南東部で検出した。掘形は平面円形を呈する。南北1.7ｍ、東西1.9ｍ、深さ2.5ｍを測る。方形横板井籠組の井戸枠は内法で一辺約0.8ｍを測る。水溜は確認できなかった。底部の標高は29.1ｍを測る。井戸枠の裏込め土は赤褐色粗砂と褐色粗砂の互層である。遺物は京都Ⅴ期の土器が出土した。

井戸1010（図版14・15・102） 調査区南東端で検出した。遺構南半は調査区外になる。掘形は平面方形を呈する。南北1.1ｍ以上、東西1.4ｍ、深さ1.5ｍを測る。方形縦板組の井戸枠であるが、腐朽が進み遺存部分はわずかである。水溜は確認できない。底部の標高は28.5ｍを測る。井戸枠の裏込め土は上層から順に黒褐色砂泥・シルト、褐灰色シルト、暗赤褐色砂礫、黒褐色シルト、褐灰色シルトとなる。遺物は京都Ⅵ期の土器が出土した。

井戸2022（図版28） 調査区中央部北端で検出した。掘形は平面方形を呈する。南北2.7ｍ、東西2.5ｍ、深さ2.9ｍである。井戸枠は方形であるが、最下段の横桟だけが残存する。井戸枠の内法は一辺約1.1ｍを測る。井戸底部には水溜として径0.9ｍの曲物を据えている。底部の標高は28.4ｍを測る。井戸枠の裏込め土は暗褐色粗砂と黒褐色粗砂の互層である。遺物は京都Ⅵ期中段階の土器が出土した。

井戸2553 調査区中央部で検出した。平面円形を呈する。直径約2.0ｍ、深さ1.3ｍを測る。底部の標高は30.2ｍを測る。井戸枠などは残存していない。埋土は暗褐色砂泥である。遺物は京都Ⅶ期の土器が出土した。

井戸2894 調査区南西部で検出した。平面方形を呈する。直径1.8ｍ、深さ1.5ｍである。底部の標高は29.6ｍを測る。井戸枠などは残存していない。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅳ期からⅤ期の土器が出土した。

井戸2961（図版29・102） 調査区中央部で検出した。掘形は平面方形を呈する。南北3.2ｍ、東

西3.0ｍ、深さ3.4ｍ以上である。方形縦板組横桟どめの井戸枠は内法で一辺約1.0ｍを測る。掘削にあたり、崩落の危険性があったため完掘はしていない。井戸枠の裏込め土は、上部では粗砂と砂泥の互層をなす。掘削時の底部標高は27.3ｍである。遺物は京都Ⅵ期新段階の土器や、12世紀の瓦類が出土した。

井戸3190（図版28・102） 調査区北東部で検出した。掘形は平面方形を呈する。南北1.8ｍ、東西1.6ｍ、深さ1.8ｍである。方形縦板組横桟どめの井戸枠は内法で一辺約0.7ｍを測る。２段組の曲物で水溜としている。上段の曲物は径0.43ｍ、下段の曲物は径0.38ｍを測る。底部の標高は29.2ｍである。井戸枠の裏込め土は暗オリーブ灰色シルトと暗オリーブ灰色砂泥の互層、水溜の裏込め土は黒褐色粗砂と黒褐色砂礫である。遺物は京都Ⅳ期新段階からⅤ期古段階の土器が出土した。

井戸3442 調査区東部で検出した。掘形は平面方形を呈する。南北2.2ｍ、東西2.4ｍ、深さ2.3ｍである。方形縦板組横桟どめの井戸枠は内法で一辺約0.9ｍを測る。井戸枠の裏込め土は、上から黄灰色シルト、黒褐色砂礫、オリーブ褐色粗砂の順に堆積している。掘削時の底部の標高は28.9ｍである。遺物は京都Ⅴ期の土器が出土した。

井戸3592 調査区北東部で検出した。掘形は平面方形を呈する。南北1.6ｍ、東西1.4ｍ、深さ1.5ｍを測る。井戸枠は確認できなかったが、水溜に方形の木枠痕が残存していた。水溜は内法で約0.9ｍを測る。底部の標高は29.7ｍである。遺物は京都Ⅴ期の土器が出土した。

土坑381（図版14・15・103） 調査区中央部南端で検出した。遺構南半は調査区外になる。平面方形を呈する。南北2.9ｍ、東西3.4ｍ、深さ2.7ｍを測る。基盤層上層の固く締まった褐色粘土を掘り抜き、砂礫層まで掘削している。埋土は上層が非常に固く締まった暗灰黄色砂泥、下層はにぶい黄褐色泥砂・黄灰色シルトである。底部の標高は29.0ｍである。遺物は京都Ⅵ期の土器、12世紀の瓦類が出土した。

土坑2892（図版103） 調査区南西部で検出した。平面方形を呈する。南北5.0ｍ、東西5.0ｍ、深さ約1.4ｍを測る。基盤層上層の固く締まった褐色粘土を掘り抜き、砂礫層まで掘削している。埋土は上層が非常に固く締まった黒褐色砂泥、下層は暗オリーブ褐色泥砂である。底部の標高は29.9ｍである。遺物は京都Ⅵ期新段階の土器、12世紀の瓦類、硯・砥石、銭貨などが出土した。

土坑2893 調査区南西端で検出した。平面方形を呈する。南北2.9ｍ、東西3.2ｍ、深さ約1.8ｍを測る。基盤層上層の固く締まった褐色粘土を掘り抜き、砂礫層まで掘削している。埋土は上層が黒褐色シルト、下層がにぶい黄褐色シルトである。底部の標高は29.7ｍである。遺物は京都Ⅳ期からⅥ期の土器、12世紀の瓦類が出土した。

土坑2895（図版103） 調査区南西部で検出した。平面方形を呈する。南北4.0ｍ、東西4.5ｍ、深さ約1.3ｍを測る。基盤層上層の固く締まった褐色粘土を掘り抜き、砂礫層まで掘削している。埋土は上層が非常に固く締まった黒褐色砂泥、下層は暗オリーブ褐色泥砂である。底部の標高は30.2ｍである。遺物は京都Ⅵ期新段階の土器、12世紀の瓦類が出土した。

土坑3113 調査区東部で検出した。北側・南側・東側を新しい時代の遺構によって削平されているため、全形は不明である。南北0.7ｍ以上、東西2.2ｍ以上、深さ0.3ｍを測る。埋土は黒褐色砂

泥である。遺物は京都Ⅴ期の土器と、12世紀の瓦類が出土した。

土坑3182　調査区中央部で検出した。北側・南側が新しい時代の遺構によって削平されている。平面不整形。南北5.5ｍ以上、東西3.6ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は暗灰黄色砂泥である。遺物は京都Ⅳ期からⅤ期の土器、12世紀の瓦類が出土した。

土坑3468　調査区南西部で検出した。東側が新しい時代の遺構である建物3175に削平される。平面不整形で底面も一定しない。南北1.4ｍ、東西0.8ｍ以上、深さ0.2ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅴ期からⅥ期の土器、12世紀の瓦類が出土した。

土坑3471　調査区西部で検出した。北側が新しい時代の遺構によって削平されている。平面楕円形を呈する。南北0.6ｍ以上、東西1.0ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅴ期の土器、12世紀の瓦類が出土した。

柱穴767　調査区中央部で検出した。平面円形を呈する。直径0.3ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は暗灰黄色砂泥である。遺物は京都Ⅵ期の土器、12世紀の瓦類が出土した。

柱穴794　調査区中央部南側で検出した。平面楕円形を呈する。南北0.3ｍ、東西0.4ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は暗灰黄色砂泥である。遺物は京都Ⅵ期の土器と、12世紀の瓦類が出土した。

柱穴1017　調査区中央部南側で検出した。平面円形を呈する。直径0.2ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は暗灰黄色泥砂である。遺物は12世紀の瓦類が出土した。

柱穴2969　調査区北東部で検出した。平面円形を呈する。直径0.3ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は暗灰黄色シルトである。遺物は京都Ⅴ期からⅥ期の土器、12世紀の瓦類が出土した。

柱穴3224　調査区中央部で検出した。平面楕円形を呈する。長径0.4ｍ、短径0.3ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は砥石が出土した。

４）鎌倉時代後半から室町時代（図版８・９・105）

溝2250（図版106、図15）　調査区西部で検出した南北溝である。幅0.8ｍ、深さ0.4ｍを測る。X=－111,100から北に約２ｍ、南に約４ｍの範囲にわたって、溝底部の東西側面に約0.1～0.3ｍの間隔で並ぶ径0.1～0.2ｍの砂岩礫群を検出した。埋土は上層が暗灰黄色砂泥・灰黄褐色砂泥、下層が黄灰色シルト・灰黄褐色シルト・暗灰黄色シルトである。遺物は京都Ⅶ期の土器や、13～15世紀の瓦類が出土した。

溝2560（図15）　調査区東側で検出した東西溝である。九町南北中央ラインに並行する。幅0.5ｍ、深さ0.35ｍを測る。埋土は上層がにぶい黄褐色砂泥・灰黄褐色シルト～細砂、下層が暗褐色シルト～細砂である。遺物は京都Ⅸ期の土器が出土した。

塀2206（図版32・106）　調査区西端で検出した。幅約0.4～1.6ｍ、深さ0.2～0.3ｍの布掘掘形の内部に、0.7～1.0ｍ間隔で礎石を配する。主軸方位は北に対して東に約２°振れる。礎石は径0.2～0.4ｍ、厚さ0.1～0.2ｍの砂岩礫である。埋土は黒褐色シルト～細砂である。遺物は京都Ⅷ期の土器、瓦類が出土した。

柵730（図版35）　調査区南西部で検出した南北柵である。柱穴には地下式礎石が認められる。

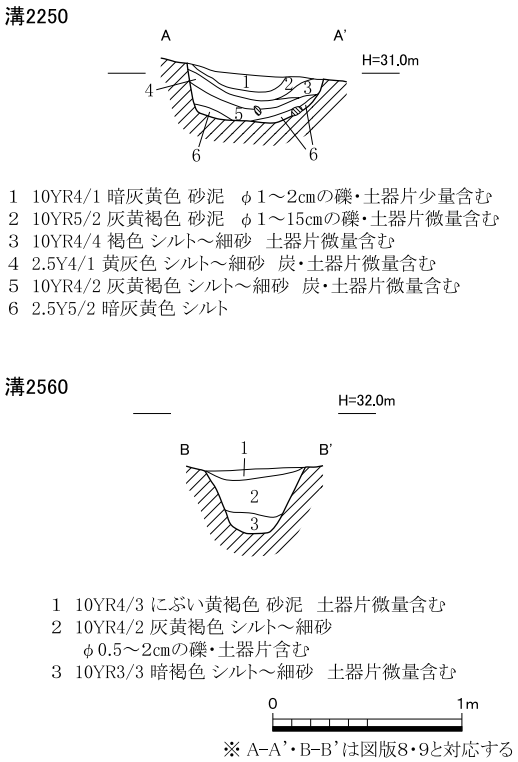


図15 溝2250・2560断面図（1：40）

柱間は0.8～1.2ｍである。柱穴の掘形はいずれも円形で、直径0.3～0.5ｍ、深さ0.2～0.4ｍを測る。埋土は黒褐色・暗褐色砂泥である。遺物は京都Ⅸ期の土器や13～15世紀の瓦類が出土した。

柵753（図版35） 調査区中央部南側で検出した東西柵である。柱穴には地下式礎石が認められる。柱間は2.0ｍである。掘形は楕円形もしくは隅丸方形で、直径0.2～0.5ｍ、深さ0.1～0.2ｍを測る。埋土は暗オリーブ褐色砂泥・黒褐色砂泥である。時期が判断できる遺物は出土していない。

柵847（図版33・106） 調査区東部で検出した南北柵である。柱間は1.5～1.6ｍである。柱穴の掘形は隅丸方形を呈し、遺存状態の良いもので直径0.3～0.4ｍ、深さ0.3～0.4ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥・暗オリーブ色砂泥・褐灰色砂泥である。遺物は13～15世紀の瓦類が出土した。北端の柱穴2693と、後述する柵3444南端の柱穴3310とが対応して門となる可能性がある。

柵2929（図版34・106） 調査区中央部で検出した東西柵である。柱穴には地下式礎石が認められる。柱間は0.8～2.0ｍである。掘形はいずれも円形で、直径0.3～0.6ｍ、深さ0.1～0.3ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。時期が判断できる遺物は出土していない。柵2941を削平している。

柵2941（図版34・106） 調査区中央部で検出した東西柵である。柱穴には地下式礎石が認められる。柱間は0.6～1.8ｍである。掘形はいずれも円形で、直径0.3～0.5ｍ、深さ0.2～0.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥・暗灰黄色砂泥である。遺物は京都Ⅸ期の土器が出土した。

柵3444（図版33） 調査区東部で検出した南北柵である。主軸方位はほぼ真北方向である。柱間は主に1.4～1.6ｍである。柱穴の掘形は隅丸方形もしくは円形を呈し、遺存状態の良いもので直径0.2～0.3ｍ、深さ0.1～0.2ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。時期が判断できる遺物は出土していない。

石室214（図版31・108） 調査区南東部で検出した。掘形は平面方形を呈する。南北約2.0ｍ、東西約1.7ｍ、深さ0.4ｍである。石室部は砂岩礫を方形に積み上げたもので、内法で一辺約1.1ｍ、深さ0.4ｍを測る。石の裏込め土は灰黄褐色シルト・褐灰色シルトである。遺物は京都Ⅴ期からⅨ期の土器細片や砥石などが出土した。

石室2720（図版31・108） 調査区東部で検出した。南側は江戸時代前期の土坑で削平されているため、全形は不明であるが、掘形の平面形は方形もしくは長方形を呈すると推測する。南北約0.8ｍ、東西約1.9ｍ、深さ0.6ｍである。石室部は砂岩礫を方形に積み上げたもので、内法で東西約1.1ｍ、深さ0.6ｍを測る。石の裏込め土は灰黄褐色砂泥である。遺物は京都Ⅸ期の土器細片や、13～

15世紀の瓦類が出土した。

井戸2026（図版29） 調査区中央部で検出した円形石組井戸である。掘形は平面円形を呈する。直径2.1ｍ、深さ2.8ｍである。石組の内径は約0.9ｍを測る。井戸底部には一辺0.9ｍの木枠を据える。底部の標高は28.1ｍである。石組の裏込め土はオリーブ褐色粗砂と暗褐色粗砂の互層である。遺物は京都Ⅶ期の土器が出土した。

井戸2562 調査区中央部で検出した。掘形は平面円形を呈する。直径約1.7ｍ、深さ2.1ｍである。井戸枠は確認できない。埋土上層はオリーブ褐色粗砂、下層は黄灰色粗砂である。底部の標高は28.5ｍである。遺物は京都Ⅶ期の土器や銭貨などが出土した。

井戸3140 調査区東部で検出した円形石組井戸である。掘形は平面円形を呈する。直径約1.7ｍ、深さ2.0ｍである。石組の内径は約0.8ｍを測る。水溜は確認できなかった。石組の裏込め土は上層が褐灰色粗砂、下層は黒褐色砂礫である。底部の標高は29.2ｍである。遺物は京都Ⅸ期の土器が出土した。

土坑261（図版14・15） 調査区中央部南端で検出した。南側は調査区外になる。南北1.3ｍ、東西1.0ｍの平面長方形を呈する。深さ1.0ｍを測る。埋土は礫混じりの黒褐色シルトである。遺物は京都Ⅷ期の土器が出土した。

土坑346 調査区中央部南側で検出した。東側は新しい時代の遺構によって削平されている。南北1.7ｍ、東西1.2ｍの平面長方形を呈する。深さ0.3ｍを測る。埋土は炭混じりの黒褐色泥砂である。遺物は京都Ⅷ期の土器が出土した。

土坑509 調査区中央部東側で検出した。南側は新しい時代の遺構によって削平されている。南北1.8ｍ、東西2.4ｍの平面長方形を呈する。深さ0.6ｍを測る。埋土は黒褐色泥砂である。遺物は京都Ⅷ期の土器が出土した。

土坑514（図版30・107） 調査区中央部で検出した。南北2.2ｍ、東西0.9ｍの平面長方形を呈する。深さ0.6ｍを測る。埋土中層のにぶい黄褐色砂泥には多量の灰が含まれていた。遺物は京都Ⅶ期新段階の土器が出土した。

土坑608 調査区東部で検出した。南北2.5ｍ、東西1.9ｍの平面長方形を呈する。深さ0.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は12世紀の瓦類が出土した。

土坑709 調査区中央部南端で検出した。南北0.5ｍ、東西1.2ｍの平面長方形を呈する。深さ0.4ｍを測る。埋土は暗褐色砂泥である。遺物は京都Ⅶ期の土器、13～15世紀の瓦類が出土した。

土坑2303 調査区西端で検出した。南西部が調査区外のため全形は不明であるが、不整形な平面隅丸長方形を呈する。南北4.1ｍ以上、東西3.2ｍ、深さ0.5mを測る。底面で土坑の長軸方向に延びる長さ２ｍ以上、幅1.0ｍ、深さ0.2ｍの掘り込みがある。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅶ期の土器や銭貨などが出土した。

土坑2448 調査区中央部東側で検出した。北側が旧校舎の基礎で削平されており全形は不明である。残存部位で南北0.4ｍ、東西1.1ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅷ期の土器や銭貨などが出土した。

土坑2546　調査区南西部で検出した。北側が新しい時代の遺構で削平されており全形は不明であるが、不整形な平面隅丸長方形を呈する。残存部位で南北1.4ｍ以上、東西1.3ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土は灰黄褐色砂泥である。遺物は京都Ⅷ期の土器が出土した。

土坑2576　調査区南西部で検出した。南側・西側が新しい時代の遺構で削平されており全形は不明であるが、不整形な平面隅丸長方形を呈する。残存部位で南北0.9ｍ以上、東西2.0ｍ以上、深さ0.3ｍを測る。埋土はオリーブ褐色シルトである。遺物は京都Ⅶ期の土器が出土した。

土坑2669　調査区中央部で検出した。南側は新しい時代の遺構によって削平されている。南北1.0ｍ以上、東西1.2ｍの平面隅丸方形を呈する。深さ0.2ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅶ期の土器が出土した。

土坑2745　調査区南西部で検出した。東側が新しい時代の遺構で削平されている。平面円形状を呈する。残存部位で南北1.1ｍ、東西0.6ｍ以上、深さ0.3ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅸ期の土器が出土した。

土坑2811（図版30・107）　調査区中央部で検出した。不整形な平面楕円形を呈する。南北5.4ｍ、東西2.9ｍ、深さ0.7ｍを測る。床面のレベルは一定せず、凹凸がある。埋土は黒褐色砂泥を主とし、上層に多量の灰が含まれていた。遺物は京都Ⅶ期新段階の土器、瓦類、砥石、銭貨などとともに、赤色粘土塊や動物遺存体が出土した〔付章５・６参照〕。

土坑2814　調査区中央部東側で検出した。南側が新しい時代の遺構で削平されている。平面不整楕円形を呈する。残存部位で南北2.4ｍ以上、東西2.3ｍ、深さ0.6ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅷ期の土器、瓦類が出土した。

土坑2841　調査区中央部西側で検出した。東側が新しい時代の遺構で削平されている。平面不整楕円形を呈する。残存部位で南北1.0ｍ、東西1.7ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土は灰を多量に含む黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅷ期の土器が出土した。

土坑2951　調査区中央部東側で検出した。不整形な平面方形を呈する。南北1.3ｍ、東西1.5ｍ、深さ0.9ｍを測る。埋土は黒褐色シルトである。遺物は京都Ⅴ期からⅧ期の土器や銭貨などが出土した。

土坑3066　調査区中央部東側で検出した。土坑2951に南西隅を削平されている。残存部位で南北2.0ｍ以上、東西1.0ｍ以上、深さ0.7ｍを測る。埋土は　黒褐色シルトである。遺物は京都Ⅴ期からⅦ期の土器や砥石などが出土した。

土坑3090　調査区南西部で検出した。南北1.3ｍ、東西0.9ｍ、深さ約0.6ｍを測る。埋土は上層が暗灰黄色砂泥、下層が黒褐色砂泥である。建物3175・溝3061・溝3091を削平する。遺物は京都Ⅷ期の土器が出土した。

柱穴332　調査区中央部南側で検出した。西側が新しい時代の遺構で削平されている。南北0.5ｍ、東西0.3ｍ以上、深さ0.3ｍを測る。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。

柱穴2763　調査区西部で検出した。平面円形を呈する。径0.2ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は12世紀の瓦が出土した。

建物3175（図版31・108） 調査区南西部で検出した。内部に礎石を配する方形周溝状の布掘基礎を持つ。一辺約4.5ｍ、布掘掘形は幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1～0.2ｍを測る。礎石は径0.1～0.2ｍ、厚さ0.1ｍ程度の砂岩礫である。礎石の間隔は0.2～0.4ｍである。布掘掘形からは時期が判断できる遺物は出土していないが、鎌倉時代前半の溝3061を削平し、室町時代前半の土坑3090によって削平されている。

５）安土桃山時代から江戸時代初頭（図版10・11・105）

土坑群Ａ 調査区北西部で検出した。複数の土坑が集積して形成されている。規模は南北約10ｍ、東西約10ｍ、深さ約0.5ｍを測る。基盤層上層の固く締まった褐色粘土を掘り抜き、下層の砂礫層直上まで掘削している。底面は標高30.7～30.9ｍを測る。埋土は軟弱な黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅴ期からⅪ期の土器が出土した。

土坑群Ｂ（図版37） 調査区西部で検出した。土坑2506・2508・2512・2838・3092など複数の土坑が集積して形成されている。規模は南北約14ｍ、東西約13ｍ、深さ0.4～0.5ｍを測る。基盤層上層の固く締まった褐色粘土を掘り抜き、下層の砂礫層直上まで掘削している。底面は標高31.0～30.8ｍを測る。

土坑2506（図版37） 土坑群Ｂ中央部で検出した。当初、南北3.5ｍ、東西9.0ｍほどの平面不整長方形の広がりをもつ土坑として掘削していたが、掘り進める過程で６基ほどの土坑集積であることが判明した。深さは0.5ｍを測る。埋土は上層が焼土・瓦混じりの黒褐色砂泥（13～15層・21層）、下層が砂礫を含む黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅷ期からⅪ期の土器や硯・砥石、銭貨などとともに、多量の焼けた瓦が出土した。出土した瓦には、葺土が付着したものを多数確認した。

土坑2508 土坑群Ｂ東部で検出した。平面方形を呈する。南北2.1ｍ、東西1.8ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。時期が判断できる遺物は出土していない。

土坑2512 土坑群Ｂ北部で検出した。平面不整楕円形を呈する。南北2.4ｍ、東西1.6ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅺ期の土器が出土した。

土坑2525 土坑群Ｂ中央部南側で検出した。平面長方形を呈する。南北1.5ｍ、東西3.1ｍ以上、深さ0.4ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅸ期からＸ期の土器が出土した。

土坑2526 土坑群Ｂ中央部南側で検出した。平面不整楕円形を呈する。南北1.0ｍ、東西0.9ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ｘ期の土器が出土した。

土坑2527 土坑群Ｂ中央部南側で検出した。平面長方形を呈する。南北1.7ｍ、東西1.8ｍ以上、深さ0.4ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅸ期の土器が出土した。

土坑2529 土坑群Ｂ南西部で検出した。平面円形を呈する。南北0.8ｍ、東西0.9ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は暗褐色砂泥である。遺物は京都Ⅷ期からⅨ期の土器が出土した。

土坑2826 土坑群Ｂ中央部北側で検出した。南北1.6ｍ以上、東西3.1ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅺ期の土器が出土した。

土坑2838（図版37） 土坑群Ｂ西部で検出した。平面不整円形を呈する。南北1.7ｍ以上、東西

5.3ｍ以上、深さ0.7ｍを測る。埋土は上層がオリーブ褐色砂泥、下層が黒褐色砂泥を主体とする。遺物は出土していない。

土坑2840　土坑群Ｂ西部で検出した。平面不整長方形を呈する。南北3.1ｍ以上、東西2.6ｍ以上、深さ0.7ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅸ期からＸ期の土器や瓦が出土した。

土坑2844　土坑群Ｂ東部で検出した。平面不整円形を呈する。南北1.6ｍ以上、東西1.6ｍ以上、深さ0.2ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅸ期の土器や瓦が出土した。

土坑3092　土坑群Ｂ北西部で検出した。平面不整長方形を呈する。南北2.1ｍ、東西1.3ｍ、深さ0.7ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。時期を判断できる遺物は出土していない。

土坑群Ｃ（図版37）　調査区中央部北側で検出した。複数の土坑が集積して形成されている。規模は南北約６ｍ、東西約13ｍ、深さ0.5～0.7ｍを測る。基盤層上層の固く締まった褐色粘土を掘り抜き、下層の砂礫層直上まで掘削している。底面は標高31.0～30.8ｍを測る。土坑群中央部の灰黄褐色砂泥（37・39層）は、多量の0.2ｍ大の礫を含む。遺物は京都Ⅳ期からⅪ期の土器や砥石、銭貨などが出土した。

土坑2498　土坑群Ｃ南側で検出した。南北0.7ｍ以上、東西1.7ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ｘ期の土器が出土した。

土坑2567（図版37）土坑群Ｃ中央部で検出した。南北4.1ｍ、東西5.9ｍ、深さ0.6ｍを測る。埋土は礫混じりの灰黄褐色砂泥と黄灰色シルトである。遺物は京都Ⅸ期からＸ期の土器が出土した。

土坑2730（図版37）土坑群Ｃ東部で検出した。平面円形を呈する。南北1.4ｍ、東西1.8ｍ以上、深さ1.2ｍを測る。埋土は上層が灰黄褐色砂泥、下層が暗褐色砂泥である。遺物は出土していない。

土坑2731（図版37）土坑群Ｃ西部で検出した。埋土は上層が礫混じりの褐灰色砂泥とにぶい黄褐色シルト、下層が黒褐色砂泥である。南北3.3ｍ、東西2.9ｍ以上、深さ0.6ｍを測る。遺物は京都Ⅷ期からＸ期の土器が出土した。

土坑群Ｄ　調査区中央部で検出した。複数の土坑が集積して形成されている。規模は南北約６ｍ、東西約10ｍ、深さ約0.7ｍを測る。基盤層上層の固く締まった褐色粘土を掘り抜き、下層の砂礫層直上まで掘削している。底面は標高31.0～30.9ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥を主とし、一部に基盤層由来と考えられる褐色粘土ブロックを含む。遺物は京都Ⅷ期からⅪ期の土器や硯・砥石が出土した。

土坑283　土坑群Ｄ南側で検出した。南北1.3ｍ、東西2.1ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅺ期の土器が出土した。

土坑2549　土坑群Ｄ東部で検出した。平面不整形。南北1.1ｍ以上、東西1.1ｍ以上、深さ0.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ｘ期の土器や瓦が出土した。

土坑2551　土坑群Ｄ東側で検出した。南北1.8ｍ以上、東西0.6ｍ以上、深さ0.6ｍを測る。埋土は上層が黒褐色砂泥、下層が暗灰黄色砂泥である。遺物は京都Ｘ期の土器が出土した。

土坑群Ｅ（図版14・15）　調査区中央部南側で検出した。土坑315など複数の土坑が集積して形成されている。規模は南北約９ｍ、東西約10ｍ、深さ約0.9ｍを測る。基盤層上層の固く締まった

褐色粘土を掘り抜き、下層の砂礫層直上まで掘削している。底面は標高31.0～30.6ｍを測る。埋土は軟弱な黒褐色砂泥を主体とする。遺物は京都Ⅴ期からⅪ期の土器や砥石、銭貨などが出土した。

土坑315　土坑群Ｅ中央部で検出した。東側が新しい時代の遺構によって削平されている。平面不整方形を呈する。南北7.7ｍ、東西7.1ｍ以上、深さ約0.6ｍを測る。埋土は炭を含む黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅺ期の土器が出土した。

土坑316　土坑群Ｅ北側で検出した。平面長方形を呈する。南北1.9ｍ、東西1.0ｍ以上、深さ0.4ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅺ期の土器が出土した。

土坑319　土坑Ｅ南部で検出した。平面不整長方形を呈する。南北1.8ｍ、東西1.3ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は黒褐色泥砂である。遺物は京都Ⅸ期の土器や銭貨が出土した。

土坑589　土坑群Ｅ南側で検出した。平面不整円形形を呈する。南北1.0ｍ、東西0.8ｍ、深さ0.8ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅷ期からⅨ期の土器が出土した。

土坑群Ｆ　調査区東部で検出した。土坑2748など複数の土坑が集積して形成されている。規模は南北約５ｍ、東西約９ｍ、深さ約0.5～0.9ｍを測る。基盤層上層の固く締まった褐色粘土や流路1132上面を覆う黄灰色シルトを掘削している。底面は標高31.0～30.6ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥・オリーブ褐色砂泥である。遺物は京都Ⅴ期からⅪ期の土器が出土した。

土坑2748　土坑群Ｆ東部で検出した。平面不整楕円形を呈する。南北1.3ｍ、東西0.9ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅹ期の土器が出土した。

土坑群Ｇ（図版14・15）　調査区南東部で検出した。土坑591など複数の土坑が集積して形成されている。規模は南北約10ｍ、東西約13ｍ、深さ約1.4ｍを測る。基本的に基盤層上層の固く締まった褐色粘土を掘り抜き、下層の砂礫層直上まで掘削しているが、土坑群西側では流路1132上面を覆う灰オリーブ色シルトを掘削している。底面は標高31.0～29.7ｍを測る。埋土は軟弱な黒褐色砂泥を主とし、オリーブ褐色粘土ブロックが部分的に混入する。遺物は京都Ⅷ期からⅩ期の土器や銭貨などが出土した。

土坑555　土坑群Ｇ北部で検出した。平面不整円形を呈する。南北2.0ｍ、東西2.0ｍ、深さ1.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅸ期からⅩ期の土器や瓦が出土した。

土坑587　土坑群Ｇ西部で検出した。平面不整長方形を呈する。南北1.2ｍ以上、東西1.5ｍ、深さ0.6ｍを測る。埋土はオリーブ褐色シルト混じりの黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅸ期からⅩ期の土器や瓦が出土した。

土坑591（図版36・107）　土坑群Ｇ中央部南側で検出した。平面長方形を呈する。南北2.2ｍ、東西1.1ｍ、深さ約0.45ｍを測る。基盤層下層の砂礫層直上まで掘削している。底面は標高約29.9ｍである。土坑内からブロック状に切り出された粘土塊が出土した。粘土塊は小さいもので長さ0.4ｍ、幅0.15ｍ、高さ0.3ｍ、大きいものでは長さ0.7ｍ、幅0.35ｍ、高さ0.45ｍを測る。埋土は暗褐色砂泥である。遺物は小片であるが、京都Ⅸ期からⅩ期の土器が出土した。

土坑596　土坑群Ｇ中央部で検出した。平面不整形。南北1.8ｍ、東西2.2ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅸ期からⅩ期の土器や瓦が出土した。

土坑285　調査区南西部で検出した。平面長方形を呈する。南北1.1ｍ、東西3.4ｍ、深さ約0.6ｍを測る。埋土は上層が焼土・瓦を含む灰黄褐色泥砂、下層が黄灰色砂泥である。遺物は京都Ⅺ期の土器が出土した。

土坑379　調査区南西部で検出した。平面方形を呈する。南北1.9ｍ、東西1.6ｍ、深さ約0.5ｍを測る。埋土は上層が焼土・瓦を含む灰黄褐色泥砂、下層が黄灰色砂泥である。時代を判断できる遺物は出土していない。

土坑638（図版36・107）　調査区中央部南側で検出した。不整形な平面隅丸長方形を呈する。南北2.2ｍ、東西0.9ｍを測る。土坑の深さは約0.9ｍを測るが、底面から上に0.6ｍ程度礫を敷き詰め、深さ0.3ｍの地点で平坦な面を形成している。この平坦面の直上で、完形の土師器皿や釘が多数出土した。遺物は京都Ⅹ期古段階の土器、瓦類が出土した。

土坑2528　調査区南西部で検出した。平面円形を呈する。南北0.9ｍ、東西1.0ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は京都Ⅸ期の土器や銭貨が出土した。

６）江戸時代（図版12・13・109、表２・３）

建物2284（図版38・110）　調査区南西部で検出した。南北21ｍ以上、東西約７ｍの南北棟で、桁行14間以上×梁行２間の掘立柱建物である。柱間は南北1.4～1.7ｍ、東西3.3～3.7ｍである。柱穴は平面円形もしくは楕円形を呈し、一辺0.6ｍ、深さ0.5～0.7ｍを測る。建物中軸の柱穴（C－C'）は、相対的に規模が小さい。埋土は暗褐色シルト・黒褐色砂泥・暗灰黄色砂泥である。遺物は柱穴から17世紀後半の土器・陶磁器類や銭貨などが出土した。

溝441　調査区東部で検出した東西溝である。九町南北中央ラインに並行する。幅0.7ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は17世紀代の土器が出土した。

溝458（図版14・15）　調査区中央部南端で検出した南北溝である。南側は調査区外に延びる。幅1.5ｍ、深さ1.0ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は17世紀代の土器が出土した。

溝2094　調査区南西部で検出した東西溝である。九町南北中央ラインに並行する。幅0.7ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は暗オリーブ褐色砂泥である。時期を判断できる遺物は出土していない。

溝2572（図版41）　調査区東部で検出した東西溝である。九町南北中央ラインに並行する。幅1.5ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥にオリーブ褐色シルトを含む。遺物は17世紀代の土器・陶磁器類や硯が出土した。

溝2858（図版41）　調査区東部で検出した東西溝である。九町南北中央ラインに並行する。幅0.7ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は上層が褐灰色砂泥、下層が黒褐色砂泥である。遺物は17世紀代の土器・陶磁器類や、17世紀以降の瓦類、銭貨などが出土した。溝2572に南肩を削平されている。

井戸2027（図版39・111）　調査区中央部北側で検出した。掘形は平面円形を呈する。直径約1.1ｍ、深さ約0.9ｍである。井戸枠上部は平瓦と礫を積み、漆喰で固めている。井戸枠の内径は0.6ｍを測る。底部の標高は29.3ｍである。時期が判断できる遺物は出土していない。

井戸2034（図版39）　調査区東部北端で検出した円形石組井戸である。掘形は平面円形を呈す

る。直径約2.1ｍ、深さ2.5ｍである。石組の内径は約0.8ｍを測る。井戸底部に一辺0.75ｍの木枠が確認できる。底部の標高は28.8ｍである。石組の裏込め土は褐灰色シルトである。遺物は17世紀後半から18世紀前半の土器などが出土した。

井戸2035（図版39・111） 調査区東部北側で検出した円形石組井戸である。掘形は平面円形を呈する。直径約1.6ｍ、深さ約1.9ｍである。石組の内径は0.8ｍを測る。底部の標高は29.3ｍである。石組の裏込め土は黒褐色粗砂である。遺物は17世紀後半から18世紀前半の土器・陶磁器類と、17世紀以降の瓦類が出土した。

井戸2073（図版111） 調査区東部で検出した円形石組井戸である。掘形は平面不整円形を呈する。直径約2.2ｍ、深さ約2.2ｍである。石組の内径は0.8ｍを測る。底部の標高は29.6ｍである。石組の裏込め土は黒褐色粗砂である。遺物は17世紀後半から18世紀前半の土器・陶磁器類や17世紀以降の瓦類、硯などが出土した。

石室93 調査区南東部で検出した。現代の攪乱により、西辺部のみ残存する。残存部分で南北1.2ｍ、東西0.5ｍ、深さ0.4ｍを測る。石室部は砂岩礫を積み上げたもので、深さ0.4ｍを測る。石室部の裏込め土は黒褐色砂泥である。遺物は砥石と銭貨などが出土した。

石室2409（図版40・112） 調査区中央部で検出した。掘形は平面長方形を呈する。南北約2.3ｍ、東西約1.5ｍ、深さ約0.5ｍである。石室部は砂岩礫を方形に積み上げたもので、内法で南北約1.5ｍ、東西約0.6ｍ、深さ0.4ｍを測る。石室部の裏込め土は暗褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥である。遺物は銭貨が出土した。

埋甕137（図版40） 調査区南西部で検出した。掘形は平面円形を呈する。直径約0.7ｍ、深さ0.3ｍである。焼締陶器の甕底部が残存している。掘形埋土は黒褐色砂泥・褐灰色砂泥である。

埋甕2171（図版40） 調査区南西部で検出した。新しい時代の遺構が東側を削平している。掘形は平面不整円形を呈する。直径約0.6ｍ、深さ0.2ｍである。焼締陶器の甕底部が残存している。掘形埋土は黒褐色砂泥である。遺物は銭貨が出土した。

埋甕2232（図版40・112） 調査区南西部で検出した。新しい時代の遺構が北側を削平している。掘形は平面不整円形を呈する。直径約1.4ｍ、深さ0.9ｍである。焼締陶器の甕の底部が残存している。掘形埋土は黒褐色砂泥である。埋甕内埋土に石灰片が混じる。

土坑144 調査区中央部南側で検出した。平面方形を呈する。南北1.8ｍ、東西1.7ｍ、深さ0.7ｍを測る。埋土は炭混じりの黒褐色砂泥である。遺物は19世紀後半の陶磁器類や、17世紀以降の瓦類が出土した。

土坑179 調査区中央部南側で検出した。平面長方形を呈する。南北1.8ｍ、東西0.9ｍ以上、深さ0.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は18世紀初めの陶磁器類が出土した。

柵2283（図版41） 調査区中央部東側で検出した。主軸方位は北に対して西に約２° 振れる。柱穴には地下式礎石が認められる。柱間は2.0～2.4ｍである。掘形はいずれも円形で、直径0.3～0.5ｍ、深さ0.1～0.3ｍを測る。埋土は暗灰黄色シルト・黄褐色シルトである。時期が判断できる遺物は出土していない。

焼土・瓦処理土坑群（図版112、表２） 平面形は方形もしくは長方形を呈し、深さが1.3ｍ以上のものが主体をなす。埋土に焼土と瓦を多量に含む。１・２区では、土坑49・51・52・60・61・123・162・163・164・165・167・168・2174・2175が該当する。19世紀後半の陶磁器などが出土した。

（４）３区の遺構

１）弥生時代（図版42・113）

流路1132（図版45・113） 調査区南東部で検出した、北東から南西方向の流路の西肩である。検出長は2.3ｍ、幅0.26ｍ以上、東側は調査区外となる。検出面からの深さは約0.5ｍである。弥生土器が少量出土した。１・２区、昭和59年発掘調査で検出した流路の西肩の一部と考えられる。

２）鎌倉時代（図版42・113）

地下室1591（図版45・46・113） 調査区中央東端で検出した方形の地下室である。上部及び南西隅は後世の遺構により失われる。検出規模は東西1.5ｍ、南北1.9ｍ、東端は調査区外となる。検出面からの深さは0.26ｍである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底部壁付近で６基の柱穴を確認し、南側の２基では地下式礎石を確認した。埋土から京都Ⅵ期中段階の土器が出土した。

土坑1593 調査区北西部で検出した。検出規模は東西0.7ｍ、南北0.7ｍ、南側は後世の土坑により失われ、西側は調査区外となる。検出面からの深さは約0.12ｍである。埋土から京都Ⅵ期中段階の土器がまとまって出土した。

土坑1594（図版44） 調査区北西部で検出した。検出規模は東西１ｍ、南北0.45ｍ、東側は後世の土坑により失われ、北側は調査区外となる。検出面からの深さは約0.37ｍである。埋土から京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階の土器がまとまって出土した。

３）室町時代から江戸時代前半（図版43・114）

土坑1539 調査区中央部で検出した。検出規模は東西4.6ｍ、南北1.25ｍ、北・南端は後世の土坑により失われる。検出面からの深さは約0.2ｍである。この土坑の底面より、甕据付穴と思われる土坑1526・1528・1546・1547を検出した。いずれも埋土から焼締陶器甕の破片が出土した。このことから、大きく掘り下げた後に個々の据付穴が掘られたものと考えられる。京都Ｘ期の土器が出土した。

土坑1551 調査区中央部で検出した土坑である。検出規模は東西1.4ｍ、南北0.5ｍ、北・南端は後世の土坑により失われる。検出面からの深さは約0.5ｍである。埋土から焼締陶器甕の破片が出土した。埋甕の据付穴の可能性が考えられる。

土坑1552 調査区中央部で検出した。検出規模は東西0.8ｍ、南北0.65ｍ、北・南端は後世の土坑により失われる。検出面からの深さは約0.53ｍである。埋土から焼締陶器甕の破片が出土した。

埋甕の据付穴の可能性が考えられる。周辺には同様の土坑1535・1536・1555があり、いずれも焼締陶器甕の破片が一定量出土することから、埋甕の据付穴の可能性が考えられる。

土坑1572　調査区中央部で、土坑1539の底面より検出した。検出規模は東西2.4ｍ、南北1.1ｍ、北・南端は後世の土坑により失われる。検出面からの深さは約0.1ｍである。 埋土から焼締陶器甕の破片を含む京都Ⅶ期新段階の土器が出土した。

埋甕1531（図版47・114）　調査区中央西端で検出した。検出規模は東西0.68ｍ、南北0.85ｍ、検出面からの深さは約0.52ｍである。掘形の内側にさらに掘形があり、その中に甕が据えられていることから、大型の甕から小型の甕に据え直しが行われたものと考えられる。京都Ｘ期の土器が出土した。

井戸1595（図版47・114）調査区北部で検出した円形石組井戸である。掘形は径0.85ｍのややいびつな円形を呈し、井戸枠の石組との間にはほとんど隙間がない。石組の内径は約0.45ｍ、一辺が約0.25ｍの六角形に組まれる。検出面からの深さは約1.7ｍである。京都Ｘ期の土器が出土した。

礎石列1650（図版46・114）調査区南西部で検出した。検出規模は径0.3～0.4ｍ、検出面からの深さは約0.15～0.2ｍで、柱間は0.9～1.1ｍである。柱穴1569からは礎石は確認してないが、抜き取りされたものとみられ、また、近接する礎石1542・1544は作り替えの可能性が考えられる。

４）江戸時代後半（図版43・115）

江戸時代の遺構は、井戸（井戸1511・1549・1589）・土坑・ピットなどを検出したが、大半は江戸時代後半の大型土坑により削平される。

焼土・瓦処理土坑群（表２）　調査区南部、中央、北東部では、焼土・焼瓦を大量に含む焼土・瓦処理土坑を検出した。土坑1501・1502・1522・1523が該当する。これらは平面形が方形で、検出規模は東西1.3～4.5ｍ、南北2.4～3.3ｍ、検出面からの深さは0.7～1.27ｍである。壁は垂直もしくは壁を抉るように掘削されている土坑もある。掘削底面は地山の砂礫層でとまる。焼瓦と共に19世紀代の土器が出土した。火災処理土坑と考えられるが、壁を抉った状況がみられることから、粘土採掘後に火災処理土坑としたとも考えられる。

（５）４区の遺構

１）江戸時代（図版47・115）

焼土・瓦処理土坑群（表２）　埋土に焼土と瓦を多量に含む焼土・瓦処理土坑である。土坑3680・3681が該当する。いずれも全形は不明である。深さは約2.0ｍである。焼瓦と共に19世紀代の陶磁器類が出土した。

表２　江戸時代の土坑・柱穴観察表

遺構名	調査区	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	埋　土	備　考	時期
土坑261	1	不整形	1.3	1.1～	0.1	10YR2/1黒褐色砂泥		江戸時代前半
土坑530	1	長方形	1.7	1.4	0.6	2.5Y3/1黒褐色泥砂 5Y4/3暗オリーブ色シルト		江戸時代前半
土坑2012	2	円形	1.1	1.0	0.8	2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂		江戸時代前半
土坑2039	2	方形	1.8	1.8	0.3	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥　炭含む		江戸時代前半
土坑2041	2	円形	1.5	1.5	0.3	2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂		江戸時代前半
土坑2108	2	不整形	1.3	0.9	0.2	10YR3/2黒褐色砂泥		江戸時代前半
土坑2121	2	方形	1.0～	1.0	0.5	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥		江戸時代前半
土坑2127	2	長方形	3.1	2.1	0.8	2.5Y3/2黒褐色砂泥		江戸時代前半
土坑2173	2	方形	1.1	1.0	0.8	2.5Y3/2黒褐色砂泥		江戸時代前半
土坑2201	2	方形	5.3	0.5～	0.5	2.5Y3/2黒褐色砂泥		江戸時代前半
土坑2381	2	長方形	1.4	0.6～	0.1	10YR3/2黒褐色砂泥		江戸時代前半
土坑2393	2	楕円形	0.7	0.5	0.3	10YR3/2黒褐色砂泥		江戸時代前半
土坑2452	2	方形	1.1	1.1	0.8	10YR3/2黒褐色砂泥　礫多量含む		江戸時代前半
土坑2568	2	楕円形	2.6	1.8	0.5	2.5Y3/1黒褐色砂泥		江戸時代前半
柱穴2398	2	円形	0.2	0.2	0.3	10YR3/2黒褐色砂泥		江戸時代前半
土坑44	1	円形	1.2	1.1	0.6	10YR4/4褐色シルト　礫含む		江戸時代後半
土坑49	1	方形	4.7	4.1	1.5	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　焼土含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑51	1	方形？	4.6	4.3	1.3	5YR4/6赤褐色砂泥　焼土・炭含む	焼土・瓦処理土坑 複数土坑が集積か	江戸時代後半
土坑52	1	方形	3.6	3.1	1.3	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　焼土含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑58	1	長方形	2.8	1.1	0.3	10YR3/2黒褐色砂泥　漆喰含む		江戸時代後半
土坑60	1	方形	1.8	1.7	1.3	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥　焼土含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑61	1	方形？	2.8	2.7	1.3	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　焼土含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑67	1	方形	2.8	1.9～	0.9	10YR3/1黒褐色砂泥 2.5Y3/2黒褐色砂泥		江戸時代後半
土坑100	1・2	長方形	2.6	1.6	0.5	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		江戸時代後半
土坑106	1・2	方形	1.3	1.1	1.1	10YR3/3暗褐色砂泥		江戸時代後半
土坑123	1	不定形	4.0	3.2	1.2	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　焼土含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑133	1	長方形	1.8	0.9	0.2	2.5Y3/2黒褐色シルト 暗灰黄色粗砂ブロックを含む		江戸時代後半
土坑144	1	方形	1.8	1.7	0.7	10YR3/2黒褐色砂泥　炭多量含む		江戸時代後半
土坑154	1	長方形	0.8～	0.7～	0.7	10YR3/2黒褐色細砂　礫多量含む		江戸時代後半
土坑162	1・2	長方形？	6.0	2.5	1.3	5YR4/6赤褐色砂泥　焼土・炭含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半

遺構名	調査区	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	埋　土	備　考	時期
土坑163	1・2	長方形	6.1	2.2	1.8	5YR4/6赤褐色砂泥　焼土・炭含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑164	1・2	方形	4.2	3.4	1.3	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　焼土含む	焼土・瓦処理土坑 複数土坑が集積か	江戸時代後半
土坑165	1	長方形	2.3	1.8	1.3	10YR3/4黒褐色砂泥　焼土含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑167	1・2	方形	3.5	3.3	1.0	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　焼土含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑168	1	長方形	3.0	2.5	0.3	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　焼土含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑179	1	長方形	1.8	0.9～	0.5	10YR3/1黒褐色砂泥		江戸時代後半
土坑1501	3	方形？	2.6～	0.5～	0.6	5YR4/6赤褐色砂泥　焼土・炭含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑1502	3	方形？	2.3～	1.3～	0.7	5YR4/6赤褐色砂泥　焼土・炭含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑1522	3	方形？	4.5～	2.9～	1.1	5YR4/6赤褐色砂泥　焼土・炭含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑1523	3	長方形	3.9	3.2	1.3	5YR4/6赤褐色砂泥　焼土・炭含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑2015	2	長方形	2.8	1.3	0.2	2.5Y3/2黒褐色砂泥		江戸時代後半
土坑2056	2	方形	1.5	1.4	1.1	2.5Y3/2黒褐色砂泥		江戸時代後半
土坑2062	2	楕円形	2.0	1.5	0.4	2.5Y3/2黒褐色泥砂		江戸時代後半
土坑2063	2	長方形	3.7	1.7	1.0	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		江戸時代後半
土坑2075	2	円形	2.1	0.7～	0.2	2.5Y3/2黒褐色砂泥		江戸時代後半
土坑2080	2	円形	1.1	1.0	0.2	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥		江戸時代後半
土坑2125	2	楕円形	1.7	1.0	0.8	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥		江戸時代後半
土坑2145	2	長方形	1.9～	1.2	0.7	2.5Y3/2黒褐色砂泥		江戸時代後半
土坑2174	2	方形？	3.5	1.9～	1.3	10YR3/4黒褐色砂泥　焼土含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑2175	2	方形？	3.7	1.8～	1.4	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 10YR3/2黒褐色砂泥　焼土含む		江戸時代後半
土坑2233	2	方形	1.4	1.1	0.3	10YR3/2黒褐色砂泥		江戸時代後半
土坑2241	2	方形	1.1	0.6～	0.1	2.5Y3/2黒褐色砂泥		江戸時代後半
土坑2242	2	楕円形	0.8	0.6	0.1	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥		江戸時代後半
土坑2352	2	長方形	6.4	2.4	1.4	5YR4/6赤褐色砂泥　焼土・炭含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑2382	2	円形	0.9	0.7～	0.2	2.5Y3/1黒褐色泥砂		江戸時代後半
土坑2383	2	長方形	1.2～	1.0	1.2	2.5Y3/1黒褐色砂泥		江戸時代後半
土坑3680	4	不明	2.7～	2.0～	2.0	10YR3/4黒褐色砂泥　焼土含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
土坑3681	4	不明	1.5	1.5	2.0	10YR3/4黒褐色砂泥　焼土含む	焼土・瓦処理土坑	江戸時代後半
柱穴2135	2	円形	0.6	0.3～	0.2	2.5Y3/1黒褐色砂泥		江戸時代後半
柱穴2156	2	円形	0.4	0.4	0.2	2.5Y3/1黒褐色砂泥		江戸時代後半

表３　江戸時代の井戸観察表

遺構名	調査区	掘形				井戸枠		水溜		備考	時期
		平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	構造	内径(m)	構造	内径(m)		
井戸68	1	円形	3.0～	2.3～	2.3	円形石組	0.5～	－	－		江戸時代前半
井戸341	1	円形	1.6	1.3～	2.5	円形石組	0.7	－	－		江戸時代前半
井戸593	1	円形	1.6	1.3	2.7	円形石組	0.4	－	－		江戸時代前半
井戸2028	2	円形	2.3	2.1	2.4	抜き取り？	－	曲物？	1.0		江戸時代前半
井戸2034	2	円形	2.3	2.1	2.5	円形石組	0.8	－	－		江戸時代前半
井戸2035	2	円形	1.6	1.6	1.9	円形石組	0.8	－	－		江戸時代前半
井戸21	1	円形	2.0	2.0	2.3	円形石組	1.0	－	－		江戸時代後半～
井戸71	1	円形	1.5	1.4	1.8	円形石組	0.8	－	－	モルタル使用	江戸時代後半～
井戸343	1	円形	2.2	2.1	2.3	切石組	1.4	－	－	モルタル使用 未完掘	江戸時代後半～
井戸1511	3	円形	1.6	0.8～	1.5	円形漆喰組	0.8	－	－	未完掘	江戸時代後半～
井戸1589	3	円形	1.3	1.2	4.5	円形漆喰組	－	－	－		江戸時代後半～
井戸2002	2	円形	1.3	1.3	1.0～	円形漆喰組	0.9	－	－	未完掘	江戸時代後半～
井戸2004	2	円形	1.8	1.8	1.3～	抜き取り？	－	－	－	未完掘	江戸時代後半～
井戸2005	2	円形	1.5	1.4	0.8～	円形漆喰組	0.8	－	－	未完掘	江戸時代後半～
井戸2007	2	円形	1.5	1.4	0.8～	円形漆喰組	0.9	－	－	未完掘	江戸時代後半～
井戸2013	2	円形	1.9	1.8	2.5	抜き取り？	－	－	－	未完掘	江戸時代後半～
井戸2017	2	円形	1.8	1.7	1.5	円形石組	0.9	－	－		江戸時代後半～
井戸2027	2	円形	1.1	1.1	0.9	円形瓦・石組	0.6	－	－	漆喰使用	江戸時代後半～
井戸2029	2	円形	2.0	1.2～	1.4	抜き取り？	－	－	－	埋土に漆喰混 未完掘	江戸時代後半～
井戸2030	2	円形	1.3	0.6～	1.4	抜き取り？	－	－	－	埋土に漆喰混 未完掘	江戸時代後半～
井戸2073	2	円形	2.2	2.0	2.2	円形石組	0.8	－	－		江戸時代後半～
井戸2074	2	円形	1.6	1.5	1.5	抜き取り？	－	－	－	未完掘	江戸時代後半～
井戸2158	2	円形	1.7	1.5	0.8	抜き取り？	－	－	－	未完掘	江戸時代後半～
井戸2227	2	円形	1.5	1.3	1.4	抜き取り？	－	－	－	未完掘	江戸時代後半～
井戸2372	2	円形	1.1	1.1	1.6	抜き取り？	－	－	－	未完掘	江戸時代後半～
井戸2180	2	円形	1.5	1.4	1.3	抜き取り？	－	－	－	未完掘	江戸時代
井戸2182	2	円形	1.4	1.4	1.6	抜き取り？	－	－	－	未完掘	江戸時代
井戸2183	2	円形	1.7	1.7	1.4	抜き取り？	－	－	－	未完掘	江戸時代
井戸2287	2	円形	2.1	1.9	1.4	抜き取り？	－	－	－	未完掘	江戸時代
井戸1549	3	円形	1.3	1.2	4.6	－	－	－	－		江戸時代

4．遺　　物

（1）遺物の概要

出土遺物は整理コンテナに887箱出土した。出土遺物には土器・陶磁器、瓦類、石器・石製品、金属製品、木製品、動植物遺存体[31)]などがある。出土遺物のうち土器・陶磁器、瓦類が９割強を占める。次いで石器・石製品の出土量が多いものの、残りの木製品、金属製品、動植物遺体を合計しても１割に満たない。時代別の出土量では、弥生時代が３割、平安時代前期から中期の遺物は１割未満、平安時代後期から鎌倉時代の遺物が１割強、室町時代と安土桃山時代の遺物が２割弱、江戸時代が３割程度を占める。各時代の遺物は可能な限り接合・図化に努めたが、報告できなかったものも多数ある。調査では、新しい時代の遺構埋土や整地層に、より古い時代の遺物が混入する状況がみられた。

弥生時代　土器、土製品、石器、木製品、銭貨、植物遺存体がある。前期末から中期前半の遺物の大部分が流路1132から出土した。竪穴建物や土坑から出土した遺物は少ない。土器は壷・甕・鉢・高杯・蓋がある。土製品はミニチュア土器・土製円盤がある。石器は磨製石戈・磨製石剣・打

表４　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
弥生時代	弥生土器、土製品、石器、木製品、銭貨		弥生土器335点、土製品11点、石器116点、木製品４点、銭貨１点		
平安時代前期～中期	土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、銭貨		土師器38点、黒色土器７点、瓦器１点、須恵器16点、灰釉陶器７点、緑釉陶器13点、白色土器１点、輸入陶磁器６点、瓦類10点、木製品２点、銭貨３点		
平安時代後期～鎌倉時代前半	土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、灰釉系陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨		土師器97点、瓦器10点、須恵器３点、焼締陶器１点、灰釉系陶器２点、白色土器２点、輸入陶磁器13点、瓦類21点、銭貨６点		
鎌倉時代後半～室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、銭貨		土師器73点、瓦器９点、須恵器１点、焼締陶器１点、施釉陶器３点、輸入陶磁器２点、瓦類15点、石製品３点、銭貨１点		
安土桃山時代～江戸時代初頭	土師器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、鉄製品		土師器50点、須恵器１点、焼締陶器２点、施釉陶器１点、輸入陶磁器１点、瓦類１点、石製品６点、鉄製品３点		
江戸時代	土師器、瓦質土器、瓦器、焼締陶器、施釉陶磁器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、銭貨		土師器13点、瓦質土器１点、瓦器２点、焼締陶器２点、施釉陶磁器27点、輸入陶磁器３点、瓦類13点、石製品２点、銭貨１点		
合　計		997箱	966点（86箱）	171箱	740箱

※コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より110箱多くなっている。

製石鏃・磨製石鏃・磨製石包丁・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・磨製両刃石斧・敲石・砥石・石鋸・石錐・打製石器類・玉類などがある。石器は成品のほか、未成品や製作時の剥片、原石などがある。木製品は広鍬の未成品などがある。植物遺存体はイネやアサなどの栽培種が流路堆積土から出土した。弥生時代中期後葉の方形周溝墓3543からは、壷・水差・甕・高杯のほか、打製石鏃・敲石が出土した。中世の整地層から貨泉が出土した。

平安時代　土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・白色土器・輸入陶磁器、瓦類、木製品、動物遺存体などがある。井戸3440からは９世紀前半頃の土器類とともに、「政所」と墨書した緑釉陶器が出土した。瓦類はほとんどが鎌倉時代以後の遺構や攪乱から出土した。平安時代後期のものが中心を占め、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。木製品は漆器椀が井戸3191から出土した。

鎌倉時代　土師器・瓦器・須恵器・灰釉系陶器・白色土器・焼締陶器・輸入陶磁器、瓦類、動物遺存体などがある。

室町時代　土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器、瓦類、石製品、銭貨、動物遺存体などがある。瓦類は、安土桃山時代の土坑群Ｂから多数出土した。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。多くは二次焼成を受けており、葺土が付着したものも確認できる。土坑2811からは赤色粘土塊や、クロダイ属・イシダイ属などの遺存体が出土した〔付章５・６参照〕。クロダイ属・イシダイ属の遺存体は中世遺構からの新出魚種である。

安土桃山時代　土師器・須恵器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器、瓦類、石製品、鉄製品、動物遺存体などがある。土坑591からは採取されず切り取られたままの粘土塊を確認した。

江戸時代　土師器・瓦質土器・瓦器・焼締陶器・施釉陶磁器・磁器・輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品、銭貨、動物遺存体などがある。瓦類は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦がある。遺物は焼土・瓦処理土坑群からまとまって出土した。焼土・瓦処理土坑群から出土した遺物は19世紀代のものが多い。

（２）土器・土製品（付表１・２）

１）弥生時代

製作手法の系統

本報告では、以下の分類に沿って記述した[32)]。本文中、基本的に施文工具の「状工具」は省略した。

遠賀川系土器：前期遠賀川式土器に連なる特徴を持つもの。条線が浅く間隔が狭いハケ状工具やナデで調整する。文様はヘラ状工具で施文する。

櫛描文系土器：遠賀川系土器と同様に、条線が浅く間隔が狭いハケ状工具やナデによる調整が主体をなす。文様は櫛状工具で施文する。

条痕文系土器：突帯文系土器に系譜を持ち、貝殻（二枚貝）もしくは条線が深い櫛状工具によって器面調整するもの。

ハケ条痕系土器：器体を条線が浅く間隔が広い（５～６本以下/㎝）粗いハケもしくは櫛状工具

で調整するもの。外面を縦方向、口縁部内面を横方向に調整するものを典型とする。

凹線文系土器：条線が浅く間隔が狭いハケ状工具やナデによる調整の他、タタキやヘラ状工具による削りも認められる。文様は凹線文や、ハケ状工具による刺突文などがある。

形式

壷形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器、蓋形土器、内傾口縁土器・厚口鉢、ミニチュア土器、土製円盤がある。本報告では、以下の分類に沿って記述する[33]。本文中は「形土器」を省略した。

ⅰ）壷形土器　口縁部・頸部と体部形態で分類した。

口縁部・頸部形態

〔広口壷〕

広口壷Ａ：長頸気味の頸部と、開く口縁部を持つもの。

広口壷Ｂ：短頸気味の頸部と、開く口縁部を持つもの。

広口壷Ｃ：短い口縁部を持つもの。

〔直口壷〕　筒状の細い口頸部を持つ壷。

直口壷Ａ：上に向かって緩やかに開く口縁部を持つもの。

直口壷Ｂ：太く短い頸部から内湾気味に外傾した口縁部を持つもの。

直口壷Ｃ：水差形土器。胴の張った器体に筒状の口頸部をつけ、肩部に横位の半環状把手を備える。

〔細頸壷〕　頸部が細く締まる壷。今回の調査では受口状の口縁部を持つものが出土した。

〔無頸壷〕　壷の器体で口頸部を持たないもの。

無頸壷Ａ：単純に内湾した口縁部を持つもの。

無頸壷Ｂ：内傾した肩部と、短い口縁部を持つもの[34]。

体部形態

形態ａ：器高と比べ体部最大径が大きく扁平気味で、丸みを帯びた器体を持つもの[35]。

形態ｂ：器高と比べ体部最大径が小さく、丸みを帯びた器体を持つもの[36]。

形態ｃ：肩部や体部下位の丸みを失い、体部最大径の位置が比較的明瞭な器体を持つもの[37]。

形態ｄ：体部最大径が上方に位置することによって、肩部が張った器体を持つもの。

ⅱ）甕形土器　口縁部が外反する倒鐘形の土器。頸部・体部形態によって分類した。

甕Ａ：体部の張りが小さいもの。

甕Ｂ：体部の張りが大きいもの。

甕Ｃ：体部の張りが大きく、頸部が明瞭に屈曲するもの。

ⅲ）鉢形土器　平底と台付の両者があるが、ここでは一括して扱った。

鉢Ａ：直口の口縁部を持つもの。

鉢Ｂ：短く外反する口縁部を持つもの。

鉢Ｃ：瘤状把手を持つもの。

鉢Ｄ：底部に穿孔を持つもの。

ⅳ）高杯形土器　鉢に脚台を付加するものを一括した。

ⅴ）**蓋形土器**　壷用蓋と甕用蓋がある。

〔壷用蓋〕

蓋Ａ：円盤状を呈し、摘みを持たないもの。

蓋Ｂ：円盤状を呈し、摘みを持つもの。

蓋Ｃ：笠形を呈し、双頭の摘みを持つもの。

〔甕用蓋〕

蓋Ａ：笠形を呈し、外反して口縁部に至るもの。高台状に仕上げた把手がつく。

蓋Ｂ：笠形を呈し、内湾して口縁部に至るもの。高台状に仕上げた把手がつく。

ⅵ）**内傾口縁土器・厚口鉢**　弥生時代前期末から中期前葉に東海地方から搬入された、口縁部が内折もしくは内傾する丸底の土器。条痕文を持つものと持たないものがある。

内傾口縁土器Ａ：体部最大径から緩やかに内傾しながら口縁部に至るもの。ナデ調整を施す[38)]。

内傾口縁土器Ｂ：体部最大径で屈折し直線的に口縁部に至るもの。器面調整は貝殻条痕である[39)]。

厚口鉢：内傾口縁土器Ｂより体部最大径から口縁部の高さが低くなり、扁平な器体を持つもの[40)]。

ⅶ）**ミニチュア土器**　容器状を呈する10㎝以下の土器を一括した。

ⅷ）**土製円盤**　土器片の周縁部を研磨して、直径３～５㎝程度の円盤状に加工した土製品。

竪穴建物1055出土土器（図版48・116　１～５）　壷と甕がある。ヘラ描沈線文を施す遠賀川系土器が主体を占める。

〔壷〕遠賀川系（２・３）がある。８条以上のヘラ描沈線文を施す。１は底部。

〔甕〕遠賀川系の甕Ａ（４）がある。体部にヘラ描沈線文４条を施す。５は底部である。

竪穴建物1206出土土器（図版48　６～８）　壷・甕がある。いずれも系統不明である。

〔壷〕６・７は広口壷の口縁部である。７はヘラ描沈線を１条施した後、上下から指で押圧を加える。

〔甕〕８は底部である。底部厚は約１㎝とやや薄手である。

竪穴建物2222出土土器（図版48・116　９～14）　壷・甕がある。遠賀川系・櫛描文系土器が混在する。

〔壷〕遠賀川系（10・11）と櫛描文系（12・13）がある。

〔甕〕遠賀川系の甕Ｂ（14）がある。体部にヘラ描沈線文３条を施す。９は底部である。

竪穴建物3544出土土器（図版48・116　15～17）　壷・内傾口縁土器がある。遠賀川系土器が主体を占める。東海地方の土器がある。

〔壷〕遠賀川系の壷（15・16）がある。15は広口壷の口縁部である。口縁端面にヘラ描きの沈線文と刻目を加える。頸部にヘラ描沈線文を３条以上施す。16は頸部である。３条以上の貼付突帯を施す。

〔内傾口縁土器〕内傾口縁土器Ｂ（17）がある。器面調整は貝殻条痕。

竪穴建物3576出土土器（図版48　18～20）　壷がある。櫛描文系土器が確認できる。

〔壷〕櫛描文（19・20）がある。系統不明の18は刻目を施す貼付突帯を１条以上巡らす。

竪穴建物3579出土土器（図版48・116　21・22）　壷がある。櫛描文系土器が主体を占める。

〔壷〕広口壷Ａ・Ｂがある。22は広口壷Ａで櫛描文系である。口縁端面にヘラ描沈線文１条を施し、端部を上下から指で押圧する。頸部から体部上位にかけて櫛描直線文５帯以上を施す。頸部は、口縁部から体部にかけて明瞭な屈曲点を持たない。21は広口壷Ｂで櫛描文系である。口縁端面にヘラ描きの沈線文と刻目を加える。頸部に櫛描直線文を施す。

竪穴建物3581出土土器（図版48・116　23～27）　壷・甕がある。遠賀川系・櫛描文系・ハケ条痕系土器が認められる。

〔壷〕遠賀川系（24）と櫛描文系（25・26）がある。23は底部である。

〔甕〕ハケ条痕系（27）がある。従来の大和型甕である[41]。口縁端面を粗いハケで面取りした後、ハケによる刺突を加える。

竪穴建物3631出土土器（図版48・116　28～30）　壷・甕がある。琵琶湖岸域から搬入された土器がある。

〔壷〕28は系統不明の広口壷。口縁端面にヘラ描きの沈線文２条と綾杉文を加える。無頸壷Ａは櫛描文系（29）がある。口縁部に蓋用の穿孔を持つ。体部上位に半裁竹管による直線文帯を巡らす。

〔甕〕甕Ｂは琵琶湖岸域のもの（30）がある。口縁端部はヘラによる刻目、器面調整は貝殻条痕。

土坑3549出土土器（図版49・116　31～40）　壷・甕・鉢がある。遠賀川系土器が主体を占める。

〔壷〕広口壷Ａ・Ｂがある。広口壷Ａは遠賀川系（31）がある。口縁端面にヘラ描沈線文１条を施した後、ヘラによる刻目を加える。頸部にヘラ描沈線文を２条以上施す。体部外面に荒いハケ調整。広口壷Ｂは遠賀川系（32～34）がある。いずれも口縁端部に面取りを行うが、端面は無文である。頸部にヘラ描沈線文を施す。32・34は頸部に明瞭な屈曲点を持たず、後者は頸部径が大きい。他に系統不明の広口壷（35）がある。口縁端面にヘラ描沈線文を施す。36は底部である。

〔甕〕遠賀川系の甕Ａ（37）がある。口縁端面にヘラで刻目を加える。38は底部厚が0.8㎝と薄手の底部である。ハケ条痕系の可能性がある。39は底部である。

〔鉢〕系統不明の鉢Ａ（40）がある。器面は摩耗しており、文様・調整は不明である。

溝1245下層出土土器（図版49・117、図11　41～44）　壷・甕・鉢がある。すべて遠賀川系土器である。

〔壷〕広口壷Ｂ（41）がある。頸部に明瞭な屈曲点は持たず、口縁部から体部にかけて漸移的に変化する。７～14条のヘラ描沈線文を頸部・体部上位・体部中位に施す。体部形態ａである。42は体部である。体部中位にヘラ描沈線文を７条施す。体部形態ｂである。

〔甕〕甕Ａ（43）がある。体部のヘラ描沈線文は３条である。

〔鉢〕鉢Ａ（44）である。器体の摩耗が激しく文様・調整は不明である。

溝1245上層出土土器（図版50・117、図11　45～61）　壷・甕・鉢・蓋・内傾口縁土器がある。遠賀川系土器のほか、東海地方・東部瀬戸内地方の土器が出土した。

〔壷〕広口壷Ａ、無頸壷Ｂがある。広口壷Ａは遠賀川系（45）と系統不明のもの（46）がある。45はヘラ描文と貼付突帯で加飾する。46は施文具に半裁竹管を用いる。胎土はやや橙色味を帯びる。系統不明の無頸壷Ｂ（47）がある。体部外面に荒いハケ調整。胎土はやや橙色味を帯びる。

〔甕〕遠賀川系の甕Ｂ（48）がある。体部のヘラ描沈線文は４条である。

〔鉢〕鉢Ａ・Ｄがある。鉢Ａは東部瀬戸内地方のもの（49）がある。内湾する体部外面に６～７条のヘラ描沈線文帯・竹管文・三角形列点文を施す。50・51は鉢Ｄ。焼成後の穿孔である。

〔蓋〕遠賀川系の甕用蓋Ａ（52）がある。天井部にドーナツ状の頂部を持つ。

〔内傾口縁土器〕内傾口縁土器Ａ・Ｂがある。54は内傾口縁土器Ａ。体部から口縁部にかけて立ち上がりが強く器壁が薄い。器面調整はナデである。53・55～61は内傾口縁土器Ｂ。体部から口縁部にかけて立ち上がりが強いもの（53・55～58）が主体を占める。器面調整は貝殻条痕である。

溝1245・流路1132（新）合流地点出土土器（図版50、図11　62～64）　壷・鉢・蓋がある。溝1245と流路1132（新）の土器が混在する可能性がある。

〔壷〕系統不明の小型直口壷Ａ（62）がある。頸部の屈曲は比較的明瞭である。体部形態ｃで最大径に稜を持つ。器面は摩耗が激しい。

〔鉢〕遠賀川系の鉢Ｃ（63）がある。口縁端部に面取りを施す。把手を貼り付ける。

〔蓋〕遠賀川系の壷用蓋Ｂ（64）。天井部に瘤状の摘みを持つ。

流路1132（古）下層・湿地下層出土土器・土製品（図版51・117・124、図16　65～72・328・329）壷・甕・土製円盤がある。遠賀川系土器が主体を占める。東部瀬戸内地方の土器も出土した。

〔壷〕広口壷Ａ・Ｂがある。遠賀川系が主体を占める。広口壷Ａは遠賀川系（65）がある。口縁部は無文。頸部と体部中位に４～５条のヘラ描沈線文帯を持つ。体部形態ａ。広口壷Ｂは遠賀川系（72）と東部瀬戸内地方のもの（67）がある。72は布目が残る押圧を加えた貼付突帯を５条以上巡らす。67は頸部にヘラ描沈線文と竹管文を施す。他にも、器形が分からない遠賀川系の広口壷（66）がある。口縁部が無文で、頸部にヘラ描沈線文を施す。

68は遠賀川系壷の体部である。体部形態ａ。体部中位にヘラ描沈線文９条を施す。体部外面に荒いハケ調整。69は底部である。体部外面に荒いハケ調整。底面は剥離のためドーナツ状を呈している。

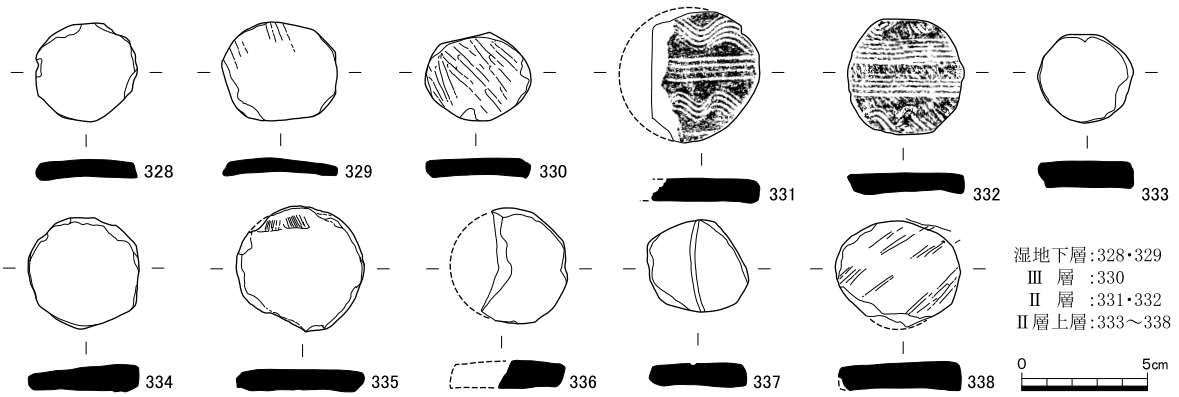


図16　流路1132出土土製円盤実測図（１：３）

〔甕〕甕Ａ・Ｂがある。すべて遠賀川系である。甕Ａ（70）は体部にヘラ描沈線文を10条施す。甕Ｂ（71）は口縁端部にヘラで刻目を加える。

〔土製円盤〕328・329は土製円盤である（図16）。径3.9～4.7㎝を測る。

流路1132（古）上層・湿地上層出土土器（図版52・117　73～86）　壷・甕・鉢・高杯・内傾口縁土器がある。櫛描文系土器とハケ条痕系土器が認められる。琵琶湖岸域・東海地方の土器も出土した。湿地上層出土土器は、流路1132（新）Ⅱ層出土土器と混在する可能性がある。

〔壷〕広口壷Ａがある。遠賀川系と櫛描文系がある。広口壷Ａは遠賀川系（79）がある。79は口縁端面の加飾は無く、頸部にヘラ描沈線文を施す。

器形は不明であるが、遠賀川系（80・81）、櫛描文系（74・82）、系統不明（73・75）がある。74は体部である。形態ｃの体部上位に13帯の櫛描直線文を施す。82は櫛描直線文に３条１帯の連帯状工具で斜格子文を重ねる。73は壷の口縁部。下方に拡張した口縁端面にハケの押圧で斜格子文を施す。75は体部形態ｃ。頸部に貼付突帯を巡らす。

〔甕〕ハケ条痕系（83）がある。口縁端面にハケによる押し引き文。胎土から琵琶湖岸域からの搬入品と判定した。

〔鉢〕鉢Ａ（76・84）がある。すべて遠賀川系である。

〔高杯〕櫛描文系の高杯脚部（77）がある。上位にヘラ描沈線文、下位に櫛描直線文を巡らす。

〔内傾口縁土器〕内傾口縁土器Ａ・Ｂがある。内傾口縁土器Ａ（85）は体部から口縁部にかけての立ち上がりが強い。内傾口縁土器Ｂ（78・86）の器面調整は貝殻条痕である。

流路1132（新）Ⅳ層出土土器（図版52・53・118　87～101）　壷・甕・蓋・内傾口縁土器がある。遠賀川系土器が主体を占める。琵琶湖岸域・東海地方からの搬入品もある。

〔壷〕遠賀川系の広口壷Ａ（87）がある。87は口縁端面にヘラ描きの沈線文と刻目を加える。６～17条のヘラ描沈線文を頸部・体部上位・体部中位に巡らす。体部形態ａ。他にも器形が不明であるが、遠賀川系（88～92）と系統不明のもの（93）がある。93はヘラ描沈線文と半裁竹管直線文を施す。

〔甕〕遠賀川系の甕Ａ（94・95）がある。体部のヘラ描沈線文は、94が５条、95が６条である。他にも、琵琶湖岸域から搬入の甕（96）がある。口縁端面にヘラによる刻目を加える。器面調整は横位の貝殻条痕である。

〔蓋〕遠賀川系の壷用蓋Ｃ（97）がある。笠形を呈し、双頭の摘みを持つ。

〔内傾口縁土器〕98～101は内傾口縁土器Ｂである。器面調整は貝殻条痕である。いずれも東海地方からの搬入品である。

流路1132（新）Ⅲ層出土土器・土製品（図版53・118・124、図16　102～126・330）　壷・甕・鉢・蓋・内傾口縁土器・土製円盤がある。遠賀川系土器が主体を占めるが、櫛描文系土器も少量認められる。中部瀬戸内地方・東部瀬戸内地方・東海地方の土器が出土した。

〔壷〕広口壷Ｂがある。広口壷Ｂは遠賀川系（102）と中部瀬戸内地方のもの（105）がある。遠賀川系の102は頸部に押圧を加えた貼付突帯１条を巡らし、体部上位に多条のヘラ描沈線文を施

す。貼付突帯が区画文としての役割を果たすため、頸部が比較的明瞭である。中部瀬戸内地方の105は口縁部に２個１対の穿孔を持ち、刻目を加えた貼付突帯で加飾する。口縁端面にヘラ描沈線文の後、綾杉文を施す。口縁部内面に貼付突帯を５条巡らし、口縁部に向かって注口部を形成する。注口は２個あり、対向する箇所に付されると考えられる。頸部には刻目を加えた貼付突帯を７条巡らす。器形は不明であるが、遠賀川系（103・108）、櫛描文系（109・110）、中部瀬戸内地方（106）、東部瀬戸内地方（107）の壷がある。104は無文の口縁部である。

〔甕〕甕Ａがある。遠賀川系（111～115）と東部瀬戸内地方（116）がある。体部のヘラ描沈線文は111が３条、112が８条、113が９条、114が２条、115・116が５条である。

〔鉢〕遠賀川系の鉢Ｂ（117）がある。

〔蓋〕遠賀川系の甕用蓋Ａ（118・119）がある。118は摘みが平頂部を呈する。器面調整はタテハケである。119は口縁部で器面調整はミガキである。

〔内傾口縁土器〕内傾口縁土器Ａ・Ｂがある。内傾口縁土器Ａ（120）は体部から口縁部までの立ち上がりが強い。内傾口縁土器Ｂ（121～126）の器面調整は貝殻条痕である。

〔土製円盤〕330は土製円盤である（図16）。径4.2㎝を測る。

流路1132（新）Ⅱ層出土土器・土製品（図版54～57・119・120・124、図16　127～201・331・332）　壷・甕・鉢・高杯・蓋・内傾口縁土器・ミニチュア土器・土製円盤がある。遠賀川系・櫛描文系・ハケ条痕系土器がある。中部瀬戸内地方・東部瀬戸内地方の土器や、琵琶湖岸域・東海地方から搬入された土器が出土した。

〔壷〕広口壷Ａ・Ｂ・Ｃ、直口壷Ａ、無頸壷Ａ・Ｂがある。櫛描文系の壷が一定量認められる。

広口壷Ａは遠賀川系（127）と櫛描文系（128）、東部瀬戸内地方（129）、中部瀬戸内地方（130）のものがある。128は口縁部上端がやや水平気味に開き、端部を少し拡張する。口縁端面に櫛描直線文とヘラによる刻み、頸部に複帯構成の櫛描直線文を施す。体部外面に荒いハケ調整。129は口縁端面にヘラ描きによる沈線文と刻み。頸部に櫛描直線文と竹管文を施す。130は口縁部内面に三角形刺突文を施す。

広口壷Ｂは遠賀川系（131～135）と櫛描文系（137～139）がある。遠賀川系の広口壷Ｂは体部上位に多条（７条以上）のヘラ描沈線文を加えることを特徴とするが、口縁端部の加飾はヘラによる刻目（131・132・135）、ハケによる刺突（133）、指捏ね状の貼付突帯（134）と多様である。135は半裁竹管による刻目と直線文を加える。櫛描文系の広口壷Ｂは口縁端部を僅かに拡張する傾向がある。137は口縁端面に櫛描波状文、口縁部から頸部に櫛描直線文、体部上位に櫛描直線文・垂下直線文を施す。体部上位の施文は直線文→垂下直線文の順に施されている。139は大型壷。口縁部に２個１対の穿孔。口縁部内面に複帯構成の櫛描直線文とヘラ描扇形文を組み合わせた疑流水文風の文様帯を持つ。

広口壷Ｃは遠賀川系（143）と東部瀬戸内地方（144）のものがある。143は口縁端部にハケによる刺突を加え、体部上位にヘラ描沈線文を巡らす。144は口縁端面にヘラによる沈線文と刻目、頸部から体部上位にヘラ描沈線文と竹管文を施す。

142は口縁部内面に刻目を加えた貼付突帯を巡らす中部瀬戸内地方の広口壺である。

直口壺Ａは櫛描文系（145・146）がある。口縁端面に145は櫛描直線文、146は櫛描波状文を施す。

無頸壺Ａ（147）は口縁部下に貼付突帯、体部にヘラ描沈線文を施す。櫛描文系の無頸壺Ｂ（148）は、口縁部から体部上半に櫛描直線文を施す。体部外面に荒いハケ調整。

ほかに器形は不明であるが、ヘラ描文を施す壺（149・156・157）、櫛描文系の壺（158～160）、貼付区画文を持つ壺（161）がある。150～155は東部瀬戸内地方の壺である。

〔甕〕甕Ａ・Ｂがある。ハケ条痕系の甕が主体を占める。

甕Ａは遠賀川系（162・163）とハケ条痕系（164・165・167・169～171・176）、東部瀬戸内地方（172・173）、中部瀬戸内地方（174）、琵琶湖岸域（175・176）、系統不明のもの（177・178）がある。遠賀川系（162・163）の器面調整はナデ。163は口縁端部にヘラで刻目を加える。ハケ条痕系の164・165・167・169～171は従来の大和型甕である。164・165・167・169・170は口縁端面にハケよる刺突、171はヘラで刻目を加えている。また169・170が口縁端部に１個、171が２個１対の圧痕を持つ。なお、169・170は器面調整のハケが６～８本/cmと、通常のハケ条痕系甕よりも条線間が狭い。176は山形口縁の甕。従来の近江型甕[42]である。器面調整は、外面が粗いタテハケ、内面が口縁端面に並行する粗いナナメハケ。器壁は薄手である。胎土観察から搬入品と想定された。東部瀬戸内地方の甕（172・173）は体部に４～６条のヘラ描沈線文を施す。172は口縁部下に貼付突帯。中部瀬戸内地方の甕（174）は無文で貼付口縁を持つ。琵琶湖岸域の甕（175・176）は器面調整が条痕文のものと、ハケのものがある。175は口縁端面にヘラで刻目を加え、器体外面に横位の櫛条痕を施す。器壁は薄手である。胎土観察から搬入品と判定した。系統不明の甕（177・178）の器面調整はハケとナデである。口縁端面の加飾はいずれもヘラを用いており、177が刻目、178が刺突を加える。178と同様の加飾は壺（216・259・266）でも確認できる。

甕Ｂはハケ条痕系（166・168）がある。従来の大和型甕である。166は口縁端面を横方向にハケ調整した後、上端にハケで刺突を加える。単独圧痕を持つ。168のハケ原体は、棒状のものを束ね櫛状工具を用いている。口縁端部はヘラによる刻目を持つ。

179・180は底部である。179はハケ条痕系。底部外面に木葉痕を残す。180は遠賀川系か。底部外面に籾圧痕を残す。

〔鉢〕鉢Ａ・Ｂ・Ｃがある。

鉢Ａは櫛描文系（181～183・190）、系統不明（191）がある。口縁端面の加飾は181がヘラによる刻目、182が三角列点文である。183は椀形の体部外面に流水文を施す。190は蓋の摘みのような脚台を持ち、体部に櫛描直線文と刻目を加えた貼付突帯を１条巡らす。191は底部形態が甕用蓋の天井部と類似する台付鉢。摩耗のため調整は不明である。

鉢Ｂは遠賀川系（184・185）、櫛描文系（186）、系統不明（187）がある。184は頸部に刻目突帯を持つ。185は口縁端部を面取りする。186は口縁端面にヘラ描沈線文を施した後、上下から押圧を加える。同じ手法を用いるものに、壺７・22、鉢251がある。頸部にはヘラ描沈線文１条と体部に

櫛描文を施す。187は器面調整に粗いヨコハケを施す。条痕甕の影響か。

鉢C（188・189）は、いずれも口縁部の屈曲が緩やかで、器面調整にハケを用いる。把手を貼り付ける。

〔高杯〕192は高杯の脚部上端である。

〔蓋〕遠賀川系の甕用蓋Aと壷用蓋A・Bがある。甕用蓋Aは平頂部のもの（194）とドーナツ状の天井部を持つもの（195）がある。いずれも器面調整はナデである。壷用蓋A（197）・B（196）は2個1対の穿孔を持つ。

〔内傾口縁土器〕内傾口縁土器A（198）・B（199～201）がある。198の器面調整はナデで体部に接合痕を残す。199～201の器面調整は貝殻条痕である。

〔ミニチュア土器〕193は鉢形を呈する。祖型となる器種は不明である。

〔土製円盤〕331・332は壷の体部片を加工した土製円盤（図16）。径4.6～5.3㎝を測る。

流路1132（新）Ⅱ層上層出土土器・土製品（図版57～62・121・122・124、図16　202～256・333～338）　壷・甕・鉢・蓋・厚口鉢・ミニチュア土器・土製円盤がある。櫛描文系・ハケ条痕系・条痕文系土器がある。他に中部・東部瀬戸内地方の土器や、琵琶湖岸域・東海地方から搬入された土器が出土した。

〔壷〕広口壷A・B・C、直口壷A、細頸壷、無頸壷Aがある。櫛描文系が主体を占める。ハケ条痕系も確認できる。中部・東部瀬戸内地方の土器や、琵琶湖岸域から搬入された土器が出土した。

広口壷Aは全体的に口縁端面を少し拡張する傾向にあり、205・206は口縁部上端がやや水平気味に開く。櫛描文系の壷（202～207）は、口縁端面の加飾がハケの刺突による斜格子文（202）、棒状工具の刺突文と櫛描垂下直線文（203）、ハケの刺突（204）、櫛描直線文とハケによる刺突（205）、櫛描直線文のみ（206）と多様である。204は、口縁部内面分割文として条間の広い櫛描重弧文を施す。207は体部形態b。屈曲が緩やかな頸部に櫛描直線文を7帯施す。体部外面に荒いハケ調整。

広口壷Bは櫛描文系（208・209）とハケ条痕系（214・215）、系統不明のもの（210・211）がある。櫛描文系の壷はいずれも太頸傾向であり、口縁端面の加飾はヘラによる刻目（208）、無文（209）のものがある。ハケ条痕系の214・215は従来の甕変容壷である。口縁部に斜格子文を持つもの（214）と無文のもの（215）がある。系統不明の210・211は、大きく拡張した口縁端面にヘラ描沈線文とハケによる刺突で格子文を施している。

広口壷Cは櫛描文系（212・213）がある。212は口縁部上下端にハケによる刺突、頸部から体部上位に櫛描による横型流水文を施す。扇形文間の直線文はナデ消している。213は口縁端面にヘラを用いて沈線文と刻目を加える。頸部から体部上位にかけて、多帯の櫛描直線文を巡らし、体部中位に連弧文を施す。

広口壷には他に、遠賀川系（216）、櫛描文系（217～221）、中部瀬戸内地方のもの（232）がある。216は口縁端面をヘラの刺突で加飾し、頸部に沈線文を施す。櫛描文系の壷は、口縁端面の加飾が櫛描波状文（217）、櫛描文とヘラによる刻目（218～221）のものがある。217は器壁が極めて厚い作りの大型壷。219は口縁部内面に複帯構成の櫛描直線文帯。220は口縁部内面に櫛描直線文と

波状文を施す。221は口縁部内面に２個１対の瘤状突起を持つ。

直口壷Ａは櫛描文系（222～224）がある。いずれも口縁端部が少し外傾する。

細頸壷は櫛描文系の225がある。受口状の複合口縁部を持つ。口縁部外面に櫛描波状文と棒状浮文で加飾する。頸体部界に低い貼付突帯、体部上位に櫛描直線文を巡らす。胎土から琵琶湖岸域からの搬入品と推定した。

無頸壷Ａは櫛描直線文を施し、口縁部に２孔１対の穿孔を持つ226と、無文の227がある。

228～231・233～237は壷の体部である。櫛描文系（228～231・234～237）と、東部瀬戸内地方のもの（233）がある。228が体部形態ｂ、229・231が体部形態ｃである。228は体部外面に荒いハケ調整を施す。229は櫛描波状文と直線文を交互に10帯施す。230は体部最大径が有段状をなすもので、上半に条間が広い櫛描直線文。231は体部に櫛描直線文・連弧文・斜格子文を施す。234は体部に櫛描直線文と連弧文。235～237は横型の櫛描流水文を施すものである。東部瀬戸内地方の壷（233）はヘラによる沈線文と半裁竹管による刺突文を施す。

〔甕〕甕Ａ・Ｂがある。

甕Ａはハケ条痕系（238・240～244・247）がある。従来の大和型甕である。口縁端部を面取りするもの（241・244・247）、少し拡張させるもの（242・243）が認められる。238・240～243は口縁部内面に波状文を施す。口縁端面の加飾はハケによる刺突（238・240）、櫛描波状文（242）、ヘラによる刻目（243・244）、ヘラによる沈線文と刻目（247）がある。247は口縁端面の一部に分割文風のヘラによる鋸歯文を加える。ヘラによる沈線文と刻目を加える口縁端面の加飾は、壷（21・28・132）と共通する。

甕Ｂはハケ条痕系（245・246）がある。246は口縁端部を面取りし、端面にヘラによる沈線文と刻目で加飾する。247と同様にヘラによる沈線文と刻目を加える口縁端面の加飾は、壷と共通する。口縁部内面の器面調整が粗いヨコハケであるのに対し、外面は条線が浅く密なハケで調整を施しており、内外面の器面調整に工具の違いが認められる。他系統土器の影響も考えられる。

239はハケ条痕系の甕である。口縁端部を少し拡張させ、ハケによる刺突を加える。248は外面に布目圧痕を残す底部である。

〔鉢〕鉢Ａ・Ｂがある。

鉢Ａ（252）は椀形で内外面ミガキ調整を施す。

鉢Ｂは遠賀川系（249～251）がある。口縁端面の加飾が無文のもの（249）、ヘラによる刻目（250）、ヘラ描沈線文を１条施した後、上下から押圧を加えるもの（251）がある。同じ手法を用いるものに壷７・22、鉢186がある。

253は器形が不明であるが、木器の写しの可能性がある。体部に櫛描文を施す。

〔蓋〕255は壷用蓋Ａ。２個１対の穿孔を持つ。

〔厚口鉢〕256は厚口鉢である。口縁端部に面取りを施し、外面に貝殻条痕を加える。

〔ミニチュア土器〕254は突出した底部から広がる体部を持つ。祖型となる器種は不明である。

〔土製円盤〕333～338は土製円盤（図16）。径3.8～5.1㎝を測る。

流路1132（新）Ⅰ層出土土器（図版62～66・123・124　257～326）　壷・甕・鉢・内傾口縁土器・厚口鉢がある。遠賀川系・櫛描文系・ハケ条痕系土器がある。中部瀬戸内地方・東部瀬戸内地方の土器や、琵琶湖岸域・東海地方から搬入された土器が出土した。

〔壷〕広口壷Ａ・Ｂ・Ｃ、直口壷Ａ、無頸壷Ａがある。櫛描文系が主体を占める。東部瀬戸内地方の土器も出土した。なお、櫛描文系の259・264・276は胎土が赤味を帯びており、他の胎土とは異なる。

広口壷Ａは櫛描文系（257～261）と東部瀬戸内地方（262）のものがある。櫛描文系の壷は、口縁端面の加飾が無文（257）、２個１対の圧痕（258）、棒状工具の刺突文とヘラの刻目（259）、櫛描波状文とヘラの刻目（260）と多様である。259は頸部に櫛描直線文帯、体部上位に櫛描直線文と波状文の文様帯を施す。261は頸部から体部中位にかけて多帯の櫛描直線文を施し、体部最大径付近にのみ櫛描波状文を加える。体部形態ｂである。器面調整は外面が粗いタテハケ、頸部内面が粗いヨコハケであり、ハケ条痕系土器の影響が考えられる。東部瀬戸内地方の壷（262）は、口縁端面にヘラ描沈線文とヘラによる刻目を加える。頸部に９～14条のヘラ描沈線文と竹管文を巡らす。口縁端面の刻目と頸部の竹管文は、分割文風の無文箇所を設けている。

広口壷Ｂは櫛描文系（263～268）と東部瀬戸内地方（269）のものがある。櫛描文系は細頸（263・264）と太頸（265～268）がある。口縁端面の加飾は無文（265）、ヘラによる沈線文と刻目（263）、棒状具による刺突文と刻目（266）、櫛描直線文（267）、櫛描直線文とヘラによる刻目もしくは押圧（264・268）がある。263は体部上位に複帯構成の櫛描直線文を施す。体部外面に粗いハケ調整。264は口縁端部を下方に拡張し、頸部に貼付突帯１条と櫛描波状文を巡らす。口縁部と体部上位には多帯の櫛描直線文を施す。265は口縁端部を下方に少し拡張させる。体部上位にハケと同じ板状工具の木口を用いた、条線が不明瞭な櫛描直線文を施す。体部形態ｃ。267は口縁部内面にヘラ状工具の側面を利用した押圧文を施す。268は口縁端部下端にヘラもしくは棒状具で押圧を加える。口縁部下方の外面に「レ」字状のヘラ描沈線文。東部瀬戸内地方の壷（269）は、口縁端面にヘラ描沈線文２条を施す。体部上位に６～12条のヘラ描沈線文と竹管文による文様帯を持つ。

広口壷Ｃは櫛描文系（270～273）がある。270～272は口縁端部を拡張している。口縁端面の加飾はヘラによる刻目（272・273）、ハケによる刺突（271）、櫛描直線文（270）がある。271は頸部に複帯構成の櫛描直線文を施す。

他に櫛描文系の広口壷の口縁部片（283）がある。口縁端面に櫛描波状文とヘラによる刻目を加える。口縁部内面は櫛描波状文と円弧文を施す。体部外面は荒いハケ調整である。

直口壷Ａは櫛描文系（274・275）がある。275は口縁端部上面にも櫛描直線文を施す。

無頸壷Ａは櫛描文系（278～282）がある。282は櫛描直線文とヘラ描扇形文を組み合わせて横型の疑流水文を施す。

壷では他に特徴的な形態・文様を持つものを抽出した。櫛描文系（276・277・287・288）、東部瀬戸内地方のもの（284・285）、系統不明（286・289）がある。276・277は体部でいずれも体部形態ｃである。276は体部上位に櫛描直線文と櫛描波状文を施す。波状文は回転力を利用せず施文する

ため断続的である。286はヘラ描きによる工字文風の流水文。287は櫛描きによる疑流水文。扇形文間の直線文はナデ消されている。289は刻目を加える貼付突帯と円形浮文を持つ。

290～292は底部である。底面に木葉痕を残す。292は甕の可能性がある。

〔甕〕甕Ａ・Ｂがある。遠賀川系とハケ条痕系の甕がある。中部瀬戸内地方や東部瀬戸内地方や、琵琶湖岸域・東海地方から搬入された土器もある。ハケ条痕系甕が主体を占める。

甕Ａは遠賀川系（293～296）とハケ条痕系（297・300～303・307・312・313)、中部瀬戸内地方（315)、東部瀬戸内地方（316）のものがある。293は口縁部は無文である。294・295は口縁端面にヘラによる刻目を加える。296の底部厚は1.0㎝と薄手である。ハケ条痕系の甕は、従来の大和型甕である。口縁端部をナデで仕上げるもの（300・301)、ヘラによる刻目（297・302・303・312・313)、ハケによる刺突（307）がある。307・312・313は口縁部内面に１～３帯の波状文を施す。300～303・307は口縁端部に圧痕を持つもの。300～303は１個、307は３個以上を１対となす。中部瀬戸内地方の甕（315）は、口縁部断面が逆Ｌ字状を呈する貼付口縁を持つ。東部瀬戸内地方の甕（316）は、体部に櫛描直線文と波状文を施す。

甕Ｂはハケ条痕系（298・299・304・305・314）がある。従来の大和型甕である。口縁端部をナデで仕上げるもの（299)、ヘラによる刻目（298・304・305・314）がある。299・304・305は口縁端部に圧痕を持つもの。299は１個、304・305は２個一対である。299は口縁部内面にハケによる押圧を施す。314は口縁部内面に波状文を施し、底部側面に横方向のハケ調整を行う。底部厚は1.8㎝と厚手である。

他に器形がわからないハケ条痕系（306・308～311・318・319）と東海地方（317）の甕がある。ハケ条痕系の306・308～311は従来の大和型甕である。口縁端部をヘラによる刻目（309～311)、ハケによる刺突（308）を加えるものがある。306・308は口縁端部に圧痕を持つもの。306は１個、308は３個以上を１対となす。ハケ条痕系の318・319は、従来の近江型甕である。いずれも口縁部に瘤状の山形口縁を持つ。口縁部内面の波状文に重ねて、垂下直線による分割文を施す。317は、器面調整が貝殻条痕である。胎土から東海地方からの搬入品と推定した。

〔鉢〕鉢Ａ（320～322)・Ｂ（323）がある。

鉢Ａは櫛描文系（321・322）とハケ条痕系（320）がある。櫛描文系の321は櫛描直線文、322は横型流水文を施す。ハケ条痕系の320は体部内外面の器面調整に条線間の広いハケを用いる。

鉢Ｂの323は遠賀川系で、無文である。

〔内傾口縁土器〕324・325は内傾口縁土器Ｂである。器面調整は貝殻条痕である。

〔厚口鉢〕327は厚口鉢の体部である。器面調整は貝殻条痕である。

土坑1512出土土器（図版66　327）　内傾口縁土器がある。

〔内傾口縁土器〕327は内傾口縁土器Ｂである。器面調整は貝殻条痕である。

方形周溝墓3543出土土器（図版23・67・125　339～346）　凹線文系土器の壷・甕・高杯がある。すべて周溝内から完形に近い状態で出土した。

〔壷〕広口壷Ｂ・直口壷Ｂ・Ｃがある。

広口壷Ｂ（339～341）はいずれも体部形態c。口縁端部をやや拡張させて、端面に凹線文を施す。

直口壷Ｂ（342）は口縁部と頸部に凹線文を施す。体部形態d。

直口壷Ｃ（343）はいわゆる水差形土器である。口縁部に凹線文、体部上位に横位の把手を持つ。

〔甕〕甕Ｃ（344・345）がある。344は口縁端部に凹線文、体部上位にハケによる刺突文を２段巡らす。345は口縁部に強い横ナデを施し、端部断面がはねあげ口縁状を呈する。

〔高杯〕346は脚柱部に櫛描直線文２帯を施す高杯である。円盤充填法を用いる。脚裾部に２孔５単位の穿孔を持つ。

２）平安時代前期から中期

井戸3440出土土器（図版68・126　347～370）　土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器がある。土師器には皿Ａ（347・348・352・353）、杯Ａ（349～351、354～356）、小型皿（357）がある。347・348は外面ヘラケズリ調整の皿Ａ。口径14.8㎝、器高1.5～1.7㎝。352・353は外面調整がオサエとナデによる皿Ａ。口径14.2～14.8㎝、器高1.9～2.1㎝。357は外面調整がオサエとナデによる小型の皿。口径8.1㎝、器高1.6㎝。井戸枠の底から出土した。349～351は外面ヘラケズリ調整を施す杯Ａ。口径13.5～14.7㎝、器高3.0～3.1㎝と、口径15.9㎝、器高2.8㎝のものがある。354～356は外面調整がオサエとナデによる杯Ａ。口径13.6～14.8㎝、器高2.9～3.6㎝。黒色土器は、内面のみを黒色化させたＡ類の杯（358・359）がある。358は内面にミガキと暗文を施す。359は内外面にミガキ。図化できなかったが、貼付高台のＡ類杯もある。須恵器には杯蓋（360）・杯Ｂ（361・362）・鉢（363・364）・円面硯（365）がある。杯蓋360は外面ヘラ切り後ケズリ調整を施す。摘みは欠損している。内面に朱墨が付着する。転用硯か。杯Ｂ361・362は口径11.8～12.7㎝、器高4.6～5.2㎝。底部ヘラ切りで貼付高台である。363は鉢の口縁部。口径36.3㎝、口縁端部は面をなす。364は鉢の底部。365は圏足円面硯。脚部に長方形の透かし孔と直線の線刻を交互に加える。硯面に墨痕が残る。灰釉陶器には蓋（366）と壷（367）がある。366は短頸壷の蓋である。上面を施釉し、擬宝珠形の摘みをもつ。口縁端部は欠損している。367の底部には回転糸切り痕が残る。緑釉陶器は山城系の椀（368～370）がある。368は小型の椀で底部外面に「政所」の墨書（図17）。底部には回転糸切り痕が残る。370は削出高台の底部。京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階。

図17　墨書土器（368）
底部赤外線写真

平安時代整地層出土土器（図版68・127　371～376）　１区平安時代整地層（図版２－110層）から出土した土器である。土師器がある。土師器は皿Ａ（371～376）がある。口径10.4～11.0㎝、器高1.3㎝のものと、口径14.2～14.8㎝、器高1.6～2.6㎝のものがある。京都Ⅲ期中段階。

井戸3191出土土器（図版68・69・126　377～428）　土師器・黒色土器・須恵器・瓦質土器・灰釉陶器・白色土器・緑釉陶器・輸入陶磁器がある。土師器は皿Ａ（377～382）、皿Ｌ（383）、皿Ｎ（384～390）、甕（391～393）、羽釜（394）がある。皿Ａは口径

10.0～10.8㎝、器高1.0～1.5㎝。皿Lは口径13.7㎝、器高1.8㎝。皿Nは口径11.4㎝、器高1.9㎝のものと、口径13.8～15.0㎝、器高2.1～2.7㎝のもの、口径15.8～16.3㎝、器高2.6㎝のものがある。煤が付着するものがある。甕は体部外面をタタキ調整後にナデで仕上げる391と、オサエとナデのみで仕上げる392・393がある。羽釜394の鍔は貼付である。黒色土器は椀（395～397）・鉢（398）・甕（399）がある。椀は内面のみを黒色化させたA類（395・396）と、内外面を黒色化させたB類（397）がある。B類椀は貼付高台を有し、内面底部見込みに暗文を持つ。鉢398は内外面を黒色化させたB類である。甕399には煤が付着する。須恵器は皿A（400）、鉢（401～403）、壷（404～408）、甕（409）がある。皿Aは底部のヘラ切り痕をナデ調整で消す。鉢は玉縁状の口縁部をもつ401・402がある。403は鉢の底部。外面に回転糸切り痕を残す。405は小型の瓶子の口縁部。407は瓦質の壷。外面の剥離が著しく、調整は不明である。408は肩部に断面台形の凸帯を巡らす。被熱により赤化する。甕409は口縁端部を上方に摘み上げるように小さく拡張したもので、体部外面に並行タタキを施す。内面はナデ調整を施し当て具痕を消す。口縁部が焼け歪んでいる。灰釉陶器は皿（410・411）、椀（412）がある。皿は内面に段をもつ。貼付高台。底部外面に回転糸切り痕を残す。410は内面の見込み部分まで施釉し、高台内端部で接地する。411は内面全面に施釉し、角高台をもつ。412は椀の底部である。貼付高台を持つ。白色土器椀（413）がある。口径18.5㎝を測る。緑釉陶器は椀（414～418）、鉢（419・420）、皿（421）、香炉（422）、壷（423）がある。椀は山城系（414）と近江系（415～418）がある。山城系の414は胎土が須恵質を呈す。近江系の415～418は、いずれも胎土は軟質で、濃緑色の光沢ある釉調である。416は体部外面に陰刻文。418は底部外面の施釉を省略している。419・420はいずれも山城系の鉢で、胎土は軟質である。421は山城系の小皿。胎土が須恵質で、貼付高台を持つ。422は香炉の脚部で、透かし孔が認められる。423は山城系の壷の把手部分である。胎土は須恵質を呈す。鉢はいずれも胎土は軟質である。山城系。輸入陶磁器には白磁、青磁、青白磁がある。白磁には椀（424・425）がある。425は口縁部が小さな玉縁をなす。青磁には越州窯系の椀（426・427）がある。426は浅形椀。427は外面にヘラ押圧縦線を持つ。青白磁には天井部に陰刻花文を施した合子蓋（428）がある。摘みが欠損している。京都Ⅲ期新段階。

井戸820出土土器（図版70・127　429～435）　土師器・瓦器・灰釉陶器・輸入陶磁器を図化した。土師器は皿A（429～431）がある。口径9.7～10.0㎝、器高1.4～1.8㎝。瓦器は楠葉型の椀（432）がある。内外面にミガキを密に施す。灰釉陶器は椀（433）と壷（434）の底部がある。椀は貼付高台。内面の見込み部分まで施釉する。輸入陶磁器は白磁の椀（435）がある。内面に段を持つ。京都Ⅳ期古段階。

3）平安時代後半から鎌倉時代前半

井戸3190出土土器（図版70・127　436～448）　土師器・瓦器・輸入陶磁器がある。土師器は皿N（436～445）がある。皿Nは口径9.6～10.2㎝、器高1.6～2.0㎝のものと、口径14.2～14.8㎝、器高3.0～3.6㎝のものがある。瓦器は楠葉型の椀（446）がある。口縁端部内外面に沈線を巡らす。内

面のミガキは密に施す。器面に0.2～0.4㎝大の円形剥離が多数生じている。輸入陶磁器には白磁の椀（447・448）がある。いずれも玉縁状口縁を持ち、胎土に微細な黒色粒を含む。京都Ⅳ期新段階からⅤ期古段階。

土器溜2257出土土器（図版70・127　449～460）　土師器がある。土師器は皿Ac（449）と皿N（450～460）がある。皿Acは口径9.5㎝、器高1.1㎝。皿Nは口径9.3～10.2㎝、器高1.5～2.0㎝のものと、口径14.4～15.3㎝、器高2.6～3.2㎝のものがある。京都Ⅴ期古段階から中段階。

井戸2022出土土器（図版70・127　461～476）　土師器・瓦器・輸入陶磁器がある。土師器は皿Ac（461）、皿N（462～469）、皿S（470・471）、吉備系椀（472）がある。皿Acは口径7.0㎝、器高1.1㎝。皿Nは口径8.2～8.8㎝、器高1.5～1.7㎝のものと、口径13.1～13.7㎝、器高2.4～2.8㎝のものがある。皿Sは口径12.5㎝、器高3.1～3.3㎝。472は吉備系土師器椀である。貼付高台。口縁部に強いヨコナデを施す。瓦器は皿（473）・椀（474）・鍋（475）がある。皿は底部内面にジグザグ状のミガキによる暗文を持つ。474は楠葉型の椀である。外面のミガキはわずかで、内面ミガキも水平方向に粗く施される。底部内面に同心円状のミガキによる暗文を持つ。高台は低く、断面三角形を呈する。475は内湾した蓋の受けがつく鍋。外面はオサエの指痕が明瞭に残るが、内面はナデ調整で丁寧に仕上げている。輸入陶磁器は白磁椀（476）の底部がある。細く高く直立する削出高台を持つ。外面は高台の一部まで施釉されている。京都Ⅵ期中段階。

井戸2961出土土器（図版70・128　477～489）　土師器・輸入陶磁器がある。土師器は皿Ac（477）、皿N（478～484）、皿S（485～487）がある。皿Acは口径6.8㎝、器高1.6㎝。皿Nは口径8.0～9.0㎝、器高1.4～1.6㎝のものと、口径13.1～13.2㎝、器高2.3～2.5㎝のものがある。皿Sは口径8.8㎝、器高1.8㎝のものと、口径10.7～10.9㎝、器高3.1㎝のものがある。輸入陶磁器には龍泉窯系の青磁椀（488・489）がある。488は体部外面に鎬蓮弁文を持つ束口椀。底部内面に三叉トチン痕が残る。489は二又片刃によって体部内面を分割し、その中に飛雲文を入れる。内面見込みには簡略化した花文または雲文を片彫りしている。京都Ⅵ期新段階。

地下室1591出土土器（図版71　490～495）　土師器皿Sc（490）・皿N（491～495）がある。490は白色系の胎土を持つ。皿Nは口径8.2～9.2㎝、器高1.2～1.6㎝のものと、口径12.6～13.8㎝、器高1.9～2.0㎝のものがある。京都Ⅵ期中段階。

土坑1593出土土器（図版71　496～507）　土師器がある。土師器は皿Sc（496・497）、皿N（498～507）がある。496・497は白色系の胎土を持つ。皿Nは口径8.0～8.8㎝、器高1.2～1.4㎝のものと、口径10.6～12.6㎝、器高1.5～2.3㎝のものがある。京都Ⅵ期中段階。

土坑2892出土土器（図版71・72・128　508～551）　土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・白色土器・灰釉系陶器・輸入陶磁器がある。土師器は皿Sc（508～512）、皿N（513～519）、皿S（520～526）、皿X（527～529）、吉備系椀（530）がある。皿Scは口径4.2～5.8㎝、器高0.9～1.4㎝。皿Nは口径7.8～8.8㎝、器高1.4～1.6㎝のものと、口径10.9～13.0㎝、器高2.2～2.6㎝のものがある。皿Sは口径6.8～7.4㎝、器高2.0～2.3㎝のものと、口径10.4～10.8㎝、器高3.1～3.2㎝のもの、口径12.6～12.7㎝、器高3.5～3.6㎝のものがある。皿Xは口径10.4～10.8㎝。底部はいずれも糸切り未

調整である。530は貼付高台の椀。口縁部に強いヨコナデを施す。瓦器は椀（531～533）、鍋（534）、火鉢（535）がある。531～533は楠葉型の椀である。断面三角形状の低い貼付高台を持つ。体部内面のミガキはまばらで、見込みにジグザグ状の暗文を施す。体部外面のミガキは認められない。534は蓋受けの段が明瞭な鍋。内面にハケ調整を施す。535は火鉢である。水平に近い上端面を持った厚い口縁部を形成する。底部に籾・藁圧痕がある。須恵器は東播系の鉢（537・538）、甕（539）がある。537は片口擂鉢である。口縁部は少し肥厚させ、端部を上方にややつまみ上げる。538は貼付高台を持つ鉢の底部。体部下半にヘラケズリを施す。539は甕の底部である。焼締陶器には常滑産の甕（536）がある。口縁部断面がL字状を呈する受口状口縁を持つ。白色土器は蓋（540）・高杯（541）がある。540はボタン状の摘みを持つ蓋である。天井部にヘラケズリ調整を施す。541は高坏の脚部である。外面はヘラケズリで面取りする。灰釉系陶器は椀（542）と鉢（543）がある。542は山茶椀の底部である。断面台形の貼付高台端部に、籾殻痕が残る。内面が平滑となり、硯に転用された可能性がある。543は鉢の底部である。外側に若干外傾した断面逆三角形状の貼付高台を持ち、体部は丸味を帯びて立ち上がる。内面が平滑、墨跡があり、硯に転用されている。輸入陶磁器には白磁、青磁、青白磁などがある。白磁には椀（544～546）がある。544・545の椀は、施釉後に口縁部周辺の釉を掻き取り、口禿としている。544は体部内面、545は内面見込みに沈線を巡らす。546は内面に型文を施す椀である。薄胎。青磁は龍泉窯系の椀（547～549）がある。547は底部内面に花弁３単位の片彫蓮花文を施す。548は体部外面に片彫蓮弁文。弁の中心線には鎬は無い。549は体部外面に鎬蓮弁文を施す。青白磁は壷蓋（550）がある。天井部に菊花を現した花形文を施す。551は福建省系陶器の四耳壷である。頸部と体部の境はにぶく段をなし、口縁端部は玉縁状に肥厚する。肩部に横型の四耳を貼り付ける。京都Ⅵ期新段階。

土坑1594出土土器（図版72　552～563）　土師器・瓦器がある。土師器はⅢN（552～558）・ⅢS（559～561）・釜（562）がある。ⅢNは口径7.8～8.3㎝、器高1.0～1.6㎝のものと、口径11.6㎝、器高1.9㎝のものがある。ⅢSは口径6.8～7.2㎝、器高1.8～2.0㎝のものがある。562は白色系の小型釜。体部は半球形で口縁端部は立ち上がる。瓦器はⅢ（563）がある。口縁部は底部から外反して立ち上がる。京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階。

４）鎌倉時代後半から室町時代

土坑514出土土器（図版72・73・129　564～592）　土師器・瓦器・国産施釉陶器がある。土師器はⅢN（564～575）、ⅢSh（576～579）、ⅢS（580～587）、ⅢX（588）がある。ⅢNは口径7.6～8.3㎝、器高1.3～1.7㎝のものと、口径10.5～11.1㎝、器高1.7～2.2㎝のものがある。ⅢShは口径6.2～7.2㎝、器高1.6～1.8㎝。ⅢSは口径9.8㎝、器高1.7㎝のものと、口径11.2～11.6㎝、器高2.9～3.6㎝のものがある。588はロクロ成形によるⅢXである。口径13.3㎝、器高3.1㎝を測る。瓦器は羽釜（589）、鍋（590・591）がある。589はミニチュアの三足羽釜。590は内湾した蓋受けを持つ鍋。内面にナデ調整を施す。591は蓋受けの段が明瞭な鍋。内面にハケ調整を施す。国産施釉陶磁器には瀬戸灰釉折縁深Ⅲ（592）がある。体部はわずかに丸みを帯びて立ち上がる。口縁部は大

きく外折し、端部はわずかに立ち上がる。底部と体部の境に手づくねにより制作された獣脚を三方に付す。体部外面下方から底部にかけてヘラケズリ調整。底部内面に櫛描文を同心円状に３帯巡らし、各帯の間に印花文を配する。京都Ⅶ期新段階。

土坑2811出土土器（図版73・74・129　593～635）　土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・国産施釉陶磁器・輸入陶磁器がある。土師器は皿Ｎ（593～606）、皿Sh（607～612）、皿Ｓ（613～624）、合子（625・626）、羽釜（627）がある。皿Ｎは口径7.4～8.9㎝、器高1.2～1.6㎝のものと、口径10.6～11.4㎝、器高1.8～2.5㎝のものがある。皿Shは口径5.9～7.4㎝、器高1.5～2.0㎝。皿Ｓは口径7.6～8.1㎝、器高2.1～2.2㎝のものと、口径8.9～9.2㎝、器高1.6～1.9㎝のもの、口径11.0～11.4㎝、器高2.5～3.1㎝のもの、口径15.3㎝、器高4.6㎝のものがある。625・626は合子である。器壁が薄く、内外面に丁寧なナデ調整を施す。627はミニチュアの羽釜である。内外面に丁寧なナデ調整を施す。瓦器は羽釜（628）、鍋（629）がある。628はミニチュアの三足羽釜である。629は内湾した蓋受けがつく鍋。外面はオサエの指痕を明瞭に残し、内面にナデ調整を施す。須恵器は東播系の鉢（630）がある。口縁端部が拡張して縁帯状を呈する。焼締陶器には、常滑産の甕（635）がある。口縁部縁帯は下方に垂下し、幅は約４㎝を測る。国産施釉陶磁器には古瀬戸入子（631・632）がある。631は口縁部をヘラ状工具で押さえて輪花状に整形する。632はヘラケズリで輪花の凹部を形成する。輸入陶磁器には青白磁の合子身（633・634）がある。633は型押しによる菊型合子である。蓋の受部と体部下半は露胎する。634は蓋の受部と体部下半は露胎する。京都Ⅶ期新段階。

土坑1572出土土器（図版74　636～646）　土師器・瓦器がある。土師器は皿Ｎ（636～639）、皿Ｓ（640・641）、羽釜（642・643）がある。皿Ｎは口径8.0㎝、器高1.6㎝のものと、口径10.2～12.0㎝、器高1.6～2.3㎝のものがある。皿Ｓは口径10.6～11.0㎝、器高2.8㎝のものがある。642・643は小型の羽釜である。体部は球形で口縁端部は立ち上がる。口縁部外面に鍔が付く。瓦器は小椀（644）、皿（645）、鍋（646）がある。646は口縁部が屈曲して受口状をなす。京都Ⅶ期新段階。

土坑1552出土土器（図版74　647～652）　土師器・瓦器がある。土師器は皿Ｎ（647・648）、皿Sh（649）、皿Ｓ（650・651）がある。皿Shは口径7.0㎝、器高1.8㎝。皿Ｎは口径7.8～9.0㎝、器高1.7～1.9㎝のものがある。皿Ｓは口径7.8㎝、器高2.2㎝のものと、口径14.2㎝、器高2.5㎝のものがある。瓦器は羽釜（652）がある。口縁部が直立して立ち上がる。京都Ⅸ期。

５）安土桃山時代から江戸時代初頭

土坑1539出土土器（図版74　653～662）　土師器がある。土師器は皿Sh（653・654）、皿Ｓ（655～662）がある。皿Shは口径6.3㎝、器高1.4㎝のものと、口径8.6㎝、器高1.6㎝のものがある。皿Ｓは口径7.1～9.0㎝、器高1.5～1.7㎝のものと、口径11.2㎝、器高2.0㎝のもの、口径13.4～14.4㎝、器高2.0～2.3㎝のものがある。656・657は煤が付着する。京都Ｘ期。

土坑638出土土器（図版75・130　663～694）　土師器・輸入陶磁器がある。土師器は皿Sh（663・664）、皿Ｓ（665～693）がある。皿Shは口径7.0㎝、器高1.8㎝。皿Ｓは口径8.7～9.0㎝、器高1.6～2.1㎝のものと、口径11.2～11.6㎝、器高2.0～2.1㎝のもの、口径13.6～15.6㎝、器高2.0～

2.4㎝のもの、口径17.0～18.0㎝、器高2.0～2.6㎝のものがある。輸入陶磁器には龍泉窯系の青磁椀（694）がある。内面見込みに圏線が巡り、底部内面に簡略化した花文を線刻する。京都Ⅹ期古段階。

土坑群Ｂ（土坑2506）出土土器（図版75・130　695～702）　土師器・国産施釉陶磁器・焼締陶器がある。土師器は皿Ｓ（695～699）、皿Ｎr（700）がある。皿Ｓは口径11.8～12.2㎝、器高2.7～2.8㎝のものと、口径14.9～15.0㎝、器高2.8㎝のものがある。皿Ｎrは口径5.8㎝、器高1.3㎝。焼締陶器には常滑産の甕（701）がある。口縁部縁帯が下方に垂下している。国産施釉陶磁器は古瀬戸袴腰形香炉（702）がある。底部に糸切り痕が残る。京都Ⅹ期。

埋甕1531出土土器（図版75・130　703～705）　土師器と須恵器がある。土師器は皿Ｎ（703）、皿Ｓ（704）がある。皿Ｎは口径6.8㎝、器高1.4㎝。皿Ｓは口径10.0㎝、器高2.1㎝。705は東播系の須恵器甕である。京都Ⅹ期。

井戸1595出土土器（図版75　706・707）　土師器と焼締陶器がある。土師器の皿Ｓ（706）は口径13.2㎝、器高2.8㎝。焼締陶器は備前擂鉢（707）がある。京都Ⅹ期。

６）江戸時代

江戸時代前半整地層出土土器（図版76・130　708～726）　土師器・瓦器・焼締陶器・国産施釉陶磁器・輸入陶磁器がある。土師器は皿Ｓ（708～712）、丸底鉢（713）、つぼつぼ（714）がある。皿Ｓは口径8.3～8.6㎝、器高1.6～2.1㎝のものと、口径11.0～11.5㎝、器高1.9～2.1㎝のもの、口径14.6㎝、器高2.8㎝のものがある。713は内面に丁寧なナデ調整を施す。瓦器は香炉（715）、灯火具（716）がある。香炉は平底で体部外面に印花を施す。焼締陶器は備前産の擂鉢（717）がある。口縁部を上方に拡張した縁帯に２条の凹線を加える。卸し目は底部内面の見込みから下から斜め方向に掻き上げている。国産施釉陶磁器は肥前系、瀬戸・美濃系がある。肥前系陶器には椀（718）がある。718は削出高台の椀で、灰釉を体部下半まで漬け掛けする。瀬戸・美濃系の陶器には、椀（719～721）、皿（722・723）がある。719・720は天目茶椀。鉄釉を施す。721は半筒椀である。722は志野織部。文様を鉄釉で描き、長石釉を施す。体部外面に間道文、内面に列点文。723は総織部の輪花皿である。口縁部内側に括弧形の区画文を施し、区画内に花文、区画外に青海波文を描く。底面内部には草花文。長石釉を掛けている。輸入陶磁器は産地不明の白磁、青磁がある。白磁は丸皿（724）がある。削出高台。藁灰釉を漬け掛けしたもので、体部外面下半から高台にかけて露胎している。高台内に朱墨が付着する。青磁は鉢（725）と椀（726）がある。725は口縁部が外反する角形の小鉢。削出高台。726は体部外面に蓮弁文、底部内面に双魚文を印刻する。京都Ⅺ期。

土坑179出土土器（図版76・131　727～743）　土師器・瓦質土器・国産施釉陶磁器がある。土師器は皿Ｓ（727～730）、皿Ｎr（731）、つぼつぼ（732）がある。皿Ｓは口径10.2～11.3㎝、器高1.8～2.4㎝。皿Ｎrは口径5.4㎝、器高1.2㎝。瓦質土器は火消壷（733）がある。

国産施釉陶磁器には肥前系、京都・信楽系、瀬戸・美濃系のほか、軟質施釉陶器、産地不明のものがある。肥前系の陶磁器には紅皿（734）、椀（735・736）がある。734の紅皿は体部に羽子板と羽根の図柄を交互に配する。735の椀は、内面見込み蛇の目釉剥ぎで、体部外面に草花文を描く。底

部外側に圏線、高台外面に二重圏線を配する。736は京焼風の丸椀である。口縁端部内面がわずかに肥厚し、体部に山水楼閣文を施す。高台内に刻印。京都・信楽系の陶器には、椀（738・739）・花入（740）・皿（741）がある。738・739は半筒椀。738は鉄釉と灰釉を掛け分けている。739は体部外面に白釉と錆漆で草原の鷺を絵付けする。740は花入れである。体部外面に錆漆で松を絵付けする。底部外面に三叉トチン痕を残す。741は削出高台の皿である。内面の見込みに三叉トチン痕を残す。底部内面に竹の絵付けを行った後、透明釉を施す。瀬戸・美濃系の陶器には鬢水入（742）がある。体部に梅樹文の錆絵を施す。軟質施釉陶器には鬢水入（743）がある。口縁端部に緑釉で列点状に上絵付けを施す。類品がもう一点出土している。産地不明の陶磁器には染付の蓋（737）がある。737は土瓶の蓋で、かえりを持つ。丸いボタン状の摘みの周囲に渦巻文を巡らす。内面は露胎する。

土坑144出土土器（図版77・131　744～755）　焼締陶器・国産施釉陶磁器がある。国産施釉陶磁器には軟質施釉陶器、瀬戸・美濃系、肥前系、京都・信楽系のものがある。焼締陶器には堺・明石擂鉢がある（744）。軟質施釉陶器には外面に蓮華座風の意匠を線刻している745がある。内面に透明釉を施した後、底部内面に緑釉で点状の上絵付けを行っている。瀬戸・美濃系磁器には、染付の椀（746・747）がある。746・747はわずかに口縁部が外反する端反椀である。746は体部外面に観世文を施す。747は太い染付帯線の間に牡丹文。焼継ぎによる補修がある。

肥前系陶磁器には、陶器の椀（748）、火入（749）、磁器の椀（750）、皿（751～753）、猪口（754）がある。748は藁灰釉を刷毛塗りした端反椀である。749は白化粧に呉須絵付した火入である。体部が筒型を呈し、口縁端部が内側に肥厚する。内外面に２次被熱痕。750は広東椀である。内面無文。体部外面に蛸唐草。銘款は「乾」の篆書体である。751は染付の皿。菊花型に型打ち整形した、所謂なます皿である。口縁端部は露胎しており、内面に山水文を施す。752・753は菊花型に型打ち整形した青磁の輪花皿である。蛇の目凹形高台を持つ。752は口縁端部が露胎している。754は染付の猪口である。外面に矢筈文、口縁部内面に四方襷文を施す。底部内面の見込みに二重圏線を巡らし、中央に五花弁文を施す。京都・信楽系陶器には土瓶（755）がある。体部内面に錆釉を施し、外面に鯉をイッチン描きする。

（３）瓦類（付表３）

今回の調査では、遺物整理箱約12箱分の瓦類が出土した。瓦の種類は、軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・道具瓦・丸瓦・平瓦と、刻印を施した平瓦などがある。各出土点数は、軒丸瓦88点・軒平瓦110点・軒桟瓦16点で軒瓦計214点、鬼瓦５点、鳥衾瓦２点・他の道具瓦２点、緑釉丸瓦１点、刻印を施した平瓦１点・他の平瓦２点などである。なお、個々の瓦類の詳細については遺物観察表（付表３）に掲載した。

軒瓦の文様・産地による分類は、瓦類分類別出土数量一覧表（表５）にまとめた。軒丸瓦と軒平瓦の比率は２：３で軒平瓦の方がやや多い。

軒瓦の遺構別の出土数は、表６の通りである。1面では土坑162から軒丸瓦１点・軒平瓦３点・軒桟瓦１点、土坑2063から軒平瓦３点・軒桟瓦２点出土した。２面では土坑群Ｂから軒丸瓦37点・軒平瓦29点出土した。３面では土器溜2257から軒平瓦７点、土坑2893から軒丸瓦４点・軒平瓦１点出土した。その他の遺構では、１～３点と少ない。遺構以外では、整地層（１面）で軒丸瓦６点・軒平瓦３点、整地層（２面）で軒丸瓦１点・軒平瓦１点、整地層（３面）で軒丸瓦３点・軒平瓦４点出土した。軒瓦以外では、鬼瓦２点が土坑512、鳥衾瓦２点が土坑群Ｂ・C、緑釉丸瓦１点が土坑530から出土した。

１）分類

軒丸瓦　瓦当文様によって分類すると19種となり、小片又は文様が不明瞭なため型式が認定できないものが多数ある。

瓦当文様は、蓮華文・巴文・桐文に大別した。

蓮華文は13種34点出土し、複弁蓮華文４種５点、単弁蓮華文７種13点、単複交互弁蓮華文２種16点に分類した。さらに、中房・蓮弁・間弁の形状、及び外区の有無などによって細分した。巴文は49点出土し、巴文の単位数、頭部・尾部の接続方法、及び外区の文様によって細分した。桐文は１種１点出土した。

種類ごとの点数は、付表３の瓦10が10点、瓦13・瓦14が各６点、瓦20が37点で、他は１種３点以下と少ない。型式としては、讃岐産蓮華文軒丸瓦10～15が16点、産地不明巴文瓦20が37点と多い。

軒平瓦　瓦当文様によって分類すると31種となり、小片又は文様が不明瞭なため型式が認定できないものが多数ある。

瓦当文様は、唐草文・半裁花文・連巴文・剣頭文・連珠文に大別した。

唐草文は27種104点出土し、外行唐草文20種51点、内行唐草文４種34点、偏行唐草文３種19点などに分類した。さらに、中心文の形・有無、唐草の形状、及び外区の有無・形状などによって細分した。半裁花文は１種１点出土した。連巴文は１種１点出土した。剣頭文は２点出土し、いずれも陰刻文様で、剣形の形状によって二つに分類した。

種類ごとの点数は、軒平瓦33が７点、瓦34が11点、瓦44が31点で、他は１種３点以下と少ない。型式としては、讃岐産偏行唐草文瓦33～35が20点、産地不明内行唐草文瓦44が31点と多い。

２）出土瓦（表５、図版78～83・132～133）

出土瓦類が属した時期と生産地は、同笵瓦・同文瓦の出土した遺跡の年代、及び瓦当文様系譜や成形技法の特徴から判断したが、時期・生産地が不明なものも少なくない。

瓦類の時期は、奈良時代（８世紀）、平安時代前期（９世紀）から中期後半（10～11世紀）、後期初葉（11世紀後半）、後期（12世紀）、鎌倉時代（13世紀）、鎌倉時代から室町時代（13～15世紀代）、安土桃山時代（16世紀）、江戸時代（17世紀以降）に分けた。

時期別軒瓦の割合は、奈良時代３点、平安時代前期から中期後半８点、後期初葉３点、後期前葉から後葉52点（24％）、鎌倉時代16点（７％）、鎌倉から室町時代68点（32％）、安土桃山時代１点、江戸時代以降62点（29％）である。鎌倉から室町時代と江戸時代以降がやや多く、平安時代後期が続き、これで大半を占める。他の時期は極わずかである。

３）分析

今回の調査で出土した瓦類は、当地域の変遷を考える上で重要な資料である。以下、まとまって出土した平安時代後期の讃岐産軒瓦と、鎌倉時代から室町時代の軒瓦について分析を加える。

平安時代後期の讃岐産軒瓦　12世紀の讃岐産瓦は、軒丸瓦22点・軒平瓦20点出土した。

軒丸瓦は、単複交互弁蓮華文瓦10～13のグループと、単弁蓮華文瓦14・15の二つに大きく分けられる。前者は瓦当文様が同様で、大小２種類に分類できる。これらの軒丸瓦の瓦当部成形技法は共通する。瓦当部裏面調整は、ナデ13点、平行タタキ５点、縄タタキ後ナデ２点、ケズリ１点、不明１点に分かれ、平行・縄タタキを施すものが主体を占める。

軒平瓦は、偏行唐草文瓦33～35のグループと、連巴文の瓦36の二つに大きく分かれる。偏行唐草文は、右偏行の瓦33と左偏行で唐草が１重の瓦34、唐草が２重の瓦35に分かれる。これらの軒平瓦の顎形態は共通し、瓦当部成形技法も共通する。瓦当部調整技法は、瓦当部上縁を横ケズリし、凸面から平瓦凸面にかけて斜方向の縄タタキを施す。その後瓦当部凸面を大きく横ケズリし、平坦面とする。

以上の軒丸瓦・軒平瓦は、当該期の軒瓦の中で大半を占め、軒丸瓦と軒平瓦が組み合っていたと推定できる。軒丸瓦は大小２種類のものが使い分けられていたことが伺える。

軒平瓦35・36は鳥羽殿金剛心院出土瓦と同文であり、他も含め12世紀中葉に属したと推定できる。

出土遺構は、整地層１面が３点・整地層３面が３点・土器溜2257が６点・土坑2893が５点とやや多い。

当該瓦は、磨滅していないことから、文献史料では確認できないものの、当時期に調査区周辺に瓦葺きの建物が存在した可能性を示唆する。

表５　瓦類分類別出土数量表

時期	種類	文様	山城	播磨	丹波	大和	讃岐	和泉	産地不明	小計	計
８世紀	軒丸瓦	蓮華文				2				2	2
	軒平瓦	外行唐草文				1				1	1
９～11世紀	軒丸瓦	単弁蓮華文	1		1					2	4
		複弁蓮華文	2							2	
	軒平瓦	外行唐草文	2						1	3	4
		半裁花文			1					1	
11世紀後半	軒平瓦	内行唐草文	3							3	3
12世紀	軒丸瓦	複弁蓮華文	2							2	29
		単弁蓮華文	1				6		3	10	
		単複交互弁					16			16	
		巴文	1							1	
	軒平瓦	外行唐草文		1	1					2	23
		左偏行唐草文					8			8	
		右偏行唐草文					11			11	
		唐草文	1							1	
		連巴文					1			1	
13世紀	軒丸瓦	巴文							7	7	7
	軒平瓦	外行唐草文							5	5	9
		唐草文							2	2	
		剣頭文	1							1	
		連珠文						1		1	
13～15世紀	軒丸瓦	巴文							37	37	37
	軒平瓦	内行唐草文							31	31	31
16世紀	軒丸瓦	桐文							1	1	1
17世紀以降	軒丸瓦	巴文							4	4	7
		文様不明							3	3	
	軒平瓦	外行唐草文							39	39	39
	軒桟瓦	外行唐草文							16	16	16
時期不明	軒丸瓦	文様不明							1	1	1
計			14	1	3	3	42	1	150	214	

表６　瓦類遺構別出土数量表

遺構面	遺構名	８世紀		９～11世紀		11世紀後半	12世紀		13～15世紀		16世紀	17世紀以降			時期不明	計
		軒丸	軒平	軒丸	軒平	軒平	軒丸	軒平	軒丸	軒平	軒丸	軒丸	軒平	軒桟	軒丸	
平安時代後期～鎌倉時代前半	溝2253							1								1
	溝3036			1		1										2
	溝3061		1				1	1								3
	溝3441			1												1
	井戸2961				1		1									2
	土坑381						1	1								2
	土器溜2257					1		6								7
	土坑2892							2								2
	土坑2893						4	1								5
	土坑2895							1								1
	土坑3113						1									1
	土坑3182						2									2
	土坑3468							1								1
	土坑3471							1								1
	柱穴767							1								1
	柱穴794						1									1
	柱穴1017							1								1
	柱穴2969						1									1
	整地層(3面)			1	2		2	2								7
鎌倉時代後半～室町時代	溝2250								1							1
	柵730								1							1
	柵847								1							1
	塀2206						1									1
	土坑608						1									1
	土坑709									1						1
	土坑2745						1									1
	土坑2811			1					1							2
	土坑2814							1								1
	土坑2841												*1 混入			1
	石室2720								1							1
	柱穴2763						1									1
安土桃山時代	土坑群B	1						1	33	28	1	1			1	66
	土坑群C					1										1
	土坑群D						1									1
	土坑群E									1		1				2
	土坑群F	1														1
	土坑群G						2	1								3
	土坑638						1									1
	整地層(2面)									1		1				2

遺構面	遺構名	8世紀		9～11世紀		11世紀後半	12世紀		13～15世紀		16世紀	17世紀以降			時期不明	計
		軒丸	軒平	軒丸	軒平	軒平	軒丸	軒平	軒丸	軒平	軒丸	軒丸	軒平	軒桟	軒丸	
江戸時代	溝2858												1			1
	井戸2002												1			1
	井戸2013								1	1						2
	井戸2035													1		1
	井戸2073													1		1
	井戸2074													1		1
	井戸2158						1									1
	土坑44												1			1
	土坑58											1				1
	土坑60												1			1
	土坑100											1				1
	土坑106											1				1
	土坑144													2		2
	土坑162								1				3	1		5
	土坑163													1		1
	土坑164													2		2
	土坑165												3			3
	土坑261									1						1
	土坑2012												3			3
	土坑2015												2	1		3
	土坑2039									1						1
	土坑2056													2		2
	土坑2062												2			2
	土坑2063												3	2		5
	土坑2080									1						1
	土坑2108							1								1
	土坑2127									1						1
	土坑2145													1		1
	土坑2233												3			3
	土坑2352												3			3
	土坑2381									1						1
	土坑2568						1									1
	建物2284				1		1		1							3
	柱穴2156												2			2
	整地層(1面)						3		2	2		1	1			9
不明	表採						1									1
	攪乱								1	1			9	1		12
	計	2	1	4	4	3	29	23	44	40	1	7	39	16	1	214

鎌倉時代から室町時代の軒瓦　13～15世紀と推定した軒瓦は、軒丸瓦37点・軒平瓦31点出土した。軒丸瓦・軒平瓦共に１種類である。出土点数もほぼ揃うことから、軒丸瓦と軒平瓦が組み合って使用されたと推定できる。出土した遺構は、整地層１面が４点・土坑群Ｂが56点に集中する。

当該瓦は、磨滅していないことから、文献史料では確認できないものの、当時期には調査区周辺に瓦葺きの建物の存在が推定できる。いずれも小型瓦であることから、築地または小型の堂宇の所用瓦であったと想定できる。さらに、大半ものが火を受けて赤褐色化しており、所用建物が焼失した可能性が高い。

（４）石器・石製品

今回の調査では、遺物整理箱約29箱分の石器・石製品が出土した。 内容は弥生時代の石器が８割を占め、中世以降の滑石製品や砥石、硯などは２割程度である。

１）石器（図版84～89・134～137、図18～21、表７～10、付表４）

弥生時代の石器には、磨製石戈・磨製石剣・打製石鏃・磨製石鏃・磨製石包丁・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・磨製両刃石斧・敲石・砥石・石鋸・石錐・打製石器類・玉類などがある。また完成品のほか、未成品や製作時の剥片、原石なども出土した。

磨製石戈・石剣（図版84・134　石１～３） 完成品・破損品・未成品15点のうち３点を図化した。石材は頁岩ないし粘板岩である。石１は石戈である。鎬がわずかに斜交する角度を持つ。石２は鉄剣形石剣の剣身部。側縁部に再加工剥離がある。石３は石剣の未成品。側縁部に調整剥離を施す。表面に研磨が認められるが、刃や鎬は研ぎだされていない。

完成品・破損品の半数近くが流路1132（新）Ⅰ・Ⅱ層から出土した。未成品は流路1132（新）Ⅰ・Ⅱ層や土坑3584から出土した。

打製石鏃（図版84・134、表７　石４～28・32・33） 完成品・破損品・未成品53点のうち30点を図化した。石材はすべてサヌカイトである。石鏃の矢柄を装着する基部の形状が判別できる39点については、平基式、凹基式、凸基式、有茎式に分類できる[43)]。

平基式は11点出土した。石基部が直線的に仕上げられている１類（石４・５・32）と、平基に近い凹基状に仕上げられている２類（石６～12・33）がある。平基１類は３点出土した。0.5～0.8ｇの小型品と、2.0ｇの大型品がある。平基２類は８点出土した。0.5～2.6ｇを測る。なお、石32・33は弥生時代中期後葉の方形周溝墓3543から出土したが、混入の可能性がある。

凹基式は22点出土した。刺突部が直線的に調整されて平面形が縦長の二等辺三角形を呈する１類（石19）、刺突部が直線的に調整されて平面形が正三角形を呈する２類（石13・17・18）、刺突部側縁が緩やかに外湾する３類（石14～16・22）、刺突部側縁が緩やかなS字状を呈する４類（石20・21）がある。凹基１類は４点出土した。0.5～2.2ｇを測る。１ｇ未満のものは欠損部がある。完形品は、1.0ｇ・2.2ｇである。凹基２類は10点出土した。欠損したものが多いが、重量は0.5～1.7ｇを測る。凹基３類は５点出土した。0.6ｇ（欠損部あり）、1.7～2.6ｇを測る。凹基４類は３点出土した。全点欠損部があり、重量は0.8～1.9ｇを測る。

表７　打製石鏃分類別出土数量表

	竪穴建物						土坑					方形周溝墓3543	溝1245	流路1132(古)上層	流路1132(新)					検出・混入	計
	1055	1206	2222	3576	3581	3585	1078	3549	3554	3588	3590				Ⅳ層	Ⅱ層	Ⅱ層上層	Ⅰ層	層位不明		
平基１類												1	1		1						3
平基２類	1		1						1			1				1	1	1		1	8
凹基１類								1								1		1	1		4
凹基２類	2	1	1		1	1				2		1						1			10
凹基３類							1				1			1				2			5
凹基４類				1										1			1				3
凸基式		1								1								1		1	4
有茎１類																				1	1
有茎２類													1								1
計	3	2	2	1	1	1	1	1	1	3	1	3	2	2	1	2	2	6	1	3	39

＊全形が判別できたもののみ集計

表８　石包丁分類別出土数量表

分類			竪穴建物1206	竪穴建物2222	竪穴建物3544	柱穴1253	土坑3590	溝1245	流路1132(新)			検出・混入	小計	中計	計
									Ⅱ層	Ⅱ層上層	Ⅰ層				
直刃	弧背・尖端	成品		1	1				1	1	3	1	8	13	44
		未成品					1		2		1	1	5		
	弧背・弧端	成品							3	2	6	1	12	14	
		未成品							1		1		2		
	弧背・直端	成品							1			3	4	4	
		未成品											0		
	直背・直端	成品	1						2		2		5	12	
		未成品							4	2	1		7		
	直背・弧端	成品											0	1	
		未成品									1		1		
弧刃	弧背・尖端	成品				1							1	2	3
		未成品									1		1		
	弧背・直端	成品						1					1	1	
		未成品											0		
内湾刃	弧背・弧端	成品										1	1	1	1
		未成品											0		
計			1	1	1	1	1	1	14	5	16	7	48		

＊全形が判別できたもののみ集計

凸基式は４点出土した。石23は未成品の可能性がある。平面形がやや幅広の木葉形を呈する（石24～26）。重量は1.0～2.1ｇを測る。図化していないが、2.1ｇのものは基部が欠損している。有茎式は２点出土した。刺突部と基部の境界が逆刺状に張り出す１類（石27）と、柳葉形を呈する２類（石28）がある。各１点出土した。重量は前者が1.7ｇ、後者が5.1ｇを測る。

基部を凹基状に仕上げるものが主体を占める。重量は欠損品があるため明確ではないが、1.3ｇ以下の小型品と、1.7ｇ以上の大型品があると考えられる。

磨製石鏃（図版84・134　石29～31）　完成品・破損品・未成品４点のうち３点を図化した。石29・30は磨製石包丁からの再加工品。石30は石包丁の穿孔部を刺突部と基部の境界として茎を作り出している。石31は表裏面を研磨する大型の有茎式石鏃である。石材は石29・30が粘板岩、石31はサヌカイトである。出土は流路1132（新）Ⅳ層・残土・新しい時期の遺構への混入である。

石包丁（図版85・135、図18、表８　石34～57）　完成品・破損品・未成品126点（全形がわかるものは48点）のうち24点を図化した。石材は粘板岩や緑泥片岩がある。ほとんどが粘板岩の完成品・破損品・未成品であり、緑泥片岩のものは完成品が１次調査１点、今回調査１点出土した。完成品・転用品（石34～45）と研磨前の未成品（石46～57）がある。

完成品の刃部形態には、直線刃（直刃）・外湾刃（弧刃）・内湾刃がある。直線刃がほぼ９割を占め、外湾刃・内湾刃は少ない。また、外湾刃としたものは破損品のみであるため、全形で判断できたものではない。直線刃のものには、弧状の背部を持ち、端部が鋭角をなすもの（石36）・端部が弧状を呈するもの（石34・35・37・38）・端部を直線状に研ぎだすもの（石41・42）と、背部・端部を直線状に研ぎだすもの（石43・44）がある。外湾刃のものには、弧状の背部を持ち、端部が鋭角をなすもの（石39）、端部を直線状に研ぎだすものがある。石40は未貫通穿孔が４箇所ある。内湾刃を持つ石45は、石鎌の可能性がある。石39・45は再加工品。石34～36の刃部は摩耗による光沢が認められる。

未成品は、側縁部に調整剥離痕を残し、表面に研磨痕が認められない器形調整段階のもの（石46～52）と、粗加工段階のもの（石53～57）を中心に図化した。器形調整段階の刃部形態には、直線刃（直刃）・外湾刃（弧刃）がある。直線刃がほぼ９割を占め、外湾刃は少ない。直線刃のものには、弧状の背部を持ち端部が鋭角をなすもの、端部が弧状を呈するもの、端部を直線状に成形するもの、背部・端部を直線状に成形するもの（石46）がある。なお、石46は端部の一方を弧状に調整しているようにも見えるため、ここから器形が変化する可能性もある。外湾刃のものには、弧状の背部を持ち端部が鋭角をなすもの（石50）がある。石53～57は、側縁部に擦切施溝分割痕[14)]（図18）を残す。いずれも表面研磨は施されていない。

図18　石包丁の擦切施溝分割痕（石56）

完成品・破損品の大多数が流路1132（新）Ⅰ・Ⅱ層から

出土したが、竪穴建物からも少量出土した。未成品も半数以上が流路1132（新）Ⅰ層・Ⅱ層上層・Ⅱ層からの出土である。竪穴建物や土坑からの出土は少ない。

柱状片刃石斧（図版86・135　石58・69・70）　完成品・破損品・未成品３点を図化した。石58は結晶片岩を素材とした刃部片で、左右側面が石の節理に沿って剥離している。石69・70は所謂鑿形石器である。横断面は正方形を呈する。ほぼ完形であるが、刃部先端が使用によって剥離している。石材は頁岩ないし粘板岩である。ほとんどが残土や新しい時期の遺構への混入品であるが、流路1132（新）Ⅰ層から１点が出土した。

扁平片刃石斧（図版86・135　石59～68）　完成品・破損品・未成品12点のうち10点を図化した。いずれも石材は頁岩ないし粘板岩である。長方形のもの（石59～62）と、楔形を呈するもの（石63～66）、やや幅広で刃部が弧状を呈するもの（石67・68）がある。長方形のものは法量差があり、長2.7㎝の極小型（石59）・長5.3㎝の小型（石60）・長13㎝程度の中型（石61・62）がある。いずれも稜は不明瞭である。楔形を呈するものにも法量差があり、長2.2㎝の極小型（石63）・長3.7㎝の小型（石64）・長５㎝程度の中型（石65・66）がある。石64・65は稜が明瞭であるのに対して、石63は横断面形がレンズ状を呈し、稜も不明瞭である。再加工品の可能性がある。石65は前主面の基部に抉りを持つ。石66は基部に摩耗による光沢が認められる。やや幅広で刃部が弧状を呈する石67・68は、刃部端に使用による磨滅が認められる。石鍬の可能性がある。

完成品・破損品・未成品の大多数が、流路1132（新）から出土した。特に流路1132（新）Ⅱ層からの出土が突出している。

磨製両刃石斧（図版86・87・136　石71～80）　完成品・破損品・未成品・転用品20点のうち10点を図化した。石材は閃緑岩や石英斑岩などの火成岩である。完成品（石71～73）と研磨前の未成品（石74～76）がある。石77～80は敲石に転用したものである。基部形は、横幅に対して狭く明確に尖るもの（石71）、横幅とほぼ同じの平基・円基を持つもの（石73・77～80）がある。断面形には円形～楕円形のものが主体を占めるが、石72は隅丸三角形状を呈する。

完成品・破損品・未成品の大多数が、流路1132から出土した。特に流路1132（新）Ⅱ層からの出土品が目立つ傾向にある。

敲石（図版87・136　石81～86）　出土した12点のうち６点を図化した。石81・82の石材は石英斑岩。法量から太型蛤刃石斧の転用品である可能性がある。石83・84は先端部・側縁部に敲打痕。石85は全面に敲打痕を残すが、一部凹石状に敲打が集中する部分がある。石86は、先端部に敲打痕。先端が尖ったものを何度も研磨したことによる凹部が、側面上方の相対する部分に２箇所認められる。また、砥石使用面や線状痕も複数認められる。

ほとんどが流路1132（新）からの出土である。方形周溝墓3543からも１点出土したが、下層に竪穴建物2222があるため、混入した可能性もある。

砥石（図版88・137、図19　石87～94）　出土した43点のうち８点を図化した。石材はいずれも砂岩である。主体は置砥であり、手持砥は今回確認していない。法量は破損品を除くと重量700ｇ程度のものから12000ｇのものがある。石87・92は横断面三角形の深い線状痕を持つ筋砥石であ

表９　石器遺構別出土数量・重量表

遺構名	単位	石剣・石戈		打製石鏃		磨製石鏃		石包丁・石鎌		柱状片刃石斧		扁平片刃石斧	
		成品	未成品	成品	未成品	成品	未成品	成品	未成品	成品	未成品	成品	未成品
溝1245	個数 (重量)			3 (6.0)				1 (33.9)					
流路1132(古) 下層・湿地下層	個数 (重量)							1 (17.9)					
流路1132(古) 上層・湿地上層	個数 (重量)			2 (3.8)				2 (10.0)					
流路1132(新) Ⅳ層	個数 (重量)			1 (0.8)			2 (14.6)						
流路1132(新) Ⅲ層	個数 (重量)							2 (19.9)	3 (66.5)				1 (212.0)
流路1132(新) Ⅱ層	個数 (重量)		1 (141.1)	2 (3.4)	3 (8.0)			26 (636.5)	15 (582.1)			6 (1403.3)	
流路1132(新) Ⅱ層上層	個数 (重量)	1 (39.7)		2 (3.0)				3 (97.9)	7 (149.3)			2 (43.2)	
流路1132(新) Ⅰ層	個数 (重量)	5 (118.1)	1 (219.0)	7 (10.2)	2 (6.3)			21 (421.4)	15 (507.8)	1 (20.8)		2 (49.1)	
流路1132(新)・ 溝1245合流地点	個数 (重量)								1 (76.0)				
竪穴建物 1055	個数 (重量)			5 (4.3)	1 (0.6)			3 (20.8)					
竪穴建物 1206	個数 (重量)			2 (1.7)				1 (3.9)				1 (2.5)	
竪穴建物 2222	個数 (重量)			2 (1.4)				2 (36.8)					
竪穴建物 3544	個数 (重量)							1 (28.9)					
竪穴建物 3576	個数 (重量)			1 (0.8)									
竪穴建物 3579	個数 (重量)				1 (2.7)								
竪穴建物 3581	個数 (重量)			1 (1.0)				1 (10.4)					
竪穴建物 3585	個数 (重量)			1 (1.2)									
土坑1078	個数 (重量)			1 (0.6)									
土坑1092	個数 (重量)	1 (2.1)											
土坑1258	個数 (重量)												
土坑3549	個数 (重量)			1 (0.5)									
土坑3554	個数 (重量)			1 (0.5)									
土坑3566	個数 (重量)								1 (125.7)				
土坑3584	個数 (重量)		1 (176.2)	1 (0.5)									
土坑3588	個数 (重量)			3 (2.5)									
土坑3590	個数 (重量)			2 (2.4)					1 (16.2)				
柱穴1209	個数 (重量)												
柱穴1211	個数 (重量)				1 (1.0)								
柱穴1253	個数 (重量)							1 (27.7)					
柱穴1280	個数 (重量)												
方形周溝墓 3543	個数 (重量)			3 (3.2)									
混入	個数 (重量)	2 (166.8)		1 (1.7)		1 (23.1)		7 (88.9)	1 (34.3)	1 (12.0)			
残土・検出	個数 (重量)	2 (117.0)	1 (174.4)	3 (2.5)			1 (5.4)	9 (153.5)	5 (158.6)		1 (21.2)		
計	個数 (重量)	11 (443.7)	4 (710.7)	45 (52.0)	8 (18.6)	1 (23.1)	3 (20.0)	81 (1608.4)	49 (1716.5)	2 (32.8)	1 (21.2)	11 (1498.1)	1 (212.0)

＊重量の単位はg

遺構名	単位	磨製両刃石斧		敲石	砥石	石鋸	石錐	打製石器類 サヌカイト製	玉類		器種不明 磨製石器
		成品・ 転用品	未成品						成品	未成品	
溝1245	個数 (重量)						1 (0.5)	2 (25.2)		1 (-)	
流路1132(古) 下層・湿地下層	個数 (重量)	1 (328.0)			1 (12000.9)			1 (6.2)			
流路1132(古) 上層・湿地上層	個数 (重量)	2 (749.0)		1 (219.0)	1 (2565.0)						
流路1132(新) Ⅳ層	個数 (重量)		1 (1405.5)	1 (946.0)	1 (714.0)		1 (2.5)				
流路1132(新) Ⅲ層	個数 (重量)			1 (129.4)	3 (5391.0)			2 (19.9)			1 (25.0)
流路1132(新) Ⅱ層	個数 (重量)	6 (1847.7)	3 (1529.0)	4 (1221.5)	13 (7123.1)	1 (3.1)		7 (64.3)			
流路1132(新) Ⅱ層上層	個数 (重量)	1 (232.5)		1 (384.0)	10 (18218.0)	1 (29.6)				1 (1.2)	
流路1132(新) Ⅰ層	個数 (重量)	3 (1538.1)	3 (2932.5)	1 (100.1)	10 (15319.6)	2 (14.3)		5 (51.0)			1 (14.0)
流路1132(新)・ 溝1245合流地点	個数 (重量)										
竪穴建物 1055	個数 (重量)						6 (8.3)	3 (6.9)	1 (0.1)		
竪穴建物 1206	個数 (重量)						3 (6.9)				
竪穴建物 2222	個数 (重量)							1 (10.6)			
竪穴建物 3544	個数 (重量)	1 (212.0)					1 (1.8)				
竪穴建物 3576	個数 (重量)										
竪穴建物 3579	個数 (重量)										
竪穴建物 3581	個数 (重量)								3 (-)		
竪穴建物 3585	個数 (重量)										
土坑1078	個数 (重量)										
土坑1092	個数 (重量)										
土坑1258	個数 (重量)							1 (1.7)			
土坑3549	個数 (重量)										1 (16.1)
土坑3554	個数 (重量)										
土坑3566	個数 (重量)				1 (48.6)						
土坑3584	個数 (重量)										
土坑3588	個数 (重量)						1 (0.3)	1 (6.2)			1 (23.4)
土坑3590	個数 (重量)				1 (25.0)						
柱穴1209	個数 (重量)						1 (1.6)				
柱穴1211	個数 (重量)										
柱穴1253	個数 (重量)										
柱穴1280	個数 (重量)									1 (-)	
方形周溝墓 3543	個数 (重量)			1 (324.0)							
混入	個数 (重量)						1 (0.7)	2 (50.2)	1 (1.9)		
残土・検出	個数 (重量)			2 (785.5)	2 (1744.0)			2 (25.3)			
計	個数 (重量)	14 (4907.3)	7 (5867.0)	12 (4109.5)	43 (63149.2)	4 (47.0)	15 (22.6)	27 (267.5)	5 (2.0～)	3 (1.2～)	4 (78.5)

＊重量の単位はg

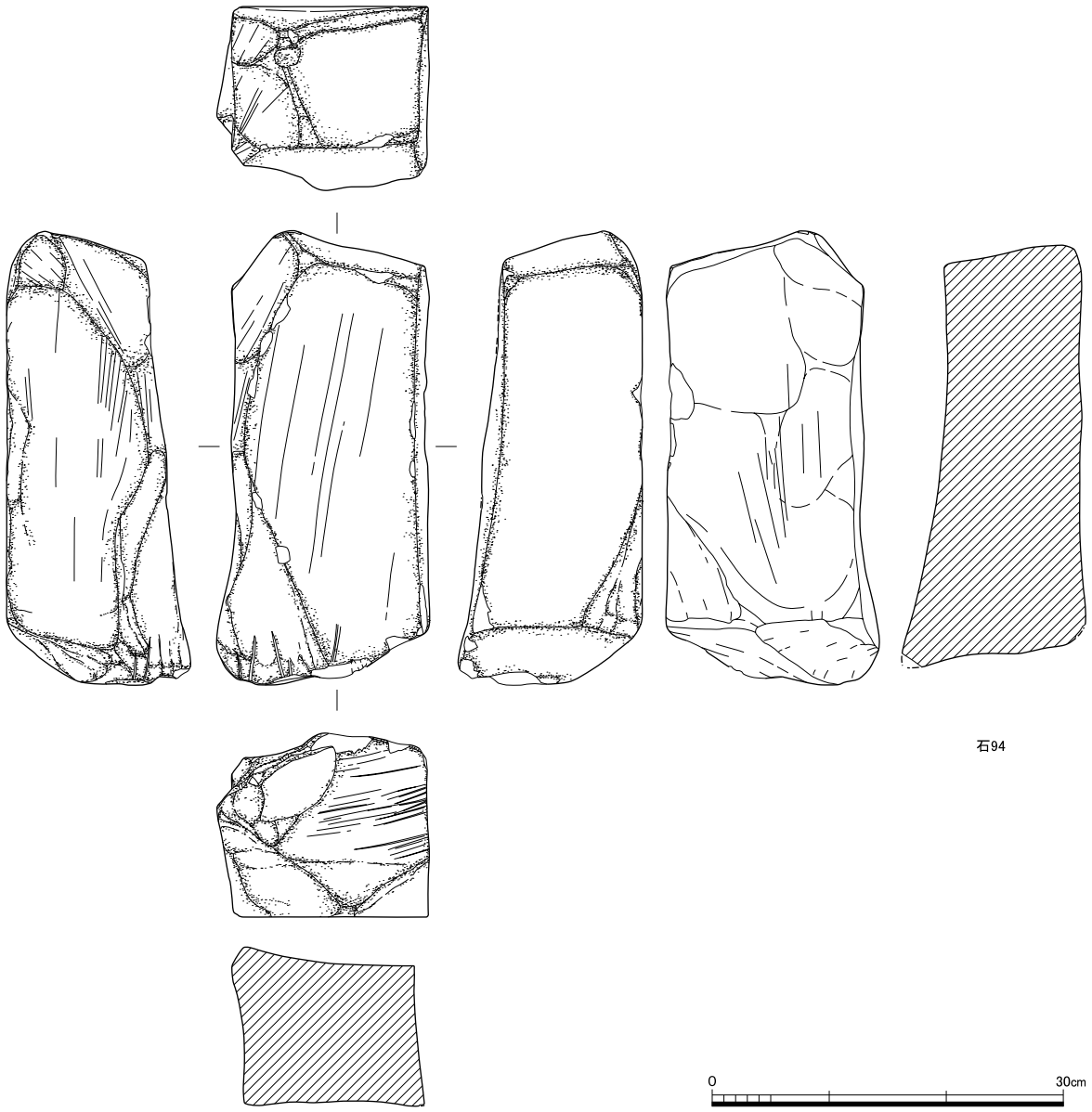


図19　砥石（石94）実測図（１：６）

る。石88は断面擂鉢状の円形凹みが１箇所認められる。石87～89は破損しているが、残存部から推定する限り、これらは完形でも重量1000ｇを大きく超えることはないと考えられる。一方、重量750ｇ以上を測る石90・91・93・94は、横断面が緩い円弧状を呈する広い主面を持つことを特徴とする。

出土した９割近くが流路1132（新）からの出土である。土坑から出土したものは破損品だけである。

石鋸（図版89・137　石95～97）　出土した４点のうち３点を図化した。石材はいずれも紅簾片岩である。石96・97は刃部が磨滅している。流路1132（新）Ⅰ層・Ⅱ層上層・Ⅱ層から出土した。

石錐（図版89・137、図20　石98～103・116）　出土した15点のうち６点を図化した。石材はすべてサヌカイトである。石101～103は広い扁平な握り部を持つ。石116（図20）は土器焼成後に底部穿孔する際、破損した石錐がそのまま残された資料である。底部外面から穿孔している。石錐は

細い軸部ではなく、断面二等辺三角形状を呈する。

主に竪穴建物や土坑から出土しており、溝1245や流路1132からの出土量は少ない。

打製石器類（図版89・137　石104～107）　出土した27点のうち４点を図化した。スクレイパー・楔型石器・２次加工ある剥片がある。スクレイパーは２点（104・105）を図化した。石材はサヌカイトである。いずれも剥片の側縁部に調整剥離を施す。楔型石器は１点（106）を図化した。石材はサヌカイトである。上下辺に両極打法によると思われる階段状剥離が認められる。２次加工がある剥片１点（107）を図化した。石材はサヌカイトである。縁辺部に微細剥離が認められる。

溝1245や流路1132からの出土品が多いものの、竪穴建物や土坑などからも一定量出土した。

玉類（図版89・137　石108～113）　出土した８点のうち６点を図化した。石材はいずれも碧玉である。石108～112は管玉である。すべて両面穿孔である。長さ0.7～0.8cm、径0.3cmの小型品と、長さ2.5cm、径0.8cmの大型品がある。石113は剥片である。出土量は僅少で、完成品は竪穴建物からの出土が中心である。微細な剥片は溝1245や流路1132（新）からも出土した。

流路1132(新)Ⅱ層出土

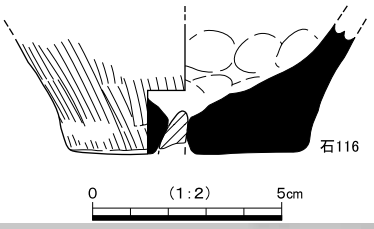


図20　土器焼成後穿孔中に破損した石錐（石116）

器種不明磨製石器（図版89・137　石114・115）　確認した４点のうち２点を図化した。石材はいずれも頁岩ないし粘板岩である。石114は先端が尖る棒状の成品。研磨痕は長軸に対して斜行するものが主体的である。石115は断面が扁平な篦状の成品。側縁部は面取り状に整えられ、刃部は認められない。土坑や流路1132から出土した。

原石・石核・剥片類（図21、表10）　石器製作に伴うと考えられる原石や石核、剥片なども出土した。取り上げにあたっては、竪穴建物は埋土をすべて0.5㎜の篩を用いて水洗篩い分けを行った。しかし他の遺構については、篩い分けが困難であったことから、取り上げの精度に差が生じている。竪穴建物と他の遺構との比較は、あくまで傾向を見る程度に留める。これら資料については、微細剥片などが多数を占めるため、点数ではなく重量を計測し、その結果を表10に示した。

図21　竪穴建物1055出土サヌカイト微細剥片

今回確認した石器製作に伴う石材は、サヌカイト、粘板岩・頁岩、チャート、火山岩（石英斑岩・閃緑岩・安山岩など）、変成岩（緑泥片岩・紅簾片岩）などである。サヌカイトは、弥生時代の各遺構で出土した。特に竪穴建物1055・1206・2222・土坑3549・3588では、石器製作に伴う微細剥片が多数出土した（図21）。粘板岩・頁岩も各遺構から出土したが、特に流路1132（新）でもⅡ層を中心に多数出土した。剥片類の中には一部が研磨されたものも確認できたことから、粘板岩・頁岩製磨製石器の再利用などが行われた可能性がある。

今回の調査地点では、チャートを石材とした完成品は確認できなかったが、人為的に打ち欠いたと考えられるチャートの剥片類も出土した。

石斧類や敲石などで利用される火山岩（石英斑岩・閃緑岩・安山岩など）は、主に流路1132から出土した。流路1132（古）からは、２次被熱した火山岩（石英斑岩か）の原石が出土した。

表10　石器原石・石核・剥片類遺構別出土重量表

遺構名	サヌカイト	粘板岩・頁岩		チャート	火山岩	変成岩	計
		剥片	研磨有り				
竪穴建物1055	227.9	45.5	11.6	5.1	31.3		321.4
竪穴建物1206	136.6	22.4		2.9	1.3	0.2	163.4
竪穴建物2222	60.8	122.1			0.3		183.2
竪穴建物3544	5.8	10.2					16.0
竪穴建物3576	16.0	25.5	4.0	0.9			46.4
竪穴建物3579	19.4	123.5		90.9			233.8
竪穴建物3581	7.5	9.4	1.5				18.4
竪穴建物3585	1.5	1.2					2.7
竪穴建物3631	2.2						2.2
土坑3549	32.7	21.0	19.5	14.6			87.8
土坑3554	24.2	0.8					25.0
土坑3584	10.9						10.9
土坑3588	46.7	16.4	4.2	8.9		1.5	77.7
土坑3590	1.3	3.4					4.7
溝1245	25.2			1.1	12.2		38.5
流路1132(古)下層・湿地下層	3.4	9.4					12.8
流路1132(古)上層・湿地上層	30.3	22.5		1.2	3210.0		3264.0
流路1132(新)Ⅳ層	42.8	362.4					405.2
流路1132(新)Ⅲ層	5.3	39.0	114.4				158.7
流路1132(新)Ⅱ層	326.1	1004.0	245.5	122.7	5322.0		7020.3
流路1133(新)Ⅱ層上層	237.2	153.4	41.3	238.8			670.7
流路1132(新)Ⅰ層	421.9	705.6	149.8	61.9			1339.2
流路1132(新)層位不明	3.3	36.6					39.9
方形周溝墓3543	21.3		3.8				25.1
計	1710.3	2734.3	595.6	549.0	8577.1	1.7	14168.0

単位(g)

変成岩の剥片類は、紅簾片岩を確認した。緑泥片岩は石包丁の破損品のみであり、剥片は確認していない。

2）石製品（図版90・138、付表５）

平安時代以降の石製品には、滑石製の石鍋や温石、砥石、硯などがある。

石鍋（図版90・138　石117～119）　石117は石鍋の口縁部である。口径26.0㎝、鍔径28.8㎝。体部は直線的に斜め方向に開く。縦方向の鑿痕は細く密である。土坑2811から出土した。石118は石鍋の口縁部である。口径18.8㎝、鍔径21.7㎝。体部は丸みを帯び、器壁は口縁部が厚く、体部下方に向かって薄くなる。鑿痕はほとんど目立たない。土坑2892から出土した。石119は石鍋底部の転用品である。底径20.2㎝。外面に縦方向の鑿痕が認められる。土坑2892から出土した。いずれも石材は滑石である。

温石（図版90・138　石120・121）　石120は釣鐘形の温石である。基部に１箇所穿孔を施す。江戸時代整地層から出土した。石121は平面不整形を呈する。１箇所穿孔を施す。溝3061から出土した。いずれも石材は滑石である。

砥石（図版90・138　石122～125）　京都Ⅵ期から京都ⅩⅢ期に至る各時代の砥石が出土した。形状が判明するものは50点である。４点を図示した。石122～124は平面長方形を呈する。石124は側面に円形の凹みを持つ。石125は断面Ｕ字状の線状痕を持つ筋砥石である。いずれも石材は泥岩である。石123～125は安土桃山時代から江戸時代初頭にかけての土取土坑群、石122が江戸時代の土坑530から出土した。

硯（図版90・138　石126～129）　京都Ⅶ期から京都ⅩⅢ期に至る各時代の硯が出土した[44]。形状が判明するものは18点である。４点を図示した。石126は転用硯。表面に平面長方形の硯面を加工し、裏面に加工前の墨池側硯面が残る。土坑群Ｃ出土。石127は陸部側の幅がやや広がるもの。硯縁の四隅に線刻文を施す。柵730出土。石128は平面長方形を呈し、裏面に陸側から抉りを入れ両側を脚状に残したもの。第２面検出中に出土した。石129は平面長方形を呈し、陸部に断面Ｕ字状の線状痕を残す。Ｅから出土した。

亀形石製品（図版90・138　石130）　用途不明の亀形石製品である。甲羅の肋甲板部分を容器状に凹ませている。内面に縦方向の細かい鑿痕が残る。縁甲板部分に亀甲文。土坑638下層の礫群内から出土した。

（５）木製品（付表６）

木製品は弥生時代中期前半の農工具や容器のほか、平安時代中期の漆器皿がある。農工具には広鍬・泥除・石斧柄がある。それぞれの法量は付表６に示した。

農工具（図版90・138　木１～３）　木１は広鍬の未成品である。両側縁に抉りを持つ。刃部は欠損する。前面上半部に段を削り出す。残存長32.7㎝、幅18.6㎝を測る。樹種はアカガシ亜属である。流路1132（新）Ⅱ層上層から出土した。木２は泥除か。柄孔上部と側縁が欠損する。残存長8.2㎝、幅10.4㎝を測る。柄の装着角度はほぼ90°である。樹種はアカガシ亜属である。流路1132（新）Ⅱ層上層から出土した。木3は直柄縦斧の一部である。頭部から装着孔までが残存する。残存長12.5㎝、幅4.8㎝を測る。斧の装着角度はほぼ90°である。樹種はアカガシ亜属である。流路1132（新）Ⅱ層から出土した。

容器（図版90・138　木４）　木４は平底の容器である。容器上部が欠損しており、全形は不明。底径7.5㎝を測る。樹種はニレ科（ケヤキ？）である。流路1132（古）湿地下層から出土した。

漆器皿（図版90・138　木５・６）　木５は内面赤色漆・外面黒色漆の漆器皿である。口径11.1㎝、底径8.0㎝、器高1.2㎝を測る。井戸3191から出土した。木６は内外面黒色漆の漆器皿である。口径10.9㎝、底径8.9㎝、器高1.4㎝を測る。井戸3191から出土した。いずれも漆塗膜の遺存状況は良好である。漆塗膜の自然科学分析結果は付章３に示した。

（６）金属製品

金属製品には銭貨や釘がある。ここでは全体の形態がわかり、用途も推定できる資料を抽出し掲載した。

１）銭貨（図版138、図22、付表７）

貨泉・延喜通寶・周通元寶・開元通寶・淳化元寶・咸平元寶・景徳元寶・天禧通寶・天聖元寶・皇宋通寶・熙寧元寶・元豊通寶・元祐通寶・紹聖元寶・元符通寶・聖宋元寶・崇寧重寶・嘉定通寶・永樂通寶・寛永通寶・（新）寛永通寶・無文銭など銅銭22種45点が出土した。重複するものは省き、遺構出土のものを中心に掲載した。

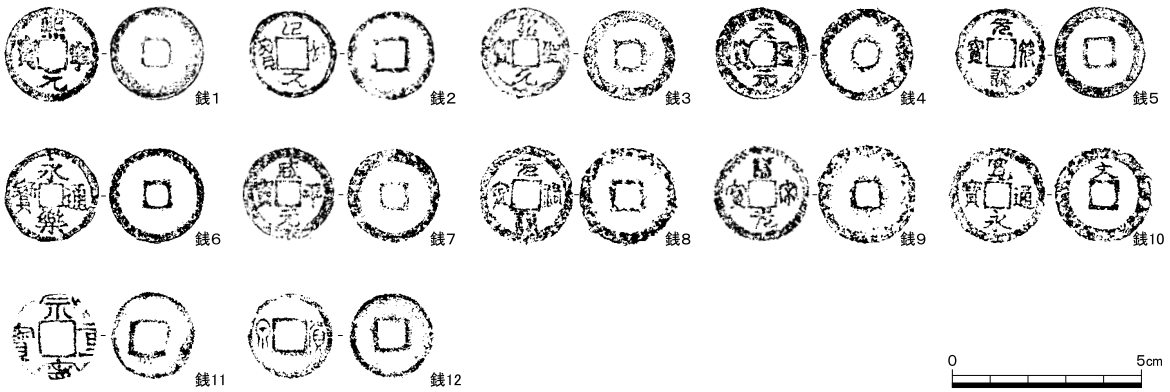


図22　銭貨拓影（１：２）

銭１は熙寧元寶である。径2.5㎝、重さ3.1ｇを測る。鎌倉時代後半から室町時代の土坑2951から出土した。

銭２は淳化元寶である。真書体。径2.3㎝、重さ2.1ｇを測る。銭３は紹聖元寶である。真書体。径2.4㎝、重さ3.7ｇを測る。いずれも鎌倉時代後半の土坑2811から出土した。

銭４は天聖元寶である。真書体。径2.4㎝、重さ2.7ｇを測る。安土桃山時代の土坑638から出土した。

銭５は元符通寶である。篆書体。径2.4㎝、重さ2.7ｇを測る。安土桃山時代の土坑群Ｂから出土した。

銭６は永樂通寶である。鋳上がりは良くない。径2.5㎝、重さ2.8ｇを測る。安土桃山時代の土坑群Ｃから出土した。

銭７は咸平元寶である。径2.5㎝、重さ2.8ｇを測る。安土桃山時代の土坑群Ｇから出土した。

銭８は元祐通寶である。篆書体。径2.5㎝、重さ2.5ｇを測る。銭９は聖宋元寶である。篆書体。径2.6㎝、重さ2.8ｇを測る。いずれも安土桃山時代の土坑2528から出土した。

銭10は寛永通寶である。背面上部に「文」字を有する。径2.6㎝、重さ3.4ｇを測る。江戸時代の埋甕2171から出土した。

銭11は崇寧重寶の磨輪銭である。外径約3.5㎝の当十銭の周囲を、一文銭の外径とほぼ同じ約2.3㎝まで削り磨いている。重さは2.5ｇ。銭12は貨泉である。径2.3㎝、重さ2.3ｇを測る。いずれも鎌倉時代後半から室町時代の整地層から出土した。

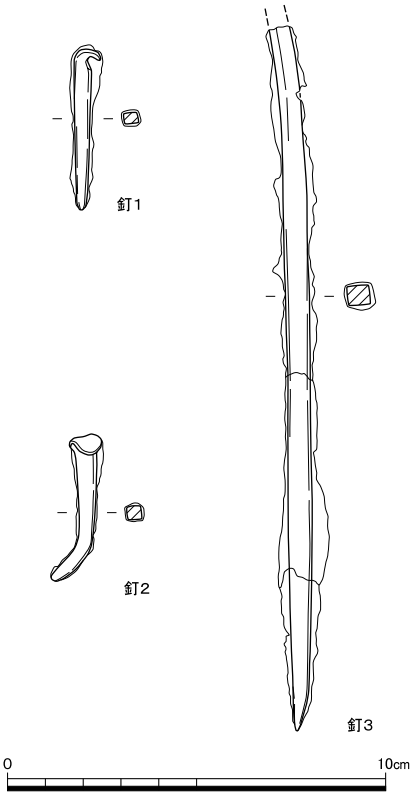


図23　鉄釘実測図（１：２）

２）鉄釘（図23、付表８）

土坑638から出土した鉄釘３点を図化した。

釘１は叩折釘である。断面方形を呈する。長さ4.4㎝を測る。釘２は折釘か。断面方形で体部がＪ字状を呈する。長さ3.8㎝を測る。釘３は断面方形を呈する。頭部は欠損する。長さ18.6㎝を測る。

5．まとめ

今回の調査地は、平安京左京六条二坊九町跡と、烏丸綾小路遺跡に該当する。調査の結果、弥生時代から古墳時代及び平安時代から江戸時代の遺構・遺物を確認した。以下、各時代の遺構・遺物動態について略述する。

（1）烏丸綾小路遺跡

烏丸綾小路遺跡は、北は現在の錦小路通付近から南は五条通以南までの約1.1㎞、東は堺町通から西は猪熊通付近までの約1.3㎞の範囲に拡がる遺跡である。弥生時代前期から古墳時代後期までの遺構や遺物が出土しており、京都盆地の拠点的な集落の一つと考えられている。調査地は遺跡の南端部に当たる。今回の調査では、弥生時代前期末から中期中葉にかけての溝や竪穴建物などと、中期後葉の方形周溝墓を確認した。特に弥生時代前期末から中期中葉にかけての遺構群は、従来から存在が指摘されてきたが、実態が不明であった当該期の集落の一端を示すものであり、その発見の意義は大きい。ここでは、弥生時代前期末から中期中葉の出土遺物の概要をまとめた後、当該遺跡の動態について概略を述べる。

1）出土遺物

土器の編年観（図24）

今回の調査では、竪穴建物群と流路1132から多数の土器が出土した。特に流路1132から出土した土器については、比較的残存状況の良い土器を層位的に取り上げることができた。もちろん、自然流路という環境下での出土土器であり、資料の混在も想定しなければならない。資料の整理については今後また検討の機会を設けたいが、ここでは先学の成果をもとに、本資料の編年観について概略を示す。

弥生時代前期末から中期中葉は、ヘラ描文主体の遠賀川系土器から櫛描文主体の櫛描文系土器へと移り変わる時期であり、ヘラ描直線文数と櫛描文の特徴と文様構成を基準に土器の変遷が論じられている。今回は、西日本や近畿地方の土器を概括的に扱った田畑直彦・若林邦彦の各編年[45]と、京都市内の土器と関連が深い近江南部の土器を扱った伊庭功の編年[46]を基準に、各遺構出土土器の位置づけを行った。

〔弥生時代前期末から中期初頭〕６条以上の多条のヘラ描直線文を持つ遠賀川系土器と、初現的な櫛描文系土器の共伴段階。田畑編年の様相４、若林編年の中期前半様相１にあたる。従来の畿内第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式の移行期に相当する。田畑編年では、初現的な櫛描文系土器の有無によって様相４を古・新段階に細分している。今回の資料では、溝1245、流路1132（古）、流路1132（新）Ⅲ・Ⅳ層の土器が該当する。出土量は少ないが、竪穴建物1055・1206・3544・3631、土坑3549の土器も、この段階のものと考えられる。

壺は器体に多条のヘラ描直線文や貼付突帯を持つ遠賀川系が主体を占め、条間が広い初現的な

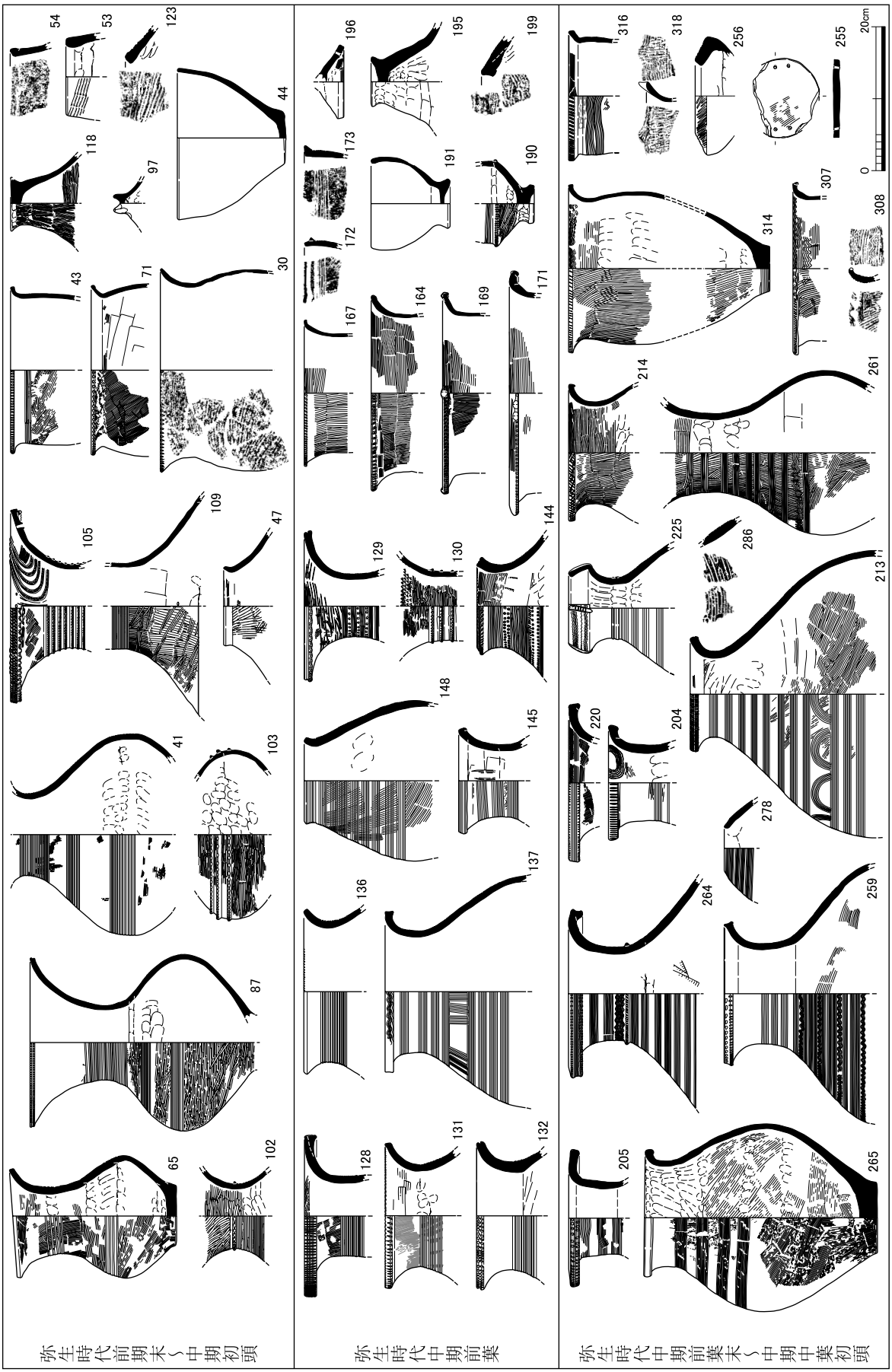


図24　弥生時代前期末から中期中葉初頭の土器（1：8）

櫛描文を施文する櫛描文系も少数確認できる。器体は器高と比べ体部最大径が大きく扁平気味な体部形態aがある。甕は前期以来の遠賀川系の如意形口縁甕が主体を占める。鉢は甕形土器の製作工程から派生した形態のものが出土した[47]。蓋は甕用・壷用の両者がある。この段階から中部瀬戸内地方・東部瀬戸内地方・琵琶湖岸域・東海地方の土器が認められる。

なお、流路1132（古）最下層から採取された有機物試料から得られた炭素14年代は2,434-2,353 cal BPである。藤尾慎一郎によってまとめられた数値年代にあてはめると[48]、今回得られた年代は弥生時代前期後半に相当する。当該期の基準資料である流路1132（古）下層・湿地下層出土土器は、流路1132（古）最下層堆積後の浮流堆積物埋積土内から出土したものであり、土器の年代観と大きな齟齬は無い。

〔弥生時代中期前葉〕櫛描文系土器・ハケ条痕系土器が主体となる段階であるが、遠賀川系土器も残存する。伊庭編年の第Ⅱ様式、田畑編年の様相５、若林編年の中期前半様相２にあたる。従来の畿内第Ⅱ様式に相当する。今回の資料では、流路1132（新）Ⅱ層の土器が該当する。竪穴建物2222・3576・3579・3581の土器は、細片が主体であるため厳密な時期の判定が困難であるが、この段階から次の段階にかけてのものと考えられる。

壷は遠賀川系の広口壷や、櫛描文系の広口壷・直口壷・無頸壷がある。甕はハケ条痕系のいわゆる大和型甕が主体を占める。口縁部端面に刻目を加えるものが多く、圧痕を１～２個加えるものがある。器体は体部の張りが弱く、施文するものは出土していない。鉢は体部が直線的な筒状もしくはコップ状を呈するものがある。蓋は甕用・壷用の両者が認められる。

〔弥生時代中期前葉末から中葉初頭〕櫛描文系土器・ハケ条痕系土器が主体となり、器種・器形が多様化する段階。伊庭編年の第Ⅱ様式後半からⅢ様式の一部、若林編年の中期前半様相３にあたる。従来の畿内第Ⅱ様式末から第Ⅲ様式初頭に相当する。今回の資料では、流路1132（新）Ⅱ層上層・Ⅰ層の土器が該当する。Ⅱ層上層とⅠ層とで接合関係にある資料が一定量認められたため、ここでは一括して扱ったが、将来的に中期前葉末と中葉初頭を分離できる可能性がある。

壷は櫛描文系の他にハケ条痕系の甕変容壷（214）がある。櫛描文系の壷は、瘤状突起や棒状浮文・連弧文など、琵琶湖岸域や伊勢湾岸域、北陸西部と共通する属性を持つものが出土した。また、ハケ条痕系の影響を受けたと考えられる粗いハケ調整を持つもの（261）も認められる。なお、弥生時代中期中葉に特徴的な頸部に指押圧突帯を持つ有段口縁壷や細頸壷は、調査地内では搬入品（225）の他は出土していない。

甕はハケ条痕系が主体を占める。ハケ条痕系甕は従来の大和型甕の他に、出土数は少ないが山形口縁を持つ従来の近江型甕（318）を確認できる。前者は口縁部端面に刻目を加えるものが多く、内面に単帯もしくは複帯の波状文を施すもの、ハケメ押圧文を持つもの、圧痕を３個以上加えるものなどがある。器体は体部が張り、丸みを帯びる。体部施文を持つものは認められない。甕用蓋は確認できない。

なお、流路1132（新）Ⅱ層上層から得られた炭素14年代は2,355-2,306 cal BPもしくは2,226-2,206 cal BPである。先に参照した数値年代にあてはめると、前者の値は弥生時代前期末、後者の値は弥

生時代中期中葉（古）に相当する。後者の測定値を採用するならば、土器の年代観と大きな齟齬は無い。

地方間交流を示す土器について（図25・26、巻頭図版２）

中部瀬戸内地方と東部瀬戸内地方、東海地方、琵琶湖岸域の土器がある。摂津、河内、和泉地域の土器は確認できなかった[49)]。

〔中部瀬戸内地方〕壷・甕がある。壷は口縁部内面に貼付突帯をめぐらすものがある。甕は口縁部が断面が逆Ｌ字状を呈し、無文でナデ調整を施す。壷・甕ともに弥生時代前期末から確認できる。

〔東部瀬戸内地方〕壷・甕がある。壷は器体に施したヘラ描沈線文や櫛描直線文に竹管文や刺突文、三角列点文を加える。甕は口縁部断面が逆Ｌ字状を呈し、口縁端部に刻目を加え体部にヘラ描沈線文や、体部に櫛描直線文と櫛描波状文を施すものがある。壷・甕ともに弥生時代前期末から確認できる。なお、当該土器群は胎土の詳細な検討を行っていないため、東部瀬戸内地方からの搬入だけでなく、京都北部などの他地域の土器が含まれる可能性がある。

〔東海地方〕内傾口縁土器・厚口鉢がある[50)]。すべて搬入品である。内傾口縁土器は、弥生時代前期末から中期前葉段階まで定量確認できる。内傾口縁土器Ａ類に、東海地方では稀な、器壁が薄い個体を確認した。厚口鉢は弥生時代中期前葉末から中葉初頭段階で少量出土した。

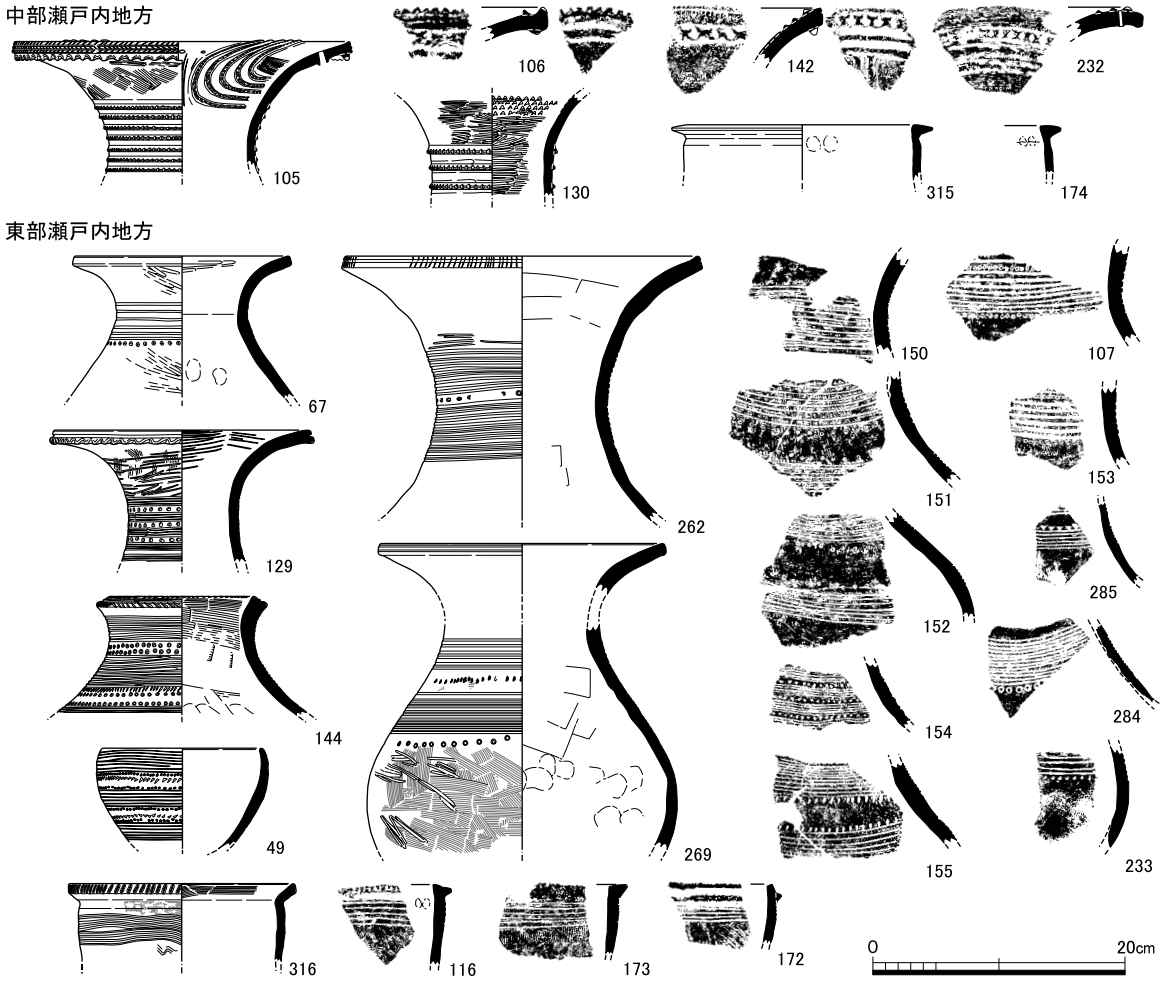


図25　地域間交流を示す土器１（１：６）

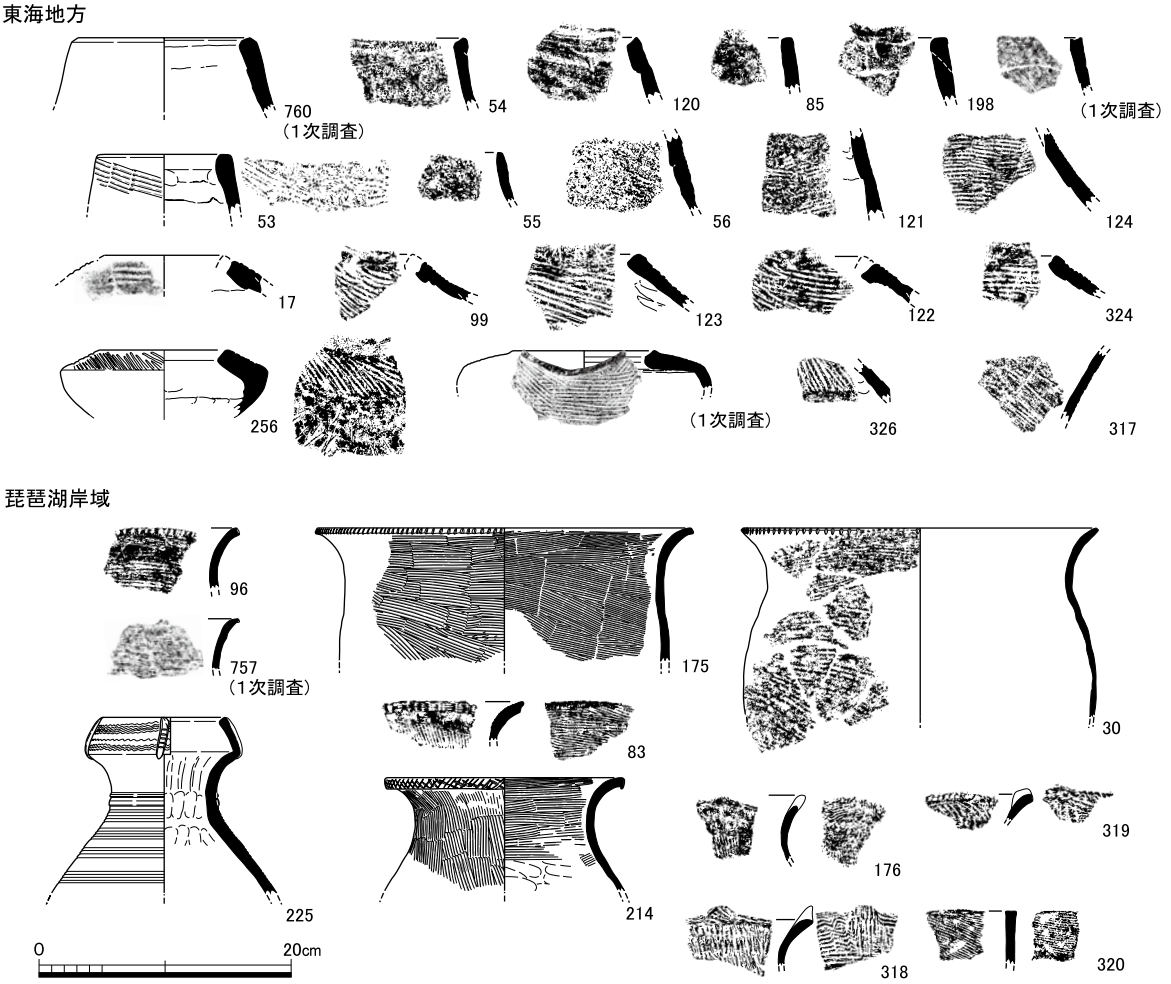


図26　地域間交流を示す土器２（１：６）

〔琵琶湖岸域〕搬入品の可能性が高いものを集成した。前期的な条痕文系土器（30・96・175）、中期のハケ条痕系土器（83・176・214・225・318～320）に大別できる。ハケ条痕系土器は中期前葉末から中葉段階に壷を確認できる（214・225・318・319）。なお、前述のとおり今回調査地で出土した中期前葉末から中葉段階の土器群は、琵琶湖岸域の土器との共通する点が多い。今回提示した資料以外にも搬入された土器がある可能性が高い。

石器製作について

今回の調査では石器が多数出土した。石器の完成品だけでなく未成品や製作時の剥片、原石、石器製作に伴う工具類なども出土したことから、調査地内で製作されていたと考えられる。

出土した石材は、サヌカイト・粘板岩（頁岩）・火成岩（石英斑岩など）・結晶片岩（紅簾片岩・緑泥片岩）・碧玉・砂岩・チャートがある。産地同定は行っていないが、小型の砂岩やチャート以外は、いずれも沖積地である調査地周辺で産出するものではない。すべて遺跡外から搬入されたものである。

サヌカイトを用いた石器には、打製石鏃・石錐・スクレイパー・楔形石器がある。また製作時に生じた微細剥片も多数出土した。いずれも竪穴建物から多数出土しており、特に竪穴建物1055の出土量が突出している。

粘板岩（頁岩）を用いた石器には、磨製石器類（石戈・石剣・石鏃・石包丁・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧）などがある。石戈・石剣・石鏃・石包丁については、成品だけでなく未成品や製作時の剥片類も確認できることから、調査地内で生産されていたと考えられる。特に石包丁の出土量は他器種に比べて非常に多く、調査地で消費する以上の量と考えられる。成品が遺跡外に搬出された可能性が高い。製作技法としては、荒加工段階で擦切施溝分割技法を用いて母岩から切り離していることが明らかとなった。石器製作に伴う剥片類は、流路1132（新）のほか、竪穴建物2222・3579から比較的多く出土した。また、研磨痕を残す微細な剥片も多数出土した。成品の再加工が行われた可能性が高い。

粘板岩（頁岩）の剥片・原石類は、弥生時代前期末から中期初頭には竪穴建物からも一定量認められるが、弥生時代中期前葉頃になると、そのほとんどが流路1132（新）から出土した。磨製石器類の仕上げに用いたと考えられる砥石（置砥）も流路1132（新）から出土したことから、流路周辺に石器製作の場があったと推察する。

火成岩（石英斑岩など）を用いた石器には磨製両刃石斧がある。磨製両刃石斧は成品だけでなく、未成品や原石も出土したことから、調査地で製作されていた可能性が高い。遺跡内における出土傾向は、弥生時代前期末から中期初頭頃は流路1132（古）が多く、竪穴建物からは少量出土した。一方、弥生時代中期前葉はほとんどが流路1132（新）から出土した。粘板岩製の磨製石器類と同様、流路周辺に製作の場があったと推察する。

結晶片岩を用いた石器は、紅簾片岩製の石鋸、緑泥片岩製の石包丁がある。石鋸は碧玉など玉石材の分割に用いられる工具であるが、今回調査では破片を含め４点程度しか出土していない。後述するように、碧玉製管玉・剥片類の出土量は極めて少ないことから、生産量を反映した結果であると思われる。緑泥片岩製石包丁は、流路1132（新）Ⅲ層から破損した成品が１点、また昭和59年度調査でSD１（流路1132と同一遺構）から成品１点が出土した[51)]。緑泥片岩の出土量は少なく、剥片類も確認できない。搬入品と考えられる。

碧玉を用いた石器は管玉がある。今回調査では５点が出土した。剥片も確認したが、３点のみと極めて少ない。今回の調査では、竪穴建物の埋土は水洗篩い分けを行ったが、流路堆積土は同様の処理を実施しなかったため、出土量から硬玉生産の規模を判断することは難しい。ただ、硬玉生産に用いる石鋸や筋砥石がわずかに出土したことから、少量かつ単発的な生産があったと推察する。

砂岩を用いた石器には砥石がある。重さが３kgを超える大型の砥石（置砥）が目立ち、明確に手持砥と判断できるものは確認できなかった。横断面が緩い円弧状をなす広い主面を持つものが多く、磨製石器の研磨に用いられたものと考えられる。筋砥石は２点出土した。

２）遺構の変遷

弥生時代前期末から中期初頭（図27） 調査地における集落域の成立期である。溝1245、流路1132（古）、流路1132（新）Ⅳ・Ⅲ層、竪穴建物1055・1206・3544・3631、土坑3549、昭和59年度調査SD１（古）がある。竪穴建物・土坑・柱穴などの遺構は、１・２区北西側にある流路1132

右岸微高地上で検出した。竪穴建物は全形がわかるものは少ないが、平面不整楕円形を呈するものが３棟、平面方形を呈するもの１棟を確認できる。壁溝を持つものは確認できない。

土器は遠賀川系土器が主体を占め、中部瀬戸内・東部瀬戸内・琵琶湖岸域・東海地方の土器が一定量存在する。打製石器・磨製石包丁・磨製両刃石斧など各種石器の生産活動もこの段階から認められる。石材は遺跡外から搬入されたものであり、調査地での人々の営みが始まった当初から集落外との交流があったと推察する。竪穴建物1055・1206からは、比較的多くのサヌカイト製石器工具類、剥片類が出土した。石器製作との関連が考えられる[52)]。

流路1132（新）Ⅲ・Ⅳ層からもこの段階の土器が出土したことから、流路1132（古）の河道が移動した後、流路1132（新）の流れが緩やかになって周辺に湿地環境が形成された頃、竪穴建物群が北に移動したと考えられる。

弥生時代中期前葉から中葉初頭（図28） 流路1132（新）Ⅱ層・Ⅱ層上層・Ⅰ層、竪穴建物2222・3576・3579・3581・昭和59年度調査SD１（新）がある。竪穴建物は、弥生時代前期末から中期初頭段階の竪穴建物群よりも北側で検出した。いずれも１・２区北西側にある流路1132右岸微高地上にあたる。竪穴建物の多くが平面不整楕円形を呈すると考えられるが、竪穴建物3579は平面方形を呈する。また、２区東部の流路1132（新）Ⅱ層上層上面で足跡群を検出した。この段階になると流路1132（新）の埋没が進み、湿地環境にあったことが植物化石の分析から明らかとなっている。そして、足跡群周辺の堆積土（Ⅱ層上層）内からはイネの種実や穎、イネ属珪酸体およびイネ属型花粉が多産したことにより、足跡は水田に伴うものと考えられる。またアワやメロン類、シソ属（エゴマ）などの栽培植物も出土した。さらに農工具の未成品も出土したことから、周辺域での稲作などの植物栽培の存在が推測された〔付章１－（４）参照〕。

この段階は櫛描文系土器とハケ条痕系土器が主体を占める。中部瀬戸内・東部瀬戸内・東海地方の土器も認められるが、中期中葉にかけて土器相は琵琶湖岸域との共通性を高めていく。打製石器・磨製石包丁・磨製両刃石斧など各種石器も引き続き活発に製作された。成品・未成品・剥片類の多くは流路1132（新）からの出土であるが、竪穴建物2222・3579からも、粘板岩・頁岩の剥片類が出土しており、石器製作との関連が考えられる。

弥生時代中期中葉（図29） 弥生時代中期中葉初頭の土器が出土した流路1132（新）Ⅰ層は、粗砂が優勢な流路充填堆積物と氾濫堆積物によって構成されている。この時期に流路1132（新）を埋める洪水性の堆積があったと推察する。流路1132（新）が氾濫堆積物によって完全に埋没する頃に、調査地内での人々の活動が途絶する。なお、今回検出した竪穴建物内からは氾濫堆積物は認められなかった。

弥生時代中期後葉（図30） ２区西部で確認した方形周溝墓3543がある。単独で築造されており、他に遺構は確認できない。墓域の一端であったと考えられる。

弥生時代後期から古墳時代前期初頭（図31） 今回調査では中世の整地層から貨泉が出土した。ほかには昭和59年度調査区の弥生時代流路（SD１）上層で遺物が出土した。調査地内では明確な遺構は確認できていない。

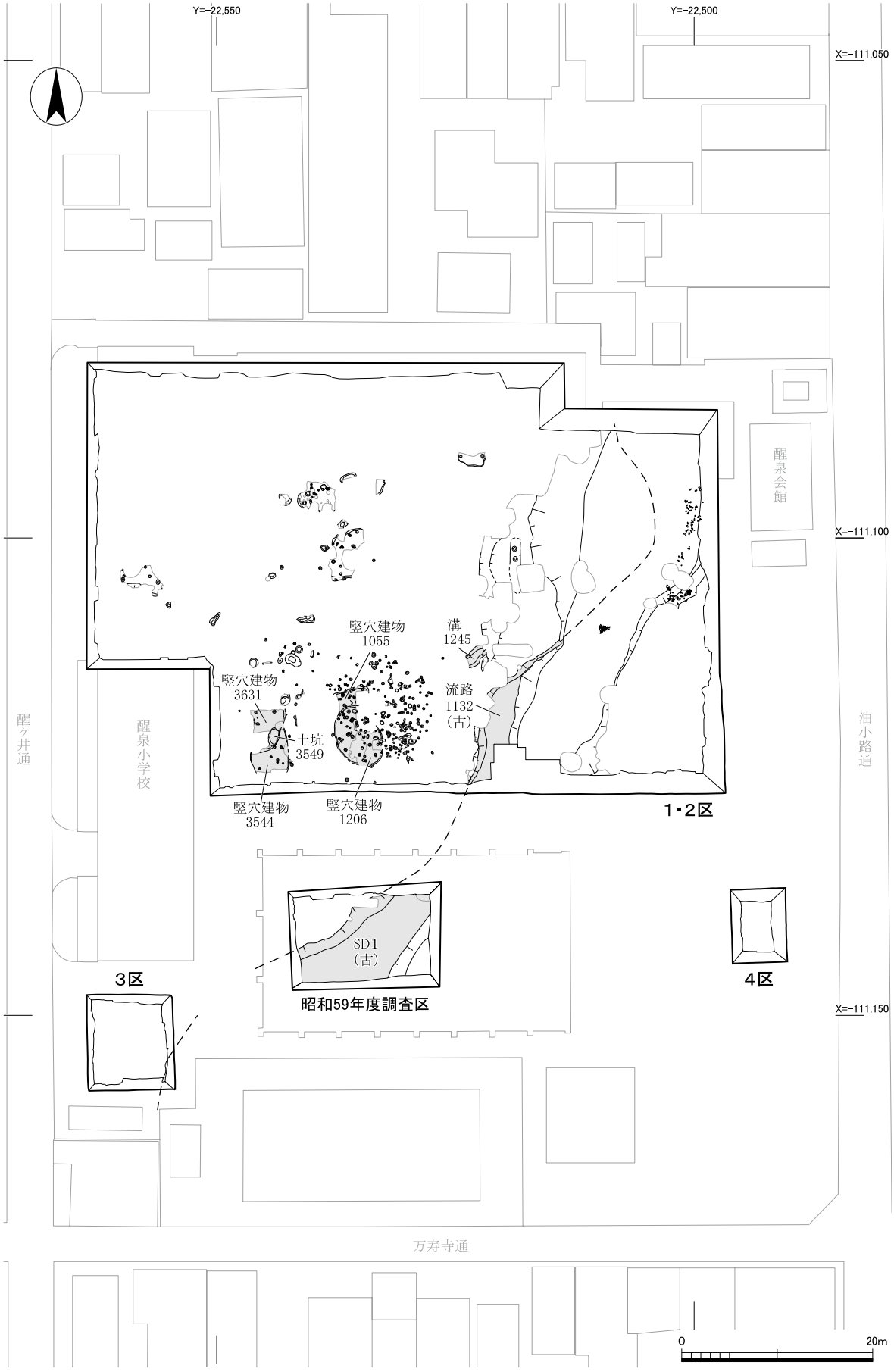


図27　遺構概要図１　弥生時代前期末から中期初頭（１：600）

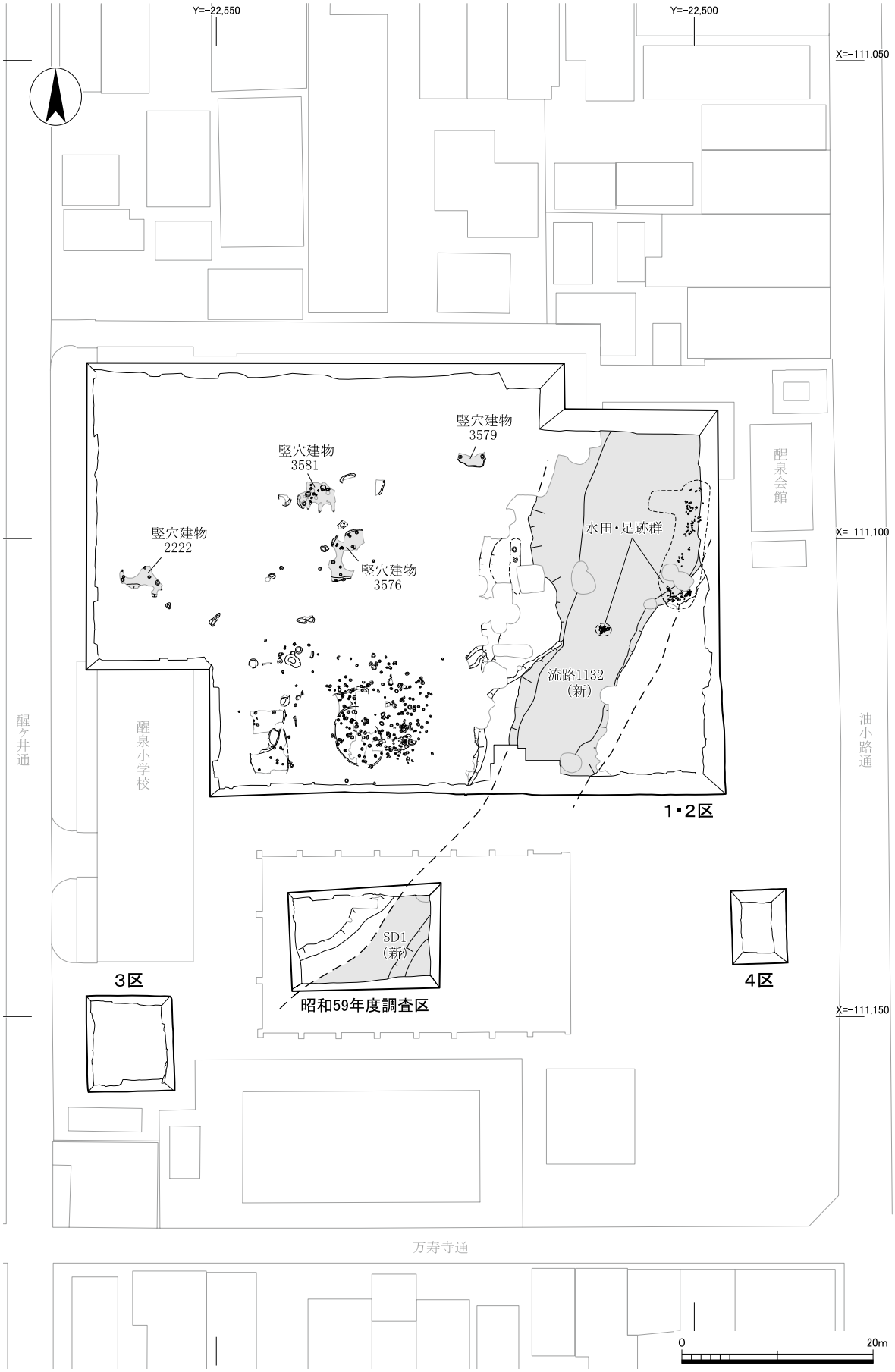


図28　遺構概要図２　弥生時代中期前葉から中葉初頭（１：600）

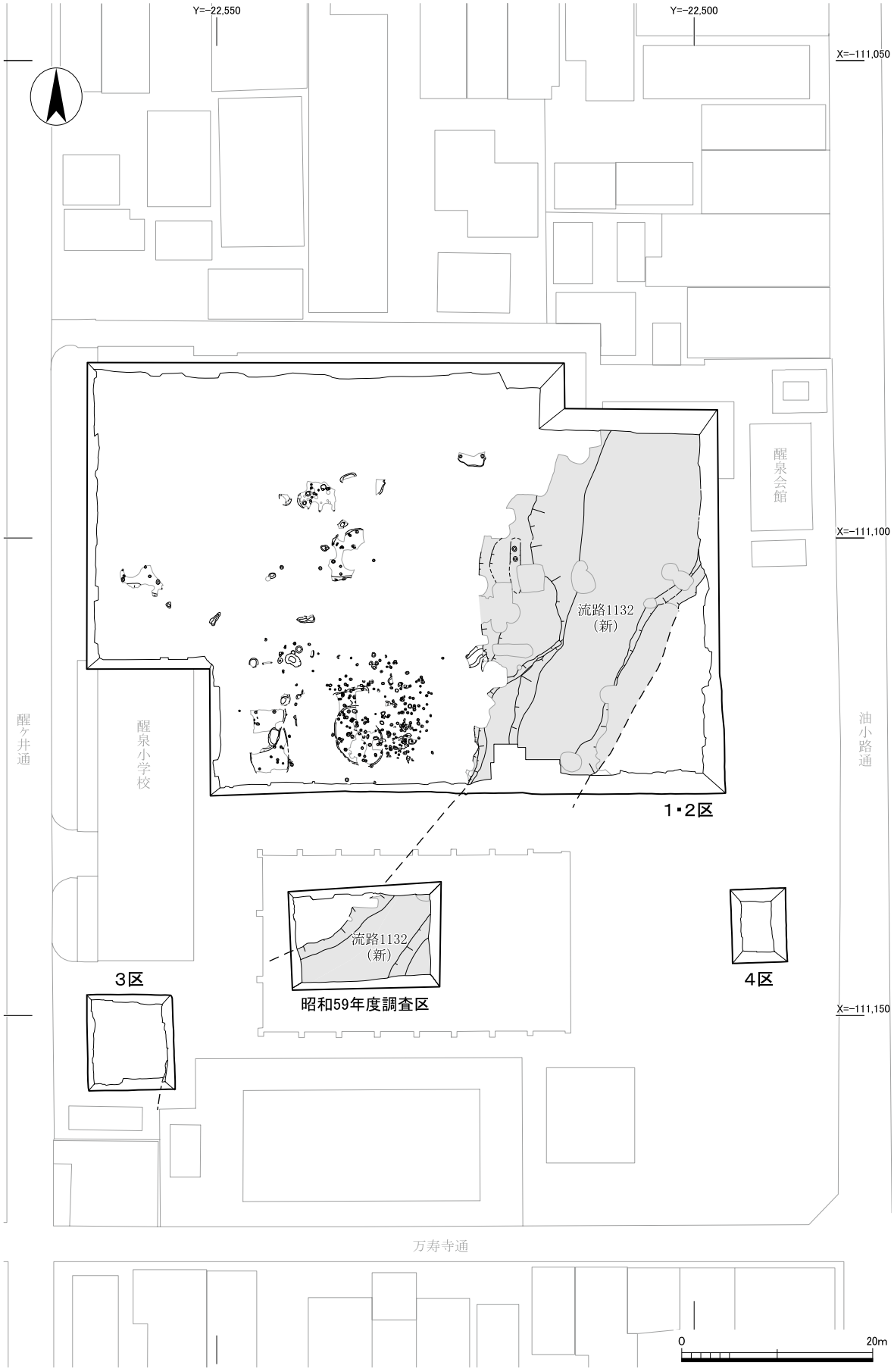


図29　遺構概要図３　弥生時代前中期中葉（１：600）

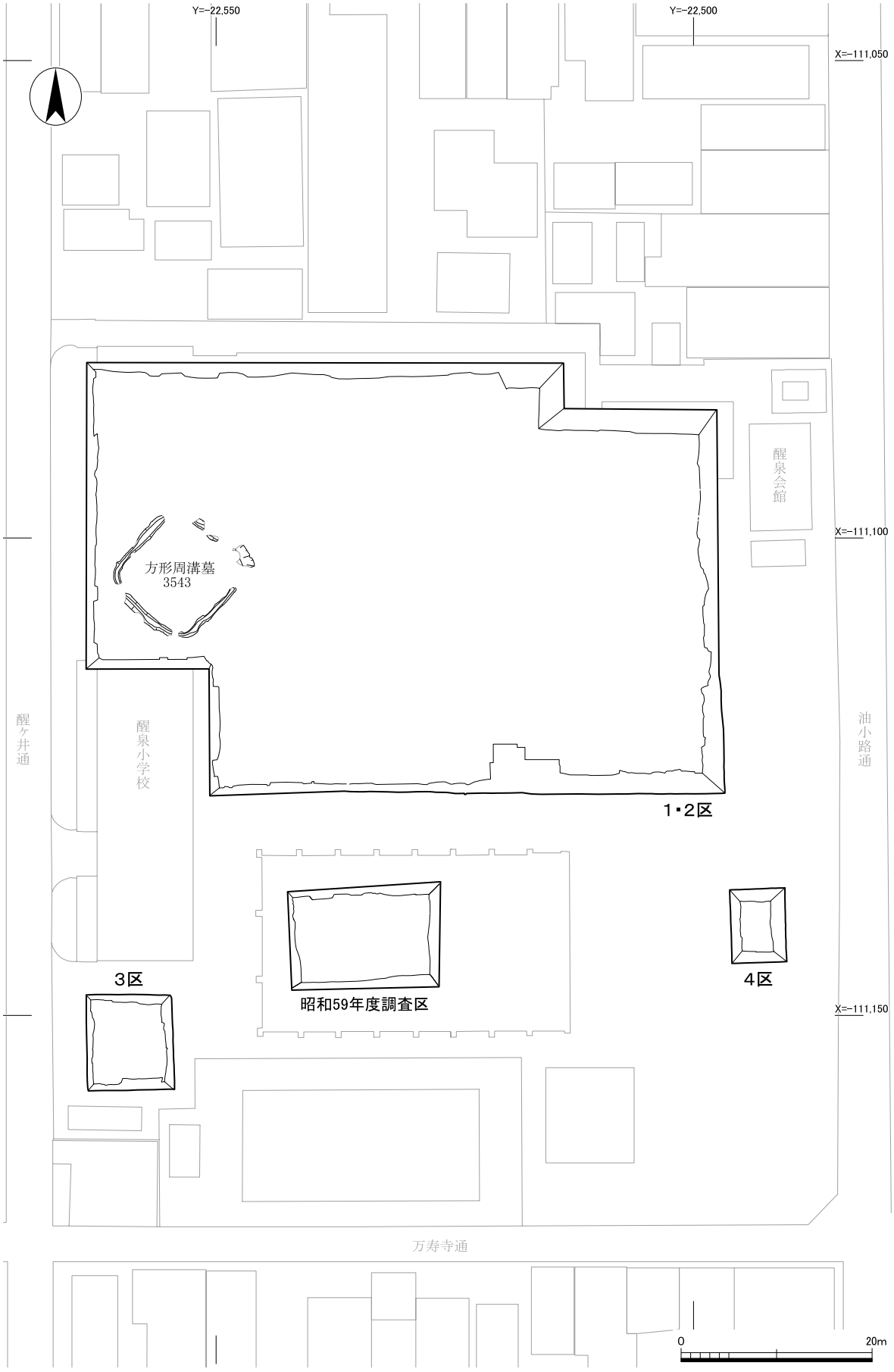


図30　遺構概要図４　弥生時代中期後葉（１：600）

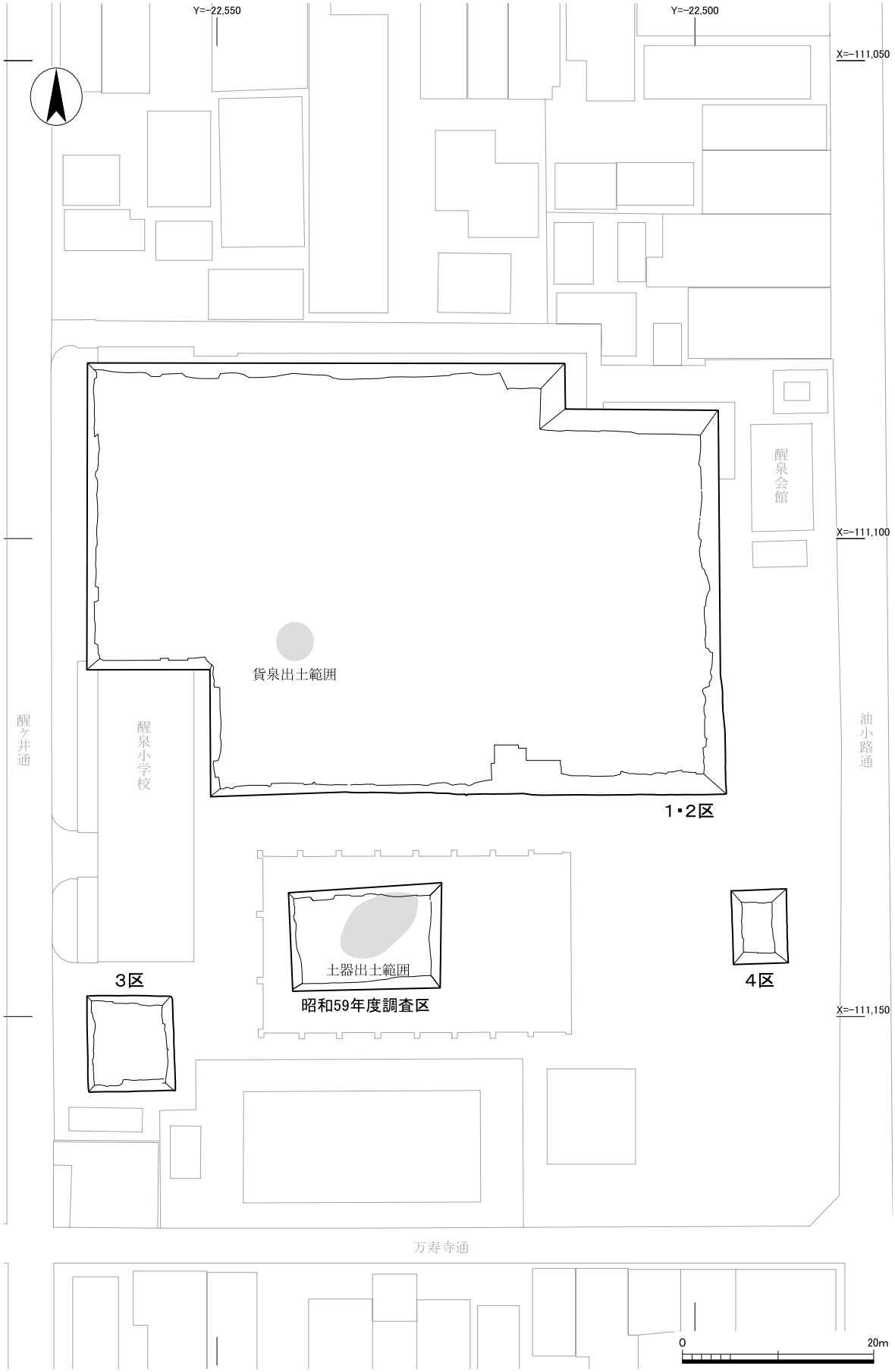


図31　遺構概要図５　弥生時代後期から古墳時代前期初頭（１：600）

3）遺跡の動態

烏丸綾小路遺跡の弥生時代から古墳時代前期までの遺構・遺物動態について、既往の研究成果[87]と今回の知見を踏まえ概略する。

縄文時代晩期から弥生時代前期中葉（図32、表11） 遺構・遺物を確認した調査地は、標高36ｍ以上の地点に分布している。分布の中心は当該遺跡の北にある烏丸御池遺跡（10～12）であり、烏丸綾小路遺跡は遺構・遺物の分布は希薄である。６で縄文時代晩期末の土器が少量出土した。

弥生時代前期後葉から弥生時代中期前葉（図32、表11） １～12で遺構・遺物が確認できる。以前にはなかった標高30ｍから36ｍの地点にも遺構・遺物が分布している。

既往の研究では、京都市域で縄文時代から弥生時代移行期の集落実態が判明している北白川町追分遺跡と吉田二本松遺跡から、居住域・墓域がおおむね直径100ｍの範囲に収まり、その周囲直径400ｍの範囲に水田などが広がるというモデルが提示された。そして烏丸綾小路遺跡では、遺構・遺物の分布から南北に２つの異なる集落があると指摘されている[88]。

１～４は、南集落に該当する。１・２は今回調査地である元醒泉小学校内の調査である。本調査（１）では居住域の一端を確認し、弥生時代中期中葉に廃絶することを明らかにした。３では中期前葉の土坑を確認した。１で確認した集落域が北西側に広がると考えられる。４では弥生時代の自然流路から、弥生時代前期末から中期初頭の土器細片が出土した。

５～７は北集落に該当する。５では弥生時代の遺物包含層から、弥生時代前期末の土器が出土した。６からは石包丁が出土した。報告では弥生時代前期と推定している。７では自然流路の底から弥生時代中期前葉の壺が完形で出土した。

８は流路から弥生時代前期末頃の土器が出土した。烏丸御池遺跡（９・10）との関連が考えられる[89]。

12は烏丸御池遺跡にあたる。弥生時代中期前葉の土器が少量出土した。

弥生時代中期中葉から弥生時代中期後葉（図32、表11） １・７・13・14・16～19・21～23・26・27で当該期の遺構・遺物が出土した。遺構・遺物の分布は遺跡北部の標高34ｍから39ｍの地点に集中しており、それより標高の低い南部では希薄である。

既往の研究では、遺跡北部の７・18・19・22・24で検出した溝が環濠の一部であり、集落の中心部が四条烏丸の交差点付近にあると推定されている[90]。22では溝のほか、土器を廃棄した土坑がある。23では方形周溝墓と竪穴建物を確認した。25では溝や不定形土坑、方形周溝墓の可能性がある溝を検出した。26からは絵画土器片が出土した。

遺跡の中・南部（現高辻通以南）で確認された当該期の遺構・遺物（１・13・14・16）では、弥生時代中期中葉の遺構は確認できない。今回調査地（１）では弥生時代中期後葉の方形周溝墓１基を確認した。16では東西3.6ｍ、幅0.6ｍの弥生時代中期後葉の溝が確認された。出土土器は壺・高杯・水差と、今回調査地で出土した土器組成と類似する。13・14では流路堆積層から弥生時代中期中葉から後葉の土器細片が出土した。当該地が氾濫原もしくは自然流路であったと推察する。

弥生時代後期から古墳時代前期初頭（図33、表11） １～４・６～８・13・16・18・28～44で当

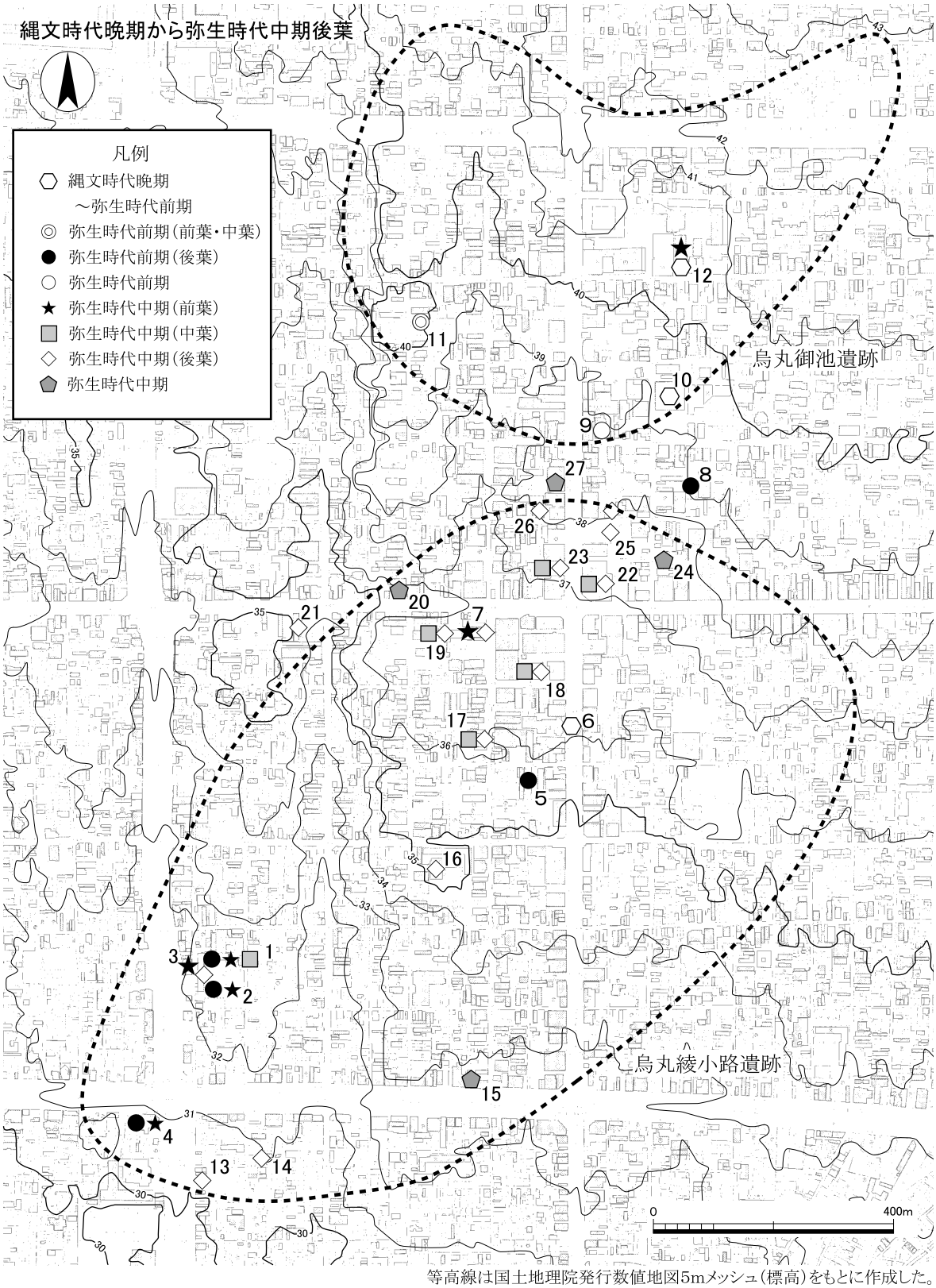
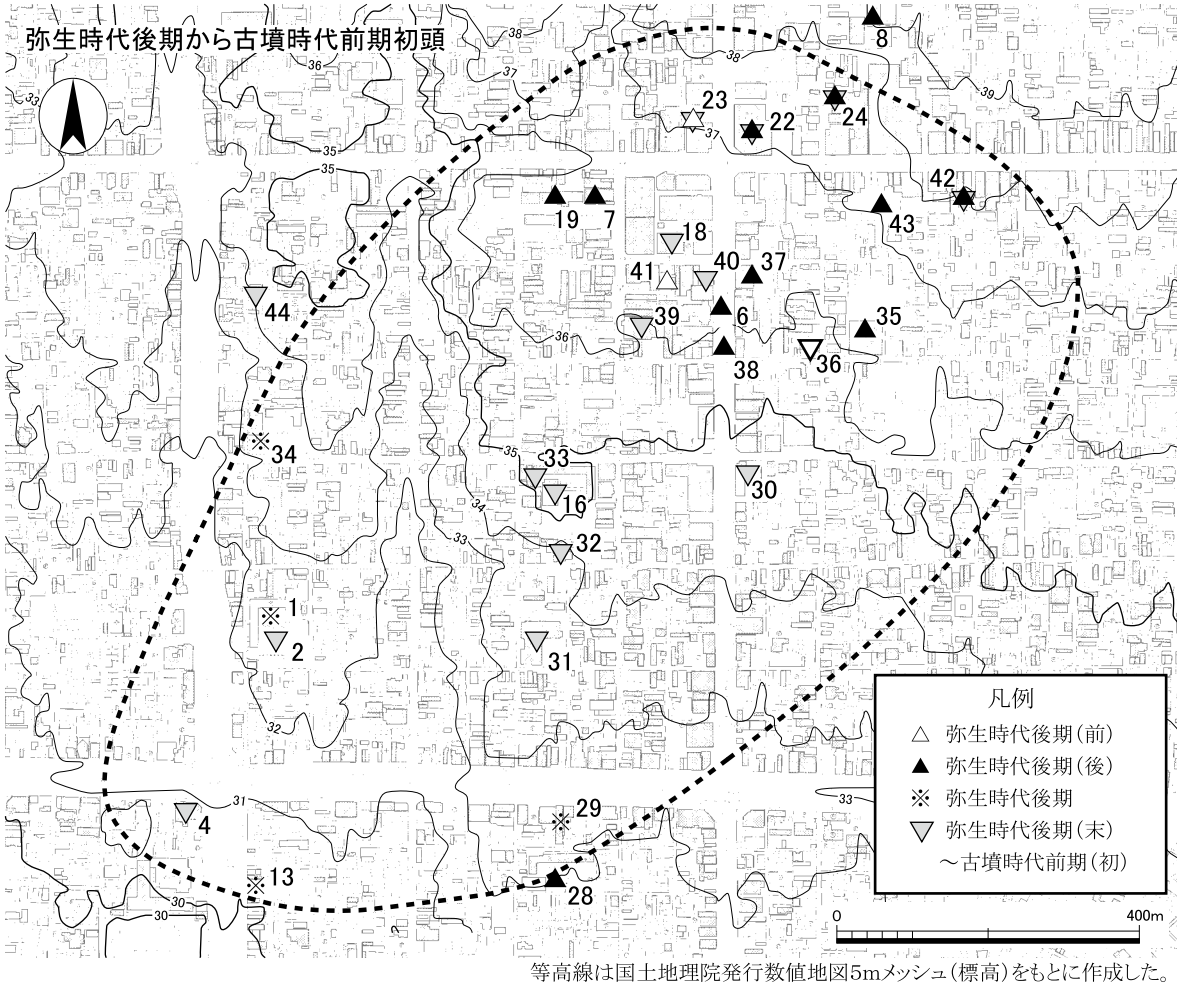


図32　烏丸綾小路遺跡・烏丸御池遺跡 主要調査地点１（１：10,000）

表11　烏丸綾小路遺跡 主要調査地点一覧

番号	縄文時代晩期～弥生時代中期後葉	弥生時代後期～古墳時代前期初頭	参考文献
1	弥生時代前期末～中期前半の流路・竪穴建物など。 弥生時代中期後葉の方形周溝墓。	貨泉出土。	本報告書
2	弥生時代前期末～中期前半の流路。	古墳時代前期初頭の土器。	註３
3	弥生時代中期前葉の土坑。	―	註４・53
4	自然流路から弥生時代前期末・後期末の土器が出土。		註12
5	遺物包含層から弥生時代前期後葉の土器が出土。	―	註54
6	縄文時代晩期末の土器が出土。 弥生時代前期？の石包丁が出土。	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土坑・溝。	註55～57
7	自然流路から弥生時代中期前葉の土器が出土。弥生時代中期後半～後期前半の溝。		註58・59
8	流路から弥生時代前期後葉の土器が出土。	弥生時代後期後半の竪穴建物。	註60
9	流水性の砂礫層から弥生時代前期・後期の土器が出土。		註61
10	流路から縄文時代晩期・弥生時代前期前半・中期の遺物が出土。	―	註62
11	弥生時代前期中葉の土坑。	―	註63
12	縄文時代晩期末の遺構。遺物包含層から縄文時代晩期～弥生時代中期前葉の土器が出土。	―	註64
13	自然流路から弥生時代中期後葉～後期前半・古墳時代の土器が出土。		註15
14	流水性の砂礫層から弥生時代中期後半の土器が出土。	―	註16
15	弥生土器と石包丁未成品が出土。	―	註23
16	弥生時代中期後葉の溝。	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の竪穴建物。	註20
17	流路から弥生時代中期中葉から後葉の土器が出土。	―	註65
18	弥生時代中期中葉～後葉の溝・土坑。	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が出土。	註66
19	弥生時代中期中葉～後期の溝。弥生時代後期後半の土器が出土。		註67・68
20	弥生土器と石包丁が出土。	―	註69
21	弥生時代中期後半の溝・土坑。	―	註70
22	弥生時代中期中葉～後期の溝・土坑。弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の竪穴建物。		註71
23	弥生時代中期中葉～後葉の遺物が出土。 弥生時代中期後葉の方形周溝墓。	弥生時代後期前半・後半の竪穴建物。	註72
24	自然流路から弥生時代中期の土器出土。	弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の溝。	註73
25	弥生時代中期後半の溝・土坑・方形周溝墓？。	弥生時代後期の土器が出土。	註74
26	湿地状の落込みから弥生時代中期後葉の絵画土器が出土。	―	註75
27	落込みから弥生時代中期の土器・石器が出土。	―	註76
28	―	流路から弥生時代後期後半の土器が出土。	註27
29	―	流水性の砂礫層から弥生時代後期の土器が出土。	註26
30	―	流路から古墳時代前期初頭の土器が出土。	註77
31	―	古墳時代前期の流路・土坑・竪穴建物。	註22
32	―	流路から弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が出土。	註21
33	―	流路から古墳時代前期初頭の土器が出土。	註19
34	―	流路から弥生時代後期の土器が出土。	註18
35	―	流路から弥生時代後期の土器が出土。	註78
36	―	流路から弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が出土。	註79
37	―	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が出土。	註80
38	―	流れ堆積から弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が出土。	註56
39	―	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の竪穴建物。	註81
40	―	弥生時代後期後半の竪穴建物。	註82
41	―	弥生時代後期前半の竪穴建物。	註83
42	―	弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層。	註84
43	―	流水性の砂礫層から弥生時代後期後半の土器が出土。	註85
44	―	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が出土。	註86



等高線は国土地理院発行数値地図5mメッシュ(標高)をもとに作成した。

図33　烏丸綾小路遺跡 主要調査地点２（１：10,000）

該期の遺構・遺物を確認した。６・８・16・22・23・31・39～41では竪穴建物を検出した。分布は、弥生時代後期前葉・後葉は遺跡北部、現四条烏丸の交差点周辺にあたる標高36ｍ以上の地点にまとまりがある。一方、弥生時代後期後葉末から古墳時代前期初頭になると、標高が低い遺跡南側に分布域が広がる。既往の研究では、遺構と遺物の様相と分布から、当該期に集落の中心が綾小路通を境に北から南へ展開したと推定されている[91]。４・13・28～30・32～36・38・43では、流路もしくは流水性の堆積層から土器が出土した。遺跡南限域（４・13・28・29）と、東限域（30・35・36・38・43）は氾濫原に近い場所であった可能性が高い。

北部と比べ、標高35ｍ以下の遺構・遺物の分布密度は相対的に低い。今回調査地（１）では中世の整地層から貨泉が出土した[92]。２では弥生時代流路上層から土器が出土した。明確な遺構は確認できず、どのような性格の土地利用があったかは不明である。16・31では竪穴建物を検出した。これらは北東から南西方向に向かって流下する小規模な流路（31～33）の間の小規模な微高地上に立地している。

（2）平安京左京六条二坊九町跡

平安時代前期・中期（図34・35） 新しい時代の遺構による攪乱が多く、前・中期の遺構は希薄であったため、空間利用の復元は困難であったが、いくつか重要な発見があった。

平安時代前期前半（京都Ⅰ期新段階）の井戸3440からは、「政所」と墨書した緑釉陶器や、円面硯が出土した。これらの文物は調査地もしくは近隣に家政機関を備える邸宅があったことを示すが、今回調査ではそれを示す遺構は確認できなかった[93)]。

一方、攪乱によって全体の規模は不明であるが、南北２間分×東西１間分で柱間は南北2.5ｍを測る掘立柱建物である建物851を１区で検出した。さらに、この建物851の東柱列の軸線上に、柱穴3275を確認した。各柱穴から時期を判断できる遺物は出土していないが、建物851の成立が平安時代前期後半（京都Ⅱ期）の遺物が出土した溝982の埋没後であること、これら遺構群が、後述する平安時代後期の区画溝による規制を受けていないことから、建物851と柱穴3275の時期を平安時代中期と推定した。当該期、柱筋を揃えた掘立柱建物が、規模は不明ながら複数棟、六条二坊九町のほぼ中央部に存在していたと考えられる。

遺物では平安時代前期から中期の軒瓦が１・２区の各所から出土した。また、平安時代中期（京都Ⅲ期新段階）の井戸3191から出土した漆器皿が、分析結果から非常に丁寧な塗技法によって製作された優品であることが明らかにされた〔付章４参照〕。

なお、今回確認した平安時代前期前半の「政所」墨書土器と、平安時代中期の建物851などの建物群には時期差があるため、両者の関係は不明である。

平安時代後期（図36） １・２区では、広範囲にわたる平安時代後期の整地層（図版２：106～109層）を確認した[94)]。平面不定形で床面が平坦ではない土器溜2257や土坑3182などは、地形の凹凸を均した整地の一部分となる可能性がある。

整地後まもなく、四行八門制の北四・五門境に並行する東西溝2253・3036・3091・3131・3317と、北五・六門境に並行する東西溝689、西二・三行境に並行する南北溝3403、西三・四行境に並行する南北溝625・723・2023・3441が掘削された。その中で北四・五門境の溝3036・3091、西三・四行境の溝625・723は、出土土器や位置関係から同時に機能していた可能性が高い。これらの溝を側溝とする通路状の空間があったと想定している。

このように、少なくとも平安時代後期頃には、整地によって地形を平坦化したうえで、四行八門制を意識した土地区画がなされたと推察する。

調査地東側（油小路側）の北五門・西四行には溝で区切られた一戸主程度の区画が認められる。北四門・西四行の北側には区画溝を確認できなかったが、同規模の区画が存在した可能性も考えられる。油小路に面して一定の距離で南北方向に並ぶ井戸群は、これら区画の中に設けられたものと推察する。なお、調査区内でも多数の柱穴を検出したが、建物として復元できなかった[95)]。

また、今回調査では当該期に製作された讃岐産の軒瓦が多数出土した。平安時代後期に平安京内及び周辺地域において讃岐産の瓦がまとまって出土した地点としては、以下の地域があげられる。

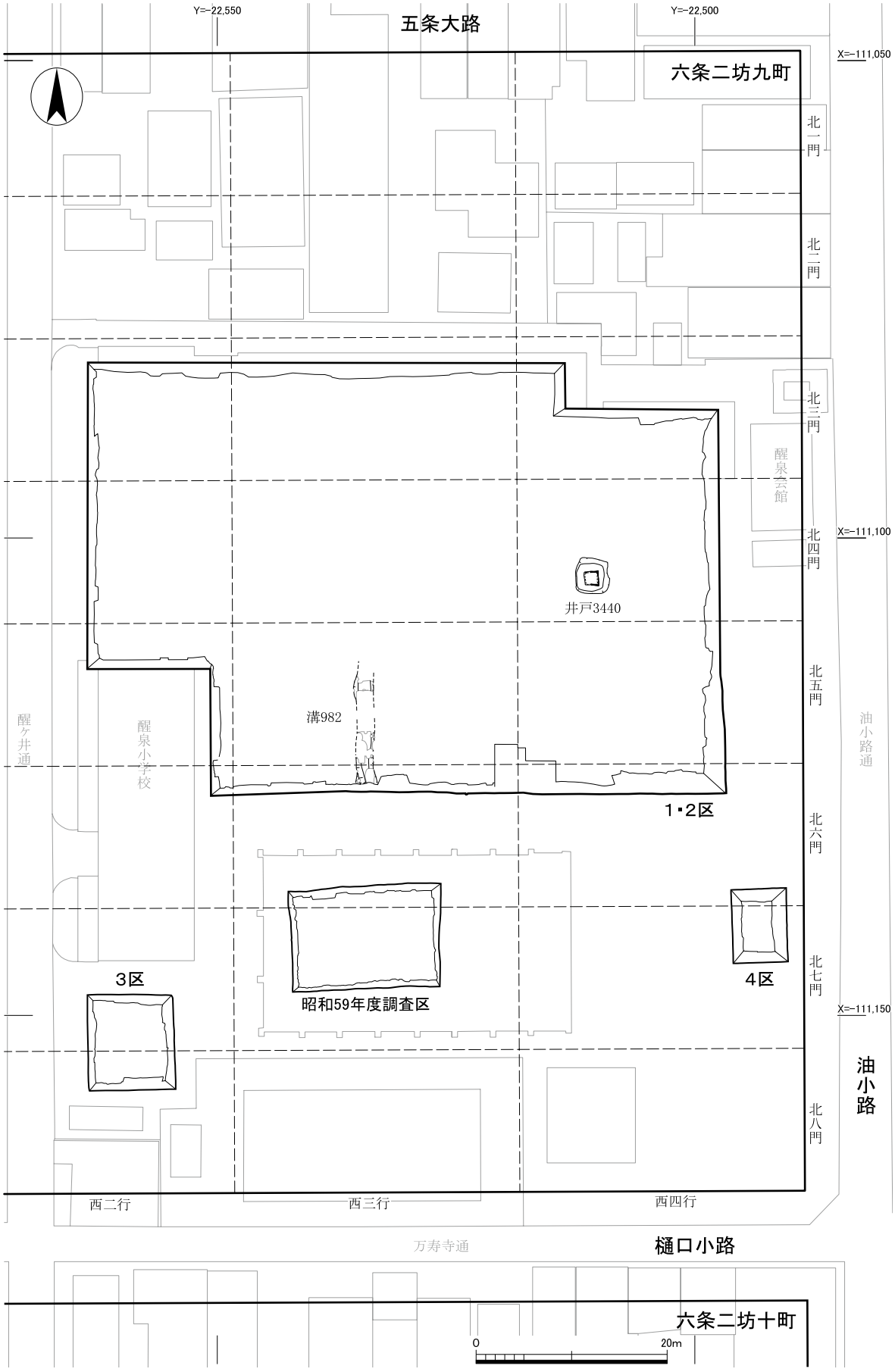


図34　遺構概要図６　平安時代前期（１：600）

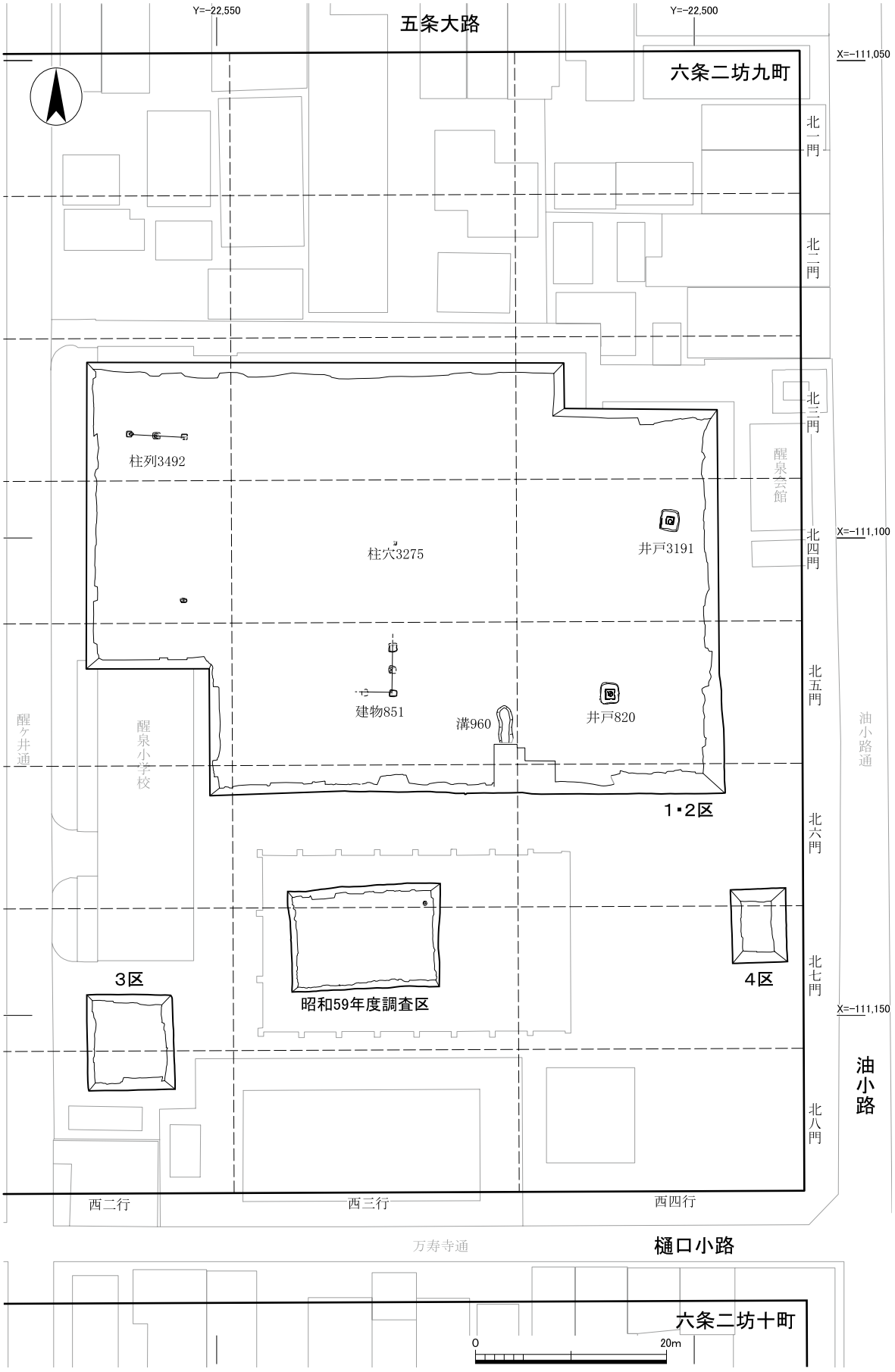


図35　遺構概要図７　平安時代中期（１：600）

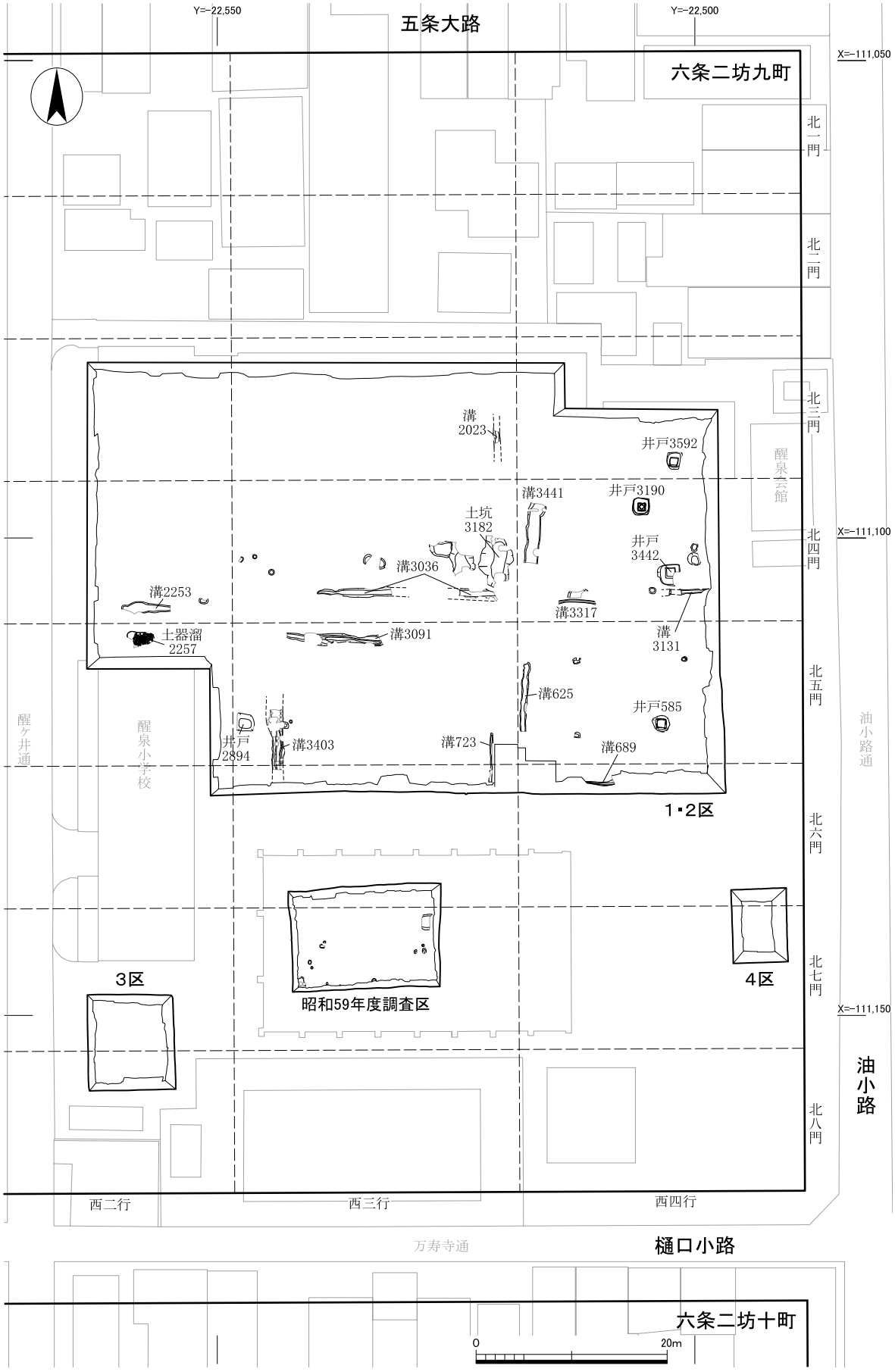


図36　遺構概要図８　平安時代後期（１：600）

平安宮近隣では、平安宮南面大垣南側溝の調査で、外行唐草文・連巴文軒平瓦が出土した[96]。

平安京内寺院では、東寺の調査で外行唐草文軒平瓦が出土した[97]。

平安京左京域では、左京北辺四坊の調査で、複弁蓮華文軒丸瓦、偏行唐草文・連巴文軒平瓦が出土した[98]。左京二条二坊九町の調査で、外区唐草文複弁蓮華文軒丸瓦、外行唐草文軒平瓦が出土した[99]。左京五条三坊十五町の調査で、唐草文外区単複弁蓮華文軒丸瓦、外行唐草文・偏行唐草文軒平瓦が出土した[100]。左京六条三坊の調査で、単弁蓮華文軒丸瓦、外行唐草文軒平瓦が出土した[101]。左京七条三坊五町の調査で、単弁蓮華文軒丸瓦、外行唐草文軒平瓦が出土した[102]。左京七条三坊五町の調査で、外行唐草文・半裁花文・連巴文軒平瓦が出土した[103]。左京九条三坊一町の調査で、単弁蓮華文軒丸瓦、平瓦が出土した[104]。左京九条三坊八町の調査で、単弁蓮華文軒丸瓦、外行唐草文軒平瓦が出土した[105]。

平安京近隣では、寺町旧域（左京三条四坊十六町東側）の調査で、外区唐草文単複交互弁・単弁蓮華文軒丸瓦、外行唐草文・偏行唐草文軒平瓦が出土した。

平安京周辺では、鳥羽南殿の調査で、巴文軒丸瓦・外行・内行・偏行唐草文軒平瓦が出土した[106]。鳥羽金剛心院の調査で、巴文軒丸瓦・偏行唐草文・連巴文軒平瓦が出土した[107]。最勝寺推定地の調査で、外区唐草文複弁蓮華文軒丸瓦、外行唐草文軒平瓦が出土した[108]。円勝寺の調査では、巴文軒丸瓦が出土した[109]。法住寺殿の調査では、外行唐草文・連巴文軒平瓦が出土した[110]。

以上のように、文献史料によって造営状況が想定できる平安宮大垣、白河殿・鳥羽殿などの他に、平安京内や近隣地域でもまとまって出土した地域が見られることは、注目できよう。

京都における讃岐産軒瓦の搬入は、10世紀段階から始まり、11世紀後葉から12世紀中葉頃に活発化したことが知られる[111]。いずれにしても、12世紀における讃岐から京都への供給の状況を知る上で貴重な資料となった。

鎌倉時代（図37・38）　鎌倉時代前半は、四行八門制を意識した溝（東西溝3061・南北溝722）が認められる一方、四行八門制の区画に一致しない昭和59年度調査区SD211が掘削される。また、井戸2022・2961は四行八門制の西三・四行境に分布しており、平安時代後期の区画とのずれが認められる。鎌倉時代後半の南北溝2250も、四行八門制の区画に一致していない。当該期、平安時代後期以来の四行八門制に基づく土地区画を一部維持しつつも、南北方向の区画施設を中心にそれとは異なる区画が成立する。

出土遺物が無いために時期の判断は難しいが、検出面や埋土の特徴から、検出した柱穴の多くがこの時期のものと考えられる。

特徴的な遺構として、鎌倉時代前半は１・２区で検出した土坑381・2892・2893・2985、昭和59年度調査区のSK３がある。これら土坑は、九町のほぼ中央部に集中して分布する。基盤層上層の固く締まった粘土を掘り抜き、砂礫層まで掘削するが、土坑底面の標高（29.0～30.2ｍ）は、当該期の井戸の床面標高（27.3～28.4ｍ）よりも浅く、井戸とは異なる性格と考えられる。砂礫採集を目的とした土坑の可能性がある。

鎌倉時代後半の遺構には、赤色粘土塊を貯蔵した土坑2811と、大量の灰を貯蔵した土坑514があ

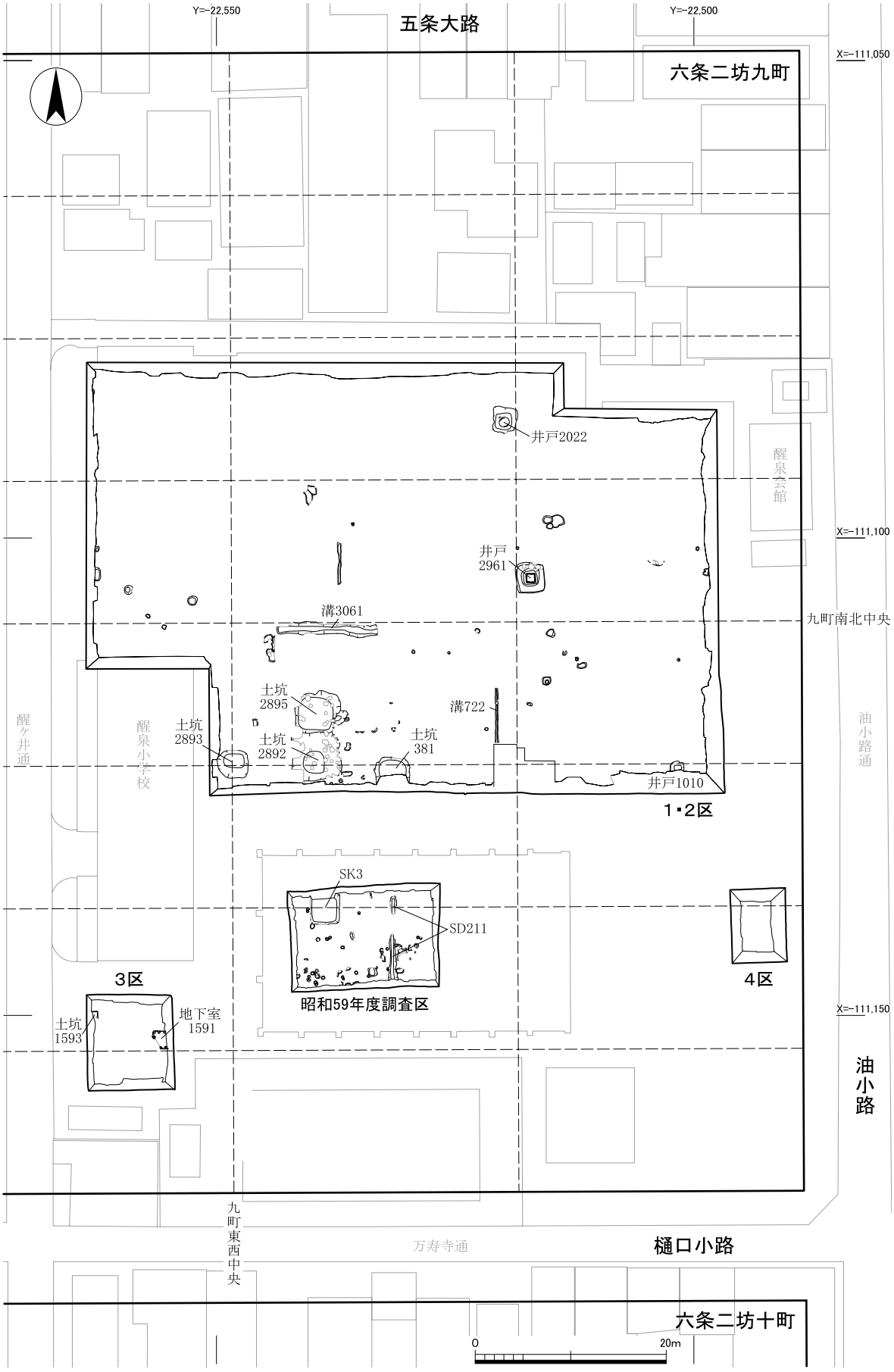


図37　遺構概要図９　鎌倉時代前半（１：600）

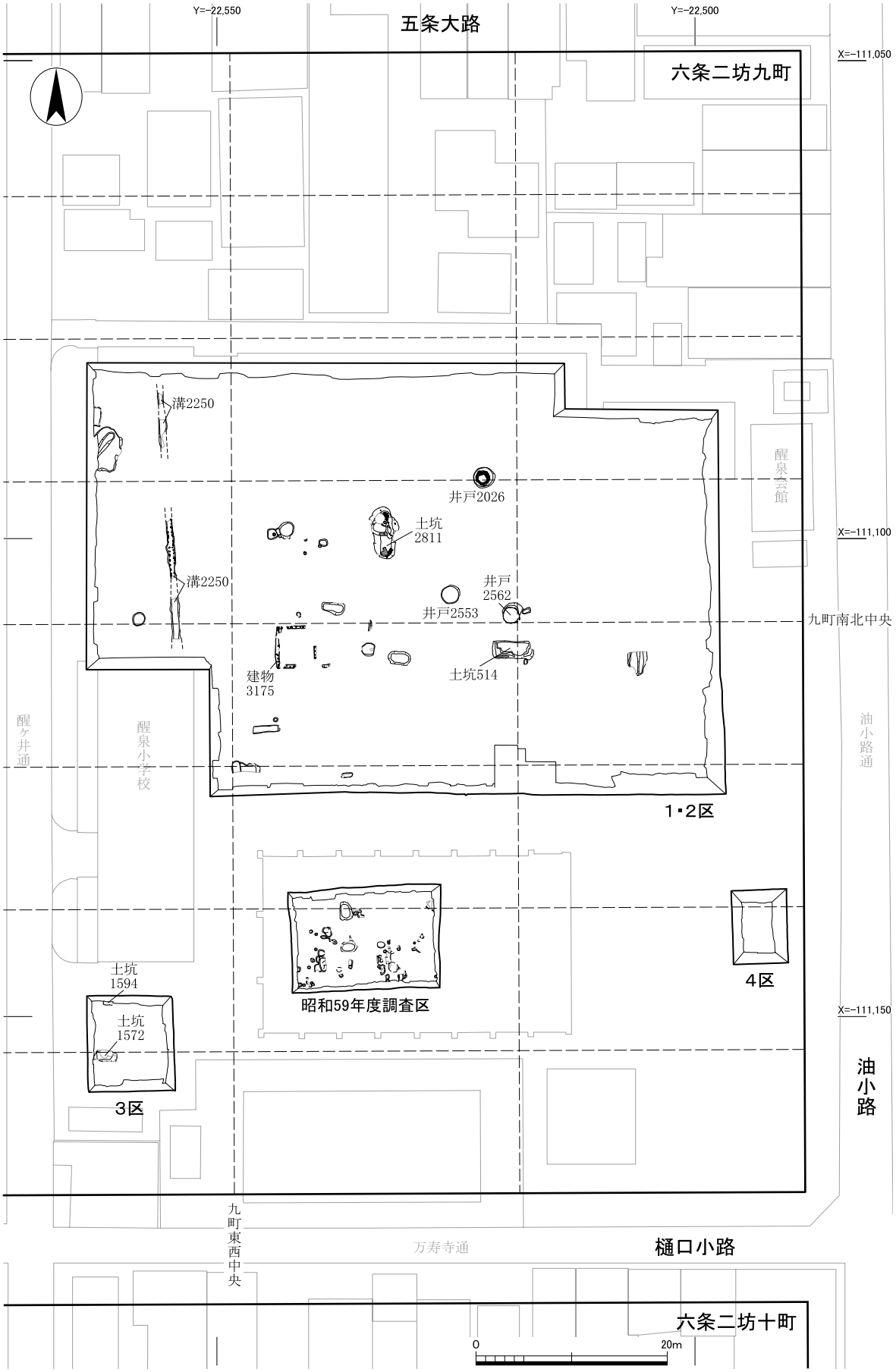


図38　遺構概要図10　鎌倉時代後半（1：600）

る。赤色粘土塊は、分析の結果、ベンガラ顔料の原材料であることが判明し、周辺に染色工房などの存在が推測された〔付章５参照〕。灰は肥料、染色、製紙、あく抜き、洗剤などに利用する資源として活用できることから、何らかの生産活動に伴うものと考えられる。

また、３区では鎌倉時代前半の地下室1591を検出した[112)]。２区では、鎌倉時代後半の建物3175を確認した。これは大壁造の土蔵と考えられる。

当該期、砂礫採集や赤色粘土塊、灰を貯蔵した土坑群が調査地中央部に展開する。いずれも何らかの生産活動に伴う遺構と考えられる。同時に、地下室や土蔵などの貯蔵施設も相次いで成立する。調査地周辺の手工業生産にかかわる空間利用であった可能性がある。

室町時代前半（図39） １・２区では、当該期の整地層（図版２：71層）を確認した。整地後、塀2206、南北柵847・3444などの区画施設が敷設される。いずれも四行八門制の規制をうかがわせる配置は認められない。ただ南北柵847北端の柱穴2693と南北柵3444南端の柱穴3310は他の柱穴よりも長径が大きく平面楕円形を呈する。そして両柱穴の間の空間がほぼ九町南北中央に位置することから、ここに門が存在した可能性がある。その場合、九町南北中央（四行八門制の北四・五門境）に対する意識が、当該期にも存在したことになる。

区画施設内の遺構は土坑が中心で、当該期の井戸、建物などは確認できなかった。

遺物は当該期の生産と推定できる軒平瓦（軒平瓦44）が２区のやや西寄りで多数出土した。いずれも小型瓦であり、築地または小型の堂宇の所用瓦と推定された。葺土が付着しているため、近辺に当該瓦を葺いた構造物が所在した可能性が高い。

室町時代後半（図40） 九町南北中央付近で並行する東西溝2560と柵2478・2479を検出した。一方、ほかの区画施設として南北柵730と東西柵753があるが、これらは四行八門制の土地境界とは一致しない。九町南北中央（四行八門制の北四・五門境）に対する意識が、当該期にも維持されていたと考えられる。

１・２区東側（油小路側）は石室や井戸が分布する。建物は復元できないが、油小路側に面した宅地利用の裏手空間に作られた遺構群と推察する。

安土桃山時代（図41） 調査区各所で粘土を採取したと考えられる土坑群を確認した。土坑は平面不定形のものと、方形に近いものとが混在する。中でも土坑591は平面長方形で、内部には長方体に切り取った粘土塊が複数個残されていた。土取り穴の形態は、中世のほぼ不定形のものから、近世には採集量算定の便を考慮して、方形を単位とするものに変化したと指摘されている[113)]。今回の調査成果は、中世的な様相から近世的な様相への移り変わりを示すものと推察する。

江戸時代前半（図42） 17世紀頃の遺構群を江戸時代前半とした。江戸時代初頭の整地層（図版２：35層、図版37：１層）を調査区の各所で確認した。

調査区東側（油小路側）の九町南北中央付近で東西溝441・2572・2858を検出した。溝2572は溝2858の掘り直しと推定している。東西溝441・2858（2572）は、出土土器や位置関係から、同時に機能していた可能性が高い。これら溝を側溝とする通路状の空間を想定できる。

２区では、南北21ｍ以上、東西約７ｍの南北棟で、桁行14間以上×梁行２間の掘立柱建物であ

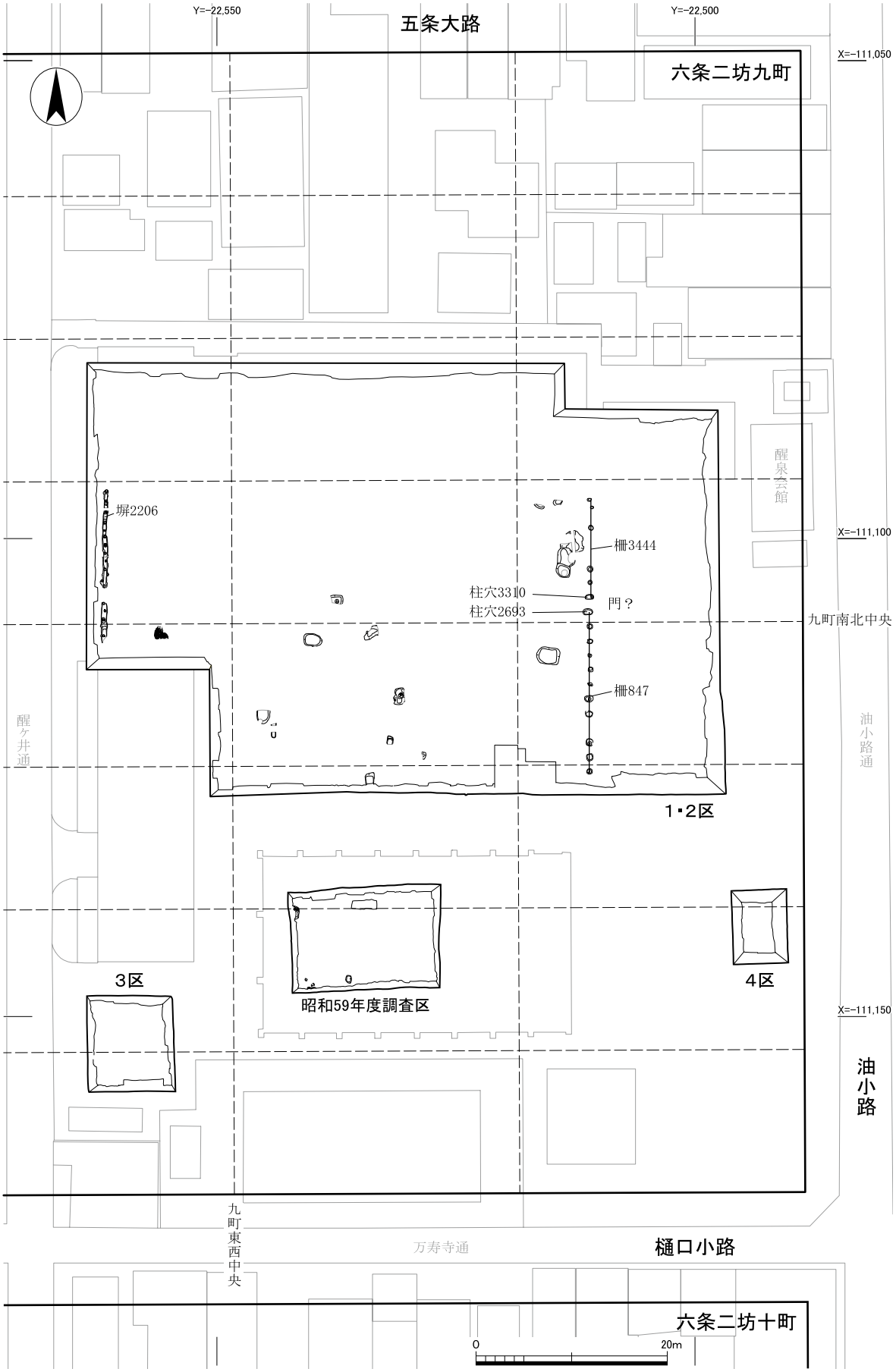


図39　遺構概要図11　室町時代前半（1：600）

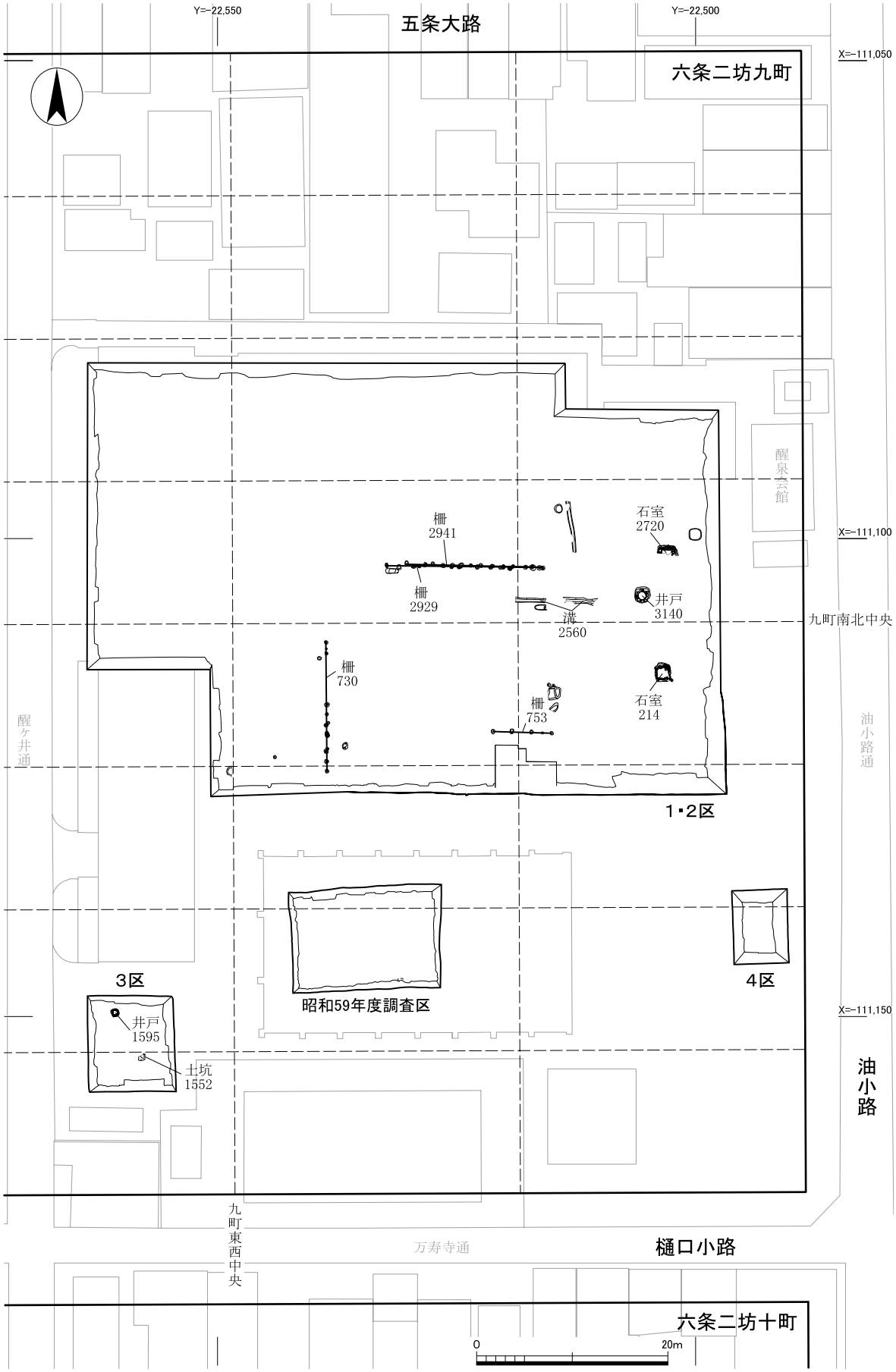


図40　遺構概要図12　室町時代後半（1：600）

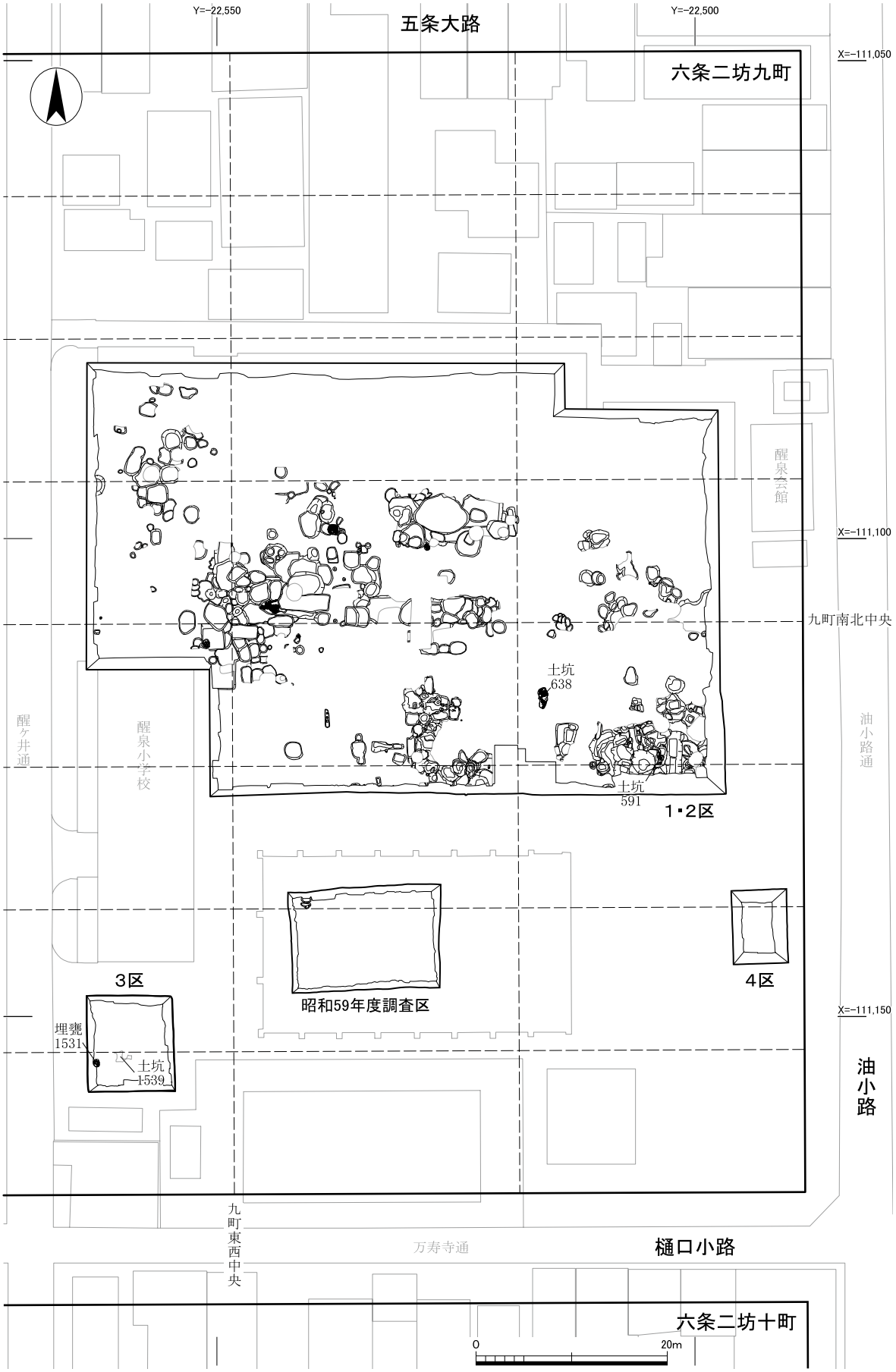


図41　遺構概要図13　安土桃山時代（1：600）

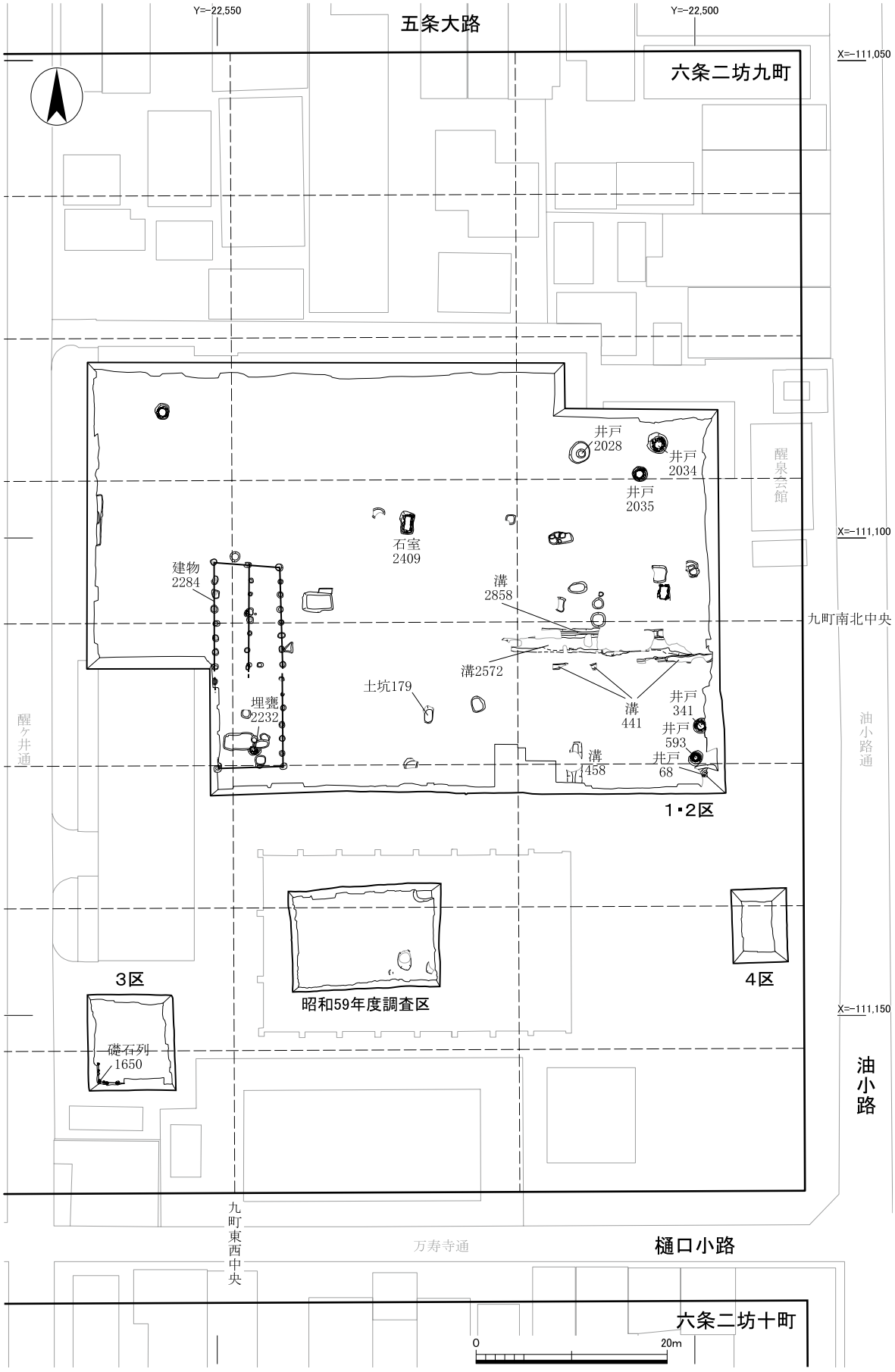


図42　遺構概要図14　江戸時代前半（1：600）

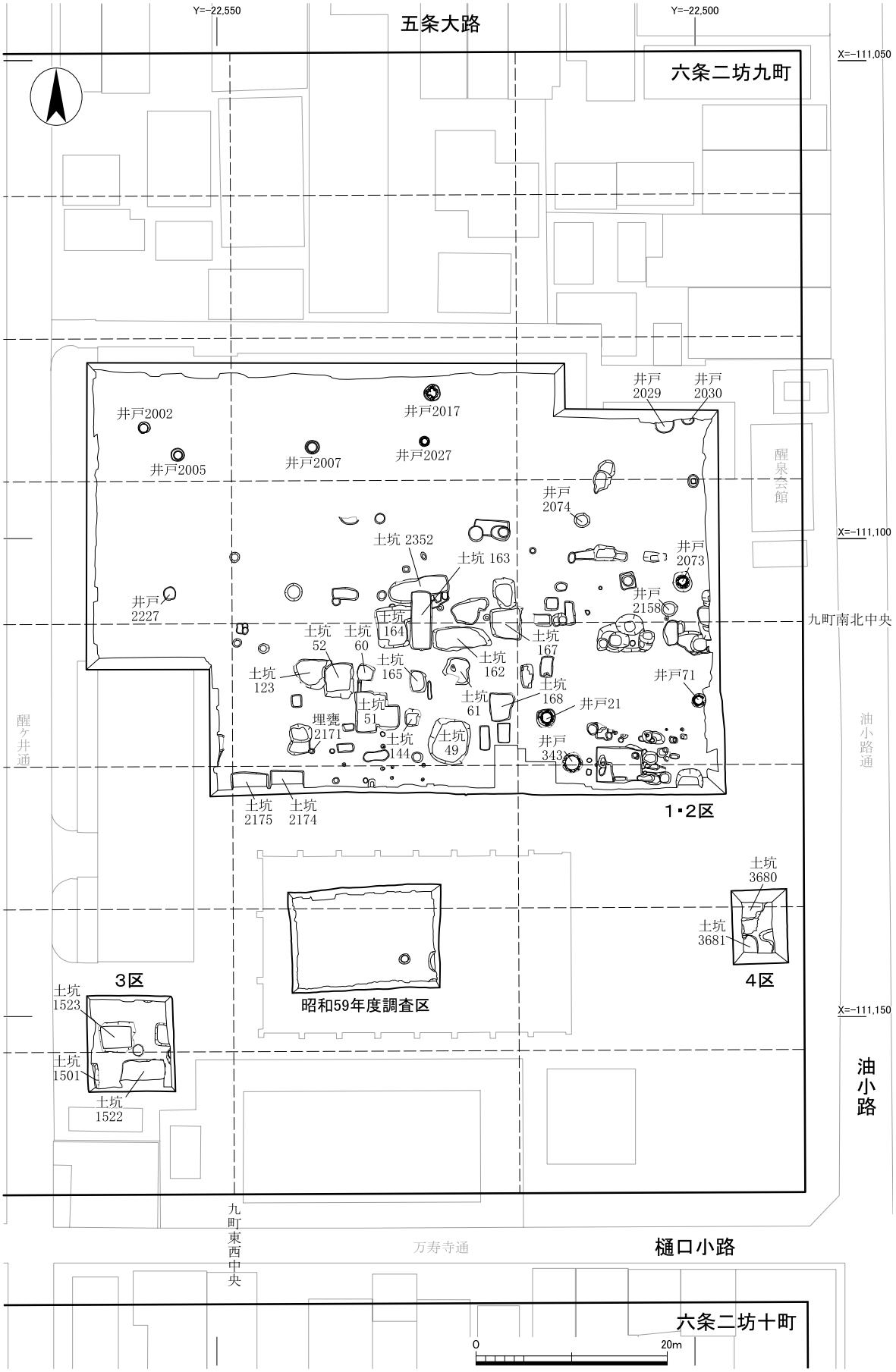


図43　遺構概要図15　江戸時代後半（1：600）

る建物2284を検出した。出土遺物は僅少であるが、17世紀後半頃の陶磁器が出土した。３区では、南北２間分×東西２間分の礎石列1650を検出した。

調査区東側（油小路側）では、油小路に面して一定の距離で南北方向に並ぶ井戸群を検出した。

江戸時代後半（図43） 18世紀以後の遺構群を江戸時代後半とした。江戸時代後半の整地層（図版２：10層、図版42：33・34層）を調査区の各所で確認した。

調査区の各所で平面方形の大型土坑を検出した。調査地内周辺だけでなく、中心部にも分布が集中する箇所が認められる。土坑内からは焼土と瓦類が多量に出土した。

井戸は調査区東側（油小路側）と西側（醒ヶ井通側）で、それぞれの通りに面して一定の距離で南北方向に並ぶ井戸群を検出した。また調査区北側でも、東西方向に並ぶ井戸群を検出している。

調査地中心部にある江戸時代の遺構群は、丹波福知山藩邸・肥前島原藩邸・丹波園部藩邸との関係が考えられる。各藩邸の記録が少なく、屋敷地の具体的な変遷は不明な点が多いが、文献や絵図から丹波福知山藩邸が17世紀中葉、肥前島原藩邸が17世紀後葉、丹波園部藩邸が18世紀から19世紀と考えられる[114)]。

さて、今回の調査において江戸時代前半とした遺構群は丹波福知山藩邸と肥前島原藩邸、江戸時代後半とした遺構群は丹波園部藩邸にかかわる遺構と考えられる。遺物は、これら藩邸内の建物で用いられたと考えられる軒瓦や道具瓦が出土した。また出土遺物の時期から、土坑179出土遺物が肥前島原藩邸、土坑144出土遺物が丹波園部藩邸に関係する可能性が高い。特に土坑179から出土した京焼の大皿（図版76：741）は優品であり、ここに藩邸があったことと関連する可能性がある。それに対して、土坑144出土土器は日常雑器が中心である。

丹波福知山藩邸と肥前島原藩邸に関しては、長崎県島原市本光寺所蔵の肥前島原松平文庫に指図が残されている。それによると、藩邸は調査地のほぼ中央部に位置しており、西は醒ヶ井通に面し、東は油小路通から、町屋の間を通る幅２間程度の通路から屋敷に至る敷地が描かれている。敷地の特徴は、『寛永後万治前洛中絵図』におおむね一致する。周囲には町屋が描かれているが、醒ヶ井通側にも町屋の存在が記録されている。

指図と遺構の対応であるが、今回検出した江戸時代の遺構で明確に一致するものは確認できなかった。ただ、九町南北中央付近で検出した東西溝441・2572・2858は、油小路通から屋敷に至る通路に関連する可能性が考えられる。

一方、長大な掘立柱建物である建物2284に該当する建物は、指図では確認することができなかった。指図の年代が新しいもので1675年頃と推定されていることから、それ以後に建造されたと推察する。３区で検出した礎石列1650については、ここが藩邸の敷地内にあたり、該当箇所に長屋風の建物の記載があることから、これの一部である可能性がある。

また、調査区東側（油小路側）にある井戸群は、町屋に伴うものと考えられる。

江戸時代後半の遺構で明確に藩邸の建築物として比定できる遺構は確認できなかった。しかし特徴的な遺構としては焼土・瓦処理土坑群がある。多量の焼土や瓦類とともに、19世紀の陶磁器類が出土しており、出土遺物の時期から元治元年（1864）の禁門の変に伴うと推定している[115)]。当該遺構

から出土した遺物の多くが、丹波園部藩邸に伴うものであった可能性が高い。

丹波園部藩邸の敷地は、『天明６年 京都洛中洛外絵図』や『天保２年 改正京町絵図細見大成』では幾分簡略化されて描かれており、詳細はよくわからない。しかしこれ以前と比べ、敷地南側が縮小して描かれている。この特徴は明治期の下京第十七区小学校（後の醒泉小学校）の敷地割とほぼ一致しており、丹波園部藩邸期に敷地規模が縮小されたと考えられる[116)]。

註

１） 歴史的環境については、下記文献を参考にした。
礒 航「行政文書にみる京都 明治の京都藩邸処分」『総合資料館だより』№147、京都府立総合資料館、2006年。
『醒泉百年』、醒泉小学校創立百周年記念事業委員会、1969年。
林屋辰三郎・村井康彦・森谷尅久編「下京区 醒泉学区」『京都市の地名』日本歴史地名大系第27巻、平凡社、1976年。
山田邦和「左京全町の概要」『平安京提要』、角川書店、1994年。
山村亜希「院政期平安京の都市空間構造」『平安京 －京都 都市図と都市構造』、京都大学学術出版会、2007年。

２）「昭和57年度試掘・立会調査一覧」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1984年。

３） 上村和直・久世康博「左京六条二坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1987年。

４）「調査一覧表 Ⅰ 1994（平成６）年度1～３月期 平安京左京（HL）六条二坊九町」『京都市内遺跡立会調査概報 平成７年度』、京都市文化市民局、1996年。

５） 近藤章子・吉本健吾「平安京左京六条二坊十町跡、烏丸綾小路遺跡（03HL64）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』、京都市文化市民局、2004年。

６）「試掘・立会調査一覧表 平安京左京（HL）六条二坊十町」『京都市内遺跡立会調査概報 平成５年度』、京都市文化市民局、1994年。

７） 伊藤 潔・網 伸也「左京四条二坊六町・六条二坊十町」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2011年。

８） 吉村正親「左京五条二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1984年。

９） 辻 裕司・伊藤 潔『平安京左京五条二坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013－10、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2014年。

10）「昭和60年度試掘・立会調査一覧表」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1988年。

11） 上村和直・本 弥八郎・磯部 勝「左京六条二坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1983年。

12） 植山 茂・岡 佳子・藤本孝一・南 博史『平安京左京六条二坊六町』平安京跡研究調査報告第17輯、財団法人古代学協会、1986年。

13） 上村和直「平安京左京六条二坊五町・猪熊殿・本圀寺跡」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2012年。
14） 上村和直「平安京左京六条二坊十二町」『昭和52年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2011年。
15） 尾藤徳行・吉村正親「Ⅳ 主要な出土遺物　2 烏丸綾小路遺跡・平安京左京六条二坊十二町（95HL199）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成７年度』、京都市文化市民局、1996年。
16） 佐藤亜聖・村田裕介・丸山真史『平安京左京六条二坊十四町・烏丸綾小路遺跡』、公益財団法人元興寺文化財研究所、2017年。
17） 上村和直・吉川義彦「左京六条二坊」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1984年。
18） 近藤章子『平安京左京五条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016－8、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2017年。
19） 平田　泰『平安京左京五条三坊五町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008－9、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2008 年。
20） 伊藤　潔・網　伸也「平安京左京五条三坊五町・烏丸綾小路遺跡」『昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2011年。
21） 小檜山一良「左京五条三坊」『京都市内遺跡立会調査概報 平成５年度』、京都市文化観光局、1994年。
22） 平尾政幸「平安京左京六条三坊」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2002年。
23） 高橋　潔・平方幸雄・丸川義広「平安京左京六条三坊２」『平成２年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994年。
24） 定森秀夫・岡　泰正『平安京左京六条三坊七町　京都市下京区小田原町・東銕屋町』京都文化博物館調査研究報告第11集、京都文化博物館、1995年。
25） 上村和直・久世康博「左京六条二・三坊」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1985年。
26） 山本雅和・菅田　薫「平安京左京六条三坊１」『平成２年度 京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994年。
27） 丸川義広・能芝　勉・尾藤徳行・卜田健司『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005－8、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2005年。
28） 検出遺構及び出土遺構の判定は、弥生土器が國下多美樹と藤井　整、田畑直彦、若林邦彦らの編年案を参照した。
國下多美樹「山城地域における中期弥生土器編年　－搬入土器と地域色を中心に－」『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』、近畿地方埋蔵文化財研究会、1993年。
田畑直彦「遠賀川式土器の特質と広域編年・歴年代」『初期農耕活動と近畿の弥生社会』、雄山閣、2018年。
藤井 整「山城地域における弥生時代中期の編年」『京都府埋蔵文化財論集 第４集－創立二十周年記念誌』、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、2001年。
若林邦彦「各地の弥生土器及び並行期土器群の研究　４近畿」『弥生土器』考古調査ハンドブック12、ニューサイエンス社、2015年。

平安時代以降の土師器皿については小森俊寛・上村憲章の編年案に準拠した。

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年。

他の遺物については下記文献を参考にした。

上原真人『木器集成図録　近畿原始編』奈良国立文化財研究所史料第36冊、奈良国立文化財研究所、1993年。

大橋康二『古伊万里の文様』、理工学社、1994年。

金田善敬「鉄釘の技術」『モノと技術の古代史』金属編、吉川弘文館、2017年

上村憲章「須恵器」『平安京提要』、角川書店、1994年。

『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念、九州近世陶磁学会、2000年。

『第７回シンポジウム　古代の土器研究－平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に－』、古代の土器研究会、2003年。

櫻木晋一『貨幣考古学の世界』考古調査ハンドブック15、ニューサイエンス社、2016年。

中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』、真陽社、1995年。

橋本久和『概論　瓦器椀研究と中世社会』、真陽社、2018年。

藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』、高志書院、2008年。

山本信夫・森田レイ子・宮崎亮一『大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集、太宰府市教育委員会、2000年。

29）　現地にて辻本裕也氏から御教示を得た。

30）　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年。

「平安京Ⅰ～Ⅴ期」「京都Ⅵ～ⅩⅣ期」は「京都Ⅰ～ⅩⅣ期」と表記した。

750頃			840頃			930頃			1010頃			1080～90頃			1180頃			1270頃			1360頃			1440頃			1500頃			1580～90頃			1660頃			1740年代頃			1820年代頃		
Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ			Ⅳ			Ⅴ			Ⅵ			Ⅶ			Ⅷ			Ⅸ			Ⅹ			Ⅺ			Ⅻ			ⅩⅢ			ⅩⅣ		
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

31）　植物遺存体は付章１、動物遺存体は付章６で詳述している。

32）　ここでは京都市域における弥生時代中期の土器相と関連が深い、近江南部の当該期土器を整理した伊庭 功の研究に倣い、製作技法に基づいて系統を分類した。また、甕の製作技法に関しては若林邦彦の研究を参考にした。

伊庭　功「近江南部の中期弥生土器　－様式と器種構成－」『古代文化』第55巻第５号、財団法人古代学協会、2003年。

若林邦彦「弥生土器地域色顕在化の構図」『弥生文化博物館研究報告』第２集、大阪府立弥生文化博物館、1993年。

33）　弥生土器の形式分類及び文様の呼称は、佐原　真の論考を基礎に、石黒立人・國下多美樹・永井宏幸・森岡秀人の諸論文を参照した。

石黒立人「'ハケメ文系土器' との往還」『弥生土器研究の可能性を探る』弥生土器研究フォーラム'13、アクセス、2013年。

國下多美樹「２　弥生時代」『長岡京跡左京第100次（7ANEHD地区～左京二条三坊一町・鵜冠井遺跡第３次～発掘調査概要』向日市埋蔵文化財調査報告書第11集、向日市教育委員会、1984年。

佐原　真「畿内地方」『弥生式土器集成』本編２、東京堂出版、1968年。

永井宏幸「内傾口縁土器から厚口鉢へ　～伊勢湾沿岸から持ち運ばれた容器～」『考古学フォーラム』16、愛知考古学談話会（考古学フォーラム）、2004年。

森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ、木耳社、1990年。

34）無頸壷Ｂは短い口頸部を持つが、註33佐原論文の分類に従った。

35）註33佐原論文のａ形態。

36）註33佐原論文のｂ形態。

37）下記石黒論文のｂ形態。

石黒立人「近畿東部から北陸西部、そして伊勢湾岸の社会と交流を考える為に　弥生中期土器に見る複数の＜系＞を超えて」『転機』８号　論集 弥生時代の地域社会と交流、地域と考古学の会、2018年。

38）註33永井論文のＢ・Ｃ類。

39）註33永井論文のＤ・Ｅ類。

40）註33永井論文のＦ類。

41）註32若林論文の甕Ｂ。

42）註33佐原論文の甕Ｂ。

43）分類は下記論文を参照した。

菅　榮太郎「石鏃資料の型式および製作技法の編年的検討」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅷ　1988年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書』、財団法人大阪市文化財協会、1995年。

44）土屋みづほ「石器」『市田斉当坊遺跡』京都府遺跡調査報告書 第36冊、財団法人京都府埋蔵文化財調査センター、2004年。

45）註28田畑・若林論文。

46）註32伊庭論文及び下記論文。

伊庭　功「近江南部の弥生時代中期から後期初頭の土器編年」『第53回埋蔵文化財研究集会　弥生中期の併行関係』発表要旨集、埋蔵文化財研究会・第53回研究集会実行委員会、2004年。

47）下記論文の甕形土器系統に該当する。

深澤芳樹「土器のかたち －畿内第Ⅰ様式古・中段階について－」『（財）東大阪市文化財協会 紀要Ⅰ』、財団法人東大阪市文化財協会、1985年。

48）炭素14年代測定に基づく数値年代観は下記論文に基づく。

藤尾慎一郎『弥生文化像の新構築』、吉川弘文館、2013年。

藤尾慎一郎「西日本の弥生稲作開始年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』183、大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館、2014年。

49）外来系土器・搬入土器については、伊藤淳史、川部浩司、國下多美樹、永井宏幸、森岡秀人、若林邦彦の諸氏から御教示をいただいた。

50）今回の調査では、註33永井論文のＢ類～Ｆ類に該当する個体を確認した。

51）註３文献の図６－34。

52）竪穴建物1055・3579は平面方形を呈する。伊藤淳史は小型方形プランの竪穴に作業小屋としての機能があると推定している。

伊藤淳史「京都府域における縄文晩期～弥生中期の集落検出遺構」『第55回埋蔵文化財研究集会　弥生

集落の成立と展開』発表要旨集、埋蔵文化財研究会・第55回埋蔵文化財研究集会実行委員会、2006年。
53) 「昭和57年度試掘・立会調査一覧表　平安京左京（HL）六条二坊（HL170)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』、京都市文化観光局、1983年。
54) 伊藤　潔『平安京左京四条四坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－28、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2007年。
55) 大矢義明・玉村登志夫・永田信一・峰　巍『平安京関係遺跡発掘調査概報　－京都市高速鉄道烏丸線内遺跡発掘調査－』、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、1975年。
56) 大矢義明・玉村登志夫・永田信一・峰　巍『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、1979年。
57) 大矢義明・小森俊寛・永田信一・原山充志『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ　1976年度』本文編、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、1981年。
58) 百瀬正恒・辻　裕司・南　孝雄「左京五条三坊」『平成２年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994年。
59) 近藤章子・菅田　薫「平安京左京五条三坊八町・烏丸綾小路遺跡（98HL165)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』、京都市文化市民局、1999年。
60) 伊藤　潔『平安京左京五条三坊十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007－7、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2007年。
61) 上村和直「平安京左京四条三坊跡」『平安京跡発掘調査概要　文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』、京都市文化観光局、1980年。
62) 山本雅和「烏丸綾小路遺跡出土の石刀」『研究紀要』第９号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2004年。
63) 東　洋一・伊藤　潔『平安京左京四条四坊八町跡・烏丸御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013－2、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2013年。
64) 植山　茂・山田邦和・南　博史『平安京左京三条四坊四町　京都市中京区曇華院前ノ町』京都文化博物館（仮称）調査研究報告書第２集、財団法人京都文化財団、1988年。
65) 熊谷洋一・小池智美『平安京左京五条三坊七町跡・烏丸綾小路遺跡　－白楽天町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』イビソク京都市内遺跡調査報告第15輯、株式会社イビソク関西支店、2017年。
66) 網　伸也・柏田有香『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008－10、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2008年。
67) 家崎孝治・久世康博「Ⅺ 主要な遺物　1.土器類　平安京左京五条三坊（61年度HL283)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』、京都市文化観光局、1988年。
68) 辻村純代・千喜良淳・前川佳代『平安京左京五条三坊八町』平安京跡研究調査報告第19輯、財団法人古代学協会、1997年。
69) 坂本範基・中井勝治・小池智美・河合恭典・宮本信幸『平安京左京三坊四町・烏丸綾小路遺跡』株式会社日開調査設計コンサルタント 文化財調査報告書第２集、株式会社日開調査設計コンサルタント、2007年。
70) 山田邦和・若林邦彦・寺升初代・古座岩正敬・大塚活美『平安京左京五条二坊十六町』京都文化博物館調査研究報告第６集、京都府京都文化博物館、1991年。

71） 寺島孝一・横田洋三・若松良一『長刀鉾町遺跡　－平安京左京四条三坊十三町－』平安京跡研究調査報告第11輯、財団法人古代学協会、1984年。

72） 平尾政幸『平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－26、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2007年。

73） 植山　茂・内田俊秀・定森秀夫・南　博史・山下秀樹『平安京左京四条四坊四町　京都市中京区阪東屋町』京都市文化博物館調査研究報告第９集、京都府京都文化博物館、1993年。

74） 小森俊寛・上村憲章「平安京左京四条三坊２」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994年。

75） 伊藤　潔・川村雅章・竜子正彦「左京四条三坊十一町（92HL44）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成４年度』、京都市文化観光局、1993年。

76） 尾藤徳行・竜子正彦・伊藤　潔「左京四条三坊十一町（91HL367）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成４年度』、京都市文化観光局、1993年。

77） 前田義明「左京五条三坊（２）」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1983年。

78） 長戸満男・山本雅和・近藤知子・鈴木廣司「平安京左京五条四坊」『平成４年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1995年。

79） 辻　裕司「左京五条三坊跡立会調査（№353）」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　昭和54年度』、京都市文化観光局文化財保護課、1980年。

80） 佐々木英夫・寺島孝一・横田洋三『平安京左京五条三坊十五町』平安京跡研究調査報告第５輯、財団法人古代学協会、1981年。

81） 鈴木久男『史料京都の歴史』第二巻考古、平凡社、1983年。

82） 大矢義明・小森俊寛・永田信一・原山充志『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』本文編、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、1982年。

83） 赤松佳奈「平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成27年度』、京都市文化市民局、2016年。

84） 小森俊寛「平安京左京五条四坊」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1991年。

85） 家崎孝治・上村憲章『平安京左京五条四坊一町　－四条高倉マンション新築に伴う調査－』、古代文化調査会、2006年。

86） 黒須亜希子「平安京左京五条二坊十町跡（16H245）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成28年度』、京都市民文化局、2017年。

87） 伊藤淳史「京都盆地の弥生時代遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1992年度、京都大学埋蔵文化財センター、1995年。

88） 内田好昭「京都市域における縄文弥生移行期の集落」『弥生文化出現期前後の集落について』第24回京都府埋蔵文化財研究会発表資料、京都府埋蔵文化財研究会、2017年。

89） 註88内田論文の烏丸御池遺跡（南）の一画と推定している。

90） 註66文献。

91） 註66文献。

92） 貨泉流入のピークを弥生後期後半頃とする指摘がある。

森岡秀人「弥生・古墳時代の出土銭貨」『月間考古学ジャーナル』№526、ニューサイエンス社、2005年。

93) 調査地の居住者であるが、第２章第１節で触れたように、『中古京師内外地図』は平安時代前期の官人・学者である三善清行としている。しかし原典となった『今昔物語集』は三善清行宅が「五条堀川」にあると伝えるのみで、具体的な場所について言及していない。『中古京師内外地図』がここに比定した理由が判然としないため、調査地の居住者の判断は保留する。

94) 当該期の整地は、平安京左京五条二坊十一町（図11－13)、同左京六条二坊五町（図11－９）・十四町（図11－11）などで報告されている。

95) 第２章第１節で触れたように、調査地周辺における小屋の存在は文献から想定されているが、調査地内における当該期の邸宅や屋敷の記録は確認できていない。しかし近傍には、平安京左京六条二坊五町に藤原基通（『山槐記』治承３年（1179）11月26日条)、十町に藤原経忠（『中右記』承徳２年（1098）７月20日条)、十二町に藤原親雅（『山槐記』文治元年（1185）８月26日条)・源 義経（『百練抄』文治元年（1185）10月17日条)、十三町に尾張守平 業忠（『山槐記』文治４年（1189）12月５日条)、十六町に前長門守孝範（『中右記』寛治元年（1087）６月20日条）などが邸宅を構えた。また十三町の平 業忠邸は、寿永２年（1183）に後白河法皇に移御され、文治４年（1188）の火災を経て１町に拡張して再建されている。調査地周辺は、邸宅や屋敷の分布が比較的密な地域であったと考えられている（註１山村論文参照)。

96) 福島孝行「二条大路」『京都府遺跡調査概報 第91冊』、京都府埋蔵文化財調査研究センター、2000年。

97) 東寺編「瓦」『新東寶記 東寺の歴史と美術』、東寺、1995年。

98) 加納敬二「瓦類」『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書第22冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2004年。

99) 平尾政幸・辻 純一「平安京左京二条二坊（2)」『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』、京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1982年。

100) 註80文献。

101) 註57文献。

102) 註82文献。

103) 植山 茂「瓦類」『平安京左京七条三坊五町』平安京跡研究調査報告第15輯、財団法人古代学協会、1985年。

104) 堀内明博「平安京左京九条三坊一町跡」『平安京左京内５遺跡』平安京跡研究調査報告第22輯、財団法人古代学協会、2008年。

105) 鈴木康高「瓦類」『平安京左京九条三坊八町跡・烏丸町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017－8、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2018年。

106) 細谷義治「鳥羽離宮跡出土軒瓦の整理」『埋蔵文化財発掘調査概報（1968)』、京都府教育委員会、1968年。

107) 前田義明「瓦類」『鳥羽離宮跡Ⅰ 金剛心院跡の調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2002年。

108) 内田好昭・丸川義広・平方幸雄「最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成３年度 京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1995年。

109) 上原真人「円勝寺発掘調査団：円勝寺の発掘調査（下） 瓦類」『佛教藝術84号』、毎日新聞社、1972年。

110） 柴野康之「出土瓦・磚の分類と考察」『法住寺殿跡』平安京跡発掘調査報告書第13号、財団法人古代学協会、1984年。

111） 上原真人「摂関・院政期における讃岐系軒瓦の動向」『平安京とその時代』、思文閣出版、2009年。

112） 京都市内における類例として、左京五条三坊九町の地下式倉庫450（註66文献）、左京五条三坊五町のSX33（註20文献）、左京三条四坊四町の土坑89（註64文献）などがある。地下式倉庫450は綾小路周辺に町屋建物が成立し始める鎌倉時代前半、やや奥まった空間に造られたと想定されている。SX33は平安時代時代末頃、土坑89は江戸時代の遺構と報告されている。

113） 五十川伸矢「土取りの歴史的変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』、京都大学埋蔵文化財研究センター、1991年。

114） 各藩邸に関する記録が少なく、屋敷の変遷は不明な点が多い。丹波福知山藩邸については、『寛永14年洛中絵図』（1637）と『寛永後万治前洛中絵図』（1646）に、調査地が「稲葉淡路守屋敷」であったことが記録されている。少なくとも丹波福知山藩主が稲葉家であった寛永元年（1624）９月以後、絵図の作成年代の下限である正保２年（1646）頃は、調査地に丹波福知山藩稲葉家が屋敷を構えていたと考えられる。

慶安元年（1648）８月に丹波福知山藩の稲葉家は改易となるが、慶安２年（1649）２月に同藩主として、後に肥前島原藩主となる松平忠房が転封する。肥前島原松平文庫にある『深溝世紀』巻７の万治元年（1658）11月11日条にある、調査地に藩邸があったことを示す記事（「踰大谷山科志留渓、経五条石橋、牛牌後到松原邸」）は、松平忠房が丹波福知山藩主であった時の記録と考えられる。松平忠房は寛文９年（1669）６月に肥前島原藩へ加増転封するが、この時に調査地にあった京屋敷は、主が同じまま丹波福知山藩邸から肥前島原藩邸へと名義のみ変更されたと推察する。肥前島原松平文庫には２葉の京屋敷絵図（架蔵番号125・126）があり、架蔵番号126の指図には稲葉淡路守の子供である「稲葉大輔」の名が記されている。丹波福知山藩邸の指図が肥前島原藩の文書として残されていた理由は、こうした経緯があったためと考えられる。

一方、架蔵番号125の指図は肥前島原松平文庫の『番日記』延宝３年（1675）１月24日条にある町屋側に張り出していた長屋の軒の処分に関係する指図と考えられることから、肥前島原藩邸の頃の指図と考えられている。

肥前島原藩邸から丹波園部藩邸への屋敷替えの具体的な時期も不明である。しかし宝永２年（1705）刊の『京羽二重』には、この地に丹波園部藩小出氏の京屋敷があったことが記されている。元禄７年（1694）刊の『京独案内手引集』には、まだここが肥前島原藩邸であったことが記されていることから、この間に屋敷替えがなされたと考えられる。以後、明治５年（1872）の太政官布告に至るまで、調査地は丹波福知山藩邸として利用されている。

木村充伸・伊藤龍一・後藤久太郎・斎藤英俊・吉田純一・松井みき子・山口俊浩「深溝松平藩の屋敷地の変遷と屋敷指図 －深溝松平藩建築指図の復元的検討に基づく作図・表現技法に関する研究（１）－」『日本建築学会計画系論文集』第73巻第629号、日本建築学会、2008年。

115） 下記論文によると、調査地は被災範囲に含まれている。

長尾泰源・谷端 郷・麻生 将「火災図を用いた『元治の京都大火』被災範囲の復元」『歴史都市防災論文集』Vol.６、立命館大学歴史都市防災研究所、2012年。

116） 『京都御役所向大概覚書』によれば丹波園部藩邸の規模は「表口十五間　裏行弐拾九間」であった。

付章１　弥生時代流路1132堆積物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平安京左京六条二坊九町跡・烏丸綾小路遺跡（京都市下京区醒ヶ井通松原下る篠屋町59）（以下本文中では調査地とする）は、京都盆地のほぼ中央付近に位置する。京都盆地内の平野の地形は、北東部の扇状地と南西部の桂川沿いに発達する自然堤防帯に大きく分けられるが（太田ほか編,2004）、調査地の位置は扇状地の南西部付近に相当する。この扇状地は、鴨川扇状地と呼ばれ、賀茂川と高野川によって形成された地形であり、完新世の地形面と考えられている（太田ほか編,2004）。

これまでの発掘調査により、弥生時代から江戸時代に至るまでの遺構・遺物が確認されているが、中でも弥生時代前期末から中期中葉とされる集落遺跡は、京都盆地では貴重な事例として注目されている。さらに、弥生時代の流路（流路1132）を充填する堆積物は、出土土器の時期に基づくと、第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式に相当すること、植物遺体等の有機質を含むことから、当該期の調査区および周辺環境を把握する上で貴重である。

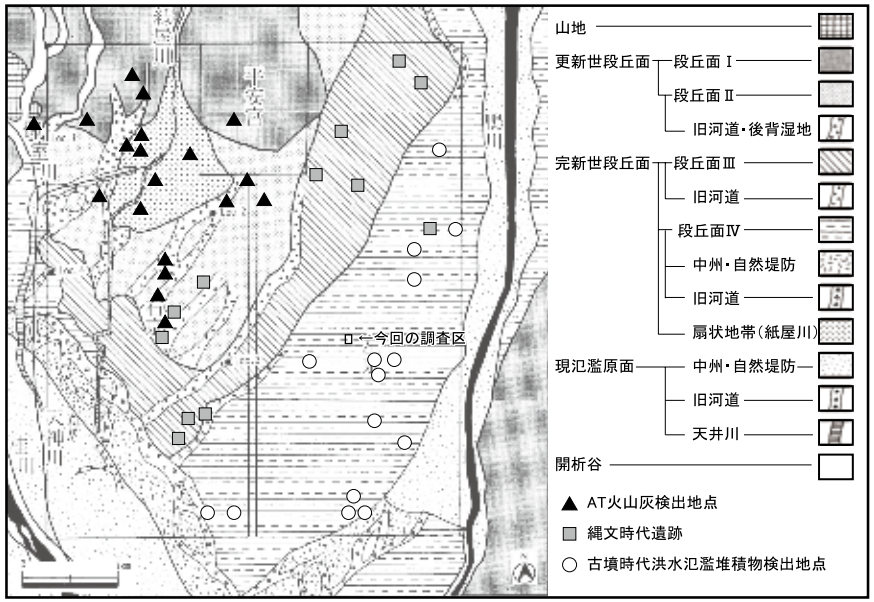
今回の分析調査では、調査区および周辺の古環境に関する情報を得ることを目的として、流路1132埋積物中に認められた火山灰の可能性のある堆積層（ここでは仮にテフラ様層と呼ぶ）を対象として、分析によりその特性を明らかにし、火山灰である場合には、流路の年代資料とする。また、弥生時代の流路の基盤をなす堆積物の形成年代を明らかにすることを目的として、放射性炭素年代測定を実施する。さらに、流路1132を充填する堆積物について微化石分析および種実分析を行い、弥生時代中期における調査区および周辺の古環境、および当該期の植物利用に関する情報を得る。

（１）調査地点

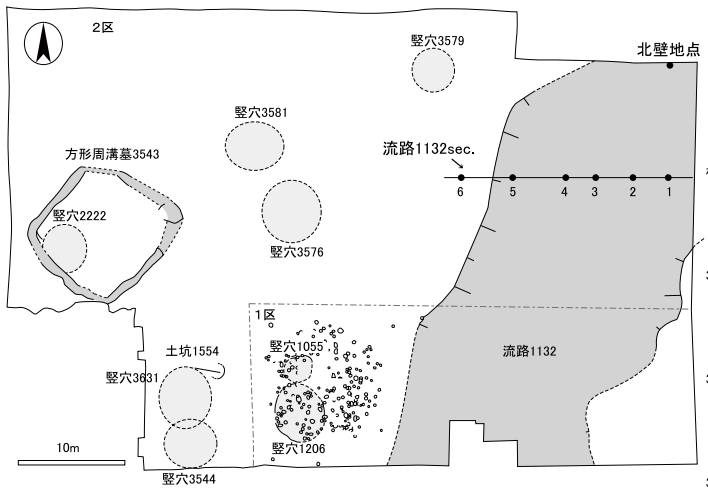
本遺跡は、上記したように鴨川扇状地に位置する。河角（2001）による詳細な時間・空間スケールの地形分類図に基づくと、調査地は完新世段丘の段丘面Ⅳに位置する（図44）。この鴨川流域の段丘面Ⅳは平安京左京五条付近を起点に南西方向に網状流をなす旧河道が確認される扇状地帯で、古墳時代の広範囲におよぶ洪水氾稚唯積物の分布や10世紀頃まで流れていた旧河道の存在から、古墳時代や平安時代前半まで地形形成が継続した地形面と推定されている。

今回の調査地点を含む、弥生時代遺構の基盤堆積物の断割断面が作成された調査区東部の流路1132sec地点における堆積物の累重状況を図44に示す。調査断面における堆積層は、その層理面やその特徴から、堆積ユニット１～８に大別される。なお、柱状図左側の数字は各断面において発掘調査時に付された層名で、年代については出土遺物から推定される形成年代を示す。

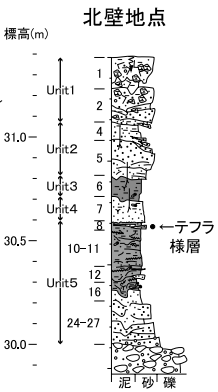
弥生時代の遺構確認面の基盤をなす堆積層（以下、基盤層とする）は堆積ユニット８・７が相当する。堆積ユニット８は側方および下方の双方への連続性が良い砂礫からなる。堆積上面は、平坦



平安京域の地形分類図(河角,2001より引用、一部改変)



遺構概略図および柱状図作成地点



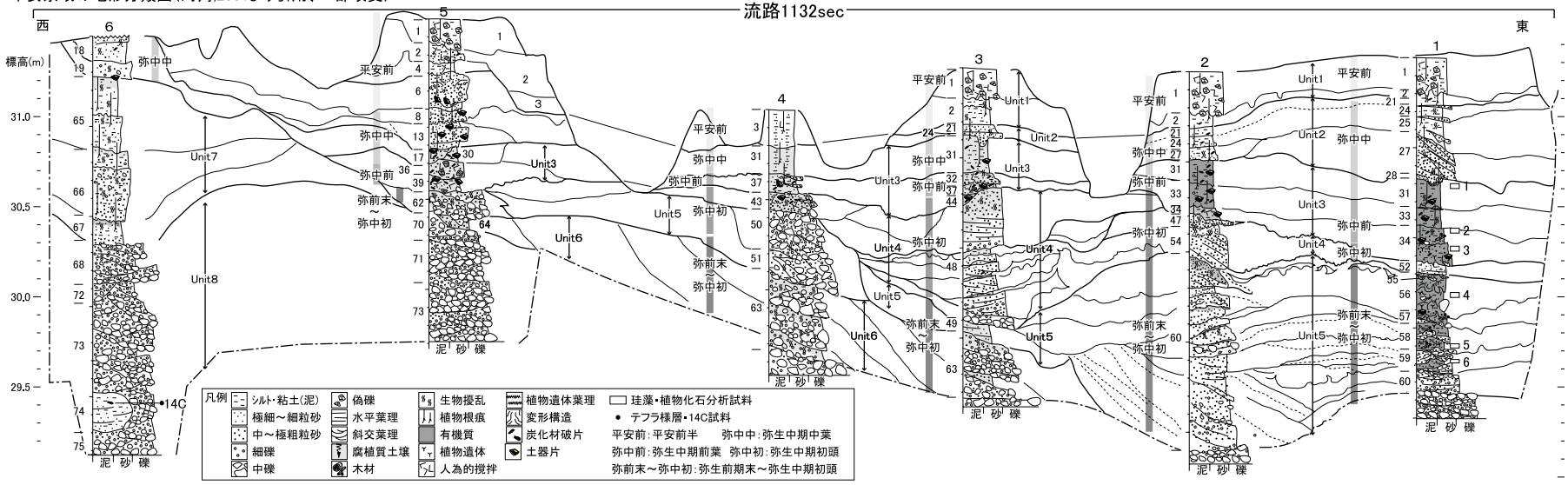


図44　調査地点の層序および試料採取位置

ではなく大きな起伏が認められ凹凸が著しい。北から南へ向かっての一方向流の掃流によって運搬・堆積した、トラフ型斜交葉理・層理の堆積構造が認められ礫支持をなす砂礫層で、再侵食しながら側方および上方へ積層している状況が観察される。また最下部には、流路の侵食作用により生じた基盤堆積物由来の泥質砂からなる巨礫サイズの偽礫が取り込まれている。トレンチ調査のため全体的な礫層の分布状況は言及できないが、層相から河床を埋積した堆積物の可能性が高い。後述する偽礫堆積物中の植物遺体の^{14}C年代測定値は暦年代で5,284～4,977calBPを示すことから、堆積ユニット８の砂礫は縄文時代中期中葉以降に形成されたことになる。上位を被覆する堆積ユニット７は、シルト～シルト混じり砂からなる細粒堆積物の積層かならなる。これら細粒堆積物は河川による扇状地面の埋積の進行に伴い、流路が相対的に遠くへ移動した後に、その流路から洪水によって供給されたものと推定される。また、これら細粒堆積物は著しく擾乱されており、層準によっては発達が全体的に不良な古土壌を形成している。これらの特徴から、調査区付近の扇状地上では、流路移動後の洪水により、地表で土壌発達するような堆積の休止期を挟在して断続的に氾濫原の埋積が進行したことが推定される。

以上の基盤層を侵食して埋没流路（流路1132）が形成されている。流路1132は北北東から南南西方向に流下する。流路1132を充填する堆積物は、堆積ユニット６～２が相当する。

充填堆積物下半部をなす堆積ユニット６～４は、堆積ユニット６が流路西側の滑走斜面に側方付加しながら堆積するイプシロン型斜交葉理をなす砂礫層で、上部は土壌化している。寄州堆積物とみられる。堆積ユニット５は寄州堆積物斜面下部から東側の攻撃斜面側の凹地にかけて堆積する斜交葉理をなす細礫混じり砂層と、その上位に累重するトラフ型斜交葉理をなす砂礫～砂の積層からなる。上位の砂礫～砂層は上凸の外形をなし、中州状の微地形を形成していたとみられる。また、これらの砂堆の東側の攻撃斜面側の凹地には同時期の砂層と流水の減衰期に堆積した有機質に富む砂質シルトが積層する。これらも堆積ユニット５としている。堆積ユニット６・５の形成年代は、出土遺物から弥生時代前期末～中期初頭と推定される。堆積ユニット4は西側流路斜面と中州の間を侵食して堆積する砂礫～砂層からなる流路充填堆積物である。上面は上凸の外形をなし、離水し土壌生成が進行している。出土遺物から弥生時代中期初頭の形成年代が推定される。以上のような層相から、弥生時代前期末～弥生時代中期初頭の流路1132は、寄州・中州の発達する網状流路のような堆積環境であったことが推定される。

なお、堆積ユニット５～４下部を構成する堆積物は著しく変形している。この変形構造は垂直方向に連続的な含水塑性変形で、その状況から地震動に起因すると判断される。地震の発生時期は、変形上端の堆積ユニット４下部の形成期の弥生時代中期初頭と推定される。また、堆積ユニット５上部には、白色を呈するテフラ様層（55層）を挟在する。

流路充填堆積物上半部は堆積ユニット３・２が相当する。堆積ユニット４上面の凹凸のある明瞭な層理面を挟み、堆積ユニット３の著しく擾乱された有機質に富む砂質泥～泥質砂層が積層する。レンズ状の砂の薄層を挟在しており、流路の切断や突然の転流などによって生じた放棄流路（増田・伊勢屋,1985; 堆積学研究会編,1998）のような堆積環境に変化したことが推定される。基準面低

下などの何らかの理由により流路の動きは止まり、砂や礫などの掃流堆積物が供給されなくなり、泥や細粒の砂などの浮流堆積物で埋積されていくようになったと推定される。また、堆積ユニット３の砂質泥～泥質砂層は著しく擾乱されており、炭片や弥生時代中期の土器片が混じるようになる。特に流路西岸側斜面上部での炭片・土器の出土量は多い。このように堆積ユニット３形成期には流路1132は放棄流路のような堆積環境に変化し、人間活動が流路内にも及ぶようになったことが推定される。

堆積ユニット３の上位に累重する堆積ユニット２は、逆級化成層をなす砂質泥～砂、その上位を砂質泥から泥質砂などの洪水氾濫堆積物の積層からなる。洪水氾濫堆積物上部は土壌化しており、その層準から古墳時代の遺物が出土する。これらのことから弥生時代中期から古墳時代にかけて、調査区一帯は不安定な堆積場に変化したことが推定される。その上位の堆積ユニット１は平安時代前半の人為的撹拌が及んだ堆積物からなる。

（２）テフラ様層の分析

２－１.試料

テフラ様層は、流路1132を充填する堆積ユニット３最上部の植物遺体葉理を挟在する暗灰色を呈する有機質シルト質砂層中に挟在する。層相は灰白色を呈する葉理構造の発達する砂質シルトからなる（図45）。層厚は５～15㎜をもって断続的に薄層として分布する。場所によっては数㎜の間層を挟む互層状をなし、また、厚さ10㎜前後で厚さ15㎜ほどの間層を挟む２層に分かれている状況も認められる。さらに水平方向に剪断されるなど、変形している部分もある。なお、テフラ様層および灰色シルト質砂層の両者に極細砂径以下の黒雲母片の含有が認められる。

現地試料採取では、分析用の試料として、２区北壁部分でテフラ様層を挟む埋積層のブロックを

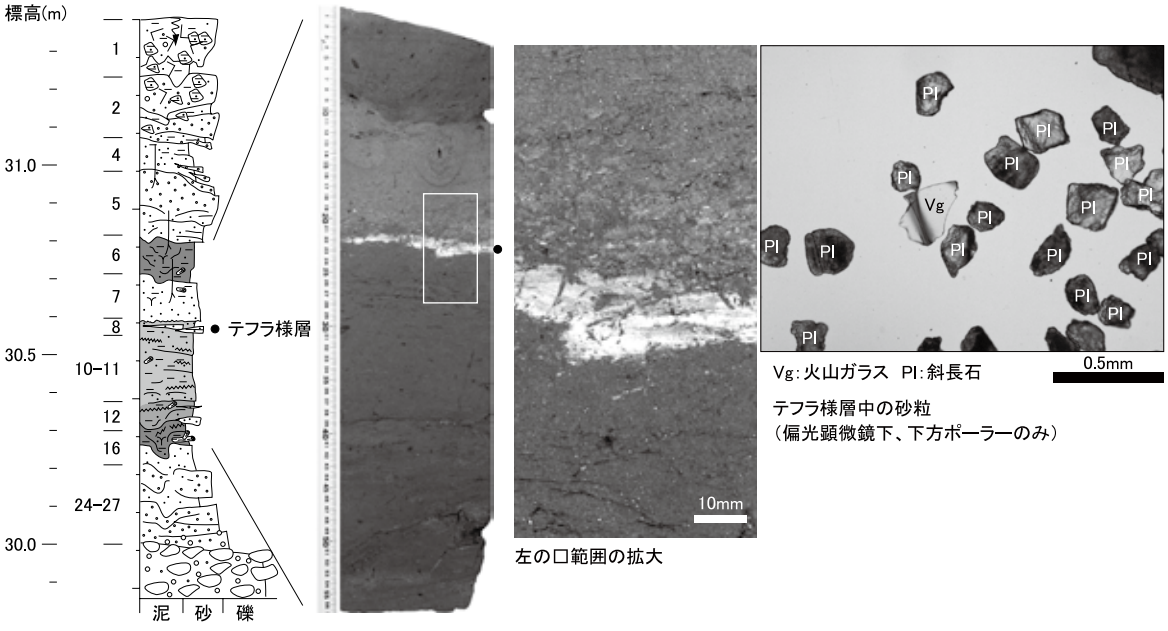


図45　２区北壁の層序およびテフラ様層とその砂粒の写真

縦横約40㎝、厚さ約15㎝の大きさで切り出した。この試料を室内にて観察した後にテフラ様層を挟む層準で分割し、テフラ様層を構成する灰白色シルトのうち、擾乱が及んでいない部分から分析試料を面的に採取した。

２－２.分析方法

(1) 砂粒組成

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径１/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径１/８㎜-１/16㎜（極細砂径）の砂分を偏光顕微鏡下にて同定する。同定計数はライン法により200粒を上限とする。なお、火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は厚手平板状あるいは比較的大きな気泡持つ塊状、軽石型は小気泡を非常に多く持つ塊状および繊維束状のものとする。また、変質等により同定不能の粒子は「その他」とした。

(2) 屈折率測定

屈折率の測定は、処理後の砂分を偏光顕微鏡下で観察し、バブル型火山ガラスを対象として古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

(3) 化学組成

火山ガラスの化学組成分析は、日本電子製波長分散型電子プローブマイクロアナライザー（JXA-8230）を用いた。分析に先立ち、以下の試料調整を行った。樹脂を用いて火山ガラスをEPMA分析用の厚片に調整し、分析を行う面には鏡面研磨と炭素蒸着とをそれぞれ施した。また試料中の火山ガラス粒子がごく少量（７粒子）であったため、全ての粒子の断面が得られるように調整した。

電子プローブの加速電圧、照射電流（ファラデーカップ上）はそれぞれ15kV、10nAである。ビーム径は２μmとし、分析の際は常に10μm×10μmの範囲（正方形の分析領域）を走査するように設定した。測定元素数は10元素（Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P）である。定量分析の直前には、各元素について標準試料の分析を行った。標準試料の測定条件は未知試料の定量分析と同条件である。

２－３.結果

(1) 砂粒組成

結果を表12、図46に示す。処理後の砂分の多くは、斜長石の鉱物片であり、他に少量の石英の鉱物片と岩片を含み、極めて微量のバブル型火山ガラスも含まれる。なお、処理前の試料に認められた黒雲母片は、処理後の極細砂径試料にはほとんど含まれず、より細粒

表12　テフラ様層の砂粒組成

試料名	石英	斜長石	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	岩片	その他	合計
２区北壁テフラ様層	12	172	3	0	0	11	2	200

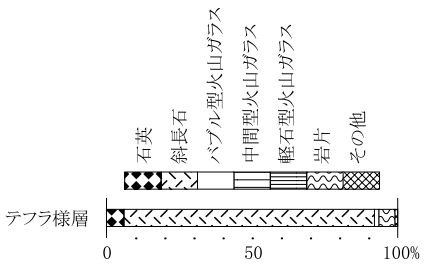


図46　テフラ様層の砂粒組成

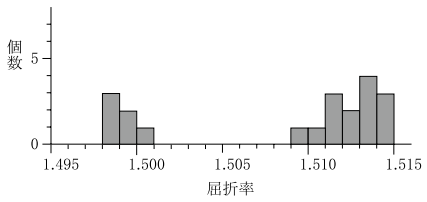


図47　火山ガラスの屈折率

のシルト径試料に回収された。

(2) 屈折率測定

測定結果を図47に示す。低屈折率と高屈折率の２つのレンジに明瞭にわかれた。低屈折率のレンジはn1.498-1.500であり、高屈折率のレンジはn1.509-1.514である。

(3) 化学組成

バブル型火山ガラス７粒子について合計16測点の分析を実施した。分析結果を表13に示す。主要元素の中でも特にテフラによる違いの顕著な元素であるSi、Ti、Fe、Mg、Ca、Na、Kの７元素に着目してみると、計測した７粒子には２種類の組成が混在していることが見出せる。一つはGrain01、04、07の３粒子のグループであり、もう一方はGrain02、03、05、06の４粒子のグループである。

前者の組成は、SiO_2が78％前後、TiO_2が0.1％前後、FeOが１％前後、MgOが0.05～0.15％、CaO

表13　２区北壁テフラ様層の火山ガラスの化学組成

（合計100%となるように調整）

測点番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
粒子番号	Grain01			Grain02			Grain03			Grain04		Grain05	Grain06		Grain07	
測点名	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	a	a	b	a	b
SiO_2	78.03	78.53	78.34	74.75	75.06	74.69	74.97	75.07	74.93	78.55	78.24	75.92	74.96	75.01	77.94	77.63
TiO_2	0.15	0.08	0.09	0.56	0.50	0.60	0.47	0.55	0.56	0.17	0.15	0.45	0.48	0.47	0.03	0.08
Al_2O_3	12.16	11.75	11.95	12.62	12.55	12.76	12.54	12.27	12.44	11.50	11.85	11.76	12.57	12.31	12.38	12.46
FeO*	1.19	1.15	1.27	2.31	2.40	2.40	2.39	2.46	2.34	1.18	1.24	2.29	2.30	2.39	0.73	0.87
MnO	0.02	0.00	0.07	0.04	0.06	0.10	0.08	0.04	0.09	0.02	0.01	0.04	0.06	0.03	0.06	0.06
MgO	0.12	0.11	0.13	0.50	0.41	0.48	0.45	0.49	0.46	0.06	0.15	0.44	0.49	0.41	0.04	0.05
CaO	1.07	1.08	1.09	1.94	1.88	1.77	1.90	1.93	1.91	1.02	1.15	1.92	1.94	1.99	0.77	0.76
Na_2O	3.87	3.85	3.75	4.38	4.18	4.20	4.32	4.28	4.22	4.08	3.84	4.31	4.24	4.42	3.62	3.64
K_2O	3.31	3.37	3.31	2.85	2.84	2.89	2.75	2.85	2.88	3.41	3.34	2.86	2.89	2.89	4.41	4.46
P_2O_5	0.06	0.07	0.00	0.07	0.10	0.10	0.13	0.06	0.15	0.00	0.02	0.02	0.08	0.08	0.02	0.00
Total	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

（測定値のまま）

SiO_2	73.05	73.29	73.33	72.71	72.47	72.49	73.95	73.89	73.42	76.72	76.82	71.78	72.92	74.23	75.75	74.91
TiO_2	0.14	0.08	0.09	0.54	0.49	0.58	0.46	0.54	0.55	0.17	0.14	0.43	0.46	0.47	0.03	0.08
Al_2O_3	11.39	10.97	11.18	12.27	12.12	12.39	12.37	12.08	12.19	11.23	11.63	11.12	12.23	12.18	12.03	12.03
FeO*	1.12	1.08	1.19	2.24	2.32	2.33	2.36	2.43	2.30	1.16	1.22	2.16	2.24	2.37	0.71	0.84
MnO	0.02	0.00	0.07	0.04	0.06	0.10	0.08	0.04	0.09	0.02	0.01	0.03	0.06	0.03	0.06	0.06
MgO	0.11	0.10	0.12	0.49	0.40	0.47	0.45	0.48	0.45	0.06	0.15	0.41	0.47	0.40	0.04	0.05
CaO	1.01	1.01	1.02	1.89	1.82	1.72	1.88	1.90	1.87	1.00	1.13	1.82	1.88	1.97	0.75	0.74
Na_2O	3.63	3.59	3.51	4.26	4.04	4.08	4.26	4.21	4.14	3.99	3.78	4.07	4.13	4.37	3.52	3.51
K_2O	3.10	3.15	3.09	2.77	2.75	2.81	2.72	2.80	2.82	3.33	3.28	2.71	2.81	2.86	4.28	4.30
P_2O_5	0.06	0.07	0.00	0.07	0.10	0.10	0.13	0.06	0.15	0.00	0.02	0.02	0.08	0.08	0.02	0.00
Total	93.62	93.33	93.61	97.26	96.56	97.05	98.63	98.43	97.98	97.67	98.19	94.55	97.28	98.97	97.18	96.50

＊全鉄の含有量はFeOとして計算

が１％前後、Na_2Oが４％弱、K_2Oが３～４％をそれぞれ示し、後者の組成は、SiO_2が75％前後、TiO_2が0.5％前後、FeOが2.3～2.4％、MgOが0.5％弱、CaOが1.9％前後、Na_2Oが4.2～4.4％、K_2Oが2.8％前後をそれぞれ示す。

２－４.考察

テフラ様層とされた灰白色堆積層は、砂粒組成において斜長石の鉱物片が圧倒的な量比を示すことから、火山噴出物に由来する堆積物である可能性がある。しかし、火山噴出物の特徴を最もよく有する軽石や火山ガラスが極めて微量しか認められなかったこと、および検出された火山ガラスの屈折率と化学組成により明らかに異なる２種類のテフラが混在していることから、テフラの降下堆積物ではなく、テフラの降下堆積物に由来する砕屑物が再堆積し、再堆積の過程の中で砕屑物の風化変質が進行した堆積層であると考えられる。

検出された火山ガラスについては、周辺域におけるテフラの産状、形態がバブル型であることと、その屈折率および化学組成の値（例えば町田・新井（2003）など）から、低屈折率かつ化学組成が3粒子のグループの組成である火山ガラスは姶良Tnテフラ（AT:町田・新井,1976）に由来し、高屈折率かつ化学組成が４粒子のグループの組成である火山ガラスは鬼界アカホヤテフラ（K-Ah:町田・新井,1978）に由来すると判断される。ＡＴの噴出年代は約３万年前とされ、K-Ahの噴出年代は7,200～7,300年前とされている（Smith et al.,2013）。

太田ほか編（2004）によれば、本遺跡の位置する鴨川扇状地の背後には低位段丘が分布し、段丘表層にはＡＴの堆積が認められている。検出されたＡＴの火山ガラスは、低位段丘上の砕屑物の再堆積により扇状地に供給され、扇状地上に堆積するK-Ahの火山ガラスとの混交が起こったものと考えられる。したがって、テフラ様層とされた堆積層は、テフラに由来する砕屑物が主体をなすものの、堆積年代に関わる指標とはならない。

なお、テフラ様層および灰色シルト層の両堆積物中には黒雲母片の細片も含まれることが特徴であるが、その由来については細片であることから、火山噴出物中に含まれていた斑晶鉱物である可能性がある。その場合、島根県に位置する三瓶火山を給源とするテフラや大阪層群中のテフラなどが由来として考えられる。三瓶火山のテフラには、ATとK-Ahの噴出の前後に三瓶浮布降下火山灰や太平山火砕堆積物など比較的大規模な噴出物の記載があり（福岡・松井,2002）、京都盆地のボーリング調査では三瓶火山給源とされるテフラも記載されている（杉森ほか,2003）。また、大阪層群中にも黒雲母を主要な斑晶鉱物として含有するテフラがあり（町田・新井,2003など）、京都盆地北東縁に分布する丘陵を構成する大阪層群（木村ほか,1998）に由来する再堆積物なども黒雲母片の由来となる可能性があると考えられる。

なお、テフラ様層は流路1132充填堆積物の堆積ユニット５の中州状の微高地西側の凹地でのみ確認される。層相から流水が減衰していた時期に水底下に堆積していることになる。現時点でテフラ様層の成因は特定できず、後背地の地形変化などを踏まえた検討が今後の課題である。

（３）弥生時代遺構の基盤層の形成年代

３－１.試料

弥生時代の遺構の基盤層は、扇状地形成に関わった河床堆積物と洪水層の積層からなるが、これら基盤層には年代を特定できる植物遺体が確認されなかった。そのため、年代測定は河床堆積物の礫層に取り込まれている偽礫堆積物中の草本質植物遺体１点（図44：74層）について実施し、下限年代を把握する。

３－２.分析方法

試料は、試料の状況を観察後、分析用試料とする。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に１mol/Lであるが、試料が脆弱な場合や少ない場合は、アルカリの濃度を調整して試料の損耗を防ぐ（AaAと記載)。試料がさらに少ない場合、アルカリ処理を行うと測定に必要な炭素が得られなくなるため、１mol/Lの塩酸処理のみにとどめている（HClと記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径１㎜の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C)、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-Ⅱ)、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等)、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。

δ^{13}Cは試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、Oxcal4.3（Bronk,2009）を用いる。較正曲線はIntcal13（Reimer et al.,2013）を用いる。

３－３.結果

結果を表14に示す。今回は分析試料が微量かつ脆弱であり、アルカリ処理を十分できなかった（AaAと記載）が、加速器質量分析計による年代測定に必要な炭素量は十分回収できている。同位体補正を行った測定値は、4,470 ± 20BPを示す。

表14　放射性炭素年代測定結果

試料	種別/性状	方法	補正年代(暦年較正用) BP	δ ^{13}C (‰)	暦年較正年代			Code No.	
						年代値	確率%		
2区礫層	植物遺体	AaA	4470±20 (4469±22)	-24.90 ±0.36	σ	cal BC 3325 - cal BC 3232	5274 - 5181 cal BP	49.1	YU-8416	pal-11455
						cal BC 3223 - cal BC 3220	5172 - 5169 cal BP	1.2		
						cal BC 3173 - cal BC 3161	5122 - 5110 cal BP	5.3		
						cal BC 3119 - cal BC 3093	5068 - 5042 cal BP	12.6		
					2σ	cal BC 3335 - cal BC 3212	5284 - 5161 cal BP	57.8		
						cal BC 3191 - cal BC 3152	5140 - 5101 cal BP	11.6		
						cal BC 3136 - cal BC 3084	5085 - 5033 cal BP	18.4		
						cal BC 3064 - cal BC 3028	5013 - 4977 cal BP	7.6		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
5)暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用。
6)暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、1桁目を丸める前の値を使用している。
7)1桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
8)統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である

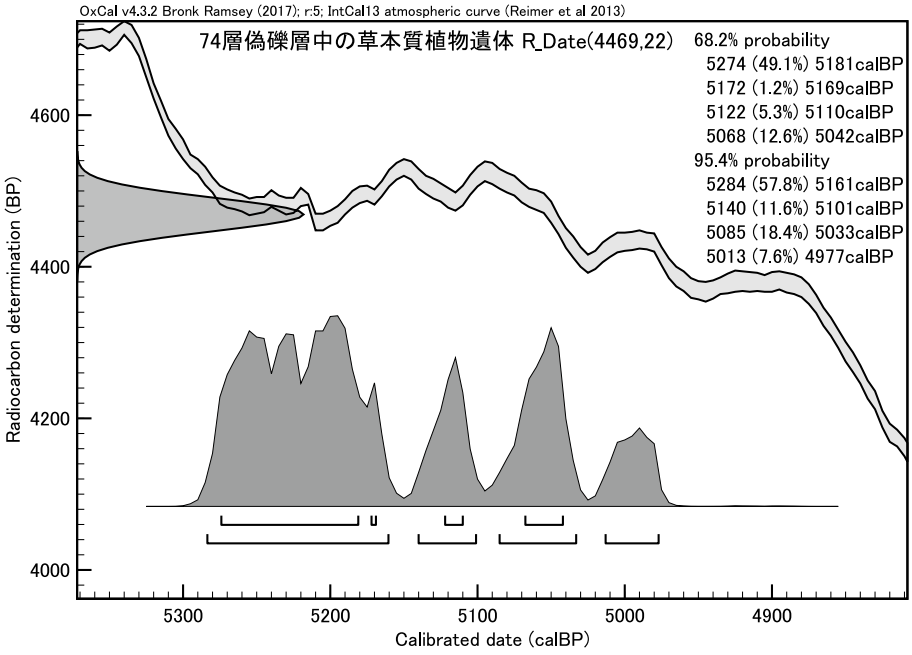


図48　暦年較正結果

また、較正した暦年代も表14に併記し、図48に確率密度分布を示す。暦年較正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、その後訂正された半減期（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差２σの暦年代は、5,284～4,977calBPを示すが、この間のIntcal13較正曲線が不安定な挙動を示していて、較正年代の絞り込みは困難である。

３－４.考察

調査区の弥生時代遺構の基盤をなす砂礫層に取り込まれていたラグ堆積物中の植物遺体からは、暦年代で5,284～4,977calBPという年代が得られた。この年代は、小林（2017）による縄文時代の実年代比定に従えば概ね縄文時代中期中葉に相当する。しがたって、基盤層の河床堆積物の礫層は、縄文時代中期中葉以降に形成されたことが推定される。

（４）２区流路1132堆積物中の植物化石からみた弥生時代中期の古環境

４－１.試料

試料は、流路1132セクション東部において、その充填堆積物である60層から31層にかけて連続する不撹乱柱状試料として採取した（図44）。採取試料は室内において精査・観察した上で、分析層準を検討した。

試料採取地点における流路1132充填堆積物の層厚は127㎝を測る。最下部の60層はトラフ型斜交層理が発達する黄灰褐色砂礫からなる。流路の侵食により取り込まれたとみられる灰色シルトブロックが混じる。礫の大きさは径５～15㎜の亜角～亜円礫からなる。

この砂礫層の上位に積層する59層～53層は、流路の攻撃斜面側の凹地を充填する上方細粒化する木材や種実などの植物遺体、炭片が混じる灰～暗灰色有機質泥質砂～砂質泥層からなる。これらの層中には断面西側の滑走斜面側に積層する砂礫～砂堆ど当時層である極粗粒～中粒砂の薄層を挟在する。59層～56層の有機質泥質砂～砂質泥層は著しい塑性変形により、初成の構造が乱れているが、変形の小さい領域で植物遺体葉理や葉理構造が確認されることから、本来は葉理構造をなしていたとみられる。また、56層最上部には不明瞭なテフラ様層がわずかながら確認される。52層は48層の流路から溢流した堆積物である。

34層は暗灰色極細粒～細粒砂からなり、木材や炭化材、種実等の植物遺体を多く含む。本層形成期には放棄流路のような堆積環境に変化している。堆積構造は著しく乱れている。下位の52層との層界は凹凸のある明瞭な層理面をなし、最下部には直下の34層層由来の偽礫が層理面に張り付くように分布する。以上のことから、34層は人為的擾乱が及んでいる可能性が高く、流路1132の西側の流路斜面上部では多量の弥生時代中期前葉の土器や炭片が出土している。

33層・31層は暗灰色を呈する、見かけ上、塊状をなす有機質中粒～粗粒シルトからなる。黄灰褐色細粒砂の薄層をレンズ状に挟在し、未分解の植物遺体や炭片（最大８㎜程度）が混じる。また、31層上面では人間の足跡が確認されている。これらの層準も人間による撹乱が及んでいる可能性がある。

分析試料は、流路1132が充填されていく弥生時代前期末～中期前半の環境変化の把握を目的として、人為的擾乱が及んでいる層準を含む６層準（31層上部・34層上部・中部、56層・58層・59層）から採取した（上から試料１～６）。この６点について、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実分析を実施する。この他、発掘調査中に流路充填堆積物より出土した塊状炭化物（湿地上層）についても種実同定および写真記録・形状記載を実施した。

４－２.分析方法

（1）珪藻分析

湿重約５ｇをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を４～５回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が産出した後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt（1930-1966）、Krammer and Lange-Bertalot（1985-1991）、Desikachiary（1987）、Lange-Bertalot（2000）などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の３適応性についても生態分類し表に示す。

堆積環境の変遷を考察するために、珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、１％以上の出現率を示す分類群についてのみ表示する（図中の●印は、総数が100個体以上産出した試料うち１％未満の種を、+印は総数100個体未満の場合の産出を示す）。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示する。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pHに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物（岩石・大型の藻類・水生植物など）に付着生育する種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不

定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973)、中村（1980)、藤木・小澤（2007)、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土１ｇあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土１ｇあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/ｇ未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

(4) 種実分析

試料200cc（試料６は150cc）を水に浸し、粒径0.5㎜の篩を通して水洗する。水洗後の篩内の試料を粒径別にシャーレに移して、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体をピンセットで抽出する。なお、多量のイネの穎の破片は、基部（小穂軸）が残るものと、主に２㎜以上を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本や藤下（1984)、石川（1994)、角野（1994)、谷城（2007)、中山ほか（2010)、鈴木ほか（2012)、勝山（2015）等を参考に実施する。結果は、部位･状態別の個数を

一覧表と図で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。また、各分類群の写真を添付し、一部の種実の大きさをデジタルノギスで計測した結果を一覧表に併記して同定根拠とする。種実以外の分析残渣は、一覧表の下部に定性的な量比をプラス「+」で示す。

分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れ、約70％のエタノール溶液で液浸保存する。分析残渣は容器に入れて保管する。

塊状炭化物（湿地上層）は、双眼実体顕微鏡下で観察し、水と面相筆を用いて、表面に付着する砂泥を除去する（試料を壊さない程度）。同定は、現生標本を参考に実施する。また、写真を添付して同定根拠とする。分析後は、試料を容器に入れて返却する。

４－３.結果

(1) 珪藻分析

分析結果を表15、図49に示す。珪藻分析を行ったすべての試料から珪藻化石は産出した。珪藻化石が産出した試料の中で、試料１、２、４、５から100個体以上産出したが、試料３および６からは100個体未満であった。６試料から産出した分類群は、すべて淡水生種で構成される。以下、試料ごとに結果を記す。

試料６からは、64個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良である。本試料から産出した種は、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula var. lineata*、*Cymbella turgidula*等である。

試料５からは、103個体産出した。保存状態は、完形の殻が多いが、一部の殻は壊れており、殻に溶解の痕跡が認められるため、普通～不良である。本試料の淡水生の群集の特徴について、生態性（珪藻の３つの適応性：水中の塩分・pH・流水に対する適応性）を整理してみた場合、以下のような傾向が認められる。まず、塩分に対する適応性は、貧塩不定性種が優先する。次に、pHに対する適応性は、アルカリ性種が優先する。流水に対する適応性は、流水不定性種が40％、流水性種が25％産出する。また、本試料は水生珪藻が優先し、陸生珪藻は極低率にしか産出しない。本試料から産出した種は、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula var. lineata*、*Cymbella turgidula*、流水不定性種の*Cymbella tumida*、*Fragilaria ulna*等である。

試料４からは、135個体産した。保存状態は、完形の殻が多いが、一部の殻は壊れており、殻に溶解の痕跡が認められるため、普通～不良である。本試料の淡水生の群集の特徴について、生態性を整理してみた場合、以下のような傾向が認められる。まず、塩分に対する適応性は、貧塩不定性種が優先する。次に、pHに対する適応性は、アルカリ性種が優先する。流水に対する適応性は、流水性種が優占し、流水不定性種が30％産出する。また、本試料は水生珪藻のみ産出する。本試料から産出した種は、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula var. lineata*、*Cymbella turgidula*、*Planothidium lanceolatum*、流水不定性種の*Eunotia pectinalis var. minor*等である。

試料３からは、51個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認めら

表15　２区流路1132secの珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	試料番号					
	塩分	pH	流水		1	2	3	4	5	6
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	-	-	-	1	7	-
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1	-
Actinella brasiliensis Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-bi	O	-	2	1	1	-	-
Amphora ovalis var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	1	-	2	1	1
Amphora spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1	-	-	2	-
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	-	2	-	-	1	-
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1	-	-	-	-
Caloneis molaris (Grun.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind		-	1	1	-	-	-
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O	-	-	1	-	2	-
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	-
Cocconeis placentula var. *lineata* (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	9	12	55	21	20
Cocconeis spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	6	1	5	3	5
Craticula halophila (Grun. ex Van Heurck) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind		-	2	3	-	2	-
Craticula spp.	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	2	-	-	-
Cyclotella spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-	-
Cymbella aspera (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T	-	-	-	1	-	-
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	1	-	-	-
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	15	8	-	7	7	5
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	3	-	2	5	14
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		5	5	2	-	2	13
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	-	-
Encyonema silesiacum (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	3	-
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	2	1	-	-	1	1
Eunotia lunaris (Ehr.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	-	1	-	-
Eunotia monodon Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	3	-	1	1	-
Eunotia pectinalis var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	2	22	1	10	4	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	7	1	7	1	-
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	5	-	-	1	-
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	7	-	-	2	10	3
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	4	-	1	1	-
Frustulia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	1	-	1	2
Gomphonema augur Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	1	-
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	5	7	2	8	3	-
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	7	3	-	2	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		6	1	-	2	-	-
Gyrosigma spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	2	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	6	9	-	-	-	-
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	-	4	-	-	2	-
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	2	-	-	-	-
Navicula elginensis var. *neglecta* (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	1	1	-
Navicula pseudolanceolata Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	8	-	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	1	-	2	-
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	6	1	2	3	-
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	4	-	-	-	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	-	3	-	-	-	-
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	N,O,U	-	7	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	-	5	3	1	-	-
Pinnularia interrupta W.Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	2	-	-	-	-
Pinnularia karelica Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph	N,O,U	-	7	-	-	-	-
Pinnularia lundii Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	1	-	-
Pinnularia maior (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ac-il	l-bi	N,O,U	1	-	-	-	-	-
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	1	-	1	1	-
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	14	13	2	-	5	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		8	8	3	-	3	-
Planothidium lanceolatum (Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	6	-	-
Reimeria sinuata (Greg.) Kociolek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	1	1	-
Sellaphora pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S,U	-	2	2	3	-	-
Sellaphora spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	-
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	2	-	-	-
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	4	-	-	-	-
Stauroneis nobilis Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	1	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	N,O,U	3	9	2	1	2	-
Stauroneis phoenicenteron var. *signata* Meister	Ogh-ind	ind	l-ph	O	2	4	1	-	-	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		5	8	1	-	2	-
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	-	1	-	-	-	-
Surirella ovata Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	3	-	-	-	-
Surirella spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	3	-	-	-	-
海水生種					0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0
淡水生種					101	201	51	135	103	64
珪藻化石総数					101	201	51	135	103	64

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性
- Euh　：海水生種
- Euh-Meh：海水生種-汽水生種
- Meh　：汽水生種
- Ogh-hil：貧塩好塩性種
- Ogh-ind：貧塩不定性種
- Ogh-hob：貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk：貧塩不明種

pH：水素ｲｵﾝ濃度に対する適応性
- al-bi：真ｱﾙｶﾘ性種
- al-il：好ｱﾙｶﾘ性種
- ind　：pH不定性種
- ac-il：好酸性種
- ac-bi：真酸性種
- unk　：pH不明種

C.R.：流水に対する適応性
- l-bi：真止水性種
- l-ph：好止水性種
- ind　：流水不定性種
- r-ph：好流水性種
- r-bi：真流水性種
- unk　：流水不明種

環境指標種
- A:外洋指標種　B:内湾指標種　C1:海水藻場指標種　C2:汽水藻場指標種
- D1:海水砂質干潟指標種　D2:汽水砂質干潟指標種
- E1:海水泥質干潟指標種　E2:汽水泥質干潟指標種　F:淡水底生種群(以上は小杉,1988)
- G:淡水浮遊生種群　H:河口浮遊性種群　J:上流性河川指標種　K:中～下流性河川指標種
- L:最下流性河川指標種群　M:湖沼浮遊性種　N:湖沼沼沢湿地指標種　O:沼沢湿地付着生種
- P:高層湿原指標種群　Q:陸域指標種群(以上は安藤,1990)
- S:好汚濁性種　U:広適応性種　T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe,1995)
- R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内,1991)

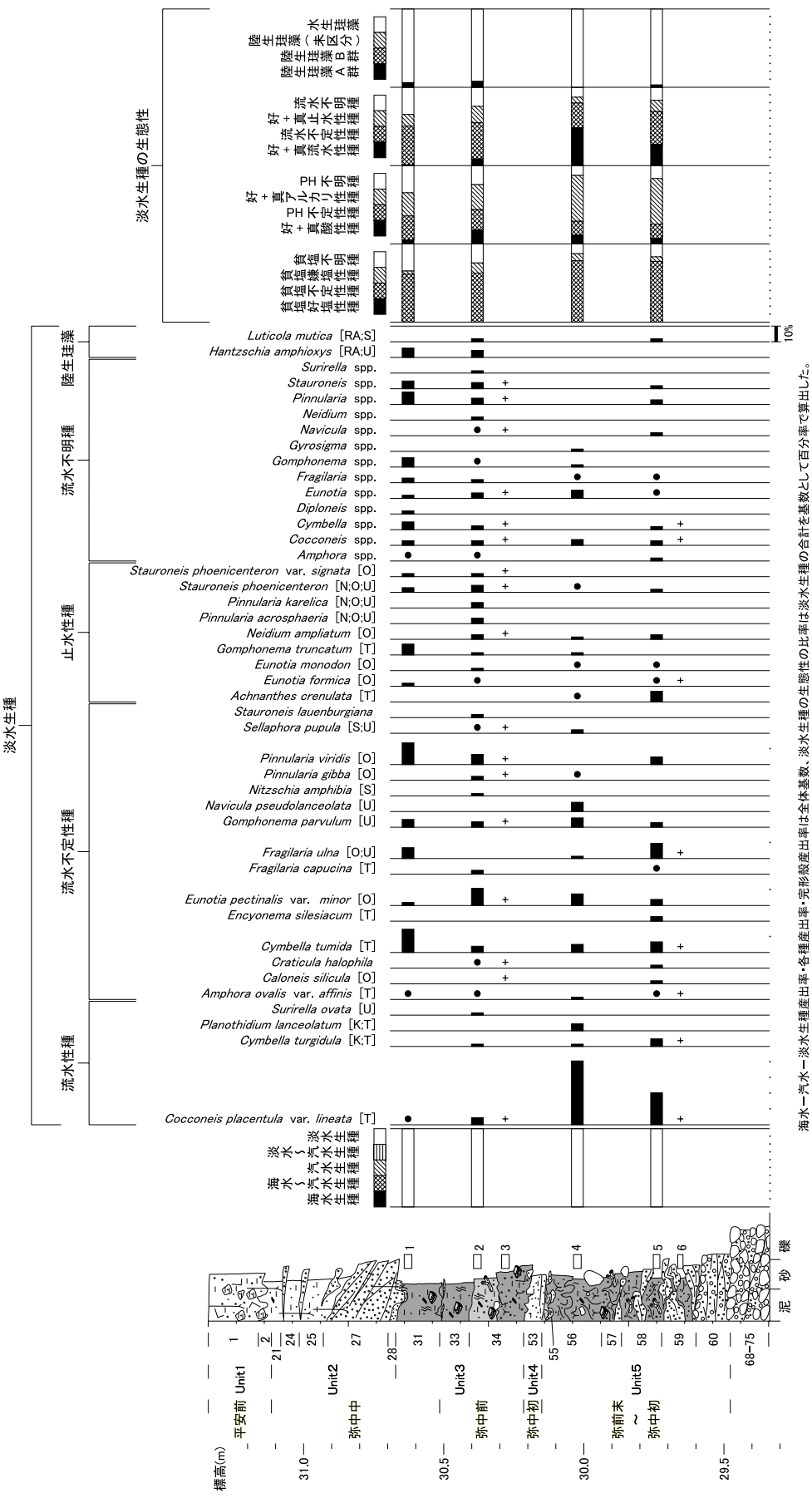
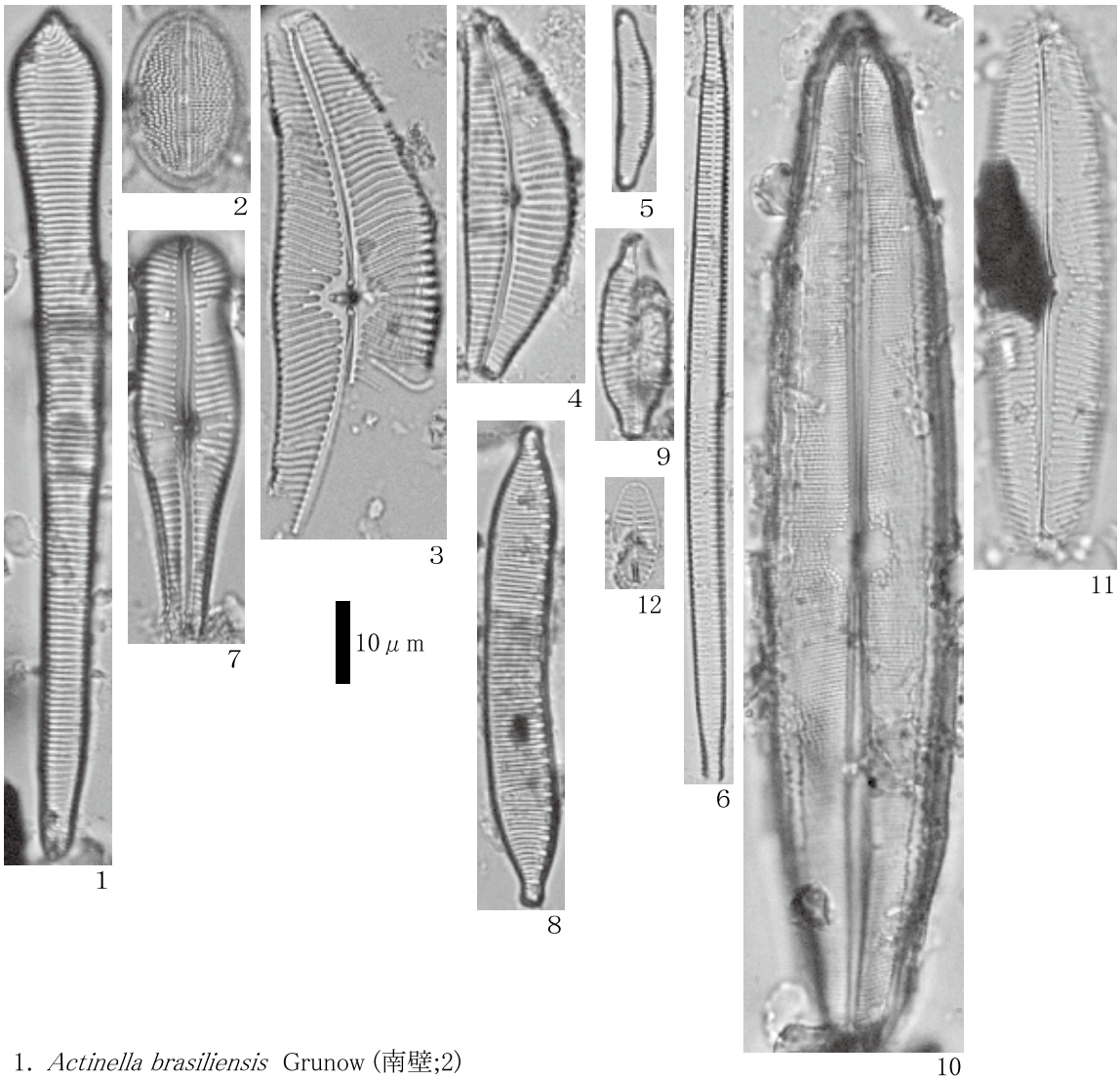


図49　２区流路1132secにおける主要珪藻化石群集の層位分布



1. *Actinella brasiliensis* Grunow (南壁;2)
2. *Cocconeis placentula* var. *lineata* (Ehr.) Cleve (南壁;4)
3. *Cymbella tumida* (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck (南壁;1)
4. *Cymbella turgidula* Grunow (南壁;6)
5. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (南壁;2)
6. *Fragilaria ulna* (Nitzsch) Lange-Bertalot (南壁;5)
7. *Gomphonema truncatum* Ehrenberg (南壁;1)
8. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (南壁;2)
9. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (南壁;4)
10. *Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer (南壁;2)
11. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (南壁;1)
12. *Planothidium lanceolatum* (Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot (南壁;6)

図50　珪藻化石

れるため、不良である。本試料から産出した種は、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula var. lineata*等である。

試料２からは、200個体以上産した。保存状態は、壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良である。本試料における淡水生種の生態性についてみると、塩分に対する適応性は、貧塩不定性種が優占する。次に、pHに対する適応性は、アルカリ性種が優占する。流水に対する適応性は、流水不定性種が優占する。また、本試料は水生珪藻が優占し、陸生珪藻は極低率にしか産出しない。本試料から産出した種は、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula var. lineata*、*Cymbella turgidula*、流水不定性種の*Eunotia pectinalis var. minor*、*Pinnularia viridis*等である。

試料１からは、135個体産した。保存状態は、完形の殻が多いが、一部の殻は壊れており、殻に溶解の痕跡が認められるため、普通～不良である。淡水生種の生態性についてみると、塩分に対する適応性は、貧塩不定性種が優占する。次に、pHに対する適応性は、アルカリ性種が優占する。流水に対する適応性は、流水性種が優占し、流水不定性種が30％産出する。また、本試料は水生珪藻のみ産出する。本試料から産出した種は、淡水性種の流水不定性種の*Cymbella tumida*、*Eunotia pectinalis var. minor*等である。

(2) 花粉分析

結果を表16、図51に示す。いずれの試料からも花粉化石が豊富に産出するが、保存状態は普通～やや悪い程度で、特に上位の試料で保存状態が悪い傾向にある。

木本花粉は、試料６～１にかけて概ね類似した組成を示し、コナラ属アカガシ亜属が最も多く産出し、スギ属、コナラ属コナラ亜属もやや多く認められる。その他ではモミ属、マツ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、エノキ属－ムクノキ属、ブドウ属、ノブドウ属、イボタノキ属などを伴う。なお、ブドウ属、ノブドウ属、イボタノキ属などは、試料３～１で多い傾向にある。

草本花粉は、試料６、試料５・４、試料３～１の３つに分けられる。試料６はヨモギ属が最も多く産出し、イネ科、カヤツリグサ科、クワ科、ツリフネソウ属などを伴う。

試料５・４では、イネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、キンポウゲ属、ヨモギ属、キク亜科等を伴う。

試料３～１では、イネ科が顕著に多産し、カヤツリグサ科、クワ科、バラ科、セリ科、ゴキヅル属、ヨモギ属などを伴う。また、ガマ属、ヒルムシロ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ミズアオイ属などの水湿地性植物、およびツリフネソウ属、ゴキヅル属などの湿った場所に生育する種を含む群類群も検出され、特に試料１でやや多く認められる。なお、多産するイネ科には、栽培種であるイネ属に形態の類するもの（以下、イネ属型とする）も含まれていた。

表16　２区流路1132secの花粉分析結果

種類（分類群）	試料番号					
	1	2	3	4	5	6
木本花粉						
マキ属	2	3	4	－	－	1
モミ属	8	20	13	22	11	12
ツガ属	3	3	6	4	2	4
マツ属複維管束亜属	2	1	1	－	5	2
マツ属（不明）	5	8	1	1	8	7
コウヤマキ属	－	3	3	2	3	3
スギ属	26	35	25	16	25	19
イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科	8	4	14	2	4	5
ヤナギ属	1	3	3	1	8	1
ヤマモモ属	－	－	－	－	1	－
サワグルミ属	2	2	2	2	4	2
クルミ属	1	1	1	－	4	2
クマシデ属―アサダ属	5	3	1	2	1	－
カバノキ属	1	1	8	1	2	1
ハンノキ属	1	－	3	4	－	1
ブナ属	1	1	6	8	5	3
コナラ属コナラ亜属	21	21	19	14	50	16
コナラ属アカガシ亜属	75	50	68	84	50	58
クリ属	7	5	5	2	1	3
シイ属	7	1	6	1	3	2
ニレ属―ケヤキ属	1	6	3	3	3	5
エノキ属―ムクノキ属	5	12	14	14	12	3
コクサギ属	1	－	－	－	1	－
キハダ属	－	1	5	1	5	－
アカメガシワ属	1	－	－	－	1	－
ニシキギ属	－	8	4	2	7	1
トチノキ属	2	3	2	10	2	4
ブドウ属	7	14	10	3	－	1
ノブドウ属	1	15	15	2	2	5
ウコギ科	1	1	－	1	－	4
アオキ属	－	－	－	－	1	－
ツツジ科	－	－	1	－	－	－
イボタノキ属	13	9	8	2	－	1
トネリコ属	－	－	1	－	－	－
クサギ属	－	－	－	－	－	1
スイカズラ属	－	5	12	3	－	－
草本花粉						
ガマ属	1	1	1	－	－	1
ヒルムシロ属	－	1	－	－	－	－
オモダカ属	1	－	－	－	－	－
イネ属型	10	18	6	－	－	－
他のイネ科	102	151	66	42	59	97
カヤツリグサ科	11	10	5	3	8	12
イボクサ属	1	－	－	－	－	－
ミズアオイ属	20	1	－	－	－	2
クワ科	10	3	16	2	4	55
ギシギシ属	－	1	3	1	1	－
サナエタデ節―ウナギツカミ節	－	5	7	1	1	4
アカザ科	2	1	－	－	－	－
ナデシコ科	6	5	1	2	3	6
カラマツソウ属	1	－	－	－	－	2
キンポウゲ属	1	－	2	2	5	8
キンポウゲ科	－	1	－	4	3	4
アブラナ科	1	－	－	－	－	－
バラ科	2	11	14	4	3	－
マメ科	－	－	1	1	3	5
ツリフネソウ属	2	2	1	2	1	15
セリ科	13	4	4	1	1	4
ネナシカズラ属	2	－	1	－	2	－
オオバコ属	1	－	－	－	－	－
ヤエムグラ属―アカネ属	1	－	－	－	－	－
オミナエシ属	－	1	－	－	－	－
ゴキヅル属	2	10	7	－	3	1
ヨモギ属	13	15	19	15	16	169
オナモミ属	2	6	2	4	－	1
キク亜科	2	1	2	2	5	4
タンポポ亜科	2	－	－	－	－	－
不明花粉						
不明花粉	17	15	16	10	16	6
シダ類胞子						
ヒカゲノカズラ属	－	－	1	1	－	－
イノモトソウ属	－	－	1	3	1	1
ミズワラビ属	1	－	－	－	－	－
他のシダ類胞子	45	54	59	76	56	86
合　計						
木本花粉	208	239	264	207	221	167
草本花粉	209	248	158	86	118	390
不明花粉	17	15	16	10	16	6
シダ類胞子	46	54	61	80	57	87
合計(不明を除く)	463	541	483	373	396	644

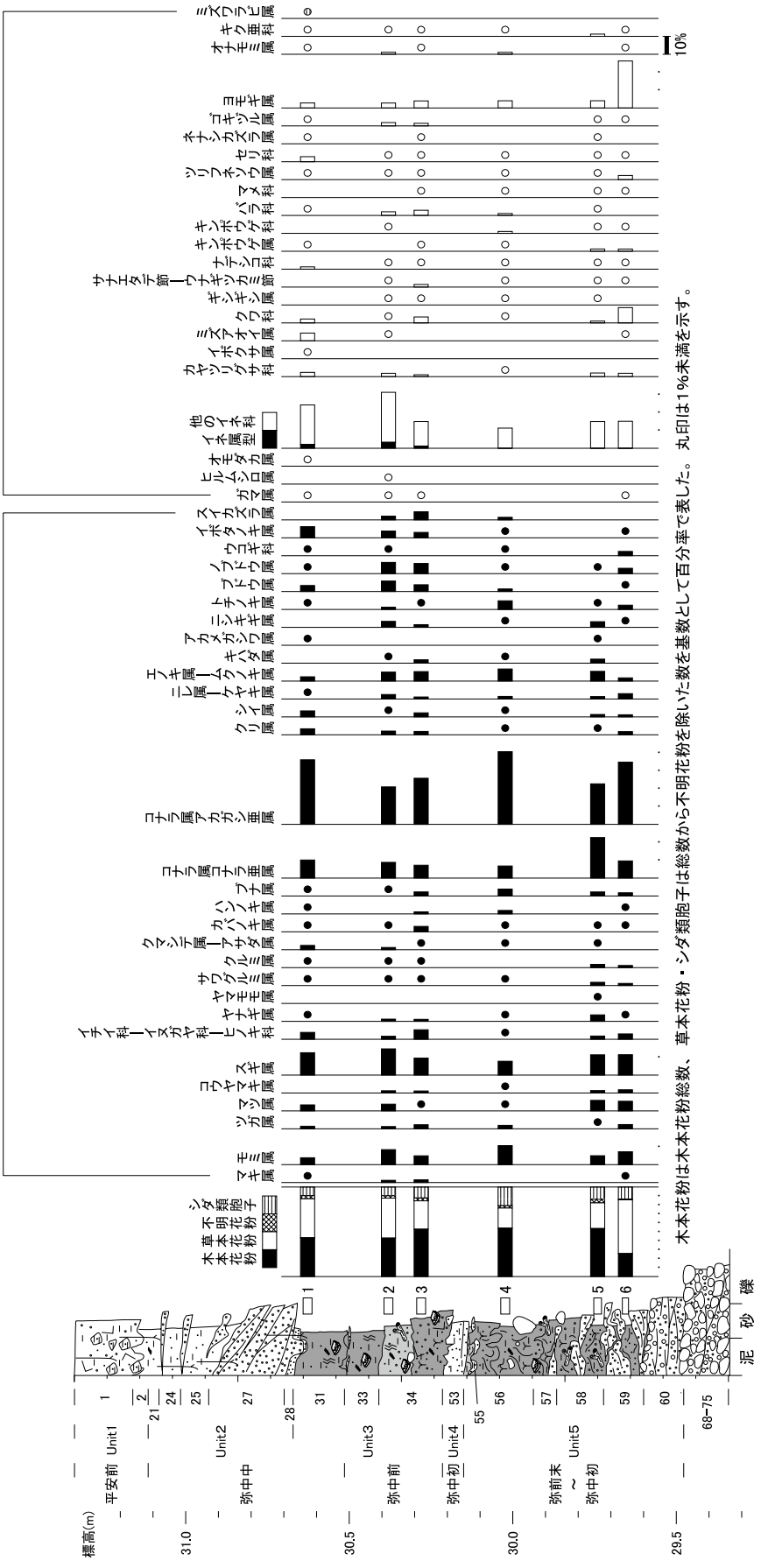
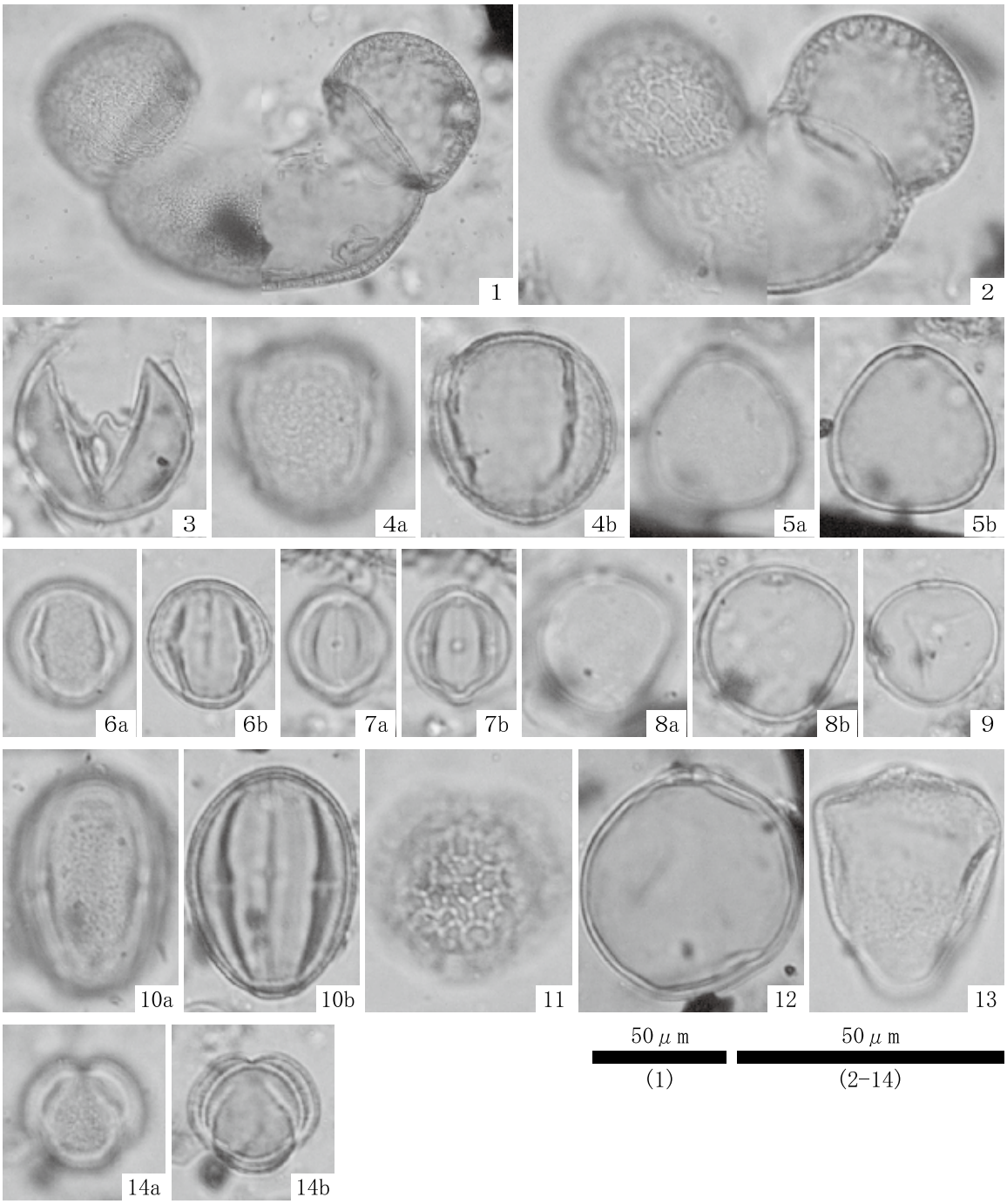


図51　２区流路1132secにおける主要花粉化石群集の層位分布



1　モミ属(南壁;2)
2　マツ属(南壁;6)
3　スギ属(南壁;2)
4　コナラ属コナラ亜属(南壁;2)
5　エノキ属―ムクノキ属(南壁;2)
6　コナラ属アカガシ亜属(南壁;2)
7　ブドウ属(南壁;2)
8　イネ科(南壁;2)
9　クワ科(南壁;6)
10　ノブドウ属(南壁;2)
11　イボタノキ属(南壁;2)
12　イネ科(イネ属型)(南壁;2)
13　カヤツリグサ科(南壁;6)
14　ヨモギ属(南壁;6)

図52　花粉化石

(3) 植物珪酸体分析

結果を表17、図53に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

下位から上位にかけては、植物珪酸体含量の増加する傾向がみられる。すなわち、試料６～５では2,000個/g未満であるが、この上位の試料４～３では5,000～6,000個/g程度に増加し、さらに上位では急増して試料２が12,200個/g、試料１が56,800個/gとなる。

各試料ではタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。タケ亜科には、クマザサ属やメダケ属が見られ、特に機動細胞珪酸体でメダケ属の含量が多い。

栽培植物は、イネ属が試料３で出現し、上位の試料２や試料１にかけて産出する。特に試料１で含量が多く、短細胞珪酸体が1,900個/g、機動細胞珪酸体が3,100個/gである。また穎珪酸体や短細胞列も検出される。なお、試料３や１ではキビ連、試料１ではコムギ連も産出し、短細胞珪酸体が認められる。これらは、栽培種を含む分類群である。

表17　２区流路1132secの植物珪酸体含量

(個/g)

分類群	試料番号					
	1	2	3	4	5	6
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ属	1,900	500	<100	−	−	−
クマザサ属	400	300	−	−	<100	−
メダケ属	1,200	300	100	−	<100	<100
タケ亜科	4,400	900	400	700	200	100
ヨシ属	2,900	800	500	800	200	100
ススキ属	600	<100	<100	<100	−	−
コムギ連	400	−	−	−	−	−
イチゴツナギ亜科	600	300	200	200	<100	<100
不明	12,400	2,800	1,000	1,000	200	100
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ属	3,100	900	<100	−	−	−
キビ連	400	−	<100	−	−	−
クマザサ属	400	−	<100	−	−	−
メダケ属	3,100	1,200	400	200	<100	<100
タケ亜科	6,600	600	500	900	200	100
ヨシ属	3,500	1,100	600	1,000	300	100
不明	14,700	2,300	1,200	1,400	500	400
合　計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	24,900	6,000	2,400	2,700	700	400
イネ科葉身機動細胞珪酸体	31,900	6,200	2,800	3,400	1,100	700
植物珪酸体含量	56,800	12,200	5,200	6,100	1,800	1,100
珪化組織片						
イネ属穎珪酸体	＊＊	＊＊	＊	−	−	−
イネ属短細胞列	＊＊	＊	−	−	−	−
イネ科起源(その他)						
棒状珪酸体	＊＊＊	＊＊	＊＊	＊＊	＊＊	＊＊
長細胞起源	＊	＊	＊	＊	−	−
毛細胞起源	＊＊	＊＊	＊	＊	＊	＊

1)含量は、10の位で丸めている(100単位にする)。
2)合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。
3)<100:100個/g未満。
4)－:未検出、＊:含有、＊＊:多い,＊＊＊:非常に多い。

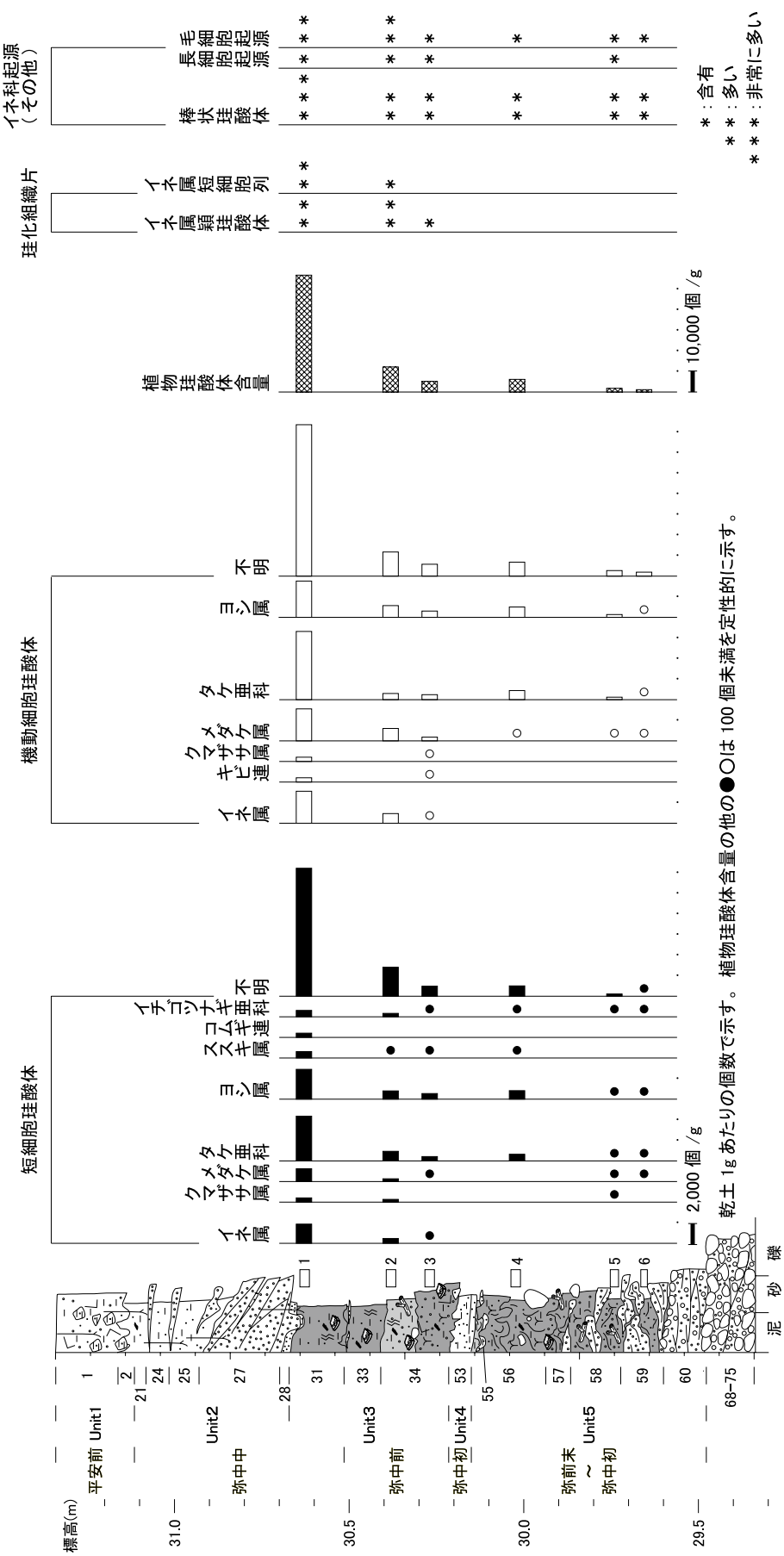
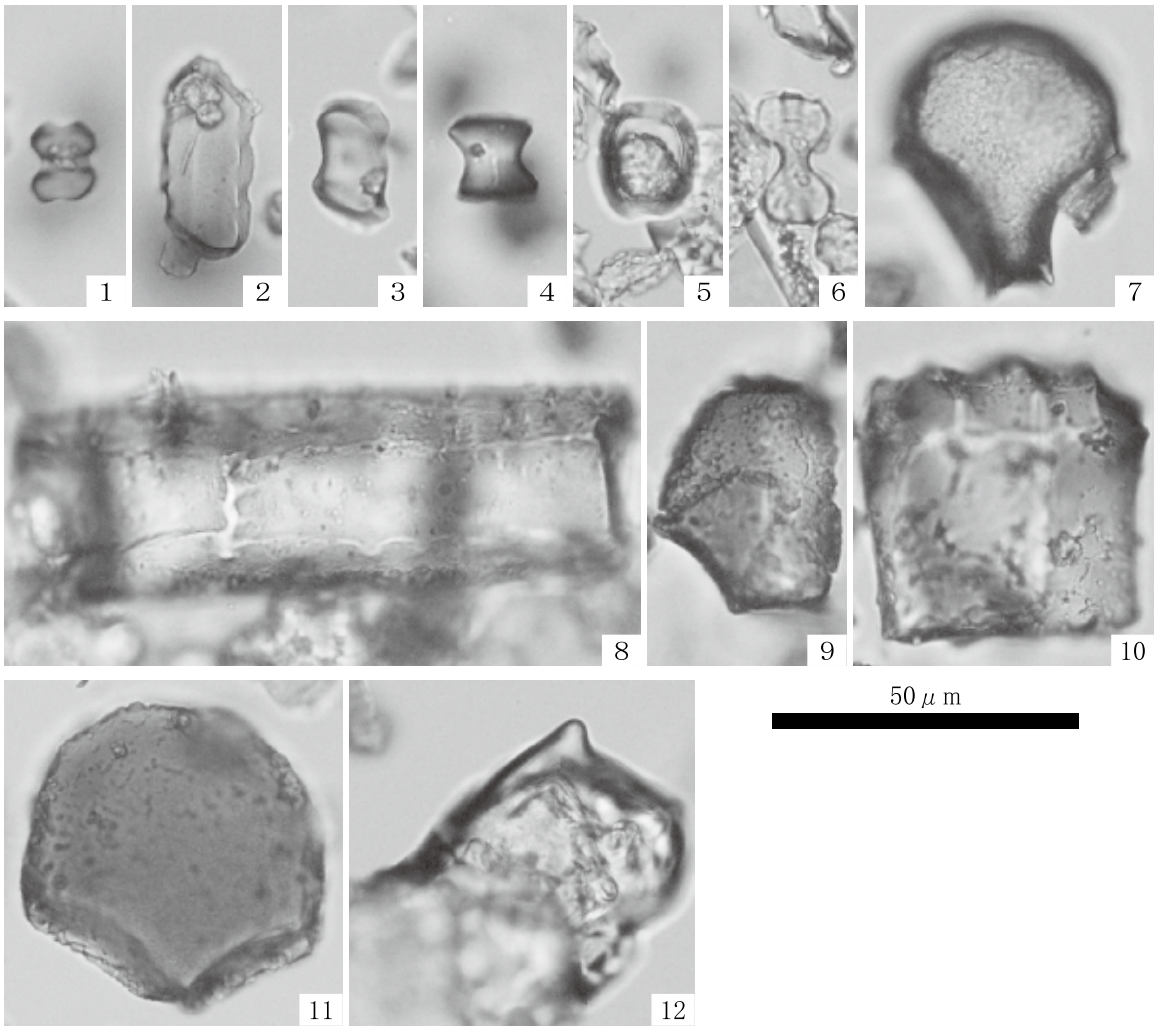


図53　２区流路1132secにおける植物珪酸体含量の層位分布



1　イネ属短細胞珪酸体(南壁;1)
2　コムギ連短細胞珪酸体(南壁;1)
3　クマザサ属短細胞珪酸体(南壁;1)
4　メダケ属短細胞珪酸体(南壁;1)
5　ヨシ属短細胞珪酸体(南壁;4)
6　ススキ属短細胞珪酸体(南壁;1)
7　イネ属機動細胞珪酸体(南壁;3)
8　キビ連機動細胞珪酸体(南壁;3)
9　クマザサ属機動細胞珪酸体(南壁;1)
10　メダケ属機動細胞珪酸体(南壁;1)
11　ヨシ属機動細胞珪酸体(南壁;4)
12　イネ属穎珪酸体(南壁;2)

図54　植物珪酸体

この他に、イネ科起源（棒状珪酸体,長細胞起源,毛細胞起源）も検出される。

(4) 種実分析

結果を表18、図55・56に示す。また、種実遺体各分類群の写真を図57～59、一部計測値を表18に示して同定根拠とする。6試料1,150cc（1,903g）を通じて、木本21分類群（広葉樹のクヌギ-アベマキ、ナラガシワ、コナラ属、ムクノキ、エノキ属、クワ属、ヒメコウゾ、マタタビ近似種、マタタビ属、ノイバラ節、キイチゴ属、カラスザンショウ、サンショウ、トチノキ、ノブドウ、ブドウ科、クマヤナギ属、タラノキ、ムラサキシキブ属、ニワトコ、ヤブデマリ）131個、草本78分類群（オモダカ属、サジオモダカ属、オモダカ科、ヒルムシロ属、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、

ツユクサ、イボクサ、イネ、アワ、エノコログサ属（アワ？）、イネ科（シバ類？）、イネ科、ミクリ属、アゼスゲ類、ヌカスゲ類、スゲ属（２面体、３面体小型、３面体大型）、イヌホタルイ近似種、ホタルイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、カナムグラ、ミズ属、カラムシ属、サンショウソウ属、ギシギシ属、ミゾソバ、イシミカワ近似種、イヌタデ近似種、サナエタデ近似種、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、タデ属、マルミノヤマゴボウ、ザクロソウ、ハコベ類、ナデシコ科（A、B）、アカザ属、ヒユ属、アブラナ科、ネコノメソウ属、キジムシロ類（A、B）、キジムシロ類、クサネム、カタバミ属、エノキグサ、ヒメミカンソウ、ツリフネソウ、スミレ属、スズメウリ、ゴキヅル、雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、メロン類、チドメグサ属、ヤブジラミ属、セリ科、オカトラノオ属、ミゾコウジュ近似種、イヌコウジュ近似種、シソ属-イヌコウジュ属、シソ属（エゴマ？）、シロネ属、トウバナ属、メハジキ属、ハダカホオズキ類、イガホオズキ属、ナス属、オオバコ、オナモミ属、タカサブロウ、メナモミ属、ヤブタビラコ、キク科）2,120個の、計2,251個の種実遺体が同定された。34個は同定ができなかった。このうち、同分類群・部位と考えられる複数個を不明Ａ～Ｅとしている。分析残渣は、葉片、芽、木材、炭化材、蘚苔類の茎・葉、植物片、昆虫類、岩片などが確認された。

種実遺体の保存状態は比較的良好で、イネの一部とアワ、試料２のヒユ属１個、試料６のキイチゴ属、セリ科が炭化している。

種実遺体の出土個数は、試料６が83個、試料５が95個、試料４が267個、試料３が404個、試料２が995個、試料１が407個である。試料２が最も多く、試料１、３、４と次ぎ、いずれもイネの多産に特徴づけられる。

栽培種は、イネの胚乳が12個（試料５～１）、穎が1,171個（試料６～１）、アワが３個（試料３・１）、メロン類（雑草メロン型、マクワ・シロウリ型含む）が７個（試料４～１）と、栽培の可能性があるエノコログサ属（アワ？）が６個（試料４～１）、シソ属（エゴマ？）が１個（試料１）、シソ属-イヌコウジュ属が３個（試料６～４）の、計1,213個が確認された。イネが最も多く（1,183個）、種実全体の過半数を占める。また。試料４から上位試料に向かって急増し、試料２で最も多く、試料１でやや減少する。

栽培種と栽培の可能性を除いた分類群は、試料６を除いて、圧倒的な草本主体の組成を示す。木本は全て広葉樹で、常緑または落葉高木のコナラ属、落葉高木のクヌギ-アベマキ、ナラガシワ、ムクノキ、エノキ属、クワ属、カラスザンショウ、トチノキ、落葉低木のヒメコウゾ、ノイバラ節、キイチゴ属、サンショウ、クマヤナギ属、タラノキ、ムラサキシキブ属、ニワトコ、ヤブデマリ、落葉籐本のマタタビ近似種、マタタビ属、ノブドウ、ブドウ科が確認された。河畔や林縁などの明るく開けた場所に生育する分類群を主体とする。試料６は、ナラガシワがやや多く、果実や殻斗、幼果などの複数部位が確認された。

草本は、沈水～浮葉植物のヒルムシロ属、沈水～抽水～湿生植物のオモダカ属、オモダカ科、抽水～湿生植物のサジオモダカ属、抽水植物のミズアオイ近似種、コナギ近似種、イボクサ、ミクリ属、イヌホタルイ近似種、ホタルイ属、湿生植物のアゼスゲ類、ミズ属、サンショウソウ属、ミゾ

表18　２区流路1132secの種実分析結果

分類群	部位	状態	試料番号 1	2	3	4	5	6	備考
木本種実									
クヌギ-アベマキ	果実	破片	−	−	−	1	−	3	基部
ナラガシワ	果実	破片	−	−	−	−	−	7	1個花柱
	殻斗	完形	−	−	−	−	−	1	
		破片	−	−	−	3	−	6	
	幼果	完形	−	−	−	−	−	1	
コナラ属	果実	破片	2	1	1	−	−	−	3:花柱
ムクノキ	核	破片	−	2	−	−	−	−	
エノキ属	種子	完形	−	1	−	−	−	−	
クワ属	核	完形	−	5	4	4	−	1	
		破片	−	1	3	2	6	1	
ヒメコウゾ	核	破片	1	−	−	−	−	−	
マタタビ近似種	種子	完形	−	−	1	1	1	−	
		破片	−	−	3	−	−	−	
マタタビ属	種子	破片	1	1	−	−	−	−	
ノイバラ節	果実	完形	−	3	2	2	−	−	
		破片	2	4	7	2	−	−	
キイチゴ属	核	完形 炭化	−	−	−	−	−	1	
		完形	−	1	1	2	−	−	
		破片	−	−	1	1	−	−	
カラスザンショウ	種子	破片	−	−	2	1	−	−	
サンショウ	種子	破片	−	−	−	−	1	−	
トチノキ	果実	破片	−	−	−	−	−	2	
ノブドウ	種子	完形	1	2	1	−	1	−	
		破片	1	6	5	−	1	1	
ブドウ科	種子	破片	1	1	−	2	−	−	
クマヤナギ属	核	完形	−	−	1	−	−	−	
タラノキ	核	完形	−	−	−	1	−	−	
		破片	−	−	−	1	−	−	
ムラサキシキブ属	核	完形	−	−	−	−	−	1	
ニワトコ	核	破片	−	−	2	1	−	−	
ヤブデマリ	核	完形	−	1	−	−	−	−	
草本種実									
オモダカ属	果実	完形	2	−	−	−	−	−	
サジオモダカ属	果実	完形	−	−	1	1	−	−	
オモダカ科	種子	完形	−	−	−	−	1	−	
ヒルムシロ属	果実	完形	1	−	−	−	−	−	
ミズアオイ近似種	種子	完形	134	1	2	−	−	−	
		破片	1	−	−	−	−	−	
コナギ近似種	種子	完形	−	−	−	−	1	−	長さ1.10㎜
ツユクサ	種子	完形	−	2	−	−	−	−	
イボクサ	種子	完形	27	2	4	−	−	−	
イネ	穎・胚乳	完形 炭化	−	1	−	−	−	−	
		破片 炭化	−	2	−	−	−	−	
	胚乳	破片 炭化	2	2	2	1	2	−	5:基部,4:頂部
	穎	破片 炭化	−	5	1	1	1	−	
	穎(基部)	破片 炭化	20	27	4	5	−	−	腹面
	穎(基部)	破片	82	610	114	44	5	1	
	穎	破片	20	111	75	41	4	−	主に2㎜以上
アワ	穎・胚乳	完形 炭化	1	−	1	−	−	−	3:長さ1.70,幅1.43㎜
		破片 炭化	−	−	1	−	−	−	
エノコログサ属(アワ?)	果実	完形	1	2	−	−	−	−	
		破片	−	−	1	2	−	−	4:腹面,3:背面
イネ科(シバ類?)	果実	完形	4	−	−	2	−	−	
イネ科	果実	完形	20	5	1	2	−	−	複数種
		破片	1	4	1	−	−	−	
ミクリ属	果実	完形	−	1	2	−	−	−	
アゼスゲ類	果胞・果実	完形	−	−	−	−	2	−	
	果実	完形	1	2	2	4	3	1	
ヌカスゲ類	果実	完形	−	1	−	−	−	−	
スゲ属(2面体)	果実	完形	−	1	−	2	−	−	
		破片	−	−	1	−	−	−	
スゲ属(3面体小型)	果実	完形	3	3	1	2	2	−	
		破片	−	−	−	−	−	1	
スゲ属(3面体大型)	果実	完形	−	−	1	−	−	−	
		破片	−	−	1	−	−	−	
イヌホタルイ近似種	果実	完形	1	−	−	−	−	3	
ホタルイ属	果実	完形	1	2	2	3	3	3	
		破片	1	1	2	4	1	4	
カヤツリグサ属	果実	完形	1	13	1	4	2	2	
		破片	−	1	−	−	−	−	
カヤツリグサ科	果実	完形	−	1	−	−	−	−	ウシクグ近似
カナムグラ	核	破片	1	6	5	6	6	1	
ミズ属	果実	完形	1	11	10	1	−	−	
		破片	−	−	1	−	−	−	
カラムシ属	果実	完形	12	22	8	19	10	5	
		破片	−	3	−	2	5	4	
サンショウソウ属	果実	完形	−	−	−	4	−	−	
ギシギシ属	果実・花被	完形	−	1	−	1	−	−	
	果実	完形	1	6	1	1	−	1	
		破片	−	1	2	−	−	−	
	花被	破片	−	6	6	8	1	4	
ミゾソバ	果実	完形	−	3	4	3	1	−	
		破片	2	18	28	1	2	−	
イシミカワ近似種	果実	破片	1	−	−	−	−	−	
イヌタデ近似種	果実	完形	−	2	−	1	−	−	
		破片	−	1	1	1	−	−	
サナエタデ近似種	果実	完形	1	−	−	−	−	−	
		破片	1	−	−	−	−	−	
	花被	破片	1	−	−	−	−	−	
ヤナギタデ近似種	果実	完形	2	1	−	−	2	4	
		破片	1	1	−	1	1	3	

分類群	部位	状態	試料番号						備考
			1	2	3	4	5	6	
ボントクタデ近似種	果実	完形	5	1	2	1	−	2	
		破片	2	10	20	1	3	3	
タデ属(網目)	果実	破片	−	−	−	1	1	2	
マルミノヤマゴボウ	種子	破片	−	−	−	−	1	−	
ザクロソウ	種子	完形	−	−	1	2	−	−	
ハコベ類	種子	完形	−	−	2	−	−	−	針状突起
		破片	−	−	−	1	−	−	
ナデシコ科A	種子	完形	2	3	1	7	−	−	中型,疣状突起
		破片	−	2	1	2	1	−	
ナデシコ科B	種子	完形	7	9	5	9	3	3	小型
		破片	−	−	−	5	1	−	
アカザ属	種子	破片	2	−	−	−	−	−	
ヒユ属	種子	完形 炭化	−	1	−	−	−	−	
		完形	1	6	2	−	−	−	
		破片	−	1	1	−	−	−	
アブラナ科	種子	完形	−	1	−	3	−	1	
ネコノメソウ属	種子	完形	−	−	−	2	−	−	平滑に小刺状突起
キジムシロ類A	核	完形	−	1	1	−	−	−	隆条斜上
キジムシロ類B	核	完形	−	1	−	−	−	−	隆条点在
キジムシロ類	核	破片	−	−	−	1	−	−	隆条不明瞭
クサネム	果実(節果)	完形	−	1	−	−	−	−	端部
		破片	−	−	−	1	−	−	
カタバミ属	種子	完形	−	10	3	2	−	−	
		破片	1	12	8	2	−	−	
エノキグサ	種子	完形	1	1	3	2	−	−	
		破片	−	4	7	−	1	−	
ヒメミカンソウ	種子	完形	−	−	−	1	1	−	
ツリフネソウ	種子	完形	−	−	2	−	−	−	
		破片	−	1	3	1	4	−	
スミレ属	種子	完形	−	−	−	−	1	−	
スズメウリ	種子	破片	−	−	2	−	−	−	
ゴキヅル	種子	破片	−	−	1	−	−	−	
雑草メロン型	種子	完形	−	−	1	−	−	−	長さ6.01mm
マクワ・シロウリ型	種子	完形	−	−	−	1	−	−	長さ6.36mm
メロン類	種子	破片	2	3	3	7	−	−	
チドメグサ属	果実	完形	−	3	−	1	−	−	
		破片	−	−	−	1	−	1	
ヤブジラミ属	果実	完形	−	−	−	−	1	−	
セリ科	果実	完形 炭化	−	−	−	−	−	1	
		完形	10	−	−	2	1	−	別分類群
		破片	1	−	2	1	−	1	
オカトラノオ属	種子	完形	−	1	−	1	1	1	
ミゾコウジュ近似種	果実	完形	−	1	1	2	1	1	湿生2年草
イヌコウジュ近似種	果実	破片	−	−	−	−	−	1	
シソ属-イヌコウジュ属	果実	破片	−	−	−	1	1	1	
シソ属(エゴマ?)	果実	破片	1	−	−	−	−	−	
シロネ属	果実	完形	−	−	1	−	−	−	
トウバナ属	果実	完形	2	−	−	5	−	−	
メハジキ属	果実	完形	−	−	1	−	−	−	
ハダカホオズキ類	種子	完形	3	−	−	−	−	−	
		破片	−	−	−	−	1	−	
イガホオズキ属	種子	完形	−	1	−	−	−	−	
ナス属	種子	完形	−	−	2	−	−	1	2型
		破片	1	−	1	−	−	−	
オオバコ	種子	完形	1	1	−	−	−	−	
オナモミ属	総苞	完形	1	−	−	−	−	−	
		破片	1	−	−	−	−	−	
タカサブロウ	果実	完形	1	6	3	6	5	−	
メナモミ属	果実	完形	−	−	1	−	1	1	
		破片	1	−	1	2	−	−	
ヤブタビラコ	果実	完形	3	2	1	−	1	−	
		破片	1	−	−	−	−	−	
キク科	果実	完形	−	1	−	2	−	1	別分類群,2･4近似
不明									
不明A		完形	−	1	−	1	−	−	
不明B		完形	1	3	1	−	−	−	
不明C		完形	−	2	−	−	−	−	
不明D		完形	−	−	−	2	−	−	チョウジタデ属種子近似
不明E		完形	−	3	−	−	−	−	ゼニアオイ属果実近似
不明		完形	−	4	2	−	4	5	2:1個幼果?
		破片	−	−	−	−	2	2	
		破片 炭化	−	1	−	−	−	−	アズキ亜属種子近似
合計									
木本種実			9	29	34	24	10	25	計131個
草本種実			398	966	370	243	85	58	計2120個
不明			1	14	3	3	6	7	計34個
種実合計(不明を除く)			407	995	404	267	95	83	計2251個
分析残渣									
葉片			−	+	+	+	+	+	
芽			−	+	+	+	++	++	
木材			−	+	+	+	++	++	
炭化材			+	+	+	+	+	+	
蘚苔類の茎･葉			−	+	+	+	+	+	
植物片			++	+++	+++	+++	++	++	
昆虫類			++	++	++	++	++	++	
岩片			+	++	++	++	++	+++	
分析量			200	200	200	200	200	150	容積(cc)
			307	319	331	340	334	272	湿重(g)

注)「+」：少量、「++」：中量、「+++」：多量

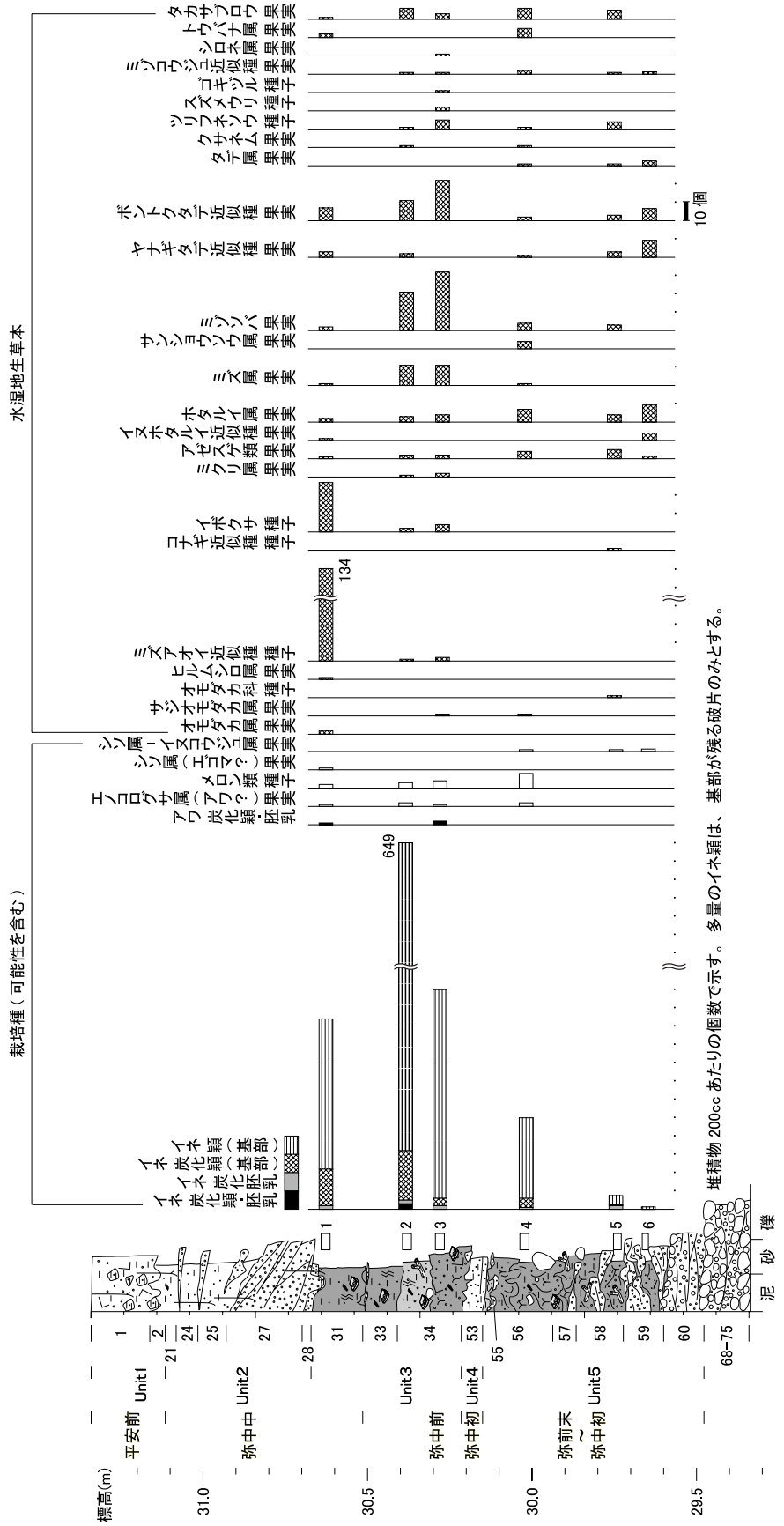


図55　２区流路1132secにおける種実遺体群集の層位分布（１）

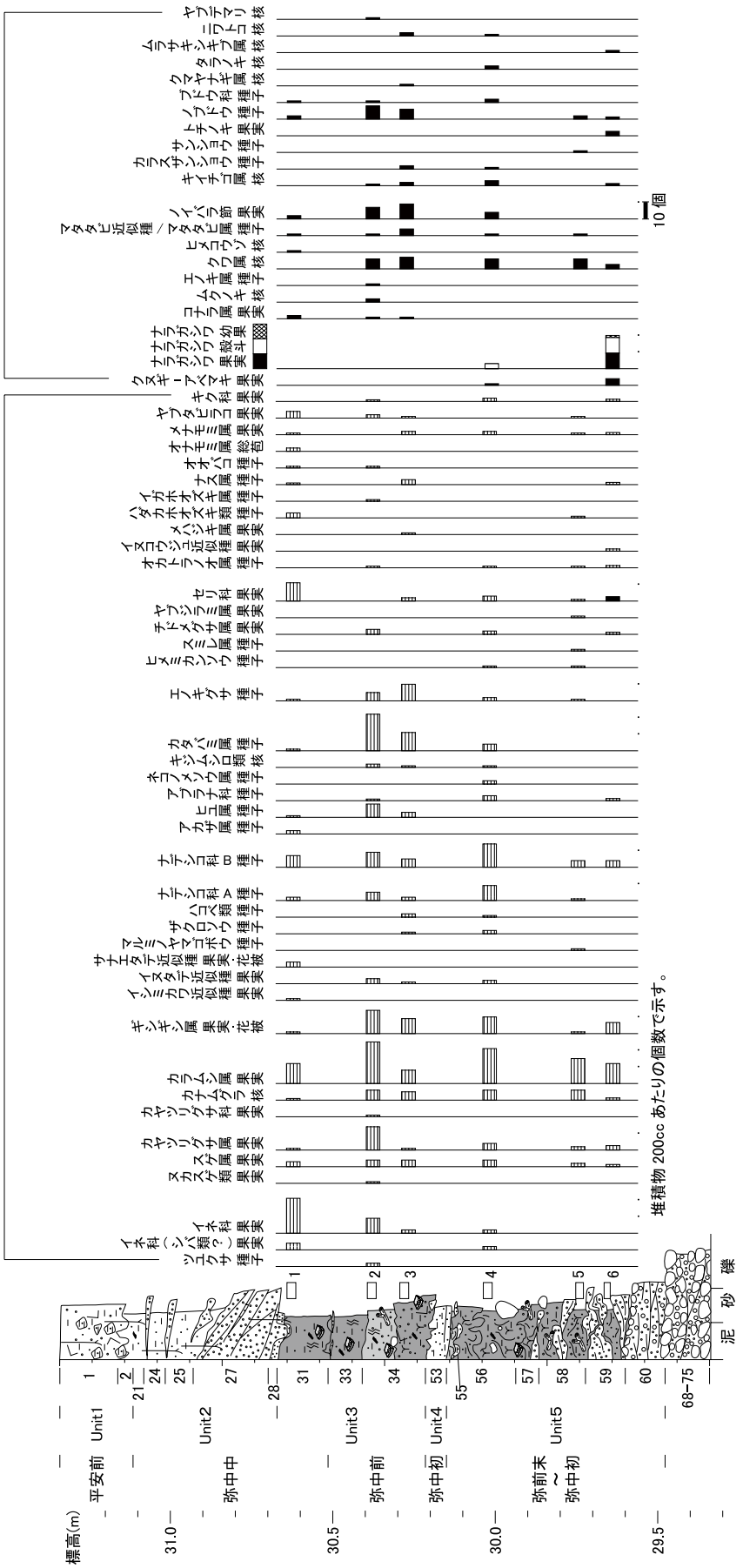
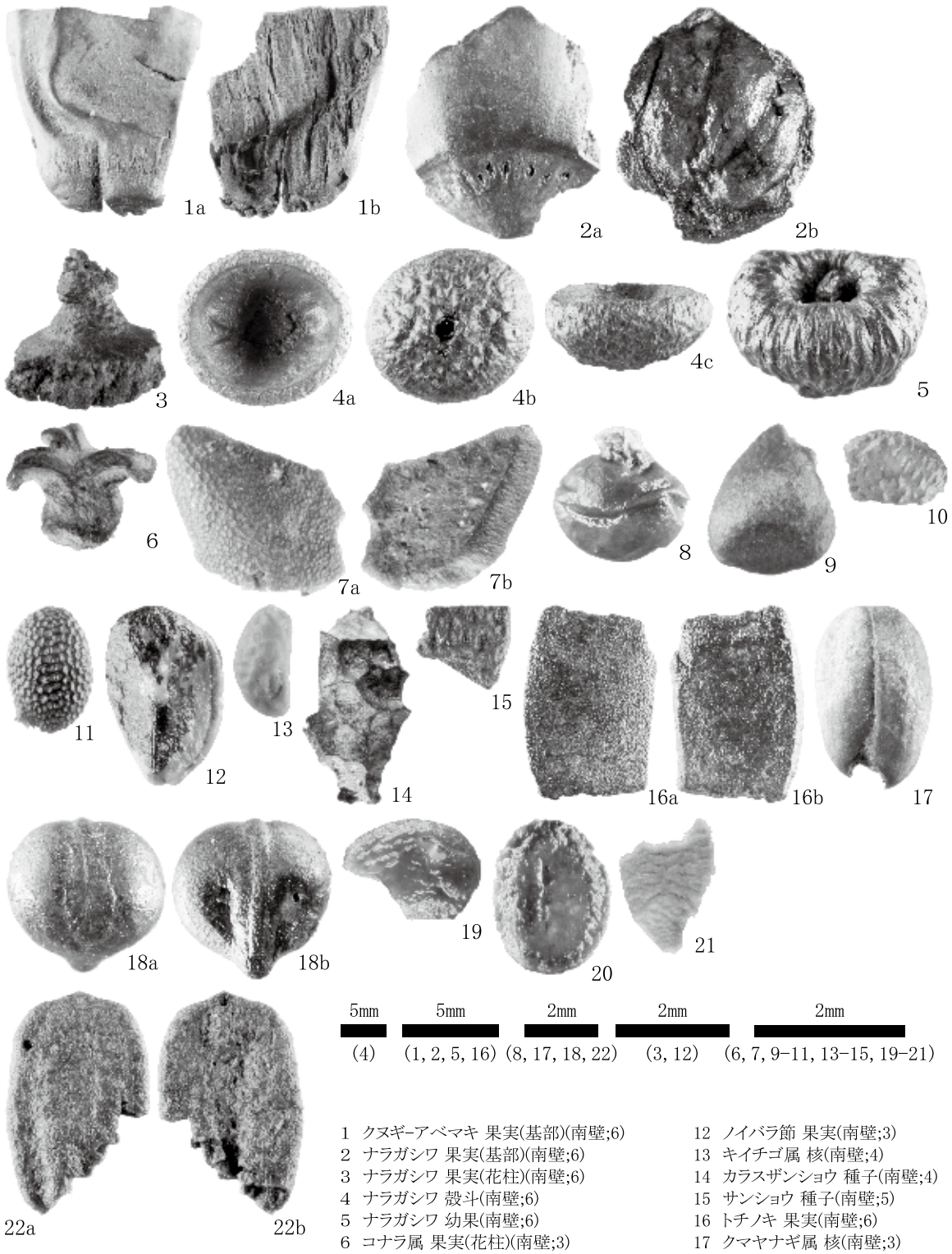
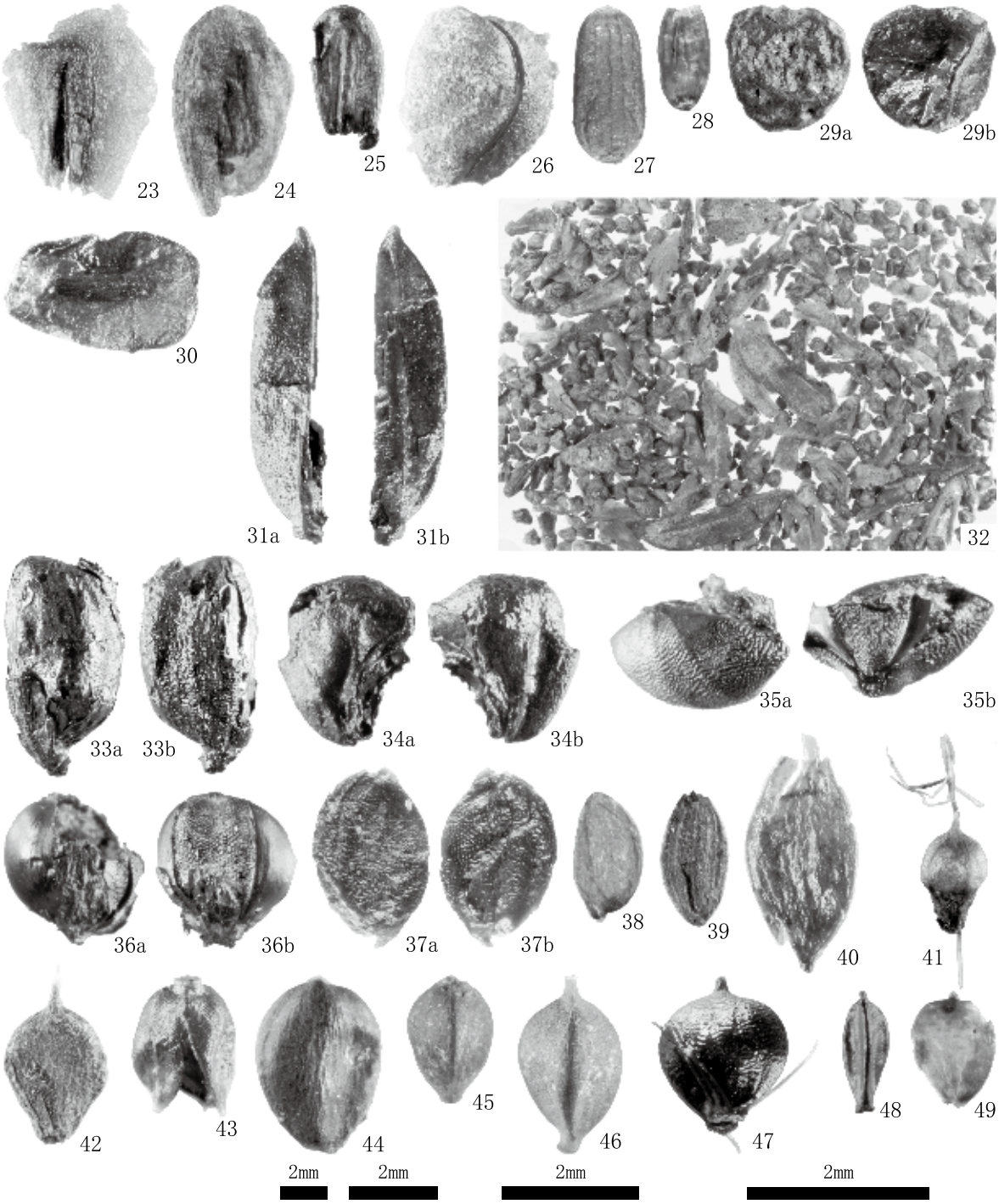


図56　2区流路1132secにおける種実遺体群集の層位分布（2）



1 クヌギ−アベマキ 果実(基部)(南壁;6)
2 ナラガシワ 果実(基部)(南壁;6)
3 ナラガシワ 果実(花柱)(南壁;6)
4 ナラガシワ 殻斗(南壁;6)
5 ナラガシワ 幼果(南壁;6)
6 コナラ属 果実(花柱)(南壁;3)
7 ムクノキ 核(南壁;2)
8 エノキ属 種子(南壁;2)
9 クワ属 核(南壁;3)
10 ヒメコウゾ 核(南壁;1)
11 マタタビ近似種 種子(南壁;3)
12 ノイバラ節 果実(南壁;3)
13 キイチゴ属 核(南壁;4)
14 カラスザンショウ 種子(南壁;4)
15 サンショウ 種子(南壁;5)
16 トチノキ 果実(南壁;6)
17 クマヤナギ属 核(南壁;3)
18 ノブドウ 種子(南壁;2)
19 タラノキ 核(南壁;4)
20 ムラサキシキブ属 核(南壁;6)
21 ニワトコ 核(南壁;3)
22 ヤブデマリ 核(南壁;2)

図57　種実遺体（１）



(32) (29, 31, 33, 41) (23, 26, 30, 40, 42, 46, 47) (24, 25, 27, 28, 34–39, 43–45, 48, 49)

23 オモダカ属 果実(南壁;1)
24 サジオモダカ属 果実(南壁;4)
25 オモダカ科 種子(南壁;5)
26 ヒルムシロ属 果実(南壁;1)
27 ミズアオイ近似種 種子(南壁;1)
28 コナギ近似種 種子(南壁;5)
29 ツユクサ 種子(南壁;2)
30 イボクサ 種子(南壁;1)
31 イネ 穎(基部)(南壁;2)
32 イネ 穎(基部)(南壁;2)
33 イネ 穎・胚乳(南壁;2)
34 イネ 胚乳(基部)(南壁;5)
35 アワ 穎・胚乳(南壁;1)
36 アワ 穎・胚乳(南壁;3)
37 エノコログサ属(アワ?) 果実(南壁;1)
38 イネ科(シバ類?) 果実(南壁;1)
39 イネ科 果実(南壁;1)
40 イネ科 果実(南壁;1)
41 ミクリ属 果実(南壁;3)
42 アゼスゲ類 果胞・果実(南壁;5)
43 ヌカスゲ類 果実(南壁;2)
44 スゲ属 果実(2面体)(南壁;4)
45 スゲ属 果実(3面体小型)(南壁;2)
46 スゲ属 果実(3面体大型)(南壁;3)
47 イヌホタルイ近似種 果実(南壁;6)
48 カヤツリグサ属 果実(南壁;2)
49 カヤツリグサ科 果実(南壁;2)

図58 種実遺体（2）

(74, 81, 99) (50, 54, 56, 57, 60, 78, 80, 82, 83) (55, 59, 61, 62, 84, 85, 88, 95, 97, 98, 100, 101) (51–53, 58, 63–73, 75–77, 79, 86, 87, 89–94, 96, 102, 103)

50 カナムグラ 核(南壁;5)
51 ミズ属 果実(南壁;2)
52 カラムシ属 果実(南壁;2)
53 サンショウソウ属 果実(南壁;4)
54 ギシギシ属 果実・花被(南壁;2)
55 ギシギシ属 果実(南壁;2)
56 ミゾソバ 果実(南壁;3)
57 イシミカワ近似種 果実(南壁;1)
58 イヌタデ近似種 果実(南壁;4)
59 サナエタデ近似種 果実(南壁;1)
60 サナエタデ近似種 花被(南壁;1)
61 ボントクタデ近似種 果実(南壁;1)
62 ヤナギタデ近似種 果実(南壁;6)
63 マルミノヤマゴボウ 種子(南壁;5)
64 ザクロソウ 種子(南壁;4)
65 ハコベ類 種子(南壁;3)
66 ナデシコ科A 種子(南壁;4)
67 ナデシコ科B 種子(南壁;4)
68 アカザ属 種子(南壁;1)
69 ヒユ属 種子(南壁;2)
70 アブラナ科 種子(南壁;4)
71 ネコノメソウ属 種子(南壁;4)
72 キジムシロ類A 核(南壁;2)
73 キジムシロ類B 核(南壁;2)
74 クサネム 果実(節果)(南壁;2)
75 カタバミ属 種子(南壁;2)
76 エノキグサ 種子(南壁;2)
77 ヒメミカンソウ 種子(南壁;5)
78 ツリフネソウ 種子(南壁;3)
79 スミレ属 種子(南壁;5)
80 スズメウリ 種子(南壁;3)
81 ゴキヅル 種子(南壁;3)
82 雑草メロン型 種子(南壁;3)
83 マクワ・シロウリ型 種子(南壁;4)
84 ヤブジラミ属 果実(南壁;5)
85 セリ科 果実(南壁;1)
86 チドメグサ属 果実(南壁;2)
87 オカトラノオ属 種子(南壁;6)
88 メハジキ属 果実(南壁;3)
89 シロネ属 果実(南壁;3)
90 ミゾコウジュ近似種 果実(南壁;4)
91 イヌコウジュ近似種 果実(南壁;6)
92 シソ属(エゴマ?) 果実(南壁;1)
93 トウバナ属 果実(南壁;4)
94 イガホオズキ属 種子(南壁;2)
95 ハダカホオズキ類 種子(南壁;1)
96 ナス属 種子(南壁;3)
97 ナス属 種子(南壁;6)
98 オオバコ 種子(南壁;1)
99 オナモミ属 総苞(南壁;1)
100 タカサブロウ 果実(南壁;4)
101 メナモミ属 果実(南壁;3)
102 ヤブタビラコ 果実(南壁;1)
103 キク科 果実(南壁;2)

図59　種実遺体（３）

ソバ、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、タデ属、クサネム、ツリフネソウ、スズメウリ、ゴキヅル、ミゾコウジュ近似種、シロネ属、トウバナ属、タカサブロウ、湿った場所にも乾いた場所にも生育可能な中生植物のツユクサ、イネ科（シバ類？）、イネ科、ヌカスゲ類、スゲ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、カナムグラ、カラムシ属、ギシギシ属、イシミカワ近似種、イヌタデ近似種、サナエタデ近似種、マルミノヤマゴボウ、ザクロソウ、ハコベ類、ナデシコ科、アカザ属、ヒユ属、アブラナ科、ネコノメソウ属、キジムシロ類、カタバミ属、エノキグサ、ヒメミカンソウ、スミレ属、チドメグサ属、ヤブジラミ属、セリ科、オカトラノオ属、イヌコウジュ近似種、メハジキ属、ハダカホオズキ類、イガホオズキ属、ナス属、オオバコ、オナモミ属、メナモミ属、ヤブタビラコ、キク科が確認された。

水湿地生植物を多く含み、試料４より上位に向かってに向かって個数や分類群数が増加する傾向がみられる。また、試料４や試料２は、カラムシ属やカタバミ属などの中生植物を主体とするのに対して、試料１は圧倒的な水湿地性植物主体で、ミズアオイ近似種の多産が顕著である。

・塊状炭化物（湿地上層）

試料表面の観察結果、塊状炭化物を構成する炭化種実は、全て栽培種のイネ（*Oryza sativa L.*；イネ科イネ属）の穎･胚乳（果序）に同定された。なお、本分析では、非可食部の籾を「穎（果）」、籾内部の可食部（米）を「胚乳」としている。イネ以外は、塊状炭化物表面２箇所に炭化植物片が面的に付着する状況が確認されたのみで、他分類群の種実や虫類等の混入は確認されなかった。

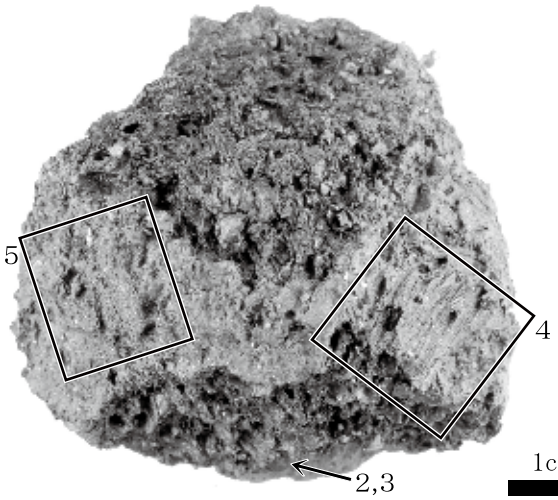
塊状炭化物は、径６㎝程度を測る。表面に確認される穎果（籾）や胚乳は、やや偏平な長楕円体を呈し、保存状態が良好で表面模様も明瞭である。穎･胚乳個々の配列がほぼ揃っており、果序（稲穂）の状態である（図60－１～３）。穎果（籾）は、長さ６～7.5㎜、幅３～４㎜、厚さ２～３㎜で、基部には径１㎜程度の斜切状円柱形の果実序柄（小穂軸）と１対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は５脈、内穎は３脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合して稲籾を構成する。果皮は薄く、表面には微細な顆粒状突起が縦列する。穎果内に１個入る胚乳は、長さ４～5.5㎜、幅1.5～３㎜、厚さ２～2.5㎜で、基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。胚乳表面はやや平滑で、２～３本の縦隆条が明瞭に確認される（図60－３）。

塊状炭化物の平坦面に付着する植物片は、残存長1.3㎝、残存幅1.2㎝程度で薄膜状を呈す。幅0.1～0.2㎜の線形で表面に浅く細い長軸方向の平行脈がある植物片が同方向に配列することから、同分類群の単子葉植物の葉や茎等と考えられる（図60－４・５）。

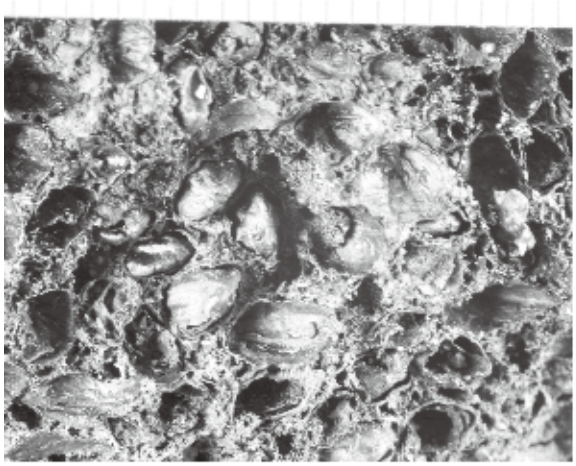
４－４.考察

（1）弥生時代中期の流路1132の堆積環境

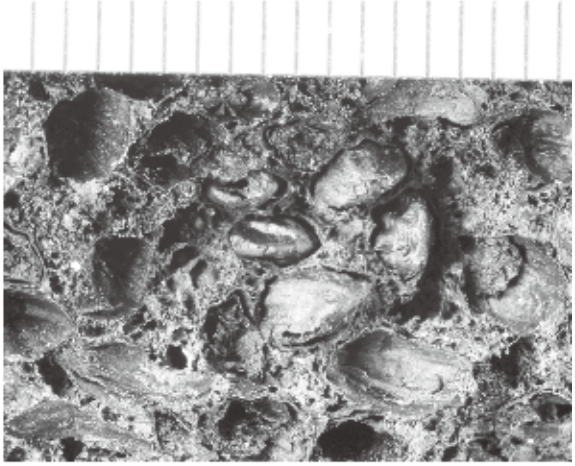
弥生時代前期末から中期に充填された流路1132の堆積環境は、珪藻分析の結果から検討する。59層・58層・56層・34層下部（試料６～３）の４層準は、産出した種に多少の差異はあるものの、ほぼ同様の傾向を示す。



1　イネ 穎・胚乳(塊状)
流路(湿地上層)

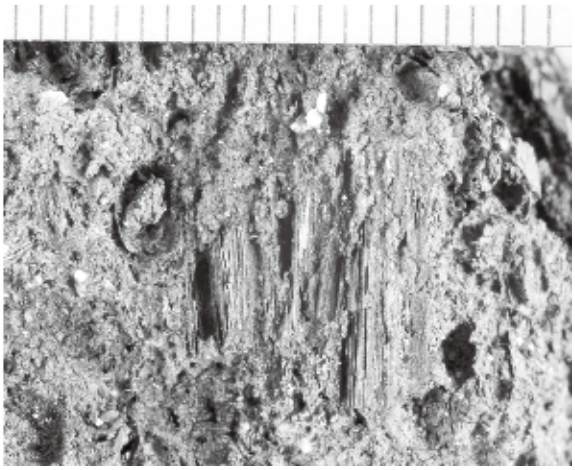


2　イネ 穎・胚乳
流路(湿地上層)



3　イネ 穎・胚乳
流路(湿地上層)

4　イネ 穎・胚乳/植物片(単子葉類)
流路(湿地上層)



5　イネ 穎・胚乳/植物片(単子葉類)
流路(湿地上層)

図60　塊状炭化物

59層（試料６）から産出した種は、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula var. lineata*、*Cymbella turgidula*等である。58層（試料５）から産出した種は、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula var. lineata*、*Cymbella turgidula*、流水不定性種の*Cymbella tumida*、*Fragilaria ulna*等である。56層（試料４）から産出した種は、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula var. lineata*、*Cymbella turgidula*、*Planothidium lanceolatum*、流水不定性種の*Eunotia pectinalis var. minor*等である。34層下部（試料３）から産出した種は、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula var. lineata*等である。

産出した種の生態性について述べると、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula var. lineata*は、河川等の流水域の基物（礫等）に大型の藻類と共に付着生育する種である。Asai and Watanebe（1995）は、清浄な水域に生育する種であることから、好清水性種としている。同じく流水性種の*Cymbella turgidula*および*Planothidium lanceolatum*は、中～下流性河川指標種群（安藤,1990）と呼ばれ、河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現するとされる。次に、流水不定性種の*Cymbella tumida*は、一般に貧塩不定、好アルカリ性種、流水不定の広域頒布種であるが沼沢湿地に普遍的に認められる。また、Asai and Watanebe（1995）によると好清水性種とされる。同じく、流水不定性種の*Eunotia pectinalis var. minor*は、湿地に多産する種とされる（埼玉県教育委員会,1962)。流水不定性種の*Fragilaria ulna*は、貧塩不定性、好アルカリ性および流水不定であり、広域頒布種の一種で広範のさまざまな水域から比較的、高率に見出される。

産出した種の生態性および群集の特徴から堆積時の環境を推定する。59層（試料６）は産出した珪藻が少なかったが、流水性種が多く産出していることを考慮すると、流水域の環境が示唆される。58・56層（試料５・４）からは流水性種が複数種産出したことから、流水域であった可能性が考えられる。また、34層下部（試料３）は産出した珪藻が少なかったが、流水性種が多く産出していることを考慮すると、58・56層（試料５・４）と同様に流水域の環境であった可能性がある。なお、経験的には、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。また、珪藻化石を構成するシリカ鉱物は、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度指数が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている（千木良,1995)。保存状態が悪いことも踏まえると、59層・34層下部（試料６・３）層準では、取り込まれた珪藻化石の多くは堆積後に分解・消失したと推測される。

34層上部・31層上部（試料２・１）は、産出した種に多少の差異はあるものの、ほぼ同様の傾向を示す。

34層上部から産出した種は、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula var. lineata*、*Cymbella turgidula*、流水不定性種の*Eunotia pectinalis var. minor*、*Pinnularia viridis*等である。試料１から産出した種は、淡水性種の流水不定性種の*Cymbella tumida*、*Eunotia pectinalis var. minor*等である。

産出した種の生態性（前述していない種）を述べると、流水不定性種の*Cymbella tumida*は、一

般に貧塩不定、好アルカリ性種、流水不定の広域頒布種であるが沼沢湿地に普遍的に認められる。また、Asai and Watanebe（1995）によると好清水性種とされる。同じく、流水不定性種の*Pinnularia viridis*は、好湿地性種とも呼ばれ泥炭性の湿源・沼に特徴的に認められるほか、比較的広範に生育し、他の種群に比較して殻が大きく、生産力の高い種である。

よって、産出した種の生態性および群集の特徴から、34層上部・31層上部（試料２、１）形成期は湿地の環境であったと考えられる。また、流水性種が産出したことから、間欠的な氾濫の影響を受けていたと考えられる。

(2) 植生および植物利用

花粉化石と種実遺体より、周辺の森林植生を反映する木本類についてみると、花粉化石では充填堆積物下部の59層から上部の31層上部（試料６～１）にかけて概ね類似した群集組成を示す。コナラ属アカガシ亜属が最も多く産出し、スギ属、コナラ属コナラ亜属もやや多く認められる。アカガシ亜属はシイ属などとともに暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素である。スギは、現在では植栽を除けば山沿いの谷筋などに分布することが多いが、埋没林や遺跡出土材の調査によって、かつては扇状地や低地などにも分布していたことが明らかになっている（鈴木,2002)。コナラ亜属は沢筋や河畔などにも生育する種を含む。よって、調査地周辺では、アカガシ亜属を中心とした照葉樹林が周辺山地や段丘などの安定した領域を中心に森林を作っており、部分的にモミ属やマツ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの針葉樹も分布していたと考えられる。また、扇状地の流路沿いなどにスギ属やコナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属などが生育していたとみられる。

京都盆地の植生変遷をみると、後氷期以降コナラ属コナラ亜属が中心の落葉広葉樹林が主体であったが、エノキ属－ムクノキ属が優占先する時期があり、その後、アカガシ亜属が優占する照葉樹林へと変化するとされている（前田,1984;高原,1998など)。コナラ属アカガシ亜属が主体の照葉樹林へと変化したのは鬼界アカホヤテフラ（約7,200～7,300年前）降灰以降であり、その後、長岡京時代にアカマツが増加し始め、平安時代中期以降にアカマツが優勢な森林が形成されたと推測されている（高原,1998)。分析対象とした層位は、出土土器より弥生時代前期末～中期中葉で、既存の調査事例と同調的であり、鴨川扇状地にも林分が存在した可能性が高い。

なお、34層・31層上部（試料３～１）では、ブドウ属、ノブドウ属、イボタノキ属など、林縁の植生を反映する種類の割合が高くなる。層相および珪藻分析結果から、34層上部（試料２）以降の流路内は放棄流路のような湿地環境になったと推定されることから、流路河岸などの洪水等の河川氾濫などの植生撹乱の影響が弱まり、植生の再生が進行し、林縁植生が成立するようになった可能性がある。

種実遺体では、常緑または落葉高木のコナラ属、落葉高木のクヌギ-アベマキ、ナラガシワ、ムクノキ、エノキ属、クワ属、カラスザンショウ、トチノキ、落葉低木のヒメコウゾ、ノイバラ節、キイチゴ属、サンショウ、クマヤナギ属、タラノキ、ムラサキシキブ属、ニワトコ、ヤブデマリ、落葉籐本のマタタビ近似種、マタタビ属、ノブドウ、ブドウ科が確認され、34層（試料３・２）で

やや増加する程度で、ナラガシワ以外の組成に大差はみられない。これらの要素は流路沿いなどの明るく開けた場所に生育していたと考えられる。特に59層（試料６）でやや多産したナラガシワは、果実や殻斗、幼果などの複数部位が確認されたことから、流路の極近傍に生育していたことが考えられる。

次に、花粉化石および植物珪酸体、種実遺体より、草本植生についてみると、種実遺体は、沈水～浮葉植物のヒルムシロ属、沈水～抽水～湿生植物のオモダカ属、オモダカ科、抽水～湿生植物のサジオモダカ属、抽水植物のミズアオイ近似種、コナギ近似種、イボクサ、ミクリ属、イヌホタルイ近似種、ホタルイ属、湿生植物のアゼスゲ類、ミズ属、サンショウソウ属、ミゾソバ、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、タデ属、クサネム、ツリフネソウ、スズメウリ、ゴキヅル、ミゾコウジュ近似種、シロネ属、トウバナ属、タカサブロウ、湿った場所にも乾いた場所にも生育可能な中生植物のツユクサ、イネ科（シバ類？）、イネ科、ヌカスゲ類、スゲ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、カナムグラ、カラムシ属、ギシギシ属、イシミカワ近似種、イヌタデ近似種、サナエタデ近似種、マルミノヤマゴボウ、ザクロソウ、ハコベ類、ナデシコ科、アカザ属、ヒユ属、アブラナ科、ネコノメソウ属、キジムシロ類、カタバミ属、エノキグサ、ヒメミカンソウ、スミレ属、チドメグサ属、ヤブジラミ属、セリ科、オカトラノオ属、イヌコウジュ近似種、メハジキ属、ハダカホオズキ類、イガホオズキ属、ナス属、オオバコ、オナモミ属、メナモミ属、ヤブタビラコ、キク科などの豊富な分類群数、個数に特徴づけられる。

層位的には、59層（試料６）では、花粉化石はヨモギ属が最も多く産出し、イネ科、カヤツリグサ科、クワ科、ツリフネソウ属などを伴う。植物珪酸体は少ないながらも、タケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などイネ科が認められる。種実遺体は、イヌホタルイ近似種を含むホタルイ属やヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、カラムシ属などが確認された。ヨモギ属やタケ亜科などのイネ科、カヤツリグサ科、カラムシ属、クワ科などは、開けた明るい場所に生育する種を含む、人里植物を多く含む分類群である。また、ガマ属、ヨシ属、イヌホタルイ近似種を含むホタルイ属やヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、ツリフネソウ属、ゴキヅル属などは水湿地生植物であることから、流路の集水域に生育していた可能性がある。

58層・56層（試料５・４）では、花粉化石ではイネ科を筆頭に、カヤツリグサ科、キンポウゲ属、ヨモギ属、キク亜科などの人里植物が多く認められ、植物珪酸体でもクマザサ属やメダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科、種実遺体はカラムシ属やナデシコ科、タカサブロウなどが認められる。56層（試料４）では中生植物がやや増加することから、堆積環境の変化に伴い、周辺で草地が拡大した可能性がある。

なお、いずれの層準においても植物珪酸体の産出が悪かった。砂礫を含むことや珪藻分析から流水域と推測されることなどを考慮すれば、堆積速度が早いことや水流の影響などで植物珪酸体が堆積物中に蓄積しにくい状態にあったと思われる。一方、種実遺体の保存状態は良好で、一部炭化個体がみられることから、流路周辺での人間活動の痕跡と示唆される。

放棄流路となる34層・31層上部（試料３～１）では、花粉化石はイネ科が顕著に多産し、カヤツ

リグサ科、クワ科、バラ科、セリ科、ヨモギ属などが認められ、植物珪酸体ではクマザサ属やメダケ属などのタケ亜科、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。種実遺体ではミゾソバやボントクタデ近似種、カタバミ属などをはじめ、分類群数や個数が増加する。ガマ属、ヒルムシロ属、オモダカ属、ヨシ属、イボクサ属、ミズアオイ属などの水湿地生草本、ミズワラビ属などの水生シダ類も検出される。周辺域は水湿地を含む草地環境がさらに拡大した可能性が窺える。

特に31層上部（試料１）では、ミズアオイ近似種（属）の種子や花粉の多産に特徴づけられ、流路内の水湿地生植物群落の変化が推測される。ミズアオイが生育可能な水深の浅い水湿地の存在が示唆され、層相かおよび珪藻群集から推定される湿地環境と調和的である。

最後に植物利用についてみると、栽培植物のイネの種実（とくに穎）の多産に特徴づけられる。種実遺体は、59層～31層上部（試料６～１）よりイネ、56層（試料４～１）よりアワ（可能性含む)、メロン類（雑草メロン型、マクワ･シロウリ型含む)、31層上部（試料１）より栽培の可能性があるシソ属（エゴマ？）が確認された。当時利用された植物質食料と示唆され、一部炭化していることから生活活動等で火を受けたとみなされる。

流路埋土上層より出土した塊状炭化物も、イネの穀粒の配列が揃う果実序（稲穂）の状態であった。稲穂（脱穀前）の状態で火を受けたとみなされ、炭化後の保存状態が極めて良好な条件下で埋積したと示唆される。また、塊状炭化物には平坦面が確認され、単子葉植物の葉や茎と考えられる植物片が同方向に配列する状況も確認された。植物片は、稲穂に面的に接した状態で火を受けたとみなされ、稲穂に伴う植物体（イネの葉･茎）の可能性、あるいは、（編組製品以外の）容器や敷藁等に由来する可能性がある。

今回最も多く検出されたイネは、56層～31層上部（試料４～１）で多産し、34層上部（試料２）で最多である。さらに、イネ属珪酸体およびイネ属型花粉も、層相から人為的擾乱が推定される34層（試料３）より上位層準で産出する。産出状態は痕跡程度であるが、これらの層準が形成される頃に周辺域で稲作が行われた可能性が考えられる。その他、34層上部・31層上部（試料３・１）ではキビ連珪酸体、31層上部（試料１）ではコムギ連珪酸体が確認された。キビ連には種実で確認されたアワが含まれる。これらの珪酸体が栽培種に由来するものであれば、周辺域での栽培の可能性も考えられる。

以上のことから、イネ（属）の種実の多産や花粉化石、植物珪酸体の検出より、周辺域における稲作の可能性と、流路河岸のごく近辺の居住域よりもたらされた生活残滓等が埋積した可能性が指摘される。ただし、立地条件および明確な水田遺構が検出されていない発掘調査所見を考慮すると、イネ（属）化石が本地点で稲作が行われた直接の証拠にはならない。したがって、本地点で稲作が行われたかについては、発掘調査所見を含めて慎重に検討する必要がある。

引用文献

安藤一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.

Asai, K. and Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35 − 47.

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon ,51, 337-360.

千木良雅弘,1995,風化と崩壊.近未来社,204p.

Desikachiary, T. V.,1987,Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps and Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.

藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.

藤下典之,1984,出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法.古文化財の自然科学的研究,古文化財編集委員会編,同朋舎,638-654.

福岡　孝・松井整司,2002,AT降灰以降の三瓶火山噴出物の層序.地球科学,56,105-122.

古澤　明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.

Hustedt, F.,1930,Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1,920p.

Hustedt, F.,1937-1938,Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ. Arch. Hydrobiol. Suppl.,15,131-809,1-155,274-349.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2,845p.

Hustedt, F.,1961-1966,Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3,816p.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊藤良永・堀内誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.日本珪藻学誌,6,23-44.

河角龍典,2001,平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷.考古学と自然科学,42,35-54.

角野康郎,1994,日本水草図鑑.文一総合出版,178p.

勝山輝男,2015,日本のスゲ 増補改訂（ネイチャーガイド）.文一総合出版,392p.

木村克己・吉岡敏和・井本伸広・田中里志・武蔵野　実・高橋裕平,1998,京都東北部地域の地質.地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）地質調査所,89p.

小林謙一,2017,縄紋時代の実年代-土器型式編年と炭素14年代-,同成社,263ｐ.

近藤錬三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.

小杉正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用.第四紀研究,27,1-20.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1985,Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica,9,250p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1986,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (1) : 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1988,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（2）: 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1990,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（3）: 576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1991,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（4）: 437p.

Lange-Bertalot, H.,2000,ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA: Annotated diatom micrographs. Witkowski, A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 plts. 4504 figs, 925 pgs.

町田　洋・新井房夫,1976,広域に分布する火山灰－始良Tn火山灰の発見とその意義－.科学,46,339-347.

町田　洋・新井房夫,1978,南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰.第四紀研究,17,143-163.

町田　洋・新井房夫,2003,新編　火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

増田富士夫・伊勢屋ふじ子,1985,“ 逆グレーディング構造”: 自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の示相堆積構造.　堆積学研究会会誌,　22・23,　108-116.

三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑.北海道大学出版会,824p.

中村　純,1980,日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）.大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第12,13集,91p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑（2010年改訂版）.東北大学出版会,678p.

太田陽子・成瀬敏郎・田中眞吾・岡田篤正編,2004,日本の地形6　近畿・中国・四国.東京大学出版会,383p.

Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869–1887.

埼玉県教育委員会,1962,埼玉県植物誌,埼玉県教育科学振興会, 289-313.

島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第5集,60p.

Smith, V.C., Staff, R.A., Blockley, S.P.E., Ramsey, C.B., Nakagawa, T., Mark, D.F., Takemura, K. Danhara, T., Suigetsu 2006 Project Members, 2013, Identification and correlation of vesible tephras in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive, Japan: chronostratigraphic markers for synchronizing of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. Quarternary Science Reviews, 67, 121-137.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

堆積学研究会編,1998, 放棄流路. 堆積学辞典, 朝倉書店,388.

杉森辰次・松井和夫・杉山直起・梅田孝行・園田玉紀,2003,堆積盆地に伏在する活断層調査事例-宇治川断層を例として-.全地連「技術ｅフォーラム2003」さいたま.

鈴木三男,2002,日本人と木の文化.八坂書房,255p.

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－.誠文堂新光社,272p.

谷城勝弘,2007,カヤツリグサ科入門図鑑.全国農村教育協会,247p.

付章２　弥生時代流路1132充填堆積で確認された変形構造

辻本裕也（株式会社古生態研究所）

はじめに

今回の調査区で検出された、弥生時代前期末から弥生時代中期中葉の流路1132では、流路内を充填堆積物の累重中に古地震痕跡とみられる変形構造が確認された。本稿では、現地調査時に採取した不撹乱試料で確認された変形構造について報告する。

（１）調査地点・方法

流路1132は北北東から南南西方向に流下する流路で、調査は２区流路1132セクションで実施した。本セクションで確認される流路充填堆積物下半部は、西岸側の流路斜面に流路移動により側方付加する、イプシロン斜交葉理をなす上方細粒化する砂礫～砂層、その上位に間欠的な増水時に運搬堆積した上凸の外形を示す砂堆や流路充填堆積物が累重する。これらの堆積物の東側には同時異相の泥質砂と流水の減衰期に形成された有機質砂質～泥質堆積物が累重する。出土遺物から弥生時代前期末～中期初頭に形成されたと推定される。上半部は、弥生時代中期前葉～中期中葉に形成された生物擾乱の著しい有機質砂質泥～泥層が累重し、その上位を弥生時代中期中葉以降に形成された逆級化成層をなす氾濫堆積物が覆っている。不撹乱試料は断面東部の有機質積物が厚く堆積していた地点から採取した。

現地採取した不撹乱柱状試料は、室内で厚さ１㎝まで板状に成形し、昼光下で写真撮影と観察を行う。また、観察後、湿潤状態のまま管電圧40kvp、電流２mA、照射時間120秒のＸ線強度条件でＸ線写真撮影を行い、富士コンピューテッドラジオグラフィ（FUJIFILM computed radiography）によるデジタル画像化した。Ｘ線写真撮影・デジタル画像化は公益財団法人元興寺文化財研究所の協力を得た。これら試料とＸ線写真の観察結果にもとづいて変形構造について検討する。なお、層名は調査時に設定された層名に基づく。

（２）地震動に起因する変形構造について

調査地点では、上記したように水底下で形成された有機質砂質泥～泥質堆積物が厚く堆積している。このような含水比が高い堆積物は何らかの応力で流動したり塑性変形を生じる場合がある。この変形の特徴が、土木工事などの外力の影響、人為を含む生物的擾乱に由来する構造と異なり、原位置で起こった変形で、新旧の堆積物が同時に変形し、かつ地震動の振動（押し引き）、回転、垂直振動の圧力による変形が認められ、同じ年代の層準に広く分布するなどの条件が確認される場合、地震動に起因する可能性が高まる。

地震動の起因する変形構造の特徴は、Matsuda（2000）・松田（1999）により定義されている。それによると、１回の地震動による変形構造が確認される堆積物の垂直範囲を変形ゾーンと呼ぶ。水

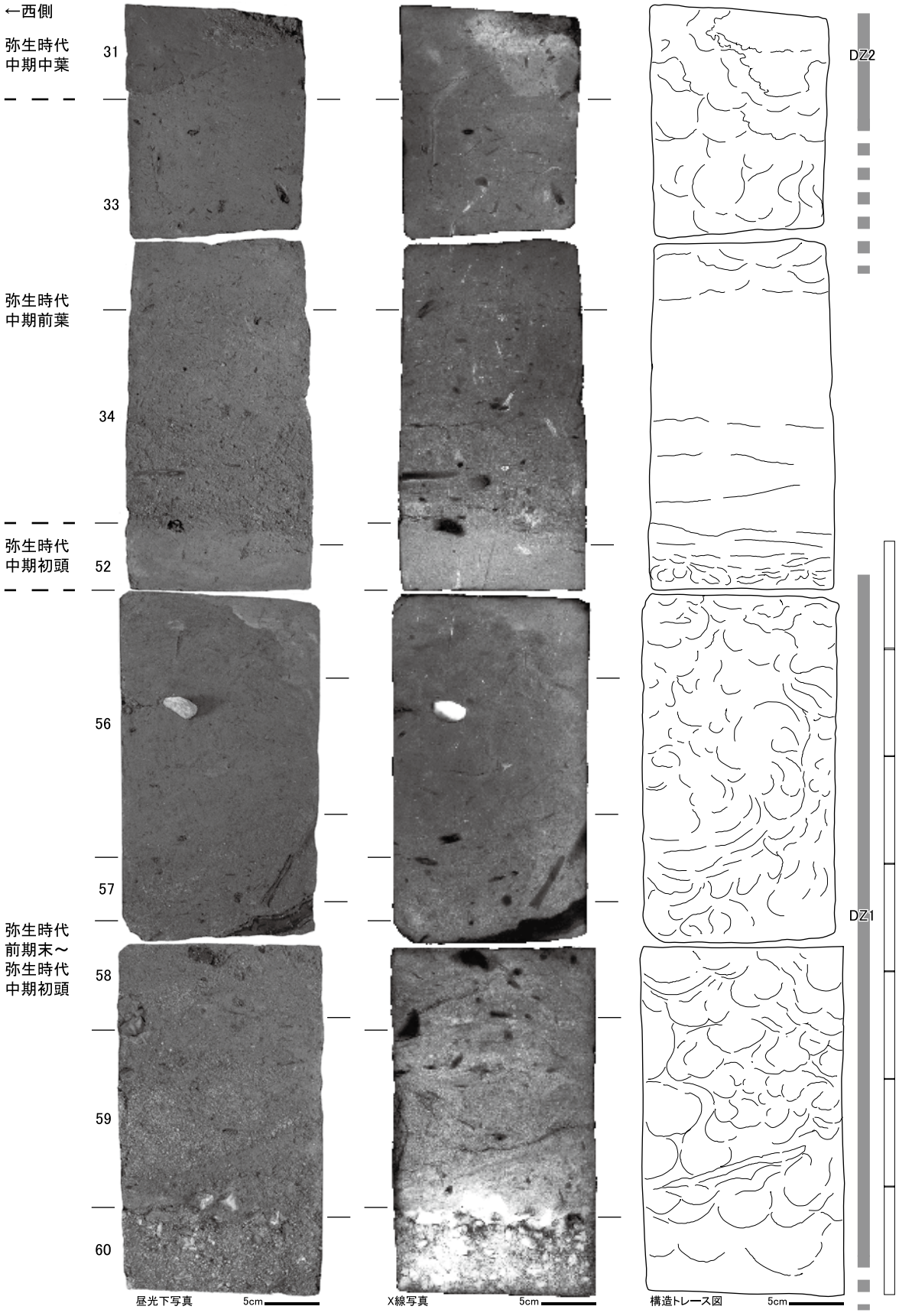


図61　流路1132充填堆積物の写真および変形構造

底に堆積した泥質堆積物は上部ほど水分を多く含むとともに、圧密を受けていないため流動性に富み、より下位では粘性・可塑性に富み、最下部では剛性が高まる性質をもつという特徴から、変形構造は上から順に（１）水と堆積物が乱流によって混ざり合い、ほとんど塊状を呈する液層の流動変形ユニット（liquidized deformation unit）、（２）上部で、変形に際して引きずり上げられた下位層の羽毛状、火焔状の流線パターンや細粒の中礫サイズ以細のブロックの散乱、下部に下向きに凸な形に変形した葉理から構成されるロード構造をなす含水塑性変形ユニット（hydroplastic deformation unit）、（３）下向きのフィッシャーや微小断層がみられる脆性変形ユニット（brittle deformation unit）、から構成されると定義されている。また、地震イベントの年代は、変形ゾーン上端直上および直下の堆積物の年代によって決まるとされている。以上の地震動による変形構造の特徴から、調査地点では２つの変形ゾーンが確認される（図61）。下位より変形ゾーンＤＺ-１・２と呼ぶ。

変形ゾーン１（ＤＺ１）：流路充填堆積物最下部の60層の砂礫層から断面西側斜面下部の流路の氾濫堆積物と同時異相をなす葉理構造が確認される52層の泥質砂下部にわたってみられる。変形の垂直範囲は68㎝である。

最下部の60層の浅いトラフ型斜交葉理をなす砂礫上部は、３～５㎝で下凸の不規則な鱗状のパターンを形成している。上面は上位の59層の変形に伴い、59層中に引きずり上げられた下に凸な弧の連続が確認される。

砂～砂質泥からなる59層・58層下部では、堆積物が下方に押しつけられ、引きづられたような、幅３～５㎝の下に凸な袋状の流線がみられる。このような垂直荷重とともに円弧状の剪断応力で生じた構造は56層上部まで明瞭に見られる。56層では、下に凸な幅10㎝程度の渦状の流線に沿って、水平方向に沿う回転応力によって剪断された58層上部～56層が写真右上方に反り返り、その先端が56層に突入している状況が確認される。上部ほど、下方への強い荷重および写真右上方への反り返りの変形パターンが確認される。このように上部にむかって変形が大きくなるが、これは先述したように水底に堆積した堆積物が上部ほど水分を多く含むとともに、圧密を受けていないため流動性に富むことに起因するとみられる。これらの60層から56層上部までが含水塑性変形ユニットに対比される。56層最上部～52層下部では、下位の変形構造が急激に消滅し、本来の堆積構造である葉理構造が不連続となる塊状部分が葉層状にのる。本層準が液相流動変形ユニットに対比される。

以上の変形ゾーン１（ＤＺ１）を形成した地震動は、変形ゾーン上端の52層の考古年代から、弥生時代中期初頭に発生した地震動に起因するとみられる。

変形ゾーン２（ＤＺ２）：試料上部の有機質泥層からなる33層上部～31層で確認される変形構造。堆積物が下方に押しつけられ、引きずられたような、幅２～３㎝の下に凸な流線パターンが不明瞭ながら確認される。調査地点付近の31層上面では、人間の足跡が確認されおり、上位を覆う中粒～粗粒砂で充填されている。試料およびＸ線写真の31層右上部の凹みが該当する。変形ゾーン２は、このような人為的擾乱に起因する下凸の変形の可能性もあるが、現地調査時の断面観察において、足跡が確認されていない２区北壁の同一層準の堆積物でも変形構造が確認される。また、31層

を覆う弥生時代中期中葉の洪水堆積物にかかて変形が連続しているように観察された。砂～砂礫からなる洪水堆積物では葉理が剪断され脆性破壊されている状況が確認されたことから地震動による変形構造に由来する可能性が高い。発生年代は、弥生時代中期中葉の洪水堆積物上部が平安時代前半の人間活動により乱されているため、弥生時代中期中葉から平安時代前半までの間と発生年代を特定することが困難である。なお、京都盆地では大きな影響を与えたとみられる大規模な記録地震（京都市防災会議,1996）が多数存在し、平安京の発掘調査でも古代の地震痕跡が確認されている。

引用・参考文献

松田順一郎,1999,瓜生堂遺跡第45-2時発掘調査でみられた古地震痕跡,都市計画道路大阪瓢箪山線建設に伴う瓜生堂遺跡第45時発掘調査概要報告,財団法人東大阪市文化財協会,233-242.

Matsuda.J.-I,2000,Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain,Osaka,japan,Sedimentary Geology,135,99-116.

京都市防災会議,1996,京都と周辺地域の地震活動の特性：京都と周辺地域の有感地震データベース（解説）.尾池和夫監修,81p.

付章３　流路1132から得られた炭素14年代値とその意義

小野映介（駒澤大学文学部）

当遺跡の「２区流路セクション」（図62）において、２点の有機物試料を採取して炭素14年代を得たので報告する。このセクションでは、泥～礫からなる堆積物が側方付加しながらポイントバー（中州）を形成する様子が確認できる。ポイントバーは河道が蛇行する過程で形成されるものであり、当地では西側から東側に向かって河道を堆積物が徐々に埋積しながら、蛇行が生じたと考えられる。

採取した試料はいずれも炭化物である（図版16、図63、表19）。年代測定は株式会社パレオ・ラボに依頼し、加速器質量分析（AMS法）が行われた。得られた年代値はOxCal v4.2（Bronk Ramsey, 2009）を用いて暦年較正した。暦年較正にはIntCal13（Reimer et al., 2013）の較正曲線が用いられた。

セクション最下部の試料Ａは砂層から採取したもので、2,434 − 2,353 cal BPの値が得られた。また、その1.22 m上位の泥層中より採取した試料Ｂからは2,355 − 2,306 cal BPもしくは2,226 − 2,206 cal BPの値を得た。このことから、当セクションで確認された河道の蛇行および埋積は上記の期間、すなわち約2,400～2,200年前に進んだと解釈できる。なお、この年代値は出土遺物の年代観と調和的とのことである。

京都盆地の地形は、鴨川や桂川の堆積または侵食作用によって形成されたことが分かっている（河角2001・2004など）。ただし、「平安京以前」の地形発達については不明な点が多い。本遺跡で確認された旧河道は、弥生時代の京都盆地における河川活動の一端を示すものとして貴重である。今回のような堆積物の層相・層序や炭素14年代値の蓄積は、京都盆地における詳細な地形発達史の構築に繋がるであろう。

引用文献

河角龍典（2001）平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷．考古学と自然科学42，35-54.

河角龍典（2004）歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化－遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築－．京都歴史災害研究１，13-23.

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M. and van der Plicht, J.（2013）IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.

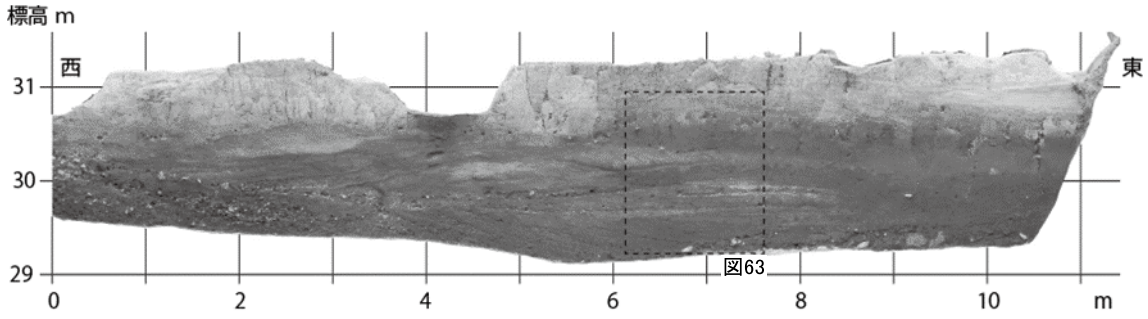


図62　２区 流路1132セクション（東半部）

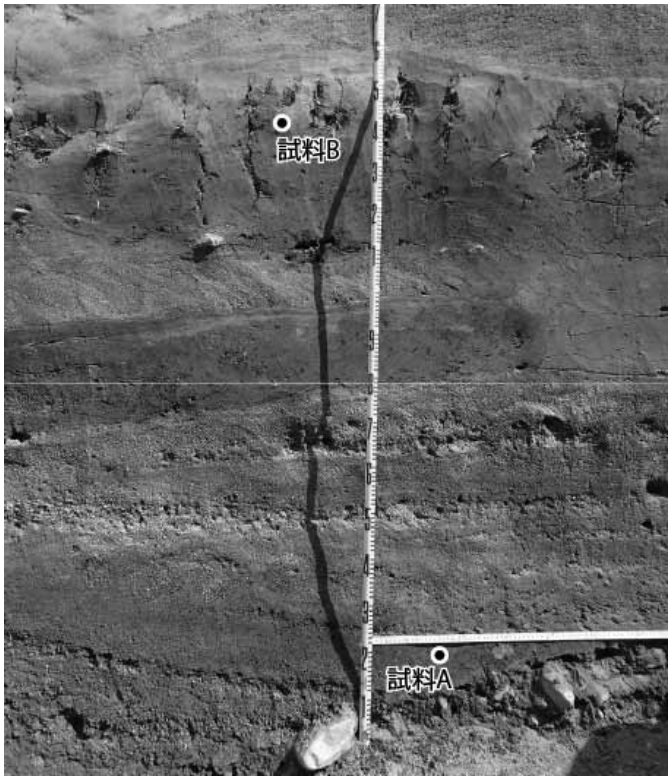


図63　年代測定試料の採取層序

表19　年代測定値

	緯度 (N) 経度 (E)	標高 (m)	試料	$\delta^{13}C$ (‰)	同位体分別補正 ^{14}C 年代 (yrs BP)	暦年較正値 (cal BP)	確率 (%)	ラボ No. (IAAA-)
試料 A	34° 59′ 54.09″ 135° 45′ 12.36″	29.40	炭化物	−28.4	2,390±20	2,434−2,353	95.4	180613
試料 B	34° 59′ 54.09″ 135° 45′ 12.36″	30.62	炭化物	−25.9	2,300±20	2,355−2,306 2,226−2,206	90.8 4.6	180612

付章４　井戸3191出土漆器の材質・技法の分析調査

北野信彦（龍谷大学）

（１）はじめに

今回の元醍泉小学校跡地（平安京左京六条二坊九町跡）の発掘調査では、平安時代中期（京都Ⅲ期新段階）の井戸3191から漆器皿類が２点検出された。本報ではこれらの材質・技法の調査を実施したので、その結果を報告する。

（２）調査対象試料

調査対象試料は、以下の２資料である。それぞれ破断面から数ミリ角程度の漆塗膜小片を注意深くサンプリングして分析試料に供した。

試料No.１（図版90-木５）：内面赤色漆・外面黒色漆の地塗りのみの漆器皿

試料No.２（図版90-木６）：内面黒色漆・外面黒色漆の地塗りのみの漆器皿

（３）調査方法

１　赤色漆の無機元素の定性分析

試料No.１の内面に塗装された赤色漆の使用顔料に関する無機元素の定性分析は、分析用カーボンテープに採取した小破片サンプルを固定して（株）堀場製作所MESA-500型の蛍光Ｘ線分析装置を使用して実施した。設定条件は、分析時間は600秒、試料室内は真空、Ｘ線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240μＡおよび20μＡ、検出強度は200.0～250.0cpsである。

２　漆塗り構造の分類

まず肉眼で漆塗り表面の状態を観察した後、実体顕微鏡を用いた細部の観察を行った。次に１㎜×３㎜程度の漆膜剥落片を採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイトAER-2400＋ハードナーHY-837）に包埋した後、断面を研磨した。この断面試料の漆塗膜面の厚さ、塗り重ね構造、顔料粒子の大きさ、下地の状態などについて、金属顕微鏡による落射観察を行った。

（４）調査結果

個々の漆器皿の表面の漆塗り技法をみると、いずれも比較的艶が良好な黒色漆のみ、赤色漆と黒色漆の無文様で地塗りのみの資料であった。

漆膜面の塗り構造を顕微鏡観察した結果、試料No.１の内面は、細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）の上に細かい墨粉を混和した黒色漆を一層施し、その上に比較的透明感が強い赤褐色系漆の中塗を塗り、やや細かい赤色顔料粒子と粗い顔料粒子を混和した上塗りの赤色漆が塗装されていた（図64）。一方、外面の漆塗膜は、内面と同様の細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともい

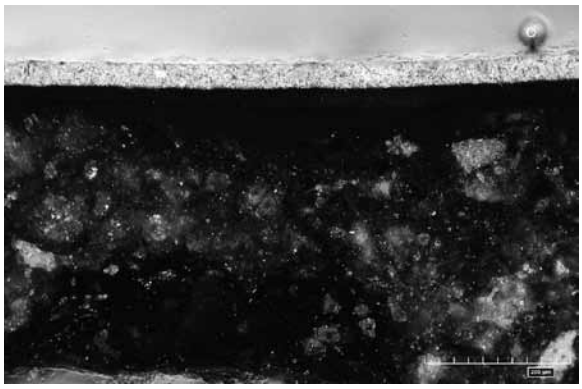


図64　試料No.１内面漆塗膜の断面観察

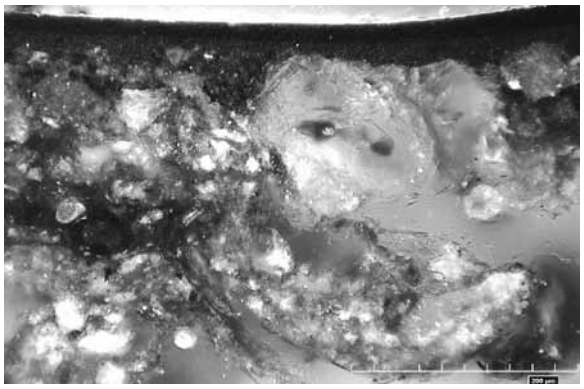


図65　試料No.１外面漆塗膜の断面観察

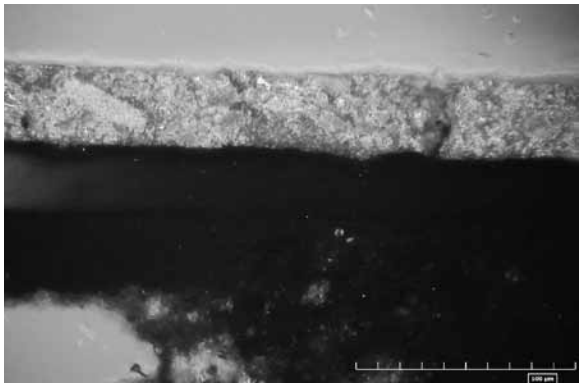


図66　試料No.１内面朱漆拡大

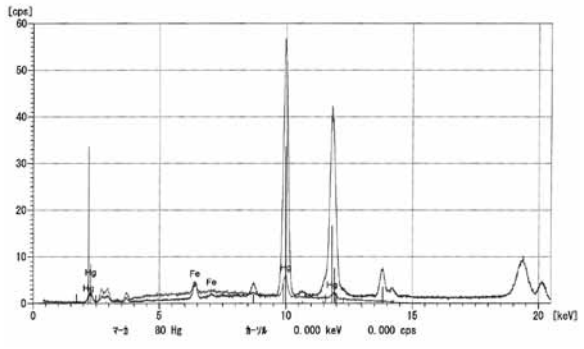


図67　試料No.１の蛍光Ｘ線分析結果

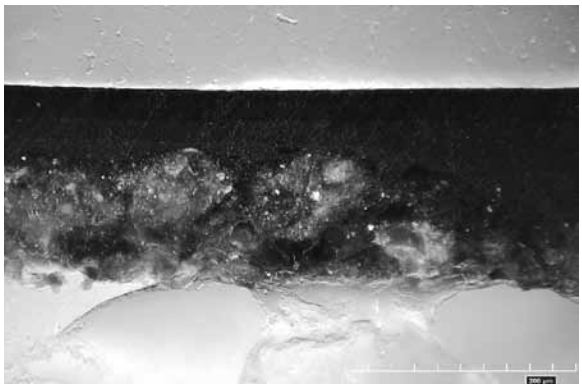


図68　試料No.２内面漆塗膜の断面観察

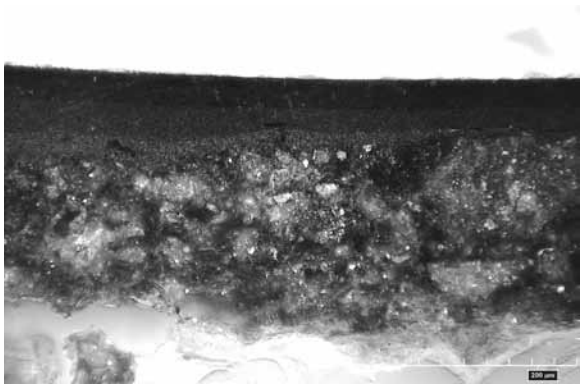


図69　試料No.２外面漆塗膜の断面観察

う）の上に細かい墨粉を混和した黒色漆を一層施し、その上に比較的透明感が強い赤褐色系漆の上塗漆が塗装されていた（図65）。この試料No.１の漆器皿内面に塗装された赤色漆の使用顔料を定性分析した結果、Hg（水銀）のピークが強く認められた（図67）。これらをさらに顕微鏡観察すると、上塗りの赤色漆層の中に十数μｍから40μｍ程度のやや細かい粒子からかなり粗い粒子の朱顔料粒子の集合体が確認された。このため試料No.１の内面は朱（水銀朱 HgS）の赤色顔料を用いた朱漆であると理解した（図66）。

次に試料No.２の内・外面ともに艶がある黒色漆を地塗りした漆器皿の漆塗膜面は、内・外面共に細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）の

上に細かい墨粉を混和した黒色漆を一層施し、その上に比較的透明感が強い赤褐色系漆の上塗漆が２層分塗装されていた（図68・69）。

以上のような本試料の材質・技法の分析調査の結果、いずれも堅牢性を重視したサビ下地を施し、その上に黒色漆→透明感がある赤褐色系漆を上塗りしており、いわゆる「烏の濡れ羽色」の黒色漆を意識したいずれも丁寧な塗技法が採用されていた。このような塗り技法は平安時代の漆器でも優品の塗り技法である。

ただし、試料No.１と試料No.２を比較すると、試料No.２の方が黒色漆の塗り重ねが３層であり、その点ではより丁寧な作りであるともいえよう。

参考文献

岡田文男,1995,古代出土漆器の研究 顕微鏡で探る材質と技法.京都書院,190p.

北野信彦,2005,近世出土漆器の研究.吉川弘文館,400p.

北野信彦,2013,ベンガラ塗装史の研究.雄山閣,324p.

北野信彦,2018,桃山文化期漆工の研究.雄山閣,404p.

付章５　土坑2811出土赤色粘土塊の分析調査

北野信彦（龍谷大学）

（１）はじめに

今回の元醒泉小学校跡地（平安京左京六条二坊九町跡）の発掘調査では、鎌倉時代後半（京都Ⅶ期新段階）の土坑2811から、赤い色相が強い赤土に若干の黄土が混在した赤色粘土塊が検出された。本報では、これが単なる粘土塊であるのか、それとも何等かの赤色顔料に関する塊片であるかを確認するための分析調査を実施したので、その結果を報告する。

（２）調査対象試料

調査対象試料は、赤い色相が強い赤土に若干の黄土が混在した約20kgの米袋程の大きさを有する粘土塊から、それぞれ赤い色相が強い粘土小片を注意深くサンプリングして分析試料に供した。

（３）調査方法

１ 赤い色相の測色測定

本調査では測色計計測による客観的数値の計測は行なわず、新版標準土色帳のマンセル標示色見本（農林水産省農林水産技術会議事務局　監修・日本色彩研究所　色表監修；1991年版）と各試料の色相を自然採光条件下で比較して基本的な赤い色相のグルーピング作業を行なった。

２ 赤色顔料の色相と集合状態の観察

調査対象試料である赤色粘土塊粒子の集合状態や色相は、まず（株）スカラ製のDG-3型デジタル顕微鏡を用いて50倍の倍率で拡大観察した。引き続き、包含土壌などの付着夾雑物を注意深く除去しながら採取した小破片の粘土塊試料は、観察箇所に応じてオリンパス製のHD型金属顕微鏡とデジタルカメラを連動させた200倍と400倍の倍率で観察するとともに、1,000倍から2,500倍の高倍率観察は、（株）ハイロックス社製のVH-7000S型デジタルマイクロスコープを使用して行った。

３ 無機元素の定性分析

調査対象試料の無機元素の定性分析は、まず（株）リガクのNiton XL3t-700携帯型のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置を調査対象箇所に注意深く近接させて大気中で分析した。設定条件は、測定視野は直径8.0㎜スポット、管球は対陰極Agtターゲット、管電圧は50kV、大気圧で分析設定時間は100秒である。設定条件は、管球はパラジウム（Pd）管球、管電圧は40kV、大気圧での分析設定時間は100秒である。引き続き採取した試料の構成無機元素に関する詳細な定性分析は、分析用カーボンテープに試料を固定して（株）堀場製作所MESA-500型の蛍光Ｘ線分析装置を使用して実施した。設定条件は、分析時間は600秒、試料室内は真空、Ｘ線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240μＡおよび20μＡ、検出強度は200.0～250.0cpsである。

４ 個々の顔料粒子の形態観察

個々の赤色粘土試料の粒子形態に関する詳細な画像観察は、(株) 日立製作所製S-3500N型走査電子顕微鏡を用いた5,000倍と50,000倍の高倍率で行なった。試料は、先のカーボン台に取り付けた試料のうち実体顕微鏡および金属顕微鏡観察で赤い色相の物質の集積が良好であり、かつ電子顕微鏡に附設したEPMA分析装置で鉄（Fe）がマッピング検出された箇所を中心に画像観察した。

５ 鉱物結晶相（化合物）の同定

周辺土壌の汚染が少なく分析量の確保が可能であった本試料について、結晶鉱物相（化合物）材料の同定を行った。分析は（株）リガク製RINT-2500型Ｘ線回析分析装置と定性ソフトウェア（JADE-6）を使用して行った。測定条件は以下のとおりである。対陰極はCu-Kα、Ｘ線管電圧は50kV、Ｘ線管電流は30mA、検出器はシンチレーションカウンタ、走査速度は１度/１分、走査範囲は５-90度、散乱スリットは１deg.で受光スリットは0.15㎜、モノクロメーターは使用である。

（４）調査結果

烏丸綾小路遺跡の鎌倉時代後半の土坑跡から検出された赤色粘土塊である本試料は、やや黄味が強いレンガ色の赤い肌理が細かい粘土の小塊片とそれよりはやや粗いですが赤味が強い土、さらにはすべてが赤い粘土の塊ではなく、ところどころに灰色（グレー）の肌理の細かい粘土が混在した状態で目視観察された（図70・71）。このことから、これが製品としての均一な赤い顔料塊ではなく、何らかの黄味が強い粘土塊を含む粘土であると考えられる。この試料について各種の分析調査を行なった結果、次のような基礎的データの蓄積を得た。

まず本試料の赤い色相は、やや黄味もしくは茶褐色が強い赤色系（2.5YR5/8：明赤褐:bright reddish brown～2.5YR6/8：橙:orange）の赤い色相を呈しており、拡大観察すると鮮紅色を呈する部分と橙色もしくはオレンジ色系を呈する部分が混在した状態で観察された（図72・73）。各試料の無機元素を分析した結果、鉄（Fe）元素の特性Ｘ線ピークが強く検出され、それ以外には夾雑物質と考えられるシリカ（Si）、チタン（Ti）、カルシウム（Ca）、カリウム（K）、マンガン（Mn）などのピークは検出された。その一方で、その他の赤い色相を有する物質の元素である水銀（Hg）や鉛（Pb）のピークは検出されなかった（図76）。そのためこの試料の赤い色相の主成分物質は、水銀系の朱（天然辰砂もしくは人造の水銀朱＝赤色硫化水銀：HgS）や鉛系の鉛丹（四酸化三鉛；Pb_3O_4）ではなく、酸化鉄系の赤い色相を呈するベンガラ（酸化第二鉄：Fe_2O_3が主成分）であると理解した。次に本試料の粒子構造を詳細に把握するために電子顕微鏡による高倍率の画像観察を実施した。その結果、0.数μｍ程度の六角板状型の微粒子を若干含むものの、基本的には極めて不定形を呈する集合体であった（図74・75）。その一方で中空円筒のパイプ状もしくはチューブ状、さらには0.1μｍ程度の球状微粒子の均一なベンガラ粒子の集合体は見いだされなかった。

さらに鉱物結晶相を同定するためのＸ線回折分析を実施した結果、非晶質物質を多く含むためかややブロードなピークを示すものの、主成分である石英（Quartz：SiO_2）、カオリナイト（Kaolinite：$Al_2Si_2O_5(OH)_4$）、白雲母（Muscovite：$KAl_2Si_3AlO_{10}(OH)_2$）、曹長石（Orthoclase：

図70　本試料の検出状況①

図71　本試料の検出状況②

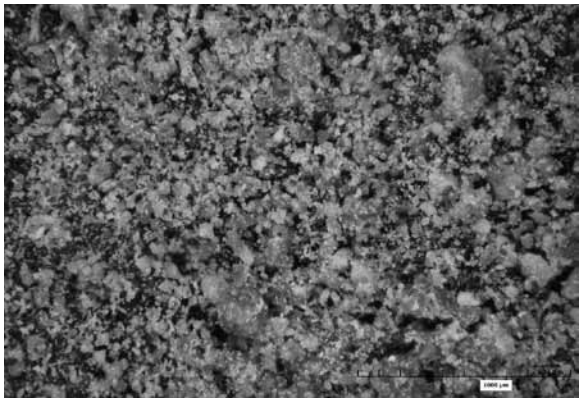


図72　本試料の拡大写真①

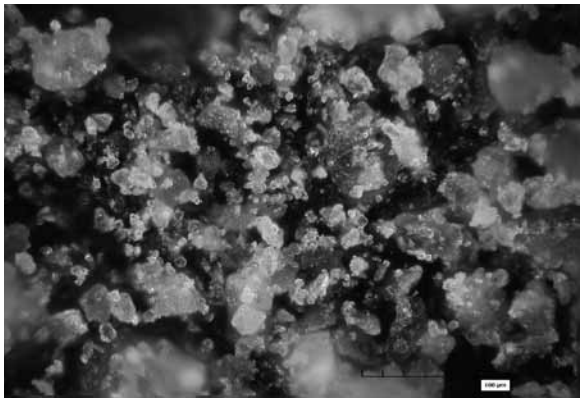


図73　本試料の拡大写真②

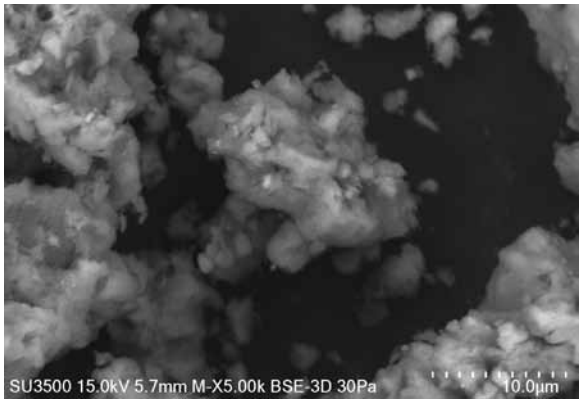


図74　本試料の電子顕微鏡写真①

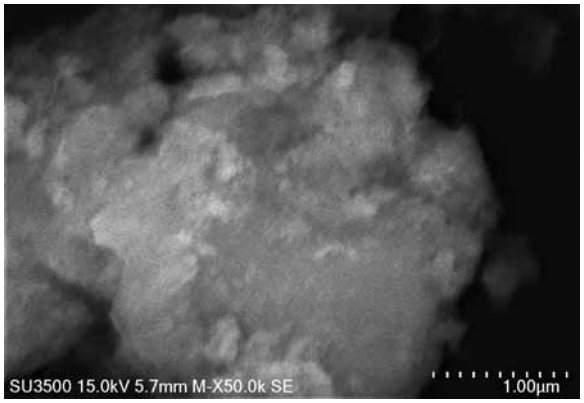


図75　本試料の電子顕微鏡写真②

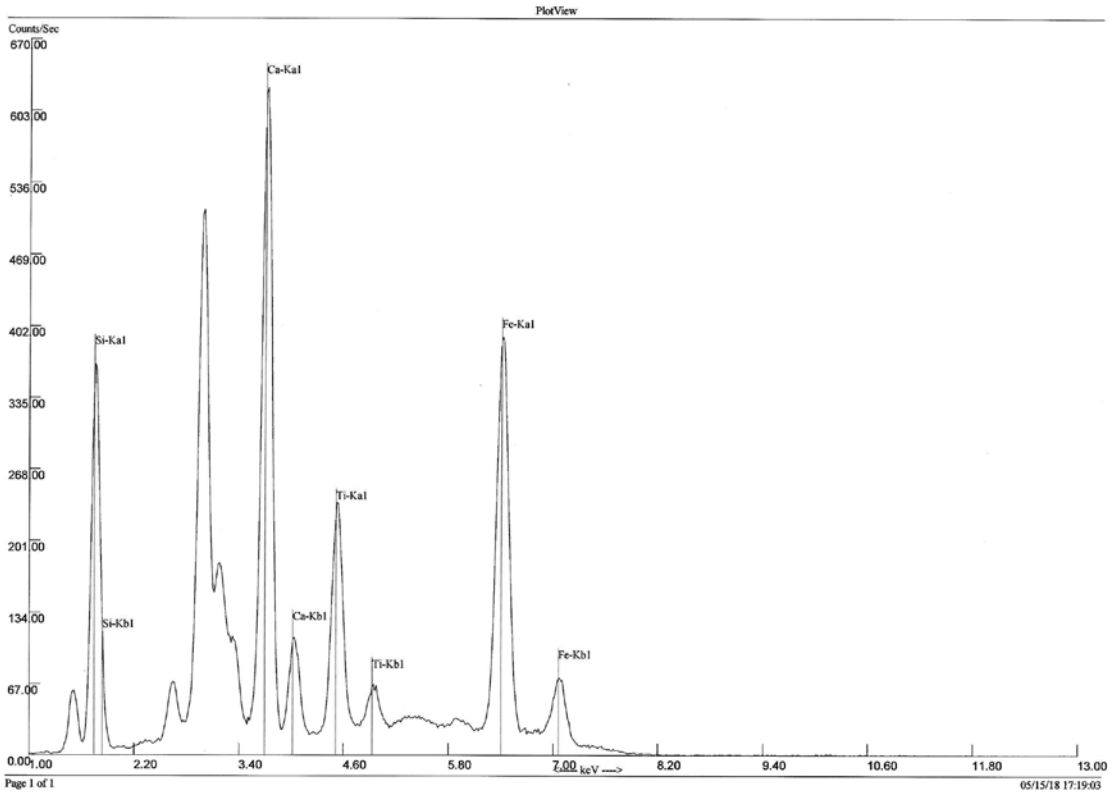


図76　本試料の蛍光X線分析結果

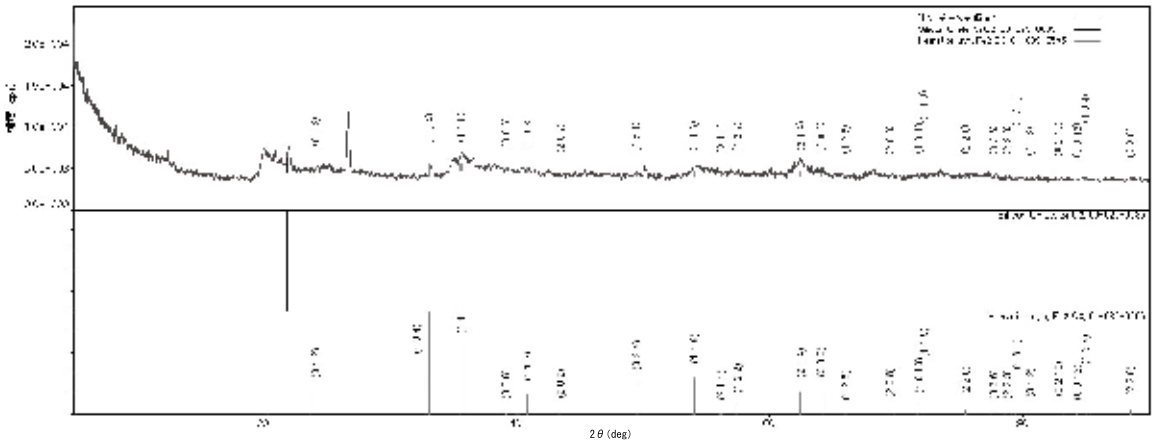


図77　本試料のX線回析分析結果

$KAlSi_3O_8$）などの夾雑物質などとともに、酸化第二鉄の鉱物結晶相であるヘマタイト（α-Fe_2O_3：Hematite）の主ピークである（$2\theta = 33°$）の幅は高角側に比較して幅広で緩慢（ブロード）であった（図77）。これは純度が高いヘマタイト（α-Fe_2O_3：Hematite）を主要鉱物結晶相とする赤鉄鉱鉱物を原材料とした赤土ベンガラとは異なる特徴である。

（5）考察

分析調査の結果、本試料は広義の酸化鉄系の赤色顔料であるベンガラとの関連性が高い赤い粘土塊片であることがわかった。ベンガラは、人類が最も早くから使用してきた色材の一つである。報告者らの基礎研究によると、同じ酸化鉄系のベンガラ（主成分は酸化第二鉄：α-Fe_2O_3）顔料であっても、原材料や製法によって少なくとも７種類に分類される。この見分け方は、X線回折分析による鉱物結晶物の生成状態や、電子顕微鏡による個々の顔料粒子の形態観察を総合して判断可能である。この点を考慮に入れて本試料を検証した結果、本試料の赤い粘土塊は、基本的には文献史料が赤土ベンガラの原材料であるとする赤い粘土物質であり、これに若干の丹土ベンガラの原材料でもある鉄分の強い黄土が混入している天然由来の粘土物質であると理解した。文献史料によると天然物質である赤鉄鉱鉱物や単に赤味が強く粒子が細かい赤い粘土物質は、いずれも赤土ベンガラの原材料である。しかし、これらをそのままベンガラ顔料として使用することはなく、必ず加熱→粉砕→水簸作業を行って初めて赤い色相や科学的にも安定した均質の赤色顔料の製品となる。そのため本試料は、あくまでも製品としてのベンガラ顔料ではなく、ベンガラ顔料を作成するための原材料である天然由来の赤い粘土物質であろう。すなわちこれらは、室町期の本遺跡周辺に存在したと考えられるベンガラ顔料を必要とした染色工房もしくはベンガラ生産工房に約20Kgを一単位とした粘土塊で搬入され、加熱→水簸して赤い粘土を基調としたベンガラ顔料を作成する前に土中に埋没した赤土ベンガラの原材料であると理解した。ただし、この赤色粘土塊がどこで調達されたかについては天然赤鉄鉱を原材料とした赤土ベンガラとは異なり先行研究が全くないため、現状では不明である。

さて、これまで江戸時代には津軽藩により赤根沢の天然赤鉄鉱を原材料として生産された赤土ベンガラ、近世～近代期に大規模工房で生産が行われていた人造のローハベンガラや鉄丹ベンガラ、さらに民俗事例としての若狭の丹土ベンガラの生産については、ある程度の生産過程が理解される遺構や遺物、民俗資料や文献史料が存在する。しかし天然由来の赤い粘土を原材料とする赤土ベンガラの存在は、近世の琉球王朝における「久米赤土」や「久慈赤土」の存在は首里城造営に伴う赤土粘土の原材料調達地を冠した顔料名称からその一端が知られるものの、生産実態は不明であった。今回初めて中世・室町期の京都市中で、その生産の基本となる原材料の一単位の存在を示す出土資料が見出されたことは、ベンガラ研究のみならず中世の日本における「ものづくり」の一端を知るうえで大変有意義な発見であり、この点が本試料の重要な意味合いであるといえよう。

参考文献

北野信彦,2013,ベンガラ塗装史の研究.雄山閣,352p.

朽津信明,2006,古代地方寺院の外観塗装の色について.保存科学 第45号.東京文化財研究所.

西山 巖,1977,べんがら.改訂増補　最新顔料便覧.日本顔料技術協会編.誠文堂新光社,448-451.

山崎一雄,1987,古文化財の科学.思文閣出版.

吉木文平,1959,3 酸化鉄（Fe_2O_3,FeO）.鉱物工学.技報,196-216.

付章６　出土した動物遺存体

丸山真史（東海大学海洋学部）

（１）概要

京都市街地の既存の発掘調査では、平安時代と江戸時代の動物遺存体が数多く出土した。それに対して、今回の調査では弥生時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、安土桃山時代、江戸時代と各時代の動物遺存体が出土しており、これまでに資料が少なかった中世の動物遺存体が注目される。

出土した動物遺存体は、調査中に肉眼で確認できた資料のみであり、篩を使用した水洗選別は行っていない。同定対象とした資料は破片数にして199点であり、そのうち種類、部位などを同定した資料が160点を数える。その内訳は、魚類が最も多く68点、ついで貝類が50点、哺乳類36点、鳥類６点が続く（表20・21）。少量であるが、魚骨には解体あるいは調理痕跡が見られるものが含まれる。なお、今回の魚骨の同定および集計は、東海大学海洋学部生の山下海王子の協力を得た。

表20　動物遺存体種名表

軟体動物門　Mollusca
腹足綱　Gastropoda
古腹足目　Vetigastropoda
ミミガイ科　Hiliotidae
ミミガイ科の一種　Haliotidae gen. et sp. indet.
サザエ科　Turbnidae
サザエ　*Turbo cornutus*
新腹足目　Neogastropoda
アッキガイ科　Muricidae
アカニシ　*Rapana venosa*
斧足綱　Bivalvia
フネガイ目　Arcoida
フネガイ科　Arcidae
アカガイ　*Scpharaca broughtonii*
マルスダレガイ目　Veneroida
シジミ科　Corbiculidae
セタシジミ　*Corbicula sandai*
脊椎動物門　Vertebrata
硬骨魚綱　Osteichthyes
ウナギ目　Anguilliformes
ハモ科　Muraenesocidae
ハモ属の一種　*Muraenesox* sp.
コイ目　Cyprinida
コイ科　Cyprinidae
フナ属の一種　*Carussius* sp.
ボラ目　Mugiliformes
ボラ科　Mugilidae
ボラ科の一種　Mugilidae gen. et sp. indet.
スズキ目　Percidae
タイ科　Sparidae
クロダイ属の一種　*Acanthopagrus* sp.
マダイ　*Pagrus major*
タイ科の一種　Sparidae gen. et sp. indet.
イシダイ科　Oplegnathidae
イシダイ属の一種　*Oplegnaths* sp.
サバ科　Scombridae
マグロ属の一種　*Thunnus* sp.
鳥綱　Aves
コウノトリ目　Ciconiformes
サギ科　Ardidae
サギ科の一種　Ardeidae gen. et sp. indet.
キジ目　Galliformes
キジ科　Phasianidae
ニワトリ　*Gullus domesticus*
キジ科の一種　Phasianidae gen. et sp. indet.
哺乳綱　Mammalia
食肉目　Carnivora
イヌ科　Canidae
イヌ　*Canis familiaris*
ネコ科　Felidae
ネコ　*Felis catus*
奇蹄目　Perissodactyla
ウマ科　Equidae
ウマ　Equus caballus
偶蹄目　Artiodactyla
イノシシ科　Suidae
イノシシ　Sus scrofa
シカ科　Cervidae
ニホンジカ　Cervus nippon
ウサギ目　Ragomorpha
ウサギ科　Lepoidae
ノウサギ　Lepus brachyurus
齧歯目　Rodentia
ネズミ科　Muridae
ネズミ科の一種　Muridae gen. et sp. indet.

表21　動物遺存体集計表

時期	遺構	分類		部位	左	右	−	計
江戸	溝2094	魚	マダイ	前頭骨			1	1
		鳥	キジ科	脛足根骨	1			1
	溝2858	貝	アワビ類	殻質			1	1
			サザエ	殻質			1	1
			アカガイ	殻質	3	4		7
			セタシジミ	殻質	4	5		9
			ハマグリ	殻質	2	3		5
		魚	マダイ	歯骨	1			1
	井戸21	哺	ネコ	脛骨		1		1
	土坑100	貝	アカニシ	殻質			4	4
	土坑2075	魚	マグロ属	前上顎骨	1			1
	土坑2125	貝	ハマグリ	殻質		1		1
	土坑2201	貝	アカニシ	殻質			1	1
			フネガイ科	殻質			1	1
		魚	タイ科	椎骨			1	1
	土坑2241	貝	アワビ類	殻質			1	1
		魚	タイ科	主鰓蓋骨	1		1	4
				擬鎖骨	1		1	
			ボラ科	前鰓蓋骨		1		4
				主鰓蓋骨	1	1		
				下鰓蓋骨	1			
			マダイ	前頭骨			1	9
				上後頭骨			1	
				椎骨			2	
				前上顎骨	1			
				歯骨		2		
				後側頭骨	1			
				下鰓蓋骨	1			
			不明	鱗			1	1
	土坑2568	貝	アカニシ	殻質			2	2
	柱穴2398	貝	アカニシ	殻質			1	1
		魚	マダイ	舌顎骨	1			1
	建物2284 (柱穴2173)	鳥	キジ科	上腕骨	1			1
	建物2284 (柱穴2242)	鳥	キジ科？	仙骨			1	1
安土桃山	土坑379	哺	イノシシ	脛骨			1	1
	土坑群B (土坑2506)	貝	アカニシ	殻質			1	1
		哺	ウマ/ウシ	四肢骨			1	1
			不明	四肢骨			1	1
	土坑群B (土坑2512)	哺	ウマ/ウシ	上腕骨	1			1
			不明	四肢骨			1	1
	土坑群B (土坑2525)	貝	フネガイ科	殻質			1	1
		魚	マダイ	前頭骨			1	9
				主上顎骨	1			
				前鰓蓋骨	2			
				口蓋骨	1			
				歯骨	1			
				角骨	1			
				方骨	1			
				間鰓蓋骨	1			
	土坑群B (土坑2526)	貝	アカニシ	殻質			1	2
			ハマグリ	殻質	1			
		魚	マダイ	上後頭骨			1	4
				前頭骨			1	
				歯骨		1		
				上擬鎖骨	1			
	土坑群B (土坑2527)	貝	アカニシ	破片			1	1
		魚	マダイ	主上顎骨	1			4
				前上顎骨	1			
				口蓋骨	1			
				歯骨	1			
	土坑群B (土坑2529)	魚	不明	椎骨			1	1
	土坑群C (土坑2731)	哺	イノシシ/シカ？	四肢骨			1	1
	土坑群C (土坑2567)	貝	アカニシ	殻質			1	1
	土坑群D (土坑283)	哺	ウマ	遊離歯		1		1
	土坑群D (土坑2551)	哺	ウマ	遊離歯		1		1
	土坑群E (土坑316)	哺	シカ	肩甲骨	1			1
	土坑群E (土坑589)	哺	不明	不明			1	1

時期	遺構		分類	部位	左	右	−	計
室町前半	土坑2546	哺	ネズミ科	上腕骨		1		1
	土坑2841	魚	不明	鰭棘			1	1
鎌倉後半 ～室町	整地層	貝	アワビ類？	殻質			1	1
			アカニシ	殻質			1	1
		魚	不明	鰭棘			3	3
		哺	ウマ	遊離歯		1		1
			ノウサギ	上腕骨		1		1
鎌倉後半	土坑2576	哺？	不明	不明			1	1
	土坑2669	鳥	サギ科	足根中足骨		1		1
	土坑2811	貝	アカニシ	殻質			7	7
		魚	ハモ属	歯骨	2	1		3
			クロダイ属	前上顎骨	1			1
			マダイ	前頭骨			3	23
				翼耳骨付近		1		
				上後頭骨			3	
				椎骨			4	
				主上顎骨	1	4		
				前上顎骨	2			
				口蓋骨	1			
				角骨		1		
				前鰓蓋骨	1			
				間鰓蓋骨		1		
				擬鎖骨		1		
			不明	準下尾骨			1	3
				鰭棘			2	
		鳥	キジ科	手根中手骨	1			2
				脛足根骨		1		
			ニワトリ	上腕骨	1			1
		鳥/哺	不明	不明			3	3
		哺	ノウサギ	肩甲骨		1		17
				橈骨		1		
				寛骨		1		
				大腿骨	1			
				脛骨	3	2		
				中足骨			8	
			ノウサギ？	上腕骨	1			2
				上腕骨？			1	
			不明	寛骨	1			4
				大腿骨			1	
				脛骨？			1	
				不明			1	
	土坑2892	魚	イシダイ科	前上顎骨		1		1
			マダイ	前頭骨			1	2
				前鰓蓋骨		1		
			不明	鰭棘			1	1
		哺	ウマ/ウシ	上腕骨	1			1
			イノシシ/ブタ	中足骨	1			1
			シカ	下顎骨			1	1
			不明	四肢骨			1	1
	柱穴332	哺	シカ	脛骨	1			1
鎌倉前半	土坑381	哺	ウマ	遊離歯			1	1
平安後期	整地層	魚	不明	鰭棘			1	1
		哺	ウマ	遊離歯	1			1
			シカ	尺骨		1		3
				上腕骨		1		
				橈骨		1		
	溝3441	哺	ウマ	遊離歯	1			1
			ウマ/ウシ	遊離歯			1	1
平安中期	井戸3191	魚	フナ属	前鰓蓋骨		1		1
	溝982	哺	ウマ	遊離歯			1	1
弥生中期	竪穴建物2222	哺	不明	不明			1	1
	竪穴建物3581	哺	不明	不明			1	2
		哺？	不明	不明			1	
	土坑3549	哺	不明	不明			1	1
	土坑3588	哺	不明	不明			1	1
不明	−	哺	イヌ	橈骨	1			1

（２）種類別の特徴

ａ）貝類

アワビ類　溝2858、土坑2241から１点ずつ、計２点が出土した。また、第２面からアワビ類と思われる破片１点が出土した。

サザエ　溝2858から１点出土した。

アカニシ　貝類で最も多く出土した。土坑100から４点、柱穴2398から１点、土坑2201から１点、土坑2568から２点、土坑2811から７点、土坑群Ｂ（土坑2506、2526、2527各１点）から３点、土坑群Ｃ（土坑2567）から１点、第２面から１点、計20点が出土した。

アカガイ　溝2585から８点（左３右４不明１）が出土した。

フネガイ科　アカガイやサルボウガイなどが含まれる。土坑2201、土坑群Ｂ（土坑2525）から１点ずつ、計２点が出土した。

セタシジミ　溝2585から10点（左４右５不明１）が出土した。

ハマグリ　溝2585から５点、土坑2125と土坑群Ｂ（土坑2526）から１点ずつ、計７点が出土した。

ｂ）魚類

ハモ属　土坑2811から歯骨（左２右１）３点が出土した。右と左の１点は体長60㎝以下、他の左の１点は体長70㎝以上と推定される。

フナ属　井戸3191から前鰓蓋骨（右）１点が出土しており、大きさは体長20～30㎝と推定される。

ボラ科　土坑2241から主鰓蓋骨（左１右１）２点、前鰓蓋骨（右）、下鰓蓋骨（左）が１点ずつ、計４点が出土した。大きさはいずれも体長40～50㎝と推定される。主鰓蓋骨はいずれも切断されている。

クロダイ属　土坑2811から前上顎骨（左）１点が出土しており、全長36.5㎜を測る。体長40～50㎝と推定される。

マダイ　魚類で最も多く出土した種類であり、総計54点を数える。柱穴2398から舌顎骨（左）が１点出土した。溝2094から前頭骨が１点、溝2858から歯骨（左）が１点、出土した。土坑2241から椎骨と歯骨（右）が２点ずつ、前頭骨が１点など、計９点が出土しており、いずれも体長40㎝以上の大型個体である。前頭骨は正中方向に切断され、出土したのは右側の１／３である。また、前上顎骨は右側に水平方向の切断痕、垂直方向の刃物を叩きつけた痕跡がみられる。土坑2811から主上顎骨（左１右４）５点、椎骨４点、上後頭骨と前頭骨３点ずつ、計23点が出土した。大きさはいずれも体長30㎝以上であり、40㎝から50㎝と推定されるものが多い。椎骨１点は神経棘が切断、もう１点は被熱して黒色を呈し切断痕もみられる。上後頭骨１点は左側に垂直方向に刃物を叩きつけた痕跡がみられる。土坑2892から前頭骨と前鰓蓋骨（右）が１点ずつ、計２点が出土した。前頭

1 イシダイ属(前上顎骨)　2 クロダイ属(前上顎骨)　3～6 マダイ(上後頭骨、主上顎骨、前上顎骨、歯骨、角骨)
8・9 ハモ属(歯骨)　10 ニワトリ(上腕骨)　11 キジ科(脛足根骨)　12・13 ノウサギ(肩甲骨、脛骨)

図78　出土動物遺存体

骨は正中報告に切断され、2分割された可能性のあるものが出土した。土坑群Bの土坑2525から前鰓蓋骨（左）2点、前頭骨、主上顎骨（左）などが1点ずつ、計9点が、土坑2526から前頭骨、上後頭骨、歯骨（右）、上擬鎖骨（左）が1点ずつ、計4点が、土坑2527から主上顎骨（左）、前上顎骨（左）、口蓋骨（左）、歯骨（左）が1点ずつ、計4点が出土した。大きさは、体長30～60cmにおさまり、体長40～50cmが大部分を占める。

タイ科　土坑2201から椎骨1点が出土した。土坑2241から主鰓蓋骨（左）、擬鎖骨（左）が1点ずつ、計2点が出土しており、いずれも体長20cm以上と推定される。

イシダイ属　土坑2892から前上顎骨（右）1点が出土しており、大きさは体長30cm以上の大型個体と推定される。

マグロ属　土坑2075から前上顎骨（左）が1点出土しており、大きさは体長60～70cmと推定される。

ｃ）鳥類

サギ科　土坑2669から足根中足骨（右）が１点出土した。近位端最大幅（Bp）13.2㎜を測る。

ニワトリ　土坑2811から上腕骨（左）が１点出土した。

キジ科　溝2094から脛足根骨（左）が１点出土しており、大きさからニワトリの可能性がある。柱穴2173（建物2009）から上腕骨（左）１点が出土しており、近位端最大幅（Bp）19.1㎜を測る。土坑2811から手根中手骨（左）と脛足根骨（右）が１点ずつ、計２点が出土しており、脛足根骨の遠位端最大幅（Bd）10.0㎜を測る。また、柱穴2242（建物2284）からキジ科と思われる仙骨が１点出土した。

ｄ）哺乳類

イヌ　出土地点不明の橈骨（左）が１点出土した。最大長（GL）156.6㎜、近位端最大幅（Bp）18.0㎜、遠位端最大幅（Bd）23.6㎜を測る。

ネコ　井戸21から脛骨（右）が１点出土した。最大長（GL）109.7㎜、近位端最大幅（Bp）19.7㎜、遠位端最大幅（Bd）14.3㎜を測る。

ウマ　土坑群Ｄの土坑283から上顎M3（右）、同群土坑2551から上顎臼歯（右）が１点ずつ出土した。M3の歯冠高は51㎜以上である。土坑381から臼歯（上下左右不明）が１点出土した。溝982から、上顎臼歯（左右不明）が１点出土した。溝3441から、上顎臼歯（左）が１点出土した。鎌倉時代後半から室町時代の整地層（図版２-71層）から上顎M2と思われる臼歯（右）が１点出土しており、歯冠高は47㎜以上である。平安時代後期の整地層（図版２-106～109層）から、上顎M3（左）が１点出土しており、歯冠高62.2㎜を測る。

イノシシ/ブタ　土坑379から脛骨（左右不明）が１点出土しており、遠位端最大幅（Bd）29.9㎜を測る。土坑2892から第３中足骨（左）が１点出土しており、最大長90.1㎜を測る。

シカ　土坑群Ｅの土坑316から肩甲骨（左）、柱穴332から脛骨（左）、土坑2892から下顎骨（左右不明）が１点ずつ出土した。また、第３面から上腕骨、橈骨、尺骨が１点ずつ出土しており、これらは同一個体である。

ネズミ科　土坑2546から上腕骨（右）１点が出土した。

（３）京都における中世の動物利用

京都市街地の発掘調査では、冒頭で述べたように中世の動物遺存体の出土例は少なく、当該期の動物利用について詳細は不明である。今回の発掘調査において、鎌倉時代から安土桃山時代の比較的まとまった量の動物遺存体が出土したことにより、中世京都における動物利用の一端が垣間見ることができる。

貝類は、鎌倉時代と室町時代ではアカニシのみであり、安土桃山時代になってアカニシ、フネガイ科、ハマグリと種類が追加される。全国的に中世遺跡から貝類遺存体が出土しており、そのなかでも都市・城館遺跡ではアワビ、サザエ、アカニシといった大型巻貝の出土が特徴的である（樋泉

2001)。当地において鎌倉・室町時代にアカニシ以外の貝種が利用されなかったとは考えにくいが、沿岸部の遺跡と同様にアカニシの利用が盛んであったと考えられる。

魚類は、鎌倉時代後半にハモ属、クロダイ属、マダイ、イシダイ属、安土桃山時代はマダイのみが出土した。これまで平安京左京四条二坊十二町跡の12世紀後半の土壙でスズキやブリ属が[註]、平安京左京四条三坊八町跡の13世紀後半の地下室からマダイ、ハモ属、ハタ科、スズキ、サバ属（丸山2013)、平安京左京三条二坊十町跡の14世紀中頃の土壙でアユ、コイ、サケ属、ボラ科、アジ科、タイ科、ベラ科が（丸山・松井2008)、平安京左京五条三坊九町跡でコイとマダイが出土した（丸山2008)。今回、中世遺構からの新出魚種として、クロダイ属とイシダイ属があげられる。これまで京都の近世遺跡では、マダイ、キダイ、チダイといった赤い鯛ばかりの出土であり、クロダイ属の出土をみなかった。西日本では、中世以降にクロダイよりマダイが好まれる傾向があり（久保1999)、近世の京都はその傾向が顕著であることから、京都の人々の海産物に対する嗜好の一つとみられる（丸山2013)。当遺跡での出土によって鎌倉時代後半にクロダイが消費されたことが明らかになり、赤い鯛への強い選択性は近世になって顕著になると考えることができる。イシダイ属は岩礁性の魚であり、近畿地方の各時代の遺跡で出土頻度は低く、これまでの京都での出土はなく、大阪の佐賀藩蔵屋敷跡の１例があるにすぎない（丸山2012)。鎌倉時代後半の土坑2892から、正中で２分割されたと思われるマダイの前頭骨が出土した。また、鎌倉時代後半の土坑2811から出土したマダイの第１腹椎は斜方向に切断されており、頭部とともに正中で切断した痕跡かもしれない。これらのことから、中世に「兜割」と同様の調理法があったことを想定できる。

鳥類では、室町時代前期にニワトリ、キジ科が出土した。中世の京都では、ニワトリが身近な鳥であったと想定されるが、本例をもって食用としていたかどうか判然としない。哺乳類は鎌倉・室町時代にウマ、イノシシ/ブタ、シカ、ノウサギが出土した。イノシシ/ブタ、シカ、ノウサギは食用と考えて差し支えないが、ウマは京内で役畜としての利用が第一であったと考えられ、食用となったかどうかは不明である。京都の近世遺跡からノウサギの出土量は少ないが、当調査では比較的多いことが特徴的である。15世紀に成立した『尺素往来』には「兎」が美物にあげられ（塙1928)、中世の獣肉食の代表格であったと考えられる。

（４）まとめ

当調査における動物遺存体の出土は、中世京都の食生活を明らかにする重要な資料として意義深いものである。特に、鎌倉時代後半から、海水魚の利用も盛んになっていることを示唆しており、食生活史研究においても大きな成果といえる。また、獣肉食ではノウサギが多いことも判明し、今後は近世の動物遺存体との比較を通じて、中世の特徴を明らかにすることが課題となるであろう。しかしながら、当調査では、発掘調査中に肉眼で確認した動物遺存体だけを取りあげているため、微細な遺存体を見逃している可能性がある。中世の食生活を明らかにするためには、今後の調査では土壌の水洗選別を行い、微細骨も採集する必要がある。

註）平安京左京四条二坊十二町の魚類遺存体は筆者実見。

参考文献

久保和士1999「近世大坂における水産物の流通と消費」『動物と人間の考古学』真陽社pp.137-179

樋泉岳二2001「食物」『日本の中世遺跡』小野正敏編　東京大学出版会pp.162-163

塙保己一編1928「尺素往来」『群書類従』第九輯　続群書類従完成会pp.503-520

丸山真史2008「出土した動物遺存体」『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-10　財団法人京都市埋蔵文化財研究所pp.78-79

丸山真史2012「脊椎動物遺存体」『佐賀藩蔵屋敷跡』財団法人大阪文化財研究所pp.136-148

丸山真史2013「出土した動物遺存体」『平安京左京四条三坊八町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-2　財団法人京都市埋蔵文化財研究所pp.63-65

丸山真史2013「近世、京都の魚食文化の特徴」『動物考古学』第30号　動物考古学研究会pp.121-135

丸山真史・松井章2008「動物遺存体について」『平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-17　財団法人京都市埋蔵文化財研究所pp.146-155

付章７　元醒泉小学校１次調査（昭和59年度）の成果

中谷正和

（１）はじめに

本章では、今回の調査地がある平安京左京六条二坊九町で昭和59年度に実施された発掘調査の成果（以下、１次調査とする）を紹介する。１次調査の内容については、既に上村ほか（1987）で調査区で特徴的な遺構や遺物について概要が示されているため、ここでは２次調査の成果と関連する遺構と遺物の未公表データを掲載した。１次調査の調査・整理状況や遺構・遺物の評価については、調査担当者の上村和直氏より御教示をいただいた。

なお、遺構番号は既出の遺構は報告書に使用された番号を準用し、新出遺構は調査時に割り当てられた遺構番号を使用した。

（２）調査経過

元醒泉小学校の屋内体育場増改築工事に伴い、1984年９月から11月に実施した。調査区は南北約10ｍ、東西約15ｍの長方形に設定した。調査面積は約150㎡である。調査した遺構面数は３面４時期である（第１面：鎌倉時代以降、第２面：平安時代後期から鎌倉時代、第３面：平安時代前期から中期・弥生時代）。

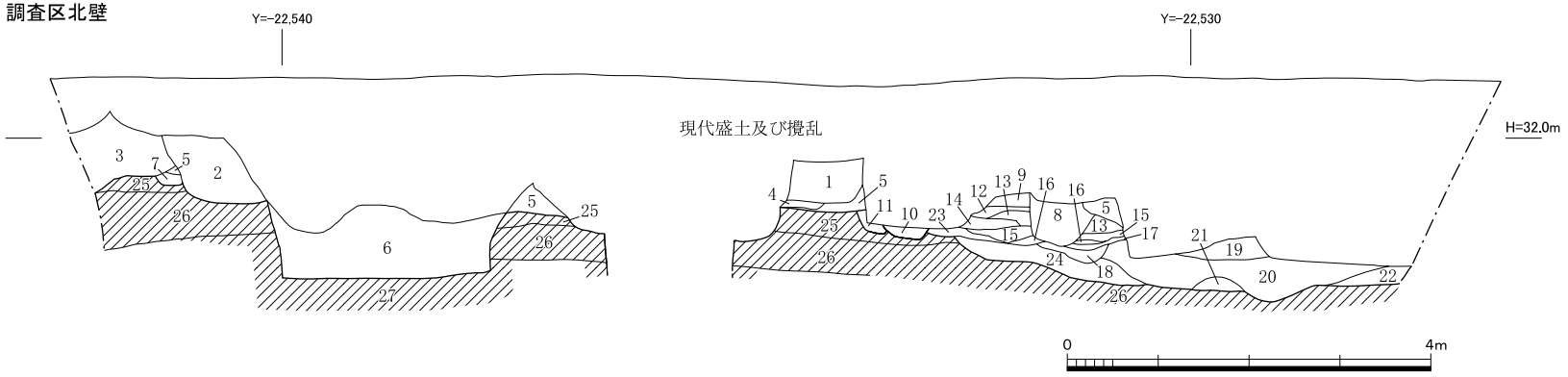
（３）遺　構

１）層序

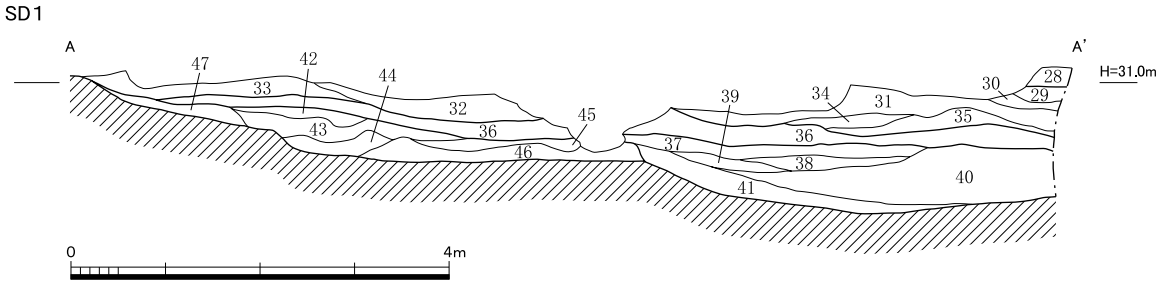
調査区全体に約0.6～2.0ｍの厚さで明治時代から現代までの盛土や遺構がある（図79）。盛土の下層には、江戸時代後半の焼けた瓦を処理した土坑（１層）や、鎌倉時代以降の遺構・整地層（２～５層）などが堆積する。この下層に平安時代の整地層である緑灰色砂泥層（９層）がある。層厚は約0.2ｍである。平安時代整地層の下には、弥生時代の流路（SD１）堆積層（12～24層）がある。基盤層は上部が茶色粘土層（25層）であり、以下、褐色砂泥層（26層）、暗灰色砂礫層（27層）となる。調査区北壁では、基盤層は弥生時代の流路（SD１）西肩で標高31.2ｍであるのに対し、調査区西端では標高31.6ｍとなり、西に向かって標高が高くなっている。

２）遺構の概要

調査では、平安時代の整地層である緑灰色砂泥層（９層）上面と、基盤層である茶色粘土層（25層）上面で遺構検出を行った。弥生時代の遺構は流路がある。平安時代以降の遺構は、溝・土坑・柱穴・井戸などがある。第１面と第２面で検出した遺構は、鎌倉時代のものが主体を占める。



1 褐色 砂泥 瓦多量含む
2 暗褐色 砂泥
3 黒褐色 砂泥
4 茶灰色 砂泥
5 茶褐色 砂泥
6 黄褐色 砂泥 φ1～5㎝の礫多量含む
7 暗灰色 砂泥
8 暗灰色 砂泥 ── SD211
9 緑灰色 砂泥
10 暗灰色 砂泥
11 灰黄褐色 砂泥
12 褐色 泥砂
13 灰色 粗砂
14 灰色 砂
15 褐色 泥砂
16 黒褐色 粗砂
17 黒灰色 砂泥
18 黄灰色 砂泥
19 黒褐色 砂泥
20 褐色 砂泥
SD1(新)
21 灰色 砂ブロック
22 灰色 粘土
SD1(新)
23 茶褐色 泥砂
24 茶褐色 泥砂
SD1(古)
25 茶色 粘土
26 褐色 砂泥
27 暗灰色 砂礫
基盤層



28 黄褐色 砂泥
29 茶褐色 粗砂 礫含む
30 茶褐色 砂泥 灰色細砂が層状に混じる
31 淡灰色 砂泥
32 灰色 細砂～シルト
33 淡灰色 粗砂～泥砂
34 淡灰色 粗砂
SD1(新)
35 淡灰色 粗砂～細砂
36 黒褐色 シルト 弥生土器片を含む
37 灰色 粗砂～シルト
38 灰色 粗砂
39 暗灰色 粗砂～泥砂
40 黄灰色 粗砂 灰色シルトが層状に混じる
41 暗灰色 砂泥
SD1(新)
42 黒灰色 粗砂～細砂
43 黒灰色 シルト
44 黒灰色 砂泥～細砂
45 灰色 砂泥
46 灰色 泥砂
47 灰褐色 砂泥 炭含む
SD1(古)

図79 1次調査 調査区北壁・SD1断面図（1：80）

3）遺構

弥生時代（図80）

SD１　第３面で検出した弥生時代の流路である。２次調査の流路1132と同一の遺構である。西肩を検出したが、東肩は確認していない。地形の傾斜に従って、北東から南西方向に流れていたと考えられる。今回の再整理にあたり、流路内の堆積層の検討を行った結果、２次調査と同様にSD１でも新・古の別があることが明らかになった。

SD１（古）：図79の42～47層が該当する。溝の上部と東肩部はSD１（新）によって削平されている。幅約5.8ｍ、深さ約0.5ｍが残存している。堆積土は大きく黒褐色シルト～砂泥（42～44層）と灰色・灰褐色泥砂～砂泥（45～47層）に分かれる。

SD１（新）：図79の29～41層が該当する。幅10ｍ以上、深さ1.2～1.6ｍを測る。埋土は大きく４層に分かれる。最上層が褐色砂泥～粗砂層（29・30層）、上層が淡灰色粗砂層（31～35層）、中層が弥生土器片を含む黒褐色シルト層（36層）、下層がシルトが層状に混じる灰色を帯びた粗砂層（37～41層）である。最上層である茶褐色砂泥～粗砂層（29・30層）からは、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の土器片が出土した。上層から下層にかけては、弥生時代前期末から中期前半の土器や石器が出土した。

今回調査の流路1132との層位の対応は、各層の堆積物の特徴から、上層が流路1132（新）Ⅰ層、中層が流路1132（新）Ⅱ層、下層が流路1132（新）Ⅳ層に対応すると考えられる。一方、弥生時代

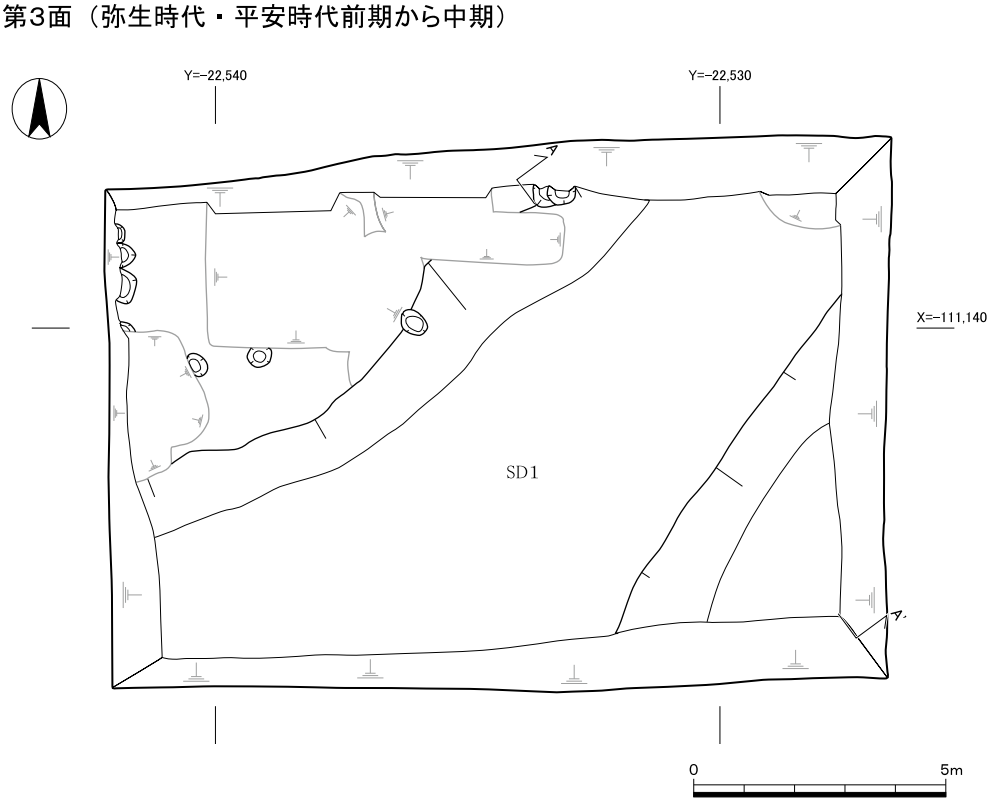
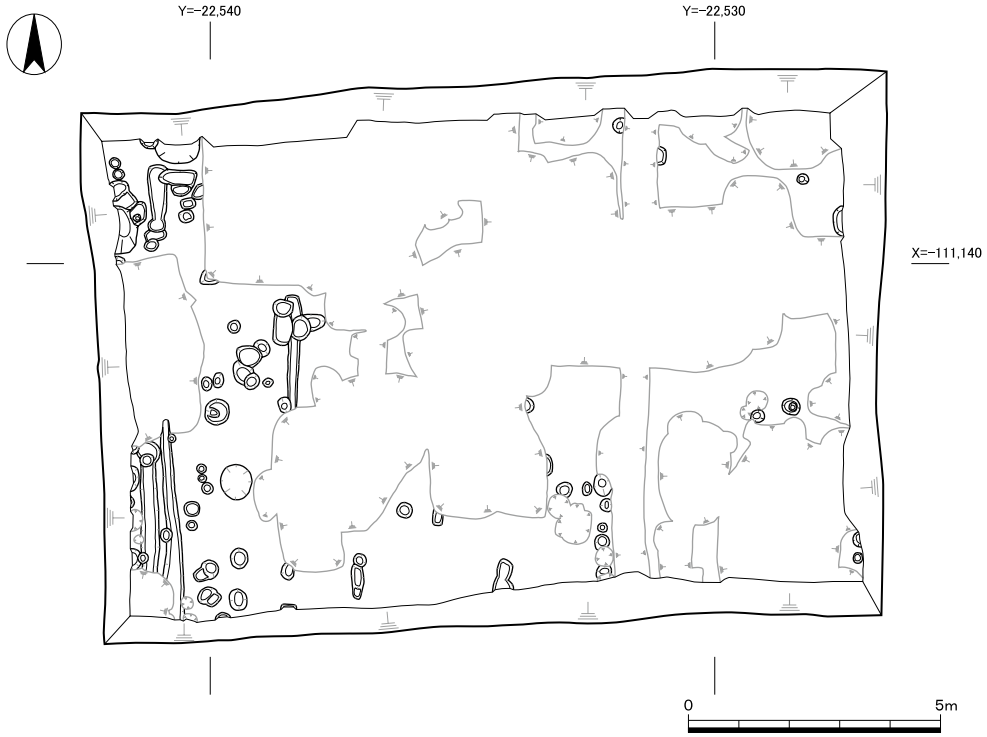


図80　１次調査　遺構平面図１（１：150）

第2面（平安時代後期から鎌倉時代）



第1面（鎌倉時代以降）

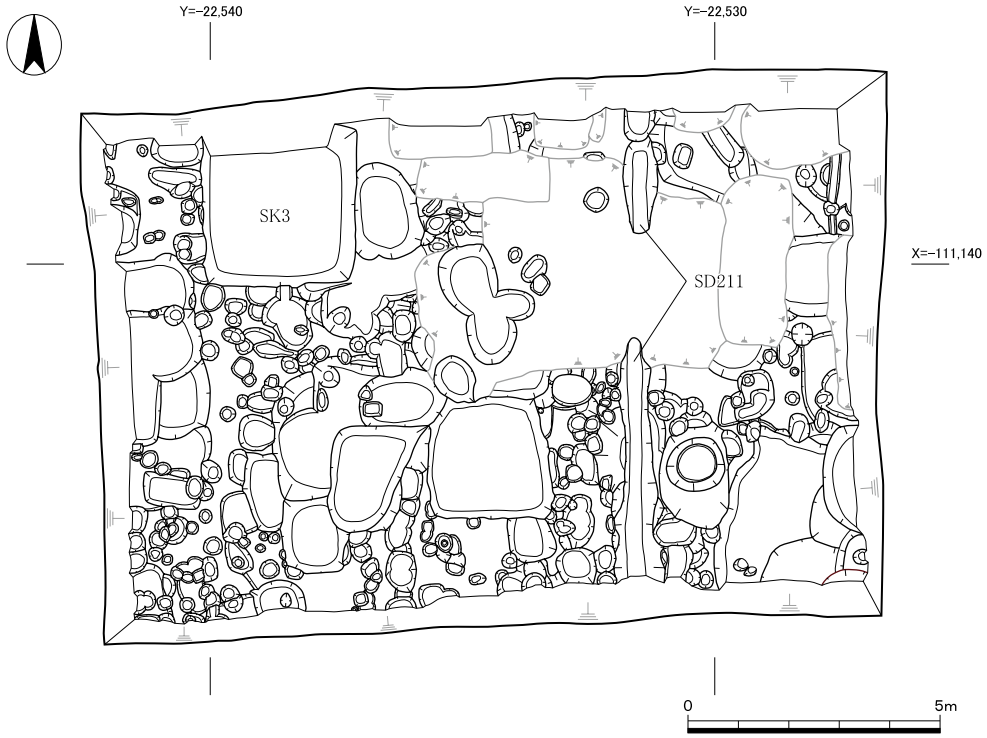


図81　1次調査　遺構平面図2（1：150）

後期末から古墳時代前期初頭の土器が出土した茶褐色砂泥～粗砂層に対応する堆積土は２次調査区内では確認していない。

鎌倉時代（図81）

SD211　第１面で検出した南北溝である。幅0.9ｍ、深さ0.6ｍを測る。埋土は暗灰色砂泥である。遺物は京都Ⅵ期の土器が出土した。

SK３　第１面で検出した土坑である。平面方形を呈する。南北３ｍ以上、東西3.0ｍ、深さ0.8ｍを測る。基盤層上層の茶色粘土を掘り抜き、暗灰色砂礫層まで掘削している。埋土は１～５㎝大の礫を多く含む暗黄褐色泥砂である。底部の標高は30.5ｍである。遺物は京都Ⅵ期の土器が出土した。

（４）遺　物

SD１出土土器（図82、付表１）　弥生時代前期末から中期中葉と、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけての土器がある。

弥生時代前期末から中期中葉の土器（756～762）　甕・鉢・内傾口縁土器・厚口鉢がある。

〔甕〕東部瀬戸内地方と琵琶湖岸域の甕がある。756は東部瀬戸内地方の甕Ａである。口縁部断面が逆Ｌ字状を呈するもので、端部は剥離している。器面調整は外面ハケで内面はナデである。757は琵琶湖岸域の甕である。口縁端部にヘラで刻目を加え、器面調整は櫛条痕を施す。

〔鉢〕鉢Ａがある。758は遠賀川系の鉢Ａである。甕形土器の製作工程から派生した形態を呈する。器面調整は内外面ナデ。759は琵琶湖岸域のものと考えられる鉢Ａである。器面調整は櫛条痕。

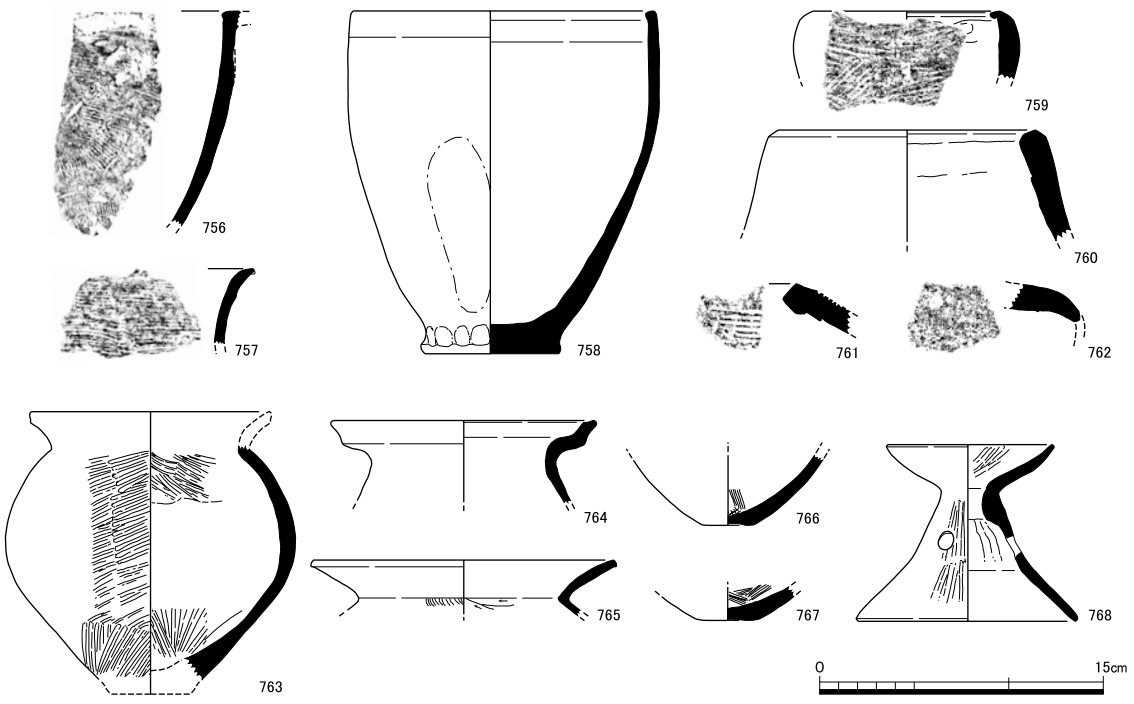


図82　１次調査　SD１出土土器実測図（１：４）

〔内傾口縁土器〕内傾口縁土器Ａ・Ｂがある。760は内傾口縁土器Ａである。体部から口縁部にかけての立ち上がりが強い。器面調整は内外面ナデ。内面に粘土紐接合痕を残す。761は内傾口縁土器Ｂである。器面調整は貝殻条痕。

〔厚口鉢〕762は厚口鉢の体部である。内面に粘土紐接合痕を残す。

弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の土器（763～768） 甕・器台がある。

〔甕〕Ｖ様式系・庄内形がある。また近江地方に系譜を持つものも出土している。763はＶ様式系の甕Ｃである。外面にタタキ、内面にハケとナデ調整を施す。764は近江系で受口状口縁甕である。口縁部内端面に平坦面を持つ。765は庄内形甕である。頸部内面直下までケズリ調整を施す。766・767は底部である。小さな平底を持つ。

〔器台〕768は受部がやや内湾するＶ様式系の小型器台である。中空で脚部に縦方向のミガキを施す。三方に透かしを有する。

参考文献

上村和直・久世康博「左京六条二坊」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1987年。

山本　亮「古墳出現期の山城地域における地域間関係の一断片 －乙訓地域の古式土師器と竪穴建物跡にみる地域性から－」『古墳出現期土器研究』第２号、古墳出現期土器検討会、2014年。

付表１　弥生時代の土器・土製品観察表

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
1	壷	口径　－ 体径　－ 底径　7.5	器高　(7.7) 底厚　1.8		外 不明 内 不明	外 10YR8/1～10YR6/1 内 10YR8/1	竪穴建物1055
2	壷	口径　－ 体径　－ 底径　－	器高　(3.3) 底厚　－	頸部に8条のヘラ描沈線文。	外 不明 内 不明	外 7.5YR8/3 内 7.5YR8/3	竪穴建物1055 遠賀川系
3	壷	口径　－ 体径　－ 底径　－	器高　(4.8) 底厚　－	頸部に8条のヘラ描沈線文。	外 不明 内 不明	外 7.5YR8/1 内 7.5YR8/1	竪穴建物1055 遠賀川系
4	甕A	口径　18.0 体径　－ 底径　－	器高　(6.1) 底厚　－	口縁端面ヘラによる刻目。 体部に細いヘラ描沈線文4条。	外 不明 内 不明	外 2.5Y8/1 内 2.5Y8/1	竪穴建物1055 遠賀川系
5	甕？	口径　－ 体径　－ 底径　12.0	器高　(5.6) 底厚　3.1		外 不明 内 不明	外 2.5Y8/1～2.5Y7/1 内 2.5Y7/1	竪穴建物1055
6	広口壷	口径　26.4 体径　－ 底径　－	器高　(5.7) 底厚　－	口縁端面1条のヘラ描沈線文。	外 不明 内 ミガキ？	外 7.5YR7/4 内 7.5YR7/4	竪穴建物1206
7	広口壷	口径　(16.2) 体径　－ 底径　－	器高　(3.6) 底厚　－	口縁端面1条ヘラ描沈線文を施し、上下押圧により波状口縁をなす。	外 ミガキ？ 内 ヨコハケ後ミガキ？	外 7.5YR5/3 内 2.5YR6/3～7.5YR7/3	竪穴建物1206
8	甕？	口径　－ 体径　－ 底径　9.8	器高　(5.2) 底厚　1.0		外 不明 内 ナデ	外 5YR5/3 内 5YR4/1～5YR5/3	竪穴建物1206
9	甕	口径　－ 体径　－ 底径　10.0	器高　(6.1) 底厚　1.8		外 タテハケ(8条/cm) 内 指オサエ	外 2.5YR7/4 内 2.5YR7/6	竪穴建物2222 2次被熱による赤化
10	壷	口径　－ 体径　－ 底径　－	器高　(8.5) 底厚　－	体部上位に2条以上のヘラ描沈線文。	外 ナデ後ミガキ？ 内 不明	外 10YR8/2 内 10YR8/3	竪穴建物2222 遠賀川系
11	壷	口径　－ 体径　－ 底径　－	器高　(6.5) 底厚　－	体部にヘラ描沈線文4条。	外 ナナメハケ(7条/cm) 内 ナデ	外 10YR7/3 内 10YR7/3	竪穴建物2222 遠賀川系
12	壷	口径　－ 体径　－ 底径　－	器高　(3.7) 底厚　－	体部に8条1帯の櫛描直線文(6条/cm)が2帯以上。	外 タテ・ナナメハケ(10条/cm) 内 ナデ	外 5YR6/6 内 5YR6/6	竪穴建物2222 櫛描文系
13	壷	口径　－ 体径　－ 底径　－	器高　(5.0) 底厚　－	体部に7条1帯の櫛描直線文(5条/cm)が3帯。	外 不明 内 ナデ	外 10YR6/2 内 10YR6/2	竪穴建物2222 櫛描文系
14	甕B	口径　－ 体径　－ 底径　－	器高　(8.3) 底厚　－	口縁端面にヘラによる刻目。 体部にヘラ描沈線文3条を施す。	外 ナデ後ハケ 内 ナデ	外 10YR8/1 内 10YR7/2	竪穴建物2222 遠賀川系
15	広口壷	口径　15.6 体径　－ 底径　－	器高　(4.1) 底厚　－	口縁端面ヘラ描沈線文1条を施した後、ヘラで刻目を加える。 頸部3条以上の沈線文。	外 不明 内 不明	外 7.5YR6/1～7.5YR7/2 内 7.5YR6/2	竪穴建物3544 遠賀川系
16	壷	口径　－ 体径　－ 底径　－	器高　(3.4) 底厚　－	頸部に貼付突帯。	外 不明 内 不明	外 7.5YR8/1 内 7.5YR8/1	竪穴建物3544 遠賀川系
17	内傾口縁土器B	口径　11.0 体径　－ 底径　－	器高　(2.2) 底厚　－	口縁部欠損。	外 貝殻条痕(2条/cm) 内 ナデ？	外 10YR7/3 内 10YR7/2	竪穴建物3544 条痕文系 搬入品(東海地方)
18	壷	口径　－ 体径　－ 底径　－	器高　(3.5) 底厚　－	頸部に刻目貼付突帯。	外 不明 内 不明	外 7.5YR7/3 内 5YR7/3～7.5YR7/3	竪穴建物3576
19	壷	口径　－ 体径　－ 底径　－	器高　(4.1) 底厚　－	体部に櫛描直線文(5条/cm)4帯以上。	外 不明 内 不明	外 5YR7/6 内 7.5YR8/3	竪穴建物3576 櫛描文系
20	壷	口径　－ 体径　－ 底径　－	器高　(4.5) 底厚　－	体部に6条1帯櫛描直線文(5条/cm)3帯。	外 不明 内 不明	外 7.5YR7/6 内 7.5YR8/3	竪穴建物3576 櫛描文系
21	広口壷B	口径　19.0 体径　－ 底径　－	器高　(7.0) 底厚　－	口縁端面に1条のヘラ描沈線文の後、ヘラで刻目。 頸部に櫛描直線文(6条/cm)9条。	内 不明 外 不明	外 10YR7/2 内	竪穴建物3579 櫛描文系
22	広口壷A	口径　15.6 体径　－ 底径　－	器高　(11.7) 底厚　－	口縁端面に1条のヘラ描沈線文を施した後、上下押圧を加える。 頸部には8条1帯の櫛描直線文(7条/cm)5帯を施す。	外 ナデ 内 ナデ・指オサエ	外 5YR8/3 内 5YR8/1	竪穴建物3579 櫛描文系

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
23	壷	口径 － 体径 － 底径 8.2	器高 (4.3) 底厚 2.0		外 ナデ 内 不明	外 7.5YR8/4 内 10YR8/1	竪穴建物3581
24	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (5.7) 底厚 －	体部上位に4条ヘラ描沈線文。	外 不明 内 不明	外 10YR8/2 内 10YR8/2	竪穴建物3581 遠賀川系
25	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (6.8) 底厚 －	体部上位に6条1帯櫛描直線文(8条/cm)4帯。	外 不明 内 ヨコハケ？	外 7.5YR8/4 内 7.5YR8/4	竪穴建物3581 櫛描文系
26	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (6.7) 底厚 －	頸部に櫛描直線文(8条/cm)。	外 ナデ？ 内 不明	外 7.5YR7/2 内 10YR8/2	竪穴建物3581 櫛描文系
27	甕	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.4) 底厚 －	口縁端面にヨコハケ後、ハケによる刺突。	外 粗いタテハケ (4条/cm) 内 粗いヨコハケ (4条/cm)	外 10YR5/3 内 10YR5/3	竪穴建物3581 ハケ条痕系
28	広口壷	口径 34.0 体径 － 底径 －	器高 (5.5) 底厚 －	口縁端面2条のヘラ描沈線文の後、ヘラで綾杉文を施す。	外 ヨコミガキ 内 ヨコミガキ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3～ 7.6YR6/2	竪穴建物3631
29	無頸壷A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.8) 底厚 －	多条の半裁竹管文。 櫛描直線文。	外 不明 内 不明	外 5YR6/6 内 (5YR7/4)	竪穴建物3631 櫛描文系
30	甕B	口径 28.0 体径 － 底径 －	器高 (15.0) 底厚 －	口縁端面にヘラで刻目。	外 貝殻条痕 (3条/cm) 内 不明	外 5YR8/2 内 2.5YR7/4	竪穴建物3631 条痕文系 搬入品(琵琶湖岸域)
31	広口壷A	口径 26.6 体径 － 底径 －	器高 (9.3) 底厚 －	口縁端面に1条のヘラ描沈線文の後、ヘラによる刻目を加える。 頸部に2条以上の沈線文。	外 ナデ・粗いハケ (4条/cm) 内 不明	外 7.5YR8/3 内 7.5YR8/3	土坑3549 遠賀川系
32	広口壷B	口径 25.9 体径 － 底径 －	器高 (10.8) 底厚 －	口縁端面無文。 頸部にヘラ描沈線文7条を施す。	外 不明 内 不明	外 7.5YR7/4 内 7.5YR7/4	土坑3549 遠賀川系
33	広口壷B	口径 17.0 体径 － 底径 －	器高 (4.8) 底厚 －	口縁端面無文。 頸部に細いヘラ描沈線文3条を施す。	外 タテハケ (14条/cm) 内 不明	外 2.5Y4/2～ 2.5Y3/1 内 10YR3/1～ 10YR5/3	土坑3549 遠賀川系
34	広口壷B	口径 (29.6) 体径 － 底径 －	器高 (9.8) 底厚 －	頸部に太いヘラ描沈線文5条を施す。	外 ナナメハケ (6条/cm) 内 ナナメハケ (6条/cm)	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	土坑3549 遠賀川系
35	広口壷	口径 27.5 体径 － 底径 －	器高 (5.2) 底厚 －	口縁端面1条のヘラ描沈線文。	外 不明 内 不明	外 7.5YR8/3 内 7.5YR8/4	土坑3549
36	壷	口径 － 体径 － 底径 7.0	器高 (11.1) 底厚 1.3		外 タテハケ (9条/cm) 内 不明	外 10YR5/3 内 10YR5/3～ 10YR6/3	土坑3549
37	甕A	口径 26.0 体径 － 底径 －	器高 (9.5) 底厚 －	口縁端面にヘラで刻目。	外 ナデ・ハケ (11条/cm) 内 不明	外 10YR7/3 内 10YR7/3	土坑3549 遠賀川系
38	甕	口径 － 体径 － 底径 9.0	器高 (9.5) 底厚 0.8		外 タテミガキ？ 内 不明	外 10YR6/3 内 7.5YR6/4	土坑3549 ハケ条痕系？
39	甕	口径 － 体径 － 底径 6.0	器高 (4.1) 底厚 2.3		外 タテハケ？ (6条？/cm) 内 不明	外 5YR5/4 内 5YR6/4	土坑3549
40	鉢A	口径 (17.0) 体径 － 底径 －	器高 (9.1) 底厚 －	無文。	外 不明 内 不明	外 7.5YR7/6 内 7.5YR7/4～ 7.5YR7/6	土坑3549
41	広口壷B	口径 － 体径 (26.0) 底径 －	器高 (22.1) 底厚 －	頸部ヘラ描沈線文14条、体部上位沈線文7条、中位沈線文10条を施す。	外 ハケ (7条/cm) 内 不明	外 10YR8/2 内 10YR8/2	溝1245下層 遠賀川系 体部形態a
42	壷	口径 － 体径 30.5 底径 9.6	器高 (27.8) 底厚 1.4	体部中位にヘラ描沈線文7条を施す。	外 ハケ (12条/cm) 内 ナデ	外 2.5Y7/2 内 2.5Y7/2	溝1245下層 遠賀川系 体部形態b
43	甕A	口径 22.8 体径 － 底径 －	器高 (9.0) 底厚 －	口縁端面にヘラよる刻目。 体部ヘラ描沈線文3条。	外 ナナメハケ (6条/cm) 内 不明	外 10YR3/1～ 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	溝1245下層 遠賀川系
44	鉢A	口径 20.0 体径 － 底径 7.5	器高 15.1 底厚 0.9		外 不明 内 不明	外 5YR7/6 内 5YR7/6	溝1245下層 遠賀川系？

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
45	広口壷A	口径 27.3 体径 − 底径 −	器高 (14.7) 底厚 −	口縁端面に1条のヘラ描沈線文の後ヘラで刻目。 頸部に沈線文で位置を決め、刻目貼付突帯7条を施す。	外 ハケ (7条/cm) 内 不明	外 10YR8/2 内 10YR8/2	溝1245上層 遠賀川系
46	広口壷A	口径 20.0 体径 − 底径 −	器高 (11.5) 底厚 −	口縁端面竹管直線文2条を施した後、竹管側面で押圧。 頸部は2条1対の半裁竹管文6帯。	外 ハケ(11条/cm) 後ミガキ 内 ナデ	外 10YR7/2 内 10YR7/2	溝1245上層
47	無頸壷B	口径 10.7 体径 − 底径 −	器高 (6.4) 底厚 −	口縁部無文。	外 ナデ・粗いハケ (3条/cm) 内 ハケ・ナデ	外 10YR7/3 内 10YR7/3	溝1245上層
48	甕B	口径 34.6 体径 − 底径 −	器高 (8.9) 底厚 −	口縁部無文。体部細く浅いヘラ描沈線文を4条施す。	外 不明 内 不明	外 7.5YR6/1 内 7.5YR7/1～7.5YR8/3	溝1245上層 遠賀川系
49	鉢A	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (8.4) 底厚 −	ヘラ描沈線文(7条)・竹管文・三角形列点文・竹管文・沈線文(6条)・竹管文・三角形列点文・竹管文・沈線文(7条)を施す。	外 不明 内 不明	外 10YR7/3 内 10YR7/3	溝1245上層 東部瀬戸内地方
50	鉢D	口径 − 体径 − 底径 7.5	器高 (7.7) 底厚 0.7	焼成後穿孔。	外 ミガキ 内 ナデ	外 5YR7/6 内 10YR3/1	溝1245上層
51	鉢D	口径 − 体径 − 底径 7.3	器高 (6.9) 底厚 1.2	焼成後穿孔。	外 タテハケ (8条/cm) 内 不明	外 5YR7/4 内 7.5YR8/3	溝1245上層
52	甕用蓋A	口径 − 体径 − 頂径 6.8	器高 (6.3)	天井部にドーナツ状の頂部。	外 不明 内 不明	外 5YR8/3 内 10YR8/1	溝1245上層 遠賀川系
53	内傾口縁土器B	口径 11.0 体径 − 底径 −	器高 (4.7) 底厚 −		外 貝殻条痕 (3条/cm) 内 ナデ	外 2.5YR6/6 内 2.5YR6/6	溝1245上層 条痕文系 搬入品(東海地方)
54	内傾口縁土器A	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (5.2) 底厚 −		外 ナデ 内 ナデ	外 2.5Y2/1～10YR7/3 内 2.5YR5/8	溝1245上層 条痕文系 搬入品(東海地方)
55	内傾口縁土器B	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (3.9) 底厚 −		外 貝殻条痕 (4条/cm) 内 不明	外 2.5YR6/6～7.5YR6/4 内 2.5YR6/6	溝1245上層 条痕文系 搬入品(東海地方)
56	内傾口縁土器B	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (5.8) 底厚 −		外 貝殻条痕？ 内 ナデ	外 7.5YR5/3 内 7.5YR5/3	溝1245上層 条痕文系 搬入品(東海地方)
57	内傾口縁土器B	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (2.7) 底厚 −		外 貝殻条痕？ 内 ナデ？	外 5YR6/6 内 5YR6/6	溝1245上層 条痕文系 搬入品(東海地方)
58	内傾口縁土器B	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (2.6) 底厚 −		外 貝殻条痕？ 内 ナデ	外 5YR8/4 内 5YR8/4	溝1245上層 条痕文系 搬入品(東海地方)
59	内傾口縁土器B	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (2.1) 底厚 −		外 貝殻条痕 (4条/cm) 内 ナデ	外 2.5YR7/4 内 7.5YR8/3	溝1245上層 条痕文系 搬入品(東海地方)
60	内傾口縁土器B	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (2.2) 底厚 −		外 貝殻条痕？ 内 不明	外 2.5YR7/4 内 2.5YR7/4	溝1245上層 条痕文系 搬入品(東海地方)
61	内傾口縁土器B	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (2.9) 底厚 −		外 貝殻条痕 (3条/cm) 内 ナデ？	外 7.5YR7/4～5YR8/3 内 7.5YR8/3	溝1245上層
62	直口壷A	口径 7.4 体径 11.0 底径 5.0	器高 15.7 底厚 −		外 不明 内 指オサエ	外 5YR7/4 内 5YR7/4	溝1245・流路1132(新) 合流地点 体部形態c
63	鉢C	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (7.0) 底厚 −	貼付把手。	外 不明 内 不明	外 7.5YR7/4 内 7.5YR7/4	溝1245・流路1132(新) 合流地点 遠賀川系
64	壷用蓋B	口径 − 体径 − 頂径 −	器高 (2.2)	天井部に瘤状突起。	外 ナデ 内 ナデ	外 10YR7/3 内 10YR5/1	溝1245・流路1132(新) 合流地点 遠賀川系
65	広口壷A	口径 14.8 体径 17.0 底径 8.2	器高 23.2 底厚 1.3	頸部と体部中位にヘラ描沈線を4～5条施す。	外 ハケ(8条/cm) 内 ヨコハケ(8条/cm) 後ナデ	外 10YR7/2 内 10YR7/2	流路1132(古)下層 遠賀川系 体部形態a
66	広口壷	口径 15.2 体径 − 底径 −	器高 (3.8) 底厚 −	頸部にヘラ描沈線文を2条以上施す。	外 不明 内 不明	外 10YR8/1 内 10YR8/1	流路1132(古)下層 遠賀川系

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
67	広口壷B	口径 16.9 体径 − 底径 −	器高 11.2 底厚 −	頸部に6条のヘラ描沈線文と竹管文を施す。	外 ミガキ 内 ミガキ・ナデ	外 10YR6/3 内 10YR7/3〜10YR6/3	流路1132(古)下層 東部瀬戸内地方
68	広口壷	口径 − 体径 30.8 底径 9.0	器高 (21.8) 底厚 −	体部中位に太いヘラ描沈線文を9条施す。	外 粗いハケ(5条/cm) 内 粗いハケ(5条/cm)	外 10YR7/4 内 10YR7/4	流路1132(古)下層 遠賀川系 体部形態a
69	壷	口径 − 体径 − 底径 10.0	器高 (7.2) 底厚 2.0		外 粗いハケ(4条/cm) 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(古)下層
70	甕A	口径 19.0 体径 − 底径 −	器高 (6.0) 底厚 −	体部にヘラ描沈線文を10条施す。	外 ナデ 内 指オサエ？	外 7.5YR6/4 内 7.5YR6/4	流路1132(古)下層 遠賀川系
71	甕B	口径 23.3 体径 − 底径 8.8	器高 (9.9) 底厚 1.0	口縁端面にヘラによる刻目。	外 ハケ(9条/cm) 内 ハケ(9条/cm)後ナデ	外 2.5Y8/1 内 2.5Y8/1	流路1132(古)下層 遠賀川系
72	広口壷B	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (16.2) 底厚 −	頸部に布目圧痕を施した貼付突帯が5条以上巡る。	外 タテハケ(13条/cm)・ナデ 内 タテハケ(13条/cm)・ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/4	流路1132(古)湿地下層 遠賀川系
73	壷	口径 23.6 体径 − 底径 −	器高 (1.8) 底厚 −	口縁端面にハケの押圧による斜格子文。	外 ナデ 内 ナデ	外 10YR7/2 内 10YR7/2	流路1132(古)上層
74	壷	口径 11.4 体径 − 底径 12.0	器高 (35.9) 底厚 −	体部上半から中位に7条1帯の単帯構成の櫛描直線文(7条/cm)を13帯施す。	外 ハケ(6条/cm)後ミガキ 内 不明	外 10YR7/2 内 10YR7/2	流路1132(古)上層 櫛描文系 体部形態c
75	壷	口径 − 体径 − 底径 5.6	器高 (14.4) 底厚 2.5	頸部に貼付突帯。	外 ヨコミガキ？ 内 ナデ	外 10YR8/2 内 10YR8/2	流路1132(古)上層 体部形態c
76	鉢A	口径 15.8 体径 − 底径 −	器高 (5.0) 底厚 −		外 ヨコハケ(6条/cm) 内 不明	外 7.5YR5/1 内 7.5YR5/1	流路1132(古)上層 遠賀川系
77	高杯	口径 − 体径 − 底径 11.4	器高 (9.5) 底厚 −	脚柱部に太いヘラ描沈線文2条と6条1帯の櫛描直線文(10条/cm)を3帯施す。	外 ヨコナデ 内 ナデ	外 10YR8/2 内 10YR8/2	流路1132(古)上層 櫛描文系
78	内傾口縁土器B	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (4.2) 底厚 −		外 貝殻条痕(3条/cm) 内 ナデ	外 2.5YR7/6 内 2.5YR7/6	流路1132(古)上層 条痕文系
79	広口壷A	口径 25.2 体径 − 底径 −	器高 (11.0) 底厚 −	口縁端部は無文。 頸部にヘラ描沈線文を2条以上施す。	外 ナデ・タテハケ(10条/cm) 内 ナデ	外 10YR6/3 内 10YR6/3	流路1132(古)湿地上層 遠賀川系
80	壷	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (5.5) 底厚 −	体部に太いヘラ描沈線文を3条以上施す。	外 ハケ(10条/cm) 内 ナデ	外 7.5YR7/2 内 7.5YR8/1	流路1132(古)湿地上層 遠賀川系
81	壷	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (5.5) 底厚 −	頸部に太いヘラ描沈線文を9条以上施す。	外 タテハケ(7条/cm) 内 ナデ	外 7.5YR7/2 内 7.5YR6/1	流路1132(古)湿地上層 遠賀川系
82	壷	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (5.7) 底厚 −	10条1帯の櫛描直線文(5条/cm)の後、異なる3条1帯の原体で斜格子文(3条/cm)を施す。	外 不明 内 ナデ	外 10YR5/2 内 10YR6/2	流路1132(古)湿地上層 櫛描文系
83	甕	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (3.1) 底厚 −	口縁端面にハケによる押引文。	外 粗いタテハケ(5条/cm) 内 粗いヨコハケ(5条/cm)	外 7.5YR8/1 内 7.5YR8/1	流路1132(古)湿地上層 ハケ条痕系 搬入品(琵琶湖岸域)
84	鉢A	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (3.9) 底厚 −	ヘラ描沈線文を6条施す。	外 不明 内 ミガキ？	外 10YR7/3 内 10YR7/3	流路1132(古)湿地上層 遠賀川系
85	内傾口縁土器A	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (4.0) 底厚 −		外 ナデ 内 ナデ・指オサエ	外 10YR5/2 内 10YR5/2	流路1132(古)湿地上層 条痕文系 搬入品(東海地方)
86	内傾口縁土器B	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (2.0) 底厚 −		外 貝殻条痕(3条/cm) 内 ナデ	外 10R6/8 内 10R6/8	流路1132(古)湿地上層 条痕文系 搬入品(東海地方)
87	広口壷A	口径 23.3 体径 − 底径 −	器高 (31.2) 底厚 −	口縁端面は1条のヘラ描沈線文の後、上・下端にヘラで刻目。 頸部は17条、体部上位7条、中位に6条の沈線文を施す。	外 ナデ・ミガキ 内 ナデ	外 7.5YR6/3〜7.5YR7/4 内 7.5YR7/4	流路1132(新)Ⅳ層 遠賀川系 体部形態a

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
88	広口壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (8.8) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。頸部に2条以上のヘラ描沈線文を施す。	外 タテハケ (8条/cm) 内 ヨコハケ (8条/cm)	外 10YR7/3 内 10YR7/3	流路1132(新)Ⅳ層 遠賀川系
89	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (6.5) 底厚 －	頸部に太いヘラ描沈線文を5条以上施す。	外 タテハケ (11条/cm) 内 ヨコハケ (11条/cm)	外 7.5YR4/1 内 7.5YR4/1	流路1132(新)Ⅳ層 遠賀川系
90	広口壷B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (7.3) 底厚 －	頸部から体部上位に押圧文貼付突帯5条。	外 ヨコナデ 内 ナデ	外 10YR8/1 内 10YR8/1	流路1132(新)Ⅳ層 遠賀川系
91	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (6.0) 底厚 －	体部に刻目貼付突帯を3条めぐらす。	外 ミガキ 内 不明	外 7.5YR6/2 内 7.5YR6/2	流路1132(新)Ⅳ層 遠賀川系
92	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.3) 底厚 －	体部に刻目貼付突帯を3条以上めぐらす。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR7/2 内 7.5YR8/3	流路1132(新)Ⅳ層 遠賀川系
93	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (6.0) 底厚 －	体部に半裁竹管直線文(全周しない)とヘラ描沈線文を9条施す。	外 ナデ？ 内 不明	外 7.5YR6/3 内 7.5YR6/3	流路1132(新)Ⅳ層
94	甕A	口径 11.8 体径 － 底径 －	器高 (15.6) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。体部上位にヘラ描沈線文を5条施す。	外 ナナメハケ (7条/cm) 内 ハケ(7条/cm)	外 7.5YR4/6 内 7.5YR6/4	流路1132(新)Ⅳ層 遠賀川系
95	甕A	口径 (21.6) 体径 － 底径 －	器高 (4.2) 底厚 －	口縁端面にヘラで刻目。 体部にヘラ描沈線文を6条施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 10YR7/3 内 10YR7/3	流路1132(新)Ⅳ層 遠賀川系
96	甕	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.6) 底厚 －	口縁端面にヘラで刻目。	外 貝殻条痕 (5条/cm) 内 ナデ	外 7.5YR4/1 内 7.5YR4/1	流路1132(新)Ⅳ層 条痕文系 搬入品(琵琶湖岸域)
97	壷用蓋C	天井径 － 口径 6.3	器高 (4.1)	双頭の摘みを持つ。	外 ナデ・オサエ 内 オサエ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅳ層 遠賀川系
98	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.0) 底厚 －		外 貝殻条痕 (4条/cm) 内 ナデ	外 10YR6/6 内 10YR6/6	流路1132(新)Ⅳ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
99	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.0) 底厚 －	疑口縁。	外 貝殻条痕 (3条/cm) 内 ナデ	外 10YR8/1 内 10YR8/1	流路1132(新)Ⅳ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
100	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.6) 底厚 －		外 貝殻条痕 (3条/cm) 内 ナデ	外 2.5YR7/6 断 2.5Y3/1 内 2.5YR7/6	流路1132(新)Ⅳ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
101	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.5) 底厚 －		外 貝殻条痕 (3条/cm) 内 不明	外 10YR6/6 内 10YR6/6	流路1132(新)Ⅳ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
102	広口壷B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (9.0) 底厚 －	頸部に糸巻棒による押圧文貼付突帯を1条巡らし、ヘラ描沈線文を12条以上施す。	外 ヨコナデ後ミガキ 内 ミガキ	外 10YR6/2 内 10YR6/2	流路1132(新)Ⅲ層 遠賀川系
103	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (9.5) 底厚 －	体部中位に刻目貼付突帯が3条巡る。	外 ヨコミガキ 内 ナデ？指オサエ	外 7.5YR7/3 内 10YR8/3	流路1132(新)Ⅲ層 遠賀川系 体部形態a
104	広口壷	口径 23.0 体径 － 底径 －	器高 (6.5) 底厚 －	口縁部無文。	外 ヨコナデ後 ミガキ？ 内 ヨコナデ後 ミガキ？	外 10YR8/3 内 7.5YR7/4	流路1132(新)Ⅲ層
105	広口壷B	口径 25.5 体径 － 底径 －	器高 (9.3) 底厚 －	口縁端面は3条のヘラ描沈線文の後、ヘラによる綾杉文を施す。下端は指による押圧文。頸部には刻目貼付突帯を7条巡らす。口縁部内面は5条の刻目貼付突帯で注口部を形成する。	外 ハケ(8条/cm) 後ナデ 内 ナデ	外 10YR7/2 内 10YR7/2	流路1132(新)Ⅲ層 中部瀬戸内地方
106	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.5) 底厚 －	口縁端部を上下に拡張し、ヘラで刻目を施す。口縁部内面に断面三角形の貼付突帯を巡らす。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅲ層 中部瀬戸内地方
107	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (7.6) 底厚 －	頸部にヘラ描沈線文と竹管文を施す。	外 タテミガキ 内 ナデ	外 10YR6/2 内 10YR6/2	流路1132(新)Ⅲ層 東部瀬戸内地方
108	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.6) 底厚 －	体部にヘラ描沈線文7条以上を施し、刻目貼付突帯1条を巡らす。	外 不明 内 ナデ	外 10YR5/2 内 10YR6/1	流路1132(新)Ⅲ層 遠賀川系

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
109	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (12.5) 底厚 －	頸部に8条、体部に1条以上の櫛描直線文(5条/cm)。	外 タテハケ(6条/cm) 後ナデ後ミガキ？ 内 ナデ？	外 10YR5/2 内 10YR7/4	流路1132(新)Ⅲ層 櫛描文系
110	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (5.7) 底厚 －	体部に同一原体の櫛描直線文と、櫛描波状文(6条/cm)を施す。	外 不明 内 ナデ	外 7.5YR6/2 内 7.5YR6/2	流路1132(新)Ⅲ層 櫛描文系
111	甕A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (6.1) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。 体部に3条のヘラ描沈線文を施す。	外 ナデ・ハケ (6条/cm) 内 ナデ	外 10YR2/1 内 10YR2/1	流路1132(新)Ⅲ層 遠賀川系
112	甕A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (6.3) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。 体部に8条のヘラ描沈線文を施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 2.5YR6/6 内 2.5YR5/2	流路1132(新)Ⅲ層 遠賀川系
113	甕A	口径 (35.0) 体径 － 底径 －	器高 (6.5) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。 体部に9条のヘラ描沈線文を施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅲ層 遠賀川系
114	甕A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.1) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。 体部に2条のヘラ描沈線文を施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 10YR7/3 内 10YR8/1	流路1132(新)Ⅲ層 遠賀川系
115	甕A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (5.1) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。 体部に5条のヘラ描沈線文を施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR5/2 内 7.5YR5/2	流路1132(新)Ⅲ層 遠賀川系
116	甕A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (6.3) 底厚 －	貼付口縁。口縁端部にヘラによる刻目。ヘラ描体部に沈線文5条施す。	外 ナデ・ナナメハケ (9条/cm) 内 ナデ？指オサエ	外 10YR6/4 内 10YR6/4	流路1132(新)Ⅲ層 東部瀬戸内地方
117	鉢B	口径 (28.0) 体径 － 底径 －	器高 (6.8) 底厚 －		外 ハケ後ナデ 内 ナデ	外 10YR6/2 内 10YR6/2	流路1132(新)Ⅲ層 遠賀川系
118	甕用蓋A	天井径 7.8 口径 －	器高 (9.7)	摘みは平頂部。	外 タテハケ (10条/cm) 指オサエ 内 ナデ・ヨコハケ	外 7.5YR6/3～ 7.5YR6/2 内 7.5YR6/3	流路1132(新)Ⅲ層 遠賀川系
119	甕用蓋A	天井径 － 口径 20.0	器高 (1.7)		外 ナデ・ミガキ 内 ミガキ	外 2.5Y8/1 内 2.5Y8/1	流路1132(新)Ⅲ層 遠賀川系 内面裾端部煤付着
120	内傾口縁土器A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.8) 底厚 －		外 ナデ 内 ナデ	外 10R6/8 内 10R6/8	流路1132(新)Ⅲ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
121	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (6.4) 底厚 －		外 貝殻条痕 (3条/cm) 内 ナデ	外 2.5Y8/1 内 2.5Y8/1	流路1132(新)Ⅲ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
122	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.7) 底厚 －	疑口縁。	外 貝殻条痕 (2条/cm) 内 指オサエ	外 10YR8/3 内 10YR8/3	流路1132(新)Ⅲ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
123	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.2) 底厚 －		外 貝殻条痕 (2条/cm) 内 ナデ	外 2.5YR6/6～ 5YR7/4 内 5YR7/4	流路1132(新)Ⅲ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
124	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (5.7) 底厚 －		外 貝殻条痕 (3条/cm) 内 ケズリ	外 5YR7/4 内 7.5YR8/3	流路1132(新)Ⅲ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
125	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.3) 底厚 －		外 貝殻条痕 (2条/cm) 内 不明	外 5YR7/3 内 5YR7/3	流路1132(新)Ⅲ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
126	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.3) 底厚 －		外 貝殻条痕 (2条/cm) 内 ナデ	外 10YR8/1 内 10YR8/1	流路1132(新)Ⅲ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
127	広口壷A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (15.2) 底厚 －	頸部に太いヘラ描沈線文13条以上を施す。2個1対の孔を穿つ。	外 ヨコハケ (7条/cm) 内 ヨコハケ (5条/cm)	外 10YR7/3 内 10YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
128	広口壷A	口径 22.0 体径 － 底径 －	器高 (8.6) 底厚 －	口縁端面に櫛描直線文(6条/cm)の後、ヘラで刻目。頸部4条1帯の複帯構成の櫛描直線文(5条/cm)。	外 タテハケ (7条/cm) 内 ヨコハケ(7条/cm)・ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系
129	広口壷A	口径 21.0 体径 － 底径 －	器高 (10.6) 底厚 －	口縁端面ヘラ描直線文1条、下端ヘラで押圧。頸部に4条1帯櫛描直線文(8条/cm)と竹管文を交互に3帯施し、以下直線文(8条/cm)1帯以上施す。	外 ハケ(14条/cm) 後粗いミガキ 内 ハケ後ミガキ	外 7.5YR8/3～ 7.5YR8/2 内 7.5YR8/3	流路1132(新)Ⅱ層 東部瀬戸内地方

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
130	広口壷A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (7.8) 底厚 －	頸部に押圧文貼付突帯を3条施す。 口縁部内面には三角形刺突文を4段以上施す。	外 ナデ後ミガキ 内 ミガキ	外 10YR3/2 内 10YR3/2	流路1132(新)Ⅱ層 中部瀬戸内地方
131	広口壷B	口径 20.0 体径 － 底径 －	器高 (9.9) 底厚 －	口縁部上・下端ヘラによる刻目。 頸部にヘラ描沈線文を8条施す。	外 タテハケ (9条/cm) 内 粗いヨコハケ (3条/cm)	外 10R6/4 内 7.5YR7/2 10R6/4	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
132	広口壷B	口径 20.0 体径 － 底径 －	器高 (9.3) 底厚 －	口縁端面ヘラ描沈線文1条の後、上下端にヘラによる刻目。 頸部に沈線文を9条施す。	外 ナデ 内 ナデ？	外 10YR7/3 10YR6/3 内 10YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
133	広口壷B	口径 21.2 体径 － 底径 －	器高 (8.9) 底厚 －	口縁端面にハケによる刺突。 頸部に太いヘラ描沈線文7条を施す。	外 ハケ後ナデ 内 ナデ	外 10YR6/2 内 10YR6/2	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
134	広口壷B	口径 15.3 体径 － 底径 －	器高 (6.4) 底厚 －	口縁端部下端を拡張し、指捏ね貼付突帯を施す。突帯は粘土帯を大きく切り取り後を指で成形している。 頸部は8条のヘラ描沈線文。	外 不明 内 ナデ	外 10YR7/2 内 10YR8/3～ 10YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
135	広口壷B	口径 22.0 体径 － 底径 －	器高 (8.1) 底厚 －	口縁端部上端ヘラによる刻目。 頸部12条のヘラ描沈線文を施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR6/3 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
136	広口壷B	口径 28.2 体径 － 底径 －	器高 (7.1) 底厚 －	口縁端面はヘラもしくは半裁竹管による刻目文の後、指オサエによる単独圧痕。 頸部は半裁竹管による沈線文を施す。	外 ナデ 内 ナデ？	外 10YR6/2 内 10YR6/3	流路1132(新)Ⅱ層
137	広口壷B	口径 22.4 体径 － 底径 －	器高 (19.6) 底厚 －	口縁端面櫛描波状文(8条/cm)。頸部から体部上位7条1帯の単帯構成の櫛描直線文(7条/cm)を8帯施した後、3帯1単位の垂下直線文(7条/cm)を7条施す。	外 不明 内 不明	外 10YR5/2 内 10YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系
138	広口壷B	口径 14.6 体径 － 底径 －	器高 (7.5) 底厚 －	口縁端面2条のヘラ描沈線文の後ヘラで刻目。頸部に6条1帯の櫛描直線文(4条/cm)を施す。	外 ナデ後 タテミガキ？ 内 ナデ？	外 10YR7/3～ 10YR6/3 内 10YR7/3～ 10YR6/3	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系
139	広口壷B	口径 48.0 体径 － 底径 －	器高 (15.0) 底厚 －	口縁端面に2条のヘラ描沈線文を施し、下端を拡張し、上端ハケで刺突。頸部に櫛描直線文(3～4条/cm)とハケによる刺突文。口縁内面は3条1帯の直線文(4条/cm)を6帯施し、ヘラによる扇形文を加えて擬流水文を作る。	外 ヨコミガキ 内 ヨコミガキ・ ヨコハケ(8条/cm)	外 7.5YR8/6～ 7.5YR8/3 内 7.5YR8/6	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系 2個1対の穿孔
140	広口壷	口径 29.0 体径 － 底径 －	器高 (5.0) 底厚 －	口縁端面ヘラ描沈線文2条の後、ハケによる刺突を加えて綾杉文を施す。下端の押圧には布目が残る。内面ヘラによる2列の刺突文。	外 ナデ 内 ナデ？	外 7.5YR7/2 内 7.5YR6/2～ 7.5YR7/2	流路1132(新)Ⅱ層
141	広口壷	口径 33.0 体径 － 底径 －	器高 (5.1) 底厚 －	口縁端面ヘラ描直線文2条を施した後、綾杉文を施す。	外 ヨコハケ後 ミガキ？ 内 ヨコハケ後ミガキ	外 7.5YR6/3 内 7.5YR6/3～ 7.5YR7/2	流路1132(新)Ⅱ層
142	広口壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.3) 底厚 －	口縁端面は1条のヘラ描沈線文の後、ヘラで刻目を施し、下端を拡張して棒状具による押圧文を施す。口縁部内面にも太い突帯を貼り付け、棒状具による押圧文を施す。また2条の刻目貼付突帯を巡らし、縦位にも2条の刻目貼付突帯を施す。	外 ミガキ？ 内 不明	外 7.5YR7/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層 中部瀬戸内地方
143	広口壷C	口径 12.6 体径 － 底径 －	器高 (6.2) 底厚 －	口縁端部下端ハケによる刺突。頸部から体部上半にヘラ描沈線文7条を施す。	外 ナデ 内 ヨコナデ・ナデ	外 7.5YR8/2 内 7.5YR8/3	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
144	広口壷C	口径 11.6 体径 － 底径 －	器高 (8.8) 底厚 －	口縁端面ヘラ描沈線文2条を施した後、上・下端ヘラによる刻目。頸部から体部ヘラ描沈線文7条、竹管文2条、沈線文10条、ヘラによる刺突文、竹管文2条、沈線文を施す。	外 ナデ・ミガキ？ 内 粗いハケ(3条/cm)後ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/2～ 7.5YR7/1	流路1132(新)Ⅱ層 東部瀬戸内地方
145	直口壷A	口径 14.1 体径 － 底径 －	器高 (9.2) 底厚 －	口縁端面に櫛描直線文(6条/cm)。頸部に8～9条1帯の櫛描直線文(6条/cm)3帯以上。頸部内面に分割文風の垂下直線文(6条/cm)か。	外 ナデ 内 ナデ	外 10YR7/4 内 7.5YR6/4～ 10YR7/4	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系
146	直口壷A	口径 5.6 体径 － 底径 －	器高 (7.1) 底厚 －	口縁端面に4条1帯の櫛描波状文(8条/cm)。頸部は7条1帯の直線文(5条/cm)2帯。	外 ハケ後ナデ 内 ハケ後ナデ	外 2.5YR7/4 内 2.5YR7/4	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
147	無頸壷A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.3) 底厚 －	口縁部下に1条の刻目貼付突帯を巡らし、体部に1条のヘラ描沈線文を施す。	外 ナデ・ミガキ 内 ナデ	外 10YR6/3 内 10YR6/3	流路1132(新)Ⅱ層
148	無頸壷B	口径 11.0 体径 － 底径 －	器高 (17.8) 底厚 －	口縁部から体部上半に6条1帯の単帯構成の櫛描直線文(5条/cm)を9帯施す。	外 ナナメハケ (4条/cm) 内 ナデ	外 10YR5/2 内 10YR5/2	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系
149	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (23.4) 底厚 －	体部中位にヘラ描きによる格子文。	外 ナナメハケ (8条/cm) 内 ナデ	外 10YR7/4 内 10YR7/4	流路1132(新)Ⅱ層
150	壷		器高 (7.7)	頸部から体部上位にかけて、ヘラ描沈線文を12条以上施し、竹管文を2帯施す。体部上位から中位は沈線文7条以上、竹管文2帯、沈線文7条を施す。	外 ハケ(6条/cm)・ナデ・ミガキ 内 ナデ	外 N2/～10YR6/2 内 10YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 東部瀬戸内地方 同一個体
151			器高 (8.3)				
152			器高 (8.2)				
153	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (5.9) 底厚 －	頸部に6条のヘラ描沈線文の上下に竹管文を施す。	外 タテハケ (9条/cm) 内 ナデ	外 10YR7/1 内 10YR7/1	流路1132(新)Ⅱ層 東部瀬戸内地方
154	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (5.2) 底厚 －	体部上位に5条1帯の櫛描直線文(8条/cm)と棒状(竹管？)刺突文を交互に3帯以上施す。	外 ミガキ？ 内 ナデ	外 10YR7/2 内 10YR7/2	流路1132(新)Ⅱ層 東部瀬戸内地方
155	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (6.3) 底厚 －	体部上位にヘラ描沈線文を11条、刺突文2帯、沈線文を6帯以上施す。	外 ミガキ 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 東部瀬戸内地方
156	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (8.2) 底厚 －	7条のヘラ描沈線文の後、綾杉文・垂下直線文・刺突文を施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 2.5YR7/2 内 5YR8/4	流路1132(新)Ⅱ層
157	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (6.4) 底厚 －	ヘラ描沈線文を4条以上施した後、綾杉文を施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR7/2 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層
158	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (8.5) 底厚 －	体部上位に6条1帯の櫛描直線文(5条/cm)を4帯以上施した後、垂下直線文と縦位の波状文を施す。	外 ミガキ 内 不明	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系
159	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.4) 底厚 －	体部上位に複帯構成の櫛描直線文？(6条/cm)と波状文(5条/cm)を施す。	外 不明 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系
160	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.6) 底厚 －	口縁部内面に6条1帯の櫛描波状文？と直線文(10条/cm)を施す。	外 ハケ(7条/cm) 後ナデ 内 ナデ	外 5YR7/3 内 5YR5/2	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系
161	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (6.0) 底厚 －	頸部から体部にかけ断面三角形の貼付突帯を2条巡らし、下に貼付区画文を施文。	外 不明 内 不明	外 10YR7/3 内 10YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層
162	甕A	口径 21.0 体径 － 底径 －	器高 (10.4) 底厚 －	無文。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR6/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
163	甕A	口径 22.0 体径 － 底径 －	器高 (8.6) 底厚 －	口縁端面にヘラで刻目。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR6/2 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
164	甕A	口径 26.8 体径 － 底径 －	器高 (6.5) 底厚 －	口縁端面ハケ刺突。	外 粗いタテハケ (5条/cm) 内 粗いヨコハケ (5条/cm)	外 7.5YR5/2 内 7.5YR7/2	流路1132(新)Ⅱ層 ハケ条痕系
165	甕A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.5) 底厚 －	口縁端面ヨコハケの後、上端にハケ刺突。	外 タテハケ (9条/cm) 内 ヨコハケ (9条/cm)	外 7.5YR6/2 内 7.5YR5/4	流路1132(新)Ⅱ層 ハケ条痕系
166	甕B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.0) 底厚 －	口縁端面ヨコハケの後、ハケによる刺突。単独圧痕。	外 粗いタテハケ (5条/cm) 内 粗いヨコハケ (5条/cm)	外 7.5YR6/3 断 10YR3/1 内 7.5YR6/3	流路1132(新)Ⅱ層 ハケ条痕系
167	甕A	口径 20.2 体径 － 底径 －	器高 (6.0) 底厚 －	口縁端面ハケ刺突。	外 粗いタテハケ (4条/cm) 内 粗いヨコハケ (4条/cm)	外 7.5YR5/2 内 7.5YR5/2	流路1132(新)Ⅱ層 ハケ条痕系
168	甕B	口径 19.0 体径 － 底径 －	器高 (8.1) 底厚 －	口縁端面にヘラで刻目。	外 粗いタテハケ (3条/cm) 内 粗いヨコハケ (3条/cm)	外 7.5YR6/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 ハケ条痕系
169	甕A	口径 27.5 体径 － 底径 －	器高 (5.8) 底厚 －	口縁端面ハケ刺突。 単独圧痕。	外 タテハケ (8条/cm) 内 ヨコハケ (8条/cm)	外 7.5YR6/3 内 7.5YR6/3	流路1132(新)Ⅱ層 ハケ条痕系

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
170	甕A	口径 23.8 体径 － 底径 －	器高 (6.0) 底厚 －	口縁端面ハケ刺突。 単独圧痕。	外 タテハケ (6条/cm) 内 ヨコハケ (6条/cm)	外 10YR2/1 内 10YR2/1	流路1132(新)Ⅱ層 ハケ条痕系
171	甕A	口径 31.2 体径 － 底径 －	器高 (3.7) 底厚 －	口縁端面にヘラで刻目。 2個1対の圧痕。	外 粗いヨコハケ(4条/cm)後ナデ 内 粗いヨコハケ(4条/cm)後ナデ？	外 7.5YR7/3 内 7.5YR8/1	流路1132(新)Ⅱ層 ハケ条痕系
172	甕A	口径 (24.8) 体径 － 底径 －	器高 (4.7) 底厚 －	口縁部下に1条の貼付突帯がめぐり、体部上位にヘラ描沈線文を4条施す。	外 粗いナナメハケ (5条/cm) 内 指オサエ・ナデ	外 5YR7/4 内 10YR3/1	流路1132(新)Ⅱ層 東部瀬戸内地方
173	甕A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (5.5) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。 体部上位6条のヘラ描沈線文を施す。	外 タテハケ (7条/cm) 内 ナデ	外 10YR8/2 内 10YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層 東部瀬戸内地方
174	甕A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.7) 底厚 －	貼付口縁。	外 ナデ 内 指オサエ	外 10YR8/2 内 10YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層 中部瀬戸内地方
175	甕A	口径 29.6 体径 － 底径 －	器高 (10.6) 底厚 －	口縁端部にヘラで刻目。	外 櫛条痕 (4条/cm) 内 粗いヨコハケ (4条/cm)	外 7.5YR4/2 内 7.5YR4/2	流路1132(新)Ⅱ層 条痕文系 搬入品(琵琶湖岸域)
176	甕A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (5.2) 底厚 －	山形口縁。	外 粗いタテハケ (5条/cm) 内 粗いナナメハケ (5条/cm)	外 2.5YR6/6 内 2.5YR4/2	流路1132(新)Ⅱ層 ハケ条痕系 搬入品(琵琶湖岸域)
177	甕A	口径 27.4 体径 － 底径 －	器高 (10.7) 底厚 －	口縁端面にヘラで刻目。	外 ナデ・ハケ (8条/cm) 内 ヨコハケ(8条/cm)・ナデ	外 7.5YR4/1 内 7.5YR5/2	流路1132(新)Ⅱ層
178	甕A	口径 0.8 体径 － 底径 －	器高 (13.2) 底厚 －	口縁端面ヘラによる刺突文。	外 ナデ 内 ナデ	外 5YR6/4 内 5YR6/4	流路1132(新)Ⅱ層
179	甕	口径 － 体径 － 底径 7.0	器高 (5.2) 底厚 1.1	底部木葉痕。	外 粗いタテハケ (5条/cm) 内 ナデ	外 7.5YR6/2 内 7.5YR5/1	流路1132(新)Ⅱ層 ハケ条痕系
180	甕	口径 － 体径 － 底径 8.7	器高 (4.8) 底厚 1.9	底部籾圧痕。	外 タテハケ (11条/cm) 内 ナデ	外 5YR7/4 内 5YR7/2	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
181	鉢A	口径 16.8 体径 － 底径 －	器高 (5.8) 底厚 －	口縁端面にヘラで刻目。 体部7条1帯の櫛描直線文(6条/cm)を2帯以上施す。	外 不明 内 ハケ後ナデ	外 10YR4/1 内 10YR4/1	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系
182	鉢A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.3) 底厚 －	三角列点文の下に3条1帯の櫛描直線文(6条/cm)と2条の原体不明の波状文を交互に施す。	外 不明 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系
183	鉢A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.8) 底厚 －	6条1帯の櫛描流水文(8条/cm)を施す。	外 ミガキ？ 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/4	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系
184	鉢B	口径 35.4 体径 － 底径 －	器高 (11.5) 底厚 －	口縁端面にヘラで刻目。 頸部にヘラによる刻目貼付突帯を施す。	外 ナデ・ヨコハケ (10条/cm) 内 ナデ	外 10YR8/1～10YR8/2 内 10YR8/2～10YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
185	鉢B	口径 20.0 体径 － 底径 －	器高 (8.6) 底厚 －	口縁部無文。 端部を面取りする。	外 ナデ・ナナメハケ (11条/cm) 内 ナデ・ヨコハケ (11条/cm)	外 10YR4/2 内 7.5YR8/3	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
186	鉢B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (7.7) 底厚 －	口縁端面に1条のヘラ描沈線文を施した後、上・下に押圧を加える。押圧部には布目痕が認められる。頸部には太いヘラ描沈線文1条と、体部に10条1帯の櫛描直線文(7条/cm)を2帯施す。	外 ハケ後ナデ 内 ハケ後ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系？
187	鉢B	口径 13.2 体径 － 底径 －	器高 (6.8) 底厚 －	口縁部無文。	外 粗いヨコハケ (6条/cm) 内 ナデ	外 2.5YR6/2 内 7/5YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層
188	鉢C	口径 35.8 体径 － 底径 －	器高 (8.5) 底厚 －	体部に貼付把手。	外 ナデ・タテハケ (6条/cm) 内 ナデ・ナナメハケ (6条/cm)	外 7.5YR8/3 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
189	鉢C	口径 45.0 体径 － 底径 －	器高 (19.3) 底厚 －	体部に貼付把手。	外 ハケ(7条/cm) 内 粗いハケ (3条/cm)	外 7.5YR7/1 内 10YR6/1	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
190	鉢	口径 － 体径 － 底径 5.4	器高 (7.3) 底厚 －	体部上半6条1帯の複帯構成の櫛描直線文(8条/cm)とヘラによる刻目を加えた貼付突帯1条巡らす。	外 ミガキ 内 ナデ	外 10YR3/2 内 10YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 櫛描文系
191	鉢A	口径 12.0 体径 － 底径 6.4	器高 11.0 底厚 －	無文。	外 不明 内 不明	外 5YR8/4 内 5YR8/4	流路1132(新)Ⅱ層
192	高杯	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (5.9) 底厚 －		外 タテミガキ？ 内 不明	外 10YR8/1 内 10YR8/1	流路1132(新)Ⅱ層
193	ミニチュア	口径 5.8 体径 － 底径 3.2	器高 4.5 底厚 －		外 ナデ 内 ナデ・オサエ	外 10YR7/3 内 10YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層
194	甕用蓋A	天井径 9.0 口径 －	器高 (5.0)	摘みは平頂部。	外 ナデ 内 ナデ	外 10YR7/1 内 10YR7/1	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
195	甕用蓋A	天井径 6.2 ～6.6 口径 －	器高 (9.5)	摘みはドーナツ頂部。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR8/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
196	壷用蓋B	天井径 － 口径 12.0	器高 (1.3)	摘み欠損。2ヶ所に2個1対の穿孔。	外 不明 内 不明	外 10YR7/3 内 10YR4/1～ 10YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
197	壷用蓋A	口径 (10.2)	器高 (3.5)	2ヶ所に2個1対の穿孔。	外 ナデ 内 ハケ	外 5YR7/3～ 10YR6/1 内 10YR6/1	流路1132(新)Ⅱ層 遠賀川系
198	内傾口縁 土器A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.9) 底厚 －		外 ナデ 内 ナデ	外 2.5YR7/6 内 2.5YR7/6	流路1132(新)Ⅱ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
199	内傾口縁 土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.1) 底厚 －		外 貝殻条痕 (3条/cm) 内 ナデ	外 7.5YR5/3 内 7.5YR5/3	流路1132(新)Ⅱ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
200	内傾口縁 土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.7) 底厚 －	疑口縁。	外 貝殻条痕 (3条/cm) 内 ナデ	外 10YR6/4 内 10YR6/4	流路1132(新)Ⅱ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
201	内傾口縁 土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.3) 底厚 －		外 貝殻条痕? 内 ナデ	外 10YR5/3 内 10YR5/3	流路1132(新)Ⅱ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
202	広口壷A	口径 18.8 体径 － 底径 －	器高 (7.1) 底厚 －	口縁端面にハケ刺突による斜格子文。頸部に7条1帯の櫛描直線文(6条/cm)を施す。	外 ヨコナデ 内 ハケ後ナデ	外 5YR7/3 内 5YR8/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
203	広口壷A	口径 24.8 体径 － 底径 －	器高 (6.0) 底厚 －	口縁端面に刺突文を3段に施し、7～9間隔おきに分割文風の5条の櫛描垂下直線文(8条/cm)。頸部に櫛描直線文(8条/cm)3条以上施す。	外 ハケ後ナデ 内 ハケ後ナデ	外 10YR8/1～ 10YR7/2 内 10TR7/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
204	広口壷A	口径 15.4 体径 － 底径 －	器高 (8.6) 底厚 －	口縁端面ハケの刺突。頸部6条1帯の櫛描直線文(6条/cm)。口縁部内面に重弧文(6条/cm)を施す。	外 ハケ(6条/cm) 後ナデ 内 ハケ(6条/cm) 後ナデ	外 10YR6/2～ 10YR5/2 内 10YR6/2～ 10YR5/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
205	広口壷A	口径 19.0 体径 － 底径 －	器高 (7.7) 底厚 －	口縁端面櫛描直線文(8条/cm)の後、上・下端ハケの刺突。頸部に単帯構成の9条1帯の櫛描直線文(8条/cm)3帯施した後、垂下直線文(8条/cm)を施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR6/3 内 7.5YR6/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
206	広口壷A	口径 24.4 体径 － 底径 －	器高 (16.2) 底厚 －	口縁端面櫛描直線文(7条/cm)。頸部に8条1帯の単帯構成の直線文(7条/cm)を5帯以上施す。	外 不明 内 ナデ	外 7.5YR8/1 内 7.5YR8/1	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
207	広口壷A	口径 － 体径 (27.0) 底径 7.9	器高 (41.0) 底厚 2.0	頸部から体部上位に4条1帯の櫛描直線文(8条/cm)を7帯施す。	外 タテハケ (5条/cm) 内 ハケ・ナデ？	外 10YR7/2 内 10YR7/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系 体部形態b
208	広口壷B	口径 20.6 体径 － 底径 －	器高 (10.6) 底厚 －	口縁端部ヘラによる刻目。頸部から体部上半に7条1帯の櫛描直線文(7条/cm)5帯を施す。	外 タテハケ (8条/cm) 内 ナナメハケ (8条/cm)	外 10YR5/3 内 10YR6/4	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
209	広口壷B	口径 24.8 体径 － 底径 －	器高 (11.5) 底厚 －	口縁部無文。頸部複帯構成の櫛描直線文(5条/cm)1帯。体部は6条1帯の単帯構成の直線文(5条/cm)2帯施す。	外 不明 内 不明	外 2.5YR6/8 内 2.5YR6/8～ 5YR7/6	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
210	広口壷B	口径 19.0 体径 － 底径 －	器高 (3.6) 底厚 －	口縁端部を大きく拡張。口縁端面に9条のヘラ描沈線文を施した後、3条単位でヘラによる押圧を施し、端部下端に刻目を施す。	外 ナデ 内 ヨコハケ(10条/cm)後ナデ	外 7.5YR8/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層上層

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
211	広口壷B	口径 17.8 体径 − 底径 −	器高 (6.5) 底厚 −	口縁端面5条のヘラ描沈線文を施した後、ハケによる刺突を2段施す。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	外 10YR5/2 内 10YR4/2	流路1132(新)Ⅱ層上層
212	広口壷C	口径 12.2 体径 − 底径 −	器高 (14.8) 底厚 −	口縁端面上・下端ハケによる刺突。頸部には7条1帯の櫛描直線文(5条/cm)。体部上半には横型流水文(4〜6条/cm)を施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 5YR5/3〜7.5YR6/3 内 5YR7/4	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
213	広口壷C	口径 15.0 体径 − 底径 −	器高 (25.9) 底厚 −	口縁端面1条のヘラ描沈線文の後、上・下端にヘラで刻目。頸部から体部中位に7条1帯の櫛描直線文(6条/cm)10帯を施した後、連弧文(6条/cm)を施す。	外 ハケ後ナデ 内 ハケ後ナデ	外 2.5Y7/2 内 2.5Y7/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
214	広口壷B	口径 18.5 体径 − 底径 −	器高 (9.0) 底厚 −	口縁端面はヘラによる斜格子文を施す。	外 粗いタテハケ(6条/cm) 内 粗いヨコハケ(6条/cm)	外 10YR7/3 内 10YR7/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 ハケ条痕系 搬入品(琵琶湖岸域)
215	広口壷B	口径 18.0 体径 − 底径 −	器高 (10.2) 底厚 −	無文。	外 タテハケ(7条/cm)・ナデ 内 ハケ後ナデ	外 7.5YR5/3 内 7.5YR5/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 ハケ条痕系
216	広口壷	口径 19.2 体径 − 底径 −	器高 (5.0) 底厚 −	口縁端面ヘラによる刺突文。頸部はヘラ描沈線文を施す。	外 ナデ・タテハケ(9条/cm) 内 ヨコミガキ	外 10YR7/3 内 10YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 遠賀川系
217	広口壷	口径 32.2 体径 − 底径 −	器高 (6.5) 底厚 −	口縁端面櫛描波状文(6条/cm)。頸部に直線文(6条/cm)を施す。	外 ハケ(6〜7条/cm) 内 ヨコハケ(6〜7条/cm)	外 10YR7/3 内 7.5YR7/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
218	広口壷	口径 24.0 体径 − 底径 −	器高 (6.4) 底厚 −	口縁端面に5条1帯の櫛描直線文(8条/cm)を施した後、下端にヘラで刻目。頸部に5条1帯の直線文(5条/cm)1帯以上施す。	外 ヨコハケ(14条/cm) 内 ナデ・ヨコハケまばらにミガキ	外 10YR4/2〜10YR5/2 断 7.5YR8/3 内 10YR5/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
219	広口壷	口径 21.2 体径 − 底径 −	器高 (5.3) 底厚 −	口縁端面櫛描直線文(5条/cm)の後、ヘラで刻目。頸部に櫛描直線文(5条/cm)。口縁部内面3条1帯の櫛描直線文(5条/cm)4帯を施す。	外 ナデ後ミガキ 内 ミガキ？	外 7.5YR4/1 内 10YR6/1〜10YR7/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
220	広口壷	口径 22.0 体径 − 底径 −	器高 (3.7) 底厚 −	口縁端面櫛描直線文(6条/cm)の後、上・下端ヘラで刻目。口縁部内面6条1帯の櫛描直線文・波状文・直線文(5条/cm)を施す。	外 タテハケ(9条/cm) 内 ハケ(9条/cm)・ナデ	外 7.5YR7/2 断 7.5YR5/1 内 7.5YR7/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
221	広口壷	口径 25.0 体径 − 底径 −	器高 (1.6) 底厚 −	口縁端面櫛描直線文(12条/cm)の後、上・下端ヘラで刻目。口縁部内面2個1対の瘤状突起。	外 ナデ 内 不明	外 7.5YR4/1 断 7.5YR7/2 内 7.5YR4/1	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
222	直口壷A	口径 14.6 体径 − 底径 −	器高 (6.2) 底厚 −	口縁端面櫛描直線文(10条/cm)。口縁外面に直線文(10条/cm)4帯以上施す(櫛描文はハケによる施文か)。	外 不明 内 ナナメハケ(6条/cm)	外 7.5YR7/4 内 7.5YR6/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
223	直口壷A	口径 18.0 体径 − 底径 −	器高 (6.0) 底厚 −	口縁部無文。口縁外面部に6条1帯の櫛描直線文(5条/cm)2帯施す。	外 ハケ後ナデ 内 粗いヨコハケ(5条/cm)	外 7.5YR8/3 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
224	直口壷A	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (4.7) 底厚 −	7条1帯の櫛描直線文(10条/cm)を3帯以上施す。	外 ミガキ？ 内 ミガキ？	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
225	細頸壷	口径 9.8 体径 − 底径 7.4	器高 (11.0) 底厚 −	受口状口縁部には、櫛描波状文(5条/cm)を2帯施し、刻目を加えた棒状浮文を加える。頸体部界に貼付突帯が2条巡る。体部は6条1帯の直線文(5条/cm)を4帯以上施す。	外 不明 内 不明	外 10YR8/3 内 10YR8/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系 搬入品(琵琶湖岸域)
226	無頸壷A	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (2.2) 底厚 −	5条1帯の単帯構成の櫛描直線文(6条/cm)を3帯以上施し、2個1対の円孔を穿つ。	外 ミガキ 内 不明	外 10YR7/2 内 10YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
227	無頸壷A	口径 12.7 体径 − 底径 −	器高 (12.5) 底厚 −	無文。	外 ミガキ？ 内 ナデ	外 7.5YR7/1〜7.5YR7/4 内 7.5YR7/4	流路1132(新)Ⅱ層上層
228	壷	口径 − 体径 − 底径 8.8	器高 (24.0) 底厚 1.7	体部上位から中位に6条1帯の単帯構成の櫛描直線文(6条/cm)を3帯以上施す。	外 ハケ(7条/cm)後ミガキ 内 粗いヨコハケ(5条/cm)	外 5YR6/6 内 5YR6/6	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系 体部形態b
229	壷	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (20.8) 底厚 −	体部上位から中位に8条1帯の櫛描波状文・直線文(7条/cm)を交互に10帯以上施す。	外 ヨコハケ(8条/cm) 内 ヨコハケ(10条/cm)	外 7.5YR6/1 内 7.5YR6/1	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系 体部形態c

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
230	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (29.0) 底厚 －	体部上位に4条1帯の単帯構成の櫛描直線文(4条/cm)8帯、中位に1帯施す。	外 ハケ後ナデ 内 粗いハケ (4条/cm)	外 7.5YR7/4 内 7.5YR7/4	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
231	壷	口径 － 体径 39.0 底径 9.0	器高 (33.1) 底厚 1.5	体部上半から中位に10条1帯の櫛描直線文(4条/cm)7帯施した後、2重の連弧文(4条/cm)、斜格子文(4条/cm)を施す。	外 ハケ(7条/cm) 後ナデ？ 内 ハケ(7条/cm) 後ナデ？	外 5YR7/4 内 3YR7/4	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系 体部形態c
232	広口壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.4) 底厚 －	口縁端面に4条の櫛描波状文(5条/cm)を施す。口縁部内面にはヘラで刻目を施した貼付突帯と断面三角形を呈する2条の貼付突帯を巡らす。	外 ヨコナデ 内 ヨコハケ	外 10YR5/2 内 10YR8/1	流路1132(新)Ⅱ層上層 中部瀬戸内地方
233	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (8.0) 底厚 －	体部にヘラ描沈線文4条以上と半裁竹管による刺突を施す。	外 ミガキ 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 東部瀬戸内地方
234	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (11.1) 底厚 －	体部上位に7条1帯の櫛描直線文(7条/cm)7帯以上施した後、連弧文(7条/cm)を施す。	外 タテミガキ？ 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
235	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (6.5) 底厚 －	体部に横型流水文(6条/cm)を施す。	外 ミガキ？ 内 不明	外 N1.5/ 内 N1.5/	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
236	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (5.0) 底厚 －	体部に横型流水文(6条/cm)を施す。	外 不明 内 不明	外 5YR8/3 内 5YR7/4	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
237	壷	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (11.6) 底厚 －	体部に8条1帯の横型流水文(6条/cm)を施す。	外 ミガキ？ 内 不明	外 5YR7/4 内 7.5YR6/1	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
238	甕A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.7) 底厚 －	口縁端面ヨコハケの後、ハケによる刺突。内面にハケによる波状文(6条/cm)を施す。	外 粗いナナメ・タテハケ(3条/cm) 内 粗いヨコハケ (3条/cm)	外 7.5YR7/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 ハケ条痕系
239	甕	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.2) 底厚 －	口縁端面にハケによる刺突。内面にハケによる波状文(6条/cm)を2帯施す。	外 粗いタテハケ (5条/cm) 内 粗いヨコハケ (5条/cm)	外 7.5YR8/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 ハケ条痕系
240	甕A	口径 27.0 体径 － 底径 －	器高 (4.6) 底厚 －	口縁端面ハケ刺突。口縁部内面に体部ハケと同じ原体で波状文(5条/cm)を施す。	外 粗いタテハケ (5条/cm) 内 粗いヨコハケ (4～5条/cm)	外 5YR6/4 内 5YR6/4	流路1132(新)Ⅱ層上層 ハケ条痕系
241	甕A	口径 16.0 体径 － 底径 －	器高 (4.7) 底厚 －	口縁端面ハケメ。口縁部内面に体部ハケと同じ原体で波状文(5条/cm)。	外 粗いタテハケ (5条/cm) 内 粗いヨコハケ (5条/cm)	外 5YR7/3 内 5YR6/1	流路1132(新)Ⅱ層上層 ハケ条痕系
242	甕A	口径 21.2 体径 － 底径 －	器高 (6.1) 底厚 －	口縁端面櫛描波状文(6条/cm)。口縁部内面4条1帯の櫛描波状文(6条/cm)2帯を施す。	外 粗いタテハケ (4条/cm) 内 粗いヨコハケ (4条/cm)	外 10YR6/3 内 10YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 ハケ条痕系
243	甕A	口径 22.8 体径 － 底径 －	器高 (8.1) 底厚 －	口縁端面ハケメの後に上・下端ヘラで刻目。 口縁部内面に2帯の波状文(5条/cm)。	外 粗いタテハケ (5条/cm) 内 粗いヨコハケ (5条/cm)	外 7.5YR7/3 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 ハケ条痕系
244	甕A	口径 24.6 体径 － 底径 －	器高 (23.3) 底厚 －	口縁端部にヘラで刻目。	外 粗いタテハケ (3条/cm) 内 粗いヨコハケ (3条/cm)	外 10YR6/3 内 10YR5/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 ハケ条痕系
245	甕B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (22.9) 底厚 －		外 粗いタテハケ (3条/cm) 内 粗いヨコハケ (3条/cm)	外 7.5YR4/6 内 7.5YR4/6	流路1132(新)Ⅱ層上層 ハケ条痕系
246	甕B	口径 29.4 体径 － 底径 －	器高 (25.2) 底厚 －	口縁端面にヘラ描沈線文1条を施し、上・下端にヘラで刻目。	外 タテハケ (8条/cm) 内 粗いヨコハケ (5条/cm)	外 10YR6/2～ 10YR7/2 内 10YR8/2～ 10YR6/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 ハケ条痕系？
247	甕A	口径 39.8 体径 － 底径 －	器高 (5.1) 底厚 －	口縁端面にヘラ描沈線文2条を施した後、ヘラで刻目と鋸歯文を加える。	外 粗いタテハケ (3条/cm) 内 粗いヨコハケ (3条/cm)	外 10YR7/1～ 10YR2/1 内 10YR5/1～ 10YR7/1	流路1132(新)Ⅱ層上層 ハケ条痕系
248	甕	口径 － 体径 － 底径 7.0	器高 (4.5) 底厚 1.0	底部布目痕。	外 ハケ(10条/cm) 内 ナデ	外 5YR7/4 内 5YR8/3	流路1132(新)Ⅱ層上層

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
249	鉢B	口径 17.0 体径 − 底径 −	器高 (5.9) 底厚 −	口縁端面無文。	外 ナデ 内 ナデ・ハケ (8条/cm)	外 7.5YR6/3 内 7.5YR6/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 遠賀川系
250	鉢B	口径 35.0 体径 − 底径 −	器高 (11.3) 底厚 −	口縁端面にヘラで刻目。	外 ハケ(8条/cm)・ナデ 内 ハケ(8条/cm)・ナデ	外 5YR7/4〜5YR7/6 内 5YR7/6	流路1132(新)Ⅱ層上層 遠賀川系
251	鉢B	口径 18.2 体径 − 底径 −	器高 (5.8) 底厚 −	口縁端面に1条のヘラ描沈線文を施した後、上下押圧。 体部に6条のヘラ描沈線文。	外 ヨコハケ後ナデ 内 ナデ	外 10YR5/3 内 10YR6/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 遠賀川系
252	鉢A	口径 17.4 体径 − 底径 −	器高 (7.3) 底厚 −	無文。	外 ミガキ 内 ミガキ	外 7.5YR6/3〜7.5YR7/4 内 7.5YR7/4	流路1132(新)Ⅱ層上層
253	鉢	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (3.2) 底厚 −	端部刻目。 体部に条数6・7条の櫛描直線文(12条/cm)を2帯以上施す。	外 ナデ？ 内 ナデ？	外 10YR7/3 内 10YR7/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 櫛描文系
254	ミニチュア	口径 − 体径 − 底径 1.6	器高 (3.5) 底厚 −		外 不明 内 不明	外 7.5YR8/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層上層
255	壷用蓋A	口径 11.1	器高 1.0	2ヶ所に2個1対の穿孔。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR6/3 内 7.5YR6/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 遠賀川系
256	厚口鉢	口径 10.0 体径 − 底径 −	器高 (5.2) 底厚 −		外 貝殻条痕(3条/cm)・ナデ 内 ナデ	外 2.5YR6/8 内 2.5YR6/8	流路1132(新)Ⅱ層上層 条痕文系 搬入品(東海地方)
257	広口壷A	口径 22.0 体径 − 底径 −	器高 (11.4) 底厚 −	口縁部無文。 頸部7条1帯の単帯構成の櫛描直線文(7条/cm)3帯以上施す。	外 タテハケ(8条/cm) 内 ヨコハケ(8条/cm)・ナデ	外 5YR7/4 内 2.5YR7/6	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
258	広口壷A	口径 18.0 体径 − 底径 −	器高 (6.0) 底厚 −	口縁端面2個1対の圧痕。 頸部4条1帯の櫛描直線文(8条/cm)1帯以上施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 10YR7/3〜10YR7/2 内 10YR7/3〜10YR7/2	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
259	広口壷A	口径 19.0 体径 − 底径 −	器高 (22.2) 底厚 −	口縁端面は棒状具の刺突文と下端にヘラによる刻目。頸部から体部は6条1帯の櫛描直線文(8条/cm)3〜4帯ごとに櫛描波状文(8条/cm)を施す。	外 ナデ 内 粗いハケ(4条/cm)後ナデ	外 2.5YR7/6 内 2.5YR7/6〜2.5YR6/6	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
260	広口壷A	口径 20.4 体径 − 底径 −	器高 (9.9) 底厚 −	口縁端面に5条1帯の櫛描波状文(6〜7条/cm)を施した後、下端にヘラで刻目。頸部に11条1帯の櫛描直線文(7条/cm)2帯以上施す。	外 不明 内 ヨコナデ	外 7.5YR7/4 内 7.5YR7/4	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
261	広口壷A	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (28.6) 底厚 −	頸部から体部中位に5条1帯の櫛描直線文5帯と波状文、直線文(8条/cm)を施す。	外 粗いタテハケ(4条/cm) 内 粗いヨコハケ(4条/cm)	外 10YR7/4 内 10YR8/1	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系 体部形態b
262	広口壷A	口径 27.8 体径 − 底径 −	器高 (21.0) 底厚 −	口縁端面1条のヘラ描沈線文を施した後ヘラによる刻目。刻目は全周しない。 頸部は9条の沈線文、竹管文、14条の沈線文を施す。	外 ヨコナデ後ミガキ？ 内 ヨコナデ後ミガキ？	外 7.5YR6/3 内 7.5YR6/3	流路1132(新)Ⅰ層 東部瀬戸内地方
263	広口壷B	口径 16.7 体径 − 底径 −	器高 (16.9) 底厚 −	口縁端面1条のヘラ描沈線文と上・下端ヘラによる刻目。頸部から体部上位に6条1帯の櫛による複帯構成の櫛描直線文(4条/cm)。	外 粗いハケ(5条/cm) 内 ナデ	外 10YR6/2〜10YR6/3 内 10YR7/2	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
264	広口壷B	口径 20.4 体径 − 底径 −	器高 (18.2) 底厚 −	口縁端面櫛描直線文(9条/cm)の後、上・下端ヘラで刻目。頸部に11条1帯の直線文2帯、波状文1帯。頸部と体部の境界に刻目貼付突帯1条。体部に11条1帯の直線文(9条/cm)を6帯以上施す。	外 ナデ 内 ナデ・粗いハケ	外 7.5YR6/4 内 7.5YR6/4	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
265	広口壷B	口径 17.2 体径 26.0 底径 9.6	器高 32.5 底厚 2.5	口縁端部無文。 体部上位に調整に用いたハケによる直線文(10条/cm)4帯を施す。	外 タテ・ナナメハケ(10条/cm) 内 ナデ・粗いハケ(4条/cm)	外 7.5YR8/3 内 7.5YR8/3	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系 体部形態c
266	広口壷B	口径 28.4 体径 − 底径 −	器高 (12.7) 底厚 −	口縁端面棒状工具の刺突文の後、上・下端ヘラによる刻目。頸部から体部は櫛描直線文(5条/cm)3帯以上施す。	外 不明 内 不明	外 7.5YR7/6 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
267	広口壷B	口径 22.0 体径 − 底径 −	器高 (13.1) 底厚 −	口縁端面3条の櫛描直線文(6条/cm)。 頸部から体部上位5条1帯の櫛描直線文(10条/cm)4帯。口縁部内面ヘラによる押圧を施す。	外 ナデ？ 内 ハケ(11条/cm)・ナデ	外 5YR7/2 内 5YR7/4	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
268	広口壷B	口径 34.6 体径 − 底径 −	器高 (8.1) 底厚 −	口縁端面櫛描直線文の後、下端棒状工具による押圧。頸部櫛描直線文。口縁部外面に「レ」字状のヘラ描沈線文。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR8/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
269	広口壷B	口径 22.2 体径 − 底径 −	器高 (23.2) 底厚 −	口縁端面に2条のヘラ描沈線文。体部上位に6条の沈線文、半裁竹管による刺突文、12条の沈線文、竹管文を施す。	外 ハケ(7条/cm) 後ミガキ 内 ナデ	外 10YR6/2 内 10YR7/1	流路1132(新)Ⅰ層 東部瀬戸内地方
270	広口壷C	口径 9.4 体径 − 底径 −	器高 (8.8) 底厚 −	口縁上面6条の櫛描直線文(6条/cm)。頸部から体部上位6条1帯の櫛描直線文(6条/cm)4帯以上施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 10YR7/2 内 7.5YR7/3〜 10YR8/2	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
271	広口壷C	口径 10.0 体径 − 底径 −	器高 (9.2) 底厚 −	口縁端面上・下端ハケによる刺突。頸部複帯構成の櫛描直線文(5条/cm)。体部上位に複帯構成の櫛描直線文を施す。	外 ハケ後ナデ 内 ナデ	外 10YR5/2 内 10YR6/2	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
272	広口壷C	口径 12.2 体径 − 底径 −	器高 (4.1) 底厚 −	口縁端面にヘラによる刻目。頸部4条1帯の櫛描直線文(8条/cm)を施す。	外 タテハケ (11条/cm) 内 不明	外 10YR6/3 内 10YR6/3	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
273	広口壷C	口径 10.2 体径 − 底径 −	器高 (4.9) 底厚 −	口縁端面にヘラによる刻目。体部5条1帯の櫛描直線文(6条/cm)2帯施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR8/2 内 10YR8/2	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
274	直口壷A	口径 6.0 体径 − 底径 −	器高 (4.2) 底厚 −	6条1帯の櫛描直線文(8条/cm)を3帯施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR7/4 内 7.5YR8/3	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
275	直口壷A	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (8.0) 底厚 −	口縁端部上面に櫛描直線文(7条/cm)を施し、体部に7条1帯の直線文(7条/cm)を4帯以上施す。	外 不明 内 ナデ？	外 10YR6/1〜 7.5YR8/2 内 5YR5/2	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
276	壷	口径 − 体径 (23.0) 底径 −	器高 (18.1) 底厚 −	体部上位から中位に4条1帯の櫛描直線文3帯、変形の波状文1帯、直線文(6〜8条/cm)1帯。	外 タテハケ (9条/cm) 内 ナデ	外 7.5YR4/3 内 7.5YR4/3	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系 体部形態c
277	壷	口径 − 体径 (28.6) 底径 −	器高 24.8 底厚 −	体部上位から中位に単帯構成の9条1帯の櫛描直線文(7条/cm)6帯を施す。	外 ナナメハケ(6条/cm)後ミガキ 内 ナデ・ ハケ(6条/cm)	外 10YR7/2 内 2.5Y8/2	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系 体部形態c
278	無頸壷A	口径 10.6 体径 − 底径 −	器高 (7.3) 底厚 −	6条の櫛描直線文(10条/cm)を6帯施す。	外 不明 内 指オサエ・ナデ	外 5YR8/3 内 5YR8/2	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
279	無頸壷A	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (1.6) 底厚 −	8条1帯の櫛描直線文(6条/cm)を2帯以上施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 5YR7/6 内 5YR7/6	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
280	無頸壷A	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (4.2) 底厚 −	6条1帯の櫛描直線文(6条/cm)を4帯以上施す。	外 ミガキ 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
281	無頸壷A	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (3.0) 底厚 −	9条1帯の櫛描直線文(9条/cm)を4帯以上施す。	外 ミガキ？ 内 ナデ	外 7.5YR6/3 内 7.5YR6/1	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
282	無頸壷A	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (4.1) 底厚 −	6条1帯の単帯構成の櫛描直線文(6条/cm)4帯以上と扇形文を施し、擬流水文を作る。	外 ナデ 内 ナデ	外 5YR7/3 内 5YR7/4	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
283	広口壷	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (1.3) 底厚 −	口縁端面は櫛描波状文(10条/cm)の後、上・下端にヘラで刻目。内面は波状文・円弧文(10条/cm)を施す。	外 粗いヨコハケ (4条/cm) 内 不明	外 10YR6/2 内 10YR8/2	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
284	壷	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (6.0) 底厚 −	体部上位にヘラ描沈線文13条と竹管文。	外 ミガキ？ 内 不明	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅰ層 東部瀬戸内地方
285	壷	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (6.3) 底厚 −	頸部から体部上位にかけ6条1帯の櫛描直線文(10条/cm)と三角形列点文を施す。	外 ミガキ 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅰ層 東部瀬戸内地方
286	壷	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (4.8) 底厚 −	ヘラによる工字文風の文様を施す。	外 ナデ 内 不明	外 5YR8/3 内 7.5YR8/1	流路1132(新)Ⅰ層
287	壷	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (5.0) 底厚 −	6条1帯の櫛描直線文(8条/cm)5帯以上施し、扇形文を加えて擬流水文を作る。扇形文は直線文をナデ消した後施す。	外 ハケ 内 ナデ	外 7.5YR6/3 内 10YR8/3	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
288	壷	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (5.5) 底厚 −	体部上位に4条1帯の櫛描直線文(4条/cm)4帯以上施した後、3条1帯の垂下直線文(6条/cm)を施す。	外 ミガキ？ 内 不明	外 10YR7/3 内 10YR7/2	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
289	壷	口径 − 体径 − 底径 −	器高 (3.9) 底厚 −	体部に刻目貼付突帯3条と円形浮文を付す。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/1	流路1132(新)Ⅰ層

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
290	壷	口径 － 体径 － 底径 6.8	器高 (6.4) 底厚 1.0	木葉痕。	外 タテミガキ 内 ヨコハケ(4条/cm)・ナデ	外 7.5YR6/2 内 7.5YR6/2	流路1132(新) I 層
291	壷	口径 － 体径 － 底径 6.4	器高 (2.6) 底厚 1.2	木葉痕。	外 タテミガキ 内 ナデ	外 7.5YR6/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新) I 層
292	甕	口径 － 体径 － 底径 5.4	器高 (2.7) 底厚 1.1	木葉痕。	外 ハケ(8条/cm) 内 ナデ	外 7.5YR7/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新) I 層
293	甕A	口径 24.8 体径 － 底径 －	器高 (10.3) 底厚 －	口縁部無文。	外 ナデ・ナナメハケ(7条/cm) 内 ナデ・ヨコハケ(7条/cm)	外 5YR7/6 内 5YR7/6	流路1132(新) I 層 遠賀川系
294	甕A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (5.6) 底厚 －	口縁部にヘラによる刻目。 体部上位にヘラ描沈線文を4条施す。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR5/2 内 7.5YR6/3	流路1132(新) I 層 遠賀川系
295	甕A	口径 32.4 体径 － 底径 －	器高 (10.0) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。	外 ヨコハケ(9条/cm) 内 ヨコナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/4	流路1132(新) I 層 遠賀川系
296	甕A	口径 － 体径 － 底径 7.2	器高 (21.3) 底厚 0.9		外 タテハケ？(7条/cm) 内 ナデ？	外 7.5YR8/4 内 7.5YR8/4	流路1132(新) I 層 遠賀川系
297	甕A	口径 18.8 体径 － 底径 －	器高 (8.2) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。	外 粗いタテハケ(6条/cm) 内 粗いヨコハケ(5条/cm)	外 10YR7/3 内 10YR7/3	流路1132(新) I 層 ハケ条痕系
298	甕B	口径 29.0 体径 － 底径 －	器高 (16.3) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。	外 粗いタテハケ(3条/cm) 内 粗いヨコハケ(3条/cm)	外 2.5Y8/1 内 10YR6/1～10YR8/1	流路1132(新) I 層 ハケ条痕系
299	甕B	口径 23.6 体径 － 底径 －	器高 (8.2) 底厚 －	口縁端面にナデ後単独圧痕。 口縁部内面上端にハケの刺突。	外 粗いタテハケ(3条/cm) 内 粗いヨコハケ(3条/cm)	外 7.5YR8/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新) I 層 ハケ条痕系
300	甕A	口径 18.1 体径 － 底径 －	器高 (6.8) 底厚 －	口縁端面に単独圧痕。	外 粗いタテハケ(4条/cm) 内 粗いヨコハケ(4条/cm)	外 7.5YR5/2 内 7.5YR5/2	流路1132(新) I 層 ハケ条痕系
301	甕A	口径 19.0 体径 － 底径 －	器高 (6.5) 底厚 －	口縁端面にナデ後、単独圧痕。	外 粗いタテハケ(2～3条/cm) 内 粗いヨコハケ(2～3条/cm)	外 7.5YR5/2 内 7.5YR4/2	流路1132(新) I 層 ハケ条痕系
302	甕A	口径 21.2 体径 － 底径 －	器高 (7.5) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。 単独圧痕。	外 粗いタテハケ(5条/cm) 内 粗いヨコハケ(5条/cm)	外 10YR6/2 内 10YR6/2	流路1132(新) I 層 ハケ条痕系
303	甕A	口径 23.3 体径 － 底径 －	器高 (5.5) 底厚 －	口縁端面にハケの後、ヘラによる刻目。 単独圧痕。	外 粗いタテハケ(2条/cm) 内 粗いヨコハケ(2条/cm)	外 10YR6/3 内 10YR8/2	流路1132(新) I 層 ハケ条痕系
304	甕B	口径 21.0 体径 － 底径 －	器高 (7.0) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。 3個以上を1対とした圧痕4ヶ所か。	外 粗いタテハケ(4条/cm) 内 粗いヨコハケ(4条/cm)	外 10YR5/3 内 10YR8/2	流路1132(新) I 層 ハケ条痕系
305	甕B	口径 19.7 体径 － 底径 －	器高 (10.1) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目、2個1対の圧痕。	外 粗いタテハケ(4条/cm) 内 粗いヨコハケ(4条/cm)	外 10YR6/3 内 10YR1/3	流路1132(新) I 層 ハケ条痕系
306	甕	口径 48.0 体径 － 底径 －	器高 (3.2) 底厚 －	口縁端面面取り後ハケで刺突。 単独圧痕。	外 粗いタテハケ(2条/cm) 内 ヨコハケ(10条/cm)	外 10YR7/3 内 10YR7/3	流路1132(新) I 層 ハケ条痕系
307	甕A	口径 23.0 体径 － 底径 －	器高 (3.8) 底厚 －	口縁端面にハケによる刺突と、4個1対の圧痕。口縁内面にハケによる波状文(4条/cm)3帯。	外 粗いタテハケ(4条/cm) 内 粗いヨコハケ(4条/cm)	外 7.5YR6/3 内 7.5YR8/2	流路1132(新) I 層 ハケ条痕系
308	甕	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.6) 底厚 －	口縁端面に3個以上1対の圧痕。 内面にハケで波状文(4条/cm)を施す。	外 粗いタテハケ(4条/cm) 内 粗いヨコハケ(4条/cm)	外 7.5YR8/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新) I 層 ハケ条痕系

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
309	甕	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.8) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。 内面にハケで波状文(5条/cm)を2帯施す。	外 粗いタテハケ(4条/cm) 内 粗いヨコハケ(4条/cm)	外 7.5YR8/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅰ層 ハケ条痕系
310	甕	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.3) 底厚 －	口縁端面はヘラによる刻目。 内面にハケで波状文(4条/cm)を3帯施す。	外 粗いタテハケ(4条/cm) 内 粗いヨコハケ(4条/cm)	外 7.5YR5/3 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅰ層 ハケ条痕系
311	甕	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.9) 底厚 －	口縁端部にヘラによる刻目。 内面にハケで波状文(5条/cm)を施す。	外 粗いタテハケ(5条/cm) 内 粗いヨコハケ(5条/cm)	外 7.5YR7/2 内 7.5YR7/2	流路1132(新)Ⅰ層 ハケ条痕系
312	甕A	口径 22.8 体径 － 底径 －	器高 (4.7) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。 口縁部内面に体部調整と同じハケ原体で波状文(4条/cm)2帯施す。	外 粗いタテハケ(4条/cm) 内 粗いヨコハケ(3～4条/cm)	外 7.5YR4/2 内 7.5YR7/2	流路1132(新)Ⅰ層 ハケ条痕系
313	甕A	口径 27.6 体径 － 底径 －	器高 (12.6) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。 口縁部内面にハケで波状文(2条/cm)を施す。	外 粗いタテハケ(2条/cm) 内 粗いヨコハケ(2条/cm)	外 7.5YR4/6 内 7.5YR4/6	流路1132(新)Ⅰ層 ハケ条痕系
314	甕B	口径 24.0 体径 － 底径 6.0	器高 (23.8) 底厚 1.7	口縁端面を面取りした後、ヘラによる刻目。口縁内面にハケで波状文(5条/cm)を2帯施す。	外 粗いハケ(5条/cm) 内 粗いヨコハケ(5条/cm)	外 10YR6/2～10YR7/2 内 10YR7/2	流路1132(新)Ⅰ層 ハケ条痕系
315	甕A	口径 20.8 体径 － 底径 －	器高 4.4 底厚 －		外 ナデ 内 指オサエ	外 7.5YR8/3 内 7.5YR8/3	流路1132(新)Ⅰ層 中部瀬戸内地方
316	甕A	口径 18.6 体径 － 底径 －	器高 6.0 底厚 －	口縁端部にハケの刺突。 体部上位7条1帯の櫛描直線文(7条/cm)2帯と波状文を施す。	外 ハケ(9条/cm) 内 ヨコハケ(9条/cm)	外 10YR5/2 内 10YR6/3	流路1132(新)Ⅰ層 東部瀬戸内地方
317	甕	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (5.6) 底厚 －		外 貝殻条痕(3条/cm) 内 ナデ	外 2.5YR7/4 内 2.5YR7/4	流路1132(新)Ⅰ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
318	甕	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.7) 底厚 －	口縁端部に瘤状山形突起。端面ハケ。 内面にハケによる波状文(4条/cm)と、内面区画文として垂下直線文を施す。	外 粗いタテハケ(4条/cm) 内 粗いヨコハケ(4条/cm)	外 7.5YR7/2 内 7.5YR7/2	流路1132(新)Ⅰ層 ハケ条痕系 搬入品(琵琶湖岸域)
319	甕	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.5) 底厚 －	口縁端面にハケによる押圧。 内面に瘤状山形突起を付加する。 内面にハケによる波状文(6条/cm)と内面区画文として垂下直線文を施す。	外 粗いタテハケ(3条/cm) 内 粗いハケ(3条/cm)	外 7.5YR8/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅰ層 ハケ条痕系 搬入品(琵琶湖岸域)
320	鉢A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (4.2) 底厚 －		外 粗いナナメハケ(6条/cm) 内 粗いヨコハケ(6条/cm)	外 10YR8/1 内 10YR8/1	流路1132(新)Ⅰ層 ハケ条痕系 搬入品(琵琶湖岸域)
321	鉢A	口径 15.0 体径 － 底径 －	器高 (10.0) 底厚 －	3条1帯の櫛描直線文(6条/cm)6帯を施す。	外 ハケ(7条/cm)後ナデ？ 内 ヨコハケ(7条/cm)	外 7.5YR8/2 内 7.5YR8/2	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
322	鉢A	口径 17.6 体径 － 底径 －	器高 (6.5) 底厚 －	5条1帯の櫛描流水文(10条/cm)を施す。	外 タテハケ 内 ナデ	外 10YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅰ層 櫛描文系
323	鉢B	口径 39.0 体径 － 底径 －	器高 (10.7) 底厚 －	無文。	外 ハケ(10条/cm) 内 ハケ(4条/cm)	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅰ層 遠賀川系
324	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.1) 底厚 －		外 貝殻条痕(3条/cm) 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 10R6/6	流路1132(新)Ⅰ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
325	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.0) 底厚 －		外 貝殻条痕(3条/cm) 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅰ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
326	厚口鉢	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.6) 底厚 －		外 貝殻条痕(3条/cm) 内 ナデ	外 10YR6/3 内 10YR6/3	流路1132(新)Ⅰ層 条痕文系 搬入品(東海地方)
327	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.4) 底厚 －		外 貝殻条痕(2条/cm) 内 ナデ	外 10YR6/3 内 10YR6/3	土坑1512 条痕文系 搬入品(東海地方)

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
328	円盤	長径 3.9 短径 3.9	厚さ 0.8		側面研磨	外 7.5YR4/2 内 2.5Y5/1	流路1132(古)湿地下層 壷体部片利用
329	円盤	長径 4.7 短径 3.9	厚さ 0.6		側面研磨	外 煤厚く付着 内 7.5YR4/2	流路1132(古)湿地下層 甕体部片利用
330	円盤	長径 4.2 短径 3.5	厚さ 0.7		側面研磨	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	流路1132(新)Ⅲ層 壷体部片利用
331	円盤	長径 5.3 短径 (4.3)	厚さ 1.0	櫛描直線文と波状文。	側面研磨	外 10YR4/3 内 10YR7/1	流路1132(新)Ⅱ層 壷体部片利用
332	円盤	長径 4.6 短径 4.6	厚さ 0.8	5条1帯の櫛描直線文と波状文。	側面研磨	外 10YR4/2 内 2.5Y4/1	流路1132(新)Ⅱ層 壷体部片利用
333	円盤	長径 3.8 短径 3.5	厚さ 1.1		側面研磨	外 2.5YR8/3 内 2.5YR8/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 壷?体部片利用
334	円盤	長径 4.5 短径 4.4	厚さ 1.1		側面研磨	外 10YR8/3 内 10YR8/3	流路1132(新)Ⅱ層上層 甕?体部片利用
335	円盤	長径 5.1 短径 5.0	厚さ 0.8		側面研磨	外 5YR7/4 内 5YR7/4	流路1132(新)Ⅱ層上層 甕体部片利用
336	円盤	長径 4.6 短径 (2.8)	厚さ 1.1		側面研磨	外 7.5YR4/2 内 10YR8/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 土器片利用
337	円盤	長径 3.8 短径 3.7	厚さ 0.9	ヘラ描沈線文1条。	側面研磨	外 10YR5/2 内 10YR7/2	流路1132(新)Ⅱ層上層 壷体部片利用
338	円盤	長径 4.8 短径 (4.3)	厚さ 1.2		側面研磨	外 10YR4/3 内 10YR6/1	流路1132(新)Ⅱ層上層 壷体部片利用
339	広口壷B	口径 12.9 体径 23.7 底径 7.0	器高 (25.5) 底厚 −	口縁部に3条の凹線文。	外 ナデ 内 ナデ・ハケ (4条/cm)	外 7.5YR7/6 内 7.5YR7/6	方形周溝墓3543 凹線文系 体部形態c
340	広口壷B	口径 15.4 体径 26.6 底径 7.0	器高 27.7 底厚 0.9	口縁部に2条の凹線文。	外 ナデ・ハケ (8条/cm) 内 ナデ・指オサエ	外 7.5YR8/4 内 7.5YR8/4	方形周溝墓3543 凹線文系 体部形態c
341	広口壷B	口径 16.7 体径 28.0 底径 −	器高 (21.7) 底厚 −	口縁部に2条の凹線文。	外 ナデ・ハケ(8条/cm)・一部ミガキ 内 不明	外 7.5YR8/3 内 7.5YR8/3	方形周溝墓3543 凹線文系 体部形態c
342	直口壷B	口径 17.5 体径 32.6 底径 7.1	器高 47.2 底厚 0.6	口頸部に5条の凹線文。 体部上位にはヘラによる刺突文を施す。	外 ナデ・ハケ (4条/cm) 内 ヨコナデ・ハケ(4条/cm)・指ナデ	外 7.5YR7/4 内 7.5YR7/4	方形周溝墓3543 凹線文系 体部形態d
343	直口壷C	口径 12.6 体径 18.0 底径 4.9	器高 20.6 底厚 0.9	口頸部に5条の凹線文。 体部上位に把手。	外 ナデ 内 ナデ・ハケ (8条？/cm)	外 7.5YR7/6 内 7.5YR7/6	方形周溝墓3543 凹線文系 体部形態c
344	甕C	口径 14.0 体径 20.2 底径 −	器高 (23.0) 底厚 −	口縁部に強い横ナデ。 はねあげ口縁状を呈する。	外 ナデ・タテハケ (9条/cm) 内 ヨコナデ・ハケ (9条/cm)・ケズリ	外 7.5YR5/4 内 7.5YR5/4	方形周溝墓3543 凹線文系
345	甕C	口径 11.0 体径 − 底径 −	器高 (9.0) 底厚 −	口縁部に2条の凹線文。 体部上位にハケによる2段の刺突文を施す。	外 ナデ・タテハケ (5条/cm) 内 ヨコナデ・ハケ？	外 7.5YR6/4 内 7.5YR6/4	方形周溝墓3543 凹線文系
346	高杯	口径 13.4 体径 − 底径 8.3	器高 12.8 底厚 −	脚中位には櫛描直線文を2帯施す。 脚裾部に2孔5単位の穿孔。	外 不明 内 ヘラケズリ・ハケ	外 10YR8/2 内 10YR8/2	方形周溝墓3543

報告No.	器形	法量(cm)		器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
756	甕A	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (5.5) 底厚 －	端部剥離。	外 ハケ(7条/cm) 内 ナデ	外 5YR7/6 内 5YR7/6	1次調査SD1(新) 東部瀬戸内地方
757	甕	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (7.0) 底厚 －	口縁端面にヘラによる刻目。	外 櫛条痕 (5条/cm) 内 ナデ	外 10YR7/1 内 10YR7/1	1次調査SD1(新)下層 条痕文系 搬入品(琵琶湖岸域)
758	鉢A	口径 16.1 体径 18.1 底径 7.1	器高 18.3 底厚 1.6		外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	1次調査SD1(新) 遠賀川系 搬入品(東海地方)
759	鉢A	口径 9.8 体径 － 底径 －	器高 (3.6) 底厚 －		外 櫛条痕 (4条/cm) 内 ナデ	外 5YR8/3 内 5YR8/3	1次調査SD1(新) ハケ条痕系？ 搬入品(琵琶湖岸域)
760	内傾口縁土器A	口径 13.5 体径 － 底径 －	器高 (5.9) 底厚 －	内面に粘土紐接合痕。	外 ナデ 内 ナデ	外 7.5YR8/2 内 10YR8/1	1次調査SD1(古) 条痕文系 搬入品(東海地方)
761	内傾口縁土器B	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.6) 底厚 －		外 貝殻条痕 (3条/cm) 内 ナデ	外 10YR8/1 内 10YR6/2	1次調査SD1(新) 条痕文系 搬入品(東海地方)
762	厚口鉢	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (2.0) 底厚 －	内面に粘土紐接合痕。	外 不明 内 ナデ	外 5YR8/4 内 5YR8/4	1次調査SD1(新)上層 条痕文系 搬入品(東海地方)
763	甕C	口径 － 体径 － 底径 －	器高 (3.6) 底厚 －		外 タタキ 内 ハケ (4条/cm)	外 10YR8/2 内 10YR8/1	1次調査SD1(新)最上層 Ⅴ様式系
764	甕C	口径 14.0 体径 － 底径 －	器高 (4.3) 底厚 －	受口状口縁。	外 不明 内 不明	外 7.5YR8/3 内 7.5YR8/3	1次調査SD1(新)最上層 近江系
765	甕C	口径 16.0 体径 － 底径 －	器高 (2.7) 底厚 －		外 ナデ・ハケ 内 ケズリ	外 10YR6/2 内 10YR6/2	1次調査SD1(新)最上層 庄内形
766	甕	口径 － 体径 － 底径 2.6	器高 (3.7) 底厚 0.4		外 不明 内 ハケ (10条/cm)	外 7.5YR7/3 内 7.5YR7/3	1次調査SD1(新)最上層
767	甕	口径 － 体径 － 底径 3.4	器高 (1.8) 底厚 0.6		外 不明 内 ハケ (10条/cm)	外 10YR6/2 内 7.5YR5/3	1次調査SD1(新)最上層
768	器台	口径 8.8 体径 － 底径 11.6	器高 9.4 底厚 －	受部内湾。 中空。 脚部3方透かし。	外 タテミガキ 内 ナデ	外 10YR6/8 内 10YR6/8	1次調査SD1(新)最上層 東海系 Ⅴ様式系

付表２　平安時代から江戸時代の土器・土製品観察表

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
347	土師器	皿A	口径　14.8 底径　－ 器高　1.7		外面ヘラケズリ。内面ナデ。	胎　7.5YR8/4	井戸3440
348	土師器	皿A	口径　14.8 底径　－ 器高　1.5		外面ヘラケズリ。内面ナデ。	胎　5YR7/6	井戸3440
349	土師器	杯A	口径　13.5 底径　－ 器高　3.0		外面ヘラケズリ。内面ナデ。	胎　10YR8/2	井戸3440
350	土師器	杯A	口径　14.7 底径　－ 器高　3.1		外面ヘラケズリ。内面ナデ。	胎　7.5YR8/4	井戸3440
351	土師器	杯A	口径　15.9 底径　－ 器高　2.8		外面ヘラケズリ。内面ナデ。	胎　7.5YR8/3	井戸3440
352	土師器	皿A	口径　14.2 底径　－ 器高　2.1		ナデ・オサエ。	胎　10YR8/2	井戸3440
353	土師器	皿A	口径　14.8 底径　－ 器高　1.9		ナデ・オサエ。	胎　10YR8/3	井戸3440 煤付着
354	土師器	杯A	口径　13.8 底径　－ 器高　2.9		ナデ・オサエ。	胎　10YR8/2	井戸3440
355	土師器	杯A	口径　13.6 底径　－ 器高　3.2		ナデ・オサエ。	胎　7.5YR8/4	井戸3440
356	土師器	杯A	口径　14.8 底径　－ 器高　3.6		ナデ・オサエ。	胎　10YR8/2	井戸3440
357	土師器	皿	口径　8.1 底径　－ 器高　1.6	歪み激しい。	ナデ・オサエ。	胎　2.5Y8/1	井戸3440
358	黒色土器 A類	杯	口径　17.0 底径　－ 器高　(4.2)	内面に暗文。	内面ミガキ。	胎　N3/0 10YR6/3	井戸3440
359	黒色土器 A類	杯	口径　19.9 底径　－ 器高　5.1		内外面ミガキ。	胎　N3/0 10YR7/3	井戸3440
360	須恵器	杯蓋	口径　13.7 底径　－ 器高　1.6	摘み欠損。	外面ヘラ切り後に、回転ケズリ。内面ロクロナデ。	胎　N6/0	井戸3440 内面に朱墨付着
361	須恵器	杯B	口径　11.8 底径　9.0 器高　4.6		貼付高台。ロクロナデ。	胎　N7/0	井戸3440
362	須恵器	杯B	口径　12.7 底径　7.8 器高　5.2		底部ヘラ切り痕。貼付高台。ロクロナデ。	胎　N7/0	井戸3440
363	須恵器	鉢	口径　36.3 底径　－ 器高　(5.6)		ロクロナデ。	胎　N7/0	井戸3440
364	須恵器	鉢	口径　－ 底径　15.0 器高　(7.8)		ロクロナデ。外面下部ヘラケズリ。	胎　N7/0	井戸3440
365	須恵器	円面硯	口径　14.0 底径　－ 器高　－	長方形の透かしあり(10ヶ所か)。透かしの間に直線の線刻。	ロクロナデ。一部に自然釉付着。	胎　N6/0	井戸3440 硯面に墨痕
366	灰釉陶器	蓋	口径　－ 底径　－ 器高　(1.4)	疑宝珠形のつまみ。	ロクロナデ。	胎　2.5Y7/1 釉　2.5GY6/1	井戸3440
367	灰釉陶器	壷	口径　－ 底径　5.9 器高　(5.0)		底部回転糸切り痕。ロクロナデ。	胎　5Y7/1 釉　7.5Y6/3	井戸3440
368	緑釉陶器	椀	口径　8.4 底径　4.2 器高　2.7		底部回転糸切り痕。ロクロナデ後施釉。	胎　10YR8/2 釉　7.5YR8/2	井戸3440 山城系 「政所」の墨書あり
369	緑釉陶器	椀	口径　13.7 底径　－ 器高　(3.2)		ミガキ後施釉。	胎　5Y7/1 釉　2.5GY7/1	井戸3440

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
370	緑釉陶器	椀	口径 － 底径 5.9 器高 (2.2)		削出高台。 ミガキ後施釉。	胎 2.5Y8/2 釉 5Y7/1	井戸3440 山城系
371	土師器	皿A	口径 10.4 底径 － 器高 1.3		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/3	平安時代整地層
372	土師器	皿A	口径 11.0 底径 － 器高 1.3		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/3	平安時代整地層
373	土師器	皿A	口径 14.2 底径 － 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/3	平安時代整地層
374	土師器	皿A	口径 14.8 底径 － 器高 2.2		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/3	平安時代整地層
375	土師器	皿A	口径 14.8 底径 － 器高 2.2		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/3	平安時代整地層
376	土師器	皿A	口径 14.8 底径 － 器高 2.6		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/2	平安時代整地層
377	土師器	皿A	口径 10.0 底径 － 器高 1.3		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	井戸3191
378	土師器	皿A	口径 10.6 底径 － 器高 1.4		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/1	井戸3191
379	土師器	皿A	口径 10.5 底径 － 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	井戸3191
380	土師器	皿A	口径 10.5 底径 － 器高 1.0		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/1	井戸3191
381	土師器	皿A	口径 10.8 底径 － 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/1	井戸3191
382	土師器	皿A	口径 10.3 底径 － 器高 1.1		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/1	井戸3191
383	土師器	皿L	口径 13.7 底径 － 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/1	井戸3191 口縁部に煤付着
384	土師器	皿N	口径 11.4 底径 － 器高 1.9		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/1	井戸3191
385	土師器	皿N	口径 15.0 底径 － 器高 2.6		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	井戸3191 口縁部に煤付着
386	土師器	皿N	口径 14.6 底径 － 器高 2.7		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	井戸3191 煤付着
387	土師器	皿N	口径 15.8 底径 － 器高 2.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	井戸3191
388	土師器	皿N	口径 13.8 底径 － 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/3	井戸3191 煤付着
389	土師器	皿N	口径 13.8 底径 － 器高 2.4		ナデ・オサエ。	胎 10YR5/1	井戸3191 煤付着
390	土師器	皿N	口径 16.3 底径 － 器高 (2.6)		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	井戸3191
391	土師器	甕	口径 19.2 底径 － 器高 (4.7)		ナデ・胴部タタキ。	胎 10YR5/2	井戸3191 煤付着
392	土師器	甕	口径 20.5 底径 － 器高 (4.6)		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	井戸3191 煤付着

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
393	土師器	甕	口径 13.2 底径 － 器高 (5.5)		ナデ・オサエ。粘土紐接合痕。	胎 7.5YR5/2 10YR4/1	井戸3191 煤付着
394	土師器	羽釜	口径 24.0 底径 － 器高 (5.8)		ナデ・オサエ。鍔は貼付。	胎 10YR6/2	井戸3191 煤付着
395	黒色土器 A類	椀	口径 13.9 底径 － 器高 (4.3)		外面ナデ・オサエ。 内面ミガキ。	胎 10YR2/1 7.5YR7/4	井戸3191
396	黒色土器 A類	椀	口径 13.4 底径 － 器高 (4.3)		外面ナデ・オサエ。 内面ミガキ。	胎 10YR2/1 7.5YR7/4	井戸3191
397	黒色土器 B類	椀	口径 15.7 底径 6.6 器高 5.4	底部内面に同心円状の暗文。	貼付高台。内外面ミガキ。	胎 10YR2/1	井戸3191
398	黒色土器 B類	鉢	口径 23.4 底径 － 器高 (6.0)		外面ミガキ。内面板ナデ。	胎 10YR2/1	井戸3191
399	黒色土器	甕	口径 12.9 底径 － 器高 (5.4)		ナデ・オサエ。	胎 N3/0	井戸3191 煤付着
400	須恵器	皿A	口径 9.8 底径 － 器高 1.1		底部ヘラ切り痕にナデ。成型台痕。ロクロナデ。	胎 10YR8/2	井戸3191
401	須恵器	鉢	口径 23.3 底径 － 器高 (7.5)	玉縁状口縁。	ロクロナデ。	胎 2.5Y7/1	井戸3191
402	須恵器	鉢	口径 20.4 底径 － 器高 (5.2)	玉縁状口縁。	ロクロナデ。	胎 N7/0	井戸3191
403	須恵器	鉢	口径 － 底径 9.8 器高 (6.7)		底部回転糸切り痕。 ロクロナデ。	胎 10YR8/1	井戸3191
404	須恵器	壷	口径 11.7 底径 － 器高 (3.0)		ロクロナデ。	胎 N6/0	井戸3191
405	須恵器	壷	口径 7.6 底径 － 器高 (3.9)		ロクロナデ。	胎 N5/0	井戸3191
406	須恵器	壷	口径 － 底径 8.4 器高 (3.9)		底部回転糸切り痕。 ロクロナデ。	胎 10YR8/1	井戸3191
407	須恵器	壷	口径 － 底径 14.0 器高 (16.5)		焼成不良。	胎 N5/0	井戸3191
408	須恵器	壷	口径 － 底径 13.0 器高 －	肩部に凸帯。	ロクロナデ。	胎 N4/0	井戸3191 被熱により赤化
409	須恵器	甕	口径 － 底径 － 器高 (8.2)	口縁部焼け歪み。	口縁部・内面ナデ。 体部外面並行タタキ痕。	胎 2.5Y6/1	井戸3191
410	灰釉陶器	皿	口径 9.8 底径 5.8 器高 2.8	内面見込みに段。高台内端部で接地。	底部回転糸切り痕。 貼付高台。ロクロナデ。	胎 2.5Y6/1 釉 5Y7/1	井戸3191
411	灰釉陶器	皿	口径 12.1 底径 6.4 器高 2.0	内面見込みに段。角高台。	底部回転糸切り痕。 貼付高台。ロクロナデ。	胎 10YR7/2 釉 N7/0	井戸3191
412	灰釉陶器	椀	口径 － 底径 6.0 器高 (4.4)		貼付高台。ロクロナデ。	胎 5Y7/1 釉 5Y8/1	井戸3191
413	白色土器	椀	口径 18.5 底径 － 器高 (4.8)		ロクロナデ。	胎 10YR7/2	井戸3191
414	緑釉陶器	椀	口径 9.8 底径 － 器高 (2.8)		胎土硬質。	胎 N6/0 釉 10Y4/2	井戸3191 山城系
415	緑釉陶器	椀	口径 － 底径 5.8 器高 (2.5)		貼付高台。胎土軟質。	胎 7.5YR8/3 釉 濃緑	井戸3191 近江系

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
416	緑釉陶器	椀	口径 － 底径 7.1 器高 (2.8)	外面に陰刻文。	貼付高台。底部内面トチン痕。胎土軟質。	胎 7.5YR8/3 釉 濃緑	井戸3191 近江系
417	緑釉陶器	椀	口径 14.4 底径 － 器高 (4.3)		胎土軟質。	胎 7.5YR7/4 釉 深緑	井戸3191 近江系
418	緑釉陶器	椀	口径 15.0 底径 7.7 器高 6.6	底部内面に圏線。	底部回転糸切り痕。底部内面トチン痕。貼付高台。胎土軟質。	胎 7.5YR8/3 釉 濃緑	井戸3191 近江系
419	緑釉陶器	鉢	口径 27.8 底径 － 器高 (12.1)		胎土軟質。	胎 10YR8/2 釉 緑	井戸3191 山城系
420	緑釉陶器	鉢	口径 31.7 底径 － 器高 (9.8)		胎土軟質。	胎 7.5YR7/3 釉 7.5Y5/3	井戸3191 山城系
421	緑釉陶器	皿	口径 11.6 底径 6.5 器高 2.2	高台内面に段。	底部回転糸切り痕。貼付高台。胎土硬質。	胎 N5/0 釉 濃緑	井戸3191 山城系
422	緑釉陶器	香炉	口径 － 底径 17.7 器高 (4.1)	透かし孔あり。	胎土軟質。	胎 7.5YR7/3 釉 7.5Y4/2	井戸3191 山城系
423	緑釉陶器	壷	長さ 8.1 幅 4.0	把手部分残存。	ミガキ後施釉。胎土硬質。	胎 2.5Y7/1 釉 緑	井戸3191 山城系
424	輸入陶磁器 白磁	椀	口径 16.8 底径 － 器高 (3.2)			胎 2.5Y7/1 釉 2.5Y8/1	井戸3191
425	輸入陶磁器 白磁	椀	口径 13.4 底径 － 器高 (2.8)	玉縁状口縁。		胎 N8/0 釉 2.5GY8/1	井戸3191
426	輸入陶磁器 青磁	浅形椀	口径 12.8 底径 5.6 器高 (3.8)		底部内外面に離れ砂付着。	胎 N7/0 釉 2.5GY7/1	井戸3191 越州窯系
427	輸入陶磁器 青磁	輪花椀	口径 － 底径 7.3 器高 (4.3)		ヘラ押圧縦線による輪花表現。	胎 N7/0 釉 2.5GY6/1	井戸3191 越州窯系
428	輸入陶磁器 青白磁	合子蓋	口径 － 底径 (1.7) 器高 －	陰刻花文。摘み欠損。	ロクロナデ。	胎 2.5Y8/1 釉 7.5Y8/1	井戸3191
429	土師器	皿A	口径 9.7 底径 － 器高 1.4		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	井戸820
430	土師器	皿A	口径 10.0 底径 － 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/2	井戸820
431	土師器	皿A	口径 10.0 底径 － 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/3	井戸820
432	瓦器	椀	口径 13.8 底径 － 器高 (5.6)		内外面ミガキ。	胎 N4/0	井戸820 楠葉型
433	灰釉陶器	椀	口径 － 底径 6.9 器高 (3.0)		底部回転ケズリ痕。底部内面重ね焼き痕。貼付高台。ロクロナデ。	胎 7.5YR7/1	井戸820
434	灰釉陶器	壷	口径 － 底径 11.3 器高 (6.0)		底部ケズリ痕。ロクロナデ。	胎 N7/0	井戸820
435	輸入陶磁器 白磁	椀	口径 11.8 底径 － 器高 (8.9)	内面に段。	釉の貫入あり。	胎 2.5Y8/1 釉 5Y7/1	井戸820
436	土師器	皿N	口径 9.6 底径 － 器高 1.9		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	井戸3190
437	土師器	皿N	口径 10.0 底径 － 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	井戸3190
438	土師器	皿N	口径 10.0 底径 － 器高 1.9		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	井戸3190

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
439	土師器	皿N	口径 9.9 底径 − 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	井戸3190
440	土師器	皿N	口径 10.2 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/3	井戸3190
441	土師器	皿N	口径 10.0 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	井戸3190
442	土師器	皿N	口径 14.2 底径 − 器高 3.0		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/4	井戸3190
443	土師器	皿N	口径 14.6 底径 − 器高 3.4		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y7/2	井戸3190
444	土師器	皿N	口径 14.7 底径 − 器高 3.6		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/1	井戸3190
445	土師器	皿N	口径 14.8 底径 − 器高 3.2		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	井戸3190
446	瓦器	椀	口径 15.4 底径 5.8 器高 6.0	口縁端部内外面に沈線。	貼付高台。内面密なミガキ。外面オサエ後粗いミガキ。	胎 N3/0 N8/0	井戸3190 楠葉型
447	輸入陶磁器 白磁	椀	口径 15.0 底径 (2.8) 器高 −	玉縁状口縁。	胎土に微細な黒色粒を含む。	胎 2.5Y8/1 釉 7.5Y8/1	井戸3190
448	輸入陶磁器 白磁	椀	口径 15.8 底径 (2.8) 器高 −	玉縁状口縁。	胎土に微細な黒色粒を含む。	胎 2.5Y8/1 釉 N8/0	井戸3190
449	土師器	皿Ac	口径 9.5 底径 − 器高 1.1		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土器溜2257
450	土師器	皿N	口径 9.3 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/4	土器溜2257
451	土師器	皿N	口径 10.0 底径 − 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土器溜2257
452	土師器	皿N	口径 9.7 底径 − 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/4	土器溜2257
453	土師器	皿N	口径 10.0 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土器溜2257
454	土師器	皿N	口径 10.2 底径 − 器高 1.7		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土器溜2257
455	土師器	皿N	口径 14.4 底径 − 器高 2.7		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/4	土器溜2257
456	土師器	皿N	口径 14.6 底径 − 器高 2.8		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土器溜2257
457	土師器	皿N	口径 14.9 底径 − 器高 2.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/4	土器溜2257
458	土師器	皿N	口径 15.0 底径 − 器高 2.7		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/4	土器溜2257
459	土師器	皿N	口径 15.2 底径 − 器高 3.2		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/4	土器溜2257
460	土師器	皿N	口径 15.3 底径 − 器高 2.9		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土器溜2257
461	土師器	皿Ac	口径 7.0 底径 − 器高 1.1		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	井戸2022

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
462	土師器	皿N	口径 8.2 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	井戸2022
463	土師器	皿N	口径 8.6 底径 − 器高 1.7		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	井戸2022
464	土師器	皿N	口径 8.8 底径 − 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	井戸2022
465	土師器	皿N	口径 8.8 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	井戸2022
466	土師器	皿N	口径 13.1 底径 − 器高 2.4		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	井戸2022
467	土師器	皿N	口径 13.3 底径 − 器高 2.7		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	井戸2022
468	土師器	皿N	口径 13.7 底径 − 器高 2.7		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	井戸2022
469	土師器	皿N	口径 13.7 底径 − 器高 2.8		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	井戸2022
470	土師器	皿S	口径 12.5 底径 − 器高 3.3		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/1	井戸2022
471	土師器	皿S	口径 12.5 底径 − 器高 (3.1)		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/1	井戸2022
472	土師器	椀	口径 13.4 底径 6.0 器高 4.9		貼付高台。 ナデ・オサエ。	胎 10YR7/2	井戸2022 吉備系
473	瓦器	皿	口径 9.0 底径 − 器高 1.6	底部内面にジグザグ状の暗文。	ナデ・オサエ。	胎 N5/0	井戸2022
474	瓦器	椀	口径 14.5 底径 4.7 器高 5.2	断面三角形の低い高台。底部内面に同心円状の暗文。	貼付高台。 内外面粗いミガキ。	胎 N5/0	井戸2022 楠葉型
475	瓦器	鍋	口径 30.8 底径 − 器高 (14.4)	受口状口縁。	ナデ・オサエ。	胎 N3/0 N7/0	井戸2022
476	輸入陶磁器 白磁	椀	口径 − 底径 5.5 器高 (3.5)		削出高台。	胎 2.5Y8/2 釉 5Y7/2	井戸2022
477	土師器	皿Ac	口径 6.8 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	井戸2961
478	土師器	皿N	口径 8.0 底径 − 器高 1.4		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	井戸2961
479	土師器	皿N	口径 8.2 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	井戸2961
480	土師器	皿N	口径 8.4 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/4	井戸2961
481	土師器	皿N	口径 8.5 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/4	井戸2961
482	土師器	皿N	口径 9.0 底径 − 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/2	井戸2961
483	土師器	皿N	口径 13.1 底径 − 器高 2.5		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	井戸2961
484	土師器	皿N	口径 13.2 底径 − 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	井戸2961

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
485	土師器	Ⅲ S	口径 8.8 底径 － 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	井戸2961
486	土師器	Ⅲ S	口径 10.7 底径 － 器高 3.1		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	井戸2961
487	土師器	Ⅲ S	口径 10.9 底径 － 器高 3.1		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	井戸2961
488	輸入陶磁器 青磁	束口椀	口径 11.4 底径 4.2 器高 5.3	外面に鎬連弁文。	削出高台。底部外面回転ケズリ。底部内面に三叉トチン痕。	胎 N7/0 釉 7.5Y6/2	井戸2961 龍泉窯系
489	輸入陶磁器 青磁	椀	口径 16.5 底径 6.0 器高 6.7	内面を二又工具によって分割し、区画内に飛雲文。内面見込みに簡略化した花文または雲文。	削出高台。 底部外面回転ケズリ。	胎 N7/0 釉 10Y6/1	井戸2961 龍泉窯系
490	土師器	Ⅲ Sc	口径 5.6 底径 － 器高 1.0		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	地下室1591
491	土師器	Ⅲ N	口径 8.2 底径 － 器高 1.2		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	地下室1591
492	土師器	Ⅲ N	口径 8.2 底径 － 器高 1.3		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/2	地下室1591
493	土師器	Ⅲ N	口径 9.2 底径 － 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	地下室1591
494	土師器	Ⅲ N	口径 12.6 底径 － 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	地下室1591
495	土師器	Ⅲ N	口径 13.8 底径 － 器高 1.9		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/4	地下室1591
496	土師器	Ⅲ Sc	口径 5.3 底径 － 器高 1.0		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/2	土坑1593
497	土師器	Ⅲ Sc	口径 5.4 底径 － 器高 1.3		ナデ・オサエ。	胎 5YR8/2	土坑1593
498	土師器	Ⅲ N	口径 8.1 底径 － 器高 1.2		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/3	土坑1593
499	土師器	Ⅲ N	口径 8.0 底径 － 器高 1.2		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	土坑1593
500	土師器	Ⅲ N	口径 8.0 底径 － 器高 1.4		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR6/4	土坑1593
501	土師器	Ⅲ N	口径 8.6 底径 － 器高 1.3		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/3	土坑1593
502	土師器	Ⅲ N	口径 8.8 底径 － 器高 1.3		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	土坑1593
503	土師器	Ⅲ N	口径 10.6 底径 － 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑1593
504	土師器	Ⅲ N	口径 11.4 底径 － 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 10YR6/2	土坑1593
505	土師器	Ⅲ N	口径 12.4 底径 － 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR6/4	土坑1593
506	土師器	Ⅲ N	口径 12.4 底径 － 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑1593
507	土師器	Ⅲ N	口径 12.6 底径 － 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	土坑1593

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
508	土師器	皿Sc	口径 4.2 底径 − 器高 1.0		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑2892
509	土師器	皿Sc	口径 4.7 底径 − 器高 0.9		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/1	土坑2892
510	土師器	皿Sc	口径 5.0 底径 − 器高 1.0		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/1	土坑2892
511	土師器	皿Sc	口径 5.8 底径 − 器高 1.2		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑2892
512	土師器	皿Sc	口径 5.8 底径 − 器高 1.4		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑2892
513	土師器	皿N	口径 7.8 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/4	土坑2892
514	土師器	皿N	口径 8.6 底径 − 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/2	土坑2892
515	土師器	皿N	口径 8.8 底径 − 器高 1.4		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	土坑2892
516	土師器	皿N	口径 10.9 底径 − 器高 2.5		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑2892
517	土師器	皿N	口径 11.9 底径 − 器高 2.5		ナデ・オサエ。	胎 10YR6/3	土坑2892
518	土師器	皿N	口径 12.4 底径 − 器高 2.2		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑2892
519	土師器	皿N	口径 13.0 底径 − 器高 2.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑2892
520	土師器	皿S	口径 6.8 底径 − 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/2	土坑2892
521	土師器	皿S	口径 7.1 底径 − 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑2892
522	土師器	皿S	口径 7.4 底径 − 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑2892
523	土師器	皿S	口径 10.4 底径 − 器高 3.1		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑2892
524	土師器	皿S	口径 10.8 底径 − 器高 3.2		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑2892
525	土師器	皿S	口径 12.6 底径 − 器高 3.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑2892
526	土師器	皿S	口径 12.7 底径 − 器高 3.5		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑2892
527	土師器	皿X	口径 10.4 底径 6.3 器高 3.2		底部糸切り未調整。 ロクロナデ。	胎 7.5YR7/4	土坑2892
528	土師器	皿X	口径 10.6 底径 6.6 器高 3.5		底部糸切り未調整。 ロクロナデ。	胎 10YR7/4	土坑2892
529	土師器	皿X	口径 10.8 底径 6.0 器高 3.4		底部糸切り未調整。 ロクロナデ。	胎 10YR7/4	土坑2892
530	土師器	椀	口径 12.0 底径 5.1 器高 4.6		貼付高台。 ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑2892 吉備系

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
531	瓦器	椀	口径 14.2 底径 5.0 器高 4.7	断面三角形の低い高台。底部内面にジグザグ状の暗文。	貼付高台。内面に粗いミガキ。外面ナデ・オサエ。	胎 N5/0	土坑2892 楠葉型
532	瓦器	椀	口径 14.7 底径 5.1 器高 5.7	断面三角形の低い高台。底部内面にジグザグ状の暗文。	貼付高台。内面に粗いミガキ。外面ナデ・オサエ。	胎 N5/0	土坑2892 楠葉型
533	瓦器	椀	口径 12.6 底径 4.3 器高 4.7	断面三角形の低い高台。底部内面にジグザグ状の暗文。	貼付高台。内面に粗いミガキ。外面ナデ・オサエ。	胎 N5/0	土坑2892 楠葉型
534	瓦器	鍋	口径 30.1 底径 － 器高 14.0	受口状口縁。	外面ナデ・オサエ。 内面ハケ。	胎 2.5Y8/1 N4/0	土坑2892
535	瓦器	火鉢	口径 54.8 底径 － 器高 (11.1)		ナデ・オサエ。 底部に籾・藁圧痕。	胎 5Y4/1	土坑2892
536	焼締陶器	甕	口径 49.4 底径 － 器高 (14.0)	受口状口縁。	ナデ・タタキ。	胎 10YR6/2	土坑2892 常滑産
537	須恵器	片口鉢	口径 29.2 底径 － 器高 (10.1)	片口あり。	ロクロナデ。	胎 N5/0	土坑2892 東播系
538	須恵器	鉢	口径 － 底径 (14.8) 器高 (5.0)		貼付高台。ロクロナデ。外面底部側面に回転ヘラケズリ。	胎 N5/0	土坑2892 東播系
539	須恵器	甕	口径 － 底径 21.2 器高 (9.1)		格子タタキ。ナデ。 外面底部側面にヘラケズリ。	胎 N6/0	土坑2892 東播系
540	白色土器	蓋	口径 5.6 底径 － 器高 1.7	ボタン状摘み。	天井部回転ヘラケズリ。口縁部ロクロナデ。	胎 10YR7/2	土坑2892
541	白色土器	高杯	口径 － 底径 － 器高 (7.9)		外面ヘラケズリ。	胎 2.5Y8/2	土坑2892
542	灰釉系陶器	椀	口径 － 底径 7.9 器高 (2.0)		貼付高台。高台接地面に籾殻痕。ロクロナデ。	胎 N7/0	土坑2892 転用硯か
543	灰釉系陶器	鉢	口径 － 底径 10.0 器高 (3.8)		貼付高台。外面底部側面に回転ヘラケズリ。	胎 5Y6/1 釉 5Y6/2	土坑2892 内面に墨痕 転用硯
544	輸入陶磁器 白磁	椀	口径 14.7 底径 － 器高 (4.5)	内面上部に陰刻で沈線。	口縁端部露胎。	胎 N8/0 釉 2.5GY8/1	土坑2892
545	輸入陶磁器 白磁	椀	口径 15.8 底径 － 器高 (4.4)	内面見込みに陰刻で沈線。	口縁端部露胎。	胎 N8/0 釉 2.5GY8/1	土坑2892
546	輸入陶磁器 白磁	椀	口径 － 底径 － 器高 (3.0)	内面上部に陰刻で型文。	薄胎。	胎 N8/0 釉 2.5GY8/1	土坑2892
547	輸入陶磁器 青磁	椀	口径 － 底径 5.6 器高 (2.2)	底部内面に花弁3単位の片彫蓮花文。	削出高台。	胎 N8/0 釉 5G7/1	土坑2892 龍泉窯系
548	輸入陶磁器 青磁	椀	口径 15.8 底径 5.2 器高 6.3	外面に鎬のない片彫蓮弁文。	削出高台。	胎 N7/0 釉 10Y5/2	土坑2892 龍泉窯系
549	輸入陶磁器 青磁	椀	口径 16.3 底径 5.2 器高 7.0	外面に鎬蓮弁文。	削出高台。	胎 N7/0 釉 5Y7/4	土坑2892 龍泉窯系
550	輸入陶磁器 青白磁	壷蓋	口径 6.2 底径 － 器高 1.3	天井部に菊花を現した花形文。	ロクロナデ。	胎 N8/0 釉 2.5GY8/1	土坑2892
551	輸入陶磁器 陶器	双耳短頸壷	口径 14.0 底径 － 器高 (17.5)	玉縁状口縁。肩部に横型の耳。	ナデ。粘土紐接合痕。	胎 2.5Y7/2 釉 7.5Y6/2	土坑2892 福建省系
552	土師器	皿N	口径 8.0 底径 － 器高 1.4		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑1594
553	土師器	皿N	口径 8.2 底径 － 器高 1.4		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑1594

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
554	土師器	皿N	口径 7.8 底径 - 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/2	土坑1594
555	土師器	皿N	口径 8.0 底径 - 器高 1.0		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑1594
556	土師器	皿N	口径 8.3 底径 - 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/4	土坑1594
557	土師器	皿N	口径 8.2 底径 - 器高 1.4		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	土坑1594
558	土師器	皿N	口径 11.6 底径 - 器高 1.9		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	土坑1594
559	土師器	皿S	口径 6.8 底径 - 器高 1.9		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑1594
560	土師器	皿S	口径 6.8 底径 - 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑1594
561	土師器	皿S	口径 7.2 底径 - 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑1594
562	土師器	釜	口径 5.8 底径 - 器高 (2.0)		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/4	土坑1594
563	瓦器	皿	口径 8.9 底径 - 器高 1.3		ナデ・オサエ。	胎 N4/0	土坑1594
564	土師器	皿N	口径 7.6 底径 - 器高 1.3		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/4	土坑514
565	土師器	皿N	口径 7.6 底径 - 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	土坑514
566	土師器	皿N	口径 7.6 底径 - 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/4	土坑514
567	土師器	皿N	口径 8.0 底径 - 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/4	土坑514
568	土師器	皿N	口径 8.1 底径 - 器高 1.7		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	土坑514
569	土師器	皿N	口径 8.3 底径 - 器高 1.7		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/4	土坑514
570	土師器	皿N	口径 10.5 底径 - 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/6	土坑514
571	土師器	皿N	口径 10.8 底径 - 器高 1.7		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	土坑514
572	土師器	皿N	口径 10.8 底径 - 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/4	土坑514
573	土師器	皿N	口径 11.0 底径 - 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑514
574	土師器	皿N	口径 11.0 底径 - 器高 2.2		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	土坑514
575	土師器	皿N	口径 11.1 底径 - 器高 2.0		ナデ・オサエ。 成形台痕。	胎 7.5YR7/6	土坑514
576	土師器	皿Sh	口径 6.2 底径 - 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑514

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
577	土師器	Ⅲ Sh	口径 6.6 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑514
578	土師器	Ⅲ Sh	口径 6.9 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑514
579	土師器	Ⅲ Sh	口径 7.2 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑514
580	土師器	Ⅲ S	口径 9.8 底径 − 器高 1.7		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/1	土坑514 口縁端部に煤付着
581	土師器	Ⅲ S	口径 11.2 底径 − 器高 2.9		ナデ・オサエ。	胎 5Y8/1	土坑514
582	土師器	Ⅲ S	口径 11.2 底径 − 器高 2.9		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑514
583	土師器	Ⅲ S	口径 11.4 底径 − 器高 2.9		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/1	土坑514
584	土師器	Ⅲ S	口径 11.4 底径 − 器高 3.6		ナデ・オサエ。	胎 5Y8/1	土坑514
585	土師器	Ⅲ S	口径 11.6 底径 − 器高 2.9		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑514
586	土師器	Ⅲ S	口径 11.6 底径 − 器高 3.0		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑514
587	土師器	Ⅲ S	口径 11.6 底径 − 器高 3.1		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑514
588	土師器	Ⅲ X	口径 13.3 底径 6.8 器高 3.1		底部ヘラ切り痕。 ロクロナデ。	胎 7.5YR8/6	土坑514
589	瓦器	三足羽釜	口径 4.6 底径 4.5 器高 (6.0)		ナデ。口縁部ミガキ。	胎 N3/0	土坑514 ミニチュア
590	瓦器	鍋	口径 20.4 底径 − 器高 (9.0)	受口状口縁。	ナデ・オサエ。	胎 N5/0	土坑514 外面に煤付着
591	瓦器	鍋	口径 25.3 底径 − 器高 (7.6)	受口状口縁。	ナデ・オサエ。 内面ハケ調整。	胎 N4/0	土坑514 外面に煤付着
592	施釉陶器 瀬戸灰釉	折縁深Ⅲ	口径 29.6 底径 20.0 器高 11.1	底部内面に同心円状の櫛描文。各帯の間に印花文。底部と体部の堺に獣脚を三方に付す。	底部ヘラケズリ。 底部回転ヘラケズリ。 ロクロナデ。	胎 N7/0 釉 7.5Y6/2	土坑514 瀬戸・美濃産
593	土師器	Ⅲ N	口径 7.4 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑2811 口縁端部に煤付着
594	土師器	Ⅲ N	口径 7.4 底径 − 器高 1.3		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑2811
595	土師器	Ⅲ N	口径 7.5 底径 − 器高 1.4		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR6/6	土坑2811 内面に煤付着
596	土師器	Ⅲ N	口径 7.5 底径 − 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 5YR6/6	土坑2811
597	土師器	Ⅲ N	口径 7.7 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/4	土坑2811
598	土師器	Ⅲ N	口径 7.8 底径 − 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	土坑2811
599	土師器	Ⅲ N	口径 8.0 底径 − 器高 1.4		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/4	土坑2811

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
600	土師器	皿N	口径 8.2 底径 − 器高 1.2		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑2811 口縁端部に煤付着
601	土師器	皿N	口径 10.6 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑2811
602	土師器	皿N	口径 10.6 底径 − 器高 2.2		ナデ・オサエ。	胎 5YR7/6	土坑2811 煤付着
603	土師器	皿N	口径 11.0 底径 − 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑2811
604	土師器	皿N	口径 11.0 底径 − 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑2811
605	土師器	皿N	口径 11.4 底径 − 器高 2.5		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑2811 煤付着
606	土師器	皿N	口径 11.4 底径 − 器高 2.4		ナデ・オサエ。	胎 5YR7/6	土坑2811 煤付着
607	土師器	皿Sh	口径 5.9 底径 − 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑2811
608	土師器	皿Sh	口径 6.3 底径 − 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑2811
609	土師器	皿Sh	口径 6.6 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑2811
610	土師器	皿Sh	口径 6.7 底径 − 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/4	土坑2811
611	土師器	皿Sh	口径 6.8 底径 − 器高 1.7		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑2811
612	土師器	皿Sh	口径 7.4 底径 − 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑2811
613	土師器	皿S	口径 8.9 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/3	土坑2811
614	土師器	皿S	口径 9.2 底径 − 器高 1.9		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑2811
615	土師器	皿S	口径 9.2 底径 − 器高 1.9		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑2811
616	土師器	皿S	口径 8.1 底径 − 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑2811
617	土師器	皿S	口径 7.9 底径 − 器高 2.2		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑2811
618	土師器	皿S	口径 7.6 底径 − 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/3	土坑2811
619	土師器	皿S	口径 11.4 底径 − 器高 2.7		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑2811
620	土師器	皿S	口径 11.2 底径 − 器高 2.8		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑2811
621	土師器	皿S	口径 11.2 底径 − 器高 2.5		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑2811
622	土師器	皿S	口径 11.4 底径 − 器高 3.1		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑2811

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
623	土師器	Ⅲ類S	口径 11.0 底径 － 器高 3.0		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑2811
624	土師器	Ⅲ類S	口径 15.3 底径 － 器高 4.6		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑2811
625	土師器	合子蓋	口径 5.2 底径 － 器高 1.8	歪み激しい。	ナデ・オサエ。	胎 10YR8/4	土坑2811 口縁端部に煤付着
626	土師器	合子身	口径 5.0 底径 － 器高 1.7		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	土坑2811
627	土師器	羽釜	口径 8.4 底径 4.2 器高 3.3		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/2	土坑2811 ミニチュア
628	瓦器	三足羽釜	口径 5.2 底径 － 器高 9.0		ナデ・オサエ。	胎 N4/0	土坑2811 ミニチュア
629	瓦器	鍋	口径 24.2 底径 － 器高 11.1	受口状口縁。	ナデ・オサエ。	胎 10YR7/1	土坑2811 外面に煤付着
630	須恵器	鉢	口径 33.3 底径 10.6 器高 11.3	縁帯状口縁。	ナデ・オサエ。	胎 2.5Y5/1	土坑2811 東播系
631	施釉陶器 古瀬戸	入子	口径 8.5 底径 4.6 器高 3.4	輪花形。	底部回転糸切り痕。 ナデ。ヘラで押さえて輪花形に整形。	胎 10YR8/1	土坑2811 瀬戸・美濃産
632	施釉陶器 古瀬戸	入子	口径 (8.3) 底径 5.0 器高 3.5	輪花形。	底部外面ケズリ。ナデ。ヘラケズリで輪花形に整形。	胎 10YR7/4	土坑2811 瀬戸・美濃産
633	輸入陶磁器 青白磁	合子身	口径 6.0 底径 － 器高 2.0	菊型合子。	型押し成形。受部・体部外面下半は露胎。	胎 N9/ 釉 10GY8/1	土坑2811
634	輸入陶磁器 青白磁	合子身	口径 4.0 底径 2.8 器高 1.6		ナデ。受部・体部外面下半は露胎。	胎 10YR8/2 釉 7.5Y7/1	土坑2811
635	焼締陶器	甕	口径 47.2 底径 － 器高 (79.5)	縁帯状口縁。	タタキ・ナデ・オサエ。 粘土紐接合痕。	胎 2.5YR3/3	土坑2811 常滑産
636	土師器	Ⅲ類N	口径 8.0 底径 － 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/3	土坑1572
637	土師器	Ⅲ類N	口径 10.2 底径 － 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑1572
638	土師器	Ⅲ類N	口径 11.6 底径 － 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑1572
639	土師器	Ⅲ類N	口径 12.0 底径 － 器高 1.9		ナデ・オサエ。	胎 5YR7/6	土坑1572
640	土師器	Ⅲ類S	口径 10.6 底径 － 器高 (2.8)		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑1572
641	土師器	Ⅲ類S	口径 11.0 底径 － 器高 (2.8)		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑1572
642	土師器	羽釜	口径 5.0 底径 － 器高 2.2		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/4	土坑1572
643	土師器	羽釜	口径 5.4 底径 － 器高 2.2		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑1572
644	瓦器	小椀	口径 6.8 底径 － 器高 2.2		ナデ・オサエ。	胎 N5/0	土坑1572
645	瓦器	Ⅲ類	口径 9.8 底径 － 器高 1.3		ナデ・オサエ。	胎 N5/0	土坑1572

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
646	瓦器	鍋	口径 26.8 底径 − 器高 (8.9)	受口状口縁。	ナデ・オサエ。	胎 N5/0	土坑1572
647	土師器	皿N	口径 7.8 底径 − 器高 1.9		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑1552
648	土師器	皿N	口径 9.0 底径 − 器高 1.7		ナデ・オサエ。	胎 5YR8/2	土坑1552
649	土師器	皿Sh	口径 7.0 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/4	土坑1552
650	土師器	皿S	口径 7.8 底径 − 器高 2.2		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑1552
651	土師器	皿S	口径 14.2 底径 − 器高 2.5		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/3	土坑1552
652	瓦器	羽釜	口径 22.0 底径 − 器高 (8.0)		外面ナデ・オサエ。 内面ハケ。	胎 10YR5/1	土坑1552
653	土師器	皿Sh	口径 6.3 底径 − 器高 1.4		ナデ・オサエ。	胎 5YR8/4	土坑1539
654	土師器	皿Sh	口径 8.6 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/3	土坑1539
655	土師器	皿S	口径 7.1 底径 − 器高 1.5		ナデ・オサエ。	胎 10YR7/3	土坑1539
656	土師器	皿S	口径 7.8 底径 − 器高 1.7		ナデ・オサエ。	胎 5YR7/6	土坑1539 口縁端部に煤付着
657	土師器	皿S	口径 9.0 底径 − 器高 (1.6)		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/3	土坑1539 煤付着
658	土師器	皿S	口径 11.2 底径 − 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 5YR7/8	土坑1539
659	土師器	皿S	口径 13.4 底径 − 器高 2.2		ナデ・オサエ。	胎 5YR8/3	土坑1539
660	土師器	皿S	口径 14.0 底径 − 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/6	土坑1539
661	土師器	皿S	口径 14.2 底径 − 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/6	土坑1539
662	土師器	皿S	口径 14.4 底径 − 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 5YR7/6	土坑1539
663	土師器	皿Sh	口径 7.0 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑638
664	土師器	皿Sh	口径 7.0 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑638
665	土師器	皿S	口径 8.7 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 10Y5/2	土坑638
666	土師器	皿S	口径 8.8 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑638
667	土師器	皿S	口径 8.8 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑638
668	土師器	皿S	口径 9.0 底径 − 器高 1.9		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/3	土坑638

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
669	土師器	Ⅲ S	口径 9.0 底径 - 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑638
670	土師器	Ⅲ S	口径 11.2 底径 - 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑638
671	土師器	Ⅲ S	口径 11.6 底径 - 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y7/2	土坑638
672	土師器	Ⅲ S	口径 13.6 底径 - 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/3	土坑638
673	土師器	Ⅲ S	口径 13.9 底径 - 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑638
674	土師器	Ⅲ S	口径 14.6 底径 - 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑638
675	土師器	Ⅲ S	口径 14.6 底径 - 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑638
676	土師器	Ⅲ S	口径 14.8 底径 - 器高 2.2		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑638
677	土師器	Ⅲ S	口径 14.8 底径 - 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/3	土坑638
678	土師器	Ⅲ S	口径 14.9 底径 - 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑638
679	土師器	Ⅲ S	口径 15.0 底径 - 器高 2.4		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/3	土坑638
680	土師器	Ⅲ S	口径 15.0 底径 - 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/3	土坑638
681	土師器	Ⅲ S	口径 15.0 底径 - 器高 2.4		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑638
682	土師器	Ⅲ S	口径 15.3 底径 - 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑638
683	土師器	Ⅲ S	口径 15.4 底径 - 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑638
684	土師器	Ⅲ S	口径 15.4 底径 - 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑638
685	土師器	Ⅲ S	口径 15.6 底径 - 器高 2.4		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/3	土坑638
686	土師器	Ⅲ S	口径 17.0 底径 - 器高 2.6		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑638
687	土師器	Ⅲ S	口径 17.0 底径 - 器高 2.4		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑638
688	土師器	Ⅲ S	口径 17.4 底径 - 器高 2.4		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑638
689	土師器	Ⅲ S	口径 17.6 底径 - 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/3	土坑638
690	土師器	Ⅲ S	口径 17.6 底径 - 器高 2.4		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑638
691	土師器	Ⅲ S	口径 17.6 底径 - 器高 2.4		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑638

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
692	土師器	皿S	口径 18.0 底径 − 器高 2.0		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑638
693	土師器	皿S	口径 18.0 底径 − 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	土坑638
694	輸入陶磁器 青磁	椀	口径 − 底径 5.6 器高 (2.7)	内面見込みに圏線。底部内面に簡略化した花文。	削り出し高台。	胎 7.5Y5/3 釉 7.5Y8/2	土坑638 龍泉窯系
695	土師器	皿S	口径 11.8 底径 − 器高 2.7		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/6	土坑2506 口縁端部に煤付着
696	土師器	皿S	口径 12.2 底径 − 器高 2.8		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/6	土坑2506 口縁端部に煤付着
697	土師器	皿S	口径 12.2 底径 − 器高 2.8		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/6	土坑2506 口縁端部に煤付着
698	土師器	皿S	口径 14.9 底径 − 器高 2.8		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑2506 口縁端部に煤付着
699	土師器	皿S	口径 15.0 底径 − 器高 (2.8)		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑2506
700	土師器	皿Nr	口径 5.8 底径 − 器高 1.3		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/6	土坑2506
701	焼締陶器	甕	口径 − 底径 − 器高 (11.4)	縁帯状口縁。	ナデ。粘土紐接合痕。	胎 5YR4/4	土坑2506 常滑産
702	施釉陶器 古瀬戸	袴腰形香炉	口径 8.2 底径 5.1 器高 2.7	底部に低い三脚。	底部回転糸切り痕。 底部側面回転ケズリ。 ロクロナデ。	胎 10YR8/2 釉 明緑	土坑2506 瀬戸・美濃産
703	土師器	皿N	口径 6.8 底径 − 器高 1.4		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	埋甕1531 口縁端部に煤付着
704	土師器	皿S	口径 10.0 底径 − 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/4	埋甕1531
705	須恵器	甕	口径 31.6 底径 − 器高 41.7	縁帯状口縁。	タタキ・ナデ。	胎 N4/0	埋甕1531 東播系
706	土師器	皿S	口径 13.2 底径 − 器高 (2.8)		ナデ・オサエ。	胎 5YR8/3	井戸1595
707	焼締陶器	擂鉢	口径 − 底径 − 器高 (7.7)	縁帯状口縁。卸し目あり。	ロクロナデ。	胎 7.5YR4/1	井戸1595 備前産
708	土師器	皿S	口径 8.3 底径 − 器高 1.6		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	江戸時代前半整地層 口縁端部に煤付着
709	土師器	皿S	口径 8.6 底径 − 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/6	江戸時代前半整地層
710	土師器	皿S	口径 11.5 底径 − 器高 1.9		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	江戸時代前半整地層
711	土師器	皿S	口径 11.0 底径 − 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/4	江戸時代前半整地層
712	土師器	皿S	口径 14.6 底径 − 器高 2.8		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/4	江戸時代前半整地層 口縁端部に煤付着
713	土師器	丸底鉢	口径 8.6 底径 − 器高 (5.0)		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	江戸時代前半整地層
714	土師器	つぼつぼ	口径 2.5 底径 − 器高 2.9		ナデ・オサエ。	胎 2.5Y8/2	江戸時代前半整地層

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
715	瓦器	香炉	口径 11.4 底径 9.8 器高 4.2	外面に印花。	ナデ。 底部側面に回転ケズリ。	胎 N4/0	江戸時代前半整地層
716	瓦器	灯火具	口径 16.2 底径 − 器高 (5.9)		外面ミガキ。 内面ナデ。	胎 N4/0	江戸時代前半整地層
717	焼締陶器	擂鉢	口径 23.4 底径 7.8 器高 9.8	縁帯状口縁。縁帯に2条の凹線。卸し目あり。	ロクロナデ。	胎 2.5YR4/1	江戸時代前半整地層 備前産
718	施釉陶器	椀	口径 − 底径 4.7 器高 (5.4)		削出高台。底部外面・側面回転ケズリ。灰釉を漬け掛け。	胎 5YR5/3 釉 7.5Y4/2	江戸時代前半整地層 肥前系
719	施釉陶器	天目茶椀	口径 10.8 底径 − 器高 (5.6)		底部側面回転ケズリ。	胎 10YR8/2 釉 10YR1.7/1	江戸時代前半整地層 瀬戸・美濃産
720	施釉陶器	天目茶椀	口径 11.3 底径 − 器高 (6.6)		底部側面回転ケズリ。	胎 10YR7/3 釉 7.5YR2/2	江戸時代前半整地層 瀬戸・美濃産
721	施釉陶器	半筒椀	口径 − 底径 4.9 器高 (4.0)		ロクロナデ。 底部外面ケズリ。	胎 2.5Y8/1 釉 2.5Y6/4	江戸時代前半整地層 瀬戸・美濃産
722	施釉陶器 志野織部	皿	口径 18.6 底径 − 器高 (2.5)	鉄釉で外面に間道文、内面に列点文。	長石釉を施す。	胎 10YR8/2 釉 N8/0 7.5YR3/1	江戸時代前半整地層 瀬戸・美濃産
723	施釉陶器 総織部	輪花皿	口径 24.2 底径 13.8 器高 4.6	口縁部内面に括弧形の区画文。区画内に花文、区画外に青海波文。底部内面に草花文。	貼付高台。 底部外面ケズリ。 長石釉を施す。	胎 2.5Y8/2 釉 緑	江戸時代前半整地層 瀬戸・美濃産
724	輸入陶磁器 白磁	丸皿	口径 10.7 底径 3.6 器高 2.7		削出高台。 外面下半回転ケズリ。 外面下半露胎。	胎 2.5Y8/1 釉 2.5Y8/1	江戸時代前半整地層 高台内に朱墨
725	輸入陶磁器 青磁	小鉢 (八角？)	口径 8.0 底径 3.3 器高 4.3		貼付高台。 底部外面ケズリ。	胎 N8/0 釉 7.5Y6/2	江戸時代前半整地層
726	輸入陶磁器 青磁	椀	口径 − 底径 5.8 器高 (3.5)	外面に蓮弁文。内面に双魚文。	底部外面ケズリ。	胎 N7/0 釉 5GY7/1	江戸時代前半整地層
727	土師器	皿S	口径 10.2 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑179
728	土師器	皿S	口径 10.3 底径 − 器高 1.8		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR8/3	土坑179
729	土師器	皿S	口径 11.2 底径 − 器高 2.4		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/4	土坑179
730	土師器	皿S	口径 11.3 底径 − 器高 2.3		ナデ・オサエ。	胎 7.5YR7/6	土坑179
731	土師器	皿Nr	口径 5.4 底径 − 器高 1.2		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/3	土坑179
732	土師器	つぼつぼ	口径 2.9 底径 − 器高 2.1		ナデ・オサエ。	胎 10YR8/2	土坑179
733	瓦質土器	火消壷	口径 13.3 底径 16.5 器高 10.6		ナデ。 体部下半回転ケズリ。	胎 7.5YR7/4	土坑179
734	染付磁器	紅皿	口径 5.9 底径 2.4 器高 3.1	外面に羽子板と羽根の図柄を交互に配置。	高台接地面が露胎。	胎 N8/0 釉 7.5GY8/1	土坑179 肥前系
735	染付磁器	椀	口径 11.4 底径 4.2 器高 6.1	外面に草花文。底部外側に圏線、高台外面に二重圏線。	高台接地面が露胎。 内面見込み蛇の目釉剥ぎ。	胎 N8/0 釉 7.5GY8/1	土坑179 肥前系
736	施釉陶器	丸椀	口径 9.6 底径 4.9 器高 6.3	京焼風。口縁端部内面がわずかに肥厚。外面に山水楼閣文。高台内に刻印。	削出高台。	胎 2.5Y8/2 釉 10YR8/4	土坑179 肥前系
737	染付磁器	土瓶蓋	口径 6.3 底径 − 器高 3.4	ボタン状摘み。口縁部にかえり。天井部に渦巻文。	内面露胎。 ロクロナデ。	胎 N8/0 釉 5B7/1	土坑179

報告No.	器種	器形	法量(cm)	器形・文様の特徴	成形手法の特徴	色調	備考
738	施釉陶器	半筒椀	口径 9.4 底径 3.3 器高 5.3	鉄釉と灰釉を掛け分け。	削出高台。	胎 5Y7/2 釉 7.5Y4/4	土坑179 京・信楽系
739	施釉陶器	半筒椀	口径 11.0 底径 4.6 器高 5.2	白釉と錆漆で草原の鷺を絵付け。	削出高台。底部外面・側面に回転ケズリ。	胎 10YR8/3 釉 5Y7/1	土坑179 京・信楽系
740	施釉陶器	花入	口径 6.1 底径 5.6 器高 10.9	錆漆で松を絵付け。	底部外面・側面に回転ケズリ。	胎 2.5Y8/2 釉 2.5Y8/4	土坑179 京・信楽系
741	施釉陶器	皿	口径 － 底径 7.6 器高 (2.7)	底部内面に竹を絵付けした後、透明釉を施す。	底部外面・側面に回転ケズリ。内面見込みに三叉トチン痕。	胎 10YR8/4 釉 5Y3/2	土坑179 京・信楽系
742	施釉陶器	鬢水入	口径 11.6 底径 11.7 器高 3.8	外面に梅樹文。	底部外面ケズリ。	胎 5Y8/2 釉 5Y7/1 5Y6/3	土坑179 瀬戸・美濃産
743	軟質施釉陶器	鬢水入	口径 12.4 底径 12.1 器高 3.2	口縁端部に緑釉で列点文。	透明釉を施す。	胎 10YR8/4 釉 7.5YR7/6	土坑179
744	焼締陶器	擂鉢	口径 36.0 底径 17.4 器高 12.9	縁帯状口縁。卸し目あり。	ナデ・ケズリ。	胎 5YR5/3	土坑144 堺・明石系
745	軟質施釉陶器	皿？	口径 6.0 底径 2.8 器高 1.5	外面に蓮華座風の線刻。内面に鉄釉で列点文を上絵付け。	削出高台。 ナデ。 透明釉を施す。	胎 7.5Y7/6 釉 透明・濃緑	土坑144 仏具の一部か
746	染付磁器	端反椀	口径 9.3 底径 3.4 器高 5.2	外面に観世文。	高台接地面が露胎。	胎 N8/0 釉 薄い明緑灰	土坑144 瀬戸・美濃産
747	染付磁器	端反椀	口径 8.7 底径 3.8 器高 5.0	外面に太い染付帯線の間に牡丹文。	高台接地面が露胎。	胎 N8/0 釉 薄い明緑灰	土坑144 瀬戸・美濃産 焼継ぎによる補修あり
748	施釉陶器	端反椀	口径 8.2 底径 3.5 器高 4.6		削出高台。ロクロナデ。体部下半から底部外面を回転ケズリ。	胎 N8/0 釉 2.5Y6/2	土坑144 肥前系
749	施釉陶器	火入	口径 10.0 底径 4.4 器高 6.6	口縁端部が内側に肥厚。体部が筒型。白化粧に呉須絵付け。	削出高台。ロクロナデ。体部下半から底部外面を回転ケズリ。	胎 7.5YR4/2 釉 2.5GY6/1	土坑144 肥前系 内外面に被熱痕
750	染付磁器	広東椀	口径 12.4 底径 6.9 器高 8.8	外面に蛸唐草。銘款は「乾」の篆書体。	口縁端部・高台接地面が露胎。	胎 N8/0 釉 薄い明緑灰	土坑144 肥前系
751	染付磁器	皿	口径 10.4 底径 5.7 器高 2.6	菊花形。内面に山水文。	型打ち整形。 底部ケズリ。口縁端部・高台接地面が露胎。	胎 N8/0 釉 2.5Y4/4	土坑144 肥前系
752	青磁	輪花皿	口径 13.6 底径 7.9 器高 4.1	蛇の目凹形高台。	型打ち整形。 口縁端部が露胎。	胎 N8/0 釉 10GY8/1	土坑144 肥前系
753	青磁	輪花皿	口径 14.4 底径 9.0 器高 4.3	蛇の目凹形高台。	型打ち整形。	胎 N8/0 釉 10GY8/1	土坑144 肥前系
754	染付磁器	猪口	口径 7.4 底径 5.2 器高 6.1	外面に矢筈文。口縁部内面に四方襷文、内面見込みに二重圏線、中央に五花弁文。	高台接地面が露胎。	胎 N8/0 釉 薄い明緑灰	土坑144 肥前系
755	施釉陶器	土瓶	口径 12.2 底径 － 器高 (10.0)	外面に鯉をイッチン描き。	ロクロナデ。外面回転ケズリ。体部内面錆釉を施す。	胎 2.5Y6/3 釉 10YR3/4 5Y5/1	土坑144 京・信楽系

付表３　瓦類観察表

報告No.	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	時期・産地・同笵・同文	出土遺構
瓦1	複弁8弁蓮華文。凸中房、蓮子不明。蓮弁盛りあがり、輪郭線あり。間弁は三角形。外区は界線・珠文・圏線。周縁は内傾し、内面に凸線鋸歯文。	瓦当成形不明。瓦当側面上半縦ケズリ。裏面ナデ。	8世紀。大和産。 平城宮（文献1）6291B型式と同文。	土坑群F（土坑2748）、計1点。
瓦2	単弁12弁蓮華文。圏線中房、1＋8。蓮弁は盛り上がり、間弁はY字形。外区は界線・珠文。周縁内面に線鋸歯文。笵はB型。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当側面上半縦ケズリ、下半横ケズリ。裏面は中央部が凹みオサエ、周縁ケズリ。	8世紀。大和産。 平城宮（文献1）6133型式と同文。	土坑群B（土坑2844）、計1点。
瓦3	単弁12弁蓮華文。圏線中房、中に＊を配す。蓮弁は柳葉状で不揃い。外区は界線。周縁部分的に残存。瓦当面笵キズ多い。瓦当面は楕円形。	瓦当成形台一本造成形。瓦当側面上半ナデ、下半横ナデ。裏面は丸瓦から連続する布目。	11世紀前葉。山城産。 平安京左京二条二坊十町（文献2）瓦7・8、左京三条四坊四町（文献3）第81図3・4、池田窯（文献4）NM10型式と同笵。	土坑2811、計1点。
瓦4	複弁8弁蓮華文。凸中房、蓮子不明。蓮弁輪郭線あり。間弁なし。外区は界線・密な珠文・圏線。周縁は素文直立縁。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。 瓦当側面上半オサエ、下半ナデ、裏面オサエナデ。裏面盛り上がる。	11世紀前葉。山城産。 池田窯（文献4）NM14型式、森ヶ東窯（文献5）図70-173と内区蓮華文が類似。	溝3036、計1点。
瓦5	単弁6弁蓮華文。圏線中房、1＋8。蓮弁は幅広く短い、子葉あり。外区は界線・珠文・圏線。珠文は3個1単位。周縁なし。	瓦当成形不明。瓦当側面下半横ナデ、裏面ナデ。	11世紀前葉。丹波産。 平安京左京一条三坊九町（文献6）図25－2、東寺（文献7）46、観音芝廃寺（文献8）30と同文。	溝3441、計1点。
瓦6	複弁8弁蓮華文。凸中房、蓮子不明。蓮弁輪郭線あり。間弁なし。外区は界線・珠文・圏線。周縁は素文直立縁。	瓦当成形不明。瓦当側面下半横ナデ、裏面ナデ。裏面盛り上がる。	12世紀。山城産。 平安宮内裏（文献9）216と同文。	柱穴2969、土坑3182、計2点。
瓦7	単弁蓮華文。圏線中房、蓮弁・子葉は凸線。周縁は素文直立縁。瓦当面笵キズ多い。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当側面上半ナデ、下半横ナデ、裏面ナデ。	12世紀。山城産。	柱穴2763、計1点。
瓦8	単弁蓮華文。弁形は羽子板状。子葉盛り上がる。外区は珠文。周縁なし。	裏面丸瓦貼付成形。瓦当側面上半オサエ、下半ナデ、裏面横ナデ。裏面盛り上がる。	12世紀。産地不明。	土坑3113、計1点。
瓦9	単弁蓮華文。中房不明。蓮弁・子葉凸線、間弁なし。外区は界線。周縁不明。	瓦当成形不明。瓦当裏面ナデ。	12世紀。生産地不明。	井戸2961、溝3061、計2点。
瓦10	単弁6弁・複弁6弁交互弁蓮華文。圏線中房、1＋6。蓮弁盛り上がり、輪郭線あり。蓮弁連続。外区は界線。周縁は素文直立縁で、内面傾斜する。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当上半縦ナデ、下半横ナデ。裏面はナデ5点、ケズリ1点、平行タタキ3点、縄タタキ後ナデ1点。丸瓦凸面接合部にヘラ描き条線付ける。	12世紀。讃岐産。	土坑群G（土坑587）、土坑群D（土坑2549）、江戸時代整地層、土坑381、土坑608、土坑638、土坑2568、土坑2745、井戸2158、柱穴794、計10点。
瓦11	瓦10と同笵。	裏面平行タタキ。	12世紀。讃岐産。	土坑381（瓦10参照）。
瓦12	瓦10と同笵。	裏面縄タタキ。	12世紀。讃岐産。	土坑3182（瓦13参照）。
瓦13	瓦10と同文で、小型。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当側面上半縦ナデ、下半横ナデ。裏面はナデ4点、縄タタキ後ナデ1点、不明1点。丸瓦凸面縦ナデ、凹面ナデ、側面縦ナデ。	12世紀。讃岐産。	江戸時代整地層、建物2284（柱穴2243）、土坑2893、土坑3182、計6点。
瓦14	単弁6弁蓮華文。圏線中房、1＋6。蓮弁盛り上がり、鎬あり。間弁連続。外区は界線。周縁なし。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当側面上半縦ナデ、下半横ナデ。裏面はナデ4点、平行タタキ2点。 瓦14は瓦当面側面に平行タタキあり。丸瓦凸面縦ナデ、凹面ナデ、側面縦ナデ。	12世紀。讃岐産。	表採、江戸時代整地層、平安時代後期～鎌倉時代前半整地層、土坑2893、塀2206、計6点。
瓦15	瓦14と同笵。	裏面平行タタキ。	12世紀。讃岐産。	平安時代後期～鎌倉時代前半整地層（瓦14参照）。
瓦16	左巻三巴文。頭部離れ、尾部も離れる。外区は界線・密な珠文・圏線。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。 瓦当裏面ナデ。	12世紀。山城産。	土坑群G（土坑596）、計1点。
瓦17	右三巴文。頭部離れ、尾部も離れる。界線あり。外区に珠文。周縁は素文直立縁。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。 瓦当側面下半横ナデ、裏面ナデ。	13世紀。産地不明。	溝2250、計1点。

報告No.	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	時期・産地・同笵・同文	出土遺構
瓦18	右三巴文。頭部離れ、尾部も離れる。界線なし。外区に珠文14。周縁は素文直立縁。	瓦当成形不明。瓦当側面上半縦ナデ、下半横ナデ、裏面ナデ。	13世紀。産地不明。	石室2720、計1点。
瓦19	右三巴文。頭部離れ、尾部も離れる。周縁は素文直立縁。	瓦当裏面丸瓦貼付成形。瓦当側面上半縦ナデ、裏面ナデ。	13世紀。産地不明。	土坑2811、計1点。
瓦20	右三巴文。頭部離れ、尾部も離れる。界線なし。珠文17。周縁は素文直立縁。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当側面上半縦ナデ、下半横ナデ、裏面平滑なナデ。	13世紀以降。産地不明。	柵730(柱穴541)、江戸時代整地層、建物2284(柱穴2101)、井戸2013、土坑群B(土坑2506)、計37点。
瓦21	桐文。五三桐文を配す。外区・周縁不明。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当裏面ナデ。	16世紀以降。産地不明。 平安京左京北辺三坊(文献10)図版11-3と同文。	土坑群B(土坑2506)、計1点。混入品。
瓦22	右三巴文。頭部離れ、尾部は互いに接し界線となる。外区に珠文16。周縁は素文直立縁。	瓦当成形不明。瓦当裏面ナデ、後円周ナデ。	17世紀以降。産地不明。	土坑106、計1点。
瓦23	外行2転唐草文。唐草は分離。外区は界線・珠文。周縁は素文直立縁。	段顎。瓦当成形不明。瓦当部凹面横ナデ、凸面横ナデ。	8世紀。大和産。 平城宮(文献1)6664D型式と同文。	溝3061、計1点。
瓦24	外行2転唐草文。中心文は対向C字文。唐草は分離、支茎多い。外区は界線・珠文。周縁は素文直立縁。	曲線顎Ⅱ。瓦当成形不明。瓦当凹面横ケズリ、凸面不明、側面縦ナデ。平瓦凹面布目、凸面縦ナデ、側面縦ナデ。	8世紀末～9世紀初頭。摂津or山城産。吉志部窯(文献11)Kb6型式、大山崎瓦窯(文献12)OY204型式と同笵。	建物2284(柱穴2102)、計1点。
瓦25	外行3転唐草文。唐草は連続。外区は界線・珠文。周縁は素文直立縁。右端外区を縮小。	曲線顎Ⅱ。瓦当成形不明。瓦当凹面横ケズリ、凸面横ケズリ、側面縦ケズリ、裏面は平瓦凸面から縦ケズリ。平瓦凹面布目、凸面縦ケズリ、側面縦ケズリ。	11世紀以前。山城産。 森ヶ東瓦窯(文献5)図70-182～184と同笵。平安宮中務省(文献13)図版20-25、平安京左京二条二坊十六町(文献14)図版52-22と同文。	平安時代後期～鎌倉時代前半整地層、計1点。
瓦26	外行唐草文。外区は界線。周縁は素文直立縁。	曲線顎Ⅱ。瓦当成形不明。瓦当凹面不明、凸面横ナデで傾斜面、裏面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面縦ケズリ、側面縦ケズリ。	11世紀以前。山城産。 池田窯(文献4)NM21類と同文。平安京左京三条三坊十町(文献15)瓦8と類似。	井戸2961、計1点。
瓦27	半裁花文。花文は4単位で、上下に配置。外区は界線・珠文。珠文は3個1単位。周縁は素文直立縁。	顎不明。瓦当成形不明。瓦当凹面は平瓦凹面から布目、側面縦ナデ。	11世紀前葉。丹波産。 平安京左京北辺四坊(文献16)96-3、東寺(文献7)123、観音芝廃寺(文献8)16と同文。	平安時代後期～鎌倉時代前半整地層、計1点。
瓦28	内行3転唐草文。中心文に珠文縦3個。唐草は連続。外区は界線・珠文。珠文小さい。周縁は素文直立縁。瓦当面右上端に笵キズあり。	曲線顎Ⅱ。瓦当成形不明。瓦当凸面横ケズリ、側面ナデ、裏面部分的に横ケズリ。平瓦凹面布目、凸面ナデ。	11世紀末～12世紀。山城産。 出土地不明(文献17)1382、平安京左京二条二坊十町(文献18)図版28-31と同笵。平安宮内裏(文献9)469、円勝寺(文献19)ER143型式と同文。	土器溜2257、計1点。
瓦29	内行4転唐草文。唐草は複線で連続。外区は界線・珠文。周縁は素文直立縁。	曲線顎Ⅱ。瓦当成形不明。瓦当上縁横ケズリ、凸面横ナデ、裏面オサエ・縦ナデ。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ケズリ。	11世紀末～12世紀。山城産。 円勝寺(文献19)ER142型式と同笵。三条西殿(文献9)468、法勝寺(文献17)419、平安京左京三条三坊十二町(文献20)34図1と同文。	溝3036、計1点。
瓦30	瓦29と同笵で、大型。笵キズ多い。	曲線顎Ⅱ。瓦当成形不明。瓦当凸面ナデ、裏面オサエ。平瓦凹面布目、凸面オサエ。	11世紀末～12世紀。山城産。 平安宮(文献9)468、平安京左京三条三坊十二町(文献20)34図1、鳥羽東殿白河天皇陵堀(文献21)図版11-15と同文。	土坑群F(土坑2748)、計1点。
瓦31	外行3転唐草文。中心文は背向C字文。唐草は分離。外区は界線・珠文。珠文は細かく密。周縁は素文直立縁。	短段顎。瓦当成形不明。瓦当凹面は平瓦凹面から布目、凸面不明、裏面横方向縄タタキ。	12世紀。丹波産。 円勝寺(文献19)ER117、篠三軒屋南窯(文献22)と同文。	土坑2814、計1点。
瓦32	外行2転唐草文。中心文は下向C字並列。唐草は分離。外区に界線。周縁は素文直立縁。	バチ形顎。瓦当側面に粘土を付加する包込成形。瓦当裏面中央に平瓦を接合。瓦当凹面縦ナデ、凸面横ナデ、側面ナデ。平瓦凹面布横ナデ、凸面横ナデ。	12世紀。播磨産。 尊勝寺(文献23)242C型式、神出窯(文献24)3001型式、林崎三本松窯(文献25)NH02型式と同文。	土坑3471、計1点。
瓦33	右偏行5転唐草文。唐草は連続、枝茎巻き込む。外区太い界線。右端が笵型より大きい為、周縁あり。	直線顎。瓦当成形不明。瓦当凹面横ケズリ、凸面横ケズリで面あり。平瓦凹面布目、凸面斜方向縄タタキ、側面縦ケズリ。側面の凸面側にバリが残存。	12世紀。讃岐産。 西村窯(文献26)第73図14と類似。	土器溜2257、土坑381、柱穴767、土坑群B(土坑2506)、計7点。

報告No.	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	時期・産地・同笵・同文	出土遺構
瓦34-1	左偏行4転唐草文。唐草は分離し、先端巻き込む。外区は2重界線。両側は周縁あり。整地層から同文の瓦頭部で幅16㎝の小型瓦が出土。	直線顎。瓦当成形不明。瓦当凹面横ケズリ、凸面横ケズリで面あり。平瓦凹面布目、凸面斜方向・横方向縄タタキ、側面縦ケズリ。平瓦接合位置が低いため、凹面凹む。	12世紀。讃岐産。 根香寺（文献27）151-79に類似。	柱穴3468、土坑2892、柱穴1017、土坑群G（土坑555）、平安時代後期～鎌倉時代前半整地層、土坑2108、土坑2257、溝3061、溝2893、計11点。
瓦34-2	瓦34-1参照。	瓦34-1参照。	瓦34-1参照。	土坑2108 （瓦34-1参照）
瓦35	左偏行4転唐草文。唐草は2重で連続、巻き込む。外区は界線。周縁は素文直立縁。	曲線顎Ⅱ。瓦当は顎貼付成形。瓦当凹面不明、凸面横ケズリ、裏面は平瓦凸面から連続した斜方向縄タタキ、側面縦ナデ。	12世紀。讃岐産。 鳥羽金剛心院（文献28）SH2型式、丸山窯（文献29）TMY-203a類と同文。	土坑2892、計1点。
瓦36	5連巴文。巴文は右巻三巴で、頭部接し、尾部接して圏線となる。周縁は素文直立縁。	直線顎。瓦当成形不明。瓦当凹面横ケズリ、凸面横ケズリで面あり。平瓦凹面布目、凸面斜方向縄タタキ、側面縦ケズリ。平瓦接合位置が低いため、凹面凹む。	12世紀。讃岐産。 鳥羽金剛心院（文献28）SH3型式、丸山窯（文献29）TMY-201a5類と同文。	土坑2895、計1点。
瓦37	唐草文。唐草は分離。外区界線あり。周縁は素文直立縁。	段顎。瓦当貼付成形。瓦当上縁横ケズリ。瓦当凸面・裏面横ナデ。瓦当と平瓦接合部に凹型台圧痕あり。	13世紀。産地不明。	土坑2039、計1点。
瓦38	外行唐草文。唐草は分離。外区界線あり。周縁は素文直立縁。	段顎。瓦当貼付成形。瓦当上縁横ケズリ。瓦当凹面布目、凸面・裏面横ナデ。瓦当と平瓦接合部に凹型台圧痕あり。	13世紀。産地不明。	土坑261、計1点。
瓦39	外行唐草文。唐草は分離。外区に界線あり。周縁は素文直立縁。	段顎。顎貼付成形。瓦当凹面布目、凸面ナデ、裏面横ナデ。瓦当と平瓦接合部に凹型台圧痕あり。	13世紀。産地不明。	鎌倉時代後半～室町時代整地層、計1点。
瓦40	外行唐草文。唐草は連続。外区なし。周縁は素文直立縁。	段顎。顎貼付成形。瓦当上縁横ケズリ。瓦当凸面・裏面横ナデ。瓦当と平瓦接合部に凹型台圧痕あり。	13世紀。産地不明。	土坑群B（土坑2508）、計1点。
瓦41	陰刻剣頭文。剣頭は垂直に配す。	短段顎。折曲成形。瓦当凹面布目、凸面ナデ、裏面オサエ。瓦当と平瓦接合部に凹型台圧痕あり。	13世紀。山城産。	土坑群B（土坑2506）、計1点。
瓦42	連珠文。連珠を密に配す。外区界線。周縁は素文直立縁。	曲線顎Ⅱ。顎貼付成形。瓦当凸面横ナデ、裏面縦ナデ。	13世紀。和泉産。 日置荘遺跡（文献30）図6と類似。	土坑709、計1点。
瓦43	外行2転唐草文。中心文は6弁蓮華文。唐草は連続する。外区なし。周縁は素文直立縁。	段顎。顎貼付成形。瓦当上縁横ケズリ、凸面・裏面横ナデ。瓦当と平瓦接合部に凹型台圧痕あり。	13世紀。産地不明。	土坑群B（土坑2844）、土坑2381、計2点。
瓦44	内行3転唐草文。中心文なし。唐草は2重線で連続。間に珠文あり。幅18.5㎝、長さ19㎝の小型瓦。	短段顎。瓦当貼付成形。瓦当上縁横ケズリ、凸面・裏面横ナデ。瓦当と平瓦接合部は強く横ナデ。平瓦凹面平滑な横ナデ、凸面縦ナデ、側面縦ナデ、端面ナデ。凸面縦ナデ、右側に凹型台圧痕あり。	13世紀以降。産地不明。 平安京左京二条四坊十五町（文献31）図29瓦35、左京三条四坊四町（文献3）図90-3と同笵。平安京左京三条二坊十町（文献32）図版72瓦137と同文。 東福寺（文献33）12図72と類似。	土坑群B（土坑2506）、土坑群E（土坑315）、江戸時代整地層、土坑2080、土坑2127、井戸2013、計31点。
瓦45	外行3転唐草文。中心文は上向き三葉形で、アーモンド形。唐草は分離。外区なし。周縁は素文直立縁で、両側広い。	短段顎。顎貼付成形。	17世紀以降。産地不明。	土坑2015、計1点。
瓦46	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉形。唐草は分離。外区なし。周縁は素文直立縁で、両側広い。	短段顎。顎貼付成形。	17世紀以降。産地不明。	土坑2063、計1点。
瓦47	外行2転唐草文。中心文は桃形、側文あり。唐草は分離。外区なし。周縁は素文直立縁で、両側広い。左に桟あり。	短段顎。瓦当貼付成形。	17世紀以降。産地不明。	土坑162、計1点。
瓦48	瓦47と同文で、唐草先端玉状になる。	短段顎。顎貼付成形。	17世紀以降。産地不明。	土坑2063、土坑2841、土坑44、土坑2062、計4点。

報告No.	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	時期・産地・同笵・同文	出土遺構
瓦49	外行2転唐草文。中心文は宝珠。唐草は分離で、雲状。周縁は素文直立縁で、両側広い。瓦当面にキラコ付着。	段顎。顎貼付成形。	17世紀以降。産地不明。	攪乱、計1点。
瓦50	外行3転唐草文。中心文は桃形、側文はY字形。唐草は分離。外区なし。周縁は素文直立縁で、両側広い。	短段顎。顎貼付成形。	17世紀以降。産地不明。	土坑165、計3点。
瓦51	外行2転唐草文。中心文は上向きリボン形。唐草は分離。外区なし。周縁は素文直立縁で、両側広い。	短段顎。顎貼付成形。	17世紀以降。産地不明。	攪乱、計1点。
瓦52	瓦51と同文。唐草が太い。瓦当面キラコ付着。	短段顎。顎貼付成形。	17世紀以降。産地不明。	攪乱、計1点。
瓦53	外行2転唐草文。中心文は三ツ星。唐草は分離。周縁は素文直立縁で、両側広い。左脇周縁に「み」の刻印あり。左側に桟あり。	段顎。顎貼付成形。	17世紀以降。産地不明。	土坑2233、攪乱、計3点。
瓦54	軒桟瓦。軒丸瓦は右巻三巴文。軒丸瓦は外行唐草文。巴文は頭・尾離れる。外区は珠文。唐草文は中心三葉文、唐草分離。	瓦当顎貼付成形。	17世紀以降。産地不明。	土坑2056、計1点。
瓦55	鳥衾瓦。右三巴文。頭部離れ、尾部も離れる。界線あり。外区に珠文。周縁は素文直立縁。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。接合位置低い。瓦当側面上半縦ナデ、裏面ナデ。	13世紀。産地不明。	土坑群B(土坑2840)、計1点。
瓦56	鳥衾瓦。右三巴文。頭部離れ、尾部も離れる。界線なし。外区に珠文。周縁は素文直立縁。	瓦当裏面丸瓦貼付成形。瓦当裏面下半に堤を貼付。瓦当側面下半縦ナデ、裏面オサエ。	13世紀。産地不明。	土坑群C(土坑2567)、計1点。
瓦57	鬼瓦。内区は魚々子模様。周縁は素文直立縁。	粘土板を貼り合わせて成形。	17世紀以降。産地不明。	土坑2012、計1点。
瓦58	鬼瓦右足部。平坦面にヘラで文様刻む。	粘土板を貼り合わせて成形。	17世紀以降。産地不明。	土坑2012、計1点。
瓦59(塼)	有孔方形塼。上面・側面・下面平坦。側面にヘラ描き格子文。中央に孔あり。上面摩滅し、若干くぼむ。砥石として使用したのか。	粘土塊成形。	時期不明。産地不明。	土坑2063、計1点。

(付表３　瓦類観察表　文献)

1　奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編『平城京・藤原京出土軒瓦一覧』、奈良国立文化財研究所、1996年。

2　平尾政幸・山口　真『平安京左京二条二坊十町（高陽院）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005－7、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2005年。

3　植山　茂「遺構と遺物」『高倉宮・曇華院跡第４次調査』平安京跡研究調査報告第18輯、財団法人古代学協会、1987年。

4　青山　均「瓦類」『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』、大谷高等学校・法住寺殿跡遺跡調査会、1984年。

5　『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1997年。

6　南　博史『平安京土御門烏丸内裏左京一条三坊九町』平安京跡研究調査報告第10輯、財団法人古代学協会、1983年。

7　「瓦」『新東寶記　東寺の歴史と美術』、東寺、1995年。

8　亀岡市文化資料館編『丹波国と平安京～都を支えた篠窯跡群～』、亀岡市資料館、1994年。

9　平安博物館編『平安京古瓦図録』、雄山閣、1977年。
10　鈴木廣司・山本雅和「平安京左京北辺三坊」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1997年。
11　増田真木『吉志部瓦窯跡－出土瓦整理報告書－』、吹田市教育委員会、2012年。
12　古閑正浩・林　亨・寺島千春『大山崎町第56次遺跡確認調査（7YYMS' EG－6地区）概要』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第31集、大山崎町教育委員会、2005年。
13　網　伸也「平安宮中務省」『平安京跡発掘調査概報　平成２年度』、京都市文化観光局、1991年。
14　内田好昭「平安京左京二条二坊」『平安京跡発掘調査概報　昭和63年度』、京都市文化観光局、1989年。
15　柏田有香『平安京左京三条二坊十町跡・烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009－20、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2010年。
16　加納敬二「瓦類」『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書第22冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2004年。
17　『木村捷三郎収集瓦図録』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年。
18　網　伸也「平安京左京二条二坊」『平安京跡発掘調査概報　平成元年度』、京都市文化観光局、1990年。
19　上原真人「円勝寺発掘調査団：円勝寺の発掘調査（下）瓦類」『佛教藝術84号』、毎日新聞社、1972年。
20　植山　茂「出土瓦」『平安京左京三条三坊十二町　三條西殿跡』平安京跡研究調査報告第７輯、財団法人古代学協会、1983年。
21　前田義明・鈴木久男「第121次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和61年度』、京都市埋蔵文化財研究所・京都市文化観光局、1987年。
22　亀岡市教育委員会編「篠窯跡」『亀岡市史』、亀岡市、1988年。
23　「尊勝寺発掘調査報告－京都会館建設地の調査－」『平城宮跡第一次・伝飛鳥板葺宮跡発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第十冊、奈良国立文化財研究所、1961年。
24　纐纈文佳「瓦類」『神出窯跡群発掘調査報告書』、神戸市教育委員会、2018年。
25　池田征弘「瓦」『林崎三本松瓦窯跡群発掘調査報告書』明石市文化財調査報告書第６冊、明石市教育委員会、2017年。
26　廣瀬常雄「瓦類」『西村遺跡Ⅲ－国道32号線綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査－』、香川県教育委員会、1982年。
27　安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会年報』特別号８、香川県文化財保護協会・香川県教育委員会、1967年。
28　前田義明「瓦類」『鳥羽離宮跡Ⅰ　金剛心院跡の調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2002年。
29　森下英治『丸山窯跡　水道局第3投棄場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』、香川県教育委員会、2016年。
30　市本芳三「摂河泉地域の中世瓦の様相－鎌倉時代を中心に－」『シンポジウム中世瓦の研究』、帝塚山大学考古学研究所、2002年。
31　柏田有香・持田　透『平安京左京二条四坊十五町跡・東京極大路跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015－5、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2015年。
32　加納敬二「瓦類」『平安京左京三条二坊十町跡（堀河院跡）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007－17、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2008年。
33　長谷川行孝「遺物」『東福寺防災施設工事・発掘調査報告書』、東福寺、1990年。

付表４　石器観察表

報告No.	器種	法量(cm)	重量(g)	形態の特徴	製作手法の特徴	石材	備考
石1	磨製石戈	全長　(8.2) 幅　(5.6) 厚さ　1.6	66.3	わずかに斜向する鏑あり。 基部欠損。	全面研磨	粘板岩	流路1132(新)Ⅰ層 刃部に使用痕か
石2	磨製石剣	全長 (11.4) 幅　(5.8) 厚さ　2.2	159.0	鉄剣形石剣か(無茎・有鏑)。	全面研磨	頁岩・粘板岩	土坑2841 側縁部剥離(再加工か)
石3	磨製石剣	全長 (16.6) 幅　(5.0) 厚さ　1.8	141.1		側縁部調整剥離 表・裏面の一部研磨	粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 未成品
石4	打製石鏃	全長　2.0 幅　1.4 厚さ　0.3	0.5	基部が直線的(平基1類)。	調整剥離	サヌカイト (二上山)	溝1245
石5	打製石鏃	全長　1.9 幅　1.5 厚さ　0.4	0.8	基部が直線的(平基1類)。	調整剥離	サヌカイト (金山)	流路1132(新)Ⅳ層
石6	打製石鏃	全長　1.5 幅　1.2 厚さ　0.3	0.5	平基に近い凹基状の基部(平基2類)。	調整剥離	サヌカイト (二上山)	土坑3554
石7	打製石鏃	全長　1.9 幅　1.6 厚さ　0.3	0.7	平基に近い凹基状の基部(平基2類)。	調整剥離	サヌカイト (金山)	竪穴建物1055
石8	打製石鏃	全長　(2.2) 幅　1.7 厚さ　0.3	0.6	平基に近い凹基状の基部(平基2類)。 先端部欠損。	調整剥離	サヌカイト (二上山)	第4面(弥生時代)遺構 検出中
石9	打製石鏃	全長　2.2 幅　1.4 厚さ　0.4	0.8	平基に近い凹基状の基部(平基2類)。	調整剥離	サヌカイト (二上山)	竪穴建物2222
石10	打製石鏃	全長　(2.4) 幅　1.7 厚さ　0.5	1.2	平基に近い凹基状の基部(平基2類)。 先端部欠損。	調整剥離	サヌカイト (金山)	流路1132(新)Ⅱ層上層
石11	打製石鏃	全長　2.4 幅　1.7 厚さ　0.4	1.3	平基に近い凹基状の石基部(平基2類)。先端部欠損。	調整剥離	サヌカイト (二上山)	流路1132(新)Ⅰ層
石12	打製石鏃	全長　2.4 幅　1.7 厚さ　0.3	1.1	平基に近い凹基状の石基部(平基2類)。	調整剥離	サヌカイト (金山)	流路1132(新)Ⅱ層
石13	打製石鏃	全長　2.2 幅　1.5 厚さ　0.2	0.6	刺突部が直線的。平面形が正三角形(凹基2類)。	調整剥離	サヌカイト (二上山)	竪穴建物1206
石14	打製石鏃	全長　(2.9) 幅　2.0 厚さ　0.3	2.0	刺突部側縁が緩やかに外湾(凹基3類)。先端部欠損。	調整剥離	サヌカイト (二上山)	流路1132(新)Ⅰ層
石15	打製石鏃	全長　3.2 幅　1.7 厚さ　0.5	2.0	刺突部側縁が緩やかに外湾(凹基3類)。	調整剥離	サヌカイト (金山)	流路1132(新)Ⅰ層
石16	打製石鏃	全長　(3.2) 幅　2.2 厚さ　0.5	2.6	刺突部側縁が緩やかに外湾(凹基3類)。先端部欠損。	調整剥離	サヌカイト (二上山)	流路1132(古)上層
石17	打製石鏃	全長　2.8 幅　1.5 厚さ　0.3	1.0	刺突部が直線的。平面形が正三角形(凹基2類)。	調整剥離	サヌカイト (二上山)	竪穴建物3581
石18	打製石鏃	全長　2.2 幅　0.9 厚さ　0.3	0.6	刺突部が直線的。平面形が正三角形(凹基2類)。	調整剥離	サヌカイト (二上山)	竪穴建物2222
石19	打製石鏃	全長　2.0 幅　1.4 厚さ　0.3	0.5	刺突部が直線的。平面形が縦長の二等辺三角形(凹基1類)。	調整剥離	サヌカイト (二上山)	流路1132(新)Ⅰ層
石20	打製石鏃	全長　(2.1) 幅　(1.5) 厚さ　0.4	0.8	刺突部側縁が緩やかなS字状(凹基4類)。逆棘部欠損。	調整剥離	サヌカイト (金山)	竪穴建物3576
石21	打製石鏃	全長　(2.7) 幅　1.9 厚さ　0.4	0.8	刺突部側縁が緩やかなS字状(凹基4類)。先端部欠損。	調整剥離	サヌカイト (二上山)	流路1132(古)上層
石22	打製石鏃	全長　1.9 幅　1.6 厚さ　0.3	0.7	刺突部側縁が緩やかに外湾(凹基3類)。	調整剥離	サヌカイト (金山)	土坑3590
石23	打製石鏃	全長　2.8 幅　2.2 厚さ　0.5	2.6		側縁調整剥離	サヌカイト (金山)	流路1132(新)Ⅰ層 未成品

報告No.	器種	法量(cm)	重量(g)	形態の特徴	製作手法の特徴	石材	備考
石24	打製石鏃	全長 2.4 幅 1.2 厚さ 0.3	1.2	平面形が木葉形。基部が直線的(凸基式)。	調整剥離	サヌカイト(金山)	第4面(弥生時代)遺構検出中
石25	打製石鏃	全長 2.6 幅 1.1 厚さ 0.4	1.0	平面形が木葉形。基部が直線的(凸基式)。	調整剥離	サヌカイト(二上山)	土坑3588
石26	打製石鏃	全長 (2.5) 幅 (1.4) 厚さ 0.3	1.4	平面形が木葉形。基部が直線的(凸基式)。	調整剥離	サヌカイト(金山)	竪穴建物1206
石27	打製石鏃	全長 (2.5) 幅 1.6 厚さ 0.5	1.7	刺突部と基部の境界が逆刺状に張り出す(有茎1類)。先端部欠損。	調整剥離	サヌカイト(金山)	柱穴837(建物851)
石28	打製石鏃	全長 5.5 幅 1.2 厚さ 0.8	5.1	柳葉形(有茎2類)。	調整剥離	サヌカイト(金山)	溝1245
石29	磨製石鏃	全長 (4.8) 幅 2.1 厚さ 0.5	6.8	基部欠損？	全面研磨 磨製石包丁の再加工	粘板岩	流路1132(新)Ⅳ層
石30	磨製石鏃	全長 (7.0) 幅 1.7 厚さ 0.5	7.8	刺突部と基部の境界に石包丁の穿孔を利用して抉り込みを入れる。先端部欠損。	全面研磨 磨製石包丁の再加工	粘板岩	流路1132(新)Ⅳ層
石31	磨製石鏃	全長 10.3 幅 2.6 厚さ 1.1	23.1	刺突部と基部の境界が逆刺状に張り出す。	調整剥離 体部研磨	サヌカイト(金山)	土坑2893
石32	打製石鏃	全長 3.2 幅 1.7 厚さ 0.5	2.0	基部が直線的(平基1類)。	調整剥離	サヌカイト(二上山)	方形周溝墓3543
石33	打製石鏃	全長 (3.2) 幅 2.2 厚さ 0.5	2.6	平基に近い凹基状の基部(平基2類)。	調整剥離	サヌカイト(金山)	方形周溝墓3543
石34	石包丁	全長 16.6 幅 4.8 厚さ 0.6	75.3	弧背・直刃・弧端。 穿孔2ヶ所。	全面研磨	粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 刃部摩滅
石35	石包丁	全長 15.3 幅 5.8 厚さ 0.5	81.1	弧背・直刃・弧端。 穿孔1ヶ所。	全面研磨	粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 刃部摩滅 刃部鋸歯状に線状痕
石36	石包丁	全長 (12.6) 幅 4.1 厚さ 0.4	35.7	弧背・直刃・尖端。 穿孔2ヶ所。	全面研磨	粘板岩	竪穴建物2222
石37	石包丁	全長 (10.3) 幅 4.2 厚さ 0.7	39.1	弧背・直刃・弧端。 穿孔2ヶ所。 未貫通穿孔1ヶ所。	全面研磨	粘板岩	流路1132(新)Ⅰ層 刃部摩滅 研磨後刃敲打痕
石38	石包丁	全長 (10.3) 幅 3.3 厚さ 0.5	26.9	弧背・直刃・弧端。 穿孔2ヶ所。 未貫通穿孔2ヶ所。	全面研磨	粘板岩	流路1132(新)Ⅰ層
石39	石包丁	全長 (9.7) 幅 2.9 厚さ 0.5	27.7	弧背・直刃・尖端。 穿孔1ヶ所。	全面研磨	粘板岩	柱穴1253 研磨後線状痕
石40	石包丁	全長 (6.3) 幅 6.7 厚さ 0.6	32.2	弧背・弧刃。 穿孔2ヶ所。 未貫通穿孔4ヶ所。	全面研磨 自然面あり	粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 研磨後刃部敲打痕
石41	石包丁	全長 (8.5) 幅 4.6 厚さ 0.4	34.7	弧背・直刃・直端。 穿孔1ヶ所以上。	全面研磨	粘板岩	井戸2961
石42	石包丁	全長 (11.3) 幅 4.9 厚さ 0.6	52.0	弧背・直刃・直端。 穿孔2ヶ所。	全面研磨	粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 研磨後刃部敲打痕
石43	石包丁	全長 12.1 幅 4.1 厚さ 0.7	56.4	直背・直刃・直端。 穿孔1ヶ所。	全面研磨	粘板岩	流路1132(新)Ⅰ層 研磨後側縁敲打痕
石44	石包丁	全長 (10.5) 幅 3.1 厚さ 0.4	22.6	直背・直刃・直端。 穿孔2ヶ所。	全面研磨	粘板岩	流路1132(新)Ⅰ層 研磨後側縁敲打痕
石45	石包丁 (石鎌)	全長 (7.0) 幅 1.7 厚さ 0.5	7.8	弧背内湾刃。	全面研磨	粘板岩	第4面(弥生時代)遺構検出中
石46	石包丁	全長 12.5 幅 7.3 厚さ 1.1	148.1	直背・直刃・直端。	側縁部調整剥離	粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 未成品

報告No.	器種	法量(cm)	重量(g)	形態の特徴	製作手法の特徴	石材	備考
石47	石包丁	全長 10.3 幅 7.9 厚さ 0.4	48.8	弧端。	擦切施溝分割痕 側縁部調整剥離	粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層上層 未成品
石48	石包丁	全長 12.6 幅 7.3 厚さ 1.2	129.5		体部敲打痕	粘板岩	流路1132(新)Ⅰ層 未成品
石49	石包丁	全長 9.9 幅 6.0 厚さ 0.8	62.8	弧背・直刃？	側縁部調整剥離	粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 未成品
石50	石包丁	全長 17.3 幅 7.4 厚さ 0.8	128.7	弧背・弧刃・尖端。	側縁部調整剥離	粘板岩	流路1132(新)Ⅰ層 未成品
石51	石包丁	全長 8.6 幅 7.8 厚さ 0.5	44.5	直刃。	全面研磨	粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 未成品 大型石包丁か？
石52	石包丁	全長 (10.3) 幅 4.2 厚さ 0.7	39.1	直刃・直端。	側縁部調整剥離 体部研磨	粘板岩	残土 未成品
石53	石包丁	全長 9.3 幅 8.2 厚さ 0.8	76.0		擦切施溝分割痕 側縁部調整剥離	粘板岩	溝1245・流路1132(新) 合流地点 未成品
石54	石包丁	全長 5.9 幅 3.8 厚さ 0.5	15.5		擦切施溝分割痕 体部片面研磨	粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 未成品
石55	石包丁	全長 5.0 幅 4.8 厚さ 0.5	18.5		擦切施溝分割痕	粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 未成品
石56	石包丁	全長 7.9 幅 4.2 厚さ 1.1	39.8		擦切施溝分割痕 体部片面研磨	粘板岩	第4面(弥生時代)遺構 検出中 未成品
石57	石包丁	全長 7.6 幅 2.8 厚さ 0.9	18.2		擦切施溝分割痕	粘板岩	流路1132(新)Ⅰ層 未成品
石58	柱状片刃 石斧	全長 (7.7) 幅 (0.5) 厚さ (4.3)	21.2	両側縁部欠損。	刃部主面研磨	結晶片岩	第4面(弥生時代)遺構 検出中 未成品
石59	扁平片刃 石斧	全長 (2.7) 幅 (1.7) 厚さ 0.4	3.0	刃部断面が両刃に近い。 基部・側縁部一部欠損。 極小品。	全面研磨	頁岩・粘板岩	流路1132(新)Ⅰ層
石60	扁平片刃 石斧	全長 5.3 幅 (2.5) 厚さ 0.8	16.1	刃部断面が両刃に近い。 側縁部一部欠損。	全面研磨	頁岩・粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層
石61	扁平片刃 石斧	全長 (10.6) 幅 4.4 厚さ 0.9	74.2	刃部欠損。	全面研磨	頁岩・粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層
石62	扁平片刃 石斧	全長 13.0 幅 5.8 厚さ 1.5	161.5	刃部断面が両刃に近い。 側縁部一部欠損。	全面研磨	頁岩・粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 刃部使用痕？
石63	扁平片刃 石斧	全長 2.2 幅 1.4 厚さ 0.5	2.5	刃部断面が両刃に近い。 基部一部欠損。 極小品。	全面研磨	頁岩・粘板岩	竪穴建物1206
石64	扁平片刃 石斧	全長 3.7 幅 2.8 厚さ 0.7	15.1		全面研磨 自然面あり	頁岩・粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層上層
石65	扁平片刃 石斧	全長 5.3 幅 3.4 厚さ 1.2	46.1	基部後主面に抉り。	全面研磨	頁岩・粘板岩	流路1132(新)Ⅰ層
石66	扁平片刃 石斧	全長 (4.5) 幅 3.8 厚さ 0.8	28.1	刃部欠損。	全面研磨	頁岩・粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 基部に光沢(装着痕)
石67	扁平片刃 石斧 (石鏃)	全長 (9.6) 幅 7.3 厚さ 1.6	169.5	刃部断面が両刃に近い。 基部欠損。	全面研磨	頁岩・粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 刃部使用痕？
石68	扁平片刃 石斧 (石鏃)	全長 (14.1) 幅 9.1 厚さ 1.9	375.0	刃部断面が両刃に近い。 基部欠損。	全面研磨	頁岩・粘板岩	流路1132(新)Ⅱ層 刃部使用痕？
石69	柱状片刃 石斧 (鑿形石器)	全長 7.2 幅 1.3 厚さ 1.1	20.8	小型方柱状。	全面研磨	頁岩・粘板岩	流路1132(新)Ⅰ層 刃部に使用による剥離

報告No.	器種	法量(cm)	重量(g)	形態の特徴	製作手法の特徴	石材	備考
石70	柱状片刃石斧(鑿形石器)	全長 5.8 幅 1.0 厚さ 1.1	12.0	小型方柱状。	全面研磨	頁岩・粘板岩	土坑群B(土坑3092) 刃部に使用による剥離
石71	磨製両刃石斧	全長 13.0 幅 5.3 厚さ 3.8	375.0	尖基。	全面研磨 体部整形時の敲打痕	火山岩 (閃緑岩)	流路1132(古)上層 刃部に使用による剥離
石72	磨製両刃石斧	全長 (9.3) 幅 5.8 厚さ 1.4	328.0	断面隅丸三角形状。 基部欠損。	全面研磨	火山岩 (石英斑岩)	流路1132(古)湿地下層
石73	磨製両刃石斧	全長 (14.9) 幅 7.6 厚さ 5.3	1043.5	刃部欠損。	全面研磨 基部敲打痕	火山岩 (石英斑岩)	流路1132(新)Ⅱ層
石74	磨製両刃石斧	全長 (13.0) 幅 10.8 厚さ 6.6	1405.5	刃部・基部欠損。	粗割 打裂痕 研磨	火山岩 (石英斑岩)	流路1132(新)Ⅳ層 未成品
石75	磨製両刃石斧	全長 (8.8) 幅 (9.9) 厚さ 6.7	826.0	基部欠損。	敲打痕 研磨	火山岩 (石英斑岩)	流路1132(新)Ⅱ層 未成品
石76	磨製両刃石斧	全長 (18.5) 幅 8.9 厚さ 6.6	1415.0		打裂・敲打痕	火山岩 (石英斑岩)	流路1132(新)Ⅰ層 未成品
石77	磨製両刃石斧	全長 (9.8) 幅 6.1 厚さ 4.3	374.0	刃部欠損。	全面研磨	火山岩 (石英斑岩)	流路1132(古)上層 基部・側縁部敲打痕 敲石に転用
石78	磨製両刃石斧	全長 (13.4) 幅 6.8 厚さ 4.9	677.0	刃部欠損。	全面研磨	火山岩 (石英斑岩)	流路1132(新)Ⅱ層 基部・側縁部敲打・線状痕 敲石に転用
石79	磨製両刃石斧	全長 (12.4) 幅 6.5 厚さ 5.2	626.5		敲打痕	火山岩 (石英斑岩)	流路1132(新)Ⅰ層 基部・側縁部敲打・線状痕 未成品を敲石に転用か
石80	磨製両刃石斧	全長 (11.8) 幅 8.8 厚さ 5.2	891.0		敲打痕	火山岩 (石英斑岩)	流路1132(新)Ⅰ層 基部・側縁部敲打・線状痕 未成品を敲石に転用か
石81	敲石	全長 12.7 幅 8.7 厚さ 5.9	1042.0			火山岩 (石英斑岩)	流路1132(新)Ⅱ層 敲打・線状痕
石82	敲石	全長 11.7 幅 8.0 厚さ 5.8	946.0			火山岩 (石英斑岩)	流路1132(新)Ⅳ層 基部・側縁部敲打・線状痕
石83	敲石	全長 (4.5) 幅 6.1 厚さ 3.4	100.1			火山岩 (閃緑岩)	流路1132(新)Ⅰ層 先端部・側縁部敲打痕
石84	敲石	全長 (7.5) 幅 3.9 厚さ 2.9	129.4			頁岩・粘板岩	流路1132(新)Ⅲ層 先端部・側縁部敲打痕
石85	敲石	全長 6.2 幅 6.4 厚さ 5.6	377.5			火山岩 (石英斑岩)	残土 敲打痕
石86	敲石	全長 12.8 幅 3.8 厚さ 3.8	324.0			火山岩 (石英斑岩)	方形周溝墓3543 敲打・線状痕
石87	砥石	全長 (7.0) 幅 (7.8) 厚さ 3.4	189.5			砂岩	流路1132(新)Ⅱ層上層 砥石使用痕 V字溝3条
石88	砥石	全長 (10.5) 幅 (10.1) 厚さ 5.1	660.0			砂岩	流路1132(新)Ⅰ層 砥石使用痕・線状痕 敲打痕・円形凹み
石89	砥石	全長 (7.3) 幅 (4.1) 厚さ 3.4	121.8			砂岩	流路1132(新)Ⅱ層 砥石使用痕
石90	砥石	全長 15.2 幅 14.0 厚さ 6.5	1380.5	主面の横断面が緩い円弧状を呈する。		砂岩	流路1132(新)Ⅱ層 砥石使用痕・線状痕
石91	砥石	全長 (11.7) 幅 (9.9) 厚さ 5.6	763.0	主面の横断面が緩い円弧状を呈する。		砂岩	流路1132(新)Ⅰ層 砥石使用痕
石92	砥石	全長 18.2 幅 20.8 厚さ 7.1	3000.0		砥石使用面の裏面に自然面あり	砂岩	流路1132(新)Ⅰ層 砥石使用痕 置砥 V字溝

報告No.	器種	法量(cm)	重量(g)	形態の特徴	製作手法の特徴	石材	備考
石93	砥石	全長 23.6 幅 18.0 厚さ 11.4	8000.0	主面の横断面が緩い円弧状を呈する。		砂岩	流路1132(新)Ⅰ層 砥石使用痕 置砥
石94	砥石	全長 38.8 幅 18.2 厚さ 15.7	12000.0	主面の横断面が緩い円弧状を呈する。		砂岩	流路1132(古)湿地下層 砥石使用痕・線状痕 置砥
石95	石鋸	全長 7.2 幅 2.2 厚さ 0.4	8.3			結晶片岩 (紅簾片岩)	流路1132(新)Ⅰ層 刃部使用痕
石96	石鋸	全長 (4.3) 幅 2.3 厚さ 0.4	6.0			結晶片岩 (紅簾片岩)	流路1132(新)Ⅰ層 刃部使用痕
石97	石鋸	全長 (4.7) 幅 1.6 厚さ 0.3	3.1			結晶片岩 (紅簾片岩)	流路1132(新)Ⅱ層 刃部使用痕
石98	石錐	全長 (1.9) 幅 (0.8) 厚さ 0.4	0.5	細い軸部。 両端欠損。	調整剥離	サヌカイト (金山)	竪穴建物1055
石99	石錐	全長 (2.1) 幅 (0.7) 厚さ 0.3	0.7	細い軸部。 両端欠損。	調整剥離 主要剥離面が残る	サヌカイト (二上山)	竪穴建物1206
石100	石錐	全長 (2.8) 幅 1.1 厚さ 0.5	1.0	握り部を持つ。細い軸部。 上端欠損。	調整剥離 主要剥離面が残る	サヌカイト (二上山)	竪穴建物1055
石101	石錐	全長 2.4 幅 (1.1) 厚さ 0.3	0.7	握り部を持つ。細い軸部。	調整剥離 主要剥離面が残る	サヌカイト (二上山)	土坑1076
石102	石錐	全長 (2.3) 幅 1.6 厚さ 0.5	1.5	握り部を持つ。細い軸部。 下端欠損。	調整剥離 主要剥離面が残る 上端に自然面あり	サヌカイト (二上山)	竪穴建物1055
石103	石錐	全長 (3.6) 幅 (1.4) 厚さ 0.6	1.8	握り部を持つ。細い軸部。 下端欠損。	調整剥離 上端に自然面あり	サヌカイト (二上山)	竪穴建物3544
石104	スクレイパー	全長 4.0 幅 (3.3) 厚さ 0.7	14.3		調整剥離	サヌカイト (二上山)	土坑2841
石105	スクレイパー	全長 4.5 幅 (8.0) 厚さ 1.1	35.9		調整剥離 自然面あり	サヌカイト (二上山)	塀2206
石106	楔形石器	全長 2.6 幅 3.6 厚さ 0.8	7.7		上下辺に両極打法による階段状剥離	サヌカイト (二上山)	流路1132(新)Ⅰ層
石107	二次加工ある剥片	全長 3.7 幅 3.0 厚さ 0.6	6.2		縁辺部に微細剥離	サヌカイト (金山)	土坑3588
石108	管玉	全長 0.8 幅 0.3 厚さ 0.2	不明	穿孔時に破損か。	両面穿孔	碧玉	竪穴建物3581
石109	管玉	全長 (0.9) 幅 0.4 厚さ 0.2	不明	穿孔時に破損か。	両面穿孔	碧玉	竪穴建物3581
石110	管玉	全長 0.8 幅 0.3 厚さ 0.1	不明	穿孔時に破損か。	両面穿孔	碧玉	竪穴建物3581
石111	管玉	全長 0.7 幅 0.3 厚さ 0.2	0.1	穿孔時に破損か。	両面穿孔	碧玉	竪穴建物1055
石112	管玉	全長 2.5 幅 0.8 厚さ 0.8	1.9		両面穿孔	碧玉	土坑2382
石113	剥片	全長 2.3 幅 1.9 厚さ 0.4	不明			碧玉	柱穴1280
石114	用途不明磨製石器	全長 (7.5) 幅 1.5 厚さ 1.1	16.1	棒状。先端尖る。 一部欠損。	全面研磨	頁岩・粘板岩	土坑3549 持砥の可能性
石115	用途不明磨製石器	全長 (9.0) 幅 2.3 厚さ 0.7	23.4	篦状。上端・側面面取り状。 一部欠損。	全面研磨	頁岩・粘板岩	土坑3588
石116	石錐	全長 (1.1) 幅 (0.3) 厚さ (0.3)	−	断面二等辺三角形状の太い軸部。 上端欠損。	不明	サヌカイト	流路1132(新)Ⅱ層 土器底部穿孔中に欠損 (図20)

※ 石材サヌカイトの産地については高橋 潔が同定を行った。

付表５　石製品観察表

報告No.	器種	法量(cm)	形態の特徴	製作手法の特徴	石材	備考
石117	石鍋	口径　26.0 鍔径　28.8 高さ　(6.3)		幅の狭い鑿痕を縦方向に密に施す	滑石	土坑2811
石118	石鍋	口径　18.8 鍔径　21.7 高さ　(4.3)		鑿による加工か	滑石	土坑2892
石119	石鍋	底径　20.2 高さ　(3.1)		鑿による加工痕	滑石	土坑2892 外面に煤付着 皿に転用か
石120	温石	全長　5.3 幅　3.5 厚さ　1.8	釣鐘形。 基部に1ヶ所穿孔。	全面研磨	滑石	江戸時代整地層
石121	温石	全長　11.3 幅　8.2 厚さ　2.2	不整形。 基部に1ヶ所穿孔。	一部研磨 線状痕	滑石	溝3061
石122	砥石	全長　11.0 幅　4.0 厚さ　1.2	平面長方形。	側面にの木挽き痕	泥岩	土坑530 砥石使用痕
石123	砥石	全長　7.4 幅　2.8 厚さ　1.5	平面長方形。	側面にの木挽き痕	泥岩	土坑群E(土坑316) 砥石使用痕
石124	砥石	全長　(9.2) 幅　3.9 厚さ　2.4	平面長方形。		泥岩	土坑群B(土坑2826) 砥石使用痕・円形窪み
石125	砥石	全長　(14.0) 幅　(8.6) 厚さ　2.1			泥岩	土坑群B(土坑2826) 砥石使用痕 U字溝7条
石126	石硯	全長　3.7 幅　2.8 厚さ　1.1	表面に平面長方形の硯面を加工。 裏面に加工前の墨池側硯面が残る。	側面に刃物による削り	泥岩	土坑群C(土坑2498) 転用硯
石127	石硯	全長　7.1 幅　3.8 厚さ　1.0	平面台形(陸部側が広い)。 硯縁の四隅に線刻文。	全面研磨	泥岩	柵730(柱穴356) 使用面摩滅
石128	石硯	全長　(7.7) 幅　5.9 厚さ　1.5	平面長方形。 裏面に陸側から抉りを入れて側面両側を脚状に残す。	全面研磨	泥岩	鎌倉時代後半～室町時代整地層 墨痕あり
石129	石硯	全長　12.3 幅　7.5 厚さ　1.7	平面長方形。	全面研磨	泥岩	土坑群D(土坑283) 陸部にU字溝1条 墨痕あり
石130	亀形石製品	全長　(12.0) 幅　(13.6) 厚さ　5.7	縁甲板部分に亀甲文。 甲羅の肋甲板部分に容器状の凹み。	鑿による加工痕	堆積岩	土坑638

付表６　木製品観察表

報告No.	器種	法量(cm)	形態・製作手法の特徴	樹種	備考
木1	広鍬	全長　(32.7) 幅　(18.6) 厚さ　3.4	両側縁に抉り。裏面に泥除を固定するための段差を作り出す。刃部欠損。	アカガシ亜属	流路1132(新)Ⅱ層上層 未成品
木2	泥除？	全長　(8.2) 幅　(10.4) 厚さ　1.1	柄の装着角度はほぼ90°。柄孔上部・側縁欠損。	アカガシ亜属	流路1132(新)Ⅱ層上層
木3	直柄縦斧	全長　(12.5) 幅　(4.8) 厚さ　3.4	斧の装着角度はほぼ90°。頭部・装着孔残存。	アカガシ亜属	流路1132(新)Ⅱ層
木4	容器	口径　(18.2) 底径　7.5 器高　(4.0)	疑口縁部の断面が肥厚する。底部は平面円形で削り出している。	ニレ科 (ケヤキ？)	流路1132(古)湿地下層
木5	漆器皿	口径　11.1 底径　8.0 器高　1.2	外面の漆塗膜は、サビ下地の上に下塗の黒色漆、上塗の赤褐色系漆を塗装。内面はサビ下地の上に下塗の黒色漆、中塗の赤褐色系漆、上塗の赤色漆を塗装。	不明	井戸3191 付章3:試料№1
木6	漆器皿	口径　10.9 底径　8.9 器高　1.4	内・外面の漆塗膜は、サビ下地の上に下塗の黒色漆、上塗の赤褐色系漆を2層分塗装。	不明	井戸3191 付章3:試料№2

付表７　金属製品（銭貨）観察表

報告No.	種類	法量(cm)	重量(g)	初鋳年	特徴	備考
銭1	熙寧元寶	外径　25.0 孔径　6.8 厚さ　1.2	3.1	1068		土坑2951
銭2	淳化元寶	外径 (23.2) 孔径　7.1 厚さ　0.8	2.1	990	真書体か。 鋳上がり不良。	土坑2811
銭3	紹聖元寶	外径　24.1 孔径　6.1 厚さ　1.5	3.7	1094	真書体。	土坑2811
銭4	天聖元寶	外径　24.6 孔径　6.2 厚さ　0.9	2.7	1023	真書体。	土坑638
銭5	元符通寶	外径　24.6 孔径　6.2 厚さ　0.9	2.7	1098	篆書体。	土坑群B(土坑2506)
銭6	永樂通寶	外径　25.2 孔径　5.7 厚さ　1.2	2.8	1411	鋳上がり不良。	土坑群C(土坑2567)
銭7	咸平元寶	外径　25.2 孔径　5.7 厚さ　1.2	2.8	998		土坑群G(土坑587)
銭8	元祐通寶	外径　25.3 孔径　6.7 厚さ　1.2	2.5	1086	篆書体。	土坑2528
銭9	聖宋元寶	外径　25.7 孔径　5.9 厚さ　1.3	2.8	1101	篆書体。	土坑2528
銭10	(新)寛永通寶	外径　25.6 孔径　5.9 厚さ　1.6	3.4	1668	正字背文。	埋甕2171
銭11	崇寧重寶	外径　23.0 孔径　8.1 厚さ　1.6	2.5	1102	磨輪銭。	鎌倉時代後半～室町時代整地層
銭12	貨泉	外径　22.8 孔径　6.2 厚さ　1.1	2.3	14	鋳上がり不良。	鎌倉時代後半～室町時代整地層

付表８　金属製品（鉄釘）観察表

報告No.	器種	法量(cm)	形態・製作手法の特徴	材質	備考
釘1	叩折釘	全長　(4.4) 幅　(0.9) 厚さ　0.4	断面方形。	鉄	土坑638
釘2	折釘	全長　(3.9) 幅　0.9 厚さ　0.5	断面方形。体部J字状。	鉄	土坑638
釘3	釘	全長 (18.6) 幅　(1.4) 厚さ　0.7	断面方形。頭部欠損。	鉄	土坑638 木質付着

図　　版

報　告　書　抄　録

ふ り が な	へいあんきょうさきょうろくじょうにぼうきゅうちょうあと・からすまあやのこうじいせき
書　　名	平安京左京六条二坊九町跡・烏丸綾小路遺跡
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０１８－１０
編 著 者 名	中谷正和・近藤章子・伊藤　潔・上村和直・南　孝雄
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発 行 年 月 日	西暦2019年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 からすまあやのこうじいせき 烏丸綾小路遺跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 さめがいどおりまつばら 醒ヶ井通松原 さがるささやちょう 下る笹屋町 59番地	26100	1 712	35度 59分 54秒	135度 45分 12秒	2017年10月 10日～2018 年９月20日	2,970㎡	小学校 施設整備 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡 烏丸綾小路遺跡	都城跡 集落跡	弥生時代	溝、流路、水田・足跡群、竪穴建物、土坑、柱穴、方形周溝墓	弥生土器、土製品、石器、木製品、銭貨	弥生時代前期末から中期前葉の集落域の一端を確認した。 平安時代前期の井戸から「政所」の文字を記した墨書土器が出土した。
		平安時代前期～中期	溝、井戸、柱穴、柱列、掘立柱建物	土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦類、木製品	
		平安時代後期～鎌倉時代前半	溝、土器溜、井戸、土坑、柱穴、地下室	土師器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類	
		鎌倉時代後半～室町時代	溝、塀、柵、井戸、石室、土坑、柱穴、布堀基礎建物	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、銭貨	
		安土桃山時代～江戸時代初頭	土坑、埋甕、礎石列	土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、鉄製品、銭貨	
		江戸時代	溝、柵、井戸、土坑、石室、埋甕、掘立柱建物	土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶磁器、染付、瓦類、土製品、石製品、銭貨	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2018-10

平安京左京六条二坊九町跡・烏丸綾小路遺跡

発行日　2019年3月31日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961